

---

# 神影の彷徨

ゆちゃあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神影の彷徨

### 【Nコード】

N0300C

### 【作者名】

ゆちやあ

### 【あらすじ】

「自分だけが知らない自分を皆が見ていた」  
地球が作り出した人間への第二の対抗因子である「魔」と呼ばれる種族がある。これは人として育った魔の少女のお話。少女は自分に内在する異常な力によって暗い世界へと誘われる。

## 0 (プロローグ) (前書き)

暴力的なシーンがあります。

この小説は大体が人物による目線です。読みにくいところが所々にあると思いますがご理解下さい。

挿絵も今後挿入して行きますのでご注意下さい。

ルビを使用していますのでIEでもしくはお使いのブラウザ機能のIE変換をしてからご覧下さい。

## 0 (プロローグ)

0

深夜の公園は死体で埋まっていた

彼女は思う。常識から外れた力を持つものは何故、平穩に暮らすことができないのか。

彼女にとって力は呪いでしかなかった。

死んでいたはずの人間がむくりと起き上がる。

彼女は知っていた。明けない夜もあるのだということ……

教師の声をかき消すように大きなチャイムが鳴る。

「よし、今日はここまで。日直」

日直の号令とともにクラスの大半は廊下へ飛び出す。食堂で並ぶよりは、廊下で徒競走を行う方が好みなのだろう。バタバタという雑音を聞きながら、私は荷物を持って屋上を目指す。廊下から覗く全ての教室が生徒の大半を失っていた。それだけ食堂に吸い寄せられる人達が多いということだ。

屋上への階段を上がると扉は半分開いていた。いつもは閉まっていた私以外にこの金属の板を開ける人などそうそういないもんだ。どうやら先客がいるらしい。

この学校の生徒は何故か屋上へ寄り付かない。別に、禁止されて

いるはずはないのだけれど。

扉の枠を潜つてまだ少し肌寒い空気に身を投じると、一点だけいつも通りで無い部分があった。屋上のフェンスに、胸に届くくらいの艶やかな黒髪をした少女が寄りかかっていた。

> i 2 4 2 6 3 — 5 5 <

「お待ちしておりました」

私の足音を聞いていたのだろう、少女は振り向きざま、そう言った。

彼女の顔は美の象徴のような顔をしていた。切れ長のややつり目がちな目、その中の青の瞳、それを隠すように長く伸びた睫毛、形のいい頬骨、白い肌故の神秘さ。その全てが綺麗だと思えた。見た瞬間に目に焼きつけられる様な美貌と言うのだろうか。高校生とは思えない大人びた雰囲気を持つ人だった。

「ここで待っていていればお会いできると思いましたので」

そう言いながらこちらに向かって歩いてくる。その歩みは一歩一歩がゆっくりで私はその間ずっと彼女の蠱惑的な瞳に惹きつけられ、体が固まってしまっていた。

「な、なんですか？」

辛うじて出た言葉は情けなく風にさらわれていった。見たことのない人であるのは確かだ。あんな綺麗な顔を見たら女である私でも忘れられないと思うから。

「その前に……貴女が尼士おまじひ有いさんですか？」

「そうですけど」

どうやら人違いではないようだ。誰かと勘違いされているという

線も否定できなかったため少しだけ安堵する。こんなに印象深い人によって行われる人違いはどうか考えても凶器であるから。

「良かった。貴女のクラスメイトに一応は確認したのですけど、違う人だったら恥ずかしいですものね」

「はあ」

（この人少しかわってるなあ）

「貴女に訊きたいことがあるんです。最近変な物を見ませんでしたか？」

（おまけに変わったことを言ってくるし）

「変なものって？ UFOとかですか？」

「ええ。でも、どちらかというとうMAかしら。または限りなく人間に近い何か」

UMA、確か未知なる生物のことだったけか。どこぞの雪の中の大男とかそんな感じの。勿論私は見たことなど一遍たりとも無い。こんな平和な土地で奇つ怪な生き物などに出会うはず無いのだから。それに限りなく人間に近い何かなんてそれこそ人間と見分けつかないなら答えようがないじゃないか。

「見てないと思いますけど。この町に何か出てきたんですか？」

おかしな事を訊かれたが一応話に乗ってみる。流石にその場で話を切るのは初対面では失礼であろうから。しかし彼女はそんなことを考えていないようで、

「いえ、何もなかったらそれでいいのです。それより、今からお食事ですよね？」

と、即座に話を転換させたのだった。

「まあそうですね」

「お近づきの印に一緒にここで食事にはしません？」

「はあ……」

何だろつ、私はこの人のよくわからない力に押されっぱなしで、ただただうなづくことしかできない。

「えっと、私、あなたのことを知らないんですけど」

そう、確かに私はこの人に会ったことは無いはずだ。だけど随分彼女は私に対して馴れ馴れしい。ここまで来ると私も相手のことを知りたくなるというもんだ。一体 さつきから親しげに話しかけてくる貴女様はどちら様なんでしょうか、ってね。

「あら、私としたことが自己紹介もしていなかったなんて。私、一色朱水つしぎあけみともうします。できれば下の名前で呼んでください。尼土さんと同じ二年生です」

……とんだ自己紹介だ。不貞不貞しいは言い過ぎだが、これ程までに堂々とした自己紹介をする人は今までに出会ったことがない。初対面でいきなり自分の呼び方まで指定してくるとは。

「あ、はい。それじゃあ朱水さんで」

でも、よく分からないけどそれは彼女の雰囲気に合わせているんだと思う。『御嬢様』と言うような雰囲気<sup>雰囲気</sup>を仕草の端々に持っている彼女には、さつきまでのような言葉は異様に似合っていた。だから私はそれを受け入れその言葉に従ったのだった。

私は朱水さんに誘われるがままにフェンスに背中を預けて冷たいコンクリートに座った。

朱水さんは授業などに関する、いわゆる当たり障りの無い話をしていた。私はこの状況についていけず適当な相槌を繰り返すことしかできない。先程から何回か述べてきたが、本当に初対面である。だから私の反応も仕方ないことだと思う。しかし相手はそんなこと気にせずまるで静かな木陰で本のページをすらすらと捲る読書の様に、私に言葉をつらつらと浴びせてくるのだ。だがしかし私を無視して話を進めるでもなくしつかりと私の反応をその魅惑的な瞳で確認しつつ、私の反応が大きい話題をさり気なく抽出しているようだ

った。

私にわかることは彼女、朱水さんは凄く話上手だっただ。

朱水さんは私のことを気に入ってくれたのか、「朱水って呼んでください」と言ってきたので、私も有でいいと言った。その頃には私も朱水さんに慣れ、お喋りも自然にできるようになっていたと思う。慣れたというのはその視線にである。彼女はしゃべる時は必ず私の顔をじっと見つめてくるもんだからたまらない。赤面せず、声と手が震えない程度に慣れるまでには時間をしばらく要したのだ。

食べ終わってパンのビニールをまとめてみると朱水さんが、もとい、朱水がじつと空を見ていることに気がついた。

「何を見ているの？」

そう言うと、彼女はどことなく愁いうれをふくんだ顔をしながらそつと呟く様に言う。

「私、お友達と呼べる人がいないのですよ。みんな私のことを特別扱いして。だから貴女のような人は貴重です。普通に接してくれていきますから」

普通に接していたかは自分では分からないがそんな顔をされてしまったては私には口ごもるしかできない。何かおかしな返しをしてこの空気を壊したくないという願望が私にはあった。お姫様みたいなその雰囲気を出されてしまったては非力な私は空気に飲まれるしかなく、もう完全に朱水という人物に惹かれてしまっていた。

それにしても特別扱いだっただ？ この人、少し変だけど、むしろみんなから好かれるタイプなんじゃないかな？

「あのおつ」「えつと」

二人の言葉の始まりが重なり合う。お互いに何かを言葉にしなく



ちやと思つての現象だ。

「朱水からでいいよ」

朱水は私の目を一度観察するように目線を合わせると、顔を伏せ手を拳にして思いを吐き出すように言葉を連ねた。行儀良く膝に置かれた握りこぶしは微かに震えていた。

「はい。私、貴女と友達になりたいです。貴女みたいな人、他にはいませんもの」

あまりに急すぎる展開だったが、既に惹かれてしまっていた私には抵抗の余地はなく、その魅力的な彼女の言葉に操られるように頷いていた。不思議な気分……でも全然嫌じゃないんだもん。

「ふふ、私だつて友達全然いないよ。こんな私でもよければ」

友達になろうよ、そう私の口は言葉を発した。本能のままにそう言った。

もちろんです、と朱水は微笑みながら返してくれた。うわっ、私なんて比べ物にならないくらい女の子らしくて可愛い。

「それにしても随分丁寧な口調だね。無理には言わないけど、もう少し砕けた言葉遣いでもいいと思うよ」

先程から気になっていた彼女の口調について言及してみる。いくら初対面だからと言ってそこまで丁寧な口調になる必要はないと思う。ましてや同級生とあらばね。

「ですがお父様の方針だそうで、この口調で話すようにと育てられましたので」

「ふうん、大変だね」

『お父様』か。朱水は本当にどこかのお嬢様なのかな。

「で、有さんは？」

「有でいいって。私も朱水って呼ぶんだから」

「はい、そうでしたね。有は何を言いかけたの？」

「えっと、聞いちやまずいのもしれないけど、特別扱って……」

「……私、両親がいないんです」

朱水はそう呟く。私に聞かせるためというよりは自分で確認する

ため、そんな感じだった。瞼を閉じて少し困ったように言う。だが決して悲哀の表情ではなかった。

「ごめん、そういうのは人に話さないほうがいいんだよね。これじや早速友達失格だなあ」

その顔に微かな不穏を感じ取った私は、少し戯けたように返した。こんな時どういう事を口にすればいいか経験浅はかな私には思いつかなかったのだ。

「いいえ、かまいませんわ。むしろスッキリしました。友達として素晴らしいことだと思います」

そう言つて朱水はまた可憐に微笑んだ。その顔に私は同性ながらもドキリとしてしまった。でもわかっている、彼女は全然気が晴れていない。その目の曇りが教えてくれていた。

「うん……私も同じだからわかるんだ。今はお母さんの妹さんと暮らしているの」

「……………そうですか」  
朱水はただ下を見てそう言った。彼女は一体今何を考えているのであろうか。

風が私たちの間を通り抜けていく。灰色の上、青い空に浮かぶ青い瞳は私を見てはいなかった。

予鈴が鳴り響く

昼休みの終了が告げられた。

「もう時間ですね。今日は楽しかったです」

やっと向けられたその目は再び温かさを取り返していた。

「うん、それじゃ」

またね、その言葉が私の口からは出なかった。いや、出し様がなか

った。

今までに友達と呼べる存在がいなかった私なんかそんな大それたことを言っているのか、勝手にまた会いたいなどという意味の言葉を告げていいのか、そんな事が脳裏にぼつりと浮かんだのだ。そんな他人にとっては些細なことでも私の勇氣は怯んでしまった。

朱水は私が無言で立つ様を見届けるとゆっくりと立ち上がり、身だしなみをしっかりと整えこれまた静かに歩いて校舎へ続く扉へと歩いて行った。

私もそれに従い目の前で揺れる艶やかな黒髪先端を目で追いつながら歩く。

すると扉の前で彼女は振り返った。

「明日もここに来てもいいですか？」

それはまるで答えを確信しているような自信に満ちた顔だった。

「うん！」

嬉しさのあまり全力でうなずいてしまい朱水に驚かれたが、私の心は頭上にある空の様に晴れやかだった。

そうして二人だけの昼食会はお開きになった。

その日から私達はお昼を共にするようになり、本当に友達と呼べる存在になっていった。二人きりの昼食会はまだ何所かぎこちないが私はその時を待ち望んで 毎朝の通学路を歩むのだった。

朱水と知り出会ってから一週間が過ぎた。

私は初めて友達というものを手に入れたのだが、そのことにより生活ががらりと変わる……なんてことは無かった。

そのことを朱水に話してみたら、

「それは私達の相性がよすぎるからでしょう」と、微笑みながら返された。

その言葉はしっくりこなかったが何となく納得できそうだった。その微笑みの威力に考えを押し付けられている様な、そんな感じ。

結論：美人って言うのは得だね

新しい「いつも通り」の日常が進んでいた。下駄箱の外にはさつきまで雨が降っていた名残の水溜りがぼつぼつある。昨日、随分前に本を注文した店から注文品が届いたとの電話があり、私事につきあわせては悪いと思い、朱水とは廊下で別れた。雨が止んでいる間に済ませたいので水が跳ねるのを気にせず急いで走る。いつもの道を外れ、隣町の大きな本屋へと向った。

私、尼土有は呪われている。かなり運命的に。他人の考える、当たり前前の生活というのを絶対に送れないという呪い。それは私にある「力」が原因となっているのかもしれないと、私は考えている。誰にも打ち明けていないのは自分にも理解しがたい能力だからだ。

最初に自分の力を感じたのは確か十三歳の頃か。あれは公園で起きた些細な事故であった。学校から家へと帰る途中の道、すぐ隣の公園で行われていた野球で放たれたホームラン級の硬球が、私の頭目指して降りかかってきた。それからしばらくの間の記憶が私にはほとんど無い。だが、救急車で運ばれた私に怪我は一つも見受けられなかった。医者は奇跡という言葉を連発していたが、私はその「奇跡」をこの目で見た気がした。ほとんど無い記憶の中で微かに覚えていた事がこれだった。襲いかかる硬球は私の目の前で何かにあたり、跳ね返ったのだ。当然そこに居合わせた人々は私に球が直撃したのだと思っただろう。だが実際、私は無傷だったのだ。

あれ以降、願うと私を取り囲むかのように壁を作ることができるようになった。それはまるで水晶のように綺麗に輝いている薄い膜であった。

その日から私の生活は変わってしまった。他人とのかかわりというものが極端に減ったのだ。

私の何かが変わったと言うなら、あの壁のようなものしかないのだと思う……

予約した本を受け取り、家に帰ろうと道を歩いていると、グシャリと何か柔らかいものがつぶれるような音が聞こえた。それだけだったら私は何も気にせず通り過ぎただろう。

だが私は聞いてしまったのだ。唯一の友達である人の声を。決して聞き間違えることのない声を。

私はその声に誘われるかの様に薄暗い路地裏へ歩んでいった。

「朱水？」

2

この世には人の常識を遙かに超える生物がいる。私、一色朱水もその一種で、『魔』と呼ばれる。

その存在自体は実はどうと言うことはない。人間は認識していないが彼らの知る由の無い生物がこの世には多数存在しているのだ。何より問題なのは我々の外見が人間と酷似していることだ。もし私達が人間からかけ離れた姿をしていたら、魔の中に人と共に生きようなどという危険きわまりない選択をする者もいなかっただろうに。ここらの一族の現頭首であるのは私だ。それはこの血族の宿命とも言える。なに、この国では魔は力ではなく血によって地位の優劣を決めるとというのが 昔からの仕来りだ。(もっとも、力であつても私は他の魔に引けをとりませんけどね)

最近この町で流れの者が私の領地を荒らしている。偵察に出した配下の見習いは二人が行方不明で一人が死亡という結果になった。最近の見習いは実戦を経験する機会が少ないからと言ってなめてはならない。だからどうも今回の流れ者は純粹に強いということになる。配下の者達はこれ以上跡取りを失いたくないと言うし、敵はこの町に根を張ったようなので、これ以上の放置は一族の面子に関わる。今現在、一族の中で一番力があるのは私である。よって、頭首でもある私が直々に討滅にあたることとなった。

「爺、明日から例の流れの退治にあたります。手配は確実に進めておいて下さい」

討滅を始めて幾日があった頃、商店街で異常な感覚を覚えたので気配を隠しつつ様子見をしていると、本屋から同じ学校であろう女生徒が出てきた。

薄らと青色を帯びた長い髪を後ろで少しだけ束ね、他の髪はそのまま垂らしている。その姿を見た瞬間……脳内に何かが走り回った。それは初めての感覚であつたが嫌な気分ではなかつた。だが同時に

得体の知れない不安が彼女を見ているとわき起こる。

何よりも私の目を惹きつけたのはその目だった。冷たい目、しかしその中に母性の表れのような緩やかな温もりを感じた。まるで初秋の海の様だ。冷たく暖かい。

私はどうしても彼女のことが知りたくなった。

そう、一色朱水は彼女を見ただけで虜にされたのだ。

> i 2 4 4 3 2 — 5 5 <

お昼休みになった。朝は昨日の女生徒を確かめるために、下駄箱で待つという初めての経験をした。あんなに恥ずかしいと感じたのは久しぶりだろう。だがその甲斐あって彼女が同じ2年生で、4組の2番だというのがわかった。

さて、4組の前まで来たがどうしましょう。

私は人間にあまり慣れてはいけないという頭首の掟を破っている。しかしそれでも友達には作らずにやってきたし、恋人など以ての外であった。自分が日本人の目から見るとかなりの美人とされることはわかっている。男性から好意を真剣に述べられたこと（告白というのだろう）も多々ある。だが私は種族が違う。無論、拒否の一手だ。そんな私が興味を持った彼女は何者だろうか。

さあ、進みなさい朱水！



「え…いないのですか？」

なんてこと。先ほどの勇気は無駄になりましたとさ……。

「ううん、休んでいるわけじゃないよ。いつも昼休みになると教室を出てつちゃうし、何所にいるかも知らないだけ。誰か知ってる？」

対応してくれた女生徒は周りの女子達にも聞く。

「そっぴあの子の事、私達ってあまり知らないよね。別に嫌いじゃないし、むしろ可愛いほうだよな？　なんでかなあ」

一同はお互いの顔をそれぞれ合わせて訊き合っが答えは出ないようだ。

「えっと、彼女の名前は何というのですか？」

いつまでも彼女達のにらめっこ大会を見つめているわけにはいかなのでせめて名前だけでも聞き出す。

「へ？　尼土さんだよ。尼土有さん。知らなかったの？」

瞬間、世界が止まった

「ん？　どうしたの、一色さん？」

「いえ、何でもありません。そうですか、あの方が尼土さんでしたか」

「何だ、知ってたんじゃない。にしても意外だな。一色さんがこんなに話しやすいなんて。私、一色さんはお高くとまっているんだと思ってたよ」

彼女はなぜか私の手をとって握手を求めてきた。その手を優しく握り返すとさらに不可解なことに黄色い声が教室のいたるところからわき起こった。

「ふふ、ただ人と話すのが苦手なだけです。では、ありがとうございます」

「え、あ、うん、じゃね。あ、尼土さんに言っておこうか？」

「いえ、私から会いに行きますので結構ですわ」

教室から出ると廊下はしんと静まり返っていた。この静けさが今の私には丁度適していると思えた。

「尼土か……。これも宿命なのかしらね」

玄関の扉を開けて数分待つと智爺がいつも通り足音も無く現れる。

「お帰りなさいませ。今日も討滅に？」

その手には水の入ったグラスがおさまっていた。

「いえ……。ねえ爺、今日初めて学校に尼土の娘と思われる女性が通っているのを知ったわ」

「……何と。ふむ、運命というのはわからない物ですな。して、如何なさいます？」

「とりあえず明日接触してみます。危険性は否定できませんが力を発揮する前にこちら側にとりこもうと思っています」

「良いのですか？ その方が事実を知ってしまったら辛いことになるかと……」

智爺の言葉を聞きたくないかのように私の口は勝手にその言葉を遮った。

「言わないで！ あれは私だって望んだ結果ではないのです！」

「失礼しました。私はお嬢様の考えなら何所までもついて行く所存です」

「そう、それで良いのよ。疲れたわ、今日は夕食はいりません」

そう言い捨てて歩き出した私の前に進路を断つように智爺が邪魔に入る。

「先ほどの言葉を撤回させていただきます。私はお嬢様をいつまでも見守りたいと思っていますので。このようなきこそ食事をちゃんと取るべきですぞ」

「ふふ、そうね。智爺の言う通りね」

夕食が終わって自分の部屋に戻るとすぐに智爺がドアをノックしてきた。

「何かしら?」

「先ほど新崎様から連絡がありました」

「警察から? 珍しいわね」

「例の流れ者の使いが昨日、商店街の路地裏にて二十代の男性を襲った、とのことですよ」

商店街ねえ。確かにあのような場所で事件を起こされたりしたら、いくら警察でも直接ここに文句を言うてくるでしょうね。

「幸い、命を取られたわけではない様ですよ」

「生きています、ですって?」

「待って! その人間は一般人なのでしょ?」

襲われた人間が生きているというのは正直危険だ。支配などを受けている可能性があるからだ。だから死体として出てくるのは体格などが恵まれず、使いとするのに有益とは思えない者ばかりである。それに、支配した人間を容易く人間の前に出すことはない。それはその地の魔を多大に挑発することになるからだ。

「はい。シヨックの所為でしょうが未だ昏睡状態との模様とのことですよ」

「ならどうして魔の仕業だとわかったのです?」

「御存知の通り新崎様はこちら側のお方です。ですので被害者に残されたかすかな魔の気配を感じ取れたとのことですよ」

「……わからないわ。敵は何を考えているのでしょうか。確認のためにもまた明日、商店街に寄ってきます」

「お気をつけて。もし返り血など浴びてしまった時はご連絡ください」

智爺は一礼してからドアを音もなく閉じる。それを見届けてから私はベッドへと身を投げた。

「こつとも出来事があると眠りが恋しくなるのね」

私はその姿のまま浅い眠りへと滑り落ちていった。何も感じることも思っこともない幸せな時間へと。

「やはりまだ人は少ないですね」

今日は例の女生徒の行き先を調べるため、いつもよりかなり早く登校した。廊下に立って魔の残り香を探してみると、4組から屋上へと繋がっているのがあった。

その残り香はあまりに微かであった。なるほど道理で初めて見かけたときに魔だとわからなかったわけだ。人混みの中では感じ取ることが難しいほどに淡いものであった。学校のような生徒で埋まる場所や商店街の様な人々が交差する場所ではこのようなものを非意図的に感じ取ることなど無理であろう。

屋上……あそこならば話すのにも丁度いいはず。できれば誰もいない状況で彼女と初顔合わせをしたかった。

さて、意外と早く探査が終わったので、自習でもしていますか

「お待ちしております」

あの日から私達は友達となった。あの時自分が何故あのようなことを言ったのか思い返しても理解できない。だがこの関係は良いと思う。

初めての同世代の友達が選りにも選って尼土家というのは皮肉か。否、だからこそなのかもしれない。

もし神というのがいるのなら、この出会いは必然だとおっしゃるのだろう。互いに傷物だから嘗めあって生きろとでもおっしゃるのでしょうか。

ええなんて皮肉、片割れは自分が傷を負っていることにさえ気付いていないのだから

「ごめん朱水、今日は先に帰るね」

「あら、私も今日は用事があって一緒に帰れないと言つつもりでしたの」

「そっか。偶然だね」

じゃあね、と有は手を大きく振りながら階段を駆け下りていった。あんなに急いでどこへ行くつもりなのだろうか。気になりはしたがまずは自分の用事を済まさなくてはならない。

そう。今日は本当に用事がある。最近、おとなしかったはずの敵

は急に勢力を伸ばしてきた。やはり人間を支配するタイプだった。しかし操られた人間がすることはただの破壊行動のみ。メリットなど考えられないその行為に、配下の者達はある程度までの措置だけを実行することを決定した。操られた人間を剪滅し、新たな犠牲者を出させないよう監視の目を増やすとのこと。私には特別反対する理由は無い。措置は確定だ。今は被支配体を剪滅することに優先度が移行している。今日は商店街に置かれた被支配体を狙う。

智爺に学校から車で運んでもらい商店街へとやってきた。人間達は周りで何が起きているかを知らないため商店街は未だ活気だっている。

「ここね」

路地裏に入りしばらく歩くとやや広い更地があった。どうやら周りの小さなビルに囲まれている所為で皆から忘れ去られているような空き地であった。太陽がこの場所を見守るをやめたのか、異様な暗さだった。違う、作為的な薄暗さだった。ビルの屋上近くには陽光の当る部分があるが、その下からは膜でもあるかの様に不自然に光が切り取られている。

「あら、下品な匂いね」

血の臭いしかししない。風も通り抜けない様な場所だ、臭いと相まってむさ苦しさしか感じられない。

「それに粗末な結界ですこと」

辛うじて音と臭いだけは外へと漏らさないような結界内に、死者が七・八体転がっている。むろん死者というのは人間としてである。使者としてはむしろ丁度いい塩梅あんばいになっているだろう。

誰が考えたのか、魔によって使役された死者を使者と呼ぶ。

「まだ寝ているふりを続けるのですか？」

その声を聞くと、使者達は意外と俊敏に起きあがった。

数は七らしい。もつとも、この私にとって使者などという雑魚は数をそろえたところで無駄である。人間界ではいかに素人であっても、ある程度の体つきと運動神経さえあれば、数がそろうと玄人相手でも十分障害に成り得る。だがそれは魔には適用されない。魔は存在にこそ力を秘める。人間のように筋肉などの肉体に力を秘めているのではない。魔の優劣を決めるのは体つきではなく存在なのだ。よって如何に人間が大きく育ちようが、所詮は人間。同じ人間にとつては怪物のように思えても、魔にとっては鼠と同じで、障害には成り得ない。

(もつとも、式典兵器のように存在を格段に引き延ばしたり、神器のように存在そのものである武器を持たれたりすると私でさえこずるでしょうがね)

風となり、鞭となり、槌となり空間を破壊していく。使者達の腕が届くやいなや、手先から一瞬で灰となり腕そのものが消えていく。「その程度の存在で私と対等に渡り合おうなどと思わないで下さい」そう、これが魔の優劣の差だ。脆弱な魔は強大な魔に触れることさえかなわないということがある。既に四体は字のごとく塵になった。

「些細よ、貴方」

もう一体、心臓の辺りに指が触れるとそこが陥没し、次の瞬間穴となり、その穴は胴体の全てを取り入れた。残った五片も勝手に消えていく。

「あら、潔い。これなら後始末の必要がないですね」

だが朱水はこの圧倒的優位な状況で一抹の不安を覚えていた。いくら雑魚同然の使者とはいえ数に限りがある。そのことを考えてさ



えないような、この使者達の使役主は一体何者なのだろうか。このようなことは今まで無かった。普通は撤退を命ずるものだ。

「もつとも、逃すつもりは更々ありませんけどね」

そしてまた一体……

「さて、残りは貴方だけ。それと、主さん？　ほかの六体と同じくこの者が塵になる前に伝えたいことは無くて？　この使者を通じてこちらを覗いているのでしょうか？」

「……………」

だが使者は主の代わりに言葉を発することはなかった。

「ふん」　（言うことが無い？　いえ、そもそも主とは繋がってないのかも知れない。だったら撤退するそぶりも見せないのも納得できる）

……………カツン

私の耳が何かを聞きとり、体の動きを止めた。

「っ！」

何者かの足音がしたような？　気配を読み取り、耳をそばだてようとした時

「朱水？」

その声は空き地を囲っているビルの壁に響いた。

「朱水？」

薄暗い空間にはやっぱり朱水が立っていた。でも、一人じゃないみたいだ。男の人が二人いる。朱水の前に一人、私の足下に一人……何だろう、足下にいる人はこつちを血走った目で睨んでくる。

> i 2 5 7 3 7 — 5 5 <

「いけない！ 有、逃げて！」

……へ？

次の瞬間には私の制服が破れたことが視認出来た。

白い制服が赤く染まってゆく………血？

「つつ！ え……な、何？」

私はどうしたのか。いつの間にか水たまりの中に倒れていた。

………<sup>あか</sup>紅い

痛い？ 痛いのかな？ まるでテレビを見ている様………

痛覚はとつさの出来事に麻痺してしまったのか、脊髄に来る棘の様な寒さしか感じられない。

男の人がこつちに歩んでくる。映画で見たゾンビみたいな歩き方で。

「」

………やだ。来ないでよ………

「来ないでよオオオ！」

瞬間、頭の中が　白く　なった

「何……アレ？」

有が襲われたのを見て動かなくなった頭が、その光景を認識して急速にもとの活動を再開し始める。

目の前の薄暗い空間に、淡く光る膜のような物が出来ていた。それも有を囲う様に。

「有、なの？」

再開した頭の思考でも追いつかないくらいの突然さであり、優雅さであった。

(綺麗……)

使者が壁に向かって突進する。ガンという大きな音を立てたが壁は微塵も動かない。その音を聞いて私はようやく動けるようになった。

震えが止まらない。それは恐怖か、不安か、歓喜か……

「よくも、有を！」

壁にぶつかって怯んでいるその背後から背中を穿つ。

(許さない！)

私は力の一部を解き放った。一瞬で使者は消える。無論、無にすることは出来ない。どんなにこの小さな存在を消し去りたくとも、零にすることは世界の法則上不可能だ。だからせめて、決して蘇りはしないよう原子レベルまで細かく『破壊』した。

「ッシ！」

その勢いで振り返り様の一閃、空気そのものを一瞬にして『破壊』した。それに巻き込まれたこちらに飛びかかっていた使者は凝縮し、足下に転がり落ちた。それを踏みつけながら睨めば、また灰となり風にながれる。

「還りなさい」

「……………ン？」

ここは何所だろう。天井が近い。それにかすかに揺れているように感じる。

視界はまだかすかに赤い。

え？ 紅い？

「目が覚めたのね、有」

優しい口調……………誰だっけ……………とても大切な人だった気がする……………

「大丈夫ですか？ まあ、貴女の体ならあの程度の出血では大丈夫だと思っんですけどねえ」

大、丈夫？ 何で心配されているんだろう？

「有？」

朱水が覗き込んでいた。心配そうな綺麗な顔が目の前にある。……………どうしよう。なんかドキドキしてきた。

「ちよつと、有。急に赤くならないでくれないかしら。心配しているんですからね」

「心配……………？ それにここは？」

私の顔を見つめていた朱水は私の唇にそつと触れると何かを吹き飛ばすように軽く息を吹き出して微笑んだ。

「ここは私の家の車の中です。今は私の家へと向かっています」

「……………何でだっけ？」

朱水は私のおでこを優しくなでてくれながら優しく告げる。

「今は疲れているでしょう。家は直ぐですからそこで話をしまし  
よう」

そう言うと朱水は顔を前に向け目を閉じてしまった。

私はただ朱水の凜とした顔を見ていた。

五分もしないうちに車が止まった。横になっっている間は気づかなか  
ったが、運転手さんがいるのは当然だろう。私は本当に疲れてい  
るみたいだ。でも……何故？

ドアを開けてくれた運転手さんは背広で白髪な初老の男性だった。  
まさに定番といえる恰好である。小さな丸眼鏡を掛けていないのが  
非常に悔やまれる。

「ちよつと、有？ ボーとしているわよ？」

「え、あ、うん。平気」

「尼土様、少し御体に触れますがよろしいですか？ 車から出る  
にはその疲労では難しいでしょうから」

「あ、へ、平気です。ほら」

車から出て元気よく地面に立ったところを見せようと振り返った  
が、体から力が抜けそのまま地面に座ってしまった。

「あれ？」

そのまま起き上がる力が出せず座りこんでいると朱水が車から出  
てきて立たせてくれた。

「やはりまだ体の方が不安定ね」

「うん、そうみたい。でも何も覚えてない……私何してたんだっけ」  
「すぐに思い出すことになるわ。記憶が曖昧なのは自己防衛の証よ。  
記憶から貴女を守っているでしょう」

そう言いながら玄関らしいところまで肩を抱いて連れてきてくれ  
た。

「おつきいね……」

その家の大きさに私はただただそう言うことしかできなかった。

ひたすらでかいのだ。

「ふふ、そうね。でも住み慣れると案外狭くも感じるわよ」

そして朱水はこちらに振り返り私の手をとってお芝居の様に仰々しく言ったのだった。

「歓迎しますわ、尼土有さん。あら、この家に招くからにはこう言った方が良いのかしら？ 尼土家の主様、ようこそおいで下さいました。歓迎いたしますわ」

第一話 出会いと自壊 / 5～6 (前書き)

面倒くさい設定が沢山あります。

「どう？ 何か思い出したかしら？」

今、私と有は応接間にて特別に用意した小さな机を挟んで座っている。本来客が座るソファードと仰々しいとのことで有が隅に置いてあった椅子にコソコソと座ったためだ。智爺は別室で待機しているので二人きりでもあるため、ここは有の意見に賛同して高校生らしい形にしてみたのだ。有は頭をぐるぐる回して応接間の様子を興味津津の模様で目玉を動かしている。この様子では体の方はもう心配がいらぬようね。

「少しは……ねえ、さっきの人達は何なの？」

私の言葉が耳に入ると止めどなく動いていた有の体はピタリと止まり、その目は私にまっすぐ視線を注いできた。どうやら記憶をしっかりと取り戻したようだ。

「その前に貴女に謝らなければならぬわね。ごめんなさい、有。もう一人いたことを見落としていたわ」

そう、最初に私の目は八体まで捉えていたはずだ。だが立ったのは七体だけだったのだろう。私は使者らを見くびっていたものだからそのまま敵の中心に飛びかかり、入り口付近にいた一体を見逃してしまったようだ。

何たる不覚、その所為で有を傷つけてしまったのだ。

「……あの人達はどうなったの？」

「還したわ」

「返した？ 何所に？」

「違うわ。還したのよ。他のと同じく土へね」

「……殺したってことなの？」



小さく押し殺された驚きの声は、それでもなお私に対する警戒や絶望を隠せないでいた。やはり有は何も知らないようだ。だが彼女が作り出したあの壁は完璧であった。さらに間違いなく無意識下における行使であったろう。ああなるには数年はかかるでしょうに。「そのことは後で全て話します。それより今は貴女のことよ、有？ 貴女が使ったあの力、はつきり言ってそこの者に真似できる代物ではなくてよ？ 空気から生み出していると私は考えたのですけど、それでも私には理解できないわ。一度たりとも有の力に似た様な代物は見たことが無いのよ。いつからあのような力を取得したの？」

私は本当に驚いたのだった。立場上広い知識を持っている私ですら聞いたこともない力であったためだ。確かに世界には召還なる魔法を使う人間は多い。だがアレはそのようなレベルではない。私の予想ではあの奇跡は状態を変換するのでもなく、形状を変えるのでもなく、組み替えたのだ。しかも一を十にまで引き延ばして。せめてもの救いは無から有を作ることには出来ないという点だろうか。だがそれでも在ってはならない能力だ。

もしその予測さえ、無からは何も創れないという予測さえも間違っていたなら、それは……

「朱水はアレを見て変だと……思わないの？」

「変、ねえ……」

私の態度に何らかの恐怖感を覚えたのだろうか、有は制服のスカートをギュツと握り私と目を合わせようとはしない。それでも勇気を出して彼女は次の言葉を吐いた。

「ねえ、朱水は……何なの？」

言うしかないようね。いえ、今言わなければ取り返しのつかないことになってしまう可能性が十分ある。有そのものが消えてしまう事態だって、彼女の力を考慮すれば十分に考えられることだ。いや、消えてしまうでなく消されてしまうの方が的確か。

「私は貴女と一緒に、有。いえ、貴女が私と同じなのでしょう」

「同じ?」

有はいぶかしげな顔を作る。

「そうです。貴女は私と同じ……人ならざる者、『魔』よ」

「え?」

今、朱水は何て……?

「そう、貴女は魔の家系に生まれし娘よ。ただ、貴女の血筋は既に大半人間の血が混ざっていますけどね。私もそう。でもこの一色家は純粋な魔の血を引くのよ」

何 言つて るの?

「にわかには信じられないでしょうけど本当のことなの、有。私達は人と共に暮らしている人外なのよ」

人外……その言葉を聞いたとたん私は大きな衝撃に襲われた。

考えなかったことはない。自分が人ではないという想像。明らかに人の力ではないあの壁。

「そう、あの力は貴女が魔であるという証なのよ」

「……違う」

私は人間だ……。頭の中で考えていることとは違い、自分の感情から出てくる言葉はまだ自分を人間だと主張するものだった。

「違うわいわ。貴女も理解できるでしょう? あのような力を持つ権利は人間には与えられていないって。それに私は貴女を助けようとしているの」

「助ける?」

朱水は机を越えて私の手をとる。その冷たく細い指で包まれた私

の手は焚火に当てた様に急激に熱くなった。その熱は私の動揺を落ち着かせるように手から腕、胸と温めてくれている様だった。

「ええ、それも教えなければね。生きていくためには」

朱水が言うには日本には昔から魔という者達を狩る機関があるらしい。最初は神社で、次に幕府、政府と受け継がれてきたという。最初はただ一部の人間と魔との争いでしかなかったが、次第に平民を巻き込み、拳げ句の果て飢饉をも生みだし多くの餓死者を出したらしい。

「その時は幕府だったわね。魔と人間の間で協定を結ぼうとしたのです。しかし荒々しい魔達はそれを拒否しようとした。ですがある僧が突然、当時魔王と呼ばれていた魔の城の前に現れ、手紙を置いていったのです。その手紙には現在の言葉に訳すとこのようなことが書かれていたと言われています。『そなたらが死ねば我らは生きる。我らが死ねばそなたらも死ぬ』と。これを読んだ魔王の重臣は魔王に人間との協定の必要性を説いたのです」

「どうということ？ 人間の方が強いつてことなの？」

私の言葉は朱水の小さな笑みで否定される。

「違います。魔に比べたら人間など微々たる者です。しかし当時の魔は人間を食す者が大多数だったのです。魔が死んでも人間は安全に暮らせるようになるだけ。一方、人間が死ねば残った魔も当然餓死します。魔王は人間との協定に応じました」

協定の内容は、特定地域の人間において、その命を奪うことや五体が失われるようなことが無い程度に摂取は許される

人の姿をしていない者、つまり異形の者は人村から離れたところに住む

お互いの中心機関には近づかない

「そして最後に、有、貴女に今一番知ってもらいたい事よ。」

『危険因子は魔が漏出した場合、人間側が勝手に排除しても文句を言えない』」

「危険因子？」

「ええ、世界は常に均衡を保とうとしているのは知っていますか？魔はその現象をねじ曲げて『奇跡』を行います。その力を私達は『霊力』と呼称しているの。それは場合によっては世界を壊してしまう。人間だけでなく魔達もそうなることを恐れています。だからあまりに甚大な霊力を使う者は同族に殺されてしまう。人間に殺されるよりは私達の手で殺してあげたいですし」

朱水は淡々と言葉を連ねるが、私の手を包む力は言葉が重なるにつれて強くなつていった。

「でも……人間には到底届かないくらい強いんでしょう？」

「確かに差は歴然としています。しかし人間達も考えたものですね。式典兵器と呼ばれる物を作り出しました」

「式典……『兵器』？随分物騒な名前だね」

「その実、物騒なのです。古くからの儀式における行動には一つという意味がありました。その意味を、より神聖な儀式道具に埋め込んだのです。例えば浄化の儀を埋め込んだ儀刀は、普段はなまくらでも神官などが持つと破魔の剣となったのです。そして決定的なのは外国から流れてきた物でした」

「外国？と、言うことは意外と最近のことだよ。何のこと？」

朱水の手は私の手を離れ、人差し指だけを立てくると宙に渦を作った。何かのおまじないみたいだ。

「魔法ですよ。これは私達の霊力に拮抗するくらい力がありました。魔は血筋によつてある程度能力が決まっているようなものです。しかし魔法は行使者を選ばない。まあもつとも、魔法の場合は秘学を学ばなければならないという欠点もありますがね」

すごい、魔法まで出てきた。

「ム、ちょっと有。そんなワクワクした顔をしないでちょうだい。貴女に関わる話なのですから」

私の顔を見て朱水の眉が少しつりあがった。

「えっと、さっきから言っていること、よくわからないんですけど……」

あまりに私の常識とかけ離れている話をされて、私の高二脳では追いつくことすらできないのだった。

「……………単刀直入に言わせてもらいます。貴女はこのままでは危険因子と見なされ、削強班によって消されてしまう可能性が大いにあります」

朱水は一度長く瞼を閉じ、再び開かれた目をまるで敵を見るかのようにぶつけてきた。

「私が……………危険因子……………なの？」

朱水は何を言っているんだろう……………。私なんかさつき朱水が言っていたモノだとも言うのだろうか？ まさか、そんな、ありえないよ。

「ええ、貴女的能力は神に近い。『創造』一歩手前までできているのよ？ それをあのマガリ者達が野放しにするはずはないでしょう」

創造？ 話が突飛すぎて追いつけない。

「サツキヨウハンって？ それとマガリモノって言うのも何？」

「現日本政府に秘密裏に設置されている魔を狩る機関よ。さつき話した機関は今ではそう呼ばれているの。詳しく言っと『削魔遂行部強行班』だったかしら」

削魔遂行部強行班の三文字をとって削強班とし、それをサツキヨウハンと読むらしい。

「じゃあマガリモノって言うのは？」

「根性が曲がっているから『曲がり者』……………と、言いたいのですけれど実際は読んで字のごとく『魔狩り者』よ。簡単に言えば対象

が人外の死刑執行人ね。一応公務員らしいから税金から給料が下りてくるらしいわ。殺しているだけでお金が手にはいるっていうある意味そう言う趣味の輩共には楽園みたいところね……………って!」

朱水がジト目で睨んできた。何やら御怒りの様子である。

「有! その余裕は何なのですか? 貴女の命がかかっているのですよ?」

「うん……………言いたいことはわかったんだけどさ、実感がわかないというか」

そのような事を知ったところで私は何をどうしていいのかわからない、と言いたい気になるが、目の前にしている朱水さんの表情から察するにそんな事を言ってしまったらさらに不機嫌になるだろうから黙っておこう。

「そう。今まで人として生きていたのだから仕方ないのでしょう。

ですが有、安全に生き延びる方法は一つしか無いわ」

「一つ……………。それは何?」

朱水は一度咳払いをすると椅子から立ち上がり私を見下ろす。

「私の配下に入りなさい。そして自分の力と向き合いなさい」

私はすぐに了承した。頷くしかなかったんだ。私には理解し難い話だったが、朱水は本当に私のことを心配してくれているようだし、朱水なら守ってくれそうな気がしたからだ。なんとなく、そう思える力が朱水にはあるんだ。

その後、明日また学校の帰りに朱水と共に彼女の家に向かう約束をした。執事さんに車で送ってもらっている間、朱水の言葉が思い出された。

「貴女は魔としたら低級の血筋に生まれてきたの。でもその力はどんな魔でも持ち合わせない希有な能力なの。それも、良い意味でも悪い意味でも多大な可能性を秘めた、ね。けれども貴女は魔としての価値がかなり欠落しているわ。それは貴女が悪いのではなく家系がそうさせたの。貴女は回復能力とさっきの力以外はただの人間と同じ。貴女が今、一緒に暮らしている叔母さまは恐らく魔としての知識は皆無だわ。だから家では今まで通り暮らして。それでは、また」

……………朱水、私の親がどうして死んだか知っているのかな

6

「とりあえず貴女には討滅に参加してもらいます」  
学校が終わって朱水の家に向かっている最中、朱水はそう切り出した。朱水は登校時には車で来るが、下校時は歩きである。なので私達はよく一緒に帰っているのだ。

空には雲一つ無く、風が心地よい帰路だった。午後の授業が無い日だったため他の生徒は部活かとつくのとうに帰って行った様で、帰り道には誰も他に存在しなかった。私達はこの時間まで私の教室でお喋りをしていたために二人きりの下校となった。

それは名残惜しさからか。学校にいれば魔とか人間とか関係のない時間が過ごせる……そんな考えが二人にはあったんだと思う。

昨日までと大きく変わったことでもう一つ明らかかなものがあった。

朱水が何かにつけて私に触れるようになったのだ。今までは確かにお互いの体が近いということはあったが、肌と肌が触れるという事は滅多になかった。あってもお互いの手が触れる程度だった。でも今日の朱水は何かが変わった様でべたべたと私に触ってきたのだ。それもびっくりするくらい熱を持った視線を添えて……。

あまりのボディタッチに、そのようなものに慣れていない私はたじたじとなりどうにもできず固まることしかできなかつた。朱水が私の顔を撫でてきた時には小さい叫び声すらあげてしまい、朱水の目を丸くさせることとなつた。それでも朱水は手を私の顔から外すことなく再び私を見つめ直すのであつた。私の心臓さんは朱水の異様な熱視線によって拍動を加速させることを我慢できなかつた。

「討滅？」

「はい。昨日のことは覚えていました？」

「……あ、聞くのを忘れていた。自分のド忘れっぷりには感心すら覚えるよね。」

「じゃあ、昨日のが魔なの？」

「いえ、アレは人です。元々人と言つた方がわかりやすいかしら」

「元々人？ だったらどうしてあんなことに？」

「そう言えばあの時、私から見る限り朱水は襲われていた様だつた。私が襲いましたの」

「……………」



しかし私の見解は大いに外れたらしい。

「そうでした、まだ今回のことについては何も説明していませんでしたね。昨日言ったとおり、魔は人に近い容姿をしているのなら人の住む場所に定住しても良いことになっています。それは人を襲うことを明確に許しているということです。まあ、命を奪ってはならないということですから村に住む魔は人を殺すことはなかったはずです」

「どうして？ 村の人々は知らないんでしょう？」

「そう言ったら朱水は鋭い目で見つめてきた。」

「有、貴女は変わらなければならぬわ。魔であることを自覚しなさい」

朱水は立ち止り、私の反応を待っている。人間としてではなく魔としての発想を求めているということだろう。

「……………うん」

そうして朱水は麗雅な眉をひそめながら私に言い放った。その歩みは先程までと同じ様であったが、私には一步一步が雑になっていると思えた。

「世界というのは綺麗事だけで成り立っているわけではありません。多くの死者を出すよりは一部の平民を繰り返し食べさせる贅として私達に差し出した方が良く考えたのでしょうか。そういうものなのよ」

つまり大体は人間の体の中で再生しやすい部位、要するに血液等だという。

「……………私はそれを非道いと言っちゃだめなんですよ？」

「ええ、そうよ。弱肉強食は当然の事なのだから、見逃したのはこちらの優しさよ」

「うん、頑張つて慣れるよ……………」

「……………」

お互いに言葉を失い、それからの二人は無言で歩き続けた。ただでさえ誰もいない道、商店街までに耳に入ったのは遠くに鳴った車

のクラクションとお互いの足音だけであった。

少し焦りすぎたかしら。有は昨日まで人として生きてきたのだ、私とは勝手が違うでしょうに。私は有がこちら側の住民になることに心底歓喜している。初めてできた『タイセツナモノ』。それを根こそぎ独占したいと思うのは罪なのでしょうか？

昨日までの自分と今日の自分は全くの別人だと自分でも気づいていた。昨日までの私は有と、人間という皮を被って接した方が幸せなのではないかとどこか思っていたに違いない。しかし有から魔の方に接近してきた以上、私の籠たがは外れどどん彼女に溺れていつてしまった。自分でも分けが分からないほどに彼女の熱を知りたくその温もりを求めていた。もはや私を止める壁など消え去ってしまったのだ。知り合ってから溜まりに溜まっていた欲望は堰せきを失ったために勢い良く溢れ出してしまった。

この子が欲しい、ただその欲望だけで今日の私は動いていた。

門までやってきた。相変わらず有はずっと黙って私の横を歩いていた。私達の間でこんな空気は初めてのことだ。でも私はそれさえも愛おしい。有と過ごす時間は何でも私の心を温める。失うことなど考えたくもない。

有は私が守る

「朱水？ 大丈夫？」

門に手をかけたまま止まっていた私を心配に思ったのだろう、有は心配そうに覗き込んでくる。その瞳に見つめられると益々保護欲

を煮えたぎらせられる。

「え？ ええ平気ですわ。有、貴女は先に昨日の部屋に向かって下さい」

「わかった。行けると思う」

有はたどたどしく進んでいった。エントランスからはそう遠くないからきつと無事辿り着くだろう。私は私で倉庫に向かい頭首以外禁制の扉を開けた。鍵など存在しない。扉が開ける者を選ぶのだ。

「あら、座って待ってれば良かったのに」

応接間では有が居心地悪そうに手をぶらぶらさせながら歩きまわっていた。

「何か落ち着かなくなってるね。……それ何？」

む、目敏い。有は私の手にある代物に一瞬で気づく。

「腕輪……ブレスレットですね。貴女にこれを貸します。効果は各自に区々（まちまち）ですので実際に着けてみるまでわかりませんわ」

有はしげしげと眺めてから腕輪の名前を聞いてきた。もう、妙なところで好奇心旺盛なので……

「正確な名前は伝わっていません。お父様は『鬼眼の輪』と呼んでいました」

「鬼眼？ そうは見えないけどなあ」

その至ってシンプルな装飾しかされていない腕輪を弄くり尽くす。確かに名前のわりに目を表すような形状もシンボルも無いのだ。不思議に思うのも無理はない。

「目と眼は別物です。目はただの視覚器官の事を表しますが、眼はその力も表します。この場合は『見抜く』でしょうか。装着者によって効果が違うのは、この輪が相手を選ぶからです。まずはいつも身に着けておいて下さい」

有の左手首に着けようと触ったとたん、心の臓が跳ねた。また欲

望が働く……。

「ひゃあ」

私の突然の行動に全く予期していなかった有は腕輪を落としそうになるくらい跳ね上がった。一瞬でその白い頬は朱を帯び、その丸くなった目は潤いを持って私の次の行動を見守っている様だった。

「っ、ちよつと有！ 変な声を出さないで下さい。こっちまで……」  
恥ずかしくなるじゃない……。どうしましょう。自分でもわかるくらい顔が火照っている。

「と、とにかくずっと着けていて下さい。私だと思って大切に扱って下さいね」

……！ この口は何を言っているのでしょうか！

ほら、有の頬がさらに赤くなってしまったじゃない。

「え、えつと、お風呂の時とか……は？」

有は赤面した顔を隠すように俯きながら結局自分の手で付けた腕輪の輪郭を指でなぞる。

「お、お風呂ですか？ はずしたいならはずしてもかまいませんよ、ええ勿論」

勿論、勿論、と何度も繰り返してしまう。

「うん、そうだよ。恥ずかしいもんね」

「ゆ、有！ 何を言っているのですか、貴女は」

「じ、ごめん」

「いえ……」

なんでしようこの空気の甘さは……

「有、貴女にはもっと知ってもらわなければならないことが沢山あります。とりあえず今回のことに関わる話をしますわ」

椅子に座り直すと朱水は急に落ち着いて話し出した。まるで人が変わったように瞳に冷たい光が走る。椅子の肘掛に乗せた手を胸の

前で組む。その姿は不可解な威光を放っている様に私には見えた。年齢にそぐわない鋭い重圧を今日の前にいる朱水は纏っていた。

「今、この町に流れの魔が居座っています。最初は大人しかつたので放置をしていたら最近になって急に勢力を増してきました」

「勢力？ 戦争ってこと？」

「ええ、簡単に言えばそうなりますね。戦争と同じように無関係の者も巻き込まれていますし」

あくまで彼女は冷静である。

「でもどうして？ そんなことをしたら削強班に目をつけられるんじゃないの？」

「……………驚きました。少ない情報でよくそこまで考えつきましたね。ですが削強班は同族争いには手出しできません。彼らがこちらに乗り込むのは危険因子の排除の時だけ。同族同士の争いに加わる権利は与えられていません」

たとえ一般人が死んでもその数がまだ穏やかな場合は削強班ではなく警察が扱うらしい。

「どうして争うの？ 国同士の戦争みたいに領地やお金の問題なの？」

「いいえ。確かに領地という概念はあります。しかし実際はそのような考えを気にしているのは一部の魔だけでしょう」

だったらどうして。

「魔は欲望に忠実なのです。人間は理性というモノで本能を隠しています。それは個々の存在が微弱な種族にとっては仕方がない事なのでしょう。そのおかげで知性を手に入れたのですし、対比に使われる獣達には知性と呼べるほどの思考段階の複雑性がありませんねえ、有。人間と魔、どちらが後に出てきたのだと思いますか？」

人間と魔……………やっぱイメージで言っと、

「人間かな。魔は昔から住んでいたってイメージがある」

「でしょうね。なら、どちらが優れていると思いますか？」

「それは……………魔、なんじゃないの？ 運動神経とか全然違うんでし

よ？」

「ええ、そちらは正解です」

そちらは、つてことは、

「魔の方が後に生まれたの？」

「そうですね。人間と同じくらい、いえ、寿命を考えたらそれ以上の知識をため込むことができる脳、人間を遙かに超える運動能力、極めつけは世界そのものに干渉できること。この点から言って魔と人間とでは圧倒的に魔の方が優れていると考えられます。優れているモノを作るためには元となるモノが必要でしょう？ 魔にとって人間がそうであるのです」

スゴイ、何かの授業みたいだ。

「だったら魔ってというのは人間が進化したモノなの？」

朱水は私の言葉に苦笑する。

「まさか。人間がどんなに進化しても魔には届けません」

「ん？ なら魔はどうやって生まれてきたの？」

「『世界は常に均衡になろうとしている』。そう言いましたね」

「……『世界』そのものが人間を減らすために魔を作ったってことなの？」

「ふふ、ホント理解が早くて助かります。そう、私達は世界に作られたのです」

朱水の言う『世界』というモノが良くわからない私だが、現状の知識でわかる事は、

「でもその割には……」

人間は相変わらず地上を支配しているという事だ。

あ、また朱水の眉が……

「ええ、言いたいことは十分わかります。ですが魔は存在し始めてからまだ数千年しか経っていないのよ？ 完全な魔として存在するには短すぎたのよ。それに、その間に人間は魔に耐性をつけてしま

った」

興奮し、目を攻撃色に光らせる朱水さんは机をバンバンと叩く。どうやら私の言葉は朱水の逆鱗に触れてしまったようだ。

「あれ？ 魔って大昔には存在しなかったの？ だったら遺跡の壁とかに描かれている人外は何なの？」

「……ホント鋭いですね。ええ、アレは確かに魔ではありません。魔ではない？ だったらアレは？」

「わかりません？ 魔でもなく人でもない。残った選択肢など一つくらいしかないでしょうに」

……まさか

「動物なの？」

「半分正解ね。あれは獣なの」

「そんな……」

あんな怪物が動物だなんて信じられない。いや「動物」という言葉が担う範囲をよくよく考えれば確かに動物とみなすことはできるけどさ。

「驚くのは仕方ないでしょうけど、私達を例に見れば案外納得できるモノですよ？ 簡単に言えば私達は二番目の駆除剤です。一方で一番目の駆除剤は獣を元に作られた。ですが結果は人間側の勝利でした。ですから次は人間を元にして魔を作ったのです。これも拮抗となった。そこで世界は新しい駆除剤を作ったのですよ」

「それは？」

「人間そのものに入っていった破壊行動をする物と言ったら？」

「……ウイルス？」

「ええ、ウイルス及び微生物の類です。もっとも、あれは地球上に昔から存在している物です。ですから世界がほんの少し後押しするだけで結果を出しました。ペスト、コレラ、最近では方向性を変えてエイズ、全て人間を減らすために世界に後押しされたと考えられています」

……話が大きくて頭が壊れそうだ。

「なら……人間は世界の敵って事なの？」

「いいえ。アレも世界によって作られた物、敵という表現は不適切です」

「『均衡』のためだね。だったらウイルスさえも克服したら四番目の駆除剤が作られるってことかな」

朱水は私の言葉を聞くと指を私にドーンと突きつける。「好く言った」という意味だろうか。

「はい。魔達は次には地球そのものが手を下すか、神と呼ばれるモノを作り出すか、そのどちらかだと考えています」

地球そのもの、つまり天災とかか。

「その時は、私達も？」

言いたい事が分かるのだろう、私の中途半端な質問でも朱水は深く頷く。

「でしょうね。人間だけを過剰に減らしてしまつたら均衡はまた、崩れますから。駆除剤も一緒に破棄してしまわなければならないのですよ」

「理解できるけど……怖いね」

怖いという言葉と同時に私は背筋に何か冷たいものを感じた。

「ええ。……話が大きくなりましたね。要するに魔は人間を襲いやすいよう、最初から欲望に従うように作られていると言いたかったのです」

「で、その欲望が同族争いなの？」

「いえ、結果的にそうなつてしまっただけなのです。魔の欲望は『力』、最初はちゃんと人間を相手にしていたのですが、世代が変わつてくると魔同士で争うようにもなつてしまつたのです」

残念ながら、と朱水は頭を左右に振りながら言った。

「力を求めて、つてヤツ？」

ゲームで出てきそうなチープな言葉だが、実際に目の前に「ゲームの様な力」を持った人を前にした私は言葉に何ら恥ずかしさを抱かなかった。



「ええ。情けない話ですが昔の魔は単純すぎたのです。その欠陥を引き継いだのでしょうか」

「なら今この町にいるのも単なる力比べのために？」

「ええ、恐らくは。ですが少々違和感があるのです。力を求めるのは前提であって、どうやって求めるか、どのような力を求めるかは区々ですから断定は出来ません」

「え？ どういうこと？」

そう聞くと、朱水は急に声を低くして、

「……いるのですよ、多大な犠牲を糧に大きな力を求めようとする痴れ者が。どんなに大きな力を具現しても世界がそれを許さないというのに」

と言い、宙を睨めつけた。その手は怒りに震えている様だった。

(何があっただらろう……)

「あら、ごめんなさい。また話が脱線してしまいましたね」

話を換えようと咳払いをする。それだけで怒りの模様は風に流されていった様だ。

「今回の方針は使者の排除、叶えば使役主の討滅です」

「使者？」

「魔によって支配された人間のことをそう呼称します。私達のように一切支配しない魔もいますがね」

「何のために人間を？」

「純粹な強さを持った魔による使者は、強力な剣となります。その剣を操り、相手の気がそちらに向いている隙にさらに駒を増やして王手という感じですね。しかし魔でもこの方法を使うような者は、日本では少ないんです」

朱水が言うには、吸血鬼というものは海外の代表的な第二のイメージだという事だ。日本以外でも血液だけを搾取することを許した

国は多く、そもそも日本自体海外の事例を模倣したと言われているらしい。その血液を奪うシーンや、朱水が言ったような人間を操る事がくつつき、吸血鬼という固定イメージができたと言う。一方で日本では「人間を操る」という事を良しとしない風潮があったとのこと。自身の力だけを本丸とし、争い合っただけらしい。

「本当に戦争みたいなんだね。で、今この町は攻められているんですよ？」

「はい。ですが使者は微弱、おまけにどうやら主とは繋がっていない様なのです」

「繋がる？」

「ああ、言い忘れていましたね。普通、使者と主は繋がっているのです。それにより集団行動を指揮したり、撤退命令を出したりと、現場にいないとも操れるのです」

「うーん。何となくわかった気はする。それで、私もその使者と戦えと言うんでしょ？」

尤も「戦え」と言われたところで私に何ができるだろうか。そもそも昨日の朱水の様……に……

「有？ どうしたの？ ボーとしていたわよ」

いつの間にか私の目の前に朱水の心配そうな顔があった。どうやら私は固まっていた様だ。

「いや、何でもないよ。私にも手伝えつてことだよね？」

「ええ。貴女の先には必ず争いがある。魔ならば逃れられない宿命なのです。その時までには戦い方を知らないかと犬死にします。そうならないためにも今は私に付いてきて、戦いを学びなさい」

朱水は言いきった。私を死が立ち込める世界へと誘っているのだ。今の日本では考えられない世界なのだろう。

昨日の出来事から私はどこか遠い世界に迷い込んでしまったのだろつかという考えが度々頭の中にわき出ていた。そう、限りなく元の世界に近い、だけど明らかに違う、そんな世界に。実は夢を見ているのだと……。

しかし目の前にいる朱水はそんな希望的逃避論を否定するには十分すぎる存在感を滲み出していた。

「……わかった。私に何が出来るか知らないけど、朱水とならいる気がするよ」

「ええ、暗闇の舞踏会へとエスコートさせていただきますわ」

「同性なのには？」

「あら？ 私はそこらの男性より数倍頼りがいがあると自負しておりますが？」

「うん、そうだろうね」

私達は笑い合い、また昨日と同じ約束をし、玄関で別れた。

第一話 出会いと自壊 / 中話(1)〜7

S y m p t o m

「悪夢だと思いたいな。貴様のような者に戦いを挑まれるとは」

暗き森の中、向き合つのは人間と人外

「ええ、私もこのような粗末な舞台に立つのは不快です」

人外の言葉に人間はそう答えた

「ならば何故？」

人外はその目に相手を焼き付けんばかりの様子で凝視する

「もとより無謀な舞台、飾るのは私のような者でなければと思いましてね」

人間はその目を涼しい目で睨み返す

「そうか。ならば全身全霊で殺して、貴様のその蛮勇への手向けとしよう」

今、一つの争いが始まった

闇に浮かぶは白き炎

「貴方は達していなかった、ただそれだけの事。私の欲している物には到底届かない中途半端な存在です。大人しく空へと消えなさい」

人外のほとんど取れかけた首に刺さるは、白き炎を纏まといし鐘

「その鐘は貴方を神の下まで届けてくれるでしょう」

そうしてこの戦いの幕は閉じた

「愚かな。もはや動き始めた『第四』は何者でも止めることは出来ない」

その声は消えかけの人外が放ったのか、人外を空に送りし人間が放ったのか、闇に包まれし森に消えていった

7

彼女は生き残った

崩れた小屋から見える空はただ蒼く、ただ狭かった

そこで彼女は独りで、無い明日を夢見ていた

お昼休みを知らせるチャイムが鳴ると食堂組の生徒たちに交じって一目散に廊下へと飛び出る。生徒の流れに途中まで乗り、階段で一人だけ別の方へと進む。そんな私を誰も気にしていないようで、皆は自分の食料調達に必死の様子だ。生徒の数に対して食堂の椅子は結構ぎりぎりなため仕方ない事なのだ。

ドアが重い金属が擦れ合う音を鳴らして開かれると、そこには青と白の世界が待っていた。ふわりと樹木の匂いと微かな潮の香りが屋内へと浸透していく。風が強い日には海が近い故に潮の匂いを運んでくるのだ。私はその空気の流れに逆らって屋上へと足を踏み入

れる。

屋上にはまだ誰もいなかった。まあいたとしても誰かは決まっているのだけれど。私はいつも二人で昼食をとっている部分に腰掛け、まだ来ぬ友達をお昼ごはんのパンを弄くりながら待つ。よくよく考えれば誰かを待つだなんて行為は今まであっただろうか。しかも待つことすら楽しいだなんて、そんな経験が今までにあっただろうか。

今日は朱水に応えよう、そう決めてお昼休みを待っていたんだ。

朱水が私に触れたいのなら私もあわてず騒がずそれに応えようと思う。

朱水の事が好きだって思えるから。

自分でもよくわからない感情だった。いつも一緒に朝食をとっている叔母さんだって大好きだ。でもそういう好きの類ではない事に昨日気付いてしまったんだ。昨日の朱水は同性の私から見ても凄くかつこよかった。その姿を見ていると私は全てを委ねたい気持ちにすらなっていた。だから……応えたくなるんだ。彼女が触れたいなら私も触れたい、あの顔を見ているとあの声を聞いていると何もかもを奪われない、そんな欲望すらわいてくる。もはや応えることすら欲なのかも知れない。そんな事を考えながら今日の午前を過ごしていた。

だから全然授業内容が頭に入っていないかったり、ノートに文字が全科目両手で数えられるくらいしか書かれていなかったりしても、そんな事はどうでもいいくらい私はお昼を今か今かと待っていた。

ギーッと金属扉が開かれると、朱水がこちらに手を振りながら入ってきた。

その姿を見るだけで私の心臓はドクンと強く跳ねた。

「お待たせしました」

朱水はにこやかに私の隣へ座り、その姿をじっと見ていた私の視線に気づくとさらにその魅力的な笑顔を強めるのであった。

「ねえ朱水」

お弁当の箸を鞆の中から発掘するのに手間取っている朱水に声をかける。朱水は探求を一時的に諦め、髪をかき上げ私に顔を向ける。その青い目が私を覗くと私の理性は『お昼休み』してしまった様で、

何故か右手が勝手に動いてしまったのだ。

「……………」

「……………はい？」

私の右手が朱水の薄く紅潮した頬を触っている。

「……………」

「……………有？」

どっしり……

私が内心で慌てふためいていると、朱水は急にクスクスと笑い出し私のその手をとって両手で包んだ。

「不器用ね、貴女ってば」

「あつ……………」

何も言えないです、はい。恥ずかしさのあまり全身の力が緩んでしまった私は、むき出しだったパンをコンクリートの床へと落とし、そのパンはコロコロと転がって排水溝へと落ちていった。

「うあ！ 私のお昼ご飯が」

「あらまあ」

フェンスの向こうに唯一のお昼御飯が見える。流石にこれを持って食べる気にはなれない。お昼御飯どうしようかな……。今から購買に行っても全て売り切れているだろうし、食堂という手もあったが朱水と一緒に食事できないくらいなら食べなくてもいいかと思っ  
てしまうのである。

「はい、あーん」

目の前に箸に挟まれた卵焼きが突き出される。私がフェンスをつかんで中を睨んで唸っている間に朱水は箸を探し出しお弁当を広げていた様だ。食べる物を失った私に恵んでくれるらしい。

一瞬でも「落としてよかった」なんて罰当たりな事を考えてしまった自分がいる。このパンに関わった全ての人にごめんなさい、そしてありがとうございます。

「あ、あーむ」

口を開くと朱水は卵焼きを口の中に入れてくれた。

「ふふ、美味しいですか？」

口の中に砂糖で甘くなっている卵の味が広がる。出汁もきいていて凄く美味しかった。

「美味しい美味しい！」

私が何度も頷くと朱水も気を良くしたようで他のおかずもぼんぼん私の口に放り込む。

朱水はフェンスのある高い部位に座っているため、しゃがんで私の口に箸を伸ばすためには少し屈まなくてはならない。そしてこの二人をもし誰かが見ていたら間違いなく『餌やり』の様に見えるだろう。



なんかドキドキする……。

その行為はお弁当のおかずが全て消えるまで続いた。結局おかずは全て私が食べ、朱水には何の味付けもしてないご飯だけしか残っていなかった。

「あうう、ごめん」

「いいのよ。幸せというのも味付けになるんだから」

そう言つて朱水は楽しそうにご飯だけを食べていた。私がその美味しそうに食べる朱水を鑑賞しているとお昼休みの終了を知らせるチャイムが鳴り響いた。いつの間にか時が大分過ぎていた事に今更気付き、お互いに顔を見合わせ笑い合い、お弁当箱を片付けて教室へと戻つて行つた。

「あら、今日は掃除当番でしたの？」

掃除当番でみんなと一緒に教室の掃除をしているといつの間にか背後に朱水が立っていた。その手には鞆と体操着入れが握られていた。帰り支度は完璧な様だ。

「あれ？ 教室まで来てくれたの？ もうちょっとで終わるから待っていてね」

ちり取りにゴミを乗せていると、クラスに残っている生徒の大半が朱水を見ていることに気がついた。皆の視線の中心で朱水はこちらを時々うかがい髪の毛を弄くりながら佇たたくんでいた。学校の女子の中で一番背が高い朱水はただ立っているだけで皆の注目を集めてしまふのだ。おまけに美人ときたもんだ、どうなっているんだろうか『世界の均衡さん』とやらは！

(女子にまで熱い目で見られるのはどういう気持ちなのかな?)

そう考えていると朱水が私の視線に気づいた。

「ちよつと、有、手が止まっていますよ。掃除は教室を使う者の義務なのですから全うしなさいな」

(性格もホントに完璧なんだもんな)

ゴミ箱にゴミを運べば、ハイツ、シュウリョー

「じゃあ行こうか」

鞆を持って朱水の横を通りながらそう言つと、朱水は変なものを見たような顔をしてきた。

「本当に貴女は変わらないのですね。私、貴女が変わってしまったことを覚悟していたのですよ?」

変わる、か……。正直自分でも不思議なくらい落ち着いていると思う。もしかするとあまりに現実が今までの日常に比べて突飛過ぎて、私が置いてけぼりになっているからなのかもしれない。

「でも覚悟は出来るよ。今なら幽霊がいるなんてことも本気で信じちゃうくらいに」

「あら。幽霊というのは実在しますよ。層に捕らわれた魂は永遠に物質化出来ませんからねえ」

……。いるのデスカ。

「あ、いや、聞かなかつたことにしたいデス。それより早く行かないか。ね? ね? 早く行こうね! 今日は訓練みたいなのをやるんでしょ? 叔母さんには部活に入ったとしか言っていないから遅すぎるのはマズイかも」

「話をそらしたのかしら? まあ有の苦手な物が判つただけでもよし、です」

そう言つと私を追い越し下駄箱の方へ進んでいった。

「何……アレ?」

通り過ぎる朱水の顔を一瞬見た私はその黒い笑みを確認したのだ。

「有、今の貴女は魔としては……そうですね、『明日の太陽を拝めない』というところでしょうか」

ぼつぼつといる帰宅途中の生徒に交じって私達は帰路を歩む。

「だろうねえ。この前まで普通に生きていたんだもの」

「ええ。だから今日はまず、力の確立を目指します」

「確立？」

「はい。強大な力を持つていたとしても、必要な時に出せなかったら飾りと同じ。体が覚えていなければ戦いなど無謀です」

どうだろう、私は昔からあの力と共存してきた。体が覚えているかと聞かれたら多分そう、と答えられるんじゃないかな。ただ自分自身をよく分かっていなかった私がそんな事を言えるわけがなく、ただ朱水の意見を飲んだのだった。

「でも、どうやって練習するの？」

そう言つと朱水は

「窮鼠猫を囓む、と言つてでしょう？」

つて、言ってきた。うわっ、しかも見たこと無いくらいの満面の笑みだ。

「あの、朱水さん？」

「はい、何でしょうか？」

その顔を維持したまま朱水は返事をした。

「……怪我とかする？」

「さあ、どうでしょう」

「あの、どうしてそんなに微笑んでいるの？」

「さあ、どうしてでしょうか」

……性格、変わった？

「ふふ、思っていた通りの反応をするものですからつい、苛めたくなってしまうました」

「はあ……もういいや。で、これからどうするの？」

「我が家の庭にて模擬戦闘を行いましょう」

……ヤツパシ

「朱水となの？」

それにしても模擬戦闘か。そんな言葉を日常会話で聞く様な生活になったんだなあ。

「そんなことをしたら貴女の体は五体不満足になってしまいますよ。戦うのは使い魔です」

「使い魔ってよく映画とかに出てくるヤツ？」

「映画は知りませんが、多分そうでしょう。魔の家庭では使い魔に子供の訓練相手をさせることがしばしばあります」

「……私もそうだったのかな？」

自分でもよく考える前にその言葉が出た。条件反射、そんな言葉が的確なくらい無意識的な発言であった。

「はい？ どういうことです？ まさか記憶が……」

「覚えてない。親の顔、声、匂い、何もかも覚えてない。自分の記憶はあるのに、親のことはごっそり抜け落ちているみたい」

「……」

「でも何も困らなかつたんだ。叔母さんは訊けば答えてくれた」

「……何を、訊いたのですか？」

「どういう人達だったのか。何をしていたのか。そして、どうして死んだのか」

「……有」

「火事だった、って言われた。私も、何となく目の前が炎でいつぱいの景色を見た覚えがある。多分それが……」

そう……赤の……朱の……紅の……炎でいっぱい

「私の親も魔だったんでしょ？ だからアレがただの事故だなんて



「前にも言ったはずですが、魔は世界の均衡に干渉することにより『靈力』と呼ばれる奇跡を起こします。その時に地球の認識手段として使われるのが魔に流れし血です」

「血、ってこの赤い血のこと？」

有は手首に指を指しつつ言った。

「違います。目に見える物ではないのです。ましてや体内における反応には一切関わりがありません。ですが確実に存在し、貴女の体の中を巡っているはずです。勿論私の体の中にも、です」

ほへー、と有は首を縦に振るがおそらくよく分かっているように見えないでしょうね。

「その魔の血という物があって初めて靈力とかいう物が行えるってことかな」

「はい。その血は母体から子供に渡る際に自らを複製し、母親と子供の両方に存在するように作られています。その時、血が流れた跡が脈となりその子供の存在を、お腹の中にいるうちに決定してしまうのです」

なので純血に限りなく近いほど多くの効率脈を持って生れてくる確率が多いのである。しかし目の前にいる有の様に、血の濃さと効果が比例してない魔も数は少ないが存在する。それは脈の効果を左右するのはその数だけで無いからである。

「血液とは別物なんだね？」

「ええ、どんなに体から血液が流出しようともこの血だけは外に出ません。この血を活性化することにより魔は靈力を行使できるので」

「へえ、何かスゴイね」

有は自分の手のひらを太陽に透かして見ている。先程目に見えないと言ったばかりなのに面白い事をする子だ。

「私にも流れているってことだよね」

「無論です。脈の数は少ないですが巡りが良さそうです。ほとんど間髪入れずに発動するのですから」

「見込みはあるってこと？」

有の表情が急激に明るくなる。自分の価値を良い方に評価された事が嬉しいのだろう。

「ええ、大いにあります。ですが守るだけでは何も終わりません。生き残るためには武器が必要なのです」

「武器かあ。刃物とかを練習するの？」

「それでは何の解決にもなっていません。言っただけでしょう、有魔を傷つけられる武器は普通ではないのだと」

「ああ、そうだったね。ならどうやって？」

……はあ、本当に人間として暮らしていると本能さえも衰えてしまふのですね。

「有。貴女は魔なのよ？ 人間を狩る者達が人間と同じ武器を使うとでも？ 貴女には貴女にしか無い物があるでしょう」

「それってやっぱりコレのこと？」

と言いつつ空中に壁を創る。相変わらずお見事な技ね。

「どんなときにも手元にあるのはそれだけなのですから、その力を信じなさい」

「わかった。でもコレでどうするの？」

そうねえ、確かに難しい。守りにおいては強力でも、攻撃には向いてない形状……ならば……

「有、貴女はどうやってコレを創っているのですか？」

そう言う和有は、ウーンと唸りながら、

「うーん、頭の中で……思い描くって感じのかな。ただ、そこには壁があるって」と、簡単に言ってきた。

「何ですか……それ」

有り得ない。有は幾つもの段階を無視して世界に干渉しているらしい。

普通の魔はまず自分でその起こしたい未来を頭の中で思い浮かべる。ここは有も同じであろう。しかしそれだけでは普通の魔は霊力を行使できない。その次の行動こそが重要で、『虚きょ』と呼ばれているモ

ノから力をもぎ取ってくるのだ。虚と言うモノは行使者毎に別々のイメージで描かれるが大抵は海の様だと言われている。その姿を思い浮かべることに成功した者だけが霊力を行使する資格を与えられるのである。しかし、有はそれを必要としないらしい。

それは未だかつて……魔王と呼ばれた者達でさえ持つことが出来なかった脈なのだろうか。いえ、もはや脈ではなく存在自体が『機械』となっているとしか考えられない。

「どうしたの？」

「有、貴女は」

「何？」

「……いいえ、何でもないわ。どうやら貴女は訓練する必要がないようです」

「どうして？」

私はその言葉を無視し、梓が呼んできた智爺に後の監督役を任せ、有に屋敷の中に入るように言った。

「有、貴女は途轍もない可能性を秘めているわ」

私の言葉は有にどう受け止められたのだろうか。小さく頷いた有は梓に連れられ遠ざかって行った。私はその背中を一種の恐怖心を抱きながら見ることにしかできなかった。

有の存在はイケナイモノなのかもしれない、そう私の直感は告げていたのだ。

「これを見て」

そう言うと朱水はどっかから持ってきた透き通ったナイフのような物を机に置いた。

「これをじっくり観察して」

言われたままにじっと見つめる。透明なだけで何処にもおかしな



所は無い物体だった。

「目を閉じて。そうして右手にこのナイフがあるという状況を思い浮かべて」

「……………うわっ、何か手に冷たい物が……………」

「あれ、これって」

その冷たい物を確かめようと恐る恐る目を開いてみる。

「やっぱり。思った通りですね」

手にあるのは机の上のモノに似たナイフだった。初めて壁以外の物が私の力で生まれてきたのだった。

「でも何か違う」

「それは貴女がその様に『創造』したからです」

「前から言っていたけどその『創造』って言うのは？」

「言葉の通りです。いえ、少し違いますね。貴女の場合創るための材料が必要ない。つまり本当に無から有を創り出しているのです」

それって……………」

「超越的存在、分かりやすく言うと『神』に近い力を持っている、と言えます」

神様……………え、私が？

「まだ確かめなければ……………。今度は日本刀を、鞘に収まった刀を持つている様に思い浮かべてみてください」

日本刀か。確かこんなだったはず。

頭の中で手に刀を持っている私をイメージしてみると両手にズシリと重い触感が得られた。恐る恐る目を開けるとそこには……………」

「何これ？」

「おそらく今までに日本刀を直に見た事が無いからでしょう。だからそのような玩具のようなモノになってしまったのです。そうですね、これから特訓をするなら想像力でしようかね」

そう言っつて朱水は私が創った物を手に持つと、瞬きした一瞬で消してしまっつた。

「あ！今のつてどうやったの？」

まるで消失マジックであるかのように跡形も無く二つは消え去っていた。

「あら、そう言えばまだ私の力を見せていないのでしたね。私の力は端的に言えば貴女の逆、『破壊』です。この力なら同じようなモノを有した魔は沢山います。もっとも、ここまで純粹に『破壊』し尽くすのは希有な力でしょうがね」

そう言い手元にあったコースターを指でつまみ上げ、私の目の前に掲げた直後これまた一瞬で消してしまった。残ったのは在ったはずの物が無いという違和感だけだった。

「スゴイ」

「貴女に言われると少し皮肉に聞こえてしまいますね」

朱水がコースターを持っていた指をすり合わせて粉の様な物をこそぎ落としていると、刹那だけその指に紫色の靄が纏わりついている様に見えた。

「そ、そんなこと無いよ！ それに私は朱水より優れているなんて思っていないし！」

本当に思っていないし、これからも思えないと思う。朱水をそんな目で見る事など絶対にできない。

「ふふ、冗談ですよ。やっぱり予測していた通りの反応をしますね」  
で、朱水は笑うし。

「有、明日からはその力を確立するために練習しましょう」

門まで見送ってくれた朱水が急に声を低くする。私に問いかけるでなく、誰にも告げる気の無い言葉のように彼女は言った。

「ねえ有、貴女は一体何者なのでしょうね……」

私も同じような事を考えていた。自分には何故こんな力があるのか。

そして私達はいつも通りに別れた。

「今日からまた討滅を再開します。今日の夕方は空いていますか？」  
屋上での昼食後の訓練が終わった今、朱水がそう切り出してきた。  
その右手にはたった今私が創ったナイフがある。

いつの間にか朱水は昼休みにも魔というものに関わる話題を出す  
ようになっていた。それどころか昼休みに私の力の訓練をしようと  
言ってきたのだ。私はその事が少し悲しかった。食事中だけは流石  
にいつも通りにしてくれているので、わざと私がゆっくり食べてみ  
たりしたが朱水は私の考えが分かっているのだろう、朱水も少しだ  
けいつもより食べるスピードが遅かった気がする。

「一応これだけは確実に創れるようになったのですし、戦いに慣れ  
るためにも参加しなさい」

相変わらず朱水の口から零れる単語は物騒なものだった。一体全  
体ここ以外の何所の屋上でこんな物騒な会話が流れるのさ。

「わかったよ。いつも通り何もなければ大丈夫だよ」

「そう、だったら着替えてから屋敷に来てください。後これを……」  
そう言っただけでポケットから指輪みたいな物を取り出す。

「何それ？」

「私の髪の毛が埋め込んである指輪です。私と共に戦う際には必ず  
これを指に埋めておくようにしてください」

渡された物をよく見ると確かに髪の毛みたいなのが巻いてある。普  
通に想像する所の指輪と違って幅が広く、溝が掘ってあってその中  
に髪の毛が埋まっているという感じだ。

「でもどうして？」

「私が血を行使している最中に貴女が触れたりしてしまうと最悪の

場合、貴女が消し飛んでしまうのです。こればかりは試すわけにも  
いかないのでそれを渡しました。それさえ身に付いていたら貴女が  
巻き込まれることはありません」

「うん、わかった」

何とも怖い話だね。朱水が真剣な表情で述べるのはそれだけ本当  
の危険があるからなのだろう。

そうしてチャイムが鳴るまで再び訓練に励むのであった。

「今日はここよ」

そう言い、朱水は商店街で車を止めさせた。執事さんは車をゆっ  
くりと停める。

「ここは……」

私が初めて本当の朱水を見た場所に近い大通りだった。人々が行  
き交う歩道の向こうに小さな細道がひっそりと存在している。そこ  
にまた私は引き寄せられるかのように視線をくぎ付けにされる。

「そうですね。貴女が初めて戦いに巻き込まれた場所です」

そう言いながらも朱水は裏の方へと進んでいってしまう。その足  
は躊躇など皆無であった。

「早くなさい、有」

未だに車の横に立ち呆けている私を振り向く事無く見抜いた。今  
の朱水はどんなに呑気な人であっても息を飲むくらいにピリピリし  
ているのが容易に把握できる。

「うん」

あの日朱水と出会った場所に来た。そこには既に血などは無く、  
異臭も立ちこめていなかった。まるであの出来事が無かったかのよ  
うな状態になっていた。

「何もいないね」

朱水は無言で立ちつくす。何かを探すかのように頭を上下左右させていたが、しばらくして急に朱水が歩き出す。

「こつちよ」

やはり振り返りもせず勝手に進んでいってしまふ。土に交じった小石を踏みしめる音だけが響き渡る。どんどん緊張感が高まり、私の握りこぶしは自分ではどうしようもないくらい震えていた。

「ナイフをもう持っておきなさい」

路地裏からさらに裏へと進む道とは言えぬ細道を通ると森の中に広場があった。それにしても臭いがひどい。まるで地面が腐っているような臭いが充満している。

「やっぱり何もいないね」

しかし朱水は地面の一部を指さした。良く見ると言つのだらう。

「何？ これ」

そこには何かの跡が無数にあった。

「恐らく人間が襲われたのでしょう。相手は……そうね、四体くらいかしら」

朱水は地面の抉れている状態を見ただけでそんなことまで分かるらしい。

「だったらその人間は……」

「いえ、残留している気配がまだ濃いわ。まだ近くにいるはずな…

…！」

朱水が何かを感知したように途中で口を嚙くんだ。

「お出ましね」

そうして空から人間のようなモノが降ってきた。

「有、貴女はアレだけを相手して」

そういつて指すのは……

「あれって」

他の使者とは明らかに違う。肌が他のに比べてまだ人間の様に肌色をしている。

「今襲われたばかりの人間でしょう。まだうまく動けないはずですよ。貴女の相手なら丁度いいでしょう」

そう言うのと朱水は髪をかき上げ、襲い来る使者達を投げ飛ばした。投げられた使者は掴まれた部分を失っている。

「有、しつかりなさい。もう背後にいるのよ！」

朱水の叫び通りに振り返ると

ブウオン、と目の前を腕が薙いでいった。人間に限りなく近い使者が私に掴みかかっていたのだ。

朱水の言葉が無かったら私は今間違いなくその尋常じゃ無い殺意を籠めた目の使者に掴まれていたに違いない。いや、もしかしたら既に私の命は無かったのかもしれない。

初めて直面した『死』に、私の体は異様な興奮を覚えていた。勝手に体が動きその腕を避ける時に右足がその背中を蹴りつけていたのだ。

「つく」

しかし後ろに下がる時に足を木の根か何かに引っかけてしまったのだらう、私は間抜けにも豪快に転んでしまった。ただの女子生徒でしかない私の蹴り等では怯みもしなかった使者は即座に私の方へと飛びかかる。

「有！」

襲いかかってくる使者を睨み返そうとすると朱水の声が聞こえた気がした。一拍後お腹にとんでもない重みを持つ塊が沈む。口の中に酸っぱい物が広がった。間違いなくおなかのどこかが壊れた音がした。

「つこんのオ」

本能のままに抵抗しようとする両手は使者の顔を引っ掻いたが、





も行きついたのであった。

私は有を守ると決めた。しかし彼女がもし私の手に負えないような代物ならばいずれ削強班が私の知らない所で手を下すであろう。そんなことになるくらいならいっそ私の目の前で死期を看取ってあげたい。

一色朱水としてではなく、彼女の所属する地域の頭首としてそう考えての行為であった。有のためだけに無い、私のためでもある。

有の下へと駆け寄りたいが間を挟むように使者が立ちほだかる。私の力をもつてすれば普通はこのような雑魚は敵にすらならないはず。だが目の前の使者達は今までの雑魚とは違って簡単には消せなかった。消えたとしても何故か即座に復活してしまうのだ。最初に腕を消した使者には今では立派に腕が生えそろっているという状況である。

「邪魔よ！」

頭をつかみ、首を胴から引き抜く。しかしこの使者達はこの程度では消えない。一瞬にして頭が還元されてしまうのだ。私の手にはたった今引き抜いたその使者の頭がしっかりと存在しているというのに。

「何だっけ言うの！」

もぎ取った首を背後から飛びかかって来た使者に全力で投げ飛ばす。

ボグツと大きな音をしてぶつかった首は、その何倍もの重さを持つであろう使者を吹き飛ばした。

「しつこい！」

未だそこにいた使者からのびてきた腕を手首から消し飛ばした。だがまた復活する。

それにしてもおかしい。この使者達は私に触れられる。

でもこの使者の事を考えるよりも先に有を助けなければ……

『有を本当に失ってしまっ』

だが、振り向くと勝負は決まっていた。

使者は血の雨を降らし崩れて、灰となった。私はその光景に違和感を覚えたがそんな事を気にしている場合ではない。

「有、大丈夫？」

邪魔をしようとする使者の腕を潜りぬけて有へと駆け寄る。

しかし次の瞬間、私は久しぶりに『死』を感じ取った。

それは恐怖であった。

「ウアアアアアアアアアアアッ」

女の子が全力でやっと出せるであろう音量で有は叫んだ。

「有！ どうしたの？」

しかし私は有に近づかなかった。

否、近づけなかった。

本能が危険を知らせる。

アレはマズイと

チカヨルナと

さっきまで有がいた場所に、今は途轍もない殺気を放つ魔がいた。

「有……」

魔と目が合う。

もはやその目はいつもの有の冷たくも優しい眼ではなかった。

「まさか……覚醒？　でも何故今頃……」

私の声を聞いた有は森の奥へと消えていった。

私は追うことさえも思いつかなかった。

## Prophecy

暗い部屋に二人の男がいた

「どうやら目覚めた様だが、少々早すぎはしないか？」

老人は眼鏡を外しながら背後にいる青年に語りかける

「時間は関係ありません。生まれた結果のみが世界に関わるのですから」

青年は目を閉じながら応えた

「ふむ。しかしやはり解せぬよ。何故……」

「『世界が神を否定した』、ですか？　世界が要求するのは常に『均衡』です。たまたま神が邪魔になったのでしょうね。ですから大昔、我々から神を奪ってしまった」

青年は瞼を開く

そこにはただ、黒い玉が収まっていた

「私はそうは考えぬ。神こそが世界を否定したのだ。それ故に我らは今、神の支配下にはいない」

老人は続ける

「アレが世界に干渉されるようなモノでは困るよ」

「そうでしょうか？ 僕は神自身が世界をそのように創ったと思いますすがね」

老人は振り返り青年と同じくただ黒いだけの目を見開いた

「しかし面妖なものよ。『創造』と『破壊』が同じ地より生まれるとはな」

「おや、尼土様は何処に？」

車を走らせてきた智爺はやはり予想通りのことを聞いてきた。当たり前前だ、横に有がないのだから。

「恐らく覚醒……よ」

私の内情隠しきれない面持ちで彼は即座に悟る。

「あのお年で、ですか。あの位の年齢までに覚醒しなければ一生覚醒することはないものと思っておりました」

「ええ。状況の所為でしょう。今まで人として生きてきたのですから」

「……と言うことは」

「『血』よ。それも恐らく自分が他者に流させた血、かなり危険な要因とされているあれね」

しかもあの歳、今まで抑えられていた欲望が暴発しているってことね。

「爺。今日はもう戻ります」

「よろしいのです？」

「相手が相手よ。何故あのような力を持っているかはわかりませんが、相手にするならそれなりの覚悟がいらいます」

「………泉治せんじ様の時と同じなのでしょうか？」

智爺はその言葉に私が強烈に反応しないかと声を細める。

「………そうよ。でも結果は変えてみせます。有は必ず生かします」  
有は私が守ると決めたのだから。

「わかりました。どうぞお席へ」

私は車に乗り込み、発車の揺れに身を委ねる。

「尼土様の例の件ですが……」

私が無言で窓ガラスを爪で弾いているのが気になったのだろう、  
智爺はそう切り出した。

「はい」

「やはり何者かが弄っていたようです」

「そうですか……まあ現状では予想通りとしか言えませんね」

何にせよ今はまだ情報が足りなすぎる。

智爺はその後も有に関する情報を報告してくれていたが、今の私の頭には殆ど残る事は無いだろう。

家までの時間の中、有のことをずっと考えていた。

『目覚めの先に』

「此所ね」

月下の森の中にある大きな廃屋の前に一色朱水は立っていた

「全く、こんな禍々しい殺気をまき散らして」

壊れかけの門を開くとそれは大きな音を立てて倒れてしまった

「これで削強班に狙われたらどうするのよ」

外観から察するに住んでいた人間はなかなか裕福だったのだろう

「私の気も知らないで……」

ドアを破壊する

中はやはり暗く、そして広がった

朱水は薄暗い城に吠える

「有！ いるのでしょうか？ 出てらっしゃい！」

しかし応える声は無かった

一色家と同じくらいの広さを持った廃屋は、まるである日突然住民が消えたかのように生活感が残っていた

「有？」

リビングのような部屋に着いた

「変ね……」

まるで迷路のようだ

殺気は感じているが、その本人の気配がつかめない  
今までに複数の部屋を探したが朱水はひたすら殺気を感じ取るだけであった

「やはりアレは合っていたようね」

朱水は有と初めて言葉を交わした時にある違和感を覚えた

そして尼土有を深く知り始めるとだんだん理解してきた

「まさか『精神の壁』まで創っているとはね」

尼土有は目に見えない壁をも無意識に創り出している、朱水はそう考えていた

そもそも壁という言葉すら適応されない物なのかもしれない

それは物質ではなく、存在においての壁であった

「周りの人間が有に興味を持たないのも納得ね」

人はたとえ視界に入っても関心が向かないと記憶できない

足元の小さな蟻に気付かない、つまりそういう事だ

足元の蟻の存在を肯定して初めて人はそれを記憶する

恐らく有の壁は人の関心を殆ど弾くのであろう

故に人は有の存在は認めても、関心は向けられない

「だから……私なのね」

しかし一色朱水の力は『破壊』

その壁は朱水により無意識に破壊されていた

有意生物である魔では決して不可解な事ではなかった

故に一色朱水は尼土有に、尼土有は一色朱水に興味が持てるのであろう

朱水が近くににいるのなら人間でも有に関心が持てるのだろう、有を初めて見かけた次の日に2年4組の生徒と有についての話をしたのだからそう考えられる

「有……私は嬉しいわ」

裏庭らしき草地へと出る

「貴女に出会えたこと、貴女と話せることが」

廃墟の奥にある道場のような建物へと草地を進む

そうしてソレは現れた

草地を覆い尽くすかのような無数の影

月光を浴び、薄い光を纏いながら現れたソレは

「有、貴女らしいわ……これが貴女の心なのですね」

ソレは水晶のような茨であった

何者をも近づかせまいと

ただソレは

現れた

「ほんと貴女らしい、不器用な姿ね」



そうして魔と魔の殺し合いが始まった

「ッシ」

襲いかかる茨の鞭を後方に跳んで避ける

前と左右は完全に進路ふさがれている

『ビュンッ』

朱水の周りで風を切るような音が巻き起こる

直後、朱水の右側から無数の棘が襲いかかった

それは朱水を掴もうとしているのか、直前でしなり朱水を覆うように曲がった

棘だらけの蔓に掴まってしまったら魔と一溜りもない

靈力にも限界があるため有の姿をまだ確認していない状況で使うのは危ぶまれた

朱水は地を蹴り茨の隙間を潜るが避けきれず、思わず腕で受け止めてしまった

「っ痛ッ」

体の自由を奪う程の痛みなど久しぶりに感じた

腕からは血が勢いよく流れ、空中に飛び散る

「まさか創造物に動きまで与えられるなんて」

朱水は傷ついた右腕に意識を集中させる

「益々神というモノに近づいていく感じね」

朱水の魔としての、鬼と呼ばれる種族のポテンシャルにより血は止まった

上から襲いかかってくる茨の高波に隙間を見つけ跳びかかる

通り抜けた途端目の前に第二波第三波が突っ込んでくる

避けられる様なものではなかった

「ッシイ！」

右手を前に、次々と襲いかかる茨の鞭を破壊する  
温存など甘い事を言っている場合ではない

目の前の致命的な波の連続は既に空中にいる朱水には避けられる  
術が無いのだった

霊力を纏う

朱水を捕らえようと絡まってくる茨は次々と消えていく

しかし全てを消すことは出来なかった

「キヤアアッ」

地面に叩き付けられ思わず悲鳴が出た

その瞬間、茨の動きが止まった

「何？」

朱水はその隙に立ち上がる

しかし前に進もうとした途端、また茨が襲いかかってきた

「……まさか私の声？」

今度は左から地面を這うように茨の波が来る

砂を巻き上げて走るその様は一つ一つが俊足の蛇であった

それを鬼の体が許す限り全力で跳び越す

高く高く跳び幾つもの波の山を越える

「まだ……少し意識があるのですね」

着地と同時に霊力の一部を開放する

地面が大きく抉れる

着地地点にあつた茨はたちまち消えとんだ

元より無から生まれたモノ、還るときもまた無へと戻った

その勢いで前方の茨へと突き進む

今度は全方位から棘が襲う

当然だ……茨のまつただ中に突っ込んだのだから

腕に何度か棘が接触したが今の朱水には些細なことだった

「待ってなさい……有」

血まみれの鬼が笑う  
また大きな跳躍

遠い円月を背にしたその魔は、命の美を全身で表した綺靡きびなる鬼であつた

「ハアアア！」

一気に屋根へと跳び掛かつた鬼は屋根を破壊し内部へと降り立つた敷き詰められた茨が朱水を避けるように退く

「見つけたわよ、有」

朱水とは反対側の壁際に、尼土有だつたモノは立っていた

しかしその目は一色朱水を捕らえることなく宙を見つめている

何も見ていない目

その冷冷な瞳は床を覆う茨のほのかな光を映し青白く輝いていた

朱水が足を踏み出す

途端、新たな茨が現れる

それは今までのとは少し違っていた

高い天井にまで届く透明な茨の壁が有を内包していた

まるで有を包み隠そうと

まるで有を包み守ろうと

「ああ、そういうこと……」

朱水は跳躍準備の姿勢をとる

「つまりソレが貴女の心を守っていたのね」

目に見えない茨の壁を通れるのは認識くらいなのであろう。

人間が尼土有に対して視線を向けると、有に向かつて興味などの念が飛んでいくが棘に引っかかり最後まで届くのは認識だけ。

それ故に人は有を気にしない。

「でも私は違う」

一気に跳びかかる

「私は有に近づける」

無数の茨の矛が頭上より襲いかかってくる

「私は有と話せる」

その茨の棘を踏み台に器用に上へと上る

「私は有に触れられる」

そのまま天井へと跳び上り容赦なく屋根を破壊する

破壊した屋根に空いた大きな穴から月光が有を照らす

光の柱の中、水晶に囲まれた少女が朱水の方へと顔を上げた

朱水を蔓が囲む

落ちる朱水はその中の一本に着地せざるを得ない

着地と同時に次の足場を探すが既に視界が塞がれていた

左から棘が迫る

朱水はそれにあえて飛び込んで破壊する

同じ場所にて応戦してはじり貧になる事くらい明確だったからである

アレがあれば……、朱水は焦りながらも逐一動く茨の隙間から有を覗き見ていた

消えた茨の先にはまた棘の海が漂っていた

折り重なって迫る波を細かく破壊しながら重力に身を任せて落ちる  
しかしその物理現象は止まってしまった

朱水は自分が宙で止まっている事に気付くと即座に振りかえったが遅かった

足に絡みつく背後から来た一つだけ細い蔓によって朱水は捕らえられたのだ

その蔓には棘が無く他のと比較してひ弱な印象を与える

しかし朱水はその足を掴む水晶の恐ろしさを知る

壊れないのだ

この前の使者と同じ、否、今度は壊れるそぶりすら見せない物であった

どうにかして足から外そうと体を曲げたがそれよりも早く他の蔓が動いた

一本一本左右交互に茨が迫る

それは明確な意思を持っていた

明らかに朱水の注意力を攪乱しようとしている

それは組織的に狩りを行う獣のような動きであった

ついに朱水の体に深く棘が突き刺さった

その肉を引きちぎろうとする様な一撃は少女の痛覚の訴えを木霊させた

その叫びを聞いて周りの細き獣達は興奮したかの様にうねる

狂う蔓はとどめを刺そうと次々と朱水に覆いかぶさる

何とかそれを次々と殺すが次第に追いつかなくなり肌には幾多の傷が生まれた

例え傷が即座に癒えたとしても失われた血は直ぐには補えない

我が身の状態を確認しようとはほんの一瞬気をそらしたのがいけない

かった

朱水を押しつぶすように目の前に棘が迫っていた

朱水は反射的に右手を盾にする

鋭い棘が手を貫通して目玉すれすれで止まった

「……………っ」

声にならない声を上げ苦しむ

顔に赤い血が棘伝いに滴り落ちた

その顔は苦悶に満ち涙が流れていた

自由な足を使い手から茨を蹴り離すが発せられる痛みは生命の危機を訴え続けている

それでも、ふらつく意識の中でも朱水は有を瞰視<sup>かんし</sup>する

もつと近づかなくては

力を振り絞って体を折り曲げ太ももへ手を伸ばす

スカートから引き抜かれたその手には以前有に見せた小刀が収ま

っていた

緊急時用に常に携帯している唯一の武器であった

それを自分が空中に止まっている要因である茨へと突き刺す

霊力が効かない細い蔓はその小さな刃をあっけなく受け入れ一気に裂けてゆく

字のごとく身を裂くような痛み<sup>に</sup>苦しんでいるのか、朱水を捕らえていた力は緩み壁に投げ飛ばされた

「クウウツ」

だが朱水はその壁を縦に踏み台とし、有に向かって斜めに急降下した

きつと有に近づける最後のチャンスだ

もう理性がもたない

茨が、向かってくる敵に対し左右から掴み掛かるうと分かれる  
その隙間から朱水は有を確認する

「覚悟なさい……」

朱水の目は月明かりに照らされた有を捕らえる

「これは……」

その目はそのまま彼女の手を探し

「私のことを……」

今あつて欲しい物を探し

「少しでも忘れた……」

そして左手の指にソレを見つけた

「お仕置きなんだから！」

その鬼の顔は満面の笑みだった

「貴女の天辺てっぺんにいる者の力を魅せてあげるわ」

鬼が全力を出し、

建物ごとあらゆる物を巻き込み、  
『破壊』した

建物があつた場所には一人の少女が、もう一人の少女の目覚めを待っていた

その顔は母のように暖かく、優しい顔だった

風が頬をくすぐる度に少女は目を細めた

クレーターの様に大きく抉れた大地にいるのは二人だけであつた

「っ」

寝ていた少女が目を覚ました

「こんばんは」

その少女に黒髪の少女は優しく語りかける

「……………朱水」

「気分はどうですか？」

黒髪の少女はもう一人の髪を優しく梳く

「ゴメン……………」

「覚えていて？」

「うん。何となく覚えてる。私が朱水を傷つけた」

「そうね。でも構わないわ」

「構うよ」

「あら、どうして？」

横になつてゐる少女は自分の手を顔の前にやり、眺める

「あの時の私、朱水を殺そうとした」

「でしょうねえ。でも、あの程度で殺やられる朱水さんじゃなくてよ



「？」

そう言い、黒髪の少女はその手を取り、甲に口付けをした

「ううあ」

「あら、嫌でしたか？」

「ぜ、全然、全然！」

「ふふっ」

そうして二人はしばしの間二人だけの世界に浸っていた

「アレは何なの？」

未だに横たわっている少女は訪ねた

「覚醒、そう呼ばれています」

「自分が怖かった。何もかも自分の意志とは関係なく体が動いた」

「……仮初めから目覚める、だから覚醒。枠の安定化前の一番不安定な時そのような現象が発生しやすいのです。多くの魔が一度は通る道なのです。アレこそが私達が世界に作られた証拠なのです」

「それにあの力……自分でも訳がわからなかった」

「そういうものです。貴女が悪いのではないわ、有。私だって覚醒したときは自分を抑えることが出来なかった……」

「朱水も？」

「……はい。気にしないで、有。私は有がまた一步近づいてくれたみたいで嬉しいわ」

そう言って黒髪の少女は空に浮かぶ満月を見上げた

それにつられるように横になっている少女も月を見上げた

「綺麗……だね」

「ええ。……不思議ね」

「何が？」

「どうして世界は私達に人間達と同じ美覚を与えたのかしら？」

「どうだろう……ふふっ、わっかんないやあ。朱水にわからないこ

とが私にわかるわけ無いよ」

そうして少女は上半身を起こした

「……………アレ？」

少女の服はもう一人の少女がよく着ている上着だけであった

「……………嘘お」

「お仕置きって言ったでしょう？」

「……………ひどい、ひどい」

少女は下着を隠すように手を置きながらも片方の手でそうなた原因を優しくたたいた

完全にいちやつきである

「下着まで消えなかっただけ幸運よ」

「……………ううウ」

黒髪の少女はその手を掴み優しく、しかし確りしっかと包んだ

「ありがとう、有」

「え？ 何が？」

「指輪よ。約束守っていてくれたでしょう？」

そう言っつてその指に詰められていた指輪を撫でた

「ああ。これくらい」

「それがなかったら……………私は貴女を殺すしか無かったのよ」

「……………うわぁ」

「だからありがとう、です」

「それっつて感謝する方とされる方が逆じゃない？」

「……………ふふっ、そうですね」

二人は森の中を歩いてゆく

「ねえ、有」

「何？」

「好き」

「……………ハイ？」

「好きよ、有」  
「え、え、えつと……うん、私もす、すき、好き……かな？」  
「……………」  
「いえ、大好きです！ 死んでしまっくらいに」  
「……ふふっ、冗談よ」  
「うええ？」  
「死なないでくださいね？」  
黒髪の少女はもう一人の少女を指さして笑っていた  
「ひどい……泣くほど笑わなくてもいいでしょ」  
「そうね。冗談が過ぎたわ」  
自分の行為の下品さを恥じて落ち着きを取り戻す  
「そっだよ」  
「でも、本当に愛しているわ、有」  
「……もうその言葉にはだまされない」  
「あら？ 『好き』ではなくて『愛している』よ？」  
「大差無いよ」  
少女はいじけた様に言う  
「そう？ 私は大差あると思いますが」  
「そ、その言い方は……」  
「何？」  
「さっきの言葉を保証しているって事、なの、かなあ……って」  
「ふふ、さあどうでしょうね？」  
一人は笑い、一人は赤面する  
「理由をくれたから……」  
「ん？」  
しかし黒髪の少女の言葉は続く事は無かった

貴女を私の近くに置く理由をくれたから。貴女のその強さが私の  
悩みの一つであるのと同時に今まで生きていた中で最大のご褒美な

のだから。

愛してるわ有

もう離さない

貴女は私の物

だから守り抜くわ

一台の車のヘッドライトが近づいてくるのが見えた

「うわあ。アレって執事さん？ 私こんな格好なんだよ?」

「大丈夫よ。確かに有の裸を他人に見られるのは癢しやくですけど、智爺はもう歳ですから」

「はっ、裸じゃないよ!」

少女は現実に対する最後の抵抗を言葉にする

「ああ、そうでした」

そうしている間に車の音が近づいてくる

「ねえ、有」

朱水は月を眺めながらポツリと呟く

「何?」

有はそれに月を眺めながら応える

「いつまでも友達でいてくれます?」

今度は有に視線を向ける

「……友達止まりが望みな?」

それに有が振り向く

その口は意地悪く歪んでいた

「……やるわね」

「お陰様で」

車が目の前で止まる

「お嬢様方、どうぞお乗りに」

「有の格好を見ても何も言わないなんて、やはり智爺は良くできた執事ね」

「心得ていますとも」

そう言いながら有にウインクをする

「あの、何か言ってもらった方が楽なんですけど」

「ム。それは失礼を」

「さあ、有、早く乗って。一応小母様には家に泊まっていると言いましたが、学校を無断で休んだ理由はまだ作っていないんです。それに私達がやらなくてはならない仕事はまだ一つあるのですよ？」

「……………そうだった。今から電話……………は、変か。どうしよう」

「だからこれから決めるのです」

「さあ、お嬢様方。日付が変わる前に屋敷に戻りましょう」

「ええ。出して下さい」

「はあ……………」

有は肩を大きく落とした

これから待ち受けるであろう未来を想像すると脱力せざるを得ないのだろう

朱水はその姿を見てクスリと笑うが、急に振り向いた有に驚いて目を丸くした

「何かしら？」

「私の事、好きだって言ってくれるんなら……………」

有は真剣なまなざしである

朱水はその様子に歩む足を止めた

「はい」

「だったらもう少しでいいから私と話す時は言葉を柔らかくして」

「柔らかく……ですか」

「うん。もっと友達みたいな言葉が良い。私、そうじゃないと何か嫌だ」

有の言いたい事は分かる、そう朱水は思った

「分かりました……いえ、分かったわ有」

その言葉に有の顔は晴れ晴れとする

「ありがとう！」

有が朱水へと跳びかかる、もとい抱きつくと、それを予期していなかった朱水共々地面へと転がってしまった

二人は土だらけのお互いを笑い合いそして暫らくの間見つめ合った

そうして有が車に乗り込んで車が発車した後、朱水は隣の有に向かって

「これからもよろしくね、有」と再び満面の笑みで言ったのだった

(第1話 完)

第二話 似て非なるモノ / 0 ～ 1

0

「……………」

何かがいる

「……………」

それは何をするでもなく

「……………」

ただそこに存在していた

「……………」

「……………」

「……………」

「ツツツツツツツツツツ」

それは雄叫びのようなモノを発する

それは闇に堕ちた影であった

1

あの日から殆ど日は経っていない。しかし私達の関係だけは少しだけ変化したと思う……否、思いたい。

（まあ、あの時の有の言葉は勢いの所為かもしれないですけどね）窓の外には蒼穹が広がり、その下には守りたい人が住んでいる町がある。遠くに太陽の光で眩しく輝く海が見える。

午前中はその景色をずっと見て過ごした。何をするで無くロッキングチェアの揺れを楽しみながら風と景色を味わっていた。思えばあの子達が生まれてからは大分生活にゆとりが生じている。平和だと錯覚してしまう様な時間を過ごす余裕などあの頃では思いつきもしなかったであろう。

うとうとと日光の温もりの中で眠りの波に吞まれようとしていたらドアノックの音が響いた。

「お嬢様、尼土様が来られました」

ドアの外から智爺が告げる。

「あら、突然ね。勿論お通して構いません」

日曜日のお昼過ぎから有が来るのは珍しい。来るときは午前からが多いのだ。一体どうしたのだろうか。

「こんにちはだね、朱水」

部屋に入ってきた有はいつも通りの髪型であったが、珍しくスカートであった。スカートをくしゃくしゃに握っているのは恥ずかしさの表れか。

「ええ、こんにちは。珍しいわね、制服以外のスカートだなんて。制服もズボンを選ぶようにして欲しいと言っているくらいなのに」「な、何となく……朱水がいつもスカートだから真似してみようかな」

有は頬を桃色に染めながら苦笑いをする。恥ずかしいからそこに



はあまり触れないで欲しいのだろう。

「そうなの？ 似合っているわよ、有。これからも、たまにはスカートにしたらどう？」

普段から私服はパンツばかりの有のスカート姿は制服で見慣れているはずなのに新鮮だった。

「そ、そう？ 朱水が似合っつて言ってくれらなら大丈夫かな」

有は本当に可愛い。更に顔が真っ赤になった。

「保証するわ。で、今日はどうしたのかしら？」

恥ずかしさから視線を合わせないでいるまま有は今日来た理由を言う。

「水曜からテストでしょ？ だから一緒に勉強なんてどうかな？」

「勉強ですか？ もう終わってしまったのですが」

「終わったって？」

何かおかしいのだろうか、有は妙なことを聞いたかのような顔をした。

「だからテスト勉強を、です。後はその知識をテストまで維持するだけよ」

「それでどれくらい点数取れるの？」

「学年二位よ。本当なら一位を取れるのですが、一位は人間に譲るようにしているの」

二番の方が目立たなくて良い、それが私の考えである。私は立場上あまり人間世界で目立つわけにはいかないのだ。ついでに言う二番であるのは面目の問題である。流石に頭首である人物の成績が凡の凡であつたらいささか以上に問題である。もっとも、頭首の中で学校と言う機関に通った者など前例は無いのだが。

「スゴイ、ね……」

「貴女の勉強を見るくらいなら十分でしょうから、見てあげましょうか？」

しばし間が空いて、

「頼むよ」と、有は笑顔で言った。

有は完全に理系脳の様で、数学と化学は大の得意であるが一方で国語と歴史がてんで駄目である。古文漢文など既に読むだけで悪寒がすると言う。逆に数学になると教える事が無くすらすると数字を並べていき、間違いなど見つからなかった。化学も申し分無かったが、少々細かい性格な様で「どうしてそうなるか」を全て考えるため非常に時間を食っていた。どちらにせよ私は数学と化学の間はする事が無く有の真剣な顔を堪能していた。

「これくらいかしら。有、今日はこのくらいでやめにしません？」  
有が来てから三時間弱、有が考える事に疲れてきた頃を見計らってそう切り出す。有は化学だけは一人でやった方がいい。他人がいるとおそらく彼女の邪魔になるだけであろう。

「うん、そうだね。ありがとね、朱水」  
有が椅子の背もたれに寄りかかって大きく伸びをするのを見るだけで、私はこの逆家庭教師とも言うべき行為に対する十分な報酬を得た気分になる。

「これからも見てあげますから遠慮無く言ってね」  
「うん、ありがとう」

さて、勉強だけで有との時間をつぶすのは勿体ない。

「ねえ、有。貴女これから暇かしら？」

「日曜だからね、何にもないよ」  
伸びたままの姿勢で返事をする。その姿を見ていると私の何所かに熱がこもった気がした。

「でしたら散歩にでも行きませんか？」

「散歩？ 何所に行くの？」

「そうですね……公園はどうですか？」

私の記憶では隣の駅の近くに大きな自然公園がある。あそこなら

近いので明るい内に辿り着けるだろう。

「公園って近くの大きなやつのこと？」

「はい。着替えてきますから待っていてください」

「う~~~~ん」

大きく伸びをする。此所の公園に来るのはかなり久しぶりだ。

「有、今の顔は猫みたいでとても良かったわよ。写真に撮っておきたいくらい」

そう言い、朱水はクスクスと笑う。それなら朱水の方が猫っぽいと思っただけどねえ、吊目だからね。

「え~~~~、やめてよ。それに写真って苦手だし」

「あら、どうして？」

「何で写真にしてまで思い出を残さなければならないのかな、ってよく思う」

「忘れたなら忘れたでいいじゃないかな。忘れる程度の事だっつてことなんだから。」

「難しいわね。『何故写真を撮るのか』と言う問いなら、薄まる記憶を確かにするための一種の鍵にすると答えるのですが。思い出を残す理由を聞かれるとなると……」

そうして沈黙すること数分、朱水の唇がゆっくりと開かれる。

「有にはどうしても残しておきたい思い出はないのかしら？」

「う~~~~ん思いつかないなあ。ほら、私は変わってるから」

普通は家族などの思い出があるはずなのだろうけど、私はそんな物持っていない。

「そう、私にはあるわ、残しておきたかった思い出が。その価値に失ってから気づいたのよ」

「やっぱり家族？」

家族という言葉聞いて朱水は時が止まったように固まった。

「……………ええ。そうね、有、貴女になら話しても良いでしょう。いえ……………有、貴女だからこそ知ってもらいたいわ、私が犯した事を」

朱水の目は地面を凝視したまま動かない。でもその目は絶対に地面を見ていなかった。そのただならぬ様子に私は一瞬朱水が朱水で無いとすら感じてしまった。それはあまりに『少女』と呼ぶには相応しくない雰囲気醸し出していたから。まるであらゆる経験を積んできた御老人の様な、そんな大人びた雰囲気だった。

「うん。聞かせて欲しいよ、朱水」

朱水は何かを吹っ切ったのか、やっと私と目を合わせてくれた。

「……………私の両親はとても優れた魔だったわ。お父様はとても立派で、お母様はとても優しくかった。親として愛したし、同じ魔として尊敬していたわ」

ただお父様は霊力の方には恵まれなかったのですけどね、と朱水は苦笑いで続けた。

「好きだったんだね」

朱水の顔はとても曖昧な表情を作っていたけど、優しさを含んでいた。どれだけ両親が好きか分かる。

「ええ。お父様の背中はただただ広いと感じていたわ。私にとって良き親で、同時に超えるべき目標だった。お母様はとても聡明だったわ。瞳には何時も優しさが表れていて、女として尊敬していたわ」  
「そうなんだ」

朱水は近くにいる親子らしい人達をじっと見詰めている。あの家族に朱水達家族を投影しているのだろうか。

「でもそれは消えてしまったの。いえ、半分は私の所為で消してしまっただよ」

「……………何があったの？」

「私には弟がいたのよ。一つ下の、とても優しい、自慢の弟だったわ。決して乱暴なことをしない、魔としては情けない、でも家族としては愛くるしい弟だったわ」

「今は……いないの？」

朱水の家に行ってもそれと思われる人物には一度も出会わなかった。

「ええ。確か私が十二歳だった頃に、離別があったの。家族全員がすれ違う、ね」

机で本を読んでいるうちに寝てしまったみたいだ、廊下のドタバタという騒音で目が覚めた。

大きな足音は私の部屋に近づいてきた。足音が私の部屋の前で止まると同時にノックもせず智爺が入ってきた。

「お嬢様、大変です！ 屋敷から一時的に避難しますよ」

「智爺、何をそんなにあわてているの？」

「泉治様が覚醒なさいました」

「あら。めでたいことなのでしょう？ 何故そんなにあわてるのです？」

智爺の様子は普段とは違っていた。私は覚醒と言うものをよく分かっていなかったが強い魔は必ず通るものだと思っていたので泉治がそれを迎えたと言う事はつまり強い魔の仲間入りをしたと言う事なのだろう。素晴らしい、そう思った。

「お嬢様はまだ覚醒をなされていらっしやらないのでしたね。覚醒とは、魔としての力を確立すると必ず起きる、避けることが出来ない試練なのです。泉治様は覚醒の際に自我を失われてしまいました。このままでは屋敷は危険です」

「お父様とお母様は？」

私にはよくわからない。でも智爺の顔を見れば本当に危険なことが我が家で起こっているという事だけは容易に理解できた。

「泉治様を……剪滅しようとお二人で戦っています」

え？ 今智爺は何て……？

泉治を……………殺す……………？

そんな……………嫌だ……………嫌だ嫌だ

「やだ……………そんなの嫌だよ！ 泉治は、泉治は家族なんだよ？」  
……………それでもです。放っておけば大きな厄災に成りかねません。だからこそ家族である御両親様が泉治様を殺すのです。それは魔の掟、ましてや頭首様であります。守らなくてはならないのです。私はお嬢様の護衛を任せました。屋敷の者は私以外皆、避難しました。さあ、お嬢様も」

そう言つて、智爺は手をさしのべた。

「嫌だ……………泉治は……………私の弟なんだから」

泉治は私の大切な家族の一人だ、それなのにお父様とお母様が泉治を殺すなんて。そう思うと自然に涙があふれてきた。

「お嬢様！」

「ヒッ」

智爺が今まで見たことがない顔で怒鳴る。

「泣いているだけでは何も出来ませぬ。辛いのはお嬢様だけでは無いのですよー！」

「……………」

「お嬢様までお亡くなりになったらお二方は何を愛して生きられるのです？ お二方のためにも生き延びてくださいまし」

「……………」

「さあ」

しかし私はその手をすり抜けて開いている扉へと走った。

「なりませぬ！ お一人では危険です。お戻り下さい！」

廊下に出た私に追いつこうと、智爺は老人とは思えない速さで走ってきた。しかしその手は私に届くことはなかった。

「クッ」

智爺の目の前の壁が吹き飛んだからだ。それを智爺は老体が許すだけの反射神経で避けようとしたが、足に塊が当たってしまった。

「智爺、ゴメンなさい。私、泉治とお話しなくちゃ」

痛みで立てなくなつた智爺にそう叫ぶ。

「なりませぬ！ 危険です、お戻り下さい！」

しかしその言葉が幼い私を止めることはなかった。大きな音が聞こえた方へと進んでいつてしまった。

「……………」

廊下には誰もいない。壁の所々に大きな穴が開いていた。こんな力をお父様達は持っていない。ならば……

「泉治のバカア」

どうして、どうしてよ。何でお父様やお母様や泉治が殺し合わなきゃいけないのよ。

「バカ バカ 馬鹿 バカア！」

自分がさつきから口に出している言葉は、頭が考えていることは全く関係のない言葉だった。まだ十二歳の子供の頭では受け止められなかった。

廊下の先から炎が迸こぼれるのが見えた。アレはお父様の炎だ。

「お父様あ！ 泉治は何所に……………」

角を曲がって見えたモノは変わり果てたお母様の死体と、疲れ果てた顔をしたお父様と、それと、それと……

「泉治……なの？」

そこには異形がいた。変わり果てたその姿は、見た者に恐怖と死のイメージしか思いつかせない、そんな姿をした、鬼だった。

「やだよ………こんな泉治じゃないよお………こんな………夢だよお」  
鬼はこちらに気づいたのか、その紅い眼まなこを

「まともな声量ではない叫びと共に向けてきた。」

「ヒィ」

私はそれだけで頭が真っ白になり、床にへたり込んでしまった。

「朱水！」

鬼との間にお父様が割り込む。

「貴様は何者だ？」

お父様の炎が鬼に叩き付けられる。

確かにそれは泉治のとは明らかに違う存在を帯びている。しかし……

「！」

鬼は強烈なその熱に身悶えたがすぐにもちなおした。

しかし姿は違えど存在の極一部に泉治を微かに感じ取れた。

「！」

鬼が壁に触れる。壁に光る亀裂が走った。

「いかん！」

お父様は私を抱え、後ろへ跳び退く。

私達がさつきまでいた場所には壁の残骸が転がっていた。鬼が触れると壁が内側に吹き飛んだのだった。

「朱水、お前は逃げなさい」

「泉治は……どうしたの？」

「わからない。だがアレはお前や私が知っている泉治ではないと言うことは確かだ」

「じゃあ私達の泉治は悪いことなどしてないのね？」

その問いがあまりに予想外だったのだろう、お父様は状況に合わない笑顔を浮かべて、

「ああ、泉治が悪い子なわけ、ないだろ？」と、私の頭を優しくなでながら言った。

「うん」

嬉しい。私達の泉治は、泉治のままだ。ただそれだけのことが何よりも嬉しかった。

「さ、逃げなさい。アレは私が対処する。出来るなら泉治を取り戻す」

そう言いながら私を鬼とは反対側の方へと押した。

私は走った。お父様なら泉治を戻せるかもしれない、その思いが



私を走らせた。

母親を失った事を忘れていたのか、わざと記憶しようとしなかったのか、それは過去の一色朱水しか知らない。

「私が屋敷から飛び出して智爺達の所へたどり着いた瞬間、大きな爆発が起きたの。何時間かして若い使用人が様子を見に行つたときには全てが終わっていたわ」

朱水は淡々と述べる。その顔は俯いているためよく見えない。

「終わっていた、って？」

「お父様だけ生きていたわ。そしてその脇には元の容姿の泉治の死体があった。お父様はすぐに我が家縁ゆかりの病院に入院したわ」

確か朱水の父親さんはもういないはずだから……

「いえ、簡単な入院よ。意識がもうろうととしていたけど命に別状はなかったの。でもこの話には続きがあるの。屋敷は完全に元通りになって、情報操作も完璧に終わった。そこで屋敷のみんなでお父様を喜ばそうと、ちよつとした退院パーティーを開こうって事になって、私はお父様の帰りを今か今かと待ちわびていたわ。でも結局パーティーは開かれなかった。帰ってきたお父様はまるで別人で、今までの優しい頭首ではなかった。別に冷たくなつたと言うことでもないの。ただ、パーティーを開くことを拒否しただけ。それでも皆が口々に何かが変わつたと言っていたわ。そうして帰って早々自室にこもって何かをし始めたの」

「何を？」

「……ねえ、有。今から話すことは貴女が私を憎む理由になるわ。」

でも私は貴女に話さなければ気が済まないの。いえ、違うわ。貴女に罰せられなければならぬのよ」

「智爺、どうだった？」

「どうもこうも、お顔を見せられることもありませんでした」

「私もあれから一度もお父様としゃべってないわ。一体何をやってるのかしら」

お父様は帰ってからまともに顔を出すことはなかった。食事は智爺に持つてこさせ、トイレとお風呂は自室にある物だけを使うようになった。

「いつもだつたらお父様が解決してくれますのに」

あの日から数ヶ月が経った今、一族は大きな問題を抱えていた。この地域の魔族が襲われ、皆殺しにされる事件が数回起きたのだ。ここらを治めているのは我が一族であつて、これ以上犠牲が増えることの無いように対処しなければならぬ。

「私が代わりを務められれば良いのに」

私にはまだ魔としての力は確立していない。だから代わりたくても代われない。

でもそれ以上に気になることがある。事件が起こった日には必ずお父様を見たという証言が出るのだ。それ故にお父様こそが一連の事件の犯人だという噂が立ってしまったている。

信じたくないが、毎回言われるとそうは言っていられない。

「仕方ないわね。今日の所はまた、保留にしておいて」

私にはどうしたら良いのかわからなかった。

その夜、急に目が覚めた。周囲に物音はなく、私の睡眠を邪魔だてするような物は存在しなかったはずなのに。

私は無性に夜空が見たくなかった。窓を開け、首を外に突き出すとそこにはとても綺麗な星空があった。ふと、視界の隅に何か動くものが見えたので視線を下に向けると人影があった。

（お父……様？）

門と屋敷との間に照明があるが、顔が見えるほど明るく照らしているわけでは無い。お父様の、としか思えない炎が見えたのだ。

「こんな時間に……」

そのとき私は例の噂を思い出した。もしかしたらお父様の後をつければ真実が見えるかもしれない。

私はそう考え、護身用の水晶のナイフを身に隠し、追おうと急いだ。

「お嬢様、何処へ？」

なるべく足音立てずにいたが、運悪く玄関で智爺と出会ってしまった。智爺が私にそんな危険な事を許すはずが無い。しかしこの時間だ、外出する嘘の理由など搾える事は出来ないと悟り、真実を告げた。

「お父様が外へと向かうのが見えたの。何をしているのか、少なくともそれだけはハッキリさせなくては」

すると意外にも智爺は手にしていた懐中電灯とは別の、予備の懐中電灯を私に渡してくれた。

「私ではお嬢様を止めることは出来ませぬ。どうか、何が起ころうともご無事で」

「え、ええ。もしあの噂が真実なら、お父様を止めなければ」

そうして私は闇へと走りだした。智爺は心配そうに私を見ていた。

「この近くかしら」

やはり夜に人捜しをするのは難しい。初めの方は辿れた魔の残り香も、既にかなり微弱になってしまっていた。

「どうしましょう」

このままではだめだ。お父様がやっていることをこの目で確認しなければ帰れない。

その時、近くで強烈な霊力を感じた。

「こつちね」

すぐに走り出す。既に私はその先に危険が待ち受けているのを察知していた。

「お父様なの？」

たどり着いたのは周りに民家が無い、やや大きな家だった。

「お父様がこんな事を？」

家は燃えていた。だがまだ消せる規模だ。

表札を見ると『尼土』と書かれていた。確か一族の支配下にそのような名前があつたはず。

私は中へと躊躇せず入った。それどころではない、

「止めなければ」

「お父様！ 何所ですか！」

私の家ほどではないが広い家の中を走る。

「その声は、朱水様ですか？」

お母様と同じくらいの年に見える女性が隅から現れた。

「この家の人ね。何が起きているの？」

「一色様が……貴方様のお父様が夫と……」

二の句は無かった。言いたかったのは恐らく私に告げるには憚はばれる言葉、『殺し合い』等であろう。

「何故？」

「わかりません。急に窓の外が明るくなり、次の瞬間炎を纏った一色様が窓を割って飛び込んで来たのです。夫は娘の安全を確保するのが何よりだと私を逃し、一人で一色様と対峙している最中です」  
「どうやらあの噂通りだったのね、本当にお父様が犯人だということだ。そのような事実があるなら否定は絶対にできない。」

「……………わかりました。一族の掟通り父を剪滅します」

しかし奥へと向かう私の手を女性は掴んで私を止めようとする。

「お待ち下さい。朱水様はまだ覚醒を迎えていらっしやらなかったはずです。危険です、ここは私達夫婦にお任せ下さい」

「そうはいかないわ。たとえ力が無くとも私は父を止めなければならぬ。掟ではそうなっていたはずよ？」

その言葉を聞くと暫しの考慮の後、女性は私を解放してくれた。

「……………わかりました。なら私の後ろから付いてきてください」

「お願いします」

女性は私が前に出ないようにか、手を後ろにいる私の方に差し向けながらゆっくりと進んでいった。私もナイフを構えてそれに従った。

向かった先では死闘が繰り広げられていた。

「お父様……………」

久しぶりに見るお父様の目は狂気に満ちて、その体には炎を纏っていた。対峙する男性は魔としての存在が希薄だ。でも…………

（戦えている）

叩き付けられる炎を纏った拳を、手にした日本刀でいなす。拳は金剛の様に硬くなっているために刀刃では切れないのだ。

「夫と私は殆ど人間と変わりません。娘もそう。でも夫は刀を使った靈力行使だけは優れているのです」

覚醒した魔が武器を主として戦うことは少ない。本来、魔は獣と同じような存在なのだから。

「私もそう。我が一家は希有な能力の血筋を伝える家系なのです。そのため体は人間に近くとも魔の自覚を伝えている数少ない家系であります」

そう言いながら女性は男性に向かって手を向ける。

「治癒……他者への干渉……」

「はい。私はそれだけに特化した魔です」

見る見るうちに男性の、所々にあつた火傷が消えていく。他者への干渉、それは魔の史上特に希有な力の一つだ。霊力と言うのは大体が地球、つまり自然に対する作用であるので、対象が個人というのは珍しいのだ。

「朱水様。私達にもしもの事があつたら、蔵にいる私達の娘をよろしく頼みます。あの子は朱水様と同じ年、同じく覚醒を迎えていないのですが自慢の娘なのです」

さつき会つた時に履物を履いていたのは、娘さんを蔵に連れて行ったからなのだろう。

「わかりました。でも私も戦うわ。この水晶のナイフは特別な物であらゆる力を無力化する紋が刻まれている、世界に数個しか無い代物よ。これなら私でもお父様を止めることが出来るわ」

しかし女性はその言葉を聞いても、ただ悲しい顔をするだけだった。

「朱水様、一色様はもう元に戻ることはないでしょう」

そう、目の前で演じられている死闘を眺めながら言う。

「どうして？」

「アレは私が知っている一色様とは比べものにならないくらい鋭いのです。失礼な言い方ですが一色様の力はそこの魔と同じくらいだったはずなのですが、今のアレはここの魔では追いつけない強さを持っています。恐らくこの前の事件で何かあつたのでしょう」

その言葉は私の中にストーンと綺麗に入った。うすうす感じ取っていたが日に日にお父様の存在が濃くなつていく感覚があつたからだ。「このようなことをしたのです。現頭首である父の気が触れたなら

頭首の地位には私が昇るのでしょう？　なら私が父を……殺します」  
私はナイフを盾にしてお父様へと突き進む。

「いけない！」

男性が私の前に飛び込む。瞬間、大きな炎が床から舞い上がった。  
「つく」

私は男性に抱えられたまま壁へと吹き飛ばされた。質量を持った  
魔炎が簡単に男性を吹き飛ばしたのだ。

「危険です、朱水様。ここは私達に」

男性にも女性と同じことを言われた。

男性はまたお父様へと斬りかかる。

「嫌……嫌だ……どうして、どうしてよお」

何で……何で……何で……

「思い通りにいかないのよお」

私は家族で幸せに暮らしたかったただけだ。

この前は家族同士で……

「やめて、やめてよお」

今度は他の家族と……

嫌だ……嫌だ……こんな世界………いらない

そう、こんな世界要らないんだ  
だから……

「壊してやる」  
そうして私は『覚醒』を受け入れた

何もかも  
この目の前から  
消してしまえ

父だったもの、目障り  
だから消す

でも避けられた  
下半身しか消せなかった

体が熱い。自分の体が紫色の霧に覆われているのが視認できる。  
目の前から何かが消えていく。あらゆるもの、自分が消したいもの、  
消したくないもの、そして私の『すら……』

屋根が消え、窓が融け、壁が粉となり、家具が霧に変わり……

「いけん、朱！」  
うるさい

「そんな い！お くだ」  
煩い

「駄目、様も られ」  
五月蠅い

「げまよ」  
うるさいのが逃げる  
私は逃したくない

この『世界』を知った者は消さなければ



私以外の者がこの世界を知っているのは許せない

この世界は私の中だけに閉じ込める

誰も逃しはしない

自分で消さなきゃ気がすまない

だからその足を消した

今度は這いながら逃げようとする

だからその手を消した

だからその腹を消した

まだうるさいからその喉を消した

目障りだからその脊髄を消した

だから目を消した

だから髪を消した

だから歯を消した

だから

だから

消える 消える 消える 消える消えるきえるきえるきえる

### キエテシマエ

気付いた時には炎に囲まれた、何かがあったはずの窪地の中に一人の死に損ないと私だけがいた。

「お父様……」

目の前にある父だったモノは口から血を流しながら宙を見つめていた。彼には下半身が無かった。

帰ろう。どうせこの魔は助からない。この炎が全て消してくれる。

後ろへと振り返ったその時、魔が話しかけてきた。

「朱水……なのか？」

また振り返る。驚いたことにその魔は泣いていた。

「強くなつたな朱水。これなら一族を任せられる。でもね、朱水。

君はいけない事をした。私がしてきた事と同じように、いけない事だ」

「……………」

その瞳には以前のお父様の優しさが表れていた。

「わかっています。自分が殺したのだと」

「そうか。朱水、私の様になるなよ」

瀕死の魔は目を閉じる。

「お父様は何故このようなことを？」

その魔に対して問いかける。

「泉治をあんなふうにした奴を突き止めたかった。そのためには私の力だけでは到底足りない。だから……………」

なんて安直な発想であろうか。これが力無くとも広い領地を治めていた名頭首なのであるか……………私にはそれがどうしても許せなかった。

まだこの頃は魔の本性を一色朱水は知らなかったのである。

「他の魔から奪ったのですね。魔が他の魔を食らえばその存在の一部を奪い取れると伝えられているから」

「ああ。だが現実はその簡単にはいかない。私は魔を食らえば食らうほど霊力ではなく欲望が強くなっていった」

真つ赤な血を吐きながら魔は語る。それは恐らく相手が純血で無かったためだ。

「結局はただの道化へと成り下がったかな」

その言葉は別れの音を含んでいた。

「それでは」

また後ろへと向くと、足下に水晶のナイフが落ちていていることに気づき、拾う。

「その小刀は……私が唯一お前に手渡しできた物になるのだな。皮肉な物だ、ソレによつて殺されるなど……」

私の手にあるナイフをやや虚ろな目で眺める。

「いいえ。これはお父様の血を吸っていません。そうですね、これは私の宝物にします。それではお父様、永き眠りを」

「ああ。達者でな」

別れは呆気なかった。涙も不思議と流れなかった。

外に出ると辺り一面が真っ赤になっていた。周りの林も燃えているようだ。その幻想的な紅さに私の意識は削がれる。体がフラフラと揺れ始めた。だが帰らなくては。私はお父様から頭首の地位を引き継いだのだから。

「お嬢様！」

目の前で一台の車が止まる。智爺が運転席から飛び出てきた。

「すぐに消防車が来てしまいます。お話は屋敷に帰ってから聞かせていただきますので今はまず帰りましょう」

車の中に入ると意識がもうろうとしてきた。

ふと、窓に映る私の顔を見ると、蔵にいたらしい同い年の女の子を助けるのを忘れていることを思い出した。

「でも、あの火では助からないわ」

窓に映る顔に独り言で言い訳をした途端、私の意識はフツリと切れた。

「それが私と……親なんだね？」

朱水の話は終わった。

「ええ。私が貴女の御両親を殺したのよ。そして貴女……を助けられたのに、貴女を見捨てたのよ」

「……………」

何も言えない、何も言えないよ、朱水。

「貴女を初めて見たのは屋上で待っていた日の二日前なの。商店街で貴女を見たとき私は一目で貴女に魅了されたわ。気になったので次の日に貴女のことを調べさせてもらったら驚き、その女生徒は私が見殺しにしたはずの女の子と同じ名字じゃない？ その女生徒に惹かれるのも当然ね、私が殺した夫婦と同じ匂いがしたのだから」

「朱水……」

朱水の目から涙がこぼれ落ちた。

「ですから有、貴女は私を憎んでも良いのよ。いえ、それが当然なのですから」

どうして……

「どうして私に言ったの？ 言わなければ……………そのままですいられたのに」

自分が言ってる事がおかしい事だなんて分かっている。それでも言いたかったんだ。

「辛かったのよ！ 後悔さえしていなかった自分に！ 忘れていた事に！ 何より、何も知らない貴女を見るのが……………」

一番辛かったの、聞き取れない声で告げられた朱水のその言葉は今までの全ての言葉の中で耳に残った。

「初めて、初めて友達になってくれた人が、初めて好きになった人が有なのよ……尼土有以外じゃないのよ……貴女じゃなければこんなに苦しまなくて済むのに……………なのに……………」

朱水が泣いている。私の前でグスグス泣くなんて初めてだ。

私はそんな朱水を見て……………愛しいと思った。私は壊れてるのかもしれない、もしかしたら朱水に壊されたのかもしれない、だからそう思ってしまったんだ。

「朱水、泣かないで。私は気にしないから……………。今更恨めないよ……………考えられないよ、朱水を嫌うなんて」

それを聞いて朱水は一層泣き始めてしまった。流れる涙は服に大きな染みを作る。

「ごめんなさい、ごめんなさい……………有。奪ったのは私なの……………貴女から普通の幸せを奪ったのはあ」

それから朱水はずっとごめんなさいを繰り返していた。

「落ち着いた、朱水？」

「……………」  
朱水は俯いていてこつちを向いてくれない。

「ねえ、朱水。前に私に聞いたよね？ 朱水のこと好きか、って。私の気持ちは変わらないよ？ ううん、むしろあの時以上に好きになっちゃってるんだよ。私はもう朱水とは離れたくない……………それじゃだめかな？」

「有……………」  
こつちを向いた朱水の目は涙の所為で真っ赤だったけど、綺麗だと思えた。

「約束したよね？ ずっと友達でいるって。朱水から破るのかな？ それはズルいと思わない？」

「有……………」  
「ねえ、朱水。好きだよ？ うん、愛してる。だからそんなに自分を責めないで？」

「でも……………私」  
「一緒にいよ？ どんな時でも。朱水は私にちゃんと話してくれたんだもん、それだけで十分だよ」

「それでも……」

まだ朱水はグスグスしている。

「ああ、もう！」

朱水のそんな姿をずっと見るのは嫌だ。だから私はそうした。

「んっ」

「……………どう？」

されている最中は驚きのあまり固まってしまったが、私が感想を求めると途端に朱水は真っ赤になった。

「ど、ど、ど、どっつて貴女！ ど、どうして……」

「私は朱水の暗い顔なんて見たくない。だからした。朱水はやっぱり朱水らしい方が良く、そう思ったから」

「ど、どうしてそれがキスに繋がるのです？ そ、それも……口にだなんて」

良かった、朱水の顔にやっと明るさが戻ってきた。朱水はその顔が一番似合っているんだよ。

「嫌だった？」

いつかのような言葉を返す。

「嫌、だなんてことは」

あの時とは立場が逆だけど。

「さ、朱水。帰ろうよ？ まだ敵は消えてないんだから」

私は立ち上がり、朱水へと手を差し伸べる。

「もう。ええ、帰りましょう。やる必要がありますものね」

朱水はその手を取って立ち上がる。

そして私はもう一つだけ言わなくちゃいけない事があるんだ。

「朱水、朱水を許す理由はもう一つあるんだ」

「……………」

朱水は私の言葉を聞きもろすまいと口に注視する。

「前にも言っただけど、私って両親の記憶が何にも残って無いんだ。

『いたのかな？ いたんだろうね』って、その程度の認識で今まで生きてきたの。だから……こういうのは不謹慎かもしれないけど、

今更真相を知ったところで『朱水を怨めない』って言うのが本当の話なの」

「ごめ……」

「待って、話を聞いて」

私が朱水の口を押さえると朱水は力なく頷いた。

「怨まないじゃなくて憎めないの。憎まないじゃなくて憎めないの。朱水はこういっただろうね、『貴女が私を怨めないのは私がそうさせたからなの』ってさ。でもね、朱水は私の記憶をいじったわけじゃないんでしょ？ だから私はこの記憶に甘んじて朱水と一緒にいる事を選ぶよ」

「有……」

「好きだから、憎む事ができないから、貴女の近くにいたい。それだけの理由、だけど絶対の理由、だから朱水の近くにいたい」

「私も……私も有を失いたくない。自分への罰等ではなく本心から貴女を一生守りたい。だから、横に並ばせてくれてありがとう」

乾いた涙の跡はもう消えてしまっているけど、私の朱水に対する心は消えない。

「気にしないで、朱水。全て本心だから」

周りの人間達は私達を遠目に見てコソコソと噂話をしていて楽しそうだ。だけど私には恥ずかしさなど無かった。肩にかかる朱水の頭の重さがそんな些細なことを吹き飛ばしてくれていた。

好きだよ、そう呟きながら私は朱水を包むように抱いた。

朱水の髪は椿の香りがした。

そうして私達はお互いの手を強く優しく握りながら、また魔としての日常に戻った。

第二話 似て非なるモノ / 中話(1)〜2

N i g h t

そこは異国の地。荒れ果てた墓地に、放置された白骨化した骸。その目の無い眼が見ている空は稲光にしばしば照らされる。

何かいる

……だ

墓地に響く静寂の声。

王だ

稲光に照らされている墓石は怪しき声を放つ。

我らが王の

そこに声を出せる者などいない。

帰還だ

喜びの唄が聞こえる。

何かいる

王の帰還だ

地面が怪しく蠢く

喜べ、同胞よ

悦びの歌が聞こえる

機が訪れたのだ

地より木が、

憎きあの地に再び

白き木が、

王が再び



地中に埋められていた骨が、  
我らの王が  
木のごとく芽吹く  
それは言った

『我を祝福せよ』

2

「尼土様、今、お嬢様は他のお客様の接待をなさっております。ですが貴方様ならお通ししても構わないということになっておりますので、どうぞこちらに」

いつものように朱水の家に来てみたら、珍しく先客がいた。いつもは私を見かけるだけで朱水の下へと案内してくれる執事さんが今日は私を制止したのだった。

「はあ。良いんですか？ 私なんかが入って」

朱水は私なんかが想像できないくらい魔として重要な地位についていると聞いているので、私みたいな一介の学生が関わって良いような人物が面会に来ているとは思えないのに。

「はい。お嬢様が望まれております」

そう言っつて執事さんはにこやかに笑った。そこまで言われて帰るわけにもいかない。覚悟を決めて失礼しよう。

「こんにちは、有」

応接間に入るとそこにはなんだかご機嫌な朱水と、

「彼女が……アマツチユウさんなのですね？」

白銀の髪な異国の少女がいた。ややショート気味の髪が最初は少年の印象を与えたが、声で明らかに女の子だっということがわかる。宝

石みたいな髪飾りが印象的だった。

「こんにちは、朱水。それと……」

「こちらはアイシス。こう見えても有名な魔法使いなのよ」

朱水が少女の方に顔を向けて紹介してくれた。

「アケミ、それは違う。ボクは魔法使いとはまた別の物です」

そう言いながら少女は立ち上がり、こちらに握手を求めてきた。

差し出される手の白さに驚いたが慌ててその手を握り返す。

「こんにちは。ボクはアイシス・クラスエン。よろしく」

「よ、よろしく」

少女は背が私達より頭半分低く、日本の感覚では中学生くらいに思える。

そんなことよりも、その少女が異様に目立つ理由は……

「ああ、この目ですね。アルビノというのを知っていますか？」

「う、うん。色素がどうか、ってヤツだよな？」

初対面なのにどことなく話しやすく、思わず朱水に言うような口調で答えてしまった。

「ええ。だから眼が赤く見えるのです。もっとも、ボクはいろいろあった所為で更に赤くなっていますが。普通は何らかの対処をするのですが、ボクは内なるレイを使うことにより環境から身を守っています」

そう、少女の目はとてもよく目立つ深紅の瞳だった。

「アイシスは私達の理解者よ。そうねえ、魔法使いというよりは学者と言う方がしっくり来るわね」

「学者さんなんですか？」

その小さい学者さんは大人びていて、今の私と比べてしまう程に理知的な雰囲気を持っていた。

「ええ。ボク、今はロシアに住んでいるのですが、アケミとはちょっとした仲で度々研究ついでに会いに来ています」

「彼女、天才なのよ？ 魔法院内に新しい部門を作ってしまったのですから」

魔法院……確か朱水が魔法使い達の大学みたいな物だつて言っていたつけ。魔法学園というのが日本で言う中高一貫の学校として世界各地に存在するけど、その上に位置する魔法院は世界に4つしか無いって言ってたなあ。

「前人に似たような考えをした者は沢山いました。ボクは運良く辿り着いただけに過ぎない」

アイシスさんはさもつまらなそうに言った。

「あら、実証出来たのは貴女が初めてなのでしょう？ それに、私達より若いのですから十分天才と評価されるべきだわ」

二人はよくわからない会話をしている。わかったことは少女が見た目通りの年齢で良いということだけだ。

「アイシスさんは何を実証なさったんですか？」

「アイシスで良い。それに敬語を使われるのはあまり好きじゃないから、アケミに対してと同じような話し方をして」

少女は……アイシスは急に冷めた顔をした。どうやら何か気が障ったらしい。

「うん、わかった。アイシスは何を実証したの？」

「『レイ』と呼称される人間が備えている内なる力の存在をですよ。Manaが魔法の基本だけど、レイは外界に作用する力はない」

「え？ なら、何の意味があるの？」

「日本で育ったのなら『気』と言う物を知っているでしょう？」

「うん」

アイシスは目を閉じ、人差し指を立てて得意げに説明する。先ほどとは違って今度は楽しそうであった。

「似たような物ですね。ただ違うことは、精神が関係しているのではなく、世界が関係しているって事ですかね。つまり『Mana』と『気』の間みたいな物です。面白いところは世界が関係しているわりには世界に干渉することはできないということですね」

「……………難しい」

私のその言葉を聞くと、アイシスは少女らしい笑顔を浮かべた。

「アケミの言っていた通りね。貴方は教えがいがあるわ」  
「でしょう?。」

朱水までクスクス笑うし。

「もう。つまりはそのレイって言う物も魔法の一種って事なのかな?。」

「ええ。概ね合っています。でも、他の魔法と違って即座に組み立てる事は出来ない。だから毎日少しずつ<sup>じしじ</sup>拵えなければならぬんです」

うーん。何となくわかった気がする。何となく……

「具体的にはどんなことが出来るの?。」

「そうですね。さっきも言ったようにレイは世界に働きかける事は出来ない。それは魔法によくある他者への攻撃手段としては使えないという事ですね。だからレイはまだ学問の域から抜け出せないのです」

「ならまだ何も出来ないって事?。」

「まあ魔法使いとしては、ですがね。でも学者としてならこれほど便利な術はありませんよ?。そうですね、わかりやすいのを挙げる…… 永久記憶術とか…… 瞬間治療…… などですかね」

「へえ、永久記憶術か、何か良さそう。私にも出来ないかな?。」

それさえ出来ればテスト余裕だろうに、とずるいことしか考えられない私であった。

「有、私達には無理よ。レイは人間しか持てない力なのですって」

「そうなの?。」

「ええ、残念なことに。人はこの世界から最も離れている生き物。だからこそレイという、世界の力の源であるマナとは違った線を持つてると考えています」

「そういや私達の霊力はマナなの?。」

そう訊くと代わりに朱水が答えてくれた。マナという考えは以前に朱水からレクチャーされているため何とか話には付いていける。

「すこし違うわ。マナというのは以前教えた通り私達の言葉では『虚』と呼ばれているモノなの。人間の魔法は虚を別のモノに変えて力としていますが、霊力は虚のまま使っているの。でもだからといって『霊力』虚という意味で無くて……」

朱水が難しそうに説明するのでそれに見かねたアイシスが説明してくれた。魔法というのは粘土の様なモノで、『虚』という粘土を『影』というイメージによって弄くり、『形』と言う作品を作る行為であるという。一方で霊力というものは鉄砲の様なモノで初めから『形』という銃身が存在していて、そこに『虚』を弾丸として詰め込むという行為に似ているらしい。

うん、全くわからんね。

「マナが無いと魔も人間も生きられません。魔法とか霊力とか関係無くにです。まあ、マナはこの地球の何所を探しても見つかるくらいにいますから、無くなるってことはないでしょうから安心です」

「アイシス、有の頭が付いて来られていないわ」

「……………。まあ、難しい話は置いておきましょう。少なくともボクはレイの確立が目当てという訳ではないのです。ボクの目標はある魔法の完成、そのためにレイの存在を実証する必要があった」

「それは、何？」

アイシスの目が急に鋭くなる。

「『死から始まる命』」

「何？ それ」

「言葉の通りですよ」

そう言われてもよくわからない。命がつきるのが『死』なのだから。

「アイシス、有に言っても無駄よ。私でさえ完全には理解していな

いのですから、まだ魔としての知識が乏しい有に理解できるわけ無いわ」

「ごめんね」

実際全然理解できなかつたから、素直に謝っておく。

「いいえ。ボクも少々興奮してしまっていたようです。貴方のようなアンコモンに出会えてボクの研究もはかどるかも知れないですから」

だが、その言葉が終わる前に朱水が当たり前のことのように、

「だめよ。有は私の物ですから、実験などを許すつもりは更々無いわ」と、言い切った。

「むう。少しだけでも」

「だめよ」

二人は私を放っておいて勝手に話を決めている。まあ、朱水がいつも通りになつたみたいだから良しとするか。なんか前より凄いと云っているけど。

「わかりました……彼女を対象にするのはやめておきます」

「わかればよろしい。で、有？」

「ん？」

「今日は何のようかしら？」

そうだった。呼ばれて来た訳じゃなかつたんだ。

「朱水といたかつたから遊びに来た、じゃダメかな？」

朱水は紅茶のカップを持ったまま何も答えない。でも口元の笑みがハッキリと答えていた。

「はあ。二人はとても仲がよいのですね。それでは私は帰らせてもらいますね」

「あら、もうこんな時間なのね。送るわ。有、貴女も来ないかしら？」

「あ、うん、いくよ」

しかしアイシスは朱水に何やら耳打ちしている。その横顔は少し照れくさそうだった。

「は？ はあ。まあ良いですけど。なら有も一緒に良いかしら？」  
「ええ、構いません」

そう言つてアイシスはドアから早足で出て行ってしまった。なんだか楽しい事が待ち受けているような感じ。

「あら、すっかり仲良くなつたみたいね」

朱水はクスクス笑いながらそれを追いかける。

「さあ有、貴女もいらっしやい。そういえば詳しい紹介はまだでしたしね」

そう言いながら朱水もドアから出て行ってしまった。何の話だろ？

「こんにちは尼土様」

朱水の後を追うと何やら大きな部屋に着いたのだが……

「こんにちはです」

そこにはいつか見た六人のお手伝いさん達がいた。

「こ、こんにちは」

「有、今更ですけど紹介するわ。槐、えんじゅこちらに」

朱水が呼ぶと一番背が高い人が私の目の前に立った。それでも朱水よりは小さく、その背丈は私と朱水の間くらいだった。遠目に見ていた時には気付かなかつたが、初めて近くで見ると瞬時に誰かに似ていると思つた。朱水だ……朱水に似てるんだ。

「こんにちは、尼土様。私は槐と呼ばれており、この家の家計管理をさせていたいております」

正直、朱水と同じくらい綺麗だ。暗褐色の長髪を左肩の前でまとめて、頭の後ろに蝶の形をした髪飾りをつけている。朱水にお姉さんがいたらこんな感じなんだろうなあ。じつとその顔に注視していると私の視線に應えるように槐さんの顔が綻んでいった。

「ちなみに槐は朱水様の湯浴みの相手もしているんですよ」

槐さんの横にいた女の人が可愛い声で話しかけてきた。仕草は年上っぽいのに子供の様な可愛い声と赤紫色した短い髪のせいで逆に

年下のように思える。でも槐さん呼び捨てにしていると云う事は歳が近いのだろう。他の人は確かに槐さんの事を姉様等をつけて呼んでいたはずだから。

「ああ、私は槿むくげって呼ばれています」

槿さんも槐さんと同様に綺麗な微笑みを与えてくれるお姉さんの様な人だった。

「彼女はこの館の清掃係の一人よ。次は梧あおむぎ」

窓の外をじっと見ていた緑がかったロングの女性が静かにこつちにやってきた。前髪の左側だけを後ろに持って行っておでこを露出させているアシンメトリーな髪型だった。あれ、どっかで見たような？

「梧です。お久しぶり」

その静かな物腰を見ていると何故か恐怖感が湧いてくる。

「お忘れですか？」

梧さんの目が鋭くなる。ああ、いつぞやもこの目に睨まれたような……

「ああ、あの時の」

そうだった。あの訓練の時に私の相手をしてくれた使い魔さんだ。朱水と違ってその体の細さの割に男性的な凛々しさを持つ人だった。また、片目が髪で隠れているせいかミステリアスでもある。

「はい。料理を担当しております」

では、と言ってまた窓辺へ行ってしまった。窓辺に行くと二度とこちらを振り返る事は無かった。

「次、椒はしかみ」

黄色いロングで横に髪の毛の輪を作っている女の子がずかずかと音を立てながら私の目の前に歩んでくる。

「椒です。他の者の援助役です」

何だろっ、椒ちゃんは私をずっと睨んでくる。そしてその口はいじけているように尖っていた。

「ちょっと、椒、貴女ね……」



朱水の言葉を無視してアイシスのもとへ行って抱きついた。あんなにアイシスとは仲良さげなのに。

「ごめんなさい。あの子は私に特に懐いていてね、私に近づく者にああいう態度をとってしまうのよ。次、くぬぎ 柵」

淡褐色のセミロングで横髪を三つ編みにし、それを肩より前に持つてきた後ろ髪と一緒にまとめている少女が目の前にふわりと着地した。今、私を飛び越えたような……。

「柵です。清掃係を榎姉様と共に担当しております。よろしくお願ひいたします」

深々とお辞儀をする。どうやらすごく真面目な人みたいだ。その静かな様子は梧さんと似ていると感じた。ただ一つ違うのは、梧さんは興味が無いという意味での無言であったが、柵ちゃんの無言は私の言葉を待っているような無言であった。その証拠に私をじつとその透き通った瞳で見返してきている。

「彼女は私の使い魔の中で一番身体能力が高いのよ。だから清掃を頼んでいるの。最後におま 梓」

アイシスと共に榎ちゃんに抱きつかれていた灰白色したロングの少女がとことこと走ってくる。そのふわふわした毛がワンちゃんの様で頭を無性に撫でたくなる衝動に駆られた。

「こ、こんにちはです。梓です。一応料理担当です。榎姉様と一緒にです」

梓ちゃんは私に握手を求める。両手でブルンブルンと握手するしぐさが可愛い。彼女達の中で梓ちゃんが一番小さかった。小動物、そんな単語が私の頭をよぎる。

「本当はもう一人いるのだけど……」

と、朱水が口を開くと、

「あんな奴、仲間じゃないです！」

それを遮るように榎ちゃんが大声を上げた。その目はただ事で無い事を、事情を知らない私でも理解できるほどに憎しみの色にて教えてくれていた。

「止しなさい、椒」

梧さんが窘めようとしますが椒ちゃんは更に大きな声を上げる。

「梧姉様だってそう思うでしょう？ あんな奴がいたから槐姉様が

……」

興奮する椒ちゃんはその口を槐さんが手で優しく塞いだ。

「良いのよ。枳は枳なりに考えがあつたのだから」

後ろから抱き締められる様に包まれると、椒ちゃんも次第に落ち着きを取り戻していた。

「でもあんなことをした枳姉様を仲間と思うことは私もできません  
枒ちゃんも手をそろそろと上げる。

「好い加減になさいな。朱水様の前ですよ」

「そうですよ。御主人様の前ですよ」

権さんと梓ちゃんも口論に加わる。

「そうよ。私は気にしていないのだし、許してあげて」

槐さんが枒ちゃんも抱きしめて二人の頭を撫でた。二人とも気持ちよさそうに目を細める。

「朱水様、この子達には私からちゃんと言っておきますので」

朱水は槐さんの目をじつと見つめた後、小さく頷いた。何も言わず振り返り私とアイシスに目配せをする。

「そう、頼むわよ。アイシス、もう時間よ。さあ、有も一緒に」

「あ、うん」

私は先程から口が挟めるはずも無く傍観していただけだったため、朱水の言葉が嬉しかった。一方アイシスは名残惜しそうに皆から離れた。よほど彼女達と一緒にいたいらしいね。部屋から出るまでの間に三回も振り返ったのだから。

そうそう、さっきからどうも気になることがあるので聞いてみることにする。

「ねえアイシス、アイシスの一人称ってさ」

「はい？」

車に乗る前に忘れ物が無いかチェックしているアイシスは手を止めてわざわざ顔を上げて応えてくれた。そこら辺は教師もやっているという所為か律儀だ。

「『ボク』って女の子にしては珍しいよね」

「……………アケミ？」

アイシスは私で無く朱水に問う。どういつ事だろう？

「有、ちよつとそれは！」

珍しく朱水があわてている。聞いちゃまずかったのかな。

「アケミ、どういつことですか？ なぜアマツチが不思議がらなければならぬのです？」

「そ、それはね」

「確かアケミがボクに『貴方ぐらいの女の子は自分のことをボクと呼称する』と教えてくれたのでしたよね？」

あ、朱水……………ちよつとそれは……………

「いえね、アイシスが自分のことをボクといったら可愛いかしらと思つて……………」

……………

「アケミ、アマツチが睨んでいますよ」

アイシスがこつちを指差す。

「別に、睨んでなんていないよ。別に、ね」

「ゆ、有、私は誰にでも手を出している何て……………」

「『手を出す』？」

思わず低い声を出してしまう。

「いえ、ですから」

何とか弁解しようとバタバタと身振り手振りだけが先行しているが肝心の言葉は喉につつかえて出てこない様だった。こんなカツコ悪い朱水は見たくないなあ。

「もついいって。アイシスをお見送りするんでしょ？ 早くしななきゃ」

「そう、でしたね」

「ふむ、面白いものを見せていただきました」  
アイシスの方はニコニコ笑っているし。

「お嬢様方、そろそろ時間かと」

先程から時計をちらちらと気にしていた執事さんが車の窓から首を出しながら出発の時間が来たことを告げる。よほど時間にゆとりが無いらしい。

「そうそう。さ、二人とも早く車に」

朱水は助かったとばかりに車に乗り込む。なんだかモヤモヤした気分でその後姿を見ている私に、アイシスは小声で

「アマツチ、気になさらぬように。貴方がアケミの友となる前には、アケミには私しか対等に会話できる相手がいなかった。きっと楽しくて浮かれているでしょう。だから大目に見てやってください」と囁き、私の横を通り過ぎて車に乗り込んだ。

「うわあ、大人だ」

アイシスの大人ぶりに驚きながらも、私も続いて車に乗り込んだ。

「アマツチ、アケミから貴方の力のことを少々聞かせてもらいました」

朱水と私の間に座っているアイシスが急に、彼女の赤い眼を私に向けながら言うてきた。

「う、うん」

「貴方の力を目の当たりにしたのではないのですが、ある程度までの工程は推測できます」

「え？ 何のこと？」

朱水はそんな私に助け船を出してくれた。

「貴女の力が世界に影響を与える、その工程の事よ」

「恐らく貴方の力、『創造』は複数の力が混ざって行使されているのだと思われれます」

「複数の力……。そんなこと出来るの？」

「有、現に貴女がそうなのよ。魔というのは本来、地球が所持する武器みたいなモノなの。だから剣は剣、矢は矢、矛は矛である様に魔も普通、それぞれ単調な力を持っているものなのよ。ですが貴女は複数の力を持ち合わせているの。たとえるなら……十徳じゅくナイフかしら？」

いえ、朱水サン、それは武器ではないのでは？

「アマツチの力の正確な数はわかりませんが、少なくとも一つだけわかっているモノがあります」

「それは？」

「言うならば『肯定』ですかね。貴方は頭の中に描いた像を『肯定』して、その像を世界に具現させているのだと思われます」

アイシスが言うにはその『頭の中に描いた像』というのが、人間が使う魔法に似ているらしい。始めから与えられた姿で無く自由の幅があるとかどうとか、影がどうとかこうとか言っているけど良く分からないんだわさこれが！

「そう……有、貴女はその像の『存在』を『肯定』しているの」

「ってことは、もし私が嫌なことを思いついちゃったら？」

しかし朱水は首を横に振った。

「違うわ。思いつくだけでは何も起きないのよ。具現するには貴女の『肯定』が必要なのよ」

「つまり貴方が、アケミや誰かから聞いた空想話を頭の中で想像しても、その状況がこの世で起きることは無いのです。ただし……」

「私がそれを完全に信じないかぎりは……ってこと？」

「そういうこと。まったく、貴女って人はなんてふざけた存在なのでしょう。現実を上回る『肯定』だなんて」

そんなことを言われても……。

しかし朱水は言葉とは裏腹に微笑んでいた。得意げに言葉を続ける。

「そうそう、有、アイシスが言っていたレイというのは幽霊の霊と

は無関係ですからね」

「……………いや、そんなこと思いつきもしなかったよ」

私の言葉を聞いたアイシスは急に吹き出した。

「どうやらそう思ったのはアケミだけのようですね。多量の知識は誤解を生みやすい、参考になります」

「む〜」

多分朱水はアイシスに初めて説明してもらった時に勘違いしたということなんでしょう。

「レイと言う名前には由来とかあるの？」

「ああ、それは……………」

朱水はアイシスに目配せをする。聞いちゃ不味かったのだろうか。

「かまいません。レイというのはボクの名前からとっています」

「あれ？ でもアイシスの名前にはレイなんて無いんじゃない？」

「アイシス・クラスエンと言うのは日本での偽名です」

「偽名？」

「はい。私にはいろいろありますから、本国以外では偽名を使っているんです」

いろいろって……………そんな風に言われると怖いな。

「有、アイシスには彼女なりの都合があるのですから、深く追求したりしては駄目よ」

「わかってるよ」

アイシスが私よりも年下なのに何所と無く大人びている理由はそこにあるのかな。彼女の赤い瞳は今までに何を見てきたんだろうか。私達の間で一時の眠りに入ってしまった少女の寝顔は幼かった。

「アイシス、また日本へ来た時には、我が屋敷に是非立ち寄ってくださいね」

「ええ、もとよりそのつもりです。しかしお二方の愛の巢にずかずかと入り込むのには気が引けますが」

空港に着いたときには既に空は暗くなっていた。アイシスと朱水はまた何やらこつちをちらちら見ながら話している。

「ほら、有、アイシスに挨拶なさい」

「あ、うん。それじゃ、また」

「……すっかり尻に敷かれていますね」

「当然よ。だって有は……」

言葉は途切れた。朱水は口を止めたまま動かない。まるで何かを聞き分ける様に自らの息を止めてまで何かを探っていた。

「どうかしたのですか？」

「……いえ、何でもないわ。それより急がないと間に合わないのではなくて？」

「そうでしたね。それではお二方、またいずれ」

アイシスは可愛く手を振りながら空港へと入っていく。しかし朱水はその後ろ姿に目を配る事無く宙を睨み続けている。

「朱水？」

「有、すぐに戻るわよ」

「どうしたの？」

「わからないわ。しかし確かに心配はしたの」

そう独り言を呟きながら朱水は車内にいる執事さんに何やら小声で告げると、私に車に乗るよう指示した。

「どうしたのさ？」

急発進した車の中で朱水は窓の外を睨み続けていた。

「有、貴女は何も感じなかったの？」

「ゴメン、何の話？」

「ならいいわ。私の勘違いかもしれないから」

「お嬢様、そろそろかと」

「爺、この近くに古い建物は無いかしら？」

「しばしお待ちを」

そう言うと執事さんは車を脇に止め地図を調べ始めた。

「百年以上前に立てられた図書館がありますが」

「違うわ。私達に関係がありそうな建物よ」

「ふむ、ではこちらは」

執事さんが地図の一点を指差す。

「子沸神社、か」

朱水の顔に顔をくつつけて横から覗きこんだ地図で見る限り、山と山の間大きな神社が建てられている様だ。

「空港からこの神社の方向は……」

「朱水、その神社がどうしたのさ？」

「行って確かめないと何も言えないわ。爺、急いでここに向かって頂戴」

それを聞くと執事さんは無言で頷き手袋を嵌め直し、制限速度ぎりぎり山道を通り走った。

「止まって」

急カーブを曲がる度に寿命が短くなるような思いがしていたため、止まってもまだ心臓がバクバクいつている。心臓から汗が出てきたみたいな感覚だ。

「気のせいではなかったようね。ここから先は私達だけで行きます。爺はここで緊急時の逃げ足として残っていて」

執事さんにてきばきと指示を下しドアに手をかけた。

「わかりました。お気をつけて」

その言葉をしっかりと確認すると朱水は車からさっさと降りた。

「え、ちよつと、朱水？」

「尼土様、車から出た際に飲み込まれないように」

バックミラー越しに見た執事さんの目は何時に無く鋭かった。

「はい？ 飲み込まれるって何にですか？」

しかし執事さんの答えを聞く前に、

「有、武器を車内で携帯しておきなさい」



との声が聞こえたので、言われたとおり車の中で唯一まともに作れる武器を創る。

「有、そろそろ出てきなさい。けれど気を確かにね」  
二人とも何を言っているんだろう。

私は二人が言いたい事をわからないまま車から出た。

するとソレは私を包み、抉り、穿ったのだった。

「な、何、この感覚。気持ち悪い」

ソレは生きたまま心臓を持ち上げられるような不快感、圧迫感だった。今までに一度も出会わなかった感覚だった。

「大丈夫？」

朱水が心配して顔を覗き込んできた。その顔すら曇りガラスを間に挟んだように曖昧に見える。

「これ……何さ……」

いけない、意識が朦朧として……き………

「大丈夫、有？」

目の前には朱水の顔があった。どうやら車の中みたいだ。そうだが、前にもこんなことがあったなあ。

「あれ、私……」

「有にはまだ無理だったようね。起きられる？」

朱水に肩を支えられて上半身を起こす。頭があった所には朱水の膝があった。

「あ、膝枕」

「ふふ、可愛い寝顔を堪能させてもらったわよ」

スカートの皺をのびしながら微笑む。吐き気でどうにかなりそうだった私はそれだけで一気に回復する。

「あれ、何だったの？」  
「恐らく、一種の結界ね」

朱水の説明ではこうだ。神社には何か異常なモノが住み着いているらしい。私はそれが出す気にはやられたらしい。朱水ですら近づくの躊躇うくらい尋常じゃない気配とのことだ。

「そんなにすごいならどうして今まで気づけなかったの？」  
「……わからないわ。空港でこの気を感じたのよ。それまでは気付きもしなかったわ」

朱水は顎に手をやり考え込む。

「あれほどの気を感じ取れなかったというのは今までに一度も無かったわ。何故なのかしら」

うーん、と朱水は唸り始めた。よほど不思議らしい。

「単純にその時に出てきたばかりだからなんじゃないかな？」  
よくわからないので頭に出てきた考えをそのまま口に出す。

「どうかしら。魔というのは生まれてすぐに第二として機能できるわけではないのよ。生まれたては未熟なものなの」

だからその可能性は薄い、とのこと。

「でも何で私達が向かわなきゃならないの？」

「……………変ね。その通りよ。なぜ私は動いたのかしら。呼び出された？ まさかね」

「どうしたのさ？」

「いえ、まさかね。でも顔くらいは拝んでおいた方が良さそうね。有、もう一度行くわよ」

自問自答を終えた朱水は私の手を握り、車の外へ出ようとする。

「わ、待ってよ。私には無理だよ」

「大丈夫。もう貴女は自分で自分を守っているわ。外に出ればわかるわよ」

抵抗空しく無理やり引つ張り出されたが、確かにあの不快感はそ

んなに覚えなくなっていた。

「いなくなつたの？」

「違うわ。さつきと何ら変わっていないわ。変わったのは貴女の方よ」

そう言つと朱水は私の胸を指差す。

「よく見なさい。貴女を覆っているものを」

よく見るつて……アレ？

「何か……薄く光っている」

何だろう。あ、でも何か見覚えがある気が……これは、そう、あの時の、

「っあ」

痛い……痛い……。おかしい、頭が痛い。目の奥から骨が割れそうだった。コレを思い出そうとすると頭が割れる仕組みにでもなっているみたいだった。

そうだ……コレがあるから私は……なんだ……これこそ私と朱水を……繋げるモノ……

「有、有！ ちょっと、大丈夫？ 体が思い出そうとするのを許容しないなら無理しなくて良いのよ。とにかく貴女はもう大丈夫、それだけ理解して」

「い痛あ。うん、もう大丈夫……。あつはあ……はあ……」

まだ頭がズキズキいつている。でもなんとか持ち直せたようだ。目に映つた世界は通常営業していた。

「ふう。何なんだろうね。もう大丈夫だよ、朱水」

「本当に大丈夫？ 辛かったらもう少し休んでもいいのよ？」

頬が両手で挟まれる。その指の冷たさにふわりとした感覚は吹き飛んでくれた。

「あはは、朱水の膝枕は魅力的だけど、本当に大丈夫だから」

「そう、ならこれを持って」

そう言つとさっき私が創つたナイフを手渡してくれた。

「相手がどついつ行動をとるかわからないから、私より前に出ないようにしてください」

「わかった。前に出る勇氣は元々無いから安心して」

そうして私達は暗闇の中をナニカがいる神社へと向かった。

不思議だ……。長く続く階段は進めば進むほど急になっていっている様に思える。階段の横は既に道ではなく下草と木が生い茂る森であった。階段には人工的な物品は一切落ちてなく、人が通っているような形跡は見られなかった。何よりこの不気味な雰囲気の下で誰もここに来たがらないのではないだろうか。何度か後ろが気になり振り返るが当然私たち二人以外には誰もいなかった。なんだか無性に頭を掻きたくなる気分だ。それにしても、足が重い。

「それは貴女の警戒心が先に進むことに抵抗しているからよ」

「我ながら臆病だね」

「そうね。でも私でさえも少し躊躇したくらいよ」

そうは言うけど朱水と私との距離は少しずつ開いていく。体力的な意味で無く間違いなく精神的な方面で差が生まれている。

「会ってどうするのさ?」

何とか追いつこうと足を上げながら訊いてみる。朱水が危険と分かっているのに執着するのはどういう理由だろうか。

「……あの日以来、使者が消えてしまった。それがどうも気がかりなのよ」

そう、朱水の部下さん達によると、丁度私が覚醒したあの日から町にいた使者達は消えてしまったらしい。もちろん死体等も無く、また新たな被害が生じると言う事も無くなっただけ。時期的に最初は私の力と何か関係があるのではと朱水は考えていたが、繋がりが全く見つけられずその考えは棄却された。少なくとも私の意識の中にあの使者たちに関するものは存在しないと断言できるね。

「誰かが朱水の代わりをしてくれたんじゃないかな」

「まさか。貴女がいた館に向かう直前まで存在していたのよ？ それも多数。それを一晩で消し去るような者は私の管理下にはいないわ」

「だから何かしら関係があるかも、ってこと？」

「いえ、関連性というよりも未だに現れてこない使役主を探しているのよ。本当に何も情報が手に入っていないためこちらから色々動かないといけないの。あれだけの被害を出された以上、『この領地で暴れるのをやめましたのでさようなら』なんて許さないわ。ここは私の管理下からは外れてはいますが、幸いこの地の頭首とは縁がありますので何も言われなくてしょう」

魔の頭首としての考えだと言う事かな。他人の上に立つって大変なんだね。

「お咎めなし、ってことだね」

「そういうことね」

微妙に高く、歩みにくかった階段が途中で無くなりゆるい坂道になっていた。それだけで大分楽になる。しかし相変わらず周りの景色は似たような物だ。山の斜面に階段を敷いているため蛇行して傾斜を緩和しているのだがその所為で道の長さは数倍にも膨らんでいる様だった。

どんどん進んでいくと遠くに鳥居らしきものが見えてきた。朱水と一度顔を見合わせて慎重にその下へと足を運んだ。

「有、下がって！」

突然、前を歩いていた朱水が小さい声で叫ぶ。

「な、何？」

朱水は右手を私の方に差し出して、『待て』のポーズをする。

「あれよ。あれこそが私達が探していたものよ」

朱水の視線の先には……

「男の人？」

神社の境内の階段に男の人が座っている。私の目には普通の人に見えるけど。

「朱水？」

「その貴方！　このような時間にここでいったい何をなさっておられるのですか？」

しかし男の人は朱水の声に反応しない。ずっと顔を下に向け微動だにしなかった。その男性の割に長い髪の毛はこちらから顔を隠すようにしっかりと覆っていた。

「この感じ、魔とは……違う。だとすると……まさか」

「何？　何なの？」

男の人が立ち上がる。上半身は裸であるためその肉体が誇張されていた。すごく筋肉質で、遅いという言葉以外に表現する言葉が思い浮かばなかった。

「第一？　この感覚は第二である私達とは少し違う。でもまさか……」

……このような狭い島国に未だに存在しているなんて」

男の人がふらふらと上半身を揺らしながら歩み寄ってくる。

「……迷イシモノ……汝ノ……道……ヲ……」

「わ、私？」

男の人は朱水ではなく私の方に歩み寄ってきている。

「有、下がりなさい。あれは危険よ」

朱水の体の周りに紫色の靄が現れた。臨戦態勢だ。

「……迷イシモノ……示ス道……届キシ……」

朱水が男の人に飛び掛る。その右手を男の人のお腹に打ち込もうとした。

「有に近づかないで頂戴」

しかし朱水の一撃は男の人に届かなかった。朱水の拳が届く寸前

で男の人は後ろに跳んだからだ。

「嘘っ」

その跳躍距離は普通の人間に跳べる距離ではなかった。何よりその高さがおかしかった。完全に私たち二人分を超えそうな跳躍力だった。

「有、下がりなさいって言ったでしょ！」

「……迷イシモノ……近ヅキシ……神二……」

男の人の背中からナニカが生え始める。黒いそれは薄暗くなった境内でも、一段と黒かった。

「腕……かしら？ 来るみたいね」

「……迷イシモノ……ソノ体二……全テヲ創造シ……再  
ビノ……」

今度は男の人が朱水に飛び掛った。

男は背から生えた黒い腕の様なもので朱水に掴みかかる

朱水はその手をひらりと避け、振り返り様にその腕に一閃を……

「実体が……無い？」

相手の腕を消し飛ばすはずであった朱水の手は、その黒い腕をすり抜けてしまった

男はその勢いのまま有へと突き進む

「有、逃げて！」



しかし有は動かない

その目は男を見つめ続けている

「有！」

朱水の大声が森に木霊した

男の黒い腕が有に近づく

しかしそれ以上指が近づくことはなかった

水晶の様に透き通った壁が有の目の前に存在していた

何人たりとも通すまいとそれは自ら悠々と輝いてる

「……迷イシモノ！！！！」

「あ、ごめんなさい」

有は目の前で吼える男に気圧され、意味の無い言葉を反射的に呟きながらしゃがみこんでしまった

「どうして謝るのよ」

朱水は呆れたかのような口調で、しかしその口を喜びに曲げながら男の背中に足を打ち込む

男は反応しきれず、黒い腕をすり抜けた朱水の足蹴りを左肩に食らい、横に吹き飛んだ

朱水は男を蹴り飛ばした直後、有の壁を直角に跳び、男目掛けて地を駆ける

男は着地と同時に朱水を視野に捕らえる

その目には確かに嗤っている鬼の顔が映っていた

朱水の大きく振りかぶった左手が今度は実体である男の胸を穿つ

「……クフッ」

静かな境内に苦しみの音が零れた

朱水の口から空気が漏れる  
喜びに曲がっていた口元は苦痛に曲がる

「フフツ……ご冗談でしょう……」  
「朱水い！」

朱水の左腕は男の胸を確実に貫いている  
しかし靈力の行使には至れなかった

その分の力は朱水の両肩かかっている重圧に耐えるために使われている

「反則よね。こちらからは触れられなくて、そちらからは干渉できるだなんて」

男の背から生えた黒い腕は朱水の肩を掴み、朱水を地面に押し潰さんとする

朱水は右手でその腕を掴もうとするが、やはりその手は宙を掴むだけである

「朱水！」  
有は右手に持っていたナイフを構えて男に突進する

しかし容易く男に蹴り飛ばされてしまった  
非力な少女の体はゴム球の様に転がっていった

魔としての体を持っていなければたら確実に致命傷であったはずだ  
「有！ 離れなさい」

朱水は視界から消えた有に向かって叫ぶ  
「貴女では無理よ。もともと第一は第二では数を揃えなければ敵わないのよ」

朱水の口から血が滴る  
足の関節はすでにギシギシと苦痛の音を上げていた  
朱水の肩にかかっている力は人間が耐えられるような力ではない  
もし食らえば人間など簡単にひしゃげてしまう

魔である朱水自身、大きな力を持っているが、それでも耐えることしかできない

「くうっ」

食いしばった歯の隙間からさらに血が零れる

「嘗めないで！」

足に靈力を溜め込み、足元にあった地面を吹き飛ばし、足場を失った男の隙をついて後ろに飛び下がった

「悔しいですけど相手が悪すぎるわね。有、退くわよ」

朱水は有のもとへと駆ける

「……迷イシモノ……汝ハ……星ノ……」

黒い腕が走る朱水の背を目掛けて伸びる

「朱水い、後ろ！」

朱水の背中に爪が近づくと

「つつ」

朱水は逃げるのは難しいと悟り、決死の表情で振り返る  
「有には近づかせないわ」

鬼は目を血走らせ、牙を剥いた

「ツシヤア」

しかし朱水が迎え撃つ前に男の背中に剣が突き刺さる

その剣は人間の男性が握っていた

「緊急的狀況と断定。お前を屠る」  
ほぶ

男性は突き刺した剣を捻り込む

黒い腕を生やした男は苦しむ様に剣が貫通して飛び出てきた胸を掻き穿った

「玄、それは後回しよ！  
ひかる まずは一色さんの安全の確保が優先よ。」

ああ、それとその女の子のもね」

男性の後ろにはもう一人女性が立っていた

「……わかった。お前が先導してくれ」

玄と呼ばれた男性は剣から手を離し、男から離れる

「魔力、始動」

男性がそう呟くと背負っていた四角い鞆から次々と剣が飛び出した

「行使、展開」

剣は鞆を中心にして円を描いて回る

それはまるで仏像の後光のように均等に並んでいた

「行け」

「はいはい」

女性は有と朱水に駆け寄ってくる

「あんた達、動ける？」

女性は場にそぐわない、気さくさを表現したような笑顔を振りまく

「あ……あい」

有は二人の突然の出現に呆気にとられ、口をあんぐりと開けたま

ま答えた

「魔法使い……削強班ね」

一方、朱水は血走ったままの目で女性を睨みつけた

しかし睨みつけられた女性は、その鋭い視線を意に介せずあっけ

らかんと笑う

「大丈夫、大丈夫。私達は貴方に用があつてね、助けさせてもらう

わ

そう言うつと朱水の横を通り過ぎ、倒れていた有の手を引いて無理

やり立たせる

「あんたも助けろ、って執事さんに言われてね」

「智爺が………わかつたわ。有、車へ戻るわよ」

朱水は有を抱き、山の斜面を飛び降りる

「うひゃあ流石ね」。他人を抱いてあれだけ跳びあがるなんてね

」

置いてけ堀をくらった女性は眩しい物を見るかのように額に手を当て、目を細める

「おい。ふざけていないでとっとと俺達も退くぞ」

女性の横にいつの間にか剣を構えた男性が立っていた

「あら、らしくないじゃない。いつもなら『逃げることは負けだ』って言つて、こっちの都合お構い無しに突っかかるのに」

「うるせえ。今日はこうなるとは思っていなくて、式典兵器は持つてきていないんだよ」

それだけ言つと、男性はさっさと坂道を下つていった

「まったく……。あんたはいつつも後始末は私任せね」

男性の後を追ってきた黒い腕を生やした男はすでに女性の背後にいる

「できればこれで消えてくれるとうれしいんだけどな」

女性は左手を地面につける

その左手に逆さの十字架の様な模様が浮かび上がった

「魔力、行使」

彼女が手を上げると地面が盛り上がり、大きな逆さの十字架状の土の塊が共に持ち上がった

「食らっちゃいなあ！」

持ち上げた土の塊を軽々と横に大振りし、男に叩きつけた

それを腕で受け止めようとしたが、その無慈悲な一撃に男は吹き飛び見えなくなった

「あらら、まだいるわね。まあ良いや。逃げよ、逃げよ」

女性が右手を左手に添えると土の塊は崩れ散った

「じゃね〜」

軽く手を振り、女性は車の下に走り向かった

「私……死にたい」

「姉さん……」

姉は自分の腕を眺める。その腕には無数の手術の跡が残っていた。自分の腕の無残さに嘆き悲しむ。

「こんなことをされて私は何になればいいのよ」

それは治療のための手術ではない。改造、その言葉がしつくりとくる。粒上にした霊石を埋め込まれたり、血管に魔字を刻まれたりされたのだ。

「私、人間なのよ？ どうして……どうして……どうして……」

「姉さん、やめて」

妹は姉が自分の腕を掻き毟るのを止めようとする。掻き毟ったところで何の解決にもならず、ただ徒に痛みが増えるだけであるから。「どうして……どうして……」

姉はもう人間の体とはいえなかった。姿は人間だが簡単には死ねない体になっていた。

彼女達の住処はある施設の中に存在する。その施設は人間の魔化を目的とされて一年前に機能し始めた。以前にも同じような施設が存在したが実験体八人中七人の死亡、一人の行方不明者を出して閉鎖された。しかしそのデータを基に新たな施設としてここに研究所が建てられたのである。施設の人間達は異国から孤児の姉妹を引き取り、まず姉に何度も手術を施した。妹は姉が死んでしまった場合の予備として引き取ったのである。施設の人間は口々に彼女の魔化を『進化』と呼んでいた。

「何が進化よ。私を化け物にしたいだけなんでしょ」

今の彼女の腕力は異常である。実験で一トンの岩を動かせと命令

された時には、動かすどころか軽々と岩を持ち上げてしまった。

「嫌よ……こんな体」

しかし彼女は自害することはできない。既に彼女は普通の死に方はできなくなっている。刃物を突き刺そうが直ぐに傷が塞がり、内臓も回復してしまう。血も直ぐに補われてしまうのである。残ったのは決して癒える事の無い手術痕だけである。

「死にたい……………死にたい」

「姉さん」

妹は姉を胸に抱く。

「姉さん……死ぬなんて言わないでよ」

二人は夕食の後は二人だけの家に住むことを許されていた。

シャワーの熱が彼女達の冷え切った心を温める。しかしそれでも彼女達の顔が和らぐ事は無かった。

「姉さん……………逃げよ」

「……………」

「どうせ殺されるなら逃げている途中に殺された方が増しよ」

彼女達の家は盗聴されているが、ただ一か所だけ盗聴器が音を拾えない場所があった。それはシャワー室である。シャワーの音の所為で正確に音を拾えていないのである。そのため彼女達は秘密の会話をする時はシャワーと一緒に浴びる時に囁く様に会話をする。もちろん盗撮もされているため耳に手を当てるわけにはいかず、湯気で誤魔化せる程の小さな口の動きだけでしゃべる技術を手に入れて

いた。

「ここを出ても私達には何も無いのよ？」

「それでも……それでも何とかしていけると思う。逃げよう、姉さん」

その夜、彼女らはお互いに自由のために計画を練り、次の日のシヤワーで一つにまとめた。

「姉さん、今日……」

「わかつてる」

それだけ言うと姉は家の玄関で待っている男達の下に向かった。

その日の夜、施設は全体的に停電した。自らが作り出した銃撃に強い化け物に対処することは叶わず、電源システムを根こそぎ破壊されたのだ。彼女達を止める事を期待されて雇われていた魔法使い達は一番始めに殺された。普段大人しく従っている姉妹を見てきたがために油断してしまったのだ。暗闇の中に潜んでいた怪物を小さな灯では見つけられなかった。

闇に紛れて、合流した姉妹が森を走る。

暗闇を姉が先導して進む。唯一手に入れられた小さな懐中電灯は、後ろを走る妹が所持している。

「早く！」

「わ、わかつてる」

妹はすでに疲れ果てていた。もう何時間も走り続けているのだ。

その時、後方から森を照らしつけながら彼女らを探しているヘリコプターが迫ってきた。

「姉さん！」

妹が前方を指差す。その先には黒く塗られたヘリコプターが飛ん



でいた。ライトはつけていない。おそらく後ろの方だけに注目させておいて前から襲撃しようとしているのだろう。回転翼の音が他のヘリと比べて圧倒的に静かな代物だった。

「横に逃げるわよ!」

「う、うん」

彼女達は走る。

走る。

走る。

走る。

しかしその走行は姉の叫び声で終わった。

姉は焦っていたのだ。

妹はもうこれ以上走れない。

何度も何度も振り返る。

姉はいつもそうだった。

何度も振り返る。

姉は何時も妹を気にかけていた。

何度も振り返る。

妹も何時も姉を気にかけていた。

また振り返った。

妹は何とか後ろについてきている。

姉は安堵の表情を浮かべ前に向きなおす。

しかし前には何も無かった。

「姉さん!」

姉は落ちていった。

妹は姉を好いていた。

何時も自分を優先してくれた大好きな姉。

私は姉から離れたくない。

何時も自分に優しくしてくれた大好きな姉。

私は姉から離れたくない。

何時も自分に辛くても優しい顔をしてくれた大好きな姉。

私は姉から離れたくない。

私は姉から離れたくない。

離れたくない。

離れたくない離れたくない。

だから私は追いかけた。

空は暗い。

目の前には姉さんがいる。

安心

二人の距離が近づくことはない。

安心

だから私は手を伸ばした。

安心

届くはずなのに手を伸ばした。

安心

姉さんが泣いている。

安心

たとえ泣いていても姉さんの顔がある。

安心

うれしい。

安心

うれしい。

安心

私達はこれから自由になれる。

安心

期待感からか、体が飛べる様に軽い。

安心

自由になるんだよね、姉さん。

安心

姉さんに近づいた。

安心

まだ姉さんの目から涙が流れている。

安心

たとえその涙が紅くてもうれしい。

安心

近い、近いよ、姉さん。

安心

たとえ姉さんの足が曲がっていてもうれしい。

安心

目の前は茶色。

安心

私の手にある懐中電灯が茶色の壁を照らす。

安心

姉さん。

安心

姉さん。

安心

姉さんに追いつけた。

私達は自由になれる。

『！！！！！！！！！』

うれ……………しい……………

「被験体の姉妹を発見しました。姉妹は崖から落下した模様であります。姉は落下後、完全回復。妹は死亡。姉はその後、妹の屍骸を見続けていたようです。精神面に故障が発生した模様。先ほどから狂ったように笑っております」

「了解。今からそちらに隊を送る。姉は隊に任せて妹の遺体を持ってきてくれ。まだ使えるかも知れん」

暗い森に笑い声に似た悲鳴が鳴り響いていた

助けてもらったのだから気は進まないが応接間に二人を通す。

「削強班が何の用かしら」

私は内心穏やかでない。有の異常さが削強班に知られてしまったのだろうか。隣で緊張した面持ちで固まっている有の手を握る。有はそれが嬉しかったようで少しだけ表情を和らげた。

「使いが来るなんて今までに無かったことじゃない」

女性は私と有に向かって座っている。男性の方は先ほどから女性の背後で徘徊している。恐らく部屋に何か危険な物が無いだろうかと考えているのだろう。敵の城に乗り込んできたのだ、当然の心配であろう。女性は相手に嫌悪感を与えぬような、いわゆる営業スマイルを作っているが、男性は鋭い視線で応接間の隅々を観察している。まあ良い気はしない。

「最近の異常に関しての領内調査の要請です」

女性は背負っていた可愛いらしい鞆からかなり厚い封筒を取り出した。

「詳細はここにまとめてありますが、まずは今日中に了承を得る必要があります。事が事ですからね」

そう言いながら封筒から一枚の赤い紙を取り出す。

「ここに判を……」

「待つて。異常って何のことかしら？」

彼女は私の言葉が意外であった様だ。訊いた途端動きを止めてしまった。

「……は？」

彼女は後ろの男性に目配せをする。男性は彼女と目が合ったがす

ぐに逸らしてしまった。

「……もう。あゝ、つまりですね……さっきですよ」

「第一のこと？」

「ええ。まあ厳密には第一ではないのですが」

彼女が渡してきた書類には『影の実態調査についての合意書』と書いてあった。

「影？」

「はい。今、世界中で発生している第一の偽者とても言える者達のことを、我々は『影』と呼称しています。大昔の第二の偽者も幾つか発見されていますが」

彼女が逆様にした封筒からは沢山の写真が零れ落ちた。

「このように姿はオリジナルと似ていますが、幻影のような体を持つていて……」

「こちらからの干渉はできない、ということね」

写真の中には伝説として聞いた生き物のようなものが写っている。本当にいろいろいるのね。セイレーンにユニコーン、スフィンクス、第二の半魚人……」

「マーメイドだよ……」

私の言葉に横から覗いていた有が呆れたように呟いた。

「ま、まあそうとも言うわね。つまり貴女達が言うにはあれもその影だっということね」

「ええ恐らく。しかしさっきのように人を襲うことは無かったのですが」

「どういふことかしら？」

「今まで確認された影はただそこに存在するだけで人を襲うことはありませんでした。行動としても何かを探すように空を飛んだりするだけでした。ですが……」

今までずっと徘徊していた男性が急にソファに近寄ってきた。

「あいつは明らかにその女を狙っていた」

彼はドカッと大きな音を立てて女性の横に座る。その鋭い目は有

を見据えていた。

「ちよつと玄、失礼でしょ」

「うるせえ」

有は彼の態度に怯えて私に擦り寄ってきた。その細い指は私の袖を握りしめていた。

「しかもあんた、影に干渉できていたろ」

そう言えばそうだった。あの時は気にならなかったが、有の壁はあの男の黒い腕を確かに止めていた。

「確かに玄の言う通りね。普通はありえないことだわ」

少女にも見つめられて有は俯いてしまった。

「……………先に言わせてもらつわ。彼女がどんな者であろうとも、私、一色朱水の管理下にあり、貴女達に関与される筋合いは無いわ」私の言葉を境に場はしばし静まり返った。そして再び女性の口が開かれると、

「その言葉に答えるなら『上が彼女を危険因子と判断した場合、貴方が彼女を排除しないならば我らが直に手を下す』でしょうか。とにかく我々にそのようなことを言われても意味が無いということ確認しておきます」

その目は急に冷たさを持った。それは零度を遙かに下る氷の眼、まゆ先程までとはあまりに対照的な笑顔であった。

「『共存提言』、忘れたわけではありませんね。私達の関係はそれが前提です。それだけは忘れないでくださいね」

気持ち悪い。彼女の表情は笑顔だ。しかし私はそれをキモチワルイと感じた。

「……………分かってるわ」

「もちろん私達も無用な殺生を望んでいるわけではありません。友好的にやりましょうよ」

そう言つて彼女は握手を求める。仕方なく私も手を差し出すと彼女はしっかりとその冷たい手を繋げた。

(殺し屋共がよくもそんな言葉を吐ける)

「朱水」

形だけの握手のために一度離していた手を有は再び繋ぎ求めてきた。

「……………ええ」

その手を握り返す。その手は暖かった。私はそれだけで苛立ちを少しだけ解消できた気がした。

「話を戻させてもらいます。彼女は先程壁のようなものを召喚しましたね」

やはり有の力について問うか。どうせ削強班のことだ、有の力を隠した所で直ぐに調べ上げるであろうからこちらから出そう。何より重要なのは『私が有の力を理解している事』なのだ。それを分らせるためにはこの場で正確な情報を口に放り込んでやっておいた方が最善と思われる。上に立つ者が把握制御できているか、それも危険因子認定において重要な要素となるからだ。

「召喚ではないわ。創ったのよ」

女性はその言葉だけで有がどれだけ稀有な能力の持ち主であるかを理解したようで、有の顔をじつくりと観察していた。有の方はどう反応していいか分からずとりあえず照れ笑いを浮かべていた。

「ならば干渉できたその故は？」

「彼女の能力か、壁の力か、そのどちらかね」

「そうですね。なら彼女が襲われた訳は？」

「分からないわ。それには全く思い当たる節が見当たらないのよ」  
「何故有が影とやらの襲われなければならないのか、そんなことが知りたいくらいだ。」

「わかりました。とりあえずその書類に判を押していただきたいのですが」

書類に目を通す。

「朱水……………」

「簡単な話、私の領地内での影の探索への許可が欲しい、ということね。……………分かったわ」



鈴を鳴らし、智爺を呼ぶ。ああいう物が領地を荒らすならば魔狩り者達に狩らせておいた方が良さそうだ。

「お呼びでしょうか」

「判を持ってきてちょうだい」

「かしこまりました」

朱水は執事さんが持ってきた判を書類に押した。その行為を二人はじつと監視していた。

「これで良いのよね」

「はい。それとこれは別件なのですが」

男の人が彼女の言葉に割り込む。

「さっきの影のことだ。今までは逃げられ続けていたが……」

男の人は私を指差した。

「わ、私？」

「あなたは影に目をつけられていた。これを利用しない手は無い」

それを聞いて朱水の眉が上り上がった。

「彼女を囮にするとでも言うのかしら？」

私を……囮に……？

「言葉を飾らないならそういうことになりますね」

女の人も笑顔のまま私に手を向ける。

「貴方がいるだけで状況が一変するんです。是非、御協力を」

「あの、わ、私……そんなこと言われても」

できるわけがない。いや、囮にできるできないも無いかもしれないが、それでもやはり私の様な未熟者では犬死してしまうのではないだろうかという怖さがある。アレを見た後ではそんな言葉がすでに確信レベルまで行きついている。

朱水が私の口を手をかざし黙らす。

「私がおんなな事を了承すると思ひ？」

朱水が睨みを利かすがそんなの気にせず彼女は変わらぬ表情で答える。

「無論、交換条件を出します。まず、彼女の安全は私達が出来る限り確保します。そしてもう一つ、彼女が仮に危険因子の候補として名が出た場合、我々が可能な限り擁護します」

女の人が自信満々に言った。

「擁護つて、貴女達はそんなに顔が利くのかしら」

朱水が呆れた口調で言うと、女の人は誇らしげに名刺を取り出して私達に配った。

その名刺には『国営機関削魔遂行部強行班 実行部 高海鏡』と書いてあった。

「……………そう。貴女が『逆十字』さかじゅうじだったのね。なら彼は」  
「やかたひかる矢岩玄だ」

男の人は面倒臭そうにそれだけ言う。

朱水は二人をしばらく睨みつけていたが瞼を深く閉じ、納得したように言った。

「分かったわ。貴女達なら少しは頼りに出来そうですからね」

ただ領地外の事なので先方にはこちらから連絡をとっておきます、そう朱水は続けた。その口調は既に感情的でなく事務的な感じになっていた。どうやらさっきの名刺の威力は相当な物だったらしい。

「ご理解頂き光栄です。このことは明文化することは出来ませんが我々四人が各々誓いましょう。それでは我々は……。ほら、玄、行くわよ」

そう言つて女の人は男の人の手を思いつき引つ張った。

「引つ張るなよ、いつてえな」

女の人はそのまま男の人を引つ張つてずかずかと部屋を出て行ってしまった。

「爺、御二方がお帰りになられるわ。玄関まで案内して頂戴」

その様子を一切見ずに朱水は執事さんに命を下すのだった。

「かしこまりました」

「何なのかしら、あの非常識ぶりは」

二人が屋敷を出ていったことを執事さんから報告されると、朱水はソファに寄りかかり目を閉じた。疲労困憊、まさにその様子である。

「さっきの人達、何なの？」

朱水がああも簡単に噛みつかなくなるなんて余程の人達なのだろう。

「女は『逆十字』、男は『穿せんの狩人』と呼ばれていて、二人は削強班で『双犬そうけん』とも呼ばれているわ。とにかく厄介な人達でね、変な噂ばかり立っているのよ」

「変な噂？」

「ええ、まあね。口にしたくもないけれどね。まあ、彼女達が所属している班自体が奇人の巣窟みたらしいですけど」

朱水はゆっくりと私によりかかってくる。ふわりと髪の毛の匂いが鼻をくすぐった。

「ねえ有、膝……貸してくれないかしら？」

「うん？ 別に良いけど。どうしたの？」

朱水は私の膝に頭を乗せるとそのまま目を閉じた。綺麗な顔がこも近くにあるとドキドキするよね。

「ちよっと疲れちゃってね。ふふ、有の膝は気持ち良いのね」

「ごめんね、私がいるから……」

私の所為で朱水はどれだけの心労を抱えるようになったらどうか。朱水が私の顎に手を添える。

「やめてよね、そういうことを言うのは。貴女は私の物、そうでしょうっ？」

「いや、いつの間になくなったのさ」

「あら、違ったかしら。まあ良いわ。今はちよっと寝かせ……て……」

本当に疲れていたのだろう、朱水はそのまま滑る様に寝てしまった。そのスカートは大きくはだけたままで白い足がぎりぎりなところまで露出していた。いつもそういうところには注意している朱水らしくない。その白さを目に焼きつけながらもスカート也正してあげる。

そしてその口には、

「でも……………涎はなしだよお、朱水い」

その口からは涎が垂れ落ちていた。ホント、朱水らしくない。拭ってあげたくても今顔に触れたら起こしてしまうのではないだろうかという心配が頭を過り手は宙で止まった。朱水は私の心配など余所に眠りこけている。相変わらず涎はしっかりと跡を残したままで。

でも、私はこんな朱水も好きなんだと思う。朱水の綺麗で残念な寝顔を楽しみながらそう感じた。

第二話 似て非なるモノ / 5 (前書き)

長いです。携帯で見て下さる方には不親切な書き方です。すみません。先にワードに書いてそれをコピペしてここに書き込んでいます。め長い文章のまま掲載させてもらってます。それでも読んでくださる方には私は感謝の限りであります。

5

「いらつしやいませ」

今日は久しぶりに隣町の大きな本屋に来た。朱水との一件以来この店には来られなかったけど、学校の試験も終わり状況もだいぶ落ち着いてきたから久しぶりに足を運んだのだった。ここは大きなフロアを二つ使つての本屋なので田舎に不釣り合いな大きさだ。今日も沢山の人が少し気の早い冷房が利いている本屋に入り浸っていた。たとえ田舎でも本だけは通信販売の力を借りなくていいと言われるほどの品ぞろえである。

それにしても久しぶりの本屋はやっぱり発見が多いね。

あ、これの続き出ていたんだ

へえ、この本面白そうだな

ん、この表紙絵、かわいいなあ

そんなことを考えながら店内をふらりとしていると、

「うわっ」

目の前にある光景があまりに意外だったからお店の中だということとを忘れて声を上げてしまった。私の声で幾人かのお客さんはこっちをチラリと覗いた。

思わず手に取っていた本を落としてしまい、その音でその人は私に気づく。

「ああ、あんたか」

目の前にいるのは確か矢岩玄つて男の人だ。昨日と違って眼鏡をかけているけど、間違いない昨日の男の人だった。黒い髪をぼりぼ

りと掻きながら面倒そうに言った。

「自分で落とした物も拾えないのか」

そう言いながら私の足元に落ちていた本を拾ってくれた。

「あ、ありがとうございます」

「ああ」

ぶっきらぼうに拾った本を手渡してきた。

「あの、矢岩……さん？」

「ん？」

これまた面倒くさそうに矢岩さんは応答する。

「昨日とは随分雰囲気違いますね」

「あのさ、あんた俺より年下だけど別に敬語使わんでいいから。大して変わらんし」

「そ、そう……なら矢岩君」

「だから何？」

矢岩君は呆れたような顔をする。

(うう、やっぱり昨日と同じかも)

私が何とか話を続けようと考えていると彼はボソリと呟いた。

「うわ……子供」

「え？」

「ガキだな、あんた」

その視線の先にあるのは私の持っている少女漫画と少女趣味な小説だ。高校生だってこれくらい読んでもいいと思うんだけどおかしいのかな？

「……べ、別に良いですよ」

ばつが悪く慌てて後ろにそれらを隠すが矢岩君の表情は相変わらず厭味色だった。

「あんたは見た目通りだな」

冷ややかに笑う。そういう矢岩君も見た目通りに厭味つたらしいよね、と言ってみたいが相手が怖い人だったことは重々承知しているのでとてもじゃないがそんな台詞吐けなかった。臆病な訳じゃない

い、君子危うきにつてやつさね。

「私、そんなに子供に見える？」

身長はクラスの人達と比べると高いほうだし、毎日見る顔も子供っぽくはないと思う。まあ、朱水には負けるけどさ。あらゆる物が私より優れている朱水に唯一勝っていると思うのは髪の毛の長さくらいだ。その髪だつて後ろで少し束ねているだけだけど、子供っぽくはないと思う。

「いや、見た目というよりは雰囲気だな」

私の手にある本をまた奪い取った。まだそれを使って私に厭味言うのか。

「似ているんだよ、俺の知り合いに。趣味がまったく同じだしな」  
少女漫画の表紙を私の目の前に突き出す。ついでに同じ漫画を手取るうとしてしている小学生と思しき女の子を目線で指してきた。私が小学生と同じだと言いたいのだろう、実にむかつきやがります。それに最近の小学生はおませさんなんだゾ！

「あ、ちなみにそいつは十三歳だから」

……………どうして私はこんなに苛められているんだろう。誰か教えて。

その本を奪い返すと、突然無愛想な顔をした矢岩君の後ろから可愛い声がした。

「ちゃーす。先輩、ここにいたんですね」

静かな店内に大きな声が響き渡った。私が言うのもなんだけど、場所を考えたほうが良いと思う。店員さんと他の客がこつちを睨んでいる。いや、その睨みの一部は間違いなく彼女の大声以前から向けられていただろうけどさ。

その声を聞いた途端、矢岩君の顔が歪んだ。苦虫でも噛んだ様にびっくりするくらいの豹変っぷりだった。

「何すか？ 何すか？ 密会ですか？ 鏡先輩に言っちゃいますよ」

楽しそうな声の主は小さな女の子だった。アイシスと背丈は同じ



くらいだけど、雰囲気は真逆だ。アイシスは氷で出来た花みたいな印象だが、目の前の女の子は爛漫としている真黄色な花みたいな印象だ。ついでに蝶とか蜂とかが辺りに飛びまわっている感じだね。

「これから鬼神さんの家に行くのに余裕っすね」

親指だけ突き立てたグーを披露する。なんかまた面倒な状況になつてきたようだ。

「少しは声量を小さくしろ。まあ何だ、こいつが今言っていた奴だよ」

女の子を指差しながら言う。矢岩君の顔は変に歪んだままだ。

「うわゝ、その女の人はあんなに楽しそうに話していたのに自分にはその態度っすか？ これは益々鏡先輩に報告しなきゃですね」  
「きやつきゃ、そんな明るさをばら撒きながら彼女は吼える、吼える。間違いなく彼女は他人の目は気にしないタイプの人種だ。」

「うるせー、うるせー。もう行くぞ」

矢岩君は逃げるように早歩きで店の外へ向かってしまった。

そして何やら残された女の子がこつちを爛々とした目で覗いてくる。これは助かったんでなく厄介事をパスされただけみたいだ。

「えっと、何かな？」

その強烈な視線に私は無視できなくなりとりあえず尋ねた。

「こんちゃーす。自分初めてあんな楽しそうな矢岩先輩を見ましたよ。お姉さん、やるねえ」

私の目の前に再び親指を立てた拳が突き出される。相変わらずの大声付きだね。

「はあ。あのさ、矢岩君を追わなくて良いのかな？」

何とかこの状況を打破するべく逃げた餌の方を今一度彼女の鼻先に押しつける。

「うへっ、そうでした。じゃあねゝ、お姉さん」

良かった、狙い通り女の子は大声で叫びながら店の出入り口に走る。いい加減その目立つ声で人様の注目を集めるような行為はやめて欲しいかなあ。

「はあ、何なんだか」

店員さんからの視線がどんどん冷たくなってきたのでさっさとレジに並んでお店を出た。店員さんは何も言わなかったけど対応が無言だったから間違いなく怒ってたね。きつと合わせていなかった目を合わせた瞬間彼の口からは注意の言葉が飛び出しただろう。

何だかどつと疲れが溜まった気がする。本当はこのまま帰りたいたい気分になってしまったが今日は朱水に呼ばれているからとほとほと歩を進める。まあ朱水の顔を拝む頃くらいにはさっきの事も喉元過ぎているだろうから気にしない気にしない。

だけど二十分程歩いて私は確信した。今日の私には運が無いということを。

「ちゃーす。また会いましたね」

「……………ちやーす」

さっき分かれたはずの二人と信号待ち中にはったり出会ってしまった。応える気力が無かったが彼女の熱い視線はそうすることを許してはくれなかった。やる気のない挨拶を返した。

女の子は何故か私の腕に抱きついてくるし。この子くらいの小さい子にそういう事をされた事が無い私は少し照れくさかった。

「えへ〜。鏡先輩とは系統が違うけどやっぱお姉さんも美人さんっすね」

そう言いながら私の腕に抱きつく力を強める。その可愛いお口からは八重歯が覗いていた。

「えへ〜」

上目遣いで覗いてくるこの少女を見ると誰かを思い出す。…ああ、朱水だ。確証は無いけど朱水と同じ匂いがするよ。

私達が視線をぶつけ合っているのに呆れたか、矢岩君は赤信号の中を歩き出した。

「先行くわ」

ようやく青信号になった時にはもう矢岩君の姿は遠くの方にあっ

た。私の腕にしがみついたままの少女は相変わらずの上目遣いである。だからどうして胸を押し付けてくるのさ。私はそういう趣味じゃないんさね。たまたま好きになった人が女の子だっただけで、女の子が好きってわけじゃないよ。

そんなことを頭の中で叫んでいた私に少女は進むように促す。進みたいなら私から離れば良いのに。

「良いじゃないですか。さあ、行きましょよ」

私は少女に引っ張られる格好で横断歩道を渡る。正直自分が見つともない。

「お姉さんは何て名前なんですか？」

横断歩道を渡り切ると同時に私の腰に抱きつきながらそんなことを聞いてくる。可愛いのは認めるけど私は女だ。そんなことをされても微塵も嬉しくない。た、多分ね。

「君は？ 人の名前を尋ねる前にまずは自分の名前でしょ？」

すると少女は何故か手を挙げながら自分の名を名乗りだす。

「自分、菅江由音、言います。お姉さんになら由音ちゃん等と呼んで欲しいです。後、玄先輩とは何の仲でもないので安心して欲しいです」

いや、矢岩君との間柄なんて聞いてないから。

「あれ、なら由音……ちゃんも矢岩君と………あー、えっとー、その……同業なの？」

イメージとして削強班だなんて一般人に言ったらまずそうなので同業という言葉に誤魔化す。由音ちゃんが削強班だとは限らないからな。

「あれれ？ どうしてお姉さんが先輩の所属を知ってるんすか？ まさかお姉さんが一色さん？ イメージと違うな」

由音ちゃんはじろじろと見つめながら私の周りをぐるぐる回りだした。

「私は一色朱水じゃないよ。尼土有って言うの」

由音ちゃんは顎に手をやったまま考え込む。

「あれ、おつかしいな。お姉さんが鬼神さんの名前を知っているくらいならお姉さんの名前も報告されていて然るべく、なんだけどな」

由音ちゃんはそんな独り言を呟く。だけれどその声は周りの人みんなが聞き取れるくらい大きかった。この言い方なら由音ちゃんは削強班であっているみたいだね。

それよりも気にかかることがある。

「ねえ、由音ちゃん。『鬼神』って何？もしかして朱水のことなのかな？」

私のその言葉を聞くとますます由音ちゃんの頭の中はこんがらがってしまっただらしい。ううう唸り始めてしまった。

「はえ？一色さんのこと知っているのに鬼神を知らないんですか？はえ？」

そんなこと言われても知らないものは知らない。きっと私達を特殊な眼鏡で見たら周りにクエスチョンマークが沢山浮かんでいるだろう。

「ねえ、もしかして由音ちゃんと矢岩君は朱水の家に向かうところだったのかな？」

先程の二人の会話から察するにそういう事だったのだろう。由音ちゃんは思考が付いてこられていないのか、ただ頭をかくかくと下に振る。片方しかないサイドアップが大きく揺れた。今は可愛かったなあ。

「だったらとりあえず朱水の家に行こうよ。矢岩君も困っていると思っし」

由音ちゃんはまた頭を上下に振り、私後に少し離れて付いてきた。時々、うううと私の背後から聞こえるけど無視を決め込んだ。私にだつてわからないんだから助けようがないもんね。

「遅い」

朱水の家の門まで来ると案の定、遠目からでも「自分、怒ってます」みたいな雰囲気。矢岩君がいた。ただでさえ鋭い目つきなのにさらに眉が吊り上がることで鬼の形相となっていた。

「何していたんだ？ 菅江、あいつが時間に厳しいこと知っているだろ」

由音ちゃんは腕時計を確認し、口をパクパクさせた。何やら大変なことになっているらしい。

「高海はもうとっくに着いているぞ」

そう言いながら矢岩君は門を勝手に開けて入って行ってしまった。門と玄関とを繋ぐ道では柵ちゃんが花に水遣りをしていた。あちやあ、矢岩君、怒られそう。

矢岩君に気付いた柵ちゃんは手にしていた如雨露を地面に置き、足を軽く開いた。臨戦態勢とでも言うのだろうか、緊張が走る。

「まずい、争い事になりそうだ。」

「く、柵ちゃん、その人はね……」

「存じています」

そう言うと、そのままの格好で矢岩君が横を通るのを黙って見届けた。

矢岩君は気にした様子も無く、そのまま玄関に入ってしまった。それを見て、由音ちゃんも慌てて追いかけていった。

二人が屋敷内に入ってしまった後も柵ちゃんは身構えたままであった。

「あのく、柵ちゃん？」

私の声が聞こえると急に柵ちゃんの構えが緩んだ。その顔は安堵に和らぐ。

「大丈夫？」

その質問に頷きで返し、再び如雨露を手に取り、水遣りを再開し始めた。

「男の人……」

「はい？」

花を見ながら柵ちゃんは小さく呟いた。

「私、男の人が苦手で……」

それはさっきの行動の言い訳なのだろう、顔を赤く染めながら呟いた。

「でも、あの女の子は可愛かったですねえ」

頬に手を当てながらため息交じりにさらに呟いた。たまに左右の小さくこさえた三つあみを弄ぶ。

……顔が赤いのはそっちの理由ですか？

「は、はあ。それじゃ私も朱水に用があるから……」

その様子を何故かじつと見ていた私は今日ここに来た理由を思い出し慌てて柵ちゃんにお別れを言った。

「お嬢様は応接間にいらっしやいます」

ありがとうとだけ言って私も屋敷に入った。あの感じじゃ言っても無駄だったろう、さっきから如雨露から水が出てないって。

「お嬢様、尼土様がいらっしやいました」

「通して頂戴」

先程から私の前にはずっとにこにこしている女性がいる。高海鏡である。

「意外ね。貴女のこと嫌いじゃないわ」

「貴方は良くそいうことを堂々と言えますね。感心しますよ」

矢岩玄を門で待っていたというところを、梓が見つけ、私に報告したのだ。そこで私がこの応接間に通したというわけだ。

二、三十分会話したのだが、なかなかどうして話が弾む。彼女は噂と違って結構にまともだった。まあ上辺だけの人間の皮かもしれないので距離を置くのは当然だが。中に潜む獣が露見した時に対処できる状況になくてはならない。

「私も驚きました。貴方が人間と普通の会話をするなんて考えませ

んでしたから」

いえ、もちろん貴方が頭首という立場の魔の中で滅法人間に友好的なのはかねがね承知していましたが、と彼女は言った。それはそうだろう、まさか他の頭首の城に何の事前申請も無く二人で行けるわけがない。嘗められているという言い方は癩だが遙かに他の魔より軽視されているのだろう。いや、無論かつての事を知っているのであれば私が決して嘗めるに適さないと言う事はその心に刻んでいくはずであるが。

「別に、人間が嫌いというわけではないわよ。私は情報漏洩防止のために一般人は相手にしていませんだけよ。ついつつかり、ということが無いとは言えないでしょうからね」

でしょうねと彼女の適当な相槌を眺めていると再び爺が戻ってきました。

「矢岩様も来られていられます」

「彼も通して頂戴」

しかし私の言葉が終わる前に爺の隣から矢岩玄が応接間に勝手に入り込んできた。

「すまん、遅れた」

第一声は主である私で無く高海鏡に対してであった。失礼極まりない。

「珍しいわね。貴方らしくない」

「こいつの所為だ」

そう言つて背中にいた女の子を私達の前に突き出した。

「こ、こんにちはです」

小さい子だったが双犬が連れてきた人間だ、甘く見るつもりは無い。

「由々音々。貴方ね」

「すみませ〜ん」

「は、あなたは本当に時間に厳しくないのね。まあ良いわ」

高海は再び私の方に振り向き鞆から書類を取り出した。

「こちらは全員揃いましたので、いつでも始められますが」

「有にも勿論同席させるわよ」

「でしようね」

彼女は軽く笑うと自分の持っている書類に目を通し始める。ふと横を見ると彼女らの後輩らしい少女がこちらをじつと見つめていた。

「何かしら？」

少女は私が自分に話しかけてくることに驚いたのか両手をバタバタさせながらしどろもどろに答える。これが本来の私に対する正常な態度であるはずだが双犬の様な輩はそれがなっていないわね。

「い、いえ……噂通りだなんて……思っただけで」

「何かしら？ 私が怖いのかしら？」

少女は首を左右に振った。私の噂ならばろくな物で無いだろう。徒に恐怖心を煽るだけにすぎない。

「なら何かしら？」

「そ、その、綺麗だな……って」

人間は私をどういう目で見ているのだろうか？ 私を捕まえて選りにも選って綺麗ですって？ 呆れるわね。しかしこの子を馬鹿にしても無駄なので適当に返しておく。

「そう？ 貴女もなかなか可愛い顔しているわよ」

「あの、気にしないで下さい」

溜息混じりに高海が間に入る。

「この子、綺麗な女性を見ると必ず今のようなことを言っていますから」

「ぶ〜。本当に見蕩<sup>みど</sup>れていたんですってば」

あら……何故か高海と少女のやり取りを見ているとぞくぞくしてきたわ。私ってばどうかしたのかしら。

二人のやり取りが繰り広げられているとコンコンとドアがノックされる。

「はい？」



「朱水、ちよつと開けて。両手が塞がっているの」  
有の声だ。何かを持ってきたようだ。

「あ、自分がやるっす」  
そう言つて少女がドアを開けた。

「あれ、由音ちゃんか。ゴメンね、もうちよつと開けてくれない？」  
有がティーカップの載つたトレイを持って入つてきた。その後ろには椒が不機嫌な顔をしながら大きなティーポットを持っていた。エレベーターが無いので台車が使えない故に彼女達は常に手で物を運ぶしかない。

「遅いと思つたら椒を手伝つてくれていたの？」

「朱水様、私は何度も断つたのに尼土様が無理やり……」

遅れた原因が自分であると言われたのだと思つたのだろう、椒はやや興奮しながら言つた。

「別に遅れたことには何も感じてないわ。それよりその態度では折角手伝つてくれた有に対してあんまりじゃないかしら？」

椒は渋々といった感じに頷く。

「良いんだつて。確かにちよつと強引だったかもつて思えるし」

有も有で自分の所為で椒が窘められるのが不憫に思えたのだろう、間に割つて入る。

「……もう良いわ。椒、皆に紅茶を淹れてあげて」

椒は有が机に置いたティーカップに紅茶を静かに淹れる。しかしその独特の音の中に溜息のような音が混じつていた。

「おおおお」

その音の主は先程の少女であつた。少女は今度は椒に見蕩れているようだ。確かに椒は日本人には無い雰囲気があるので興味を大いに惹くのだろう。

「そう言えば貴女の名前をまだ聞いていなかったわね」

少女はビクツと跳ねこちらに振り向いた。

「あ、そうだったすね。自分、菅江由音、言います」

「朱水にも由音ちんつて呼んで欲しいの？」

有がくすくすと笑いながら意味不明なことを訊いている。

「いえ、滅相も無いです！ 正直、一色さんにそう呼ばれたら失神してしまいそうっす」

「だつて」

有は相変わらず笑っている。何なのだろうか。

「それより貴女、椒がどうかしたのかしら？」

「いえ、こんな可愛いお手伝いさんがいるなんて思っていなかったの……」

ははあん、大体この子の性格がわかってきたわ。

ベルを鳴らして智爺を呼ぶ。この子なら面白い反応が見られそうね。それに客人を持って成すくらいは例え人間でもやってあげましようかね。

「何で御座いましょうか」

「皆をここに集めて頂戴」

「畏まりました」

「ふうおお〜。何すか？ 何すか？ ここは天国う？」

何を思ったか、朱水が応接間に槐さん達を集めたんだけど……。

「うおおお」

由音ちゃん、椒ちゃんを含め、部屋に入ってきた計六人の女の子達を見て奇声を発している。

「紹介するわ。左から槐、槿、梧、椒、櫛、梓よ」

槐さん達は朱水が名前を呼ぶたびにお辞儀をする。どうやら朱水が言っていた事は本当の様で、椒ちゃんは三人に対しては決して不機嫌な顔は作らなかった。

「あらあら、可愛い方ですね」

槿さんが腰を屈めて由音ちゃんの顔を覗き込みながらにこやかに微笑む。うわ〜、お姉さんの微笑みって感じ。

「ふふ、柵もそう思っているようね」

「……………」

槐さんの言葉に柵ちゃんもコクコクと頷く。

「どうかしら、由音ちゃん？ 気に入っていただけたかしら？」

「は、はいい！」

由音ちゃんは感動のあまり涙を流している。

「本当はもう一人、枳というのもいるんですけど……………」

朱水その声に椒ちゃんがピクリと反応したが、何も言わなかった。

しかし由音ちゃんの後ろで椅子に座ってずっと見守っていた高海さんと矢岩君が急に立ち上がった。

「七人！ まさか彼女達が……………」

「鬼神城……………日本屈指の完成霊術……………」

二人の反応は尋常じゃなかった。怖いくらい目を見開いて朱水の使い魔さん達を睨みつけている。

「そうよ。貴女達の仲間が死ぬほど欲しかったものよ。まあ実際に死んでいただきましたけどね」

朱水は微笑みながら挑発的な目を二人に向ける。

鬼神城って何だろう。

「ええ！ この人達があゝの鬼神城なんすか？」

由音ちゃんも大声を出した。四人にとっては常識の様な物なのだろうか。

「噂とは大違いだな。屈強な男供だとか異形の者だと聞いていたが」

「そうね。こんなに綺麗な女の人達とは思っていなかったわよ」

二人も使い魔さん達に近づきじろじろと観察し始めた。

「あゝ、鬼神城って何？ あ、そうそう、鬼神っていうのも何のことか教えて欲しいんだけど」

何だか私だけ取り残されていて寂しい。それに気づいた朱水はちゃんと説明してくれた。

「鬼神とは人間達が勝手につけた私の異名よ。前にちよつとした事

件があつてね、その際につけられたのよ」

「事件？ 何があつたの？」

それにはまだ緊張の顔をした高海さんが答えてくれた。

「簡素に略すと異国の第二駆除者、つまり日本で言う魔が作った組織と日本の魔達との間に起こつた争い事ですよ」

「組織つて」

今度は矢岩君がその質問に答える。これまた怒りにも似た形相だった。

「魔が作ったといつても最後には組織の過半数が魔法使い、つまり人間だった。結局は人間と魔との殺し合いになつたつてわけだ」

矢岩君は『殺し合い』つて言う時に朱水を睨み付けた。朱水はそれを涼しい顔でやり過ごす。

「殺し合いつて言つても実際は人間達による一方的な殺戮だつたんすけどね。で、魔の犠牲者が二百人程になつた頃、襲われていた地域の魔が、ある一人の女性の魔に助けを求めたんすよ。それが……」

「……一色朱水」

削強班の三人の声が重なつた。誰一人としてその名を軽い口調で言つた者はいなかつた。

「彼女の姿を見た者で生き延びることが出来た者は、彼女を畏怖の念を込めてデーモン、鬼神と呼んだと言われているつす」

「現代の化け物つて事だ」

「あら、言つてくれるじゃない」

朱水が矢岩君と高海さんに歩み寄る。

「双犬、貴方達二人に言われたくないわね。殺した数なら貴方達の方が圧倒的に多いじゃない」

「冗談じゃない。たつた二・三分で魔法使いと魔を七十人余り消し飛ばした奴が化け物じゃなかつたら何だつて言うんだ」

朱水と矢岩君が視線をぶつけ合う。部屋の温度が急激に下がつたつて感じた。

「あ、じゃあさあ、鬼神城つて言うのは？」

このままじゃ何か起きてしまいそうなので慌てて話題を変えた。

「鬼神城、鬼神を守りし城壁、魔王の家系に残りし四宝しほうが一つです。因みに四宝とは我々が所有する絶対魔法具に匹敵する、否、実際に使われることを想定したらその比ではないとさえも言われている魔具の事です」

「それが使い魔さん達なの？」

別に六人は私達とは違う様には見えないんだけどなあ……。

「私共は朱水様を守るためにある存在です。朱水様にかす傳く存在です。それ以外の何者でもありません」

槐さんは幸せそうにそう言った。他の五人も皆似たような表情で頷く。

「正確には彼女達の肉体こそが魔具なのです。彼女達は本来肉体を持たない者ですが、鬼神城という魔具に特別な靈術を施すことにより世界に存在し続けることが出来るのです」

「良くそこまで知っているわね」

朱水が呆れ口調で苦笑する。

「当然だ。四宝の一つが行使されたんだ。無視などできやしない。随分大事なんだな」。

……あれ？

「さっき魔王がどうか言わなかった？」

魔王の家系だとか……。魔王ってあれだよな？ RPGとかでラスボスとかになるあの魔王だよな？

「ああ、言ってなかったわね。一色家は曆れつきとした魔王の家系よ」

朱水は何でもないことのように言う。そんなにあっさり言うものなのかな。それに魔王の四宝だなんて……。そんな事より魔王という物が現在でも存在している事に何より驚きだよな。

「そんなに凄いものなの？」

その私は何気なく言った言葉は一人の怒りを買ってしまった。

靴音をわざと大きく立てて椒ちゃんが私の目の前に立つ。その赤い目をした少女はあからさまにいらついていた。

「ええ、凄いですとも、尼土様。私共は本来存在することは許されていない存在、在ってはならない存在なのです。死者を生き返らす等の、以前よりあった存在の再生・複製の様な術とは段違いの格なのです。そこら辺の使い魔と一緒にしてもらっては困りますね、尼土様」

椒ちゃんは私の襟を（とても強い力で）正しながら微笑む。

「椒、止しなさい」

椒ちゃんは槐さんに大人しく従い、もといた立ち居地に無言で戻ったが、立つたままらずと私を睨んでいる。私、本当に嫌われているのかな。他の人とは明らかに態度が違うんだもん。

朱水が皆の注意を促すために手を打つ。

「そろそろ本題に戻ろうかしら」

「昨日言った通り影を剪滅せんめつするために 彼女の協力を要請します」  
高海さんは私に対してではなく朱水に対してそう話し始める。彼女にとって私は朱水の部下のような存在でしかないのだろう。

「ええと彼女の名前は……」

「尼土有さんつす」

由音ちゃんが手を挙げて答える。別に自分の名前を答えているわけじゃないのに。

「あら由音、貴方知り合いだったの？」

「さつき外で会ったとき聞いただけだろ。まあ遅れた理由もそれだろうな」

矢岩君の言葉に由音ちゃんは「いやゝすまないっす」と笑って誤魔化す。この二人は傍から見ているなかなか良い関係だと思ふ。矢岩君の由音ちゃんに対する嫌味は何処と無く親愛の含みを醸し出しているような気がする。私に対するそれとは大違いだった。

「そう。尼土さんの手を借りる事は納得していただきましたが、今日はどのようにして影を拿捕または剪滅するかについて決めたいと

思います。玄、アレを」

矢岩君が鞆から紫色の布に包まれた細長い何かを取り出した。

「本来、貴方達に教えてはならない物なのですが、貴方達の信頼を得るために我々が所有する式典兵器と神器の一部をお見せします」

布からは剣の様な物が三振り姿を現した。

「そちらから見て右が『停滞』、真ん中が『不屈』の意紋いもんが刻まれている式典兵器です」

右側の剣と真ん中の剣はちょっと見ただけでは同じ物に見えるが、よく見ると細かい傷のようなものがびっしり刻まれていて、微妙に違う模様となっていた。

「そして左が神器『妨氷ほつひょう』です」

「これがそうなの。まさかここまで名高い代物を見せてくれるとは思わなかったわ」

「そんなに凄いものなの？」

妨氷と呼ばれている剣は刃の部分が波状になっている。

「お前達魔は人間を遥かに超えた回復能力がある。しかしこの神器によって傷つけられた魔は簡単には回復できない」

矢岩君は妨氷を構え机の表面に小さな傷を作った。

「あれ？ 霜みたいのが」

傷をなぞった様に白い氷が張った。

「傷口に氷が張り、回復を妨げる。だから妨氷。単純な名付けね」

「まあ、名前なんて利便上のものでしかありませんから。これを使えばある程度の者は簡単に剪滅できます」

へえ、なんだか凄い物だって事はわかった。

「貴方達の得物はわかったわ。それと私はずっと有の近くにいる良いのかしら？ 有は私が守りたいのですが」

「構いません。なら我々三人を中心に貴方達と影が反対の位置にある様な陣にしましょうか。何か異論は？」

「異議無しっす」

「構わない」

「良いわよ」

私もこくこくと頷いておく。あまり自分のことだと実感できていなかったが皆が同意するから取り敢えず自分も同意の意を示しておく。

「場所はその子沸神社と言う所で良いな？ あそこなら人払いをわざわざする必要がなさそうだからな」

「そうね、あそこで良いと思うわ。で、他に決めることは？」

「そうですね、後は我々側の規則通りにしますからこれと言って決めるべきことはありませんね。由音、便覧を持ってきてる？」

「あゝ、どうでしょうか、ちょっと待っててください」

由音ちゃんは鞆の中をガサゴソし始めた。見た感じ、彼女は書類などを兎に角ファイルに溜め込むタイプだね。大容量のクリアファイルを複数持つ人はそんなにいないもん。

「おお、有ったつす。どうぞ」

私と朱水の前にやや厚い冊子が差し出された。朱水が開いたのを横から覗くと細かい文字でびっちり何かが書かれていた。とてもじゃないがまともに読みたいとは思えない代物だね。いくら本が好きでも注意事項とかは読み飛ばしてしまうそれと同じ。

「緊急時、つて所だけでも読んで頂けると幸いです」

「わかったわ。これは貸して頂けるのかしら？」

「ええ、大丈夫です」

高海さんはあっさり頷くが由音ちゃんは急に慌てだした。

「あつう、それはちよつちい……」

「まさか由音、まだ覚えてないなんて言うんじゃないでしょうね？」

「すつ、すいませ〜ん」

由音ちゃんは頭をペコペコ下げて謝る。高海さんはそれを『しょうがないわね』という感じに苦笑する。どうやらこの二人の関係も良好なようだ。由音ちゃんは皆に好かれるタイプでもあるみたいだ。そんなやり取りを気にせず冊子を読んでいた朱水が冊子を閉じた。

「はい、由音ちゃん、返すわ」



どうやら読むべきところは読み終わってしまったようだ。相変わらずの才能である。

「有には私が簡略にして教えておくわ。もうこれで終わりかしら？」

「はい、もう事前に決めることは無いでしょう」

高海さんは他の削強班二人と目を合わすが二人とも首を左右に振った。

「そう……」

朱水は私を見て何かを考え始めた。

「えっと、何？」

「今のところ貴女は力を伸ばしたとは言えないわね。だから久しぶりに使い魔達と訓練でもしましょうか」

その言葉を聞いて私の目は真つ先にとある使い魔さんを捕らえた。うつつ、梧さんとやっぱり目が合う。彼女は無言のままお辞儀をした。

「悪いがその訓練というものに俺も加わりたいのだが……」

矢岩君が鞆に剣をしまいながらそう言った。

「あら、どうして？ 穿の狩人と畏怖されているお方が何故そのような事を？」

「鬼神城と手合わせさせて欲しい」

「そう……良いわよ。ただし一人とだけよ、他はさせないわ。で、何人も魔を殺してきた人はどういう娘が好みなのかしら？」

朱水は馬鹿にしたように嘲るが矢岩君は気にした様子も無く答えた。

「剣技に長けている者を」

矢岩君が顔を使い魔さんの方に向けると梧さんが一步前に出た。

「……私がお相手しましょうか。剣には自信がありますし、私も魔狩り者に興味がありますから」

その髪に隠れた右目は鋭い眼光を放っていた気がする。

「そうですね。私共の中で剣をまともに扱えるのは梧ぐらいですか」

槐さんも賛成みたいだ。他の使い魔さん達も何も言わないって事は賛成って事だろう。

「わかったわ。中庭に移りましようか。貴女達も見学するのでしょうか?」

「宜しかったら、の場合ですが」

高海さんは使い魔さん達の顔に目移りさせながら力無く言った。

「構わないわよ」

朱水はそう言い捨ててさっさと部屋を出て行ってしまった。槐さんもそれに静かに続く。

「では皆様、こちらです」

ずつと静かに立っていた執事さんが削強班の三人を先導していった。

「えへへ、尼土様は私共と行きましようか」

梓ちゃんがニコニコしながら私の手を引く張る。

「さっさと行きますよ。何をのんびりしているのですか。御主人様を待たせる様な真似は許せません」

椒ちゃんは蔑む様な口調で急かせる。

「そうですねえ。そろそろ行かなきゃまずいですねえ」

権さんはのんびりとそう言う。

「では私と柵は得物を取ってきます」

梧さんと柵ちゃんの二人は静かに部屋を出て行った。

「聞こえないのですか尼土様！ さっさとしやがれって言っているのです!」

.....椒ちゃんって.....いや、悪いのは私なんだ。気にしない気にしない。

「ゴメンね。じゃあ行こうか」

「行くです」

廊下に出たら梓ちゃんは「レッツゴ」と、私の手を取っていない方の手を挙げる。

「まったく、御主人様はこんな人の何処が良いのでしょうか」

ぶつぶつと呟きながら先に行く椒ちゃん。

私の後ろにはニコニコ微笑み続けている權さん。

前には元気よく手をぐるぐる回して歩く梓ちゃん。

少なくとも鬼神城と呼ばれている彼女達はそんなに怖がる必要が無いって事、そして私達と全然変わらないって事だけは私にもわかった。

「御嬢様、準備が終わりました」

梧さんと柵ちゃんが大きな木箱を持って中庭に現れた。柵ちゃんはびっくりするくらい大きな箱を持っていたが微塵も辛そうな顔をしていなかった。

「そう。なら穿の狩人からどうぞ」

「よろしく頼む」

矢岩君は軽く頭を下げると鞆から剣を二振り取り出した。

「それだけで良いのですか？」

梧さんは矢岩君の行動に何か疑問があるようだ。

「噂だと貴方は浮遊の魔法を使って剣を背に展開させるという独特の構えだったはずなのですが？」

「今回は人の力だけで何処まで通用するかを知りたいだけだ。人外と手合わせなんてそう簡単に出来ることではないしな」

そう言っただけで矢岩君は肩幅に足を開き構えた。

「エストックですか。左の剣を前に、右の剣を横に……………解せませんね、その構えは。左の剣はいなすためというのは解せますが、右の剣は私が持つ知識では考え付きません」

そう言いながらも梧さんは木箱から棒状の物と剣を取り出し、こっちは右手に剣を左手に棒状の物を持った。

「随分と短い矛だな」

梧さんの棒状のもの、矛って言う武器らしい。

「ええ。右手の剣との相性を考慮して短くしてもらいました」

「なら矛盾である必要があるのか？　そこまで短いと剣とさして変わらないだろうに」

「やればわかります」

「そうか。なら俺の構えもやればわかると言うべきか」

そして二人は無言で睨み合う。

「二人とも用意はいいわね。それと有、ちゃんと見てなさいよ」

「う、うん。大丈夫」

「そう。なら……始めっ！」

朱水の掛け声と同時に矢岩君が矢のように悟さんに飛び掛った。

その速さは訓練で育った私の動体視力でも辛うじて大まかな部分を把握できるかなというレベルだった。想像していた人間の速さではなかった。

しかし悟さんは微動だにしない。

矢岩君は悟さんの目の前で動きを止めた。

「何故避けようとしない」

悟さんはもうちょっとで首に届きそうな矢岩君の剣を矛でゆっくりと逸らしながら静かに言う。

「まずは貴方の覚悟を見せてもらうつもりでした」

「覚悟？」

「殺しの覚悟です。まあ、貴方に対しては無駄な試みでしたね。初めから貴方の目は私の首を捉え続けていましたから」

言い終わると同時に悟さんは朱水に礼をし、飛び下がった。

「参ります」

今度は悟さんが矛を中腰に構え、矢岩君に飛び掛る。

矢岩君はその矛の先端を小さい動きで避け、左手の剣を大振りに首目掛けて風ぐ。

悟さんはその剣を、眉を顰しそめながら剣で受け止めた。

「ッシー！」

それを待っていたと言わんばかりの顔で矢岩君が右手の剣を気合と共に動かす。

その動きを一瞬で理解して悟さんは矢岩君を蹴り飛ばして離れた。「フェイントですか。……その右手は急所を狙いやすいように、教えて視界から外れるように横のほうに剣先を向けていたってところですか」

矢岩君は蹴られたお腹を摩りながら薄っすらと笑う。

「あの距離で視界外からの手に反応できるとはな。さすが鬼神城だ。生身の人間が張り合うには出来が違いすぎるな」

しかし私の頭の中には目の前の行為に余り関係ないことが急に浮かんだ。

（矢岩君って笑うんだ）

「確かに利き目の問題で左側の反応は遅れますが、私はそもそも人間ではないので」

悟さんは再び構え直しながらさり気無く身なりを整える。なんか悟さんらしい。

矢岩君は立ち上がったが、剣を持つ手を下げてしまった。

「もうあなたの力はわかったからお開きにしようか」

「あら、その程度で悟の実力をわかったなんて言って貰いたくないわね」

朱水は呆れたように嘲りながら悟さんに歩み寄る。

「悟、もう終わりよ」

「……はい」

なんか悟さんの頬が高潮しているような。

「ほら、御褒美よ」

「……チヨットマテ」

「……はい」

……何で二人は抱き合っているの？ ねえ何で？

私の横で榿さんが呟く。

「あらあら。本当に悟ちゃんも甘えん坊ですね」

「あっ、あの、朱水達何しているんですか？」

慌てた様な私の質問に榿さんは微笑みながら答えてくれた。

「梧ちゃん、ああ見えて実は朱水様にべつたりなんですよ。椒ちゃんの次くらいに朱水様が大好きなんですよ。あれは梧ちゃん専用の御褒美です」

微笑ましいですね、と権さんは言うがこっちは何だか居た堪れない気分だ。

「せんぱい、自分も自分も」

「あんたは何もしてないでしょうが」

高海さんが抱きついてきた由音ちゃんの頭をゴツンと殴った。うわあ、結構いい音鳴ったよ？

「痛う、愛つて痛いゼイ」

「こっちも微笑ましいですね」

……なんでこんなに私の周りには女好きが集まっているんだろう。

「それにしても朱水様は変わりましたよね？」

「……え？」

声を潜めて権さんが尋ねてきた。

「尼土様との会話を聞いていますと以前の朱水様では考えられないくらい砕けた言葉遣いをなされています。最近になるとさらに砕けた言葉になられていられますね」

そう言えば最近の朱水は出会ったばかりの朱水と比べたら大分砕けている気がする。確かにそういうのを求めたのは私だけども、ここまで自然に変わるとは思ってもいなかった。

「尼土様の御蔭ですね」

「椒ちゃん……」

それは意外すぎる人物からの言葉だった。

「前は時々塞ぎこまれる事があったのですが、最近の御主人様は私共にも良くお話しをなさってくれます。それだけは私も尼土様の御蔭だと認めております」

椒ちゃんはぶつぶつと呟くように言葉を吐く。

「そ、そう？ えへへ、照れますな」

「ちょ、調子に乗らないで下さい。御主人様の守護は私共だけで十

分なのですからね」

椒ちゃんはその言い捨て梓ちゃんの隣に移ってしまった。

「椒ちゃんがああいうことを言うなんて……私、ちよっとびっくりですよ」

権さんは頬に手を当ててそう呟くと、何かを考えているような暫しの間を開け、急に真顔になった。

「尼土様、椒ちゃんの言葉の通り、朱水様は尼土様の御蔭で明るくなられました。今後とも、朱水様をよろしくお願いいたします」

そう言って頭を深々と下げる。

権さんの真顔にちよつと驚いた私は頭で考える前に何度も頷いてしまった。まあ、朱水との中を裂かれることなんて考えたくないことだから本心と変わらないから良いか。

「次は有ね。相手は……」

朱水は梧さんの頭を撫でながら使い魔さん達を見比べる。

「そうね、梶、貴女が相手をしてあげて」

梶ちゃんは静かに頷いた。

「その前に魔狩り者に言うべきことがあります」

「何だ？」

鞆に剣を仕舞っている矢岩君に頬が赤いままの梧さんが近づくと

「貴方の目は首と手首しか捉えていませんでした。確かにかなり有効な急所ではありますが、ああまで行くと逆に見分けやすいというもの。それにそのような戦いでは異形の者には劣勢を強いられますよ。首と手首が必ずしも存在するとは限りませんからね」

梧さんは矢岩君の服に付いた土を払いながら穏やかにそう告げた。

「……わかっている。俺は特殊だからな。どうにも癖が出ちゃう」

その梧さんの意外すぎる行動に戸惑いながらも矢岩君は頷いた。

「そうですね。忠告は以上です」

梧さんは一礼して再び朱水の隣に戻ってしまった。

矢岩君はその背中をずっと見詰めていた。

「有、こちらへ」

朱水がニコニコと手招きをする。何で笑うんだろっ、嫌な予感しかない。

「有には体験してもらいたいものがあるの。ですから柗が相手なのよ」

「……わかりました」

朱水の言葉に柗ちゃんは何かを感じ取ったのか、木箱から出した手袋みたいな物を仕舞った。

「尼土様、これは手合わせではないのでご安心下さい。しかしある程度は御覚悟を」

「う、うん。出来れば、出来ればで良いからお手柔らかかにね。ね？」  
朱水は私の態度がえらく気に入ったらしく口元を更に歪ませている。

「柗、貴女が指示しなさい。では、始め」

朱水の掛け声が掛かると柗ちゃんは一礼をし、身構える。

「まずはこの前梧姉様と組んだ時の様に、壁を削って下さい」  
私は柗ちゃんに従い頭の中に壁を描く。私の目の前には壁が在る。

「うわあ、何すかアレ？」

「ああ、由音は初めてね。あれが尼土さんの能力よ」

「凄いつすね。霊力であんな物作り出しちゃうなんて」

由音ちゃんが感心したような声を上げる。やっぱりそんなに凄いものなんだろっか。

「出来ましたね。ではそのまま置いて下さい」

そう言つと柗ちゃんは壁にぺたぺた触り始めた。何をするつもりだろうっ？

「では御嬢様、試させてもらいます」

「ええ。始めは弱くよ」

柗ちゃんは頷いたと思つた瞬間、壁に拳を叩きつけた。すると壁はいとも簡単に砕け散ってしまった。揺れる左右のおさげだけが一時唯一動く物となっていた。私と削強班三人は絶句してしまったの



だ。今の柵ちゃんの動きは裏券を、スナップをきかせてぶつけた程度にしか見えなかった。しかし壁の破片が飛んでいった速度から察するに想像以上の力がかけられたに違いない。破片が地面を抉っていた。

「もっと硬く」

「え？」

「もっと硬く、です。もっと硬い壁を創造なさって下さい」

「こ、こう？」

頭で想像する。もっと硬い、もっと硬いと。

「見た目は変わらないっすね」

目の前に見慣れた壁が出来る。でも硬さはさっきのよりもっと硬いはずだ。

「では行きます」

再度柵ちゃんは拳を壁に叩きつける。

「また砕けたな」

飛び散った破片を避けながら矢岩君が呟いた。

「有、わかりやすいように厚いコンクリートの壁を削って頂戴な。

中には鉄筋が埋まっている物よ」

「え？ 出来るかな」

頭の中でコンクリートの壁を想像する。以前倒れた電柱を見た事があるので、その折れ目から延長させてコンクリートの内部を思い浮かべてみた。目を開くとそれっぽいのがちゃんと立っていた。

「由音ちゃん、その壁がコンクリートで出来ているか確認してくれないかしら？」

「うつつす」

由音ちゃんが壁を軽くノックするとコンコンと乾いた音がした。叩いた手がひりひり痛むものだろう、由音ちゃんは手を摩る。

「ああ、どうやらそれっぽいっす」

「そう。なら柵、砕いてあげて頂戴」

「はい」

柵ちゃんは簡単なことのように頷き、構えた。

「では、泥土様、実感なさって下さい」

拳が壁に振り下ろされる。すると大きな音を立てて壁が崩れ落ちてしまった。

「はやく、スngoイ怪力つすね」

「さすが鬼神城、モノが人間とはかけ離れているわね」

砂埃が舞う中、柵ちゃんはお辞儀をした。それがどうにも私には神秘的に見えた。

「だが一つ気になる事がある。何故影はあの壁を壊せなかったんだ？」

「それは……ただ単に力不足だったんじゃない？」

「本当にお前、そう思っているか？」

高海さんが返答に困っていると朱水が代わって答えた。

「簡単よ。有、今度は『柵には壊せない壁』を創りなさい」

「何それ？」

「そのままの意味よ。硬さではなく、柵にはどうやって壊せない壁、そう創りなさい」

柵ちゃんには壊せない壁？ 良く分からないが言われた通りに想像をしてみる。

壊せない……柵ちゃんは絶対この壁は壊せない、この壁は絶対に柵ちゃんには壊せない、そう念じて。

瞼を開くとそこにはいつもと何ら変わらない外見をした薄い水晶の様な壁が出来ていた。

「……一応、出来たけど？」

「こんなんで柵ちゃんの拳に堪えられるのか自信無いよ。」

「そう。なら柵、本気を出しなさい」

「わかりました」

朱水の言葉は柵ちゃんにとって呪文めいた物なのだろうか、目つきが鋭くなった。

「泥土様、少し離れて下さい」

柵ちゃんは目を閉じて深呼吸をし始めた。場に緊張が走る。彼女の雰囲気が一気に変わったのだった。

「行きますっ！」

掛け声と共に入魂の一撃を放つ。その足は地面を深々と抉り、大きな地響きを立てた。しかし薄い壁は何も無かったかのようにずつと立ったままである。

「やはり、ね」

「朱水？」

朱水は何やら理解したかの様に何度も頷いていた。

「貴女有能力、段々わかつてきたわ」

朱水が壁に触れると壁は忽ち消えてしまった。

「まあ、話は屋内でしましょうか。柵、柵、片付けを頼むわよ」

「わかりました」

「はい」

朱水は二人が箱を持っていく姿を見送ってから皆に言う。

「さあ、応接間に行きましょうか」

皆を先導する朱水の口からは時々笑うような声が聞こえた。

「『絶対条件』……ですか」

「ええ、そうよ」

高海は興味深そうに私の言葉を繰り返した。

「有の能力は彼女が頭で考えた物その物を世界に生み出すというものだと思うの。その際、有は『こう在るべき』という条件で頭に描くことによって創った物にその条件を適応させておくことが出来るの。先程の様に『柵はどうやっても壊せない』等ね」

応接間には既に柵も柵もいる。

「それって凄いつすよね？ 何でも出来ちゃうって事つすね」

「だから影はあの壁に遮られたという事が」

菅江も矢岩も感心の意を顕あきにした。

「そう言うことになるわね。ふふ、鬼神という字は有あやなに譲った方が  
良いのかしら」

「や、や、そんなこと言われても困るし」

私の言葉に有は顔を真っ赤にして反応する。

「そうですか……なら私達はより本腰を入れなくてはならないです  
ね」

「え、どういうことつすか？」

高海は菅江の頭を無理矢理有の方に向けた。

「彼女は本当に危険因子に指定される可能性が高いつて事よ。その  
分私達は上に何とか彼女を擁護しなければならぬのよ」

「ええ、そんな約束しちゃったんですか？」

「そうよ。だから貴方も上への報告では尼土さんに関しては出来る  
だけ彼女の能力から逸らして報告しなさい」

「ひええ、無理つすよ。自分、アノ人相手に堂々としていられる自  
信無いつすもん」

菅江は自分の頭を押さえ付けている高海の手ごと頭を左右に振つ  
て弱々しく言った。

「なら私に関することを過剰に報告すれば良いじゃない。私なら今  
更な事ですし」

削強班における私の噂なんて一々聞くまでもなくどういふものな  
のか予想できる。その過剰な噂に沿ったことを言えば有のことは何  
とか誤魔化せるはずである。

「良いのですか？ その……私達に伝わっている噂、半端じゃない  
ですよ？」

高海は申し訳なさそうにそう言った。

「あら、どういふ噂なのかしら？」

「いえ、その……」

高海は私の笑顔を見て少し引きつった苦笑いをするだけである。  
「ねえ、由音ちゃん、どういう噂なのかしら？ お姉さんに教えてくれないかしら？」

菅江の手を強く優しく握りながら私はにこやかな作り笑顔でそう問うた。

「ひいひい、勘弁してくださいよ」

菅江は私の手を振り解こうとしながら泣きそうな声で逃げようとする。

「朱水、そろそろやめてあげたら？」

有は菅江の方を見てそう言った。

「あら有、貴女は私の味方じゃないのかしら？」

有の目がずっと菅江に向いているので私は意地悪なことをつい吐いてしまう。

「いや、そりゃ味方だけどさ」

「……冗談よ。さあ、もう今日はお開きにしましょう。で、実行日はいつなのかしら？」

私の問いにずっと黙っていた矢岩が口を開く。

「こちら側としては明日、明後日辺りが望ましいんだが。式典兵器は別に良いんだが、神器は長くは外に出せないからな、出来るだけ早く済ませたい」

「そう、なら明後日にしましょう。明日は有の特訓をしておきたいわ。良いかしら？」

私の言葉に削強班の三人は一樣にうなずいた。

「わかったわ。爺、三人を玄関まで」

「有、さっき言った通り明日も鍛錬するから必ず来なさいね」

「うん」

有は何故か嬉しそうににこやかに答えた。

「有、何か嬉しいことでもあったの？」

だが有は「何でもないよ」と言って帰って行った。何だったのかしら。

「えへへ」

「何ですか気持ち悪い」

つい思わず口に出してしまった喜びに（朱水の命令で）玄関まで送りに来てくれた椒ちゃんが本当に気持ち悪いものを見るような目でこちらを見る。

「うん、明日もここに来られるんだって思うとね、つい嬉しくなってます」

「はいはい、そうですね。まあ、私共は何時だって御主人様の傍にいられるから羨ましく何てありませんけどね」

相変わらず椒ちゃんは自身のその左右がツンツンに跳ねている髪型の様な言葉を浴びせてくる。

「うう、それはそうだけど。何かずるいよー」

私の言葉に気分を良くしたのか椒ちゃんは梓ちゃんみたいな笑顔を私に向けてくれた。

椒ちゃんが歩く廊下は何だかとても良い匂いがする。

「椒ちゃんも笑うと可愛いんだね」

「……………笑うと？」

「え？」

あれ？ 何か今の発言不味かったのかな？ 椒ちゃん表情は百八十度反転し引きつった。

「そうですね、普段の私なんてべっぴんに可愛くなんてありませんよね」

「え……………あ、嘘、嘘、椒ちゃんは凄く可愛いよ。ホントに可愛いと思うよ」

あーそういう意味か。今の言葉を『笑ってないと可愛くない』っ

て意味で捉えるなんて椒ちゃんはやつと捻くれ過ぎではないかな？ まあそんな事口に出せないんだけどね。

「あーはいはい、上辺だけの言葉有り難うございます」

「違うつて。ただ……」

「ただ、何ですか？」

良い機会だから前から気になっていた事を聞いてみた。

「椒ちゃん、私に対してだけ敵しいんだもん。だから椒ちゃんの笑顔なんて見たこと無かったから」

私の話の途中で先を歩いていたら椒ちゃんは歩を止めた。私もそれに従うしかない。

「怖いんですよ。私共の、私の知っている御主人様が変わってしまったうんじゃないか、私共から離れていってしまうんじゃないか」

椒ちゃんは腕を拱こまぬき私に視線を向けられないようにしながら言葉を吐く様に紡ぐ。その背中はいつも以上に小さく見えた。抱きしめてあげたい、そんな感情が芽吹く。

「尼土様は御主人様の全てを持って行ってしまいます。私にはそれが苦しいのです」

「椒ちゃん……」

「私は！ 私は本気で御主人様を愛しています！ 以前の御主人様は私共とお話ししてくださいます時は私共個々の話をして下さったのに、今では『有が有が有が』の連続です。もちろん私共の事も気にかけて下さいますですがそれだけでは私は物足りないのです」

「その……ご免なさい」

「はあ？ 何謝っているのですか？ 尼土様が謝っても仕様が無いじゃありませんか。もうそのことは諦めていますから。その代わりに……」

椒ちゃんは可憐な笑顔を作りながら私に歩み寄る。やっぱり椒ちゃんからは良い匂いがふわりと漂ってきた。

「このストレスは尼土様で晴らさせてもらうことに決めましたの」私の胸元で綺麗な笑顔を見せつける椒ちゃんは本当に美しいって

という言葉が似合う。それに……

「椒ちゃん、椒ちゃんって凄く良い匂いがするよね？ 香水か何かかな？ 凄くクラクラするんだけど」

そう、頭の中が蕩ける様な凄く……良い……匂い……。

「ふふ、この程度でそうなっているには私には敵いませんよ。私が本気を出したら全てが爛れ、崩れてしまうのですから。精々私を怒らせないように気を付けて下さいね。私、怒ると怖いですよ」

椒ちゃんは私の顔を自分の顔に近づけて私に囁く。鼻先が触れあう程の近距離でその綺麗な顔を視界一杯に捉えると、どっかに勝手に飛んで行ってしまおうかと思うくらい心臓が跳ね始めた。胸が痛いよ。

「ふふ、尼土様も綺麗ですよ。その綺麗な顔が爛れない様、私を怒らせない様にお気を付け下さいな」

「あ、あの……」

匂いと、目の前の人形の様な椒ちゃんの顔によってもう私はまともな反応が出来ない様になっていた。

そんな状況の私を梓ちゃんが助けてくれた。

「あゝ。椒姉様何やっているんですか。尼土様を苛めちゃかわいそうです」

「あら、私は尼土様に一寸した希望を言わせてもらっただけよ」

「もゝ、椒姉様は本当に尼土様が好きなんだから」

「え……」

梓ちゃんのその思いがけない言葉に私は急に目が覚めた。椒ちゃんの方も急に取り乱した。

「な、何言ってるの梓は。どうして私が尼土様のが好きなんて血迷った結論がでるのよ」

たじろぐ椒ちゃんに梓ちゃんはさらに追攻撃を仕掛ける。

「またまたゝ。椒姉様、御主人様と同じくらい尼土様のことばかり喋っているのに」

そ、そうなんだ。何それ嬉しい。



「ば、馬鹿言わないでよ。私がこんなものが好きな分けがないですよ」

「こんなものって……」

その扱いは酷いよ。

「私もう戻らせていただきます。後は梓が担当しますから。では……」

そう吐き捨てるのと椒ちゃんはスカートがひるがえ翻るのを気にせずに行ってしまった。

「もう、椒姉様は勝手ですねえ。ほら、尼土様行きましょう」

梓ちゃんは両手で私の手を引つ張る。

「あのさ、椒ちゃんって本当に私の事、その……嫌ってないの？」  
いきなり「好きなの？」とは余りに恥ずかしくて訊けないので少し言葉を選んだ。梓ちゃんは鼻唄をやめて振り返る。

「勿論ですよ。椒姉様、尼土様の事を喋っている間、とても楽しそうにしているんです。ですからゼツツツタイ尼土様のことが好きですー！」

梓ちゃんは右手をブンブン回しながらそう廊下に叫ぶ。

「そっかあ」

なんだかとても胸の辺りが温かい。そうか、私は椒ちゃんに嫌われてなかったんだ。

「梓、しーだよ、しー」

梓ちゃんの叫び声に引き寄せられた柵ちゃんが口に人差し指を立てながら現れた。

「えへへ、ごめんなさい」

柵ちゃんは梓ちゃんの頭を軽く撫でて行ってしまった。

「柵姉様も尼土様のこと好きですよ。ううん、私達はみんな尼土様のこと大好きです」

「そ、そうなんだ。んふふ、嬉しいね」

しかし、急に梓ちゃんは暗い顔をする。

「あ、でも、柵姉様はわかりませんよね。まだ尼土様は会っておら

れませんもの」

「ねえ、枳さんってどうしたの？ 何かあったみたいけど」

だが私の質問は答えられることはなかった。梓ちゃんも微笑むだけで、鼻唄を歌うこともなくただ私の手を引っ張るだけであった。

もう一方の手は振り回される事も無くただ静かに体の動きに合わせて揺れていた。

第二話 似て非なるモノ / 5 (後書き)

鬼神城の名前は紛らわしいですね。すみません。

6

「枳？」

昼休みの屋上は私達しか居ないので朱水の声は空に響いた。今日の朱水のお昼ご飯は梧さんが昨日の夜から用があつて外出しているため、いつもの小さいながら豪華なお弁当ではない。いや、豪華といつても大抵の日においてサンドイッチの形を成しているのだけど。しかし今日のはどうやら梓ちゃんがり張り切つて作ったサンドイッチらしく、見た目に大きな技術差が表れていた。梓ちゃんは一応料理係という役割だが実際はまだ料理が上手ではないらしい。確かにサンドイッチの中には切るところを間違つて三角形でなく五角形になつてしまつていたり物や、具が大きくはみ出してしまひ見た目が少し悪い物がある。お店で買える様な梧さんの作るそれとはやはり違つていた。

「うん。前からそのことは使い魔さん達の前では禁句みたいだからね、こつこつという時に訊くべきかなつて思つたから」

朱水は私の顔を、サンドイッチを啜えながら凝視する。なんか朱水が食べるとサンドイッチはサンドウィッチと言つべきなのかと思ふよ。

「そつね……有にも言つておくべきなのかしら」

はむはむとサンドイッチを口に流しながら朱水は思慮深く呟く。そう言えば朱水つてば上品に育てられたわりには食事中に喋る事、ましてや物を頬張つたまま喋る事に何ら抵抗が無いよね。辛うじて手は口を隠しているが。

「槐、槿、枳、梧、椒、柗、梓。これがこの世に生まれた順番よ。

だから彼女達には姉妹という関係があるの。そして枳は三女という

ことになっているわ」

「ああ、だからお姉様とか呼んでいたのか」

水筒からまだ湯気がたつお茶を注ぐ。そのお茶をこくりと飲み干すと朱水は意外な言葉を出した。

「枳は椒と特に仲が良かったわね」

「え、そうなの？」

椒ちゃんがあんな態度を取るから前から仲が悪いのかと勘違いしてたよ。怨恨の敵かたきの様に枳という名前に反応していた所だけを見てきたからね。

「今の椒の言動は枳への愛情が反転して憎しみに変わってしまったのでしょう」

「何があったの？ 確か『裏切った』って言っていた覚えがあるんだけど」

朱水は食べかけのサンドイッチを小さな重箱（梧さんのお気に入りの物らしい）に仕舞い、フェンスに寄りかかる。

「裏切り、ね。確かに裏切りと言えるかも知れない。でも枳は本来選ぶべき選択肢を選んだの。私の考えと違ったから『裏切り』と言われてしまうのよ」

「朱水の考え？」

しかし朱水はその考えとやらを私には教えてくれなかった。

「……ご免なさい、やっぱりこの話は詳しくは出来ないわ」

フェンスを握る朱水の力が強くなる。

「とにかく枳は私達とは意見が違ちがってしまったの。枳が無断で屋敷を離れようとした時、それに気づいた椒と槐が止めようとしたのだけれど……」

「槐さんと枳……さんとの間で何かあったんだね？」

確か椒ちゃんがそのようなことを言っていた。枳さんの所為で槐さんがどうにかなったって。

「ええ。槐の体は今では人間程度の力しかないわ。枳が呪詛の念を打ち込んだみたいなの」

それが椒ちゃんと言っていたことか。

「槐はもう鬼神城の中では一番死にやすくなってしまった。それが椒には耐えられないことなの」

「どういう事？」

「あの子、自分の力にコンプレックスを抱いているの。椒は鬼神城の中で特に攻撃的な力を持っているのよ。でも椒はどうやら槐、槿、枳の様な力が羨ましいみたい」

朱水が言うには使い魔さん達の中でも能力は様々で、どちらかというところ攻撃的なのが椒ちゃんを筆頭に梧さん、柗ちゃんで、それと対な関係にあるような力を有するのが槐さん、槿さん、枳さん、梓ちゃんらしい。

「有は柗の力だけは見たわよね。あの子の力は『強力』って言えばわかりやすいかしら。純粋な力だけで言ったら柗が一番強いわね」

昨日の事か。私の脳裏に柗ちゃんの神秘的な姿が浮かぶ。体格は私なんかより小さいのに地面を軽々と抉っていた足を思うとどれほど力があるかが想像できる。

「椒ちゃんは『私が本気出せば全てが爛れる』みたいなこと言ってたけど……」

「あら、あの子が自分の力について他人に語るなんて珍しいわね。何時の間にかそんな親密になつていたの？」

「いや、あれは親密とかそう言うのじゃなくて単に脅し文句だった気がするんだけどな」。

「あの子の力は『糜爛』、万物を爛らせる程の力があるの。本来爛れることのない物質までもがあの子の息を浴びると爛れてしまう、謂わば一種の呪いみたいなものね」

「それって椒ちゃんの匂いと何か関係ある？ 凄く良い匂いがあるからびつくりしちゃったよ」

朱水は私の言葉にクスクスと笑う。

「そのこと椒に言ったのかしら？ あの子、匂いのことを褒められるのが大好きなのよ。だから機嫌が悪いときは頭を撫でて良い匂い

ね、って言うてあげれば大抵の場合は機嫌が良くなるから覚えておいた方が良いわよ」

「そうなんだ。今度試してみようかな。あ、でも私が頭なんか撫でたら絶対怒るよね。いやそもそも私の前だと椒ちゃん、何時でも不機嫌な気がする。」

「でも、その強さが逆にあの子を苦しめてしまったのよ」

「何で？ 朱水を守るために強い力があつた方が良いんじゃないの？ ……あ、そうか」

「気づいた？ あの子の力は息を媒体にしている、つまり空気中に拡散するの。それはつまりあの子以外の誰でもが呪いにかかってしまつと言うこと。例えばそれが守りたい相手でもね」

朱水は「困つたものね」と苦笑いをするけど、朱水自身は椒ちゃんをそういう目で見てないんだと思う。多分、多分だけど、朱水は使い魔さん達に守られる気は毛頭も無いんじゃないかな？ むしろ朱水は使い魔さん達を自分の手で守ることを望んでいるんだと思う。今までの朱水と使い魔さん達の絡みを見てるとそういう結論が自然に生まれていた。

多分、家族がいない朱水にとって使い魔さん達と執事さんは最後の砦なんだと思う。

そして思つたんだ。私には誰がいるんだろうって。叔母さん？

ううん、好きだけどなんか違うんだ。私はもう……

「そろそろ時間ね」

「あ、ホントだ」

時計を見ると予鈴が鳴る時間の一分前だった。

私がお弁当を鞆に仕舞っていると朱水が重箱を私の目の前に差し出してきた。

「何かな？」

「お腹が一杯なの。梓に悪いから食べてくれないかしら？」

そう言いながらも朱水はサンドイッチを私の唇に押し付けてくる。そのサンドイッチは少し湿っていた。

「太らす気いゝ？ まあいいや、梓ちゃんの手料理なんて食べる機会無さそうだからありがたく頂かせてもらいます」

「ふふ」

私がサンドイッチを食べているのを朱水は可笑しそうに見ている。何なんだろうか？ 別に味が変だなんて事は無いし、むしろ美味しい。まあ、サンドイッチは材料さえまともなら普通は美味しく作れるものか。

「美味しかったよ」

空になった重箱を包んでいる朱水にちゃんと感想を言う。

「そう。梓にも言うてあげて下さいね。あの子、きつと喜んでまた作るって言うに違いないわ」

そうこうしている内に予鈴が鳴り響く。

「さ、もう行きましょう」

朱水の手を借りて立ち上がり、荷物をまとめて二人で階段に戻る。「期待していたのは全く違う反応でしたけど、あれはあれで良かったわよ」

朱水は階段を先に下りながらそう言った。

「何の話？」

「違和感が無いということはそれだけ自然だと思っている証拠ね」

朱水はまた意味不明な言葉を続ける。

「だから何の話？ 本当に訳がわからないんですけど」

私の言葉に答えることなく、階段下で待っていた朱水は私の唇を爪で優しく摘んだ。

「へ、何？」

「ふふ、貴女が食べたものは一体何だったのかしら？」

何だと言われてもサンドイッチでしかないでしょ。

「もう、いくら何でも鈍感過ぎない？」



朱水はつまらなそうに言い捨てながら先に教室へと戻ってしまつた。何だったのかな。唇、唇、……唇つていつたらやつぱサンドイツチを押し付けてきたことだよ。あれが関係するのかな。

「美味しかった。他に何かなかったっけ……あ、湿ってた」

……ああ、そういうことデスカ。

門の前に来ると梓ちゃんが誰かを待っているのか独りぼつんと立っていた。足を地面に押し付けたりして暇を潰していた。

「どうしたの？」

言い終える前に私に気づいた梓ちゃんは私に跳びかかって、もとい抱きついて来た。

「尼土様！ 遅いですよ！」

どうやら待っていたのは私らしい。梓ちゃんは嬉しそうに抱きついたまま私を中心に回し始める。

「どうしたのいきなり」

梓ちゃんは私の頬を軽く抓りながら口を尖らせる。

「ぶ、何か私に言うことがあるんじゃないんですか？」

「あれ、もう朱水から聞いたの？ サンドイツチ美味しかったよ」

「そうですか、そうですか。そんなに美味しかったですか。なら今度から尼土様のお弁当を作ってあげましょうか？」

梓ちゃんは目を爛々と輝かせる。褒められたのが余程嬉しいらしい。これくらいで喜んでくれるなら梓ちゃんの事いっぱい褒めちゃおうっかな。

「いや、それは悪いって」

「いいえ、私がやりたいんです」

「そ、そう？　なら、頼もつかない」

「はい、お任せ下さい」

梓ちゃんが私の体に巻き付くように体ごと抱きつくと、私達のその行為を端から見ている人物に気付いた。

「椒ちゃん、こんにちは」

しかし椒ちゃんは私の挨拶を無視して梓ちゃんを私から剥がしにかかる。

「梓、自分の担当をほっぽらかしにしていちゃ駄目ですよ」

「あうう、ごめんなさい」

しかし梓ちゃんの反省の態度は一瞬で終わってしまった。瞬時に顔を輝かせ椒ちゃんに向ける。

「そうだ、椒姉様も一緒にやりませんか？」

「やるって何を？」

梓ちゃんは器用に私の首の上に昇り、両手を振り回しながら椒ちゃんに向かって叫ぶ。

ん？　なんかおかしくないか？

私は梓ちゃんの行動に違和感を覚えたがその具体的な内容が分からなかったため二人の展開を黙って見届ける。

「尼土様のお弁当作りですよ。やりましょうよ？」

椒ちゃんは案の定嫌そうな顔をした。それはそれは凄い表情で、嫌いなメニューだけで一週間の食事を済ませと言われた様な程に嫌悪の顔だった。

「はあん？　私がどうしてこの人のお弁当を作らなきゃならないのよ」

「またまた。折角のチャンスですよ？　尼土様にお近づきになるには有効な手段です！」

いや、何か意味が違うから、その言い方だと。梓ちゃんは名案とばかりに私の頭上で拳を硬く握り締め推す。

「じよおおおおおだんじゃありません。私がどうして……  
……いえ、それも良いですね」  
「はい？」

椒ちゃんは急に笑顔となった。ああ駄目だ、お姉さんはね、その笑顔は恐怖の始まりでしかないってちゃんとわかってるんだ。

「私、尼土様のために精一杯努力して美味しいお弁当を作らせてもらいますわ」

どうしよう。ひたすら椒ちゃんの笑顔が怖い。

「いや、い……」

「断れません」

「え？」

私に反論させないような勢いで椒ちゃんは続ける。

「尼土様は断る権利を持っていられません。当然ですよ、この私が尼土様に愛情が一杯詰まったお弁当をこさえるのですから。ですから尼土様の口から出るのは感謝感激の嵐、あめあられ雨霰でなければならぬのです」

梓ちゃんは椒ちゃんの言葉に「わー」と拍手をする始末である。

つまり私は梓ちゃんだけでなく椒ちゃんも携たすわった、愛情以外に色々詰まるであろうお弁当を毎日食べなければならぬことが決まったらしい。愛情だけなら凄く嬉しいのだけれども。

「ほら、御主人様が待っていられるのですから早くしてください」  
「行きましょ、行きましょ」

二人は私を放置してさっさと玄関の方に行ってしまった。  
何だかどつと疲れたよ。

朱水の部屋に行くと朱水は手持ち無沙汰な様子で待っていた。新聞を読もうと持ち上げるが直ぐに手を離し、再び持ち上げては読まないと言う風な行動を私が声を上げるまで続けていた。

「き、来たわね。まずは確認から始めましょ」

見られていた事で恥ずかしいのか、新聞をコソコソと背中に隠していた。

「確認？」

「削強班の中でのルール等よ。私しか読んでないでしょう？」

「ああ、あれか。うん、よろしくだよ」

朱水から色々注意事項を聞かされているとドアをノックして紅茶を持った槐さんが入室してきた。

「そろそろ一息どうでしょう？」

につこり微笑みながら紅茶で満ちたカップをテーブルに並べる。

そんな姿を失礼ながらも私は凝視する。他の使い魔さん達とは違って人間により近いという鬼神城長女の姿を。

外見は他の使い魔さん達と大差無い。それに人間により近いと言われても元々使い魔さん達は人間と同様な姿形をしているので、私には違いがわからなかった。

「どうかしましたか？」

私の視線に気付いた槐さんが首を傾げる。やはりその顔は見れば見るほど朱水と似ていた。

「いえ、別に」

朱水は私が今何を考えているのかわかっているのだろう、無言でただ私に視線をぶつけるだけである。

「あら、そうでした。尼土様、椒から聞きましたよ？ 椒の料理練習の相手をして下さるとか」

楽しそうにパチンと手を打ち鳴らした。こういう所は朱水とは全然似てないよね。

「ええ、はい。何故かそうなってしまったというか」

「驚きましたよ。あの椒が料理をしたいなんて自分から言うてくるなんて」

……ん？ ん？ ん？ 今、槐さんがやや興奮気味に発する音

の中に何やら気にしなくてはならない言葉が混じっていたような。

「あの、って何ですか？」

「はい？」

頭が十度ほど傾く。

「あの椒ちゃんが、って」

槐さんは私の言いたいことがわかった様子で、何かをフォローする様に言葉一つ一つに重さを持って「いいですか」と私に説く。

「椒は昔から料理だけには手を出さなかったのです。自分の匂いが料理に移って駄目にする、自分の所為で朱水様のお食事を汚すわけにはいかないって。それがこの度、自分から料理をするから炊事場を空けて欲しいと言ってきたのですもの、驚きと同時に不安でなりません」

朱水から空になったカップを受け取りながらも槐さんは話を続ける。

「椒、尼土様の前ではあのような態度ですが、実はあの子尼土様のことが大好きなのです。ですからこの機会に誤解を解こうと考えているのでしよう」

「はあ」

でも今の槐さんの言葉を整理すると、朱水には出せる料理ではない、しかし私になら出しても構わない、つまり私はその程度の存在だっって言われている気がする。

おっといけない、いけない、そんな考えでは椒ちゃんに嫌われちゃうぞ。私は頭を左右に振り暗い考え方を吹き飛ばした。

「楽しみにしてます。椒ちゃんと梓ちゃんの料理を堪能できるなんて思いもしなかったですし」

しかし私の言葉は槐さんの首を斜めに今度は二十度ほど傾かせることとなった。

「梓……ですか？」

「え？」

「梓からは聞いていませんけど」

……あー、どうやら今回のことは梓ちゃんの計らいだったみたいだ。昨日の私と椒ちゃんの出来事を見て私達の仲を持つと考えると考えたんだろう。子供なんだと思っていたけどそれは随分違ったみたいだ。今度会ったらお礼を言わなきゃね。

「すみません、私の勘違いだったみたいです」

「そうですね。折角椒が頑張ると張り切っていたので私達は一切手伝わないことにしました」

「……」

それはとてつもなく不安になる言葉ですね、ええ全く。

「大丈夫ですよ。あの子、梓が梧を手伝うのを遠目に眺めていましたからある程度はまともなものが出来るはずですよ」

槐さんは心配いらないと笑い飛ばすが私には椒ちゃんが悪戦苦闘する姿が見えた。同時に、頑張っている椒ちゃんの姿を想像すると胸が熱くなった。

「随分と椒に気に入られたじゃない」

朱水は驚きを露わにする。

「あの子、部外者にはアイシス以外全員に突慥貪つっけんどんな態度を取るのだけれど、有には特に厳しく当たるものだから敵だと思っっているのだと勘違いしていたわ」

槐さんは朱水に「あの子、難しい子ですから」と苦笑を向けながらカップを持って退室していった。流石長女と言ったところか、椒ちゃんの性格を朱水以上に理解している様だ。

「さあ、休息はここまでにして続きに入りましょう」

その後三十分程朱水の説明は続いた。それだけの量を朱水は昨日あれだけの時間の中で覚えてしまったというのだから驚きだ。流石は成績上位者だね。

「まあ、こんなところかしら。そうそう、『鬼眼の輪』を見せてくれないかしら？」

鬼眼の輪って確かこの腕輪のことだったはず。腕をまくり朱水に見えるように露出すると、朱水は腕輪を調べ始めた。腕輪と言っても手首にする物じゃなく二の腕に着けるのだが、不思議な事に体にピタリと合う。これも霊力とかいう物なのかな？

「変化は無いみたいね。まあ良いわ、今後も身に着けておいて頂戴ね」

朱水は私の腕輪を観察した後呼び鈴を鳴らした。その呼び鈴の聞きつけた執事さんに何やら囁く。

「さ、行きましようか」

朱水は唐突に私の腕を掴み引つ張り上げた。

「行くって何所に？」

「中庭よ。今日は面白いものを見せてあげる」

朱水は口元を手で覆いながらそう言う。まあ、目を見れば笑っているのが火を見るより明らかだ。また何かされるようだ。

「お待ちしておりました」

中庭には使い魔さん達が既に集まっていて、権さんだけが真ん中に一人で立っている。仁王立ちをしているのにその雰囲気のおかげで威力的ではなかった。

「今日の相手は権さんですか？」

「はい」

権さんはにこにここと微笑みながら佇んでいる。朱水は権さんに耳打ちし、権さんは楽しそうですねと返した。何なのだろう。

「では尼土様、今日の訓練の説明をさせていただきます」

権さんは人差し指をピンと立てながら朗らかに一言言った。

「椒ちゃんを捜せ、です」

そう言っただけで権さんが目を閉じた瞬間、私の視界が一瞬ぐにやりと歪んだと思ったら世界の全てが真っ白になってしまった。訳がわからずただ呆けていると次第に目が何かを捕らえていることに気付い

た。自分でも訳がわからないがそう表現するしかない状況なのである。

黄色い何か。その何かが目の前に沢山ある。私が目を何度も擦り、瞬きを執拗にやっている状況が段々理解できてきた。

（本物を探せつて事かな）

私の目の前には椒ちゃんが沢山いた。そりゃ沢山とね。椒ちゃん達の黄色い髪が私には眩しく思える。

「もう大丈夫ですね？ お手つきは禁止ですよ。ではどうぞ」  
私の背後にいつの間にかいた権さんがくすくす笑いながら私の背中を軽く押した。

私はその勢いに乗って椒ちゃん達の間をのろのろと歩く。

椒ちゃん達の間を擦り抜けていると、思っていた以上にこの訓練が難しい事が理解できた。初めは椒ちゃんを見つけるのは簡単だと思っていた。だって、匂いがあるのが本物だということが頭の中で直ぐに閃いたから。きつとこれは視覚だけのまやかしなんだって思った。でも実際歩いてみるとどうやら匂いを発する椒ちゃんは複数いるみたいだった。

「どうやって見分けるの？」

こつちを蔑むように睨んでいるもの、にこにこ笑っているもの、無表情にただ立っているだけのもの、そのどれも私の記憶には存在する椒ちゃんであり、私にはどれもが本物に思えた。

「わかりませんか」。尼土様なら椒ちゃんは簡単に見つけられると思っただんですけどね」

遠くにいる権さんは私に何かを強調するように叫ぶ。

尼土様なら……私なら椒ちゃんを見つけられる？ どういう意味だろう。

だがそうこうしている内に体がふらふらしてきた。目の前の、同じ人が複数いるという奇怪な状況と、椒ちゃんの特異な匂いに酔ってしまったようだ。

「えっと、えっとお」



私は顔を軽く叩きながら椒ちゃんの列の隙間を練り歩き続ける。  
「うーん、後、五分程で終わりにしましょうか。見つけてくれなかつたら椒ちゃん、きつと拗ねちゃいますよ〜」  
権さんは楽しそうだった。折角仲良くなれそうになったのに、今ここで私が見つけることが出来なかつたら多分椒ちゃんはお弁当作ってくれないだろうな〜。

私がそんなことを考えて歩いているとある事に気付いた。その事をもっとよく考えようと足を止めると、偶然一人の椒ちゃんに目があった。あの椒ちゃんは何か変だ。そう思いふらふらと歩み寄るとその考えは確信となった。

「み〜つけ。はい、君が本物の椒ちゃんだ」

私とその肩に触れると同時に他の椒ちゃんは消えてしまった。

「ぱちぱちぱち〜」

いつの間にか隣にいた権さんが自分で声に出しながら拍手をしてくれた。

「良くできました〜。何が決めてですか？ やっぱり愛ですか？」

権さんはこれまた朗らかに言う。

「えっと、椒ちゃん、私が近づくと表情がちょっとだけ変わったからそれが決め手です」

他の椒ちゃんは一切表情が変わることが無かったのに、彼女だけが私が近づくと顔が微妙に引きつるもんだから何とも嬉しくない判別方法だった。

「ごうか〜。はい、今日の訓練はここまでです」

「え、もういいんですか？」

私の言葉に権さんは声を低めた。

「もう尼土様はふらふらですよ？ 大体三時間は歩き続けていますからね」

驚いた。そんなに時間が経っていたんだ。中庭の隅の方を見るといつの間にか準備されているテーブルを囲って朱水達はお茶をして

いた。私がそつちを見ている事に気付いた梓ちゃんが椅子から立ち上がり手をぶんぶんと振った。

「そうですか」

そう告げられたからであろうか、急に体に疲れが現れてしまい足ががくがくいつてきた。全身が疲労を訴え始める。

「あらあら、休んでいった方が良いでしょう。椒ちゃん、頼めるかしら？」

私にタツチされてからもずっと押し黙っていた椒ちゃんは顔を少し赤らめながら頷いた。私は椒ちゃんに押されるように屋敷内部に戻り、通された部屋のベッドに横たわった。

「……………」

「大丈夫ですか？」

椒ちゃんは珍しく弱々しく問いかけてくる。いや、私に対しては初めての事かも知れない。

「ゴメンね。長い間立たせたままで」

私の言葉を聞くと急に椒ちゃんはいつものつんけんした態度に戻ってしまった。

「全いです。どうしてもっと早く見つけてくれなかったのです。私も足が棒のようですよ」

ベッド横に置いた椅子に座る椒ちゃんは私に見せつけるように足を揉み始める。でも私は分かっているんだ。

「ふふふ」

「何ですか。私の不幸がそんなに楽しいですか？ 尼土様はそういう方だったのですか」

椒ちゃんはそつぽを向いて小さな声で「最低ですね」と呟く。

「いや、この状況が可笑しくてね。私が椒ちゃんに看られるなんて考えもしなかったから」

「権姉様の頼みですから。そうでもなければどうして私が……………」

「ごめんね」

私は椒ちゃんの言葉を遮ってそう言った。

「そして、ありがとう」

「はあ？ 何のことですか？ どうして私が感謝されなきゃならぬのです」

立ち上がるうとする椒ちゃんの手を掴み、私は先程の事に感謝をちゃんと伝えておく。掴んだ手は小さくとても冷たかった。

「椒ちゃん、ヒントをくれていたでしょ。ごめんね、全然気づけなくて」

椒ちゃんは一瞬目を見開くが瞬時に私に顔が分からぬようにそっぽを向いて口を尖らせた。

「はあん？ 私が尼土様に助けを出すわけがないでしょうに。全く、話にならない」

私はその言葉を聞き流して椒ちゃんの手を今度は両手で包んだ。すると椒ちゃんはこっちに顔を向けてくれたがその顔は何の感情も表していなかった。

「私が遠ざかると匂いを強くしてくれたよね？ あれで、椒ちゃんの方が大体把握できたんだ。それからは直ぐだったよね。あれが無かったら私、多分時間内に終わらなかつたよ」

椒ちゃんは私の言葉を無表情で聞き流す。しかし私の手を振り払おうともせず、ずっとそうさせてくれた。

暫くすると椒ちゃんは急に立ち上がり私の手を優しく振り解いた。「尼土様は私の香りにやられたために混乱しているだけです。私がそんなことをするような甘ったれた者だと勘違いしないで下さい。それって侮辱ですから」

そう言い捨てる椒ちゃんは部屋のドアを開け出て行くうとする。「ま、待って！ ごめん、私の勘違いだった。だから……行かないで」

私の言葉は椒ちゃんのプライドを傷つけてしまったのだろうか。

私は慌ててそう叫んでしまった。私の訴えは椒ちゃんの足を止めた。

「……お水を持ってくるだけですから大人しくしていて下さい。また戻ってきますから」

椒ちゃんは私に背中だけを見せながら呟き、ドアを静かに閉めた。私の胸が大きな重圧を受けているかのようにキシキシと痛む。椒ちゃんを怒らしてしまったかも知れない、その考えがどうしても私を苛むのだ。

数分後、何事も無かった様に椒ちゃんは水の入ったグラスを持って現れた。その顔は平常通りであった。それだけで私の心は落ち着きを取り戻せた。

「ほら、上半身を起こして下さい」

私の手を強く引つ張って無理矢理に起こすと私の口にグラスを押し当てて来た。その際前歯とぶつかりカツンと乾いた音と共に鈍痛が私の歯茎に走る。

「椒ちゃん、いだいよ」

「ご、ごめんなさい。手慣れてないもので」

「えへへ、良いよ。それよりこの状況は飲ませてくれるって事かな？」

私の言葉に椒ちゃんは自分が何をしようとしているか理解し、慌てました。

「あ、ご、これは……その……」

私は椒ちゃんの答えを待たずに無理してグラスから水を啜ろうとする。

「もっ……」

椒ちゃんは観念したかの様に微笑み、私の動きに合わせてグラスを傾けてくれた。

全ての水を飲み干すと椒ちゃんは無言でグラスを下げ、また部屋から出て行くこうとする。

「怒らせちゃったのかな？」

私はどうしても今、訊かなくてはならない気がした。

私の大きな声に驚いたのか、椒ちゃんは目を丸くして振り返る。

「怒る……ですか？ 何に対してですか？」

本当に不思議そうな色を浮かべる。

「え……いや、その」

「尼土様は何か勘違いしていますね。私は元々こういう性格なので、そうですね……」

「椒ちゃんは空のグラスを胸に抱きながら満面の笑みでそう言い放った。」

「私のこと、もっと理解して下さい」

その笑顔は私の思考を止めるほどの威力を持っていた。

「椒ちゃんが出て行った後も私は暫く背中を起こし呆けたままでいたが、朱水が入ってくると同時に目が覚めたかのように私は喜びに身を躍らせた。」

「どうしたの有？ 急に笑い出すなんて貴女おかしいわよ」

「えへへ、嬉しいことがあってね」

「朱水は全てを理解している様な顔で椒ちゃんが用意していた椅子に腰かけた。ベッドの上にある私の二つの手をとって自分の頬へと当てる。」

「それはきつと寂しさからの行動だった。」

「椒のことでしょ？」

「あ、わかる？」

「そりゃわかるわよ」

「朱水は苦笑しながら私を再びベッドに横倒すと私の緩みきった頬をツンと指した。」

「だって、椒も貴女と同じような顔をしていたのだから」

「行つてきまゝす」

二階で洗濯物を畳んでいる叔母さんに声をかけてから玄関を出る。相変わらず散らばっている叔母さんの靴を慎重に跨いでね。何度直してもどうせ直ぐに叔母さんが疲れきつた足を持ち上げるのをめんどくさがり、足を引きずるためにぐじゃぐじゃにしてしまうので、もう整理する事を諦めている。叔母さんは窓から行つてらっしゃいと笑いかけてくれた。ずぼらな所以外は綺麗なお姉さんみたいで大好きなのに。全くもって惜しい。こんなだからあの歳にもなつて結婚相手の一人や二人……。

「有ちゃん、はいこれ」

叔母さんは窓から何かを投げて寄越した。結構強い力だったため、もしかしたら叔母さんは私の心を読んでいたのではという疑問が浮上るがまあ気にしないでおこつた。

「これ、何ですか？」

投げられた物を見ると何かの鍵だった。

「納屋の鍵よー。後でお小遣いあげるから納屋にある物で庭掃除しておいて」

えええええ、とあからさまに不満な顔をしてみただけで叔母さんは気にしない。

「私がやるうとしたんだけどね、なんかたつた今出会いを求めて遊びに行こうと思つちゃってねー。有ちゃんやつてくれるわよね？」  
私の位置からだ叔母さんの顔は微妙にひきつっている様に見えるた。

……………キニシナイデオコウ。オツケーのサインを手で作って

さっさと逃げ去る。これ以上長居すると何を追加されるか分からないかね。

ある程度歩くと他の生徒もちらほらと見られる様になる。

そんないつもの状況の中に見慣れないものが混じっていた。

「椒ちゃん？」

「……………」

家の近くの信号がある交差点では椒ちゃんが佇んでいた。

「どうしたの？ あ、もしかしてお弁当を届けに来てくれたのかな」  
後ろ手に何かを持っている様な素振りを見せているので推測する。

「そうです」

椒ちゃんは頷いて私の目の前に小さなお弁当箱を差し出す。

「全く、梓がこんな謀はかりごとを出来るなんて思いもせませんでしたわ」

椒ちゃんも梓ちゃんが私達の間を取り持とうとしていることに気付いたみたいだ。

「そうだよね。うん、お弁当ありがとね。今日朱水の家に行ったときに感想はちゃんと言うから。それじゃあ……………」

ところが私が歩き出すと椒ちゃんは私の制服の裾を掴んで放さなかつた。一応歩いてはくれるため制服が伸びたりする事は無い。

「どうしたの？」

私が理由を聞いても椒ちゃんは無言のままにただ私の後を付いてくるだけである。

「えつと……………一緒に行く？」

私のその提案を聞くと椒ちゃんは恥ずかしそうに小さく頷いた。

一緒に学校に向かって歩いているが、椒ちゃんは無言で私の服を掴んだまま後に付いてくるだけである。こんなに近くにいると前を歩いている私でも椒ちゃんのそのいい匂いが鼻に入ってくる。それにしては驚きだ。あんなに私にちよっぴり喧嘩腰な態度をとっていた椒ちゃんがこうも親密な行為をしてくるなんて……………。昨日のあの

私の理性を吹っ飛ばす程の笑顔を思い出す。これからはもっとあんな椒ちゃんが見られるのかな？ そう思うと私は何だかとっても嬉しいんだ。

「椒ちゃん、折角だからお喋りしようよ」

私が振り返ると猫の様に驚く椒ちゃんがいた。

「そ、そうですか」

プイっと目を逸らすが手は一向に離れる事が無かった。

「そっだ椒ちゃんの事を教えてよ」

「私……ですか？」

今一つ私の言いたい事がわからない様である。

「そう。趣味とか、好きな事とか、ね。昨日言ったでしょ？ もっと理解してください、ってね」

私が無気なく言った言葉は椒ちゃんの顔を真っ赤に染め上げてしまった。

「あれは勢いで言ってしまっただけで」

「いや、それ以前に私自身が椒ちゃんの事をもっと知りたいんだよ。だから教えてくれると嬉しいな」

「そ、そうですか」

しどろもどろに椒ちゃんは私の質問に答える。

「趣味とかある？」

「えっと、風に当たる事ですかね」

そう言ってお弁当をひっかけた手で髪を掻き上げる。やはりふわりと匂いが動きに合わせて巻き起こった。

「面白い趣味だね」

「そ、そうですか」

自分の趣味が特殊なのかと勘違いしたのか、椒ちゃんは不安そうな顔をした。

「でも何となくわかるよ。風に当たっていると何だか気持ちいいよね」

「そ、そうですよ」



「じゃあ今度は好きな食べ物」

「椒ちゃん少し困った様に考えていたが急に思いついた様に小さく叫んだ。」

「炒飯です」

「おお、意外だ」

「そうですね」

「うん、椒ちゃんってば雰囲気西洋人形さんみたいだからフランス料理辺りにいくのだとばかり思っていたから」

「嫌いじゃないですけど……やっぱり炒飯の方が好きです」

「そうなんだ。じゃあ今度私の家の炒飯を作ってあげる」

「私の提案を聞いた椒ちゃんは何も喋らなかつたが笑顔が一層増したから多分嬉しく思ってくれているのだろう。」

「嫌いな食べ物とかある？」

「食べ物じゃないですけど花は嫌いです」

「おお、又しても意外だ。花とか好きそうだと勘違いしていたよ」

「私へのプレゼントに花束などは止して下さいね。私、その場で踏みつけてしまうかも知れませんが」

「椒ちゃんは笑顔で怖い事を言う。絶対に忘れないように後でメモしておこうと。」

「どうして嫌いななの？」

「しかし帰ってきた答えは曖昧なものだったら。まあ嫌いな理由とか好きな理由って具体的じゃない時の方が多いよね。」

「さあ。ただ何となく花を見てるとイライラしてくるんです。草だけだったら別に何にも感じないんですけど」

「花と草の違いと言ったら色と香りかな。」

「多分椒ちゃんは花が出す匂いが気に入らないんじゃないかな？」

「椒ちゃんと言ったらやっぱりその甘い香りだもの。それを邪魔する様に他の花の香りが混ざる事は椒ちゃんの怒りを買うのかもね。私の言葉に思い当たる節があるらしく、椒ちゃんは「そうかも知れませんがね」と頷いた。」

「じゃあ、今度は私について聞いてよ」

「は？」

「椒ちゃんの事を知るだけじゃ意味無いでしょ。椒ちゃんも私の事を知ってくれると嬉しいな」

少し甘えた様に言ってみた。椒ちゃんは急には意味がわからなかった様だけど、次第に私が何を言いたいか理解したみたいだ。少し硬い口調で質問をしてくれた。

「ではまずご趣味をお聞かせ下さい」

「読書だね」

私は即答する。あまりの即答ぶりに椒ちゃんは少し驚いた様だ。

「読書ですか。意外です。尼土様は外で活動なさる方かと思っっていました」

「うん、体を動かすのも好きだよ。だけどそれ以上に読書の方が好きだね」

「そうだったんですか。では……好きな食べ物は何？」  
うむむ、椒ちゃんは私がした質問を忠実に繰り返すつもりみたいだ。

「椒ちゃんが知りたい事だけで良いんだよ？」

「そ、そうですね」

しかしそれ以降椒ちゃんは押し黙ってしまった。

学校の門が見えてくる頃になって急に椒ちゃんは立ち止まる。それに連なって自動で私も止まらざるを得ない。

「どうしたの？」

私の目をキッと睨んだまま椒ちゃんは黙っている。

「あの、そろそろ行かないと学校が……」

「尼土様」

小さな叫びが私の言葉を遮った。叫びとなったのはその見て分かるほどの緊張からだろつ。

「尼土様は私の事をどう思っていますか？」

やっと離れた小さな手は細かに震えていた。

「えっと」

「ですから『私の知りたい事』です。答えて下さい」

椒ちゃんは一瞬鋭い眼差しで私の答えを待つ。その赤い目はいつにもまして力が籠っていた。

「その……仲良くなりたいたいと思ってるよ」

しかし椒ちゃんは私の答えに少々不満な様子だ。落胆に肩を落とす。

「好きか嫌いかで言うどちらですか？」

「うわ、随分ストレートだね」

「答えて下さい！」

椒ちゃんはうつすらと涙を浮かべて私に再度聞いてくる。

そんなの言われるまでもない……、

「好きだよ。最初は誤解してたけど今は椒ちゃんの事大好きだよ」と答えた。

「そうですか。安心しました」

椒ちゃんは涙を軽く拭き取りながら安堵のため息を吐く。多分今まで取っていた態度で私が椒ちゃんを嫌っているのではと考えたのだろう。でもね、私はちゃんと椒ちゃんの言葉通り『理解』したんだよ。あれも椒ちゃんの性格なんだって、もしかしたら照れ隠しだったのかもってね。それが分かっただけなら椒ちゃんがすごく可愛く思える様になっちゃったんだ。

「ほら、時間ですよ。もう行かなくてはならないのでは？」

そう言いながらずっと手に持ったままだったお弁当箱を私に渡してくれた。

「行ってらっしゃいませ」

椒ちゃんは私が学校に向かって歩いていく間、ずっと手を軽く振ってしてくれた。そのメイド服のおかげで周りから好奇の目を向けられていたけど彼女は気にしていない様だった。

「椒からちゃんと受け取れたのね」

昼休みの屋上で何時も通り昼食をとるために朱水と合流すると、朱水は私の持つているお弁当箱を見ながらそう言った。

「あの子の事ですからまた臍を曲げて渡さずに帰ってきてしまうのかと心配していたのよ」

朱水は苦笑しながらも自分のお弁当を広げる。

「梧も驚いていたわ。今朝帰ってみると台所で椒が料理しているじゃない？ 何があったのか逐一聞き出したみたいよ」

朱水は「みんな同じような反応をするものなのね」と言った。

「そんなに意外な事なんだ」

「まあね。あの子は料理だけは絶対にやらないと断言していたから。主人である私にすらそう言ったのよ？」

「そうなんだ。ならこのお弁当はかなり価値があるんだね」

「ええ、勿論よ。ですからあの子のためにもちちゃんと味わって食べて下さいね」

私は朱水の言葉に頷きながら椒ちゃんから貰ったお弁当箱の蓋を開けた。

「……………ああ、そうか」

お弁当の中には豪快に炒飯だけが敷き詰めてあった。楕円形の小さいお弁当箱一面が茶色いご飯で埋まっていた。

「好きなんだってね」

朱水は最初私のお弁当を見て固まっていたが、私の言葉でくすくす笑い出した。

「そうだったわ。あの子、料理をするときは何度も見ているけどお弁当を飾るところは殆ど見てないのだったわね」

ああなるほど、そういう背景があるのか。

「何て言うか、豪快だね」

私は一緒に入っていたスプーンで一口すくう。

「ああ、美味しいや」

「そう、なら今日ちゃんと感想をあの子に言ってあげて。喜ぶわ」

朱水は梧さんの作ったお弁当を食べながらそう言った。

「勿論だよ」

今日の私はお弁当の感想以外にも椒ちゃんともっともっとお喋りしたいんだ。

朱水の家の前には高海さんが誰かを待っているような素振りです立っていた。

「こんにちは」

私が挨拶する前に高海さんから挨拶してきた。一度もこちらを確認せずに言ったものだから本当に私に対しての言葉なのか気になったが一応返事をした。足音だけで誰か分かるのかな。

「こんにちは。矢岩君達を待っているんですか？」

「はい。まあ、待ち合わせの時刻はもっと後なんですけどね。つい先に来てしまうと言うか……」

そう言えば矢岩君が高海さんは時間に厳しいと言っていた気がする。社会人としては五分前到着がベストなんだろうけど高海さんはもっと早く着いている方が自分の精神上よろしいらしい。

「あの、入っても大丈夫だと思いますよ？」

私は門の横にあるベルを鳴らす。

「その、本当は一人で入るのは気が引けるといっか……まあ、そんな感じですね」

高海さんは苦笑いをして一緒に誰かが中からやってくるのを待つ。そっぴや訊きたかった事があるんだっけ。

「あの、高海さんって私達を助けてくれた時と雰囲気随分違う気がするんですけど何ですか？」

「違っって……どう違っんですか？」

改めて言われると漠然としか捉えていなかった事に気付く。

「その……あ、言い方だ。私達の事を『あんだ達』とか言ったりして、何か垢抜けた喋り方をする人だなってというのが第一印象だったのに、今じゃそんな風には思えないです」

私の言葉に高海さんは「あちゃ〜」と笑う。

「あらら、私そうしていましたか？」

玄関が開き、柵ちゃんが向かってくるのが見えた。

「実はそっちの方が本来の私でして、この疲れるような口調は結構無理しているんですよ。流石に名高き一色家の前で普段の私を出してしまつたら不味いと思つていたんですが……そうですね、初っ端でミスしてましたか」

「はい。車の中ではいきなり雰囲気が変わっていたのでさっき助けてくれた人とは別人なのかと思つたくらいです」

「あらら。ちゃんと自分に言い聞かしていたんですけどね〜」

高海さんは柵ちゃんが開けてくれた門を潜り、私の三步手前を歩く。

「ばれちゃ仕方ないね」

びつくりした。あのクールそうな高海さんがアハハと笑っている。

「これがホントの私。どう？ やっぱり違つてしょ？」

「はい」

「もう敬語はいいよ。私もこれからはあんだの事、有さんって呼ぶからさ。無礼講、無礼講。あれ、この言葉は違つか」

「またも豪快に笑う高海さん。いやはや随分私は騙されていたんだな〜。」

「なら私は鏡さんって呼べばいいのかな？」

「オツケー、そうして。もうこうなつたらこのままで鬼神さんに会おうかしら。どうせメツキなんてのはいずれ剥がれるものだしね」

ウインクしながら彼女はちよっぴり怖い事を言う。

（朱水に対してあんだって……勇氣あるな〜。だから削強班の中でも名前が売れているのかな。あ、でも矢岩君は既に朱水に対してそ

んな態度だったなあ)

「どう思うよ、有さん？」

「えっと、うーんと……やってみれば良いんじゃないかな？ 私も頑張ってフォローするし」

まだ知り合った初期の頃なら正体がばれてもさほど影響がないだろうから。後々になって急に実は私こうこう、こうでした〜って言われたら絶対大きく戸惑っちゃうもんね。

「そっか、そっか。よし、玉砕覚悟でいっちょやってみますか」

私の前で張り切る高海さん、じゃなくて鏡さんは何だか急に元氣一杯になった様に見える。余程自分を抑える事に力を使っていたのかな。

私達の前を歩く柵ちゃんは疑問を持った顔で鏡さんを何度も振り返って見つめるが、何も言わずに応接間に先導する。着くと同時に応接間のドアが開いて執事さんが出迎えてくれた。

「どうぞ」

応接間には朱水と椒ちゃんがいた。

「こんにちは」

私は二人に挨拶をする。さあ、ここからが問題だ。

「こんにちは」

鏡さんも挨拶をした。ここまでは何時も通り。

「二人が遅いもんだからさ、先に上がらせてもらったけど良いよね？」

あゝあ、本当にやっちゃった。

「……………は？」

朱水と椒ちゃんは今までの鏡さんとは全く違った様子の目の前にいる人物を見て同じ様な反応を示した。

「いやいや、そんな顔しないでよ。こっちがホントの私だし」

「そ、そうなんだって。鏡さん、今まで自分を隠していたんだけど……………」

どうしよう。何てフォローしたら良いんだろう。あ、そうだ、

「五人で力を合わせて戦うんだから騙し続けてはいけないと思ったんだって」

「……そう」

私の出任せの言葉に何とか納得してくれた朱水は、驚きながらも椅子に座ることを勧めた。

「まあ、今更双犬の態度が悪くても驚きませんけどね」

「おやおや、早速の皮肉ありがとね」

朱水の言葉を鏡さんは笑って受け流す。何か鏡さんの態度に感動してきたよ。

「はあ。調子狂うわね。椒、何か持ってきてくれないかしら」

「は、はい」

椒ちゃんは部屋を出る際にもちらちらと鏡さんを見ていた。やっぱりみんな騙されていたんだな。

「まあ、やることは同じだから別に構わないわよ」

そうは言っても朱水は椒ちゃんが茶菓子和紅茶を持ってくるまでずっと鏡さんと視線をぶつけ合っていた。

執事さんがノックをして顔を覗かせる。

「お嬢様、残りのお二方もお見えになりましたが」

「通して頂戴」

その後矢岩君と由音ちゃんが応接間に入ってきて、鏡さんが朱水に対して本来の自分を出していることに驚いていたがそれについては二人とも触れずに会議を進めた。

「もう話は無いわね？」

朱水がみんなを見回しても誰一人言葉を発する者はいなかった。

「なら良いわ。爺、車を」

「畏まりました」

執事さんが退室すると一緒に椒ちゃんも空となった食器を持って出て行くこうとする。



私がどうしようかと悩んでいるのを見て朱水は助け船を出してくれた。

「有、ちょっと椒を手伝ってあげてくれないかしら」

私はそれに勿論だよと答え、既に廊下に出してしまった椒ちゃんに追いつこうと駆け足で退室する。

「椒ちゃん」

椒ちゃんは足を止めゆつくりとした動作で振り返った。その動作の叔叔さには惚れ惚れする。

「聞こえていました。でも盆は一つしかありませんから尼土様に手伝っていただけるものありませんよ」

椒ちゃんはそういいながら再度台所へと歩き始める。優しい顔などこれっぽっちもくれなかった。

「そうだね」

でも私は椒ちゃんを追い越しその手に持つ食器をお盆ごと奪う。

「何をなさるんですか」

椒ちゃんは本当のところ私の意図がわかっているのだろうが、そう言わなきゃ気が済まないようだ。

「お弁当のお礼だよ。椒ちゃん、ありがとね。美味しかったよ」

私の言葉を聞いて椒ちゃんは何かを言いかけたが直ぐに別の言葉を紡いだ。

「と、当然です。私は有能な使い魔ですから料理なんて出来て当然ですもの」

「そっか。でも感謝してるよ。これからも作ってくれるの？」

「そ、そうですね。尼土様がどおおおおおしてもと言うなら作らないこともありませんが」

椒ちゃんは髪を指でくるくる巻きながらそう言う。

「うん。お願いします」

私はその姿に笑いそうになるのを堪えてちゃんとお願いをする。

椒ちゃんは私の顔を拗ねたように見つめてから私の持つお盆を再び奪って走り去ってしまった。

「何だか椒ちゃんの仕事わかってきたみたい」  
私は誰もいない廊下でそう呟いてしまった。

第二話 似て非なるモノ / (終) 「第一」

『第一』

車の中には私と朱水、削強班の三人が向かい合って座っている。あ、勿論運転手として執事さんもいるけど。由音ちゃんはめんどくさがる鏡さんに抱きついて楽しそうだった。

「今回、俺と菅江でヤツと対峙して、緊急時には高海の力を借りる。それで良いな？」

「ういっす。何時も通りっすね」

「まあ、逆十字の力をあの狭い場所で使われても良い迷惑ですからね」

朱水は決して嫌みの意味でそう言ったわけではなく、純粹に駆け引きの問題でそう言った。そんなに鏡さんの力は凄いものなのかな

「有、貴女は私の後ろにいなさい」

「うん、わかってるよ」

何故だか影と呼ばれる者は私を狙う。そのため私と影の間に常に朱水がいるように立たなければならぬ。

「ああそれと、何があっても有以外は私に近づかないこと。消し飛んでも知りませんからね」

朱水は軽く笑いながら冗談めいてそう言ったが、削強班の三人はその言葉が事実そのものを表していることを知っているため、誰一人笑う者はいなかった。

「お嬢様、そろそろ着きます」

執事さんは車を止めて振り返る。

「何所に車を着ければ宜しいでしょうか？」

「そうね、先日と同じ所で良いわ」

執事さんは朱水の言葉に従いあの日と同じ場所に車を停車させた。  
「では行ってくるわ」

「お気をつけて。皆様もどうかご自愛を」

執事さんは綺麗な礼をして私達を見送ってくれた。

あの日同様の重圧を感じながら私は階段を上る。しかし今日はこの前ほど不安ではない。朱水以外に三人もいるからだ。この人数ならどんなことになっても平気だと思えてしまう。朱水が敵ながら認めている様な人達だ、不安なんて薄まってしまう。

「妙だな」

先陣を切っていた矢岩君はそう呟き立ち止まる。

「玄もそう思う？ 由音はどう？」

「はい。何か変つすね。自分は初めてここに来ますが……」

由音ちゃんの言葉を待たずに朱水が言う。

「先程から結界の位置が少しずつ動いている、よね？」

「ああ、明らかにそうだ。この結界、普通じゃねえな」

「でもそれより妙なのは動いていると言うには微妙な動きなのよね。つまり数秒間隔で結界の範囲が変わり、その瞬間は飛び飛びになっっている」

「そこから考えられる結果はそう多くない」

矢岩君は辺りを鋭い目つきで見回す。見えない敵を探している様だった。

「この結界の中に結界を張った奴がいて、何度も結界を張っては消し、張っては消している、これが一番考えやすいな」

「でも何ですか？ そんなの意味無いじゃないっすか？ 張り直している瞬間に誰かが入ってきてしまったら結界の意味がないっすよ」

由音ちゃんが何気なく言ったその言葉は私以外の三人の視線を集める。

「そうか、誘き出すためだったのか」

三人が言うにはこの結界は中に迷い込む者の数を制限するために張られた物だと言うことだ。それは大勢の人間、つまり団体の魔狩り者などは一部しか入れず、残りの者はどこかへ勝手に移動してしまつらしい。

「でも変よ。私達は今さつきこの結界の穴を潜って入ってきたところでしょう？ そんな大がかりなことが出来る者が何故侵入を許せるような穴を作るのかしら。しかもその位置が位置よ」

そう、結界にある穴はなんと階段道の上に位置していたのだ。道理で最初に私達二人だけで登った時でも何事も無く神社までたどり着けたわけだ。

三人は再びお互いの考えを意見し合う。完全に除け者となった由音ちゃんと私は二人だけでその間の時間を潰す。

「お姉さんは……って何時までも『お姉さん』は変ですよ。あゝと、何て呼べば良いですか？」

地面に小枝でお絵かきするのに飽きた由音ちゃんは私と目が合った。

「うゝん、何でも良いよ。好きに呼んで」

「そうですかあ。なら……有にゃん」

「却下」

その呼び名は許さないかね！

「うあ、今何でも良いって言ったのに。なら……ゆうにゃん」

「そんな字にしなきゃわからない程度の変化なんて求めてないって。もつと他の無いの？」

由音ちゃんは困ったように考えながら私を観察し始める。そんな熟察して決めるようなものでもないような。

「そつつすね……ならこれはどうだ、ゆうたん！」

「駄目、そつち路線駄目！」

「ええ〜」

「そつ言う変わった呼び方じゃなくて普通に有さんとかで良いでし

「よ

しかし由音ちゃんはぶくとふて腐れたような口をする。

「それじゃつまらないんです。そう、何か特別な間柄ってのが醸し出されるような呼び方でこそ美しいのです」

びつと人差し指を立てて力説する。もう、無茶苦茶な。そもそも私達はそう特別な間柄と呼べるほどの仲でないでしょうに。

「うーん、うーん、……ああコレなら良いっすよね？」

「何？」

「有君」

「は？」

「そう、一見さも有り触れた呼び方のようで、実は幼なじみの様な運命的な間柄でも使用されるという甘美な呼び方、それぞ君付けさあどうだ！」

あの、私女ですよ？ そう言うのと由音ちゃんは笑って、

「気にしない気にしない。大丈夫っすよ」と、何に対して大丈夫なのか意味がわからない反応をする。

ああ、もう良いや。これ以上言うともっと変な呼び方されるかも知れないしね。

「それで良いよ」

私は何とか作り笑顔でそう言った。それにしても幼なじみだとか、やっぱり由音ちゃんは矢岩君が言う様にそういう類の漫画とか小説とかを読む様だ。もしかすると頭の中も似ているのかも知れない。

「あ、あっちも話に一段落付いたみたいっすよ」

三人は結局これと言った結論を出せず、当初の目的だけ果たせば良いということに帰結した。

再び階段を上っていくと例の神社の鳥居が見えてきた。一度対面したからであろうか、私でも気配と言う物が感じられた。髪の毛が逆立った気がした。

「いる、ね」

「ああ」

削強班の三人はお互いの配置に立ち、そのままの形を維持してゆつくりと進む。

私にも見えた。暗闇の奥にあの男の人がいる。

「……来るぞ！」

男は一直線に有を目指し突進する

しかし玄がその間に立つ

その背には数本の剣が展開していた

「お前が死ねるのなら殺してやる」

玄は流れる様に男の首に剣を突き刺す

だがそれは男にとって何ら効果が無い様である、自らに刺さる刃を抜き取り一笑して見せた

「ちっ」

玄は間髪を入れずに両手両足に剣を突き刺す

だがその剣も男の背中から急に現れた黒い腕によって抜かれる

「先輩」

由音は自分の最も得意とする戦法をとった

魔法で作った釘を、魔力を秘めた短刀を使って打ち飛ばす方法である

その速さたるや電光石火を形にした物であった

男はその釘を真横から受けて吹き飛ば

人外故か体が引き千切れる事は無かった

「流石は由音、正確な狙いね」

鏡は感心したように笑う

「次」

玄は地面に仰向けになっている男に空中から十本余りの剣を突き刺す

しかし男の動きは一切止まらなかった

黒い腕がそれらを撫でるように透き通るとたちまち抜き取れていた  
「不味いな。こいつには刃物が効かない」

玄が右手を天に向かって差し出すと、辺りに散らばった剣が玄の背中に集まる

「先輩、退いて下さい」

由音は男が立ち上がると同時に男の下に潜り込み真上に向けて釘を打ち飛ばす

男は魔力によって加速された釘を顔や喉にまともに食らい、上へと吹き飛んだ

「先輩、ここは自分がやるっす」

由音は空中にいる男に対して再びの釘の打ち込みをしながらそう叫んだ

釘は正確に男に当たり連続で突き刺さるために男を空中に止めた  
由音は致死の攻撃を与えているつもりだったが一向に男から命の灯が消え去る事は無かった

「悪いな。妨氷を起こすから時間を稼いでくれ」

玄は鏡の真横に飛び退くと鞆から神器を取り出し、魔力を注ぎ始める

神器とはそれ単体でも魔力を持つが、魔力を注ぐことにより更なる威力を瞬間的に出すことが出来る。それは存在の拡張である。そのため通常、使用者は「起こす」という、魔力の注入行為を行う。

「うわっと」

由音に向かって宙にいる男の黒い腕が伸びる

それは蛇の様に細長く、由音に噛みつかんと迫った

「変幻自在っすか。便利で良いつすね」

その腕を軽々と避けながら由音は再度打ち込む

しかしその釘は男に当たりはしなかった



男の黒い腕が八本に増え、その全てを止めてしまったのである

「ああ、先輩、自分もう時間稼げそうにないっす」

由音ちゃんはお手上げのポーズをする

「狡いつすよ、アレ。私の釘を何でもないように受け止めちゃうんすから」

地面に降り立った男に向けてまた釘を打ち飛ばすが、何度やっても黒い腕に防がれてしまった

由音の攻撃は完全に攻略されてしまった

「菅江、もう退け。後は俺がやる」

青白く輝く神器を右手に構え、玄は由音に撤退の命を出す

豪速と言わんばかりの踏み込みで向かってくる男に対し、玄は何時ぞやに見せた構えでそれをただ眺める

勝負は一瞬

男の黒い腕が玄に届くや否や、妨氷構えた魔狩り者はその八本の腕を潜って相手の四肢を切り落とした

「高海、後は頼む」

玄の言葉に頷き、鏡は停滞の式典兵器を数々の呪詛と共に男の胸に差し込んだ

高等魔法使いとして名高い高海鏡の呪いが男の体を蝕む

男は最後に力を振り絞って上半身を持ち上げようとしたが手も足も無い今は何ら抵抗ができなかった

「いや、。案外呆気なかったっすね」

そう言いながらも由音は緊張の所為でかいた汗を拭う

第一と殺し合うなど魔狩り者の中でも前例が余りに少ないのである  
その第一を仕留めた事による安堵が彼女の口を大きくしたのだ

「そうね。私も意外だわ。第一はこの程度なのかしら？ まあ、古代の人間が勝てたのだからこの程度でも納得できるわね」

朱水は呆れながらも背後にずっと隠れていた有を抱きしめる  
「さ、帰りましようか。後始末は魔狩り者達がやってくれるわ」  
有は朱水の笑顔に応えようとした

しかし、有は笑えなかった

まだ、何かがいる、そう思えて仕方がない

その根拠は何所にあるのか

男の目が私を凝視しているから？

男の手が私の方に向いているから？

男の声が私にだけ聞こえるから？

.....？

「有、どうしたの？ もう行くわよ」

朱水は先に階段を下り始める

「未だだよ」

有は削強班の三人の視線を一身に受けながらもそう呟いた

「未だその人……生きてるよ」

鏡は有の独り言を笑い飛ばす

「確かに、生きてるっちゃあ生きてるよ。でもね停滞を打ち込んだから、まあ安心しなってる」

しかし有の顔の翳りが消えることはなかった

「だって……さっきからずっと喋ってるし」

「は？」

鏡は有の言葉に大した反応が出来ず、ただ開いた口がその音だけ

を発した

「さつきからその人の声が聞こえるの。だけど朱水も鏡さんも由音ちゃんも矢岩君も誰も聞こえて無さそうなんだもん」

有は肩を抱いて震え始めた

自分だけに起きている現象と言うのが怖いのだろう

「お願い。誰かこの声止めて」

有はとうとう跪いてしまった

朱水は不審ながらも男に近づき、その姿を観察する

「驚いた。本当に生きているのね」

その男の胸は微かにだが上下していた

そして朱水は気が付いた

「ねえ、貴方、確か妨氷でこの男の両手両足を切断したのよね？」

「ああ……そうか！」

玄は瞬時に何が起こっているか悟り、叫んだ

断面には氷など一切見受けられなかったのだ

「そいつから離れる！ 奴は自分で切断されたと見せかけているだけだ」

その玄の叫びが終わると同時に地面から数え切れないほどの黒い手が突き出てきた

地面が割れる事も無く、ただそれは生えてきた

「停滞が効いていないですって？ あれだけの呪いと一緒に穿つたのよ。それなのにこんなに動けるなんてどれほどの化け物よ」

鏡は急いで有のもとに駆け寄り、朱水の代わりとして護衛に付く

魔狩り者である高海鏡が何故魔である尼土有を最初に保護したか

それはここにいる人間達の安全のためである

尼土有を失った一色朱水は恐らく怒りのままに動くだろう

そうなったら例え鏡達であつても命の保証はできないのだ

朱水は黒い腕を目の前にして身構えている

彼女は理解しているのだ  
背中を向けたら殺されると  
第一の強さを

「どつやらこれからが本気でお相手してくれるようね」

朱水は全ての神経を研ぎさまし集中する

何があっても奥手を取らないように

理解している

この中で一番強いのは一色朱水だ

その私がここでおめおめと死を招き入れることとなったら、有だ  
けでなく、魔狩り者らも殺されることになる

「何が起きているんだ？」

玄は目の前で起きている状況にただ疑念を抱く

数々の黒い腕は男を包み、黒い球となった

「嫌な感じですよ。まるで卵みたいじゃないですか」

言い得て妙、そう朱水は感じた

魔として最高位につく朱水は、それ故に相手の程度を知ることが  
出来る

強者は強者を知る、そう言うことである

故にわかる

球の中で今何かが存在しようとしていることを

「来るわよ」

朱水はそう小さく呟くと右手に霧を集める

球が割れ、中から大きな馬のようなモノが現れた

「冗談だろ……何てモンを相手にしちまったんだよ」

玄は削強班の中でも特に命知らずなことで知られている  
しかしその玄にさえ命の惜しさを考えさせる、ソレはそのような  
モノであった

「何すかあれは？ 馬ですか？」

由音の問いに鏡は頭を抱えて答えた。

「中国の四霊が一つ、よ。あんたも名前くらいは知ってるでしょ」  
朱水が絶望の色を潜めた声色でそのものの名を告げた

「麒麟よ」

「一角牛尾馬蹄の鹿、正しく麒麟ね。影だから大きさは曖昧なのか  
な。ニメートル無いとは随分小さいね」

鏡は鏡で有と由音をさり気なく庇うように身構える

「鬼神、俺達はどうしたら良い？」

朱水は玄が言いたいことを理解し、端的に言った

「確かに、私一人の方が有を守るかも知れない。でも最初の全力  
の霊力が外れてしまえば私は瞬く間に殺されるでしょうね。だから、  
出来れば共にいて欲しいわ」

生き残る可能性はそちらの方が少しは増し、そう朱水は考えた  
「わかった。呉々も俺達ごと消し飛ばすことのない様にな」

朱水は玄の言葉を無視する

有さえ守れば、それが朱水の本心であるからだ

玄もそれがわかってしている様で、ただ黙って神器を構えた

「『汝ガ……神タルモノノ……』」

「聞こえた。これが有の言っていた声なの？」

有は鏡の背後でこくこくと怯えながらも頷く

「『迷イシモノ……』」

「何なのよ。何が言いたいのよ。有に用があるならちゃんとした言葉で喋りなさいよね」

朱水は精一杯の虚勢を張る

「『迷イシモノ……汝ガ……』」

「迷いし者、尼土のことか？」

玄は麒麟の様子からそう推測する

「何故彼女が迷いし者なの？」

鏡は自分の背後にいる有を麒麟の目線から逃がそうとしながら、恐怖しか与えないその黒いモノに問うた

「『全テノ……回帰導キテ……』」

「どうやら話は通じないみたいね」

鏡は半分諦めのような口調でそう呟きながら、左手を地面に付ける

「魔力、行使」

左手に逆十字が浮かび上がり地面が十字に剥がれた

有はその質量感に驚く

世界がどう間違っても女性一人が片手で持てるような塊ではなかった

「捕らえるなんて夢の又夢。生き残れるかさえも確かじゃないわね」  
でも、と鏡は続ける

「私だつてこれでもただの人間じゃないのよ」

その言葉に思わず朱水は吹き出してしまった

「そうね。貴女をただの人間だなんて思う輩はこの世にはいないわね」

鏡はその朱水の皮肉めいた言葉に何故か励まされたような気分となつた

「動くぞ」

玄は妨氷に溜に溜めた魔力を確かめるように一瞥してから切っ先を麒麟の雄々しき頭に向ける

それは跳んだ

どんな者でも見えなかつただらう

麒麟の影であるソレは何者にも止められない速さであつた

「こつちか」

鏡は土の塊で出来た十字を盾にそれを迎え撃とうとしたが、いと也容易く吹き飛ばされてしまった

その音たるや鉄の塊がぶつかった様だつた

「キヤア」

鏡の声高い叫び声が当たりに響く

その姿は森の方へと消えていた

樹木が折れる音が鳴り響く

「鏡先輩！」

それを真横で見っていた由音は、有の手を引きながらも止まつた麒麟に釘を打ち飛ばしつつ、鏡の下へ走り寄る

木が折れてできた道を二人は跳ね走る

「大丈夫ですか？」

鏡は顔を痛みに歪ませながらふらふらと立ち上がる

服は破れていて中に着ていた特殊な鎧が露出していた

その背中にあつた木は半ば折れかかつていた

「さあどうだか。骨の一・二本はやられてるんじゃないの？ ったく、馬鹿みたいな力持っちゃってさあ」

既に土塊が消えている左手を右手に添えて麒麟目がけて詠唱を開始する

「有君離れるつす」

由音は有を押し離し、自身も木陰に跳び込んだ

「刮目レンゼツしなさい」「完数なる物の在処よ。三たる所以ゆえんに回帰せよ」

詠唱を終え右手を振り上げると三本の氷の矢が足下から飛び出し麒麟に命中した

「あちゃー、効いてないね」

氷の矢は確かに麒麟の眉間に突き刺さったように思えたがそのまま貫通してしまった

その矢が麒麟の怒りを買ったのか、再び麒麟は鏡目がけて突進をする

「何呆けて立っているのよ。殺されるわよ」

いつの間にか鏡の横にいた朱水は有を抱きかかえ右に跳ぶ

即座に判断し鏡は由音の手を引きながらギリギリで麒麟の体当たりを避けた

「これはどうだ」

玄は背後より麒麟の後ろ足を妨氷で切り裂いた

しかし手応え自体無く、空を切っただけだった

「つまり今まで確認された奴らと同じく、全身が影の部分になったって事か。こちらからの干渉は受け付けない、厄介なもんだな」

麒麟が振り返ったので玄も止む無く跳び下がった

全員が麒麟を困う様に位置するが誰もが出せなかった

状況だけなら圧倒的に有利に見えるこの布陣は、何ら意味をなしていなかった



「打つ手は無いですか？」

由音は釘を作ることすら諦めた様で右手に短刀を持ち絶望の様子で構えていた

「わからねえ。単純な打撃では意味が無い様だし、神器すら効かないとなるとな」

玄は鞆の中にある鉄球を繋げたような物を掴むが、しばし考えそれを戻した

「こいつを使うわけにはいかねえな」

「「「迷イシモノ……今コソガ期……ソノ……モツテ……」」」

麒麟は前足を踏みならす

暴れ馬の様なその姿は死の舞であろうか

「生草を踏まず、か。影になると性質も変わるものなのかね」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ。どうするのよ」

鏡はじりじりと足をずらし玄の横に着く

大きな動きは間違いなく興奮した第一を大いに刺激してしまうからだ

「なあ高海、あれ打てるか？」

鏡はそれに自分の掌を思慮深げに眺めてから頷いた

「一度くらいなら。でもこんな所でぶつ放したら大きな被害出るわよ」

玄はニヒルな笑いをして見せた

「構わねえ。生き残るのが最優先だ」

そして麒麟の表に回り叫んだ

「俺がどうにかしてこいつの足を止める。良いな？」

鏡はその言葉に覚悟の頷きを返す

「待って。私がやる」

その言葉は意外な人物から零れ出た  
「有……」

朱水に守られていた有は震えながらも声を張り上げる

「影の目標は私なんですよ。私なら多分影を止められるはずだから……。そうでしょ、朱水？」

有の決意の眼差しに朱水は反論しそうになった自分を抑える  
感情だけでは生き残れない

「……………ええそうね。貴女の壁なら恐らく止められるでしょう」  
「良いのか？」

玄は朱水に尋ねるがその視線を遮るように有は立ち、大声で自分を奮い立たせるように叫んだ

「私、出来る！」

その声に麒麟は向きを有のもとに変えた

その目は有を潰さんとしている

「わかったわ。でも横にいさせてね。私は貴女と共に運命を辿りたいから」

朱水は有の手を握る

有はその手の震えに驚いたがその震えを止めるほどに強く握り返した

「うん、横にいて。その方が安心できる」

麒麟が二人に向かって足を踏み鳴らした

来る……

その距離は麒麟の数歩である

もう後戻りはできない

「来るわよ」

「うん」

有が目を閉じると同時に薄い水晶の様な壁が現れた

麒麟はその壁に当たり反動で地べたに転がるように倒れた

「凄い……本当に止まったっす」

由音ちゃんは目の前で起きた単純でしかし理解し難い現象に戦おのいた

当たり前だ、先程まで何ら手応えを得られなかった麒麟をいとも容易く止めてのけたのだから

あの青い魔は自分が尊敬する二人の魔狩り者、恐れている鬼神、それらよりも危険な者なのかも知れない

だが、頼もしい

「高海、今だ」

玄の声が鏡の瞼を開ける

「わかつてる」

鏡は自分と影の直線上に誰もいないことを確認して早口で詠唱する

「賛美せよ」<sup>アンスウーゾ</sup>「小柄なる者、大者<sup>たいじゃ</sup>を討ち取らん。支配は被支配に、被支配は支配に、怒りの強<sup>じょう</sup>を愚昧<sup>ぐまい</sup>なる者に叩き付け、万物の台となりし者よ、今こそ帰<sup>き</sup>せ。汝は願う者、我は告げる者。我は刻を告げ、汝がそれに応えるのならば、汝が願い、我が叶えよう」

鏡が詠唱を終えると、その周りに渦が現れた

その渦は無数の石で出来た竜巻

人間の目ではその一つ一つの姿を捕らえられないほどの速度で回っていた

石のとぐろは土を巻き込み小枝を吸い込み赤く脱皮する

強熱<sup>じょうねつ</sup>が鏡の皮膚を覆う

瞼は既に開けられないために後は自分の感覚を信じるだけしかない

「歌え、笑え、狂え」

鏡の最後の言葉と同時に渦から石が我先にと影目がけて飛び出した

それは森の静寂を奪い去り

あらゆる木々と

数えきれないくらい小さな命を  
いとも簡単に消し飛ばし

全てを蹂躪し

根こそぎ大地を抉って

最後には勝手に融け消えてしまった

それは悪魔の所業か、大地を一直線に消して魅せた

しかし、結果は絶望的だった

「うつそお〜。冗談でしょう？」

鏡は落胆した

あれだけの魔力を使い果たし、これだけの生命の犠牲を出してお  
きながらも、彼女の行使できる魔法の中でも最高峰の威力を誇る一  
撃は影の形を崩すことすら出来なかったのである

「いよいよ万策尽きたか」

「ここが死に目っすか」

日頃から死ぬ覚悟がある削強班はもはや逃げることすら考えず、  
ただ最後の最後まで抵抗しようとする

元より逃亡など目の前の俊足の怪物には無意味な手段であろう

だが……

「諦めるのは未だ早いわよ。今のでアレがどの様な物が多少わかつ  
たわ」

彼らが恐れる者の一つである 鬼神 一色朱水は有の肩を抱きな  
がら不気味な笑いを見せた

その微笑みは幾人もの死者を見てきた削強班の背筋さえも凍らせた

「何を……するつもり？」

鏡はそう訊くが朱水は人間など相手にしないと聞いたげな眼差し  
を向けるだけである

「有、命令よ。何とかしてアレを止めなさい。壁等ではなく、確実に止められる何かを創造して」

朱水が纏う空気が変わった

朱水の髪が段々と白く光り始める

朱水の周りに紫色の霧が集まり始めた

「不味い、高海、菅江、俺達は退くぞ」

「あれが……」

鏡は恐怖の余り言葉の続きを口から出せなかった

知っているのだ、あの姿を見た者がどの様な結末を迎えてきたのかを

わかっているのだ、ここにいるだけで簡単に命が吹き飛んでしまうことを

そして再認したのだ、やはり彼女は魔であり人間を容易く葬る化け物であることを

「鏡先輩、どうしちゃったんすか！ 逃げないとマジで殺されちゃいますよ！」

由音は泣きながらも鏡を立たそうとする

「あの人の目、あれホンモノでしたよ。人間を塵屑の様に見下げる様な目だったつす。このままじゃ巻き添えくらいますつて」

鬼神が再びこの大地に現れようとしている

一色朱水という者から魔王とも呼ばれるべきイキモノが再び生まれる

世界が揺れる

それは大地すらも鬼神を恐れるから

目は金色に、髪は白銀に輝き、唇は艶やかな魔性の美しさを持ち、逸美いっびなその肢体は紫の霧に覆われ、一層それを鬼神たらしめている

「あれこそが『鬼』と呼ばれる種族の証……」

玄は鏡を抱きかかえ由音に目で逃走のサインを送る

「魔の中で形が変わる者達を鬼と言っ……」

人間の容姿から異形へと変わる事が出来る数少ない魔こそが『鬼』と呼ばれる種族である。異形である者は第一に近い存在、つまり鬼は人間の皮を被った第一と同じなのである。鬼であるというだけでその実力を誰もが認めるほどだ。それほどに危険な生き物なのだ。

「朱水……」

「足枷でも良い。檻でも良い。何でも良いからアレを完全に止めて頂戴」

朱水の変身に腰を抜かすが、有は地べたに座り込んだまま言われた通り足枷を創った

「これじゃ……意味が無い」

しかし、確かに足枷は創れるのだが、ただそこにあるだけで何ら意味を持たないのである

地面に転がる枷を有は絶望の色で眺める

（どうしよう……こんなんじゃ意味が無いよ。そもそも影には物理的な影響は与えられないのに。どうしたらいいのかわかんないよ）  
有は自分の行動が未来に大きく影響することを理解しているために焦り、頭では余り意味の無いことを繰り返していた

ずっと蠢いていた第一はついに壁にぶつかった際の激痛に慣れたのか、ふらふらとしながらも立ちあがった

その光景が目に映ると有は涙を零した

（駄目だ……できないよ……無理だよ……朱水）

その目は助けを求めて朱水に向けられる

鬼はしっかりと有を見ていた

「早くして頂戴。正直、理性を保っていられるのはほんの少しなのよ」

鬼神のその微笑みは一色朱水のそれと何ら変わらず、結果、有の混乱を多少鎮めることとなった

(足枷……檻……どうすれば良い？ 例え影に影響を及ぼすように創れても、あの速さでは檻では間に合わないし、足枷にわざわざかかってくれるわけがない。 どうすれば……考える……考えるんだ……)

アイシスは言った

私の力は『肯定』だと

朱水は言った

私の力は現実を上回る『肯定』だと

ならば

ならば

ならば

私がそれを強く信じるならば

私がそれを強く望むならば

私のその空想は現実を上回る

多少の矛盾など無視できる、それこそが「現実を上回る」事なのだから

なら

なら

なら

「なら私が創造すべき物は足枷や檻じゃない」

朱水は有の瞳の輝きで理解した

有は……『やる』

朱水は麒麟との間を一瞬で詰める

「行くよ朱水！」

(現実を上回る空想、答えは『足枷がかかった第一』だったんだ)

麒麟は朱水の接近に伴い跳び退こうとしたが急に現れた足枷により、本来影響されない足が動かなくなってしまう、横倒しとなった

「上出来よ。後で一杯褒めてあげるわ、有」

朱水はその腹に両手を突っ込み、『破壊』ではなく『呪い』を叩き込んだ

「さっきの物理的な魔法が効かないならば、私が存在ごと消してあげるわ」

影は崩れる

ただの破壊ではなく「壊れるという呪い」によって

物理的な力が効かないならば根本の力で壊せばいい

世界の力によって作られた存在ならば同じ力で押し戻せばいいだけだ

鬼神の霊力の流れに乗って第一の『形』は層を移ろう

それは存在そのものの破壊



それは影そのものの崩壊

影は崩れる

鬼神の呪いちからをその一身に受けて……

「終わったようだな」

階段の中程にいる玄は影の消滅を悟った

「ほら、何時までも泣いてないの」

「だってえ〜。ホントに怖かったんですもの」

鏡は由音の涙を手の甲で拭い取る

「大丈夫、もう終わったんだから。それに一色さんなら元に戻るわよ。だってそうじゃなかったら私達はあの一色朱水しか知らないことになるからね」

以前にも一色朱水はああった

しかし死に神となりて人々から命を奪い、鬼神と恐れられた一色朱水との初顔合わせでは、意外という表現を禁じ得なかった

何故なら私達の様には笑い、私達の様な生活をしているからだ

何よりも驚いたのは眩しい程の泥土有との信頼関係だった

いや、二人の関係はそのような言葉では言い表せないのかも知れない

あれでは人間と何も変わらないではないか

むしろ、人間よりも人間らしいところもある

なら、私達がさんざん殺してきた中にも……

「お出でなすつた」

玄の言葉に釣られて鏡は階段上の二人を見上げた

「これまた何とも素敵なご登場で」

鏡は思わず笑いながら二人が下りてくるのを迎えた

朱水の容姿は既に元に戻っていて、その顔は喜びで充ち満ちていた

「私は遠慮したのに……」

「ご褒美よ、ご褒美。こういつの、憧れていたのよね」

一色朱水は尼土有を、所謂「お姫様抱っこ」と呼ばれるポーズで連れてきたのである

どっちにとつてのご褒美なのかは敢えて言及しないでおこう

「びっくりする程お似合いよ」

鏡は自分の脳裏にちらつく考えを振り払い、二人の魔の雌雄関係を象徴しているであろうその姿を称える

「でしょう？ 何よりも驚いたのは有の抱き心地よ」

朱水は興奮した様に有を更に強い力で抱きしめる

有はその姿故に見えそうになる下着を隠そうと必死だった

「この素晴らしい程の安定感、右手に垂れる髪のこそばゆさ、適度の重量、程よい肉感、鼻に微かに届くこの匂い、どれをとっても最高よ」

「ちょ、朱水、恥ずかしいって。それにきついよお」

有は顔を真っ赤にして離れようとするが、その顔を見れば誰がどう見ても嫌がってはいないと思うだろう

「あら」

朱水は階段の端でグスグス泣いている由音を見つけた

「あゝ、私よね？」

気まずそうな声が出た

鏡は当たり前のように頷き由音の下へ行くよう頼んだ

「わかつてるわよ」

朱水は有を下ろして由音を後ろから抱きかかえる

「ひい」

由音は横から現れた朱水の顔を見るや否やもがいて逃げ出そうとする

しかし朱水の力には敵わず、疲れて朱水の胸に寄りかかることになった

「怖がらせちゃってごめんなさい」

由音は驚く

鬼神と恐れられていた者がこうも易々と人間に対して謝罪の言葉を口にするなど思ってもいなかったからである

「許して頂戴。あの姿ではつい人間に手が出ちゃうのよ。だから何も起こさないように睨みを利かせて離れさせようとしただけなのよ」  
朱水はくすくすと笑いながら由音の耳元でそう言った

「恐ろしいことを言うな。あんたの場合手が出るっていつのはつまり殺すって事なんだろ？」

「まあ、そういう事ね」

朱水のあつけらかなとした物言いに釣られ、玄も口を歪ます

「どう、許してくれないかしら？」

「えっ……と……」

「あら、許せないなんてほざくのかしら？」

由音の肩を掴む力が強くなった

「ひいひいひい」

それだけで再び頭の中がパニックになった由音は暴れ出したが結局朱水の力に立ち向かうことは出来なかった

「嘘よ。ふふ、トラウマにでもなったかしら」

朱水は朱水で楽しそうに由音を力づくで抑えようとする

それを見ていた三人は一色朱水に関する同じ表現を偶然にも

思い浮かべていた

『サドだな』

『サディズム、か』

『朱水って結構Sつ気あるよね。……は！　つまり私も対象になっているって事なのか』

「な、何だかこの感じゾクゾクするわ」

「ひいいい、勘弁してくださいさああい」

朱水は泣き叫ぶ由音をずっと弄くりながら階段を下る  
残された三人は無言で後を付いていく

一人は他の二人に哀れみの目を向けられながら

「皆様、ご無事で何よりです」

執事さんは私達が車に乗り込むと直ぐに車を発車させた。

「あ、私達は空港で下ろしてください」

鏡さんは身を乗り出して執事さんにそう告げる。

「宜しいのですか？」

「はい、タクシーを拾って帰りますから」

「爺、言う通りにしてあげて。どうせ自分たちの住処を知られたくないって事でしょう？」

鏡さんは核心を捕らえた朱水の言葉にただ苦笑した。

「まあ、組織の規則に載っているんじゃないわよね」

「え、鬼神さんはあの短時間でそんなところまで覚えたんっすか？　すっかり泣きやんだ由音ちゃんは朱水の言葉に驚きの意を示す。

「まあね。それより由音ちゃん。何時までも鬼神さんはいわよね？」

「あ、すいません。では何と呼べば……」

「何って……そうね、特別に朱水さんって呼ばせてあげるわ」  
うわあ、今更だけど随分な上から目線だなあ。

「は、はい！　ありがたくそう呼ばせてもらいますっ」  
由音ちゃんは朱水の手を握ってブンブン振り回す。まるで梓ちゃんだね。

「そこまで喜んでもらえるとは思っていなかったわ」  
朱水は由音ちゃんの勢いに押され手を振り回され続けていた。にしても『朱水君が良いです』とは言わないだね。

「あ、朱水さんの愛しの尼土有さんは有君と呼ばせてもらっていますが、どうでしょうか？」

「何よそれ」  
上機嫌だった朱水は一瞬で不機嫌になる。

「何だか呼び捨てより親密そうじゃない」  
朱水の態度に驚いた由音ちゃんは慌てて言葉を繋げる。

「だ、駄目なら止めますとも」  
しかし朱水は暫し考察した後、首を左右に振った。  
「別に良いわよ。私と有との絆が何よりも深い事は自明なのだから  
由音ちゃんはその言葉に安堵の表情を作る。何か聞いてるこつちの方が恥ずかしいよ。」

他の二人は呆れた様にその会話を聞き流していた。  
バックミラーに映っていた執事さんは楽しそうに目じりに皺を作っていた。

「皆様方、そろそろ空港に着く頃ですが」  
「あ、はい。駐車場に止めていただければ結構ですので」

「それじゃ私達はここで」

三人は駐車場で車を降りた。

「気を付けなさいな」

「あなたに心配されるのも妙な話ね」

「それもそうね」

鏡さんと矢岩君はタクシー乗り場へと進む。

「あれ、由音ちゃんは一緒に行かないの？」

由音ちゃんは車の傍で何もせず立ち呆けている。

「ああ、自分は先輩達とは正反対の方面なんで一緒のタクシーではないですよ」

だからここらで一人でご飯を食べてから帰るとのこと。

「あら、なら私の屋敷に来ないかしら？　これから夕食を一緒にどう？　勿論有も一緒よ」

勝手に私の予定を決められた。まあ、元々言われたらお呼ばれる気だったけどね。

「ええ、良いんすか？」

「ええどうぞ」

執事さんが開けてくれたドアから勢いよく由音ちゃんが飛び込んでくる。

「えへへ」

私のお腹に顔を埋めると幸せそうな横顔をこれでもかとはかりに見せつけてくる。子猫みたいなの顔を誘惑に負けた私は弄くり遊んでしまった。由音ちゃんも頬をつつかれるたびに気持ちよさそうな声を上げた。

「私は幸せ者つすよ」

由音ちゃんは私のお腹の上でクルンと引つ繰り返り、えへへと破顔する。

「あ、そうそう。今日の夕食での有の担当は椒よ」

「あ、そうなの。なら絶対行かなきゃだね」

「ええ、本人からの申し出だね」  
「そうなんだ。」

椒ちゃんとの関係も良好だし、大きな出来事も終わったりして順風満帆過ぎて怖いくらいだね。

「何を作るか聞いてる？」

「さあ？ 爺は聞いているかしら？」

「はい。確か炒飯を作るんだと張り切っておりますが」

……………またか

「椒つてあの黄色い髪のフランス人形みたいな子ですよ？ あんな子が専属料理人だなんて羨ましい限りっす」

「全くよね」

朱水は私の今日の昼食が何だったのかを知ってるくせに知らん振りを決め込んでいる。

「帰ったら私がちゃんと書いておいてあげるわ」

朱水は窓に映る由音ちゃんの顔を眺めながらそう言った。

「有は椒の炒飯が大好きだ、って。あの子、大喜びするわね」

……………イジワル

(第2話 完)

大きな部屋には殺風景に椅子が二つと、隅に机がポツリと置かれているだけだった。機能だけを備えた不格好な時計が針の音を響かせている。窓から覗く曇天は灰色の気分になさせてくれる。

「では報告を受けましょうか」

片方の椅子に座っている、ただ黙っていれば女性と見間違えてしまいそうなその人は、私に対して当たり障りのない笑顔を見せた。この人は常にこの様な顔をしていた。私が知る限りこの人が憤怒したり嘆いたりした事は無い。いや、顔をしかめる事は多いかも。まあ主に私の所為なんすけどね。

「二人からは既に報告を受けていますので簡略して結構ですよ」  
書類をばらばらと捲る音がこの広い部屋に何故か響く。

「あの……ですね……。鬼神さんが……。その……」  
事実をありのままに話せたらどんなに楽だろうか。しかし先輩達が鬼神さんと交わした約束がある限り私も告げる言葉を選ばなくてはいけない。

その人は急にムスツとした顔を作ると、手に持っていた書類を丸め私の頭を軽く叩いた。

「そう言う態度は取らないって言ったでしょう？ 何時も堂々として動きなさい。ただでさえ菅江君は若いのだから、甘く見られたら終わりですよ」

「はい、すみません」

再び紙の棒が私の頭に振り下ろされた。軽い音が心地好い。

「すみません、でしょ？ 菅江君の話し方を私は大いに気に入っています、謝罪の言葉だけはちゃんとした言葉にしなさいって何度



も言いました」

「す、すみませんでした」

その人は「宜しい」と言って丸めた紙を元に戻す。結構大事そうな書類に見えるのに平気なのかな。

「で、一色朱水がどうしたのかな？」

「……噂通りの方でした。第一を殺した時なんて正しく鬼神が如し、です。自分、殺されるかと思いました」

間違った事は言っていない。あれは本当に危険な存在だった。

「ほう、それほどまでの恐怖を君に与えたんですか」

「恐怖なんてモノじゃないですよ。でもその後直ぐに落ち着かれましてけどね」

その人はペンを持つ手を下げた。書類に書き込むような事ではないからであろう。

「そうですね。それよりも聞きたいことがあります」

その人は組んでいた足を解き、私の目をまじまじと見つめる。

「尼土有という魔について報告しなさい」

……来たか。わざわざ名指しなのはやはり何かを感じ取っているからなんすかね。

「尼土さんは一色さんの部下であると共に親友みたいです」

とりあえず一番言いやすい部分で尚且つ一番重要な部分を言葉にする。有君の存在を手っ取り早く把握して貰うには最良の言葉だ。しかしやはりそんな事だけでは納得はしてくれなかった。

「他には？」

「他に、ですか？ え〜とお」

その人は私の目から視線を一切外さない。私が何かを隠しているのを見抜いている目だった。

「矢岩君も高海君も報告文はそれしか書いてないんですよ。流石にこれはおかしいと思いませんか？」

「何がですか？」

「あの二人が一色朱水の、鬼神の特別な加護を受けている魔につい



でもそれは違うんっす。あの人はどういう理由でかは知らないんですが、第一を狩る事には一切不快感を抱いていなかった様なんすよ。「えっとそれは……ああ、交換条件です」

「交換条件？」

「はい！ 私達の手の内を……見せ……うげっ」

やばい、今私はとんでもない事を口走ってしまった。間違いないこの人相手に言っではいけない事をだ。恐る恐るそのお顔を拝見すると案の定、眉同様に頬もひくついていた。

「まあああああああああ、持ち出した神器などを事細かに説明なんてしていませんよねえ？」

「……すみません」

「後で三人とも罰則決定」

鏡先輩、玄先輩、すみません。自分、これでも全力を尽くしたつもりっす。甘んじて罰を受けましょうよ。

「それを交換条件に影の討伐に力を貸してもらえたって事ですか？」  
「はい……そうです」

最悪ですね、と私に対して睨みを利かせながらその事をしっかりと書類に書き込んでいた。嫌な汗がどつと背中を濡らし始めた。

「ならばもう一つ訊きたいことがありますね。何故彼女は尼土有をその場に連れて行ったのでしょうか？ 彼女なら他の魔の力を借りる必要は無かったのでは？」

「うわゝ、またもや核心だ。そんなの答えられませえゝん。」

「さあ、わかりません。きっと尼土有さんには鬼神さんにとってとても有利な力を持っていたりするのではないのでしょうか」

その人は私の手を握って何かを考えていた様だが、暫くすると手を解放してくれた。

「そうですか。ならもう退室して結構」

「は、はい」

やったあゝ、何とか無事に乗り切れた。まあ、多少の罰則があることから目をつぶれば、の評価だが。そこんところは先輩達も大目

に見てくれるはず……はず。

私がドアのノブを掴もうとするとその人は突然立ち上がり私に真剣な眼差しを向けた。

「私がどの様な立場であるかわかっていますね？」

「はい。削魔遂行部強行班の総班長、春日井 京 鹿さんです」

「ならば私が上の情報をかなり知っていることもわかりますね」

上の、と言うのは恐らく削魔遂行部を取りまとめる人達の事だろう。それより上のお役人さんのほとんどはこういう事に知識を割いていないと言う。

「はい」

その人、春日井総班長は何かを躊躇いながらも私に教えてくれた。

「上は尼土有という魔にかなりの興味を示し、何やら動きを見せていました」

「……そうですか。教えて頂きありがとうございます」

「こんなこと貴方達三人にしか言いません。ですから他人には口外無用ですよ」

春日井総班長は手を振って私を送り出した。

どういう訳か、春日井総班長は私に上の情報を教えてくれた。

「どう思います？」

鏡先輩はファーストフード店特有の塩っぱいポテトを口に啜えながら答える。ここで食事をとるのは先輩からのお誘いだった。先輩はこういうお店の方が気楽でいいというのだけれども、その癖一人で入るのが苦手らしく必ず誰かと一緒じゃないと駄目らしい。多分『自分じゃなくて相手の提案ですから』みたいな事を周りに示したいんだらう。妙な所でプライドを張ってしまう先輩だったが、私は私で呼ばれる事に全然嫌な気分はしない。奢ってくれるんすもん、最高っすよ。

お昼時のために周りは学生よりもスーツ姿のおじさん達や親子集団だった。私達の隣の席に座らされている小さな男の子が私達に手を伸ばして何かを訴えていたので私はそれに手を振って応えた。

「そうねえ。私達に何か行動を起こせと言っているのはわかるんだけど……」

「行動、ですか？」

「そう」

鏡先輩は私のドリンクを飲む代わりにポテトを私の口に差し込んできた。因みにこんなに人がいる場所なので当然具体的な固有名詞は口に出していない上での会話である。

「その言い方はつまり『直接の指示はしていない』っていうことなのかもね。要するに責任は私達にあるので好きにやって構わない。

その代わり総班長は責任を負うつもりは無いって言いたいのだよ」

「そうなんすか。でも何が起きているのかさえわからないのに行動と言われても……」

鏡先輩は何かを閃いたかの様にポンと手を打った。

「そうだ、あんた、張ってなさいよ」

「張る……尾行ですか？」

鏡先輩はチツチツと指を振りながらバーガーの残りを口にする。

「あんた、折角朱水さんに気に入られているんだし、堂々と傍にいなさい」

「え、マジっすか？」

「マジのマジ、大真面目よ。とりあえず『何だか状況が芳しくないんで有君の護衛として来たっす』とでも言えば大丈夫じゃない？」

そんな適当なあ。鏡先輩って本当に身内には適当っす。

「え、でも任務の方は……」

「多分事前に総班長の手が回っているんだろうけどあんたは暫くフリーよ」

渡してもらった予定表を見ると確かに私の名前が何所にも無い。

「おお、だから自分にあんな事言ったんすね」

尼土有の身の回りで何か起こるかも知れないからとっさの時のために自由でいろ、って事っすか。

「でも変ね。総班長が何故尼土有のことを結果的に保護する様な真似をさせるのかしら」

「そうですね。普通に考えれば奇妙な話です」

鏡先輩は私が食べ終わるのを待っている間ずっとその事を考えている様だった。

「食べ終わった？ なら行きましょう」

鏡先輩は何も言わずに私の分まで片付けてくれた。先輩のそういうところが大好きっす。

「確かあんたまた本屋行くのよね？」

「はい」

「あんたさ、部屋のアレ、どうにかしなさいよ」

先輩が言うアレとは私の持っている漫画等だ。確かに普通の人から見たらあの量は異常なんだろう。

「いっそのこと全て売り払うとかさ、とにかく数を減らしなさいよ。別に今更あなたの趣味にとやかく言うつもりはないんだから」

たまに私の部屋に泊まりに来る鏡先輩は、私の部屋を見て毎回「ちよつとした本屋ね」と呟く。でもその床面積の一部を占める本棚のおかげで、夜は鏡先輩と一緒に布団で寝られるんすから絶対に片付けませんとも、ええ。

「いや、あれでも厳選した方ですよ？ 好きなのしか持っていないせんもの」

「……もう良いわ。毎回言ってる何かしらの変化が見いだせると思っている私が馬鹿なだけよ」

そう言っつて鏡先輩は私の髪を軽くグシャッと掻き乱すと駅に向かって歩いていった。

「先輩漫画とか読まないもんね」

私は私で目的の店へと歩を進めた。

「最近のお前、不審者だぞ？」

輪島鉄平の野郎は昼休みの賑やかな教室で周りに対する配慮も無く大きな声で俺にいきなり失礼なことを言ってくれやがった。

「何がだよ？」

「お前って最近隣のクラスに頻繁に出入りしてるだろ？」

「そりゃ君中や田崎がいるからだろ」

輪島はニヤニヤしながら俺の胸を小突く。何だよその気持ちの悪い顔はよ。

「前はお前から向かうなんてしなかったらうに。それに何だか隣のクラスの女子をずっと見ているんだってな。キャー、へんた〜い」

輪島は俺から距離を取るような仕草を見せそうほざいた。

「んなわけあるかよ。俺は女子になら視線を向けるなんていう男じゃないっつゝの」

「おっと、単語が足りなかったな。『一人の女子』だ」

もともと嫌らしい形を作っていた口がさらに殴りたくなる程に何ともむかつく物となっていた。

くそ〜、こいつ完全に感づいていやがる。

「で、好きなんか？ 尼土さんのこと」

「……最悪だ」

「お、その言い方、正解だって事だな？ わかり易過ぎるんだよお前」

輪島はガッハッハッと本当に文字でその光景を表現できそうな笑い方をした。

どうでも良いが口から米粒を飛ばすな。汚くてしょうがない。そ

ういつところがお前のその中々な容姿を勿体なくさせているんだよ。  
「誰にも言つんじやねえぞ」

「はいはい。親友の宇津居一君は尼土有さんのことが気になってい  
る、なんて誰にも言わね〜ですよ」

「……………殺す」

「まあ待て。その代わり取って置きの情報教えてやる」

輪島は俺の耳にこそそと話しかける。生暖かい息がかかって気  
持ち悪い。これが女子のだったらどんなに良いことか。

「尼土有さんはどうやらあの完璧美少女、一色朱水さんと大の仲良  
しらしいぞ」

「んな事くらい知ってるわ」

下らん。そんな情報のために俺はじんま疹が出るようなこの状況  
に耐えていたのか。

「まあ、待て。こんなのは序の口だ」

「何だよ？」

「聞いて驚くなよ？」

輪島は勿体ぶりやがって、十分に溜めてからその口を開いた。

「二人は恋人関係にあるらしい」

「……………はあ？」

「わ、馬鹿」

俺がつい出してしまった大声を輪島は周囲の目から誤魔化すよう  
に、引きつった笑いを周りに向ける。クラスメイトはそれを見てい  
つもの輪島のつまらん話だと思ったのか直ぐに興味を失ってくれた。

「すまねえ」

「まあ、そういう反応するのわかるが」

「つまり、その…………アレか…………レズって奴か？」

「ああ。何でも休日の公園で二人がキスしているのを見た奴がいる  
んだとか」

「マジかよ…………」

「誰が見たってのは聞いてないが、あの二人を見ているとそんな関



係だって言われてもおかしくないような気もするだろ?」

確かに。他の女子のグループとは一線を引いている様な気もする。べたべたし過ぎ、そんな感じだ。

「宇津居君のライバルはあの完璧美少女ですかあ。勝ち目ねえな」

「全くもって同感だ。勝ち目無いわな。つーか、尼土がビアンだったら元々俺なんか……」

「ま、ご愁傷様って奴だ。ほら、可愛いそうなお前に恵んでやる」

そう言っただけの弁当にカボチャの煮物を放り込む。食べ物で遊んじゃいけません。

「お前が嫌いだけだろうが。にしても……そうか」

尼土、好きな奴いたんだな。ま、いても何らおかしくないし、それにあの容姿なら彼氏の一人や二人いてもおかしくないよな。それが彼氏でなく彼女だったのは予想外にも程があるがな。

「そっぴや、お前何時尼土さんに興味持ったんだよ?」

こいつとは長い付き合いだからきつと俺の変化には敏感なんだろう。最近までそんな素振りは無かった、そう言いたいらしい。

「わりと最近だな。放課後に偶然廊下で擦れ違っ」

「んで一目惚れ、か」

「うるせ〜」

輪島は笑いながらもちやつかりもう一つカボチャを俺の弁当に放り込む。だから食べ物で遊んじゃいけません!

「好き嫌いは良くないぞ」

「んな事は知ってる。これは好き嫌いではなく、敗者へのせめてもの贈り物だ」

敗者、か。嫌だね、その言葉の持つパワーは。

「にしても、尼土さんも相当な女子レベルだよな? 俺、どうして隣のクラスなのに彼女のこと知らなかったんだろつなと最近自分を責めてるわ」

「何故にそうなる」

「だってあの一色さんと出会う前に俺が出会っていたらもしかする

ともしかするだろ？」

その顔は一切の冗談気を含んでいない大真面目な顔だった。

「……可能性は否定できない、とだけ言っておくぞ」

こいつは大物だな。尊敬するぜ。

「真性レズだったら意味無いけどな」

……自分で自分にナイフ突き刺した気がするぜ。涙は心の中でそつと流しておこう。

「まあな。にしても1組と4組は良いよな、あんなハイレベルな女子を毎日拝められて」

一クラスに一人はいるよな、こういう奴。まあ分からん事も無い。あれくらいの美人はそうそういないもんだからそれが学校に複数人いるっただけでその学校はアタリだわな。

「それに比べてうちのクラスなんて……ハア」

「おいおい、そういう発言は他でやれよ。それにうちにだってそれなりなものもあるじゃんか」

流石に内容が内容なので声を細める。クラスのと真ん中で男二人が頭を寄せ合っただけで会話する様子を想像してみたら寒気がしたが気にしないでおこう。

「桑田と葉月か？ あいつ等には他校の彼氏いるから始めから除外」

「……そうか」

俺が適当に流すと輪島はとうとう病んでしまった様に呟き始める。

「尼土さんのあの綺麗な目、柔らかそうな唇、細い腕とすらりとした足、何であんなにも可愛いんかな？ マジで同じ人間なのかと疑っちゃうよな」

「大丈夫かお前」

既に病的な域にまで発言が届いてしまっていた。こりゃ駄目だ。

「うるさい。あんなトンデモ美少女が二人だけでヨロシクやつてるなんて悔しいと思わないのか雄として！」

俺が可哀想な目で輪島を見てあげていると、

「あのさ、こういう時は殴ってでも良いから輪島を止めてあげて

「よ」

急に背後から女の声がした。

振り返るとそこには豊島が腕を組んで立っていた。

「おい、一人忘れてんぞ」

俺の言葉に輪島はやっと正気を取り戻した。

「何がだ？」

俺は豊島を指さし先程の話題をぶり返さず。

「このクラスでハイレベルな女子」

「おっと、いきなりだな」。でもガチに言ってるなら素直に喜んじやうよ」

しかし輪島は口を尖らせてブーイングする。やめておけば良いものを…… 蛮勇は勇氣とは違うのだよ。

「女じゃね〜」

「あんですと〜」

予想通りの言葉を浴びせられた豊島は輪島の頬を本気で抓った。こりゃいかん、見ているだけでも口の中が酸っぱくなるぞ。

「もう一度言ってみる〜」

「す、すいませんでした」

輪島の目に涙が浮かぶ。高校生にもなつて女子にクラスメイトの真ん前で泣かされるとはなんて可哀そうな子なのだろうか。

「なら、他に何か言う言葉はない？」

「は？」

「ほら、何か……褒め言葉とか？」

「は？」

豊島は別の手でまた輪島の頬を抓りあげる。

「いぎゃああ、すんません。言います、言いますからあ」

その言葉を聞いて勝ち誇った顔をした豊島は輪島の頬を解放してあげた。女子らしい長さ故に頬にはばつちり爪の跡が残っていた。

「はい、言つて」

嬉しそうに豊島は言つ。言わせて嬉しいとは安い奴だな。

「……豊島瑞穂は5組の中でもハイレベルな……女子です。……言  
ったぞ」

「はい、良くできました」

豊島は輪島の頭を撫でながら笑う。女子と言う単語の前に少し「  
た」に濁点が付いた様な言葉が聞こえたのには目をつぶるならぬ耳  
を閉ざしたらしい。

それにしてもこうして見るとホントに美少女じゃんよ。

「ふっふっ、その目は何かな？　もしかして私の顔に見蕩れてた？」

豊島は堂々とそんな事を言う。ここにも大物がいたな。

「それより今日は昼練って無いのか？」

「うん。女子サッカーは気紛れでしか昼練しないような部活だから  
ね」

豊島瑞穂は女子サッカー部での重要人物らしく、よく後輩が訪ね  
に来る。いや、単に後輩女子に人気があるだけかも知れんな。お熱  
な顔した女子がたまに来るもんさ。

髪は女子にしては短めで、正にボーイッシュと言える容姿だ。だ  
がその顔は男とはほど遠く小綺麗に整っていて、髪を伸ばすとして  
もじゃないがスポーツをやりそうもない良家のお嬢さん、って感じ  
になるだろう。実際去年の夏に偶然出会った際に、一緒にいた演劇  
部の友達が持っていたお姫様用のカツラをふざけて被ったのだが、  
それが驚くほど似合っていた。

「ところで、さっき何の話をしていたの？」

野郎二人が寄り添い合っててきもかつたぞ、だとさ。

「あ〜」

俺は輪島に変なこと言ったらただじゃおかないというアイコンタ  
クトを必死に送る。奴にもそれが通じたらしい、しっかりと頷いた。  
やればできるじゃないか！

「あ〜、ほら隣のクラスに尼土って女子いるだろ？　あの子につい  
て色々と論議していたんだよ」

うむ、輪島にしては良い誤魔化しだ。何時かご褒美としてカボチ

ヤの煮物をあげよう。

「ふ〜ん、知らない子だね」

「意外だな。お前ほどの友好関係だっ広い人間が知らない女子なんかいたのか」

「そりゃ何人かはいるさ。でも変だな、私は隣のクラスにしょっちゅう出入りしているから知らない子なんていないはずなのにな」

「余りに可愛いから自分と比較して落ち込まないように無意識に視線を逸らしてたんじゃね？」

輪島の喉にチョップを入れ悶絶させた後に豊島は俺の方に振り返る。

「その尼土って子、そんなに可愛いのか？」

「まあな。多分学年二位」

「おいおい、誰ランキングよ？ でもそれってある意味一位じゃん。一位は絶対一色さんなんだから」

まあ、一番が一色さんだって事はこの学年の人間なら誰でもわかることだ。高校の入学式であの姿を見たときは正直目を疑った。余りの美人っぷりに一瞬立ち止まってしまったくらいだ。

「気になるな〜。ちよつと、見てくる」

そう言って豊島は教室から足早に出て行った。

「落ち着きが無いな」

俺はカボチャの煮物を、床に座り込んだまま苦しんでいる輪島に見えないようこっさりと弁当に戻してあげた。

これでさっきのご褒美をあげた事にしよう。

午後の授業をいつもの様に半睡状態で過ごした放課後、俺は他のやる気の無いメンバーと一緒に掃除をぐだぐだとしていた。やる気ないという話どころではないのかもしれない。男しかいないためにリミッターが深刻に不足していた所為か、完全に掃除と言う漢字二文字を、今大振りの餌食になったボールの様に丸めた雑巾と同じよ

うに箒で打ち飛ばしてしまったのかも知れない。残った俺ともう一人の真面目君だけが野球で無く掃除と言う作業で手を動かしていた。HRが終わると直ぐに何所かに行ってしまった豊島は、戻ってきたと思ったら掃除当番の俺の箒を邪魔する様に立つと興奮して言った。

「何あの子、マジ凄くない？ 一色さんに負けず劣らずじゃんよ」  
「そう言っただけだよ。つーか、昼休みに会いに行っただけじゃないのか？ あ、それと邪魔だから退いて」

「そうなんだけどさ、昼休みはどっか行ってるらしくて会えなかったよ。で、今さつき会ってきたってわけ」

「そうか。会えて良かったな。それは良いから早く退け」

豊島はやっと退くと俺の掃除の動きに合わせる様に動きながら話しかけてくる。

「でね、ちよつとお話ししてきたんだけど……」

「マジか！」

俺の反応に豊島はにたにたとした顔をする。しまった……

「何よその反応？ まさか……そうなん？」

俺は本当に自分が恨めしい。何で同じ日にこうも簡単に自分の恋慕についてはねなきやならねえんだ。豊島は事の事情が分かったと言わんばかりに嫌らしい顔を俺の視界に執拗に入れてきた。

「まあまあ、その事については追求しないでおいてあげる。それよりあの子、一色さんと親友なんだって」

「……知ってる」

「あ、そうなん？ にしても世の中って良くできてるよね。あの二人が仲良いなんて最強タッグじゃんよ」

全くもって同感だ。でも逆に他の男じゃないっていうのも少しは心のどっかにあるんだけどな。

「あ、でさあ、友達に聞いたんだけど尼土さんと一色さんの関係って親友と言うよりもさ」

「まあ、そっちな関係らしいな。俺も今日知ったばかりだが」

全くもって悲しい話だな。気になる女子が男子に興味ありませんでした。最高に辛い話だ。

「やっぱり？ その子、公園で二人がキスしてるところたまたま通りがかったときに見ちゃったんだって」

ああ、そいつか。そいつには感謝するよ。無駄な告白をしなくて良い様にしてくれたみたいなものだからな。

「いや、あの二人がね。私、女だけどあんな二人を侍らせる様なハーレムを作ってみたいよ。憧れるね」

豊島は両手を頬に当てて体をくねらせる。

それは全男子が同意だ。だがやはり女がそういう発想するのは少し変だぞ。

「あれかな？ 自分の顔が良すぎると、美意識高ぶっちゃって男女関係なく綺麗な方を取っちゃうものなのかな？」

「俺に聞くな。そんなのわかるわけねえだろ」

「だよな」

俺の顔をわざわざ覗きこんで言いやがった。あ、今はむかついた。

「いや、私は普通の顔で良かったよ」

「お前が普通だなんて言ったらブーイングの嵐だな」

「そつなん？ でも実際モテないし」

「それとこれとは別」

「貴様はつまり私の性格は駄目って事が言いたいのかあ」

豊島は涙声を出して俺を指さす。本当に面白い人間だ。

「お前のそつというノリのいいところが長所でもあり短所でもあるんだよ」

「お？」

「そのノリのお蔭で男子と分け隔て無く付き合えるのはお前の特技だろ？」

豊島は俺の言葉に「まあね」と自慢気に頷いた。

「だけどそのノリはあくまで友達としてなんだよ。つまりお前はあ

んまり女として見られてないって事だ」

これは間違いなくクラスの男子全員の意見だ。たまに起きる男子だけの会議的な物で豊島の話題が出ると必ずこのような結論に行きつくのだった。

「マジかよお。そんな心に大きな傷を作る様なことを掃除の時間にさらっと言つなよお」

「でもお前、素材が良いんだから努力すれば彼氏なんて思いのままになると思うぞ」

「何それ、遠回しな告白ですか？」

豊島は俺の背中に指を立てながらふざける。突き立てられた指が艶めかしく動いたためにこそばゆい。

「ちげ〜よ。つくか、さっきのでわかつちまったんだろ？ だったらそついうこと言つな」

「え〜、何の事お？ 誰々が尼土さんのこと無謀にも好きだって事お？」

……………無視しよう。

「おいおい、流さないでくれよ。悪かった、謝るって」

「……………」

「ごめんつてば。そんな『背中語る』みたいな格好しないでさ」  
掃除中だから背中がお前の方に向いてんだよ。

「そついやお前時間良いのか？」

ちらりと見た時計は女子サッカーが始まるはずの時間の数分前を示していた。

「うわ、こりゃ不味い。じゃあね」

慌てて鞆を机の横から剥ぎ取り開けたドアを閉める事無く廊下を騒がしく走り去って行った。あまりの足音の大きさなので今どこにいるかが分かるくらいだった。

「やっぱり落ち着きがないな」

俺は掃除をきちんと全うして箒を工具箱に仕舞い、掃除当番でもないのいつの間にか雑巾野球に参加していたはずの輪島の姿を探



したが何所にも見つけられなかった。

「輪島ならさつき委員会で呼ばれたぞ」

俺のそんな姿を見て何をしているのか理解した隣の組の田崎は、5組の教室に入った際に教えてくれた。多分俺を迎えに来てくれたんだろう。

「そうか。君中はどうした？」

「今日は休み。ま、どうせサボタージユだよ」

「あいつ、ホントにサボり癖直らないよな」

「中学以来だからね」

俺達がそんな些細なことを話しながら廊下を歩いていると背後から田崎を呼ぶ声が上がった。

「田崎君。これ、落としだよ」

聞き覚えがありすぎる声色だった。どうしてもこの声だけは雑音の中から拾い聞いてしまっ、そんな機能を脳が最近持ち始めた気がする。

それは今最も（一方的に）会いたくない人物である尼土さんであった。相変わらずの愛くるしい笑顔で俺は立ち所に緊張で体が動かなくなってしまった。

「ああ、ありがとう」

「これ綺麗だね」

尼土さんは田崎が落とした携帯のストラップを見てそう言った。

色鮮やかなガラス細工で、どちらかと言うと男子が持つのではなく女子が持つていそうな物であった。田崎はそういうのが昔から大好きで、以前電車に携帯電話を置き忘れた時は女性の物として忘れ物登録されていたくらいだった。本人曰く「可愛い」ではなく「綺麗な物に惹かれるらしい」。

「そう思う？ 何処かへ出かけたときに一目惚れして衝動買いしたんだ。今でもお気に入り」

尼土さんは田崎の目を真っ直ぐ見て微笑む。羨まし過ぎるぞ、田崎め。

「綺麗な色遣いだよね。チャラチャラしてないし、目立とうともしていない。だけれど存在感がある、そんな感じだね」

そう言いながら尼土さんは手をバイバイと振りながら戻っていった。どうしよう、本気で田崎が妬ましい。

「尼土さんってあんなに友好的だったんだね」

田崎は意外と言わんばかりな顔を作る。おいおいクラスメイトだろくに。

「同じクラスだろ？ 話したこと無いのか？」

「んー、それがどうにもわからないんだよね。何度か話したことはあるはずんだけど」

くそ、この野郎め。尼土さんとの会話を忘れるなんて俺からしたら自分を大いに罰する様な失態デスよ？

「むしろあの人自体の記憶があんまり無いんだよね。最近のは沢山あるけど」

不思議だよな、と疑問符を打つ。今の後半の言葉に俺は少し疑念を抱いたが俺はその言葉全体に反応してやる。

「お前が馬鹿だった。それしか考えられん。あんな可愛い奴をどうやったら忘れられるんだよ？」

「可愛いのは認めるけど……それに何だか僕だけじゃないみたいだよ、そう思っているのは」

「そうなのか？」

「うん。それに尼土さんの話題が上がってきたのだって最近だし、尼土さん本人が目立ってきたのも最近なイメージがある。むしろ最近転校してきたって言われた方が納得できる様な感じだよ」

へえ、何とも不思議なことですね。ま、俺は尼土さんの事忘れたりなんかしないから関係ないけどな。

俺達はその後も尼土さんの事ばかり話してお互いの家路についた。まあ、こういう事してるから俺はわかりやすいって言われちゃうんだよな。反省、反省。

第三話 水鏡 / 中話(1)

Sepia

その人は私の首に鋭利な剣を添えた。

氷の様に冷たい刃が首を冷やす。

その方が良いのかもしれない。

痛みは冷たさによって消されるのだから。

せめて死ぬ時くらいは痛みを忘れさせて。

痛みは生きたいという願望の表れなのにまだ私に付きまどってくるの。

「死にたいなら殺してやる」

その人の目は私をつまらないモノとして見ていた。

つまらないモノ……それは私

「……………殺して」

私がそう言つとその人はその剣を振り上げ私の首を凝視する。

「ありがとう」

「礼……………か」

その人は口先だけで笑い剣を振り下ろした。

私は瞼を静かに閉じた。

やっと痛覚とさよならができる……………

これで死ねるんだ……………

だが私の首は二つに分かれることは出来なかった。

「何やっているのです？ 命令と違いますよ」

「……………」

剣と首との間に鈴が挟まっていた。細い柄なのに剣の一閃を殺していた。

「死ぬのを望んだ。だから殺してやろうと思っただけ」

その人は機械のようにぼそぼそと呟くと剣を下ろして牢屋から出て行ってしまった。

「あの子が自分の判断で命令違反するなんて信じられませんか」

その綺麗な人は、行ってしまった人の背中を訝しげに見つめていたが、私の視線に気付きにこやかに言った。

「はい。悪夢は終わりました。これからお日様の当たる場所で暮らせますよ？ どうします？」

「……………殺してください」

「ごめんなさい」

髪をかき上げながらその人は困ったように顔を歪める。

「貴方達は出来る限り生存した状態のまま、と言う命令書が出ていますので殺すことは出来ません。日の当たる場所が嫌いなら私達の仲間にでもなりますか？」

「……………冗談」

「おや、嫌ですか？ まあ個人の自由ですからね」

自由

それは

私の頭から消えた言葉

廊下に出ると丁度有が見知らぬ男子と話している最中であつた。

「あ、朱水」

バイバイと小気味よい別れをした後私に気付いた。

「誰？」

「同じクラスの子だよ。それより、何か用？」

「やつとあの三人との約束が終わつたのだから、今日から又一緒に帰れるわよ」

「え、ホント？ ちょっと待つて。鞆取つてくる」

有は嬉しそうな顔をして急いで教室の中に入った。本当にわかりやすいんだから。

最近私は有と帰ることが出来なかつた。魔狩り者の所為である。

あの三人が先に屋敷に来ていているというのは正直な話余り良い気がしない。何故ならあの三人は結局のところ敵であり、例え協力関係にあつたとしても油断するわけにはいかないからだ。

特にあの矢岩玄という男は異質である。あの様な人間は過去に一度も出会つたことがない。

「お待たせ」

有は考え事をしていた私の目の前に立ち、エへへと照れたような微笑みを私に向けた。何とも癒される笑顔である。

「あ、そうだ朱水、明日からの三連休つて予定ある？」

携帯電話のカレンダーを確認していた。なんだかウキウキしている心ここにあらずの様だつた。

「特には無かつたと思うけど。それがどうかしたのかしら？」

有は私の手を取り、目を爛々と輝かせた。

「ならば、何処かに行かない？ 近場でも構わないからさ」

三連休なんだから遊ばなきゃ損だよ、と他の生徒が振り返る程に興奮している。私という事がこんなに彼女を喜ばせる事となるなんて本当に嬉しい限りだ。思わず抱きしめたくなったが公衆の面前だった事を辛うじて思い出せ、体を理性で縛る事が出来た。

「そうね、それも良いかもね」

心の中では私もスキップしたい程にうずうずとしているがここはいつも周りから求められている私でいよう。

「やったあー。何所行こうか？」

「余り人気の無い所が良いわ」

遊園地などは正直吐き気がする。一度だけ家族で行った際に自分には向いてないのだと直ぐにわかった。私は人混みの隙間を擦り抜けるという行為がどうにも気分悪く思えてしまう。何時の間にもそうなってしまうかは覚えていないのだが。

「そうなのね。あ、だったらちよつと遠出だけあの大きな湖に行かない？」

ピクニックだよピクニック、そう言う有は楽しそうだった。今から直ぐに出かけようと言わんばかりの勢いであった。

「そうね。あそこは人間がそんなに集まる場所ではないし良いわね」

「うんうん、決定だね。なら明日何処かで待ち合わせしようよ？」

「……そうだわ」

楽しそうにしている有を見ていると私の頭に素晴らしい考えが浮かんだ。恐らくはしやぎ方が梓の様だった所為だろう。

「ねえ、折角三連休なのだから、私の屋敷に泊まりなさいよ。それで二日目にあの子達と一緒に湖へピクニックに行きましょうよ」

梓が喜ぶ顔が浮かぶわね。いえ、一番喜ぶのは椒の方ね。

「え、朱水の家泊まって良いの？ うん、そうしたいそうしたい。有は又目を輝かせてうんうんと首を縦に振る。」

「なら明日の昼頃に来なさいな。あ、昼食は食べずに来るのよ」

「あゝ、椒ちゃん？」

今日の椒お手製のお弁当を思い出したのか、有は心なしか暗くなつた。

「まあ、今日みたいのはもう無いと思うわ」

今日の有のお弁当は途轍もなく妙なものであった。

恐らく隣で梧が私の分の昼食としてサンドイッチを作っていたのに感化されたのだろう、サンドイッチのパンの間に炒飯を挟んだという何とも奇妙な料理がランチボックスに綺麗に整列していた。それを恐る恐る口にした有は「マーガリンまで丁寧塗ってある」と涙目になりながらも決して残すことはなかった。

「あれはあれで、不味いつて訳ではなかったんだけどね。ただ、何というか奇天烈な組み合わせでただけでその……フィルターが働いてしまうって言うか……」

有は慌てふためきながら弁解の言葉を並べるが、私に言ったところでどうにかなる物でもない。

「そうだわ、有、貴女は料理できるの？」

「うん、まあまあ。叔母さんはよく夜にいないことがあるからその時は自分で作ってる」

何とも頼れる言葉であった。これは良い機会だ。

「なら、椒の料理の先生をしてあげてくれないかしら？」

「え、教えられるほど上手いつて訳じゃないんだけど。それに先生なら梧さんがいるじゃん」

「梧にそう言ったことがあるのだけど『椒が望まない』と言って嫌がるのよね。けど有なら大丈夫よ。頼まれてくれない？」

有は少し悩みながらも承諾してくれた。恐らくもつと椒と仲良くなれると考えているのだろう。他の者なら嫌な気が私の心を曇らせるだろうが、あの子達と有が仲良くなる事はむしろ私も大賛成だ。

「あ、でも朱水の家で出るような料理は無理だからね。あくまでその場凌ぎの物しか作れないよ」

「構わないわよ。それに貴女なら椒も喜ぶでしょうに」

二人の仲が急激に親密になっっているのは火を見るより明らかだ。

以前では椒は有に視線を向けようとしなかったが、最近では有が背を向けるとその後ろ姿をただただ見つめ続けているということがざらにある。そしてその後必ず私と目があって頬を赤らめ俯くのだ。……あれ？」

有が急に立ち止まったので、私もそれに釣られ立ち止まる。

「どうしたの？」

有は前方を見て咳く。

「アイシス……だよね？」

有が指さす方向には異国の白髪少女が立っていた。

「アイシス、どうしたのかしら？ この前来たばかりじゃない」

朱水はアイシスの来日を事前に知らなかったみたいだ。朱水の問いかけにアイシスはつまらなそうに答えた。不本意の行為らしい。

「魔法院が一時的に閉鎖されました」

「それは本当の事なの？」

「はい。有史初めての事です」

朱水は驚きのあまり目を見開く。その驚き様ときたらまるで寝耳に水どころか寝耳にワサビ醤油袖胡椒和えみたいな感じだった。いや、耳の奥に入れた所で差が分かるかは知らないけど。

「それで原因は？」

「わかりません。巧妙に隠蔽されていて知ることが出来ませんでした」

むう、なんだか二人はまたもや裏事情を知る者同士の会話をしている様である。私なんかが入りこんで良い内容ではなかった。

「そう………貴女で駄目なら私の人脈を使っても無駄ね」

「ええ。折角の暇ですからまたここに来てしまったと言っことです」  
アイシスは私の方にも目を向け小さく手を振った。小さいながらも堂々とした風格は相変わらずでかっこよささえも持ち合わせてい



た。

「もうホテルは決めてあるのかしら？」

「いえ、計画性もなく来てしまったので」

朱水はさり気なく私に目配せをしながらアイスに提案する。

「なら私の屋敷に泊まりなさいな。丁度有も泊まりに来るのだし」

朱水の提案にアイシスはコクコクと頷く。渡りに船と言ったところか。

「そうねえ。有、泊まるのは今日からにしない？」

朱水は折角アイスが泊まるのだから私も今日泊まればいいと言  
う。

「お、いいねえ。じゃあ一度帰って叔母さんにメモを残したら飛ん  
でくるね」

「車には気を付けるのよ」

冗談気に朱水は言った。お泊りと言う単語から遠足などの行事を  
思い出したのだろうか。

「子供じゃないんだから！」

私は二人に手を振ってから走って家へ向かう。一秒の無駄さえも  
惜しい、そう強く感じて。

「ただいま」

玄関を開けて目に付くのは脱ぎ捨てられた靴達の相変わらずの姿。  
叔母さんは本当に本当にこつこつ所はだらしがないんだから。

「叔母さ〜ん、いる？」

リビングの小さなテーブルには叔母さんの朝食の残りがほっぽら  
かしくなっていた。せめてドレッシングが付いたお皿は水に浸けて  
おいて欲しいもんさね。

「もう、だらしがないなあ」

叔母さんは、仕事は出来ても家事一般は苦手って言うよくいる人

間である。本当は直ぐにでも朱水の家に向かおうと思っていたのだが、流しに置きっぱなしの食器の山を見るとやっぱ気が引けてくる。それに『食器片付けておきました』って書いておけば急に外泊したことも大目に見てくれると思う……多分だけど。

「これで良いかな」

取り敢えず周りを片付けてから二人の連絡用の小さなホワイトボードに友達の家泊まることを書き込む。

「食器片付けといたから大目に見てください、っと」

ただでさえ少女趣味なホワイトボードにはこれまた可愛いキヤラクター物のマグネットがドーンと張られている。叔母さんはもうそれなりの歳なのにこういう可愛い物を衝動的に買ってくるから恥ずかしい。いやこの考えは失礼かな。

ホワイトボードに用件を書き込んでから留守電の有無を確認して急いで自分の部屋に駆け上がり、お泊まりの支度をする。二泊はするのだからそれなりの準備はしなきゃね。

「行ってきま〜す」

誰もいない家に向かって挨拶をし、ちゃんと鍵を掛けてからダッシュで朱水の家に向かう。

空はただひたすら青く広がっていた。こうして体育の時間でもないのでただただ走るなんて久しぶりだなあ。

そうして走っていると最近見慣れた後ろ姿が前方に見え始めた。

その後ろ姿に走りながら近づくとその人は私の足音に気付いたのだろう、ゆっくりと振り返った。

「あ、やっぱ由音ちゃんか」

「おお、有君！ ちい〜っす」

相変わらず変わった挨拶をするその子は間違いなく削強班の菅江由音ちゃんであった。口からチラリとのぞく八重歯が輝かしくチャームングである。ちっさい子の八重歯って何か好いよね。

「どうしたの？ あ、朱水の家にあるのかな？」

「う〜ん、まあ半分くらい正解っすね」

由音ちゃんは私に指を向けた。

「残りの半分は有君に用があるっす」

「私に？ 何かな？」

「ただ由音ちゃんは唸りながら何やら顔を難しくさせる。」

「うゝ、有君は今から何所行くんすか？」

私が持っている結構大きな鞆を見て余所行きだと言つ事を察したのだから。

「何所つて朱水の家だけど」

由音ちゃんは「丁度いいっすね」と言つて私の横に並ぶ。一緒に行こうつて事なのだろう。以前同様に私の腕に体を絡みつけてきた。でもあの時の様に多少存在していた嫌気は今度は生まれなかった。もうお姉さんは由音ちゃん好きになつちやつたもんね。

「由音ちゃんは今日学校無かつたの？」

由音ちゃんは私服で歩いていて。彼女の明るいイメージとは逆に黒を基調とした落ち着いた服装である。そういや矢岩君も鏡さんも基本的に黒っぽい服ばかり着ているな。そう言う決まりなのかな。

「うゝん、まあそんな所つす」

由音ちゃんは変な笑顔を作つた。なんて分かりやすい顔だろう。

「あゝ、サボりだなあ」

「まあ、仕事の方が大事っすから」

由音ちゃんは恥ずかしそうに、今度は普通に笑つた。

「あ、そうそう最近何か変わったことなかつたっすか？」

「最近つて言われても、由音ちゃんと最後に会つたのだから最近でしよ」

「まあそうなんすけどね」

由音ちゃんは何か奥歯に物が挟まつたように曖昧な話しをする。

そここうしている内に朱水の家に着した。門の前にはずつとそついていたのだろうか、椒ちゃんがつまらなそうな顔をしながら立っていた。

「お待ちしておりました」

私の姿に気付いた椒ちゃんは一瞬だけ顔を綻ばせたけど直ぐに顔を膨らませてしまった。

「お迎えに来てくれたの？　ありがとう」

「朱水様の命ですから……。それでそちらの方のご用件は？」

椒ちゃんは丁寧なお辞儀をして由音ちゃんの用件を聞き出す。私の時の初対面とは随分態度が違うなあ。

「一色さんに尼土さんについてお話があります」

由音ちゃんも由音ちゃんदैいつもとは違った凄く大人びた仕草でそれに応えた。

「……少々お待ち下さい」

椒ちゃんは門の横に付いているインターホンに話しかける。

「お待たせいたしました。どうぞこちらに」

椒ちゃんに導かれて私達は見慣れた応接室へと向かった。そこには朱水だけでなくアイシスも座っていて、扉から現れた私達をにこやかに迎えた。

全くもって不服感満載である。くそ、兄貴にこんな屈辱を与えられるコトさせるなんて。

家に着くと何やら熱を出して早退したらしい妹、遥か<sup>はるか</sup>ケーキを食べたいと駄々を捏ねてきたため、心優しきお兄ちゃん<sup>は病魔に苦しむ妹のために</sup>ここで一番美味しいとされるケーキを買ってあげようとしたんだとさ……。お涙頂戴？

ケーキ屋というにはやや大きい店内には女性女性女性という、男っ気一つ無い空間が出来ていた。それもおばちゃんとかじゃなく、若いお姉様、奥様方ときた。こんな空間に男子高校生が一人入るにはかなりの勇気が必要だった。入るだけでない、待たなくてはならないのが本当に辛いのである。

先程から俺は不平しか口にしていなかった。あ、勿論心の中でな。独り言なんかこの空間でした暁には俺は周りから冷たい目で見られて一生モノの傷を負ってしまうからな。

可愛い妹を思って奮発してデコレーション何ぞを頼んだ俺がバカだった。どうやらディスプレイされていたのは見本だけだったらしく、注文から少し時間がかかるとのことだ。ならば注文を変更すれば良いだけのことだと言われるだろうが、そこは日本男児の意地、男に一言はないでござる。

流石に恥ずかしさが治まってきたのでさり気なく店内を横目で見渡す。すると一人の高校生もしくは大学生らしき女と目があつた。俺は慌てて目をそらしたが、彼女の方はまだ俺を見ているのが何となく分かる。と言うか見過ぎである。

(何なんだよ。そんなに男が甘いモン買うのが珍しいのかよ)

心の中でそう叫んでいると、彼女は何故か俺へと歩み寄りこちらの顔を覗き込んできた。

「な、何ですか」

その人物はこれまた結構な美人である。その事実がさらに一高校生である俺の心の傷を深めた。ああ、大いにな！

「貴方、名前は？」

「は？」

「だから名前は？」

おいおい、これはどういう事ですか。な、まさかこれが逆ナ……いや、ないない、絶対そんなことは有り得ない。俺なんかそんな夢のような立場になれるわけがないんだからな。きつと新卒の宗教勧誘か高価な壺を売るあれだろう。

「名前つて、初対面の人間に……」

余りに狼狽したため語尾は恥ずかしいくらいに曖昧になってきた。

「初対面だから名前を聞くんじゃないの？」

「ぐ、それはそうだ……ですけど」

見た目から分かる年齢が近いために敬語で話すべきかどうかさえ分からない。年下だったら嘗められるわけにはいかない、こういう場面では結構大事な事なんだ。

「ああ、『名を訪ねるときはまず自分から』って奴？　なら私は高海ね、はいヨロシク」

「はあ、俺は宇津居ですけど……」

その女は俺の名前を聞くと何か期待が外れたような顔をした。全くもって失礼な輩である。

「8番の札をお持ちのお客様、お待たせしました」

「あ、私だわ」

女は店員からケーキの入った白い箱を受け取るとじゃあねと言い捨て店から出て行った。本当に何だったのだろうか。

後には周りから白い目でじろじろ見られる俺だけが残された。俺はただただ店員が呼ぶのを俯きながら待つことしかできなかった。

精神的に疲労した俺はケーキを受け取ると急いで店を出る。精神の摩耗の所為でケーキの重さなど感じやしないね！

俺は恥ずかしさを振り切るかのようにひたすら速く歩いた。まあ、それが大きな間違いだったんだな。

「お、さっきの」

赤信号で止まった俺の真横には先程の女がいた。信号待ちの人がそこそこいたため、そこにいることに気付かなかった。気付いていたら当然Uターン必然だった。

「……………」

「おい」

無視はさせてくれないらしい。面倒な人物である。

「何ですか」

「ちよつとしたアドバイスをあげるよ。君は将来宝くじか何かを買った方が良いね」

「は？」

「でもある程度のお金が当選したらそれ以上は買わない方が良いね。後々怖くなってくるから」

怖いのはお前だろ。何なんだコイツは。

「じゃあね」

ソイツは信号が青になるとバイバイと手を振って行ってしまった。俺はやや放心したまま信号が赤に変わるのを待ち続けた。もう二度とさっきの女に会わないためにな。

「帰ったぞ」

「おゝかゝえゝり」

聞き慣れた妹の声が玄関の向こうから聞こえた事で俺は完全に平常心を取り戻した。普段なら出来ないが今なら遙に抱きついてもおかしくないくらいに愛おしいぞ我が妹よ。お前がいつも通りでお兄

ちゃんは嬉しいぜ、グスン。

「おう。疲れたぜ」

まあ疲れたけど、妹に当たっても仕方がないので大人な俺はケーキを切つてやることにする。布団の中で暇そうにケータイを弄くつている遙は俺の気も知らないで早くくれくれとねだるばかりである。

「どれくらい欲しい？」

「お兄ちゃんに任せる」

「ならこれくらいだな」

六分の一程切り取つて遙の目の前に置く。

「ほら、餌だぞ」

「もつと喰いてえ」

「女の子がそんな言葉遣いしちゃいけません」

仕様がなかったので更に追加してあげる。それをガツガツと素手で食い荒らす妹……何ともシユールな風景である。

「あ、そうだ。母さんが買い物してきてだつて」

「先に言えよお」

「先に言つたつてお兄ちゃんはケーキ持つたまま買い物行く気ある？」

ティツシユとベロで指を掃除しながら遙は得意げに言つ。

「……無いな」

「分かつたらさっさと行く」

行きたくなかったが行かなかつた時に発生するであろう晩飯抜きと言つ兵糧攻めを思うと、俺は重くなつた腰を頑張つて浮かしてメモを片手に再び外の世界へと旅立つしかなかった。もう一度あいつに出会う程俺は不幸な奴ではないはずだ、そう信じて。

「あ、板子ヨコ追加ね！」

「……………おう」



「つまり有の周りでよからぬ出来事が起こるかも知れない、と言いたいのね」

朱水は眉を縦にせんばかりにきつくしかめて尋ねた。

ここは応接間、朱水が由音ちゃんから今日わざわざ来た理由を聞き出していた。アイシスは自身にはあまり関係ないと思ったのだから、由音ちゃんの顔を見た途端部屋の隅の椅子へと移動した。年上の私でもそんな気が利いた行為を思いつくことは難しいだろう。やはり教鞭をとっていると言っただけの事はあるなあ。ちょこんと座ったアイシスは私の視線に手を振って応えた。外見はやっぱりただの可愛い女の子としか思えないのにこの差だよ。

「はい。その対象が彼女である以上、噂と聞き捨てるわけにはいきませんので」

由音ちゃんはいつもの朗らかな様は一切見せず、ただ淡々と返した。

先程から応接間には朱水と由音ちゃんの声しか響いていない。彼女等の他に私と椒ちゃん、それに少し遠くにアイシスが存在しているのだけど、二人は私達に一切視線を移さず、この空間に他者など存在しないかの様に話を進めている。

立場という大きな背景が机一つを挟んでぶつかり合っていた。

「それがどういう事かわかっているのよね？」

「勿論わかっているでしょう。確証はありませんが」

「以前の件は賠償金という手で話が着きましたけど、今度はそうはいかないわよ」

由音ちゃんは朱水の殺意が籠もった言葉にやや気圧されながらも答えた。

「わかっています。お二人の関係は十分にわかっています。その為に私が万が一が起こらないようにこれから護衛に付かせてもらいたいのです」

「待ちなさいな。そもそもなぜ貴女が有を守る必要があるのかしら？ 魔狩り者が魔を守るなんて少なくとも私は初耳よ。納得のいく説明を求めます」

「例の件で見た彼女の力は確かに危険因子として認定される可能性が十分ありました。危険因子と言うのは御存じの通り一度認定されるとその者を支配している領主が削除しなくてはなりません……」

「つまり、私が有をこの手にかける事は出来ないであろうから削強班である貴女達が私の前に立ちはだかると言う事ね。性格的に大人しく、能力も制御ができていて、なおかつ頭首直々の監視下にある者を、それでも尚危険因子にしてしまつたらね」

「気が重い周りの人物を他所にその口からは楽しそうな声色が零れた。」

朱水が私に色々教えてくれるのは私が危険な存在になる可能性を持つているからだと言う。つまり、朱水の思惑はこうだ。私がこの力の完全制御ができて、また暴発などの可能性が無いなら危険因子になる事はないであろうと言う考えだった。

朱水は頭首だ……私がその危険因子とかいう物に認定されれば本来私は……朱水によって……。

「……………無論その際の犠牲は大きいでしょう。鬼神と恐れられる者を敵に回すのですから当然です。しかしそれは認定されれば起きなければならぬ未来なのです。そして唯一の回避方法が彼女を『危険因子にしない事』なのです。しかし彼女の力を知った者の中には彼女を利用とする者が出てくるでしょう。そして彼女によって何かおかしなことが起きたら……恐らく我々は尼土有を無視できなくなってしまう。そして尼土有の削除のために削強班の精鋭をこの地域に向かわすでしょう」

「そして私に殺される、そういう事ね」

朱水はまたも楽しそうに言う。前から感じていた事だが朱水は暴力的な話題になるとこうなりやすい。魔としての性なのだろうか。

「……………我々として犠牲は多く出したくありません。しかし残念な

話ですが上が何を考えているのかは分かりかねます。一枚岩ではない以上備えは必要なのです」

それは由音ちゃんの上司達は由音ちゃんと同僚の事を考えないと  
言う事なのかと私は考えたのだが、それはどうやら違ったらしい。  
いや、それどころか由音ちゃん達は上司の事を信頼していない様だ  
った。

「前例があるものね。貴女達が無謀にも私からあの子達を奪おうと  
した事、忘れてないわよ」

あの子達……椒ちゃん達の事だろうか。由音ちゃんは朱水の言葉  
に初めて怒りの様子を見せた。

「あれは削強班ではないと総班長が何度も説明されたはずです。い  
え、一部には削強班の者が混じっていたことは事実ですがあの行為  
自体削強班に対する反逆でして……」

由音ちゃんが舌をうねらせ早口に捲し立てると朱水は耳を塞ぐよ  
うなジェスチャーをした。聞きたくないと言う事なのだろう。

「それは何度もあのいけ好かない男から聞いたわよ。でもね覚えて  
おいてちょうだい、私からしたら人間で一括りなの。削強班だった  
とかそうじゃなかったとかは私の意見を揺るがす要素にはならない  
のよ」

「……分かりました、話を戻させていただきます。お恥ずかしい話  
ですが身内からまたあのような行為をしでかす者達が現れないとは  
断言できないのです。彼女の力はあらゆる可能性を秘めているため、  
恐らく手にしたい者も生じるでしょう。何をしでかすか分からない  
のです。そこでせめて私を尼土有の横に置かせて頂きたいのです」  
私と言う魔を利用しようとする人が現れる可能性がある、そんな  
事を私は聞いてしまった。

手が汗ばむ。私はいつたいどうしてこうも重要視されるのか、私  
自身が知らない所で話が大きくなっているのか、良く分からない恐  
怖が私を覆っていた。

自分だけが知らない自分を皆が見ていた。

その後も由音ちゃんは朱水の耳に届かせようと声を張り続けた。おかげで由音ちゃんが私の近くにいたい理由が大体分かった。由音ちゃんの周りの人達の中にもしかすると私の力を欲しがる人物がいるかもしれないので、そう言う人達の手から私を守るのが目的らしい。理由は二つあって、朱水との対峙の回避と、もう一つは私の力を使った悪事の防止とのことだ。まあまだ何ができるとか分からないから可能性の話だけらしいけど。

朱水は話の途中から由音ちゃんを威嚇するかのように険しい表情を見せていたが、ふと、口を微かに緩ませ笑った。だが歓迎の意は籠っていないかった。

「貴女が？ 菅江由音等という名前聞いたこと無かったわよ。そんな無名の輩が私の重宝の護衛ですって？ 笑わせないでくださる？」  
朱水はこれ見よがしに高らかに嘲る。以前の由音ちゃんに対する優しい態度は生物としての違いが幻へと変えてしまっていた。しかし由音ちゃんは机の上上半身を乗り出して食い下がる。

「確かに今は無名ですが、これでもあの双犬の下にいる者です。名が知られていないのならこれから知られるようにしてみせます！」

由音ちゃん……。

由音ちゃんの目から涙が流れる。

その涙が何を意味するかは私にはわからない。

だけれども彼女の熱意だけは十分に伝わった。それは朱水も同じなのだろう、思慮深げな表情の後には先程の嘲りとは違う、微妙に苦笑いを含んだ彼女らしい微笑みが表れた。

「わかったわよ。そこまで熱くなられたら参るわ。ただし条件があ

ります」

朱水はドアの横に立っている椒ちゃんを手招きした。今までずっと固唾を呑んで見守っていた椒ちゃんは急の指名に慌てたが静かに朱水に歩み寄った。

「椒も一緒に護衛に付きます。それなら貴女が護衛に付くことを認めましょう」

椒ちゃんは朱水の思いも寄らない発言に絶句する。

「アケミ、それは……」

今まで傍観していたアイシスが椒ちゃんの護衛という言葉に反応した。

私も知っている。椒ちゃんは他者を守るための力は持っていないのだ。その事を椒ちゃん自身が一番気にしているって言うてたのは朱水本人だ。それなのに椒ちゃんにそれを強いる。

「これは決定事項よ。ただし否決される可能性もあるわ。それは勿論菅江由音の退役によってのみよ」

由音ちゃんは知らないはずだ。椒ちゃんが護衛に不向きなことを。

「御主人様、私は……」

「黙りなさい。貴女は私の命に従えばいいの」

「……はい」

どうして朱水は椒ちゃんが苦手なことをさせるのだろう。苦手意識の克服？ いや、違う。先程から朱水は私を見つめている。何かを、朱水は私に何かを求めている。

なら何を？ 朱水は私に何を？ 私に出来ること、今の私に出

来ること……

椒ちゃんの為に出来ること

そうだった、そんなの決まってる

「私はそれで良いよ」

「尼土様……」

椒ちゃんの不安心な目に私は目線を強くぶつける。

大丈夫、椒ちゃんと私は断然相性が良いんだから、ってね。

「有君、本当に自分で良いんすか？」

由音ちゃんも不安そうだった。多分自信はあるのだけれどやっぱり他の強い人と代わった方が良いのかも知れないとも思っているのだろう。

「大丈夫、由音ちゃんなら出来るはずだよ。それに由音ちゃんが出るって言ったんだから自分で否定しちゃ駄目だよ？」

由音ちゃんは未だ微かに残っていた涙を拭いてにっこりと笑ってくれた。

「決まりね。なら、これからのことを考えなければね」

「これからの事って？」

「勿論貴女達三人の事よ。何が起きるかわからないなら有を一人にするわけにはいかないでしょう？　つまり誰かが必ず有の近くにいないければならないって事よ」

ああ、そうか。よく考えると椒ちゃんも由音ちゃんも私達の学校には縁がないんだね。

「まあ、学校にいる間は私がいるから大丈夫ですけどね。問題は有の家ね。有の家には何も防衛的呪術が施されていないのだから必ず誰かが近くにいないければならないのよ」

その言葉を待ってましたと言わんばかりに由音ちゃんが大きく手を挙げる。

「それこそ私の出番ですよ」

「どういう事ですか？」

自信満々の由音ちゃんに椒ちゃんは何故か面白くなさそうに尋ねた。どうしたのだろうか？

「簡単つすよ。私が有君の家の直ぐ近くに住めばいいんすから」

おお、簡単に言うねえ。そんな直ぐに引つ越せるなんて、なんてフットワークの軽い子だ。

「そんな直ぐに引つ越せるものなのですか？」

椒ちゃんは一層声を低めて尋ねた。それはあからさまに敵意を持った目だった。嫉妬やら何やら、私としては嬉しくもあり不安でもあり……。

「はい。私達、削強班は常日頃から引つ越しが出来るような体制なんです。何せ日本中から要請が来ますからね」

由音ちゃんは胸を軽く反って誇らしげに言った。日本中からって言うことは、実は削強班つてあんまり人数いないのかな。てつきり大きな組織だと思つてたよ。

「そう。でもやはり常に真横に誰かがいないと心配よね？」

そう言いながら朱水は椒ちゃんに何かを催促するかのような目を向ける。それに釣られ皆の視線が椒ちゃんに集中した。

その視線に恥ずかしくなったのか、火照った頬を手で隠しながら椒ちゃんは小声で呟いた。

「御主人様、その……これから纏まつたお暇を頂けないでしょうか？」

朱水はその言葉にニヤニヤと意地の悪い顔をしながら直ぐに応えた。

「ええ、いいわよ。何なら今後、ずっと有の下に仕えるなんてことも許してあげるわよ？」

椒ちゃんは頬を真っ赤に染め上げながら、その言葉に無言で深々と頭を下げた。いや、参ったね、こっちまで大いに照れるね。人に好意を持たれるのは恥ずかしいけど心地よいものなんだね。

「まあ、詳しい話は休憩の後にしましょうか。椒、何か持ってきて頂戴な」

椒ちゃんは頬を染めたまま一礼して応接間を出て行った。

「何よお。あの子、本当に有に懐いたのね」

「いやあ、光栄なことだ」

自分の顔もきつと今の椒ちゃんみたいになっているのだろう。しかしそれを隠せる程私は器用じゃない。

「ハジカミのあの様な姿を見たのは初めてです」

アイシスのその言葉で朱水は一層声を高めた。

「私だって初めてよ。有は色々な初めてを奪っていくのね」

「やめてよ、恥ずかしいって」

「ふふ、まあ、からかうのはここまでにしてっ」と

朱水は椅子から立ち上がり私達に「待っていて」と言っ外に行ってしまった。

朱水の退出と同時に由音ちゃんから安堵の息が漏れた。余程緊張していたのだろう、背もたれに体の全てを預けて目をつぶった。さつきまでの朱水は確かに怖かった。あんな状態の朱水と面を真つ直ぐ合わせるなんて私には到底できそうにない。

「削強班の方、貴方は中々の度胸の持ち主ですね」

「そうでもないっすよ。……ところで貴方は？」

ああ、そうか。二人は未だ初対面だったっけ。ここは私が二人の間を取り持つべきなんだろうな。

「こっちはアイリス・クラスエンちゃん、学者さんなんだって」

「まあ、一応その肩書きで通していますね」

アイシスは座ったまま深く礼をした。それに釣られて由音ちゃんも同様な礼をした。私より小さな二人のその姿を見ると自然に頬が緩んでくる。

「こっちは菅江由音ちゃん、まあ、後は言わなくてもわかるよね」

「ええ」

アイシスは由音ちゃんをジッと見つめると何かを思い出したような表情で小さく言葉を漏らした。

「似てる……」

その小さな言葉は近くににいる私にだけしか聞こえなかったのか、由音ちゃんは何事もなかったかのように応接間に飾ってある品々を



眺めていた。

「似てるって、何が？」

私の言葉に何故か驚いたアイシスは取り繕うように話を変えた。

「スガエ、でしたね。スガエはああいうことに慣れているのですか？」

あらら、いきなり呼び捨てか……って思ったけどそう言えば私も初めから呼び捨てだったなあ。アイシスの中ではそれが当たり前なのかな。

「ああいうこととは？」

「アケミのことです。あの様な一方の絶対的優勢下における交渉は得意なのですか？」

「いえ、初めてでしたけど」

初めてが朱水と言うのは災難だっただろうに。

「そうですね。もし慣れているのでしたらボクに少し御教授願いましたのですが。院の老人方は権力をちらつかせるので交渉がし辛くて辛くて」

口ぶりは可笑しそうにしていたがその目は疲労の様子を十分に表わしていた。由音ちゃんはアイシスの言葉に興奮したのか、急に身を乗り出してアイシスに迫った。

「院って魔法院のことっすか？」

「ええ、まあ」

「マジっすか！ おお、こんな所で魔法院の関係者に出会えるなんて。感激っす！」

由音ちゃんはアイシスの手を握ってブンブンと上下に振る。先程までの緊張がまだ残っているのか、力が籠っていて痛そうだった。しかしアイシスは抵抗する事無くされるがままに手を振られ続けている。それにしても由音ちゃんの反応を見る限り、魔法院って所はやっぱり凄い所なんだなあ。

「そう言えばさっきの朱水の言葉なんだけど、以前は賠償金が何たらって何なの？」

「ああ、それはちょっと自分側からは教えられないっすね」

「……ならボクが一連の言葉の一部をわかり易く教えてあげましょう。アケミが敢えて口にしなかった部分をです」

アイシスは悪戯を仕掛けているかのような無邪気な顔をした後、その表情とはかけ離れた言葉を口から出した。

「詰まるところ、アマツチがどうにかなった際には組織に乗り込んで皆殺しにしてあげる、とアケミは言いたかったのです」

アイシスの言葉に由音ちゃんはウンウンと頷いた。

先程の話は途轍もなく物騒な話だったんだと、私は再認した。

戻ってきた朱水と椒ちゃんを交えて再びの話し合いが始まった。

椒ちゃんは私達にお茶を配りながら朱水と由音ちゃんの話にしつかりと耳を傾けているようだ。私と目が合うとぶいっとそっぽを向いてしまいが横目で私を確認しているのが優に分かる。仲良くなれたのはなれたが完全に彼女の心のそばには置かせてもらえてないのかもしれない。もうちょっと私から歩み寄らなければいけないのかもね。

「なら明日から有の家の近くに移動することが可能なのね？」

「はい。一日あれば簡単に引越せるっす」

自信満々な由音ちゃん曰く、削強班は独自の引越業者のようなチームを持つことで、性急な要請に対応できるとのことだ。

「実はもう新しい住居の情報は調査済みっす」

そう言って鞆から一枚の紙を机に置いた。

「ここなら有君に近づく者の気配はばつちりわかるっす」

その紙には私の家が含まれている小さな地図が書き写してあった。恐らく赤く塗りつぶしてある所が今言った新居なのだろう。

「ここは毎朝見てるよ。家を出ると直ぐだからね」

「はい。ここならばつちりっす」

由音ちゃんは得意げに親指を立てる。

「そう、なら貴女は決まりね。問題は……」

朱水は椒ちゃんを再び見つめ始めた。

「いきなり居候なんて出来ないわよね。どう理由をつけましょうか」

「あ、それは私がかするよ。多分大丈夫だから」

「そう？ あら、意外と早く話が決まったわね」

朱水は椒ちゃんが持つてきたアップルパイの一片にフォークを刺して気が抜けた様に言った。

「あ、じゃあ自分、今日はもうお暇やすみしますね。帰ったら早速引越の準備っす」

勢いよく由音ちゃんは立ち上がりテキパキと身支度を調える。なんだか張り切っていた。余程自分の案が受けいれられて嬉しいらしい。その楽しそうな由音ちゃんを見ているとふと思いつく。

「そうだ、朱水、由音ちゃんも一緒じゃダメかな？」

「はい？」

私の言葉の意味がわからない由音ちゃんは首を大きく傾げた。

「そうねえ、それも賑やかになっていいかしら。椒、準備をして頂戴な」

朱水の言葉に椒ちゃんはお辞儀をして素早く部屋を出て行ってしまった。由音ちゃんの意見を聞かないのは流石と言えるね。一人だけ話の内容が分からないであろう由音ちゃんは困惑した面持ちで朱水と私に交互に視線を配っていた。

「あの、何の話っすか？」

「今日から二日間、貴女がここに泊まるという話だよ」

朱水がさも当然のように言うもんだから由音ちゃんは口を開けたまま固まってしまった。そりゃそうだ、行き成り過ぎて訳が分からないだろうに。流石にこのまま彼女の頭を捏ね繰り回すのは可哀相に思い欲しがっている答えを渡してあげた。

「実はね私達明後日ピクニックに行くんだけど、良かったら由音ちゃんも一緒に来る？」

「うお、急っすね。まあ、暇ですから良いですけど。でもそれと泊まることに何の関係が？」

私も今日から泊まることを説明しようとする廊下で誰かがバタバタと走る音が聞こえ始めた。由音ちゃんの興味もそちらへ向いてしまった。

「全く、あの子は……」

朱水はその足音で誰かわかったらしく苦笑しながら扉のそばに立った。すると扉が開き、梓ちゃんが柵ちゃんの手を引っ張りながら突入してきた。

「こら、有以外にお客様がいるのだからこういふコトしないの」  
待ち伏せていた朱水は優しく梓ちゃんのおでこを指で弾くと、梓ちゃんはちつとも反省して無さそうに「はい」と元気一杯に答えた。

梓ちゃんの腕を引っ張られている柵ちゃんは申し訳なさそうに無言で何度も頭を下げている。以前から思っていたのだけでも、柵ちゃんは他の誰よりも梓ちゃんの保護者みたいな感じだね。一つ上の姉なのに誰よりも姉らしくある。

「柵は良いのよ。どうせ梓が悪いのだから」

「ぶー。御主人様は依怙<sup>えいひ</sup>贖<sup>じき</sup>するんですね」

梓ちゃんは不満そうにぶーたれるが、二人を見るとどうしても皆同じ反応を示すだろう。

「あら、でも間違いでないでしょう?」

朱水の言葉に何も言い返せない梓ちゃんの頭を柵ちゃんは妹を可愛がるような手つきで撫でる。親愛故の優しさがひしと伝わる。

「で、何の用かしら? まあ、聞かなくてもわかりますけどね」

流石はご主人様だ、彼女達の発言は読めてしまっているらしい。

「そーでした。私達、これから泥土様とお泊まり会するんですね!」

「そうだよ。よろしくね」

梓ちゃんが私の肯定の言葉を聞くや否や飛びついてきたため、私は梓ちゃんを抱えたまま床に転げ落ちる形となった。元気が良すぎるのも問題なんだねと痛いお尻を撫でながら色んな意味で痛感した。「それとそこの由音ちゃんも泊まることになったわ。今さっきですけどね」

その言葉にずっと申し訳なさそうにドア横に立っていた柵ちゃんは駆け出し、由音ちゃんの手をぎゅっと握った。

「よろしくお願ひします」

頬を赤くして柗ちゃんは由音ちゃんにそう迫った。由音ちゃんは柗ちゃんの勢いに困惑した表情を見せる。

「はあ、急ですけどよろしくお願ひします」

「はい……」

由音ちゃんは鼻がくつつく程に近づくと柗ちゃんの顔から必死に目をそらせる。そりゃそうだ、いくら可愛い顔でもあそこまで興奮した様に顔を近づけられると恐怖の対象でしかないだろう。

「柗、もうお止めなさい。本当に貴女は時々コミュニケーションが過剰すぎるのが玉に瑕きずね」

柗ちゃんは朱水に咎められてシユンと縮こまり、応接間の隅に背を丸めて立つ。

朱水はそれを見届けると手を叩き皆の注目を集めた。

「さあ、これから何をしましょうか。暇よね？」

「はいはい、と梓ちゃんが、」

「遊びましょうよ！ 勿論皆です」

大声での提案で、それ以外の意見を言えばたちまち跳びついてきそうな勢이었다。

「椒姉様も勿論参加しますよね？」

いつの間にか戻ってきていた椒ちゃんは突然の名指しにビクリと体を震わすが力強く頷いた。椒ちゃんも楽しみらしい。

「では姉様達を呼んできますね」

梓ちゃんは勢いよく部屋から飛び出て行ってしまった。まだ私達は何をやるかすら聞かされてないので皆お互いの顔を見回すだけで無言のまま時を過ごす。数分経って複数の足音と共に扉が開くと残りの使い魔さん達が現れた。

「あら、梓は？」

朱水は梓ちゃんが引き連れてくると思っていたため、使い魔さん達の中に梓ちゃんがないことが気になったみたいだ。

「梓ちゃんは長をお誘いに行きました」

「智爺を？ 爺がこう言うのに参加するかしらね？」

朱水は困ったように言う。権さんも「一応形だけでも」と苦笑いする。どうやら執事さんは遊びとかに関わることはないみたいだ。そう言えば執事さんと使い魔さん達が話している光景とかあまり見て無い気がするよ。

「所で、梓は何をするって言っていたのかしら？」

「さあ、聞いていませんね」

槐さんにはこやかに答えた。何だか皆で集まるのがとても嬉しい、そんな感じの顔だ。

「お待たせしました！」

いきなり扉が開き、大きな箱を持った椒ちゃんが入ってきた。あまりに箱が大きいために体の制御がうまくいっていない様だ。

「長は遠慮するって言っていました」

梓ちゃんは口を尖らせつまらなそうにそう言った。梓ちゃんは執事さんのことも好きなんだな。

「智爺は静かに時を過ごすのが趣味だからしかたないわよ。それよ、これからそれをやるの？」

梓ちゃんの手にはスロットで出た数字の分だけコマを進めて架空の人生を送っていくゲームの箱があった。その大きさは梓ちゃんが一生懸命持つても床ギリギリをかすめるほどの大きさだった。こんな大きい物は今まで見たこと無いや。特注なのかな？

「有は私とペアになる？ それとも椒となる？」

「ん？ どういうコト？」

「流石に十人では多いでしょう？ だからペア分けするのよ」

ああ、そうか。今この部屋には私と朱水、アイシスと由音ちゃん、それと使い魔さん達六人の計十人いる。これならペアを組んでやった方が面白いね。こういうゲームはプレイヤーが少なすぎても多すぎても面白さが減少してしまう物だもんね。

そう考えているとどことなく居辛そうにしている由音ちゃんの姿が目映った。

「うーん、今回は由音ちゃんと組むよ」

朱水は私の選択に始め意外と言いたげな顔をしたが、私の思惑が分かったのだろう、笑いながら私の頬を優しく抓った。

「少し嫉妬したわ。優しいのね」

その後、自然にペアが決まっていた。どうやら大体こういう時の組み合わせは決まっている様だった。結果として私と由音ちゃんのペア、朱水とアイシスのペア、槐さんと椒ちゃんのペア、権さんと梧さんのペア、柗ちゃんと梓ちゃんのペアとなった。

「有君、お願いしまっす」

少しは見知った私と組めたことで気が落ち着いたのでだろう、由音ちゃんは私の腕に抱きつく格好でスロットを回すよう催促してきた。その楽しそうな顔を見られた事は凄く嬉しいんだけど、さつきから椒ちゃんの凍えるような視線が怖いんだわさ。

結果、朱水とアイシスのチームの圧勝でゲームは終わった。朱水もアイシスも狙ったかのようなマスにコマを進めていた。二人ともかなりの強運の持ち主なんだね。

そして私達は梧さんと梓ちゃんが夕食を作るために抜けるまで楽しいひと時を過ごした。二人が抜ける際に椒ちゃんが急に立ち上がり自分も今日は厨房に立つと高らかに宣言した。

「だったら折角だから椒は有に料理を教えてもらいなさい」

朱水は私にアイコンタクトを送ってくる。そうだね、丁度いい機会だ。私は強く頷き返した。勿論事前にそういう話があったなど分らないようにする。突発的な朱水の気まぐれだと思えば椒ちゃんも受け入れると思うんだ。

「そうだね。椒ちゃんには作ってもらってばかりだから恩返ししなきゃね」

椒ちゃんはぶつぶつ文句を呟きながらも「御主人様のご命令ですから」と言って私達三人の後をしっかり付いてきた。



「おめでとうございます」

その人は私の前に立って満面の笑顔と共にそう言った。

「救い出された方達の中で貴方だけが陽性でした」

陽性と言う所でその人は拍手をした。

「それもかなり有望な」

その人は私の事はお構いなしとばかりに捲し立てる。

「貴方は必ずや優遇されるでしょう」

「まだ入るとは言ってませんが？」

「おや失敬。しかし貴方の望みに近づくかも知れませんよ？」

望み？ 私は誰にもそんなことは話した覚えはない。

「言わなくて結構ですよ。でも貴方がしたいことは分かっているつもりですが」

その人は私の手を取ってこう呟いた。

「力があれば……できますよ？」

第三話 水鏡 / 6 中話(3)

6

町を一望できる丘に彼女達は立っていた。

「姉さん、あれが鬼神の住処よ。立派な物ね。」

少女は後ろに立っているもう一人の少女に向かって手を振る。

彼女は普通。

「……………そう。」

呼びかけられた少女は興味が無さそうにただそう呟く。

彼女は異常。

「私達の目当ても彼処にいるといいのだけれど。」

少女はもう一度その屋敷を見下ろす。

「まあ、いてもいなくてもやることやっとならば良いのだけれどね。」

彼女は普通。

「……………そうね。」

彼女は異常。

「ん……………」

……………ああそうだった。

「朱水の家だったっけ。」

客室のベッドで寝ることになったんだっけ。目を覚ました途端見知らぬ光景に包まれて一時呼吸が止まってしまったのだった。時計を見るとまだ金曜日だ。使い魔さん達は本来食事をとる必要はない

のだけれども今日の夕飯は皆で楽しくご飯を食べた。椒ちゃんは初めて作るハンバーグでうまく小判形にできなくてしょぼくっていたけれど、丸いハンバーグがあっても良いんだと思うんだ。私がそう言うのと椒ちゃんは「それもそうですよ」と元気を取り戻してくれた。美味しかったんだもの、形なんてどうでもいいんだよ。それに椒ちゃんが作ったという事実こそが一番大切なさね。だってそう、皆美味しそうに食べていたんだから。誰も形の不格好さを指摘したりしなかった。椒ちゃんが皆を思って作ったんだもの、誰もそれを否定することなんてできないんだ。

目覚めると自分の着ている朱水から借りた寝間着がまだ夜の気温には不向きで、それだけにいるには肌寒い事に気付いた。私は普段は夜寝る時は何の色気もないジャージで寝ているので、それをこのような家で着る勇氣は無く朱水に事前に借りる約束をしていたのだ。夕食後、何か変な期待に満ちた顔の朱水に最初に渡された代物はスケスケのネグリジエであった。流石にそれは無理だと突き返すと朱水と椒ちゃんと、何故かおまけに由音ちゃんが肩をがっくりと落としていた。こんなのを他人様の家で着るほど私は達観していないよ。微妙に食い下がる朱水・由音ちゃんペアに何とか勝利し、まともなシルク地のツイースを手に入れたのだった。念のためと持ってきていたパーカーを羽織り、目が覚めてしまったために訪れる孤独の寂しさを紛らわすためにテレビのスイッチを入れる。

あう、トイレ行こお……。

中途半端な睡眠の所為か、フラフラしながらも客室のドアへと辿り着いた。

ドアを開けると、どの部屋の前にもある高級そうな椅子の一つ、私の部屋の目の前にある椅子に誰かが座っていた。

「お目覚めですか？」

「椒ちゃんか。こんな所でどうしたの？」

やっと灯りに慣れた私の目は頬を膨らませる椒ちゃんを捕らえた。

「何を言っているんですか。あんな話を聞かされた後では尼土様を一人には出来ないでしょうよ。だからここで夜番をしているんです」  
「あ、朱水に頼まれたのかな？ ごめんねえ、椒ちゃんも寝たいのに」

しかし椒ちゃんは頬を赤く染め上げるとそっぽを向いてしまった。  
「あう。私何か変なこと言っちゃったかな？」

「尼土様は……………」

椒ちゃんは長い廊下の先に視線を向けながら私に言う。

「尼土様は私が何時でも御主人様の命令だけで動いているとお思いですか？」

言葉の最後で私へとゆっくり顔を向けた。その目の色で、私は椒ちゃんが怒っている事を知る。

「私が御主人様の命令でここにいるとお思いなのです。私が貴女様のために自ら動くことは無い、そう言うことですね」

まずい、椒ちゃんの目から察するに本当に言っではいけない言葉を言ってしまった様だった。

「ご、ごめん。椒ちゃんが私なんかのためにそこまでしてくれとは思って……………」

急に椒ちゃんは立ち上がると私の言葉を遮るように私の口を手で塞いだ。あまりに突然だったため私は微動だにできなかった。

「自分のことを『なんか』等と今後仰らないでください。尼土様は私にとって……………」

椒ちゃんは言葉の途中で自分の手を見る。すると「あつ」と顔を更に真っ赤にして手を退けてくれた。

「ご、ごめんなさい。何も考えずにこんな失礼な行為を」

椒ちゃんは飛び退くように窓際へと下がってしまった。起きて間もないためかその一連の動作の速さに目が追いつけなかった。

「いや、別に良いって。それに椒ちゃんは私のために注意してくれただもん。嬉しいもんさね」

それより椒ちゃんの言葉の続きの方が気になる。でもここで聞い

たら無粋になるだろうから諦めよう。あう、勿体ない。

「ところでこんな深夜にどうなさいましたか？」

「うん？ ただのトイレだよ」

「す、済みません。失礼なことを訊いてしまいました」

椒ちゃんは頭を深々と下げた。何と言うか、いつもらしくない態度だった。

「いや、良いんだって。何だか今日の椒ちゃんはいつもと違うみたい」

「違う、ですか？」

「うん。何となくそんな感じかな」

椒ちゃんは口に指を当てて考え込む。私は何気なく言ったんだけど椒ちゃんは大きく捕らえてしまったようだ。

しかし私の体はそんな椒ちゃんにしては珍しい仕草を観察することを許してくれなかった。

「あのさ、ここから一番近いトイレって何所かな？」

私の問いに考え込んでいた椒ちゃんは一応反応してくれた。良かった、反応してくれなかったらどうなった事か。

「廊下の突き当たりを左に曲がると直ぐです」

「ん、ありがとう」

私は再び考え込んでしまった椒ちゃんを残して廊下を進んだ。ああもつたいない。

朱水の家は廊下の窓は普通の家では考えられないくらい大きなガラスで出来ている。二十メートルくらいが一枚のガラスでこさえてあるようだ。どうやってここまで運んできたのだろうか？ やはり魔法とか霊力とかそういう物の類で持ってきてここに館を立てたのだろうか。朱水の家を上空から覗くときつと大きなLの文字に見えるだろう。おまけに三階建てだから本当に広く感じる。それなのに住んでいるのは朱水と執事さんと使い魔さん達だけだからすごく勿体ない気もする。そのただっ広い窓から外の庭を眺めていると小さ

な家のような建物があることに気付いた。凄い所はそれが小屋という外見でなく小さいながらも家としてそこに建っている事だ。一つの敷地の中に家が複数あるその感覚が新鮮すぎて、どうにも建物が気になってしょうがなかった。その建物からは光が微かに漏れているので誰かが今現在いるのだと言うことが分かる。

トイレから帰ると椒ちゃんはやはり椅子に座って私の部屋の番をしてくれていた。

「椒ちゃん、廊下から見えるあの建物は何かかな？」

「建物、ですか？」

「うん。敷地内にあるやつ」

手振りの家つぼい形を作ってみるも椒ちゃんにとってそれがヒントになったかは不明であるが、しっかりとあの建物を思い出してくれた。

「ああ、あれですね。あれは御客様専用の館です。広い家は落ち着かないという方がいらっしやいますからそう言う御客様用に建てられたのです」

ふ〜ん。客のためだけにあんな物を作っちゃうのか。流石にこんな家を作るだけはある、発想が違うね。

「なら今は由音ちゃんがいるのかな」

客室ならいるのは当然お客、つまり私が由音ちゃんかアイシスだ。アイシスは個人の部屋を朱水が用意しているのであそこにいるはずがない。しかし椒ちゃんは頭を斜めに傾けた。

「いいえ、菅江様はこの屋敷の客室におられますよ？」

「あれ？ ならあれは誰だったのかな」

椒ちゃんは私の言葉に少し眉を曇らす。私達以外の誰かがいるってことなのかな。

今日聞いた話を思い出した私の体は、知らない誰かがいると言う事実だけで体温を数度奪われた様に冷えた。同時にふわふわしてい

た気分はその輪郭を氷固めて脳が完全に覚醒した。

「まさか菅江様が仰っていた……」

椒ちゃんはそう呟くと急に走り出す。きつとあの建物に向かう気だ。椒ちゃんは、自分は誰かと一緒だと力が使えないから一人で行くしかない、きつとまだそう思っているんだ。でもね、私は椒ちゃんの横に並べられるんだよ。こんな私でも何か助けになるならばと決心する。

「待つて、私も行くよ」

走る椒ちゃんを追いかけて私も一緒の方向に向かう。

「目的が尼土様でしたら尼土様が来るのは危険です！ それに私の力を御存知でしょうに」

「でも椒ちゃんから離れる方が危険なんじゃないかな？ ああそれと、二つ目の言葉は私が同じ言葉を言い返せるよね」

「それは……」

私だけが椒ちゃんとずっと一緒にいられる資格を持つと言う事を椒ちゃんはもう分かっていた。だから誰にも応援を求めずに私達だけで向かうのだった。椒ちゃんを私を守れないのならばそれは朱水でも守れないと言う事らしい。二人の力は似ていると以前朱水が言っていた。

観念した椒ちゃんはポケットから一本の紐を取り出し私の手に握らせた。どうやらこれは梧さん以外の使い魔さん全員が持っている魔具らしく、この館の一番安全な所に一瞬で体を運ぶ事が出来る代物らしい。梧さんはどうやら必要無いらしいがその理由はこの状況では聞き出せなかった。これは使い魔さん達だけが使える魔具らしく、私がピンチの時は椒ちゃんがこれに意識を通して私を送り出してくれるらしい。とにかく何かあった時のためにこれを持っていてくれと、何度も振り返る椒ちゃんに言われたのだった。

そうこうしているうちに建物の前に着く。私達の荒い呼吸以外は世界の全てが静寂の夜着に隠れていた。私達だけがその夜着から這

い出てしまっていた。

「尼土様は離れていてください。私に何かあれば直ぐに御主人様が対処しますので、その間だけは魔具で飛んだ先にて御自分で身を御守り下さい」

「うん……」

椒ちゃんの尋常じゃない雰囲気にはただそう答えるしかできなかった。月光に照らされた彼女は美しさだけではない、何かを身に纏っている。以前感じていた彼女に対する物とはまた違った恐怖心がその姿を見ていると湧き上がる。

椒ちゃんがドアを開けると灯りが外へと零れ出した。

「……菅江様ですね」

椒ちゃんは緊張が解けたのか、クスリと笑いながら目の前にある綺麗に並べられた靴を指さす。なるほど、由音ちゃんの靴に間違いない。

「この匂い、湯浴みをなさっていられるようですね」

椒ちゃんは鼻をくんくんさせてそう言った。私にはわからないけどシャンプーか何かの匂いがあるのかな？ 流石いつもいい匂いを振りまいている彼女だ、嗅覚は私よりもすぐれているらしい。……いい匂いは関係無いか。

「ねえ、折角だから私も入ってきて良い？」

「何が折角か分かりませんが菅江様が宜しければそれで良いのでは？」

しかし、と椒ちゃんは続ける。

「あくまであなたの方は削強班であり、人間です。その事は肝に銘じておいて下さいね」

「うん……わかってるよ」

私がそう答えると椒ちゃんは納得いったような顔をして微笑む。分かっている、あの子は人間で私達はそうじゃない。



分かっているよ

「では私はここにいますので何か御用があったら仰って下さいね」  
「うん、ありがとう」

S e p i a

「ここは?」

その人は私の質問にそう答えた。

「入団すれば貴方が管理できる場所ですよ。貴方だから出来る、そう言っても過言ではありませんね」

そこは沢山の本で埋まっている、しかし紙の臭いなど一切無い不思議な空間だった。

第三話 水鏡 / 7 中話(4)

7

暗闇の中で一つの小さなキャンドルが灯っている。それはこの大きな部屋に対してあまりにも小さく、ほんの一部しか照らさないほどのわずかな灯りである。しかしその灯によって手元の本を照らされている私には十分な明りだった。他に注視する物も無いちっぽけな世界、それが私には心地よかった。

古くから人間は闇を恐れて火を以て闇を追い払ってきたが、昔の魔は闇を好み闇に潜んだ。彼等にとつて闇は命を守ってくれる母の様な存在であつたのだ。人間達はその闇に潜む獣や彼等の様な不可解な存在を恐れて、その隠れ蓑である闇自体を恐れていたのだ。現代の魔は大方人間と同じ発想で闇を恐れるが、古の血が残る私は闇を好んでいた。流石に私でも真つ暗闇は苦手であるが。

もう一つ、魔が闇を好む理由として有力な説がある。闇をもたらず夜は人間が休むからである。獲物が寝ている事程、狩る者にとつて好都合となる状況は無いのだ。

「朱水様、お茶をお持ちしました」

ノックの音はせず、扉が開かれ廊下の明かりが室内に零れた。

「そう、有り難う」

私は読んでいた本をベッドに伏せて、槐を迎え入れる。

槐は一礼してベッドの脇の小机に緑茶の入った湯飲みを静かに置く。私はその動きをぼうつと見続けていた。毎夜毎夜同じ事が繰り返

返されているため、槐の次の動きが自然と分かってしまふ。ほら、ベッドの横の皺を伸ばしながらこちらに微笑む、いつも通りだ。

「他に御用は？」

いつもの質問に、

「無いわ。有り難う」

いつも通りの答えを返す。

再び一礼して槐は扉の方へと歩む。

「待って」

しかし今夜私は『毎夜』には無い事を起こす。

槐は驚いたのか、少しだけ体を硬直させた後振り返った。

「はい、何でしょう」

槐はいつもの笑みを見せる。

その笑みは有とは違ふ。有の綺麗な笑顔は私を中から暖める。槐のそれは私に暖かみを外から送ってくる。中と外、同じ結果でも大分違う物なのね。

「こつちに来て」

槐はクスリと笑ったが無言でベッドに投げ出された私の足の横に座る。

「無礼かしら？」

「気にしてないくせに」

槐は私の頬を軽く撫でる。これは彼女の愛情表現。

それはあの人の愛情表現

「朱水？」

槐は無言でいる私を不思議に思ったのか、私の肩を軽く揺すった。

「眠いの？」

「違うわよ。ただ惚けていただけ」

彼女は組んでいた私の両手を解き、自分の手と繋げた。

「そう」

私達はお互いに目を瞑る。ただそれだけ、ただそれだけでいい。

「今日は賑やかだったわね」

「そうね。朱水も随分楽しそうだった」

槐も楽しそうに自分の妹達や有のことを話す。

「尼土様は他人をよく見ていられる方ですね。遊んでいる最中も全員の顔を見ていて、それでいて顔色をうかがうと言うよりは自らが中心であるようにも動く。なかなかいないタイプです」

「そうね。でも今一步退いているのは過去の他者との触れ合いが乏しいからかしら」

目を開くと目の前に槐の透き通るような瞳があった。その瞳に私は映り込んでいた。

「でも朱水はああ言う子が好みなのでしょう？」

槐は絡める指を組み替えながらそう笑う。

「分からないわよ。だって有は初めての愛しい人だから」

「アイシス様は違うの？」

「アイシスは大事、有は大切、有だけは特別よ」

「べた惚れなのね」

その時、槐は急に指を解き扉へと顔を向けた。

「何？」

「椒が危険を知らせてくれたの。でもまだ不確定ですって」

「やっぱり枳がないと不便ね。貴女だけにしか繋がらないなんて」

その言葉に不快感を得たのか、槐は「こらあ」と私の頭を小突いた。

「あの子がいなくて『寂しい』でしょう？ 今みたいな無機質な言い方は二度としちゃダメよ」

「そうね、浅はかな言葉だったわ」

その言葉に納得した槐は再び私の手を取った。

「で、本当は何のようだったの？」

「……………菅江由音のこと、どう思う？」

槐は暫し目を瞑ると朗らかに言う。

「あの子は安全よ。あの子だけは、ね」

「そう。なら双犬はやはり危険なのね」

「あの子と比べたらの話ですけどね。でも他の削強班の輩や魔法使いに比べたら滅法増しよ」

「私では相手の態度からでしか敵意を感じられないから助かるわ」

鬼神城である槐達は人の敵意を何もせずとも感じ取れる。これは門番に最も適した能力と言えよう。よってこの館に害をもたらすような存在は、監視の目を抜けて入ることは出来ないのである。

それにしても奇妙だ。あの双犬達は私の様な者こそ敵意を持つて当たる筈なのに、それが薄いと言う。

「でも気を付けてね。あの子は泥土様の味方で、私達の味方では無いわよ」

「わかってるわ。でも有は私の味方にいるのだから結局同じ事よ」その言葉は槐の顔に苦笑を浮かばせた。

「そう。なら私はもう行くわよ。あ、さっき椒が安全だったって言うていたわ」

槐は私の頭を軽く撫でると部屋を出て行った。

その姿はまるであの人

分かってる。求めても意味の無い物だと、得られても偽物だと言うことを。

槐が『槐』であるのは私が求めたから。最初の鬼神城があの姿であつたのは私の意志の所為である。

小さな灯りに照らされる槐の顔は時々鏡に映った私に見える。

当然だ。私が欲ほっしたのだから。

「有が羨ましいわ」

過去を引きずる私と、過去を見向きもしないあの子、その違いが二人の間を支えている。

「私って気持ち悪いわね」

自分が犯したことで私は有と強い繋がりを持っている。それを喜んでしまっている私は『気持ち悪い』モノである。その繋がりが絆であると勝手に書き換えながら喜んでいるのだから。

「正常でないわ」

壊れているのかも知れない。色々なモノを壊してきた私だ。いつの間にか自分自身を壊していてもおかしくない。

「いえ、可笑しいわ」

笑えてくる。ただ笑いがこみ上げてくる。何かを無視するかのようになだ一つの感情だけが浮かび上がってきていた。

笑わぬように必死に口を押さえる。誰もいないはずの部屋で誰かから顔を隠すように俯く。

零れた雫が作り出した跡を見る度、笑いがこみ上げてきた。

壊れている

壊したのは私

壊されたのも私

S e p i a

「では、よろしく頼むよ」

就任式とやらが無事に終わると自分に与えられた住処へと自然に足が動いた。

「これで良かったのよ」

自分に言い聞かせる様に呟く。

廊下では数人の男女が立ち話をしていた。その幾人かは私を見ると軽く手を振ってきた。

見知らぬ人間がいつぱいいる。今までと違うのはその人間達が絶望の表情を浮かべていなかったり、壊れていなかったりと言う点だ。

私はそれを無視して部屋へと歩む。別に集団が怖い訳じゃない。恐くなんて無い。

「よう、元気が」

与えられた部屋の前にあの時の男が立っていた。私の首に剣を向けた男だ。いや、向けてくれた、の方が正しい表現かな。

「割と」

「そうか。良いことだ」

それだけ言うと男は廊下の奥へと行ってしまった。それだけのためにここに立っていたのだろうか。だとしたら何とも暇な人間だ。

ふと気になって既に遠い男に目をやると、遠目でも綺麗だと分かる女性に半ば抱きつかれるかのような姿勢で止められていた。

「何だ。あの人も同じなんだ」

失望したわけではない。男はあ言うイキモノなんだ。そう、いつものことを思い出さされただけ。

「人間も化け物も同じ。男は汚いモノ、ただそれだけ」

私はわざと大きな音を立てて自分の部屋へと入った。

「欲望を満たすだけに生きている、汚い生物だ」

背中が疼く。痛みはまるで考えをやめるよう自分の存在を訴える。「初めて痛みに感謝したや」

私は自分が今口から溢した言葉の意味が分からないまま、痛みを忘れるためにベッドへと身を投げ出した。



厨房には朝食の準備をしているのだろう、アオギリとアズサが何かを料理していた。と言つてもまだ材料を切つたりしている段階のため良い匂いもしなかつた。アオギリが流石と言つべき剣捌きならぬ包丁捌きであらゆる敵を切り刻む。勿論まじめな彼女なので宙に浮かばせた敵を落ちる前に切り刻む様な曲芸紛いの調理法などはせず、地道に一本勝負で戦つていた。しかしそれでも彼女の捌きは一芸と言えた。アズサはそれをじっくりと観察していた。恐らく将来は彼女も料理の達人になるのだろう。

「何か御用でしょうか？」

ボクに気付いたアオギリはその手を止めて律儀にお辞儀をして対応する。

「水を何か大きな入れ物に入れてもらえませんか？」

「あ、アイシス、こんばんは。でも梧姉様、この家にそんなのありましたっけ？」

アオギリは無言で食器の奥から大きな水瓶みずがめを取り出してくれた。

「このような物しかありませんが宜しいでしょうか？」

「ええ、構いません。あ、グラスも頂けた……」

ボクの言葉を遮るように、アズサがボクの顔の目の前にグラスを突きつけてきた。ボクの言葉を事前に読んでいた。

「はい、これでしょ。えへへ、気が利くでしょお？」

アズサは「褒めて」と言わんばかりの上目遣いでボクにすり寄ってくる。その笑顔は日頃院で摩耗している心を癒してくれるようだ、胸に何かがこみ上げてきた。ボクよりも小さいこの子を見ていると妹と言う存在も悪くないなと毎度思うのだった。

「ええ、アズサは聡明な子ですね」

「でしょでしょ？ 梶姉様も『梓は気が利くね』っていつも褒めてくれるんだあ」

ボクがその頬を撫でると、まるで猫の様に自ら頭をボクの掌に擦りつけてくる。猫……猫か、今度院で飼う事を検討してみるか。

「アイシス様……」

アズサの仕草に夢中になっていたボクを、やや冷めたアオギリの声が現実に引き戻してくれた。彼女の手には水が沢山入った水瓶がある。ボクがアズサと遊んでいる内に水を入れてくれたのだろう。

「感謝します」

それを受け取ろうと手を伸ばすが、アオギリはボクに水瓶を渡そうとはしない。催促するように手を振るがそれでもアオギリの手から水瓶が離れる事は無かった。

「どうしました？」

ボクの問いに答える事無くアオギリは目を細めて厨房の入り口へと歩む。

「あ、あの〜？」

入り口に立ったアオギリは振り返り、目を細めたまま淡々と喋る。片目しか良く見えないためドスが利いていた。

「私が部屋までお持ちします」

そこで一礼してアオギリは行ってしまった。ボクは慌てて追いつこうと足を出したが、アズサに服を掴まれてしまい、体が止まってしまった。

「アイシス、これこれ」

アズサは自分が持っているグラスを強調するように差し出す。

「そうでした」

院では常に一人で物事をこなしてきたため、人から助援を受けると急に何もかも手際が悪くなってしまう様だ。この家に来る度にそれを思い知らされる。

「梶姉様は優しいですねえ」

アズサはボクにグラスを手渡ししながらそう言った。

「ですが何故あの様にまるで怒ったような顔をしたのですか？」

このボクという言葉にアズサは首を傾げた。

「梧姉様は怒った顔なんてしてなかったよ？ 心配そうにしてたでしょ？」

「……………ああ、アレは『心配』を表す表情だったのですか。つまり、体格的にあの水瓶を持つのが難しそうだと考え、ボクの代わりに持つてくれていると言うことか。」

「ふむ、ボクはもつとアオギリの表情を読み取れるようにならなければなりませんね」

ボクは急いで厨房を出、アオギリの背中に追いついた。その背中に僕は感謝の言葉を告げる。アオギリは振り向くと無表情のまま、これまた淡々と、

「構いません」

と、言うだけであつた。

普段からアケミの館は静寂に包まれているが、夜は一層静かとなる。そのような状況でアオギリという、決して会話しやすいとはいえない難い人物と二人きりで長い廊下を歩く事は空気が重く感じられる。

「明日の朝食は何ですか？」

この空気に押しつぶされそうになるのをたわいない話題で打開してみる。

「明日の朝食は和食です。詳しい内容もお教えしましょうか？」

これまた律儀に歩を止めて、振り返つての答えである。

「あ、いえいえ。それに歩いたままで構わないです」

「そうですね？」

再び歩き出したアオギリの背中を追いかけて、また話題を持ちかけた。

「前から疑問だったのですが、この屋敷は飲み水の確保できる場所が厨房しかないのは何故ですか？ これだけ広いと不便でしょうに」

アオギリは頭だけこちらに向けてこれに答えてくれた。何気に少し滑稽な姿である。だが真面目な顔をしているアオギリに不快な思いをさせぬようボクも真面目な顔で聞き入る。

「そもそも私達は水を飲まないのです。この館で水分を必要とするのは御嬢様と長だけです。その為、余分な手間が増えぬように事前に厨房以外の飲料水に関わる水道管を全て排除しました」

「ふむふむ。未来にかかるかも知れないコストを回避するためなのですな」

「はい。掃除などの際はトイレにある蛇口から水を手に入れます。全ての作業を私と櫛が担当しましたので他にも色々とお答えできませんが？」

「いえ、もう結構です。根掘り葉掘り聞くのは流石に不躰でしょうし」

元々何となく聞いたことなので深く掘り下げる気もなかった。それに丁度良くボクに割り当てられた部屋の前に着いた。

「部屋の中までお持ちしましょうか？」

「宜しければお願いします」

やっぱりアオギリは礼儀や立場を重んじるようだ。他人の部屋には必ず一言断ってから入室するなどのマナーが、彼女の全ての行動の影に存在している。

部屋の机に水瓶を慎重に置くと、アオギリは机の隅に置いてあるボクのノートパソコンを指さした。

「これは何ですか？」

「これ、ですか？ これはノートパソコンですけど……見たことありませんか？」

アオギリはボクの言葉を無視してジッとパソコンと睨めっこをしている。いや、正確には黒いモニタに映った自分との睨めっこなのかも知れない。自分から聞いたのに答えを無視するとは何とも失礼である。しかしアオギリが何かを注視している姿は珍しく、ボクは折角の機会だと思って彼女の目の前でノートパソコンを立ち上げて

あげた。

「これは……テレビですか？」

「いえ、その機能もついてますがもつと色々なことが出来る機械ですよ」

アオギリの顔を見ると訝しげな視線を送りながらも興味がわいていることが容易に見受けられた。

「ネットには繋がっていませんから大した事はできませんが多少動かしてみましようか？」

それからはアオギリの興味のわく限りパソコンを弄くつて見せた。アオギリはほとんど無言だったが、パソコンの画面を覗き込む目線で次に何が見たいのかが容易に把握できた。

その表情はボクの年代のそれに相応で、ボクはこの間アオギリを身近に感じる事ができた。そうしていると、部屋にある時計から小さな音が聞こえた。恐らく夜用の時を知らせる鐘だろう。

「あ、梓一人に任じたままでした。済みません、これで失礼します」  
アオギリはその音を聞くや否や、瞬時に部屋の外へと行ってしまった。

「ふむ、この館一番の剣士の弱点は好奇心とな。好奇心は猫を殺すと言うが、まさにそれですね」

アオギリがいなくなってしまうたために急に寂しくなった部屋を見渡す。

ここはアケミの館の中にある『ボクの部屋』である。ちよくちよく来るボクに、アケミが部屋の一つをボク専用にしてくれたのである。このパソコンもここに置きっぱなしの物だ。だがこの部屋には掃除をしてくれるクヌギだけが入るので、他の鬼神城の皆はここに何があるか知らないのだろう。恐らくアケミも。

アケミは他人のプライベートにはほとんど関与したがない人物である。今まで教えたボクに関する情報は全てボクから口に出した物だ。彼女は友好的に見えるが、その実、決して自分から他人の領

域に踏み込むことをしないのである。否、出来ないのだろう。ボクは彼女の過去を知っている。あれだけの過去がある彼女だ、他人の過去を訊くことはないはずだ。そう、訊き返されて自分の過去を訊かれる度に『過去』を思い出さされるのであるから。それを恐怖と感じる彼女には無理な話である。

だが最近例外が出来た様である。アマツチと言う魔だ。彼女の過去そのものであるアマツチだけにはアケミは開放的で、また、追求的である。何故だろうか。

「罪の意識か？」

自分が犯した罪を償える対象、つまり当事者である存在に出会えたからなのか。彼女は自分が償えないことに苦しみを感じていたのだろうか。

「確かアマツチにアケミがした事を言ったと言っていたな」

院に届いたアケミの手紙にその様なことが書かれていた覚えがある。その際にアマツチはアケミを『赦した』と言う。普通に考えて親を殺した者をそうも簡単に許せるものなのだろうか。

「いや、彼女達は魔だ。人間の基準に当てはめてはいけないか」

そう、人間とは違うのである。今日の夕食後に聞かされた話でそれを大きく実感したばかりでないか。

皆のお腹が十分に満たされた後、それぞれがばらばらに行動し始めた頃アケミはボクを小さな個室に連れて行き、そこでアマツチの事に関して何か分かる事は無いかと最近の彼女の様子を教えてくれた。アマツチは人を殺した後大した変化がなかったらしい。これを聞いたときにボクはそれこそが『魔』の本性であると直感的に納得した。まあ、実際は殺されたのは人間ではないが。アケミは、アマツチは自分の力に護られているから人を殺した際の記憶が薄れて今でもああも普通に生きてられると言っていたが、それははたしてどうか。何故ならそれを口にしてしているアケミ自身、人を殺すことに何ら抵抗も感じなかったの……

待て、破綻している

違う、アケミは罪を感じていたのだ。だからアケミは人を殺すことに恐怖や抵抗を感じたはずである。

本当にそうか？

少し整理をしてみよう。罪を感じているからこそアケミは過去に触れたがらない。これを暗示するようなことが手紙に書かれていた覚えがある。ならばこれは確定か。

次に、アマツチは人間を殺したことに何も動じていない。これは彼女を観察した限り事実である。しかし、アケミ曰くそれは彼女の力が原因だとのことだ。つまり力がなかったら彼女も人を殺すことに抵抗を感じると言うことか。ならば人の死そのものに対してはどうか。それも自分の親である。そう考えると、やはり力とやらがアマツチの過去への執着心を薄めているのかもしれない。それがアケミを簡単に許したことに繋がるか……。いや、単純に感情の問題なだけかも知れない。

馬鹿げている 無意味だ 推測は事実とは違う

おかしい。何かおかしい。何かが間違ってる。この苛立ちは何だ、何かがボクを駆り立てている。手元にあった紙を力のあまりグシャグシャに丸めてゴミ箱に投げると少しこの苛立ちは和らいだ。

そうか……。アマツチだ。この違和感アマツチからの物か。アマツチの力、これは何のためにある。過去から自分を護るためか？

「馬鹿な。それでは未成熟な存在で終わってしまう」

人間の人格は過去から出来る物である。例えば自分にマイナスな記憶だけを選んで消去したとする。

「それでは幼児時代が乗り越えられない」

我慢を知らない時代にとってその力は未来に対する凶器になってしまう。そして人格を形成するのに幼児時代は重要である。ここで穴をボコボコと開けてしまっただらどうなる物か。

「魔は人間を駆除する、地球に創られた者」

ならばそのようなデメリットを負う必要性はない。魔の力は遣伝子で伝わるわけではないため、遣伝的崩壊による狂いでもない。

「魔の力は人間の武器と同位」

やはり何かがおかしい。それは何だ。

「そうか……覚醒というモノか」

覚醒、魔は初めから力を持つていたのでなく、ある程度育つてから力を得る。その時、一時的に暴力的になる傾向がある。それは形の拡張によって不安定になった輪郭が原因である。形とは存在そのものである。影が心象と言う単語で説明できるなら、形は本質であろうか。拡張時に起こる輪郭の崩壊によって魔はその存在以上の力を受け持ってしまう、多くは暴力的、つまり古き魔と同じ状態に戻る。また、時には暴走を起し災害となってこの世に傷跡を残し、領主によって排除されるか魔狩り者によって削除されるか、稀に自己消滅する。自滅の際は形の完全崩壊が主な原因である。これは『形の輪郭が崩壊し、拡張した輪郭を形成する』という正常な過程が、突然途中で止まってしまった結果である。これは魔の死を意味するのだ。大きな力を持つ者に多く見られる現象で、我々は地球によって作られた監視システムなのだと考えている。大きすぎる力を手に入れる者は地球によって消されるのだ。また、覚醒を迎えない魔もごまんといる。これも地球によって作られた証拠であり、覚醒の夕イミングとして『鍵』が必要なためだ。推測するにアケミのは『絶望』で、アマツチのは『他者の血』が鍵であったのだろう。それは多種多様であり、富だったり愛だたりもするのである。鍵をその生涯で、特に若い時に手に入れられなかった魔は絶対に覚醒出来ないのだ。また、血の濃さも重要である。魔と人間の両親に生まれる魔の子は血が薄いのだ。これが何世代も連続したため、世間では魔



の血を持った人間が沢山いるのである。しかし、そういう者達は靈力が行使できず、また体力も普通の人間となら変わらないため自身に人外の血が混じっている事に気づけないのだ。魔としての自覚は親が子供に教えるかどうかで決まる。大体の家系は親と子に覚醒が起きず、また靈力とみられる奇跡がなかった場合、孫にはその知識は受け継がれないようにしている。

「馬鹿げている。これを思い出してしまったら先程までの思惟は大半無意味になってしまう。やはり人間は不完全だ。早期のレイの研究が必要だと言うことか」

再び整理しよう。まずアケミは覚醒の所為で暴力的になり父親とアマツチの両親を殺した。その後、罪の意識あり、っと。

「まあ、これも仮定に過ぎないが」

その後、罪の意識の所為で過去に恐怖を覚えるようになった。

「そこで、アマツチに会う」

アケミはアマツチと仲良くなった。

「変だ。自分は彼女の親の敵なのに何故仲良くなるうとする。これはやはり罪の暴露による意識の緩和なのか」

その後、アマツチの覚醒が起こる。いや、その前に使者を殺していたか。その事を本人は殆ど覚えていない。

「……………いくら何でもおかしい。彼女に関してはアケミから現段階で分かる限りの情報を聞いている。つまりそれはアケミも同じ事を知っていることが前提となる」

おかしい、おかし過ぎる。何故アケミはこのことに疑問を抱かないのか。いや、そもそもボクこそ何故こんな簡単な違和に気付かなかったのか。

「アケミに訊かなければ」

ボクは急いで部屋を出てアケミの部屋がある階上への階段へと走る。長い廊下の途中にムクゲの背中が見えた。

「ムクゲ、アケミは……」

……何だ？ 廊下が曲がったのか？ 崩れたのか？

「アイシス様？ どうなさいました？」

目の前に誰かの足がある。その誰かがボクの顔を覗き込んできた。

「あ、ムク……ゲ？」

「はい、そうですよ。待っていてくださいね、すぐに朱水様を呼んでみますから」

「はい……その方が好都合……です」

ボクの言葉を聞かず、ムクゲは廊下の曲がり角を曲がってしまった。ボクはどうやら廊下の床に倒れ込んでいるようだ。

「何故……だ？」

理由の分からない状況だ。それに何故か途轍もなく体が重い。

「だめ……だ……目が……」

……

「どついう事かしら？ つまり勝手に倒れ込んだって事？」

権は私の質問に困惑した表情で答える。彼女自身訳が分からないのだろう。

「はい。廊下の遠くから朱水様の名前を呼んだ途端急に倒れてしまった。その後、アイシス様の意識を確認した後すぐに朱水様をお連れしたんですが……」

「で、あの状態ね」

私が着いたときにはアイシスは廊下で意識を失っていた。

「で、アイシスの状態は？」

槐はアイシスの体中を調べていたが首を振って何も見つからなかったという表現をした。

「でも、調べた感じでは寝ているだけですし命に別状は無いようですよ」

「そう。で、權に呼びかける前に最後に近くにいたのは梧、貴女で良いのね？」

梧は一度だけ頷いた。

「その時にアイシスに何か変なところはなかった？」

「見受けられませんでした」

「淡々とそれだけを言う。まあ、梧はこれがいつもだからそれで良いのだけだ。」

「あ、朱水様！ アイシス様が……」

振り返るとアイシスの目が開かれていた。普段の半分ほどしか開かれていない目で現状を理解しようとする周囲を目だけで確認する。

「アイシス、私に分かる？」

その瞳はちゃんと私の姿を捕らえようと動いていた。

「はい……これはどういう事ですか？」

自分がどういいう経緯でこのような状況にあるのか分からない様だ。

「どうって、貴女が急に廊下で倒れたのよ。気分はどう？」

アイシスは虚ろな目で私達を見渡した後、数回首を縦に振った。

平気だという意思表示であった。

「そう、安心したわ。で、貴女、何か急な話が私にあつたみたいだけれど？」

「……何の話ですか？」

「てんで分からない、その不可思議を目にした様な表情はそう訴えていた。」

「何って……貴女が倒れる直前私の名前を呼んだそうよ？ だから何か急用があつたんじゃないのかしら？」

しかしアイシスは首を傾げるだけである。

「そう。なら思い出したときで良いわ。今は休んでいて頂戴な」

私達はアイシスの体に布団をかけてから部屋を出た。

「有と椒は何所かしら？ それに由音ちゃんも」

「さあ？ でも屋敷内にいることは間違いないです」

「そう。ならいいわ。權はこの後もアイシスの面倒見てあげてくれ

る？」

どうにも扉の向こうのアイシスが心配な様で、私の言葉に適当な返事しかできない権には世話係として残ってもらおう。妹達の世話が好きな彼女にとってアイシスのあの様子は気がかりなのだろう。

「はい。畏まりました」

権は嬉しそうに扉の中へと再び入っていった。

私が手を鳴らすと彼女達はそれぞれの持ち場へと帰っていく。

「では、朱水様もお疲れでしょうからゆっくり寝てくださいね」

「ええ、有り難うね」

権に手を振って私も自分の部屋へと戻る。

「何か嫌ね……」

普段から見慣れているはずの景色が急に不気味に思えてきたため私の足は何かから逃げようとせんばかりに速かった。

「おお、全部そろってる」

建物に入り、浴場の引き戸を開けるとお風呂特有の良い匂いがした。引き戸のすぐ横には竹編み籠があり、その中いくつかにはバスタオルなどの入浴に必要な物一式がぎっしり詰まっていた。埃が被ってないと言う事はここも定期的に掃除されているという証拠、お疲れ様です。

「お、やっぱ由音ちゃんか」

いくつかある竹編み籠の中の一つに由音ちゃんの衣服がきちんと折りたたまれた状態で置かれていた。私はずぼらだから折りたたまないけど由音ちゃんはしっかりしてるなあ。

私はその隣の籠にせっせと着ている服を放り投げ、鼻唄を歌いながらお風呂の入り口へと向かった。朱水とだと多分恥ずかしくて入れないけど、由音ちゃんとなら一緒に入れるや。ハダカノオツキア、重要です。

「あれ？」

しかし由音ちゃんが入っているであろうお風呂は真っ暗であった。お湯の匂いで誰かが入っているという先入観があったため、そんなことにも気付けなかったのかな。

「由音ちゃん？ いる〜？」

私はお風呂の引き戸をカラカラとゆっくり引きつつ顔だけ突っ込んで中の様子をつかがう。中はより一層温泉特有のふわりと鼻に入り込んでくる様な匂いで充満していた。

「有……君？ どうしたんすか？」

暗闇から由音ちゃんの声が返ってきた。良かった、裸のままどっ

か行っちゃったのかという心配は無意味だったか。まあ、そんなこと無いって分かってたけどね。

「えっとね、私も入りたくなって思ったの」

私がそう言うのと由音ちゃんは明らかに困ったように言う。

「うーん、出来れば勘弁してもらいたいですけど」

「おや、意外、由音ちゃんなら（朱水と同じ匂いがするから）きつと快く迎えてくれると思ったんだけどなあ。」

「一人で入りたいのか。なら仕方ないね。ゴメンね邪魔して」

「ちゃんと失礼を詫びてから引き戸を閉じようとするバチャバチャと大きな音を立てて由音ちゃんが待ったをかけた。」

「いや、やっぱ良いですよ。一緒に入りませんか？」

水音と共に声が近づいてくる。私の背後から差し込む光で由音ちゃんの水が滴り落ちている裸体がうつすらと照らされた。

「え、良いの？」

「はい。『裸のお付き合いですね』 つすね」

由音ちゃんはそう笑いながらも再び奥に戻ってしまった。

「えっと、明かりつけないのかな？」

暗さの他に湯気もあるため、私の目には辛うじてすぐその床の様子が見えるくらいで中の様子は殆ど見えない。

「……………つけていいですよ」

暫しの無音の後にそう、浮かばない言い方で由音ちゃんは言った。「いや、私が後に入ってきたんだから由音ちゃんの入浴ルールに合わせるよお」

その声があまりに小さかったので、私は何とか暗い雰囲気を払拭しようとして出来る限り明るい声で叫んだ。

「いえ、良いんです。有君になら知られても構わない……………と思うから」

曖昧な返事が返ってくる。それに知られるって何のことだろう。

「じゃあ御言葉に甘えて」

私は手元にある電球のそれと思われるスイッチを押し、明かりを

つけた。

「うわあ、広おおおい」

明かりで鮮明になったお風呂場は私の家のお風呂場の何倍もの大きさだった。少なくとも十倍はあるね。湯船自体も広い空間にふさわしく複数あった。真ん中に大きくどんと構えた物の周りを小さい子分が囲っていて、その幾つかはジャグジー付だったり浅かったりしているが、お湯の成分は同じ様だった。流石にそれは個人の所有物では難しいのかな。

「そつつすね。自分も最初驚いたっす」

由音ちゃんは大きな浴槽のど真ん中で目を細めて至福の表情を見せていた。

「湯加減は如何と訊くまでも無い好い顔してるね」

「そつつすか？ まあお風呂は気持ちの良い物ですから」

由音ちゃんは気持ちよさそうな顔をしたまま背伸びをする。

「激しく同意するよ。ずっと入っていたくなるよね」

「それで指全部がふやける、と」

「うんうん。あ、先に体洗うから待ってて」

ここで「待ってて」は可笑しいかなと思いつつながら急いで体を洗った。

「お待たせえ」

由音ちゃんと同じ湯船のお湯に少しずつ体を沈めていき、肩まで浸かると同時に自然にため息が出た。

「有君も幸せそつつす」

由音ちゃんは体を滑らかなになぞりながらそう面白そうに言う。先程までの様子はどこへ行ったか、いつもの由音ちゃんであった。

「それにしてもどうしてここのお風呂に入っていたの？ あっちにここに負けないくらい大きなお風呂があったのに」

「いえ、自分も始めそこを使えって言われたんすけどね。実はここは無断で使ってます」

てへっと舌を小さく出して由音ちゃんは全然悪びれた様子も無く

そう言う。

「大丈夫。私が由音ちゃんとここにいてるって事は椒ちゃんには伝わってるから」

「おお、それならオーケーっすね」

「うん……」

そして私の言葉を最後に暫しの間静けさが場を支配した。聞こえるのは獅子じゃなくて鬼と思われる生き物の形をした給湯口から出てくるお湯の水音だけである。しかしその静けさは何とも気持ちの良い静けさだった。

「有君」

「ん？」

目を閉じつつゆっくり時が流れるのを感じながら至福の時間を過ごす私の耳に、この場にいるもう一人の幸せ者の声が響いた。

「そっち行つて良いっすか？」

「ん」

あまりの気持ちよさにこの世全てのことに億劫となってしまうている私は短い音だけでその言葉に答えた。

ぴちゃぴちゃという水音がこっちにゆっくりと近づいてくるのが分かる。

「有君……」

「うん？」

目を開くと見えたのは私の目の前に座っている由音ちゃんの紅く上気した顔だった。いつも片方の髪を縛っている姿しか見てなかった。由音ちゃんの髪が全て下りているのは新鮮だった。

「有君と朱水さんってどういう関係なんですか？」

由音ちゃんは手で水を弄びながらちらちらとこちらの様子を窺う様に視線を送りながら尋ねてきた。

「由音ちゃんから見て私達はどう見える？」

「そうですね、やっぱり『恋人』みたいです」

「はい、それで正解」



私は由音ちゃんが手で作った小波に対抗するべく水面を叩く。由音ちゃんもそれに負けじと手を大きく広げて更に波を作る。

「お二人とも男性より女性の方が好きなんですか？」

「まさか……とも言えないなあ。まあ朱水はどうか分からないけど、私の場合はたまたま好きになった相手が同性だったってだけだよ」

朱水はどう見ても女の方が好きそうだけどね。ついでに目の前にいる由音ちゃんもそうっぽいけど。

「由音ちゃんは好きな人いる？」

「えっと、鏡先輩と矢岩先輩は大好きです」

「え、由音ちゃん矢岩君のこと好きなの？」

「そつちだけ持ち上げないでくださいよお」

もお〜と言いながら由音ちゃんは私にお湯飛沫しぶきをかけてくる。

「あはは、ごめんごめん……って、え……」

私の目はその物体に釘付けになった。そう、由音ちゃんが飛沫を作る度に水面から現れたり潜ったりしているその物体に、その度に水面を大きく揺らしているモンスターに……

「あの、自分の胸がどうかしたっすか？ そうじろじろ見られると流石に恥ずかしいっす」

「いや、だつて……中学生で……ソレデスカ？」

大きい。そう、でかい。デカい。高校生の私なんかよりもっともっと大きいゾこれ。もしかしたら朱水より大きいかも知れないモノを由音ちゃんは持ち合わせていた。

「学校でも大きい方だよな？ いや、むしろソレが最大であるべきだとお姉さんは思うよ。うん、切実に」

「ちよつとお、有君までクラスの男子みたいな目線送らないでくださいよお」

そう言いながらも決して胸を手で隠す事などしないのは特殊な職業の賜物か。

「……………」

おかしくない？ 中学生ですよ？ 私は高校生……………いや、

私のことは考えないでおこう。浴槽の中で首を絞めるなんて罰当たりだもんね。決して自愛じゃないからね！ それにしても由音ちゃんってこんなおつきかったんだ。よく腕に抱きついてきたりするけどそんな感じはしなかったけどなあ。

「こんなの邪魔なだけですよ」

「……イマナンテイツタ？」

「ひい、有君がいつもの有君じゃない！ 恐いつす！」

私は無断でソレを掴む。くそ、本当にでかいじゃないか。

「でか」

「まあ平均より大きいことは知ってますが、その実、不便な面ばかりですよ？」

「へえ。ならこのお姉さんに対して巨乳自慢してみなさいな。確かに嫌味として受け取ってあげられる自信あるからさ」

「怖い、恐い！」

ああもう、何でこんなに大きいのか。少し私に譲ってくれ！

「その、削強班の任務中はさらしを巻いているから有君は気付かなかつたのかと……」

「ふーん」

そんなことより私は目の前のソレをぶにゅぶにゅと揉みしだく。

滅多に味わえない感触だから今の内に十分味わっとこ。

「あの、そんなに揉まないでください！」

「何だよ、人が折角更に大きくしてあげようとしたのに」

「迷惑ですう」

「ちえ」

仕方がないので揉むのをやめてあげた。誠に残念である。せめて一時だけでも勝ち組の感触を味わいたかっただけなのに。

由音ちゃんはさつきより紅く上気した頬に手を当てながら首を左右に振る。

「いや、ほんつつつと邪魔ですよ？ これの所為で支給される小鎧甲いこうがはめられなかったり、男の人に胸を見られながら話されたり」

「あやう、それは体も心も窮屈なようです」

「おお、上手い。座布団一枚進呈します」

由音ちゃんは座布団を持つようなジェスチャーをする。

「いや、そんなモンよりその胸をおくれ。どうせまだ大きくなるんだろつからその分おくれ」

「もー、しつこいつすよ。それにこれ以上大きくなりませんって」

由音ちゃんは胸を鷲掴みしようとしている私の手を取って可愛い笑みを見せてくれた。やりすぎたかと反省した私には何とも嬉しいふとその腕を見ると何か小さな葉っぱのような物がこびり付いている様に見えた。

「ねえ由音ちゃん、腕に何か付いてるよ」

「え、そうっすか？ 何も付いていませんが」

「え、だってこれ……」

私はその黒っぽい物に手を伸ばした。しかし由音ちゃんの迅速の手によって阻まれてしまった。私の手首を掴むその力はじゃれ合い程度の物ではなく、本気で拒絶している事が伝わった。

「これは汚れじゃないですよ」

「え？」

由音ちゃんは私によく見えるようにその部分を顔に近づけてくれた。それは女の子の体にはあまり在る物ではなかった。

「あれ、これって傷痕？」

「はい。瘡蓋かさぶたが黒く見えたから汚れと勘違いしたんだと思うっす」  
「ふうん」

由音ちゃんは取り繕うように笑う。しかしその作った様な顔から思わず逸らしてしまった私の目はある物を捕らえてしまった。由音ちゃんがわずかに身を右に反らした瞬間に脇腹にある大きな茶黒い物を。

「ちよつと……由音ちゃん、傷だらけじゃん」

「あはは、ばれちゃいましたね」

由音ちゃんはどう見たって「無理に作ってます」と言わんばかり

の笑顔を見せる。それを見ていると私の心はきりきりと締め付ける感覚に襲われた。

「あの、良かったら背中見せてくれない？ 良かったらで良いから」  
すでに拒絶の手を喰らった私は再び拒絶されれば潔く退く予定だった。

由音ちゃんが今にも消えて無くなりそうな氷像に思えたから。近づいたら私の体温で融け消えてしまいそうだったから。由音ちゃんがいなくなってしまうくらいなら私は少し離れて見守っていた方が幸せなのだと思う。私の中で由音ちゃんはもう失いたくない人になっていた。

「はは、別に構わないですよ。有君になら見られても平気です」  
そう言つて由音ちゃんはゆっくりと振り返った。

「……………」  
その小さな背中では数え切れない程の傷痕で埋め尽くされていた。痕だけが残っているのや、瘡蓋となっているのや、まだ瘡蓋にもなっていない傷、そんなモノ達に由音ちゃんの背中では支配されていた。見える傷と見えない痛みが私の視覚を覆った。

「痛み、大丈夫？」

私には想像できない過去を歩んで来たであろう彼女に私はそんな言葉しか最初にかけれなかった。愚か過ぎる、余りに若輩過ぎる。大した人生経験を持たぬ私の言葉など彼女の傷だらけの体を通つて心に届いてくれるはずがなかった。何て言葉をかけて良いのか分からず、怖気づいた私には半歩も近づく事は出来なかった。

もしかしたら由音ちゃんの眼球に映り込むことすら恐れているのかも知れない。由音ちゃんが振り返った時に映る私の顔はどんな表情を浮かべているのだろうか。

「ああ、痛みならとづくに慣れました」

少女の背中、しかしその背中に飾られているモノは戦士の背中に  
あるような痛々しい傷痕だ。

「その……削強班って大変なんだね」

「……………まあ大変ですね」

再び由音ちゃんは振り返って私と対面する形に戻った。その顔に  
浮かぶ笑みは何を隠しているのだろうか。痛みか、恐怖か。

私は自分でもわからないが何故か由音ちゃんの頭を撫でていた。

無意識、そう、体がそう動いたのだった。由音ちゃんに近づくのが  
怖いはずなのに、言う事を聞かない体は体温で溶かそうと抱きかか  
えてしまった。

「……………鏡先輩と同じ事をしてくれるんですね」

さっきまでの少女の明るい声とは違う。彼女は泣いていた。

「優しい人は大好きです。鏡先輩も有君も」

由音ちゃんは抱きつくように正面から私の肩に頭を乗つけた。

「少し甘えて良いですか？」

「うん……………」

由音ちゃんは更に頭を強く私の肩に押し付けてくる。私の首と胸  
の間にある少女の頭はただただ震えていた。

「辛いんだね」

「はい。辛いです」

給湯口の水音に紛れるは、すすり泣く声。

「有君も優しいです。鏡先輩も大好きだけど有君も大好きです」

「そう。ありがとう」

私の胸元にお風呂のお湯でない温かい雫が垂れる。

「入浴時に部屋を暗くするのは見られたくないからです」

「……………そう」

私はその小さな背中を愛しく思い撫でようとしたが思い止まり、  
その頭を何度も何度も撫でた。

私の熱は由音ちゃんを溶かしてしまった。けれどもそれは彼女の鏡だけだった。彼女は何かから身を守っていた殻を失い私にもたれかかる。こうなる事を私の体は分かっていたのかも知れない。彼女は消える事無く、私が抱きしめられる場所に近づいて来てくれた。

「良いよ。由音ちゃんが甘えたいだけ甘えればいいよ。私が受け止めてあげるから」

「はい、凭り掛よらせてください」

噎むせび泣く音、

その音は水音にかき消される事無く強く『ある』。私は由音ちゃんが自分から離れるまですつと抱きしめ続けたのだ。つた。

水鏡に映る私の顔は泣いている様であった。

「尼土様」

私達が黙々と服を着ていると、椒ちゃんが引き戸を開けて入ってきた。

「ちよつと宜しいでしょうか」

椒ちゃんは張りつめた表情で私達二人を見回した。

「その……削強班って大変なんだね」

まさか

「辛いんだね」

辛い

「入浴時に部屋を暗くするのは見られたくないからです」

違う　他人から隠すためじゃない

「はい、凭<sup>よ</sup>り掛<sup>か</sup>らせてください」

また　また依存するのね

第三話 水鏡 / (終) 「ふたり」 (1) (前書き)

携帯で読んでくださる方も多いようなので分割にしますね。各章の  
終話は分割したくないなと思っていましたがやはり読んでくださる  
方のことを第一に考えた方が良くと改めて気が付きました。後、久  
しぶりに人名にルビもふっておきました。



第三話 水鏡 / (終) 「ふたり」 (1)

ふたり

部屋に散らばる骸の海の中に二人はいる

「訊いて良い？」

「何、姉さん？」

「私達は正義で良いんだよね？」

「もちろんよ。だって『そう』教わったんだもの」

「うん、良かった。人間は正義、魔は悪」

「当然よ。正義は人間に無ければならないのだから」

「姉さん。そんなことを疑問に思ってしまったては駄目よ」

「うん」

「私達はただ魔を殺せばいいの。それだけで良いの」

「うん」

古くさいため電球が切れかかっているのか光が点滅している外灯が所々に立っているだけの薄暗い道を高海鏡こうみきょうは歩いていて。普通の女子ならばこんな夜道を一人で歩く事は嫌忌するのであるが彼女は腕に覚えがあるためそんな事を微塵も思いつかなかった。

明かりに群がる羽虫を煩わしく思いながらも鏡は目的のアパートへと、こちらは弾むような足取りで歩む。真に楽しそうであった。

「お、いるな」

アパートの一室のカーテンの隙間から明かりが漏れていることを確認すると、鏡はより一層楽しそうに急ぐのであった。

階段を上りいつものドアをノックする。ドアベルは使わず、二秒間隔で四回のノック。これが「訪問者は高海鏡」を意味する合図となる。

ドアがゆっくり開けられると共に眠たげな矢岩玄やかたひかるの顔が現れた。

「今日は予定がないはずだぞ？」

恐らくうとうとと眠りかけていたのだろう、普段なら無言で部屋に入れるのだが珍しく不平を鳴らした。

「由音ゆねの手伝いに行くわよ」

鏡は自慢気に『何か』を玄の目の前に突きつけた。

「お前これ、許可が下りたのかよ……」

玄は突きつけられた物を驚愕の眼差しで食い入るようにじっと見つめる。

「総班長から連絡があつてね、これを使って由音を助けて欲しいだつて」

鏡はそれを玄の手に無理矢理押し付ける。

「助けるって何からだよ」

「さあ？」

「さあつてお前」

呆れる玄を尻目に鏡は勝手に部屋へと上がり込む。もういつもの事であったため、玄も抵抗なく受け入れた。

「相変わらず何も無いわね」

部屋にある物は必要最低限の家具だけで、テレビなどの娯楽用の品々は一切置かれていない。

「折角お金持っているんだからたまには使ったら？」

「不必要だ」

鏡の言葉を適当に流して玄は自分の手にあるそれをじっと観察していた。

「生きている内に使わなきゃ意味無いでしょうに。明日には死ぬかも知れないのよ？」

鏡は足下に落ちていた玄の上着を何気なく手に取った。

「汗くさ〜い」

「なら嗅ぐなよ」

玄は面倒くさそうに鏡の手から上着を奪い返すと、洗濯物入れとして使っている籠にそれを投げ入れた。その籠の中を見た鏡は大きなため息をつく。

「あんたまた洗濯物溜め込んでるの？」

呆れた声を出しながらも鏡はその溜まりに溜まった洗濯物を洗濯機に押し込む。

「明日ちゃんと洗いなさいよ。確認しに来るからね！」

玄は鏡の言葉に適当に相槌を打ちながら受け取った物を鞆に丁寧に入れた。

「で、今あいつは何所にいるんだ？」

洗濯済みの物としては最後となる上着をハンガーから下ろしながらのうのうと訊く。

「鬼神の家よ」

「おいおい、俺達が行く必要あるのか？」

鏡は両手を肩の横に広げ「わからない」という仕草を見せる。

「ま、無駄足になっても構わないが」

「あら、私と由音だと随分姿勢が変わるのね」

「これまた洗濯済みとしては最後となる靴下を履きながら玄は面倒くさそうに言った。

「お前に関しては心配なんて徒労だろうに」

「ふーん」

鏡は支度が完了した玄の耳を掴んで外へと引つ張り出した。

「さ、大事な大事な私達の後輩ちゃんを助けに行きましょう」

「梓<sup>あし</sup>！」

暗い木々の間を柵<sup>せき</sup>が声を上げながら歩いている

「梓、どこ？」

彼女は焦りを滲ませたような声を張り上げて暗い道を進む

「あず……さ？」

一定間隔に設置されている外灯の下に梓の物と思われる小さな足が横たわっているのが見えた

「大丈夫……」

駆け寄る柵の目に映ったのは首から上が足りない梓の力なく崩れたような死体だった

その途切れている首から未だに鮮血が流れ出ていた

「……………殺す」

普段は大人しい柵が牙を剥いて暗闇に向かって吠える

紫の目は獣のような光を宿していた

「出てこい」

柵の叫びが闇に消え入った後に金属が重なり合う音が小さく響いた  
「恐い恐い」

嘲るような女の声が暗闇から聞こえてきた

頭に血が上っているとはいえ柵は怒りに身をゆだねて声の方に突進するような魔ではない

冷静に外灯の下に飛び移った

梓の惨殺死体を横目に

その首の切断面からみて相手は飛び道具ではな大型の刃物だ  
ならば闇に隠れるでなく光に包まれる方が安全である

見えない刃の長さを測ることは難しいのだ

「へえ、そう言うのは徹底してるんだあ」

再び響く嘲りの声

「そう言う貴方こそ声を出すとは徹底していませんね」

外灯の下で血が滲むほどに拳を固めて構えた

「余裕から、かな」

街灯に近づいてきた女の全身が照らされた

それはどうやら異国の者であった

女の長い金髪が風になびく姿は暗きこの場に栄える

照らされた顔から推し量るに恐らく年は十六辺りか

その肌には血が伝っていた

梓のであろう

しかしその口から出るのは流暢な日本語であった

「それ以上近づかない方が良いわ」

女の背後から更に女の声がする

「分かっているって」

先の少女の後ろから現れた女は異様な姿をしていた

顔面は見えない

何故なら真っ白な包帯が幾重にも巻かれているからである

辛うじて覗けるのは彼女の金色の眼と左右に突き出ている耳だけ

であった

その背中には普通の人間が持てるはずのない程の大きな鉄板の様  
な剣が背負われていた

不躰な殺意の塊のような凶器を背負う包帯の女は狩りをする鷹の  
ような目で柵を睨む

「さて、どう殺そうか」

金髪の女は背中に括り付けてあつた棒を抜き取つた

その棒の先には円の形をした刃が付いている

恐らくあれは首を刈る道具なのだろう

内側には梓の物と思われる血が大量にこびり付いていた

櫛の唇に犬歯が突き刺さる

「殺す」

喉の奥から捻り出してきたような声が櫛の口から零れた

「馬鹿ね、死ぬのは貴方に決まっているでしょう？」

金髪の女は首刈り器にこびり付いた血を挑発するかのように指でなぞり取り、その指を嘗めた

地響きがする

櫛が右足に力を込めると地面が抉れた

それは一瞬

疾風のごとく突き出される櫛の拳を金髪の女は髪をなびかせてずるりと避け、慣性そのまま横を通り抜ける櫛の首に刃を掛ける……

その口は雅に曲がった

降りしきる櫛の血しぶきを喜ぶようにその妖艶な顔に浴びて瞼を閉じる

包帯の女はそれを尻目に首から上を失つた櫛の体に彼女の得物を振り下ろした

無惨な姿となった三つに分かれた櫛の死骸を見下しながら彼女は  
咳く

「弱すぎる……」

鬼神と呼ばれているあの女を護るにすれば弱過ぎではないのか？

疑問がわき起こる

「でも実際に死んでるから良いんじゃない？」

金髪の女は樂觀的に答えた

自分の服で顔にこびり付いた二人の血を拭う  
「さ、姉さん、目標に逃げられる前に片付けるわよ」

「菅江由音です」

通された部屋には二人の男女がいた。やはりあの男だった。その横の女性は前に廊下でこの男に抱きついていていた人だろうか。やはり綺麗な人であった。

「私は高海鏡、一応あなたの一つ上の上司よ。今日からだけどね」  
世渡りの上手そうな笑みを作り上げて高海鏡は私に手を差し出した。  
てきた。

「……よろしくお願いします」  
その手に軽く触れて握手とした。

久しぶりにまともな人間に触れた

「こっちは何度か顔を会わせているみたいね。矢岩玄よ」  
女性に紹介される形でこの男の名を知る。

「よろしくお願いします」  
男が何も行動を起こさないのどこちから一応の礼儀を通す。男の口からはまだ何も言葉は発せられていない。

「そして私が彼らの上司と言うことです。一応名前も一度言いましょうか」

「春日井京鹿さんかすがいきよづか、で良いんですよね」  
「はい、素晴らしい記憶力ですね」

その女性のような顔をした春日井京鹿は子をあやすように拍手をした。

「ではこれから二人に付いていってくださいね」  
その言葉で高海鏡と矢岩玄の表情が一瞬で変わった。矢岩玄は横

の机の上に置いてある剣のような物を掴むと、不躰に私の前に差し出してきた。

「持て」

それだけ言うと彼は部屋を出て行く。それを見届けた高海鏡は私の肩に両手を乗せ私を前へとゆっくりと押し誘う。

「簡単な運動するわよ。あんたの場合あまり意味無いかも知れないけどね」

その言葉は私の現状を知っていることがわかる物であった。

普通ではない、この体

女でなかったら今の自分はどうなっていただろうか。あいつらと同じように体を引き裂かれて塵屑のように窓の外に投げられていたのだろうか。

でもその方が良かったのかも知れない

こんな体になるよりは増しだったのかも知れない。まとも生きられないこんな体になるよりは、ね。



第三話 水鏡 / (終) 「ふたり」(2)

壁に寄りかかるその体には首と両腕が欠損している

「この程度なのかしら」

金髪の女は自分の足下に転がっている槐えんじゅの首を、目の前にあるその死体へと蹴り上げながら鼻で笑うような仕草を見せた

彼女の履いている靴は赤に染まっている

「まあ気にすることもないわね。私達は自分の仕事さえ終わらせればいいのだし」

長い廊下に血潮の臭いが充満する

出会い頭に金髪の女は槐の首を切り落とし、包帯の女は腕の付け根を続けざまに切り落とした

人外をより迅速に排除する方法を彼女たちは熟知していた

固い靴音が響く

振り返ると女が部屋に逃げ込む姿が見えた

「いくわよ」

金髪の女は楽しそうに廊下を走る

それは正に得物を狩ることに快感を覚えた鯨であった

包帯の女もそれに続く

こちらも大きな剣を軽々と片手で持ち上げて目を充血させて得物を狩らんとする

扉を蹴破る

勢いが良すぎたのだろう、扉の蝶番が吹き飛び大きな音を立てて倒れた

部屋の中には誰もいない

「姉さん、ここにいたわよね？」

金髪の女は包帯の女を姉さんと呼んだ

「間違いないわ」

その部屋は広く、天井にあるシャンデリアの光でも部屋の隅では暗くなっている程である

部屋の奥には椅子が何脚か扉の方を向いて並べられていた

他には何も無く、不気味にその椅子の存在だけが際立っていた

「隠し扉があるかも知れないわ」

その言葉でお互いの行動を開始する

盾にもなる大きな剣を持った姉は入り口に、相手が熟知してなからう得物を扱う妹は部屋の探索に

これは長年連れ添って人外を滅してきた姉妹の常套手段であった

「何も無いみたい」

妹が部屋を一周すると姉は入り口を防いでいた大きな剣を退け、妹に先を促す

それはいつだって同じやり方

細かい動きが利く得物を持つ妹が先を歩き、その後を必殺の得物を持つ姉が追う

これが二人のやり方、生き方である

出会い頭の衝突では身を守るよりも相手の首を刈る方が生き残る確率が格段に上がる

攻撃は最大の防御、剣は最高の盾、命と言う制限がある物体の常である

「馬鹿みたいね」

二人の他に誰もいないはずの部屋で誰かの声が凜と響いた

二人は振り返らなくとも声の主が分かった

いや、無理矢理理解させられたという方が近い

「私の屋敷に忍び込むなんて愚の骨頂としか言えないわよ」

妹が部屋を出ようと足を廊下に踏み出した途端、今まで存在しなかった、そして二人の人生で感じたこともない程の『魔』の存在を感知したのだ

「そう、貴方が鬼神ね」

妹は首刈り器の刃を下に構えて振り返る

「一色朱水」

姉は盾になろうとその前に立ちはだかる

椅子には鬼神だけでなく鬼神城と思われる者も座っていた

「……ああ、そういうこと」

鬼神の横には先程殺したはずの櫛の姿があった

「幻視か何かかしら？」

妹はその言葉に内心の焦りを含ませないよう努めた

自分達にはそのような簡単な呪術は通用しないはずだった

今までに何度もそのようななくなくだらない呪術を仕掛けてきた愚か者の首を悠々と刈り落としてきたのだ

私達の体にそのようなものは通用しない、そう信じてきたのに  
「そうですよ」

間の抜けた声を鬼神の二つ隣に立っている女が放った

鬼神の他に微笑みを浮かべているのは彼女だけである

他の鬼神城二人は殺意に目を光らせている

「梧ちゃんあまねと私が組めばこの屋敷で侵入者さんに勝手はさせません

よ」

そう良いながら鬼神の隣にいる梧の肩を抱く

その梧は拳をさげたまま仁王立ちして侵入者を睨み続けている

「そう、驚いたわ。まさか私達が幻術なんておふざけに掛かるなんて」

妹も負けじとそれを射返すように目を剥く

「權むくげの幻視はそこらの輩では到底抵抗できない代物よ。貴女達によ

うに嚙つた程度にしか魔法を扱えないような輩にはまず無理ね」

鬼神は既に姉妹の魔力を見極めていた

「そう。でもね、私達はそう言う類の物を武器にしてきた訳じゃないの」

妹は鬼神の目力に押し潰されぬように自分を奮い立たせようと再び姿勢を低くとり身構える

だが分かっていた

鬼神城を殺せる可能性を持つのは姉だけだと言うことを

一色朱水を殺せるのも姉だけであるということ

自分の体では鬼神に対抗する手段が皆無だと言うことを

( ( まったく、遊び過ぎたわね ) )

妹が身構えるのを見ると柵が鬼神の前に立ちふさがった

「貴方達は私一人で十分です。御嬢様がお相手するような存在ではありません」

柵は一步前へ歩み出る

「何より私が貴方達を殺したいんです」

声だけが笑っている

「例え幻視の中でも貴方達は梓を殺しましたから。許せません」  
声が響く

音としてではなく風として柵の言葉は響いた

それは彼女が本当に怒っている証  
殺意が滲み出していた

しかしその緊迫の状況に待ったをかける者が現れた

「待ってください。その人達の相手は自分です」

姉の後ろから部屋中に響き渡る少女の声

「自分が処理した方が何かと都合が良いと思うっす」

皆の視線が現れた少女、菅江由音に集まる

彼女の手には小さな剣と幾本かの釘のような物が握られていた

朱水は笑劇を観賞している客の様にやけて皆に 聞こえる様に叫んだ

「一色朱水はこの出来事を『記憶していない』。そしてこの場に私は居なかった」

朱水がそう叫ぶ共に、梧が朱水の肩に触れそれを真似するかの様に他の鬼神城も梧に触れた

するとたちまち四人は霧散した

「ご理解いただけましたか？」

由音は消えた四人の気配を姉妹が感じとろうとしているのを嘲る  
「貴方達がこの屋敷で出会ったのは自分一人だけって事っす」

姉妹はこの部屋にいることは危険と悟り由音に先制の一閃を噛ました

由音が横に飛び退くのを感してそのまま廊下に逃げ出す

「良い選択っすね」

由音もそれを追う

姿が見えない四人を意識して戦うのは不利だと考えた二人は廊下に移動した

それは彼女達の得物を考慮すると当然の選択となる

広い部屋より狭い廊下の方が見えない四人を自分達に安易に近づけさせないようにできるからである

狭いと言ってもその廊下は彼女達の獲物を振り回すには十分であった

見えない存在を相手するのはどんな屈強な相手よりも恐ろしい物であることを彼女達は理解していた

「姉さん！」

廊下の中程に立つと二人は再び同じ陣形をとる

この陣形を崩すことは出来ない

今まで生き延びてきたこの陣形こそが彼女達の最後の死線の渡り橋となるからである

「貴方達の目的は何ですか？」

由音は二人と十歩ほどの差を開けて立ち止まった

「言えないわね。そう言うあんたこそ何なのかしら？」

今日この館に目標以外の客が居るなんて情報は無かった

少なくともあの鬼神の知り合いであることから姉妹達と同類の存在であることは確かだ

何も知らない一般人がこんな場所にいるはずがない

「それはこつちも教えられないです。まあ貴方達と同じく魔法使いの端くれっすよ」

彼女は不敵に笑った

「またやってしまったのですか」

また彼女はしでかした。

「現場の監督責任は君達にあるのですよ？」

春日井総班長は玄が持つてきた報告書を見るとすぐに頭を抱えてしまった。

「そうは言ってもあいつを現場に向かわせるのはあんたなんだから、あんたが止めればあいつはこんな事出来なくなる」

「それはそうですが……」

もつともなことを玄に言われ春日井総班長は少したじろいだが、

コホンと咳払いをして誤魔化した。

「とにかくあの子にまたきつく言っときなさい」

「へいへい」

既に何度も同じ事を言われている玄は適当に返事をして部屋を出た。

廊下を歩いているとこちらの存在に気付いた人々が引き返していく。普段から矢岩玄は周りの人間から避けられている存在だが、今回は他に理由がある。

数ヶ月前から彼等の初めての部下となった菅江由音が悪化させてしまっているのだ。彼女は『やり過ぎる』のである。本来の対象でない魔をも殺してしまうと言う大問題を彼女は既に何回も起こしているのである。故に誰も厄介事に首を突っ込まぬよう三人には関わりたくないのだ。

「面倒な奴が部下になったなあ」

自分も人のこと言えないと心の何処かで思いながらも彼は静寂に悪態をついた。

「よっ」

「……………」

与えられた部屋にいた由音に声を掛ける。入居数カ月後ともなると色々と私物が増えてきてもおかしくないのであるが彼女の部屋は物が無く殺風景であった。ベッドの上にちよこんと足を抱えて座っている。もともと体躯が小さいためか縮こまると小さな箱に収まってしまう程であった。こんな小さい少女がこの数カ月で幾人もの魔を屠るほどの実力者に育つとは誰が予想していただろうか。いや、あの男だけは感じていたに違いない。

部屋に入ってきた玄に視線を移すことなくまだ何も無いはずの床を眺めていた。

「よっ」

「……………何か？」

数日前から玄は由音が同じ言葉を複数回聞くのが嫌いだと言うことを発見していた。だから返事をさせるためには同じ挨拶を繰り返すだけで良い。

「また同じ事を言わなきゃならない」

「言わなくて結構です。何度も聞きましたから」

由音は先程まで目を向けていなかったテレビに今更視線を向ける。「俺も何度も言いたくないんだが、お前がそうさせているんだろっ  
が」

テレビと由音を遮る様に玄は立つ。そこまでされてやっと由音はうざったそうにしながらも顔を玄に向けた。

「もう一度言う、対象外は殺すな。どれだけ危険なことか分かってないなら今一度教えてやるから耳の穴かっぼじれ」

「必要ありません。それに……」

由音は狂気を含ませた目で玄を見上げる。

「あいつらは死ぬべき存在でしょう？ 今は私達の方が強いんだから殺しちゃっても構わないでしょうに……」

その姿にむしろ呆れを覚えた玄はそのまま何も言わず由音の部屋を出て行った。

「私は間違っ  
てない。悪いのは消さなきゃいけないんだ。私は間違っ  
てない……」

ここ数日彼女の口からは何度もこの言葉が漏れていた。

その目は『狂気』と言う言葉以外で表現できないほどに危なげな輝きで満ち満ちていた。



第三話 水鏡 / (終) 「ふたり」 (終)

短刀によって弾かれた釘が姉妹を追う

その軌道は正確に人間の急所を捉えているという完璧な『殺人法』であつた

菅江由音は人型を殺すことにかけては削強班の中でも上位に位置する

歳は一番若いが実力は矢岩玄以外の者の追隨を許さない程である  
表現するなら才能のその一言で済む

彼女は人型を殺す事に長けていた

しかし異形の者は幾度か剣を交えたがどうにも調子が狂い鏡の魔法によって助けられる事が殆どであつた

由音は異形には恐れを覚え体が震えてしまい力を発揮できなかつた

しかし人型に対しては異常とも思える程強い

それは怒りに似た感情に支配されているためか  
彼女は己を憎悪の念に染めて人型に襲いかかる  
人の形をした生き物がとにかく憎かつた

逆に鏡は人型よりも異形の者に力を出せる

自分の得意とする魔法を武器に異形を消し飛ばしてきた

それは吹っ切れると言うのが一番しつくりくるのか

姿が自分から離れている事で罪悪感が薄まるらしい

人型によって起こる躊躇いは彼女の最大の弱点であつた

「へえ、お姉さん達上手つすねえ」

由音が撃つ釘は確実に妹の首刈り器と姉の大剣で打ち落とされて

いく

釘は床に落ちると床に溶けるように消えていった

「この程度で私達の相手をするなんてよく言えるわね」

妹は正確に釘を払いつつ由音との距離を縮め、その後ろを姉が付く距離が次第に縮まってきた

しかし由音の顔に焦りは見受けられなかった

相手は人型、由音はそれだけで暗示にかかった様に攻撃的になるのだった

「困るっすねえ。自分のことをそんな風に見くびられると自分を育ててくれた先輩に失礼極まりなくなってしまうっす」

由音は左手に魔力をつぎ込んでどんどん釘を作り出す

作り出す釘はただの物質としての干渉だけでなく、彼女が得意な呪詛を一本一本に組み込んである代物である

それを休む暇なく短刀で撃ち込んでいった

しかし姉妹は少しずつ下がる由音の足よりも大きく前進し、由音との距離を縮めていく

由音の足が壁にぶつかる

とうとう由音は壁際まで追い込まれてしまった

逃げ道はあるにはあるが少し廊下を戻らなくてはならない

そこにある階段までたどり着ければあるいは形勢を逆転できるのかも知れない

しかしその為には必殺の獲物を構えた姉妹を越えなくてはならないつまり既に退路は無いに等しい

しかし由音は焦りを感じていなかった

自分の釘の威力など結局の所頼りにしていない

彼女は射撃兵では無い

「あら、子兎ちゃんは自分から穴の奥に入り込んで蛇と戦うのかしら？」

妹は由音の行為を馬鹿にする

当然だ、壁を背負って何ができるのだ

由音は先程から一度も後ろを振り返らなかった

それは経験の浅さから来ている失態であった

今までの任務では事前に戦場の大きな地形を資料として手に入る事が出来た

しかし今回の戦場は鬼神の城、当然資料など無い

そんな状態で背後を気にせず闘う等無謀であった

その結果が壁を背負うという誰しもが絶望する戦況である

若輩者がするような余りに致命的過ぎる失敗であった

「そうっすね、穴が狭ければ前歯でガブリといきやすいつすもんね」

しかし由音の声に焦りの音は含まれていなかった

ポーカーフェイスと言う上等な技術は持っていない、それでも由

音は冷静であった

それは自分の武器まえばに絶対の自信があったから

その武器があるからこそ彼女は削強班でも一目置かれる存在になっ  
って来たのだ

これがあるからこそ殆ど何も知らない戦士が戦場を生き渡ってい  
られるのだ

「言っじゃない。面白い子ね」

「そりゃどうも。それと一つだけ勘違いしている様なんって言わして  
もらっすけど……」

妹と由音の距離は大きな踏みこみ一步で相手の懐に潜れる程にな

った

由音はその距離を待っていた

「外見だけで判断しない方が良いつすよ……」

右手に溜め込んでいた釘を空中にはら撒く

それが床に着く前に由音の口から呪文が零れる

それを見て瞬時に姉妹達は前衛後衛を入れ替わった

敵がここに来て初めて見せる魔法に備えて盾でもある大剣を姉が構える

姉妹は相手の魔力が脅威ではないと先程からの攻撃で理解していた

この少女は間違いなく自分達と同じ肉薄で戦う戦士、魔法は不得手だ

ならば逃げるよりも盾に隠れた方が安全だと姉妹は考える

下手に逃げて背中を見せるより目の前で大剣の盾に身を任せる方が次の手に繋がる

空中に釘が止まる

「自分は貴方達より年上つすから。子供扱いは駄目つすよ」

今度は短剣を使わぬ魔法での加速だった

至近距離で魔力を帯びた釘の集団を受け止める大剣は大きな音を立ててその衝撃を周りへ伝えた

その威力たるや重なる姉妹を盾ごと後ろに押し下からせるほどであつた

金属の塊にぶつかった魔法の釘は粉々に飛び散り霧の様に立ち込める

刹那の後、姉妹は由音の目的を理解した

破片の霧が姉妹を囲む  
その内の一つ、一欠片から炎が立ち上がる  
炎が二人を一瞬で覆う  
破片の全てが燃え上がったのだ

しかし姉妹もある程度の魔法は使える  
炎と言う原始的な攻撃は一瞬で力を奪われた  
妹が熱を全身に感じながら唱えた呪文によって炎が消し飛ばされた

「やっってくれるじゃない」  
妹は姉の持つ盾から様子を窺おうと顔を少し出した  
「……いない」

しかし既に姉妹の前に由音はいなかった

「姉さん！」  
何かの気配を頭上に感じた妹は上に獲物を振り上げた  
姉もそれに続いて大剣を頭上へと振り上げる  
しかしその気配の正体に姉妹は愕然とする

それは由音の上着だけであつた

姉妹は瞬時に互いに目で指示を下し、得物を対の方向に振り下した  
「こつちつすよ！」

だがその刃撃は由音の体に掠りもせず、姉妹は真横から釘の射撃  
を浴びてしまう  
姉はそれに応えようと咄嗟に大剣を前に翳すが幾つかが壁を逃れ

姉妹を襲った

姉妹は初めて離れた

姉は左肩に刺さった由音の釘に仕込まれていた魔法を喰らう

「これは、停滞か」

硬直した左腕を悔しさの余り大剣に押しつける

もっと絶命に及ぶ魔法ならば姉は勝利を掴んだのかもしれない

しかしいくら姉の体でも停滞だけではどうにもならない

妹に手伝ってもらうしかないが今はまだ遠い

「姉さんは下がって！」

その言葉で姉は先程まで由音がいた壁際へと跳び退く

こちらは明確な目的を持っての袋小路への進出であった

入れ替わりに突っ込んできた妹が由音に得物を音速の一閃に浴びせる

その足の速さに反応しきれなかった由音はそれを短刀で受け止めるしかできなかった

「貴方の言う通りね、外見で判断するのは愚かだったわ」

二人は互いの顔を対面して睨み合う

互いに歯を食いしばり目だけで相手を殺さんとする

「残念、兎じゃなくてマングースだったっすね」

「そうね。ただ噛むだけの狩りなんてつまらないわ。張り合いの持てる敵じゃなくちゃね！」

体躯の差か、由音は妹に弾き飛ばされてしまった

三人の息は荒かった

例え表面上では冷静であっても命のやり取りでは体は沸騰せざるを得ない

「貴方、魔法に頼らないと私にすら押し負けるのね」

「……………」

妹は楽しそうに喉を鳴らす

獲物が弱り始めた事を知った喜びだった

それは由音の弱点であった

その体は小さく、事実非力であった

その為に魔力で身体能力を強化していたのだ

つまり魔力が切れると少女の腕力に戻ってしまう

既に魔力は先程の攻撃で消耗しきっているために正面で敵の武器を待ち受ける事は難しくなっていた

あと数合交われば恐らく由音は力で負ける

「でも勘違いしないで下さいね。自分の戦い方はこっちですから」

由音は悪戯じみた顔を見ると短刀を低く構えなおした

例え魔力が尽きようと彼女にはまだ切り札があった

「へえ、そんな粗末な体躯で私達と白兵戦でも興じてみるつもり？」

妹は姉に目配せを送り、まだ離れているように指示した

それは勝利を確信した者の奢りか

「いいわよ。この距離なら鬼神達も間に入って来られないだろうし」

決着をつけましょうか、妹は余興を楽しむ様に笑った

二人の視線が交差する

一拍後、妹は目の前で起きた不思議な現象に目を疑った

由音が持つ短剣から何か伸びたかと思っや否や彼女の持つ得物が変わったのだ

「召還とは違うみたいね」

「自分は召還魔法を使えないので  
馬鹿げている」

召還なんて目じゃない程の行為を彼女は平然とやってのけたのだ  
「あんだ、魔力はないくせにそう言うのは出来るのね」

由音は二つの短剣から出来たその長い『それ』を弄ぶ  
「魔力だけなら自分は底辺彷徨ってますよ。まあこの力を誇りに思  
うこともないっすけどね」

腰を更に低く落とし、突き刺すような視線を姉妹に向ける

その手にあるモノは黒長い何か

「さて、本気出しましょうか」

由音は再び不敵な笑みを浮かべた

「……何よこれ」

決着、そう言葉にするにはあまりにお粗末であった

「ふざけんじやないわよ！」

地面に這い蹲る妹は首を擡げて自分をそうさせた相手を睨みつける  
しかしそんな睨みなど今の由音には何の効果も無かった

「凄まれたところでびびる分けないっすよ。申し訳ないけど貴方達  
に私を殺すことは不可能なんすから」

体中を支配している『痛覚』に抵抗しながら見た由音の姿は先程  
までのとは何かが違った

そこに立つは削強班が一人



苦痛を味わって生きてきた一人の戦士が立っていた

その目は残虐に妹を見下し、苦悶のその姿を楽しんでいた

「姉さんは逃げて！」

姉はその言葉を聞くと驚くほどの速さで廊下の隅へと移動し、窓を割って館の外へと飛び出していった

「撤退するって事は負けを認めたって事でいいんっすよね？」

再び由音は相手を見下しきった表情でそう楽しそうに言った

「そりゃね、あんたみたいのがいるとは聞いてなかったからね」

苦痛のあまり、口から唾液を垂らしながらも妹はその妙美な顔を歪ませて最後の抵抗のごとく虚勢を張る

それは一瞬の出来事だった

目の前の女は子供の喧嘩のようにただ何も考えずに横に振っただけだった

剣術などと言う単語を当てはめるにはあまりに幼稚なその一閃それだけだった

妹の目に映るは奇妙な現実、長い「それ」が窓や壁を突き破っている現実

物質そのものを無視してしまうのだろうか

それなのに妹はその一閃を手持ちの得物で防げると「勘違い」してしまったのだ

それは簡単に妹の得物を通り抜け妹の体さえも通過してしまった

その後に来るは激痛

今まで味わった痛みなどがすり傷かと思わせるほどの苦痛

体がまともに反応してくれない悶痛

腕が痛みからの硬直でぴくりとも動かない

それは敗北を意味していた

「苦しみの中でただ死を待つのが辛いでしょう?」

妹の目の前で由音の雰囲気が変わった

先程までの由音は少なくともその姿にあった子供のような雰囲気であったのだが、今の彼女の姿は悍おぞましい獣であった

一歩一歩ゆつくりと彼女は近づいてくる

「普通の苦しみは慣れる物だけど、こればかりは慣れることがないのよね。私もその気持ち分かるよ」

床に先端が潜り込んだその武器の姿が目にはちらつく度に妹の体は痙攣する

「『どうして私が』、その痛みは忘れる事はできない、慣れることなんてできやしない」

由音の言葉はその幼さに似合わぬ重みを持っていた

「お前何者……」

言葉は途切れた

妹のその言葉が終わる前にその女は妹の顔面から何の躊躇もなく、死相に対する遠慮もなくその右手に持つ得物を突き刺したのだ

「言ったでしょ。教えられないって」

鼻に突き刺される瞬間までその鋒を目で追いつづけていた妹は、それが自分の喉を通る頃には動かなくなっていた

この場に既に鬼神達は存在しない  
それは幸いか

この姿を見たらかの鬼神でも由音を今後平然な目で見ないだろう  
しかし由音自身はそんな些末な事を考えていなかった  
どうにでもなれ、それが彼女を支配していた意志それだけである

動かなくなった妹にしつかりと『後処理』を終えた由音は何の反  
応のない廊下にぼうつと虚ろな視線を泳がせていた

「もう一人」

その自分の言葉を合図に再び体を大きく揺らして古傷の痛みが支  
配する体をゆっくりと前に進める

「間に合うかな」

汗が滴り落ちるその顔は再びいつもの由音の顔に戻っていた

誰もいない背後から何かが由音を見つめていた

「っはあ」

絞れば水が出てきそうな空気に包まれた暗い森の中では大きな溜  
息の音が響き渡った。

「何だこの森は」

走っても走っても一向に壁にたどり着けない。

「また幻術か……だけど私達がちゃんな幻術にかかるはず無い」

息を少しでも整えようとせいで呼吸しながらも周りを注視す  
る。

何か見えた

(何だ………人か?)

森の中に何か居る。しかし魔の気配はしない。ならば彼処にいるのは人か……。

その影はこっちに近づいてきているようだ。

(追っ手か)

姉は整えられない呼吸を再び荒くして大剣を構える。ここまで近づいてしまっていたらもはや逃げ切れないことは明確だからである。それにいくら何でも人間にそう簡単に負けるような体はしていない。そう言う為には作られたこの体なのだから。

いや、体を最大に利用するなら負けてからが勝負なのかもしれない。一瞬の間隙を作るには最高に有利なこの体を持っているのだから。死こそが勝利を招く。

その影は二つに分かれた。二人いたと言うことが。

「お前か」

聞こえてきた声に姉は驚愕する。それは跳ね回っている心臓を一瞬で凍りつける程の衝撃だった。

「兄様……」

その人間は持っていた魔具に火を灯した。その灯りに照らし出される男の顔は過去に一度だけ見たあの男の顔であった。忘れはしない、忘れることは出来ない。私達姉妹の唯一の理解者なのだから。

「玄、こいつは仲間なの？」

兄様の後ろにいる女が私を指さしてそう言った。馴れ馴れしい……。

だが彼女の思っていたと違う流れとなった。

「さあな」

……………今、何って言った？

「へえ。ま、それは後で良いわ。で、どうすんの？」

「総班長がこれを持たせた訳が分かった。こういう事か」

兄様が……………私に何かの先を向ける。

「兄様、私です」

しかし兄様は軽く頷いただけで冷ややかな目をしたままだ。その目は明らかに拒絶の意を示していた。

「悪いが、死んで貰う」

……………え？

目に映るのは兄様の凜々しいお顔。一拍で私の懐に潜り込んできた兄様のその目は熱く蕩ける様に私の目と合う。

何か熱い物が私のお腹に入り込んだ。いや、冷たかったのかも知れない。気が動転しすぎて感覚が覚束<sup>おぼつか</sup>無い。

「兄様、忘れたんですか？」

いけない……………あまりの出来事に口が勝手に兄様に対して憎まれ口をたたいてしまう。

「私は死なないんですよ？」

兄様は倒れる私に小さく言った。おかしい……兄様が私の中に差し込んだ物はどう見たって小さな刃物だった。そんな物が刺さったところで、例え毒が塗ってあったとしても、例え麻痺などの呪詛が練り込んであったとしても、私の体はそんなことでは止まらないはずなのに。

「分かってる。でもな、不死者への対処は既に完成されているんだよ」

体中が熱い。世界がグニヤリと歪む。全てが暗転し私は大きな睡魔に襲われ、

目を閉じた。

不死者、それが彼女を指す言葉である。機関によって作り出された作品の一つ。故郷で彼女のことを知らない魔法使いはいない程度広く知れ渡っているこの『恐怖』は、また同様に日本という地域でその名を知らないと言われる穿の狩人の一手によって簡単に崩れ落ちた。

意識が薄れるという、己が今の体になってからは一度も味わったことのない現象にただただ畏怖しながら彼女は深い眠りに落ちていった。

事が終わった森は静寂を取り戻した。

黙もくしに包まれた二人は目の前にいる人物を哀れむように眺めている。「これが絶対魔法具の力なのか」

目の前に倒れる女は呆けたまま闇夜の空をただただ眺めている。眠れるように倒れた後、再び開かれた瞼の中にある瞳はもはや生気を含まないかった。

「こんな物を自殺のためだけに作り上げたって言うんだから驚きね」  
鏡は玄が持つ小さなナイフを忌み嫌う様にそう言った。

「不死者でもこれには勝てない。不死者にも弱点はある」

玄はナイフを慎重に鞘へと仕舞った。少しでも肌が触れた時点で全てを失うことを知っているが故の行動だ。

「記憶だけは不死の定義から外れているんだっけ」

「そうだ。だからこの絶対魔法具なら不死者でも終わりだ」

玄が持つナイフは数年前、とある魔法使いが己の死のために作った物であった。その魔法使いは最大の到達として『痛み無き死』を掲げていた。

彼は天才であった。あらゆる魔法を若いうちに習得し、院の探求物の一つに<sup>よわい</sup>齡五十程で辿り着いてしまったのである。若過ぎたのだ。彼はその日から次第に目の輝きを失っていくこととなる。会う人皆から視線を逸らし自分の研究室に引き籠りがちになった。

ある日、毎度の夕食に出来ない事を心配に思った院の小間使いが彼の研究室の扉を開くことになる。そして発見されたのは毒薬を飲んで自害した一人の天才の遺体と、後に物議を醸すこととなったこのナイフであった。

小間使いは急いで重役達を収集し、その状況を見せた。

その中には院の重役となったばかりの一人の幼き女子もいたが魔法院院長は直ぐさま彼女だけを部屋の外へと閉め出した。この遺体となった天才の姿は彼女にとって毒にしかないことを彼は分かっていたのである。

その事件から数日が経ち、研究室の整理が行われた際に院長は小

さな手記が机の裏に隠されるように貼られているのに気付いた。その手記には彼の苦悩が長々と書かれていた。そして最後の頁にあったのが遺体と共に倉に厳重に管理されている小さなナイフについての説明文であったのだ。

院長は震撼することとなる。

彼が遺した物は彼が生前到達した魔法と同等、もしくはそれ以上に危険な物であったからである。

生物としての死でなく人間としての死をそのナイフはもたらす。それはあらゆる記憶を根こそぎ奪うのだ。恐らく死の恐怖を感じぬようにこのナイフを自分の腕に突き刺したのだろう。死を知らない状態になった彼は恐らくただ静かにこの世を去ったに違いない。

恐怖の対象である死を知らなければ、畏れることはないのであるから。

毒を飲んだ事も忘れてしまえば最期の時を隣に死を感じながら待たなくても良いのであるから。

多少の痛みなど気にしなかつただろう。いや、それが痛みとわかつていなかつたのかも知れない。

それが彼の求めていた『痛み無き死』なのかは彼だけが判断できる。痛みがあつたのか無かつたのか、それを『知って』いるのは犠牲者だけなのだから……。

この意味を瞬時に察した院長はある友人に相談する。その友人とは重役の中で唯一の日本人である人物であつた。

友人はその危険性を考えて院から遠く離れた日本に隔離する案を出し、そうして今一人の天才が作り出した名も無きナイフが日本にあるのである。



「こいつがあれば不死者なんて目じゃねえな」

玄は先程から呼吸しかしない姉の様子を観察しながら呟いた。

「そうね。でもこれは簡単には持ち出せないわよ。今回は何故か許可が下りたけどもう二度と触れることは無いかも知れない」

「まあな」

玄は鏡の言葉に適当に相槌を打ちながらも横たわる女の肩を掴み背負った。

「夢の中でさえもこいつは二度と死んだ妹に会えなくなっちゃったんだろうな」

彼は珍しく哀れみの言葉を呟いた。

「あら、今日は鼠が多いわね」

響き渡るはあの声。暗い森に凜として澄み渡る綺麗な声だった。

「私達は鼠なんですか？」

鏡は苦笑しながらも朱水に挨拶をする。

「お騒がせして申し訳ありません、とだけ言っておきますね」  
本当に挨拶程度の謝罪の言葉だった。

「はいはい」

一方の朱水もどうでも良さそうに手を振ってそれに応える。

「由音ちゃんがまだ屋敷の中にいるわよ」

しかし二人は屋敷に向かおうとはしない。

「良いんですよ。今は別行動って事になっていきますから」

「あら、意外と放置主義なのね」

何故か鏡はその言葉にキョトンとするが、話を続けようとはしなかった。

「私達はこれで失礼しますね。面倒なことは後々にして今晚はさようなら」

「あら、由音ちゃんの安否は気にしないの？ 貴女達結構酷いのね」

鏡はよもや情を鬼神に指摘されるとは思ってもいず、こみ上げた笑いを隠すことなく現実へ露見させてしまった。その失礼な様に朱水は少し眉をひそめるが、一々そんな事を双犬に関して感じたところで疲れるだけである。

「良いんですよ。対象が逃げていようがあの子によって始末されたいようが関係ありません。由音が生きていさえすればそれで良いんです。どうやらちゃんと生きていますから私達はこのままこの場を去るだけです」

そうは言うがどうやって由音の安否を彼女は知っているのかわかるか。朱水は疑問符を打ちたかったが訊いた所で答えるはずが無いと思いい心に仕舞う。

「それではお騒がせしました」

一礼すると、女を背負った玄と共に鏡はさっさと暗い森へと消えていった。

「削強班には森の呪術は効かないのね。つくづく厄介な敵なこと」

朱水はその後ろ姿を苦笑しながら見送った。

「御嬢様、これ以上の夜風はお体に障ります」

後ろから付いてきた悟が手にカーディガンを持って現れた。

「あら、気が利くわね」

朱水はそれを受け取って羽織る。その姿を悟は頬を赤らめて見つめていた。

「何？」

「いえ」

朱水の問いに悟は首を軽く振るだけである。

「そう。で、貴女はどう思う」  
「はい」

朱水の言葉に梧は一瞬で顔を引き締めた。鬼神城の中で唯一の参謀としての力を持っている剣士は朱水が訊かんとしている事を理解していた。

「削強班にあの様な物があるというのは初めて知りました」

「私もよ。随分と危険な物を持っているのね」

(一度の失態で全てを失うのか……危険すぎるわね)

「残念ながら我々の方で対処することは出来ないかと。尤も、御嬢様ならあの様な刃が触れる前に消し去ることが出来るでしょうから安心でしょうね」

梧は淡々とそう述べた。

勘違いしている。朱水は自分のことなんか心配していないのだから。

「そうね。では戻りましょうか。由音ちゃんもどうやら一仕事してくれたようだし今日はゆっくりと寝られるわね」

朱水は梧の肩を抱くと屋敷へと歩み始める。

「今宵は冷えそうです。温かくしてお休みなさいませ」

「そう、ありがとう」

朱水は梧の頬に口付けをした。

「それにしても、死と言う物はこつも呆気ない物なのね」

完

第三話

第四話 イキトシイケルモノ / 1

1

ごめんなさい

ごめんなさい

お願いだからあんな事は二度と言わないで

お願いだからそんな目で私を見ないで

謝るから

謝るから

許して

広い部屋には本の臭いが充満している。本棚という名の壁がこの  
だだっ広い空間を迷路じみた物にしているが、本を溜め込む一方の  
学園図書館では仕方のないことだ。

「あー、埃っばいわねえ」

棚の上の方にある本を取った少女は、その本と共に降りてくる埃  
に悪態をついた。

「一回扇風機でも思いっきり回してやろうかしら」

悪戯じみた表情を浮かべるその少女は、手に取った埃まみれの本を叩く。舞い上がる埃は嫌がらせの様に彼女の髪にひつつこうとするが神速の手によって阻まれる。

「これかしら？」

埃が剥がれて現れた本のタイトルは『童話』を意味する単語であった。

「何が悲しくてこの私が童話なんか読まなきゃいけないのよ」

年齢として平均的であるその体に不釣り合いな大きな本を抱えながら彼女は土台にしていた二段重ねの椅子を降りる。絶妙なバランスで乗っていたのだろう、彼女が地面に足をつけると同時に椅子が大きな音を立てて崩れた。

「うるさいねえ」

近くの机で本を何やら弄くっていた別の少女があまりの騒音に音の発生原因を睨む。

「鏡、いくらウチ等うちらしかいないからって騒いで良いと言うことではないゾ」

鏡と呼ばれた少女はその言葉に眉をひそ顰めるが、黙々と倒れた椅子を元の位置に戻す作業に戻る。うるさいという言葉に言い返す事は出来ないからだ。

「で、先生に言われた本は見つかったの？」

鏡が椅子を戻すのを最後まで見届けた少女は弄くっていた本をパタンと勢いよく閉じると鏡の横に移動した。

「これよ。童話ですって」

鏡が目の前に突きつけた本の表紙を見るや否や、少女は馬鹿にしたような口調でそれを鏡の胸に突き返した。

「お似合いじゃないか」

「うるさい。老け顔魔法使いのくせに」

お互いに悪態をつく。しかし二人は笑顔であった。

いつものことである。高海鏡こうみあきらは親友である星井加々美ほしいかがみと共に毎晩この魔法学園の図書館で自主的な居残り勉強に励んでいるのである。

それは加々美から話しかけてきた。

「ねえ、貴方の名前も『かがみ』なの？」

彼女はクラスで鏡を除くと一人だけの日本人であった。

「よく間違えられるんだけどね。鏡って書いて『あきら』って読むの」

たわいもない会話だった。いや、周りの人間からしてみればであるが。

二人は実は以前にも出会っていた。

「あんだ、敵よね」

加々美の二言目は何とも強烈な言葉であった。

「そうね。確かあんだあの時の女よね？」

二人は地域の魔法使いが集まる小さな集会で出会っていた。

そこでは派閥が存在し、彼女達是对立する位置にそれぞれ立っていた。

「まあウチはそんなの気にしないけどね」

そして三言目は満面の笑顔と力強い握手がセットに付いてきた。

「あ、そう」

不意打ちだったため鏡はただそう呟くだけである。

その日から鏡は毎度の如く加々美に声をかけられるようになる。

「あんたが悪いのよ。私にあんな事をさせるんだから」

「いや、どう考えてもお前がしくじったのが原因だろ」

今朝の出来事である。学生寮の生徒達は大きな爆発音で目覚めることとなった。

「音だけですんだからよかったけど、あの部屋ごとすっ飛ばしていたらこんな課題だけでは終わらなかつたでしょうね」

「いやいや、その時はまずウチ等の体が吹き飛んでいるって」

加々美は再び弄り始めた本の背表紙を人差し指でつつんと突つく。

「で、あなたの課題はそれなの？」

加々美が先程からやっているのは、特殊な魔法がかけられた本の『内容』をレポート用紙に書き写してこいと言う何とも不可解な課題であった。

「なあ鏡、お前のその脳みそ少し譲ってくれよ。頭良いんだから少しくらいくれたって良いだろ？ な？」

「アホか。成績で言ったら私の少し後ろに鎮座してるあなたにくれてやる脳みそなんか無い」

自分の頭の上へのせられた加々美の手を何とも邪魔そうに退かした鏡はレポート用紙に本のタイトルを書き写した。

「馬鹿みたい。何が『貴方には落ち着きが足りないから指定する本を写して来なさい』よ。こんな童話読んだところで心にゆとりなんて生まれないわよ」

鏡がぶつぶつと悪態を吐いている横で加々美は大きなあくびをする。

「少なくとも今のお前の心には毎秒単位で皺が増えてるだろうがな」



#### 第四話 イキトシイケルモノ / 2 (前書き)

注意：ここに出てくる神は他のあらゆる宗教に出てくる神とは別  
と申してください。つまり他の現存する宗教とは別の物として考え  
てください。要するに「オリジナル」と考えていただければいいか  
と。後書きにもこのことについて少し触れています。

ソイツはクラスではいつも独りだった。その容姿がそうさせるのか、誰もソイツに話しかけるようなことはしなかった。

右肩にかかる巻き髪を指でくるくると弄くりながらいつもすまし顔でいるソイツはそんな状況でも涼しそうに教室のど真ん中に座っていた。鋭い雰囲気を持つている割にはたれ目気味であり、声が不思議と通るので音読をさせられる時ひたすら目立っていた。

高海鏡、何処かで聞いた名だと思ったら意外なところでその名前を見つけた。

同じ地域出身の魔法使いの卵だったって事。それだけでウチはソイツに話しかけるチャンスを得た。いや、チャンスだという言葉は間違っているのかも知れないが。

「心臓透視能？ 何よそれ？」

ソイツは安っぽいパンをその小さな口でちよびちよびと食みながらもウチの話はちゃんと聞いていたようだ。わざわざウチの顔の目の前まで自分の顔を持ってきて訊いてくる。こいつ、狙ってるのか天然なのか……。

「そのまんまよ。心臓の形を透視できるの」

「気持ち悪いわねえ。そんな話を食事中にするんじゃないわよ」  
聞いてきたのはそっちだろうよ。

鏡はその綺麗な目を少しも逸らさずにウチの目を覗き込んでくる。そんなコトするからウチはお前と目が合わせられないんだよ。

「でも結構便利な物よ。心臓ってね、わりと個人特定に使える物な

のよ。だから容姿を変えても簡単に見分けられるってわけ」

まあ今まで生きてきてそんな事に使えた例ためしなど無いのだけれども。  
「ふ〜ん」

「自分から話ふってきたのにその態度は何だよ」

ウチは手に持った箸を置いて、鏡の頬を思い切り抓って横に伸ばした。何とも柔らかい物である。

「なによあ〜。いひやいやないのお〜」  
くそ、可愛いじゃないか。

目に涙を浮かべながらもウチを睨むその瞳は綺麗であり、ウチの心臓を大きく拍動させるにたる魅力的な光景であった。

「……まあウチが誇れる異能はこれくらいかな。正直なところ親はウチ何ぞが唯一の子孫であることに嘆いてると思うぞ。だからウチは親の目から離れることが出来るここに入ったってわけ」

周りの目が辛かった。いつでも他の家系と比較して、ウチを娘として扱うことはなかった。

「大変ねえ。ま、そんな奴はごまんといるわよ。気にするだけ無駄って事よ」

ははっ……鏡はウチの今までの人生全てをそんな言葉で片付けるとほざいた。無理に決まっているだろうに。

「で、お前は何かあるのか？」

「無いわよ。そんなの要らないし」  
……こいつは本当に面白い奴だな。

「だがやはり他者に誇れる物が無いとこの世界では肩身が狭いだろ」  
「無駄無駄。どうせ上には上がいるんだもの、そんなの気にしてる時点で人生の分かれ道を照らしてくれているお天道様を隠してしまっつてもんよ。自分で出来ることをする、これが一番ね」

鏡は昼食用のパンを食べ終えて手持ち無沙汰となったのか、何故か未だ食事を続けてるウチの髪の毛を弄くり始めた。そう言えばこいつはよく他人に触る癖があるようだ。講義中も横に座っているウチのスカートの端をよく弄くっつていたりする。

「いい考え方なのかも知れんがウチは賛同できかねないね。次の瞬間には死んでいるかも知れないようなこの世界、やはり秀でた者の方が仲間という壁を作り易いだろうに」

「あゝ、私群れる人間が好きじゃないのよ」

鏡は嬌態に瞼を閉じる。その容姿があればそこらの男を利用し放題だろうに。いや、それを確信しての発言なのだろうか。

こいつは自分こそを一番理解しているんだと思う。たまに男と話す現場を目撃しているが、何とも気持ち悪いほどに媚びを売っていやがった。

そりゃ、ウチ以外の女友達がないわけだ。あれを見てこいつと友達になろうと考えるような人間はまともじゃないね。ま、そのまともでないのが自分であるのだからな。

「鏡、それ少しくれよ」

鏡の机にはまだ開封していない小さなパンがある。ウチはそれをゆっくりと自分の机に箸で引きずってこようとしたがあっさりと鏡の手がそれを止めた。

で、こいつはこいつ言っただろうな……

「いやよ、何で女に貸しつくんなきゃいけないのよ」

ってね。扱いにくい同性に貸しを作った所で利益が望まれないと言う考えとのこと。はあ、何でウチはこいつが気に入ってしまったんだろうな……。

若き天才は皆の注目を集めながら大声でそう言った。

「ですからいたとしたら神という存在は必ずや二人以上いたのです。でないとおかしいのですよ」

天才は分かっていた。この発言は今自分の目の前にいる同僚や生徒達の大半を敵に回す物だと。

「零と一は何も変わらないのです。変わるのには孤が複になった時から。つまり『自己』が分かるようになった時からなのです」

その言葉にぱらぱらと拍手が起きる。無論数人だ。

「おや、嬢ちゃん。そんなお馬鹿なことを言うためにここに皆を集めたのかい？ そう言うのはママゴトごっこを一緒にやってくれるような小さなお友達達とだけでやってくれないかね」

他にも嫌みつたらしいヤジが飛び交う。そんなことはこの人物にとっては日常茶飯事な事なので今更気にしても仕方がない。若すぎるとしては日常茶飯事な事なので今更気にしても仕方がないのだ。天才、アイシスはこのようなことでめげる事など有り得ないのだ。「そんなモノ人生においてただの一度もやったことありませんよ。とにかく、神という存在をあなた方が信じるのは結構ですが、だからといって唯一無二の存在と崇めている事に私は少々違和感を覚えてですね……」

馬鹿げた話である。自分でも分かっていた。

単純な頭を持つところになってしまおうと言う良い経験だ。数分前に少々苛立ちを覚えることがあって、その腹いせにこのようなことをしかしてしまっただのだ。

全く、過去の自分の頬を平手で思い切りひっぱたきたくなるモノである。

「貴方達の神は己の影を見てそれを模倣して土から人を作り出したと言いますが」

まあいい。いずれ誰かでこの鬱憤を晴らすことになるんだ。それが大群でも良いじゃない。

「影とオリジナルは似て非なる物、それが如何に似ていようと所詮は影、神の写しと言われている人のような物が作れるとは思えませぬね。影は劣化を表す物ではなく本質を変えてしまふのですから」

嗚呼、気持ちいいものだ。こう根拠のない馬鹿な話を大声で誰かに向かって講ずるなどは何時ぶりだろうか。

「神などと言う者がいるならば是非私の目の前の連れてきてくださいな」

先程私にヤジを飛ばしてきた三十路の威張った風格の同僚に向かって、これでもかというどびつきりの作り笑顔を向けてあげた。

「一緒にママゴトじっししてあげても良いですよ」

本当に、気持ちいい……。

#### 第四話 イキトシイケルモノ / 2 (後書き)

アイシスの一人称が私になっているのは、一応ここは外国語で話しているからです。「ボク」は日本だけの一人称。

神が人を作るという話がありますが某宗教からヒントは得ていますが、大きく変えている所があります。それは人を作るときには「神は唯一の存在であった」という設定です。なので「いやいや天使がいたから複だつて！」というツツコミが浮かぶのは当然のことなのですが、それは設定が違つたという事でご理解下さい。

また同時にこの世界には現実にある、つまり皆さんが知っているような宗教も存在しています。

どういふ事かというところ「魔法学上の宗教」なのです。魔法という物を探求していくうちに一部の人間は独自の宗教観を作り出し、それが魔法使い達には「オーソドックス」となったと言つたことです。

また他の宗教を否定することはありません。彼等は自分達の生活と宗教を切り離して考えているためです。

彼等はいわゆる一般人とは違つた文化を築いており、その文化を保つたまま現代の人間社会に紛れ込んでいます。

いずれ彼等の考える宗教を話の中で紹介する予定です。

第四話 イキトシイケルモノ / 3 (前書き)

ちよつと一般的でない言葉を使っています。



「君が知ったのは真実だけだ。事実ではない」

その女は俺の足を踏みつけながらそう見下して言った。

「さつき君は言ったね。後悔していると」

既に感覚が無く、まるでゴムでも膝下に付いているのかと錯覚してしまつくらい不味い状況にある俺の足を、その女は更に捻り踏んだ。

「後悔なんて言葉使わない方が良いよ。それはね……」

ガンガンと鉄を叩いているような耳鳴りの中から何とかその女が発する言葉を聞き取る。正直、もう限界だ。

「過去の自分への責任転嫁なのよ。人間はいつもそう、自分が可愛ければ過去の自分も未来の自分も裏切ってみせる汚い生き物なのよ」  
視界がぼやけていく……。これは死んだな……。

「おや、こんなものかね？ 君の名は響いていたので少しは期待していたのだが、これでは何も楽しめないではないか。晩食が不味くなると言うモノだ」

ふざけやがって……。お前みたいな化け物と一緒にすんな。俺は至つて普通の魔法使いなんだよ。

「つまらないなあ。まあ良い。今日はあいつの所にも行って蜜夜でも興じてみるか」

左腕が欠けているその人間の化け物は俺の顔を覗き込むとあざけ笑った。

「じゃあな、弱者」

人は苦しみによって自己の安全を図る。それは未来の自分に出来るだけロスを残さないようにと言う考えなのか。苦しみを感ぜられない人間は、つまりロスを気付かず溜め込み、そして死んでいくならば人より多くの苦しみを感ぜやすい人間は、一体何のために「多感」でいるのであろうか……。

「アポトシス  
必要死よ」

「アポトシス？」

昨今チープな言葉となつてしまっている『魔王』という存在を馬鹿らしくなる程に体現できているアケミは、ボクという何の力のない人間に魔の意義を説いてくれた。

「そうよ。人間が増えすぎた場合、免疫分子わたしたちがその絶対数を減らすのよ。これは必要なことなの」

手に持っていたグラスの縁を滑らかに舌で嘗めて見せたその鬼は、ボクに対して挑発的な目を向ける。

無論、ボクに対する目ではなく人間と言う存在に対する目であることは十分に理解している。

「アイシス、貴女は自分の体のことを理解しているかしら？」

どういう意味であろうか。ボクという、決して普遍的とは言えない体質のことを指しているのか、それとも人間という定義に存在する範疇での情報を指しているのか。

「免疫組織の話ですか？ それならボクの専門分野でないのによく分かりません」

「そう」

アケミはロックアイスを机に置くと、アイスピックでそれを細かく砕いた。

「これが人間、これが私達とするわね」

細かい氷粒の山を二つに分けそれぞれを指さす。

「そして同時に異物と、免疫分子とする」

アケミは人間・異物と指さした氷をいくつか指を使って溶かす。

「異物が消える。するともう一方はこうなるわ」

今度は魔・免疫分子とした方を同じようにして溶かす。

「捕食の問題ですか？」

「それもああるけど、もっと大きな理由があるわ」

ふむ。人間が消えると魔が減る。昔は捕食の問題であつたが今で

は魔は当たり前のように人間以外を食すことが出来る。ならば何だ？

「わからないかしら？」

「思い当たりませんか」

ボクが首を横に振ると、アケミは魔の方の氷を二つ摘み、それをお互いにくつつけた。

「私達は本能として好戦的に作られているの。これが答えよ」

面白い。アケミが言いたいことはつまりこうだ。

魔は人間を殺しすぎると、己の本能に従って同種で殺し合うことによりその数を減らす。

そう言えば聞いたことがある。白血球は増えすぎるとお互いをつぶし合うと。それと同意と言うことだろう。

「上手く作られているでしょう。地球は常に『均衡』を目指しているのだから、このようにしないと私達だけが生き残ってしまうことも考えていたのでしょうね」

魔が好戦的なのにはそんな理由があつたのですか。単純に力による蹂躞欲の所為だったのではなかったのですね。

「均衡そうね、アポトーシスという言葉と同じ言い方だと『ホメオスタシス』というのが丁度いいかしら」

ホメオスタシス、恒常性か。確かに地球にとってはどちらかに傾いてしまうとそれは異常と言うことになり、病と表現することも出来るのだろう。

ボクが朱水の言葉と、その言葉に含まれている真意を理解しようとしていると、扉がノックされ、アズサの首がひょこつとドアの間から飛び出した。

「あの、ケーキを焼いたんですが良かったら如何ですか？」

アズサはいつもと違って何処か一步退いたような様子である。彼女らしくない態度であった。何かあると言う考えは失礼かもしれないがやはり大人しいには理由がある筈である。

「アズサが焼いてくれたのですか？」

「そう……です」

何故だろう。嫌な予感しかしない。

「梓、貴女が誠意を込めて作った物ならアイシスはちゃんと喜んでくれるわよ」

何故か既にそこにアケミの名はなかった。

「そ、そうですか？ なら今すぐお持ちしますね」

アズサは廊下を走る靴音で喜びを表しながら戻っていった。

「アズサは料理係でしたよね」

「ええそうよ」

アケミは机の上で完全に水となった氷を布で拭う。何かを誤魔化すかのように鼻唄を歌いながら。

「ただし、滅多に調理自体に手を出す事は無いわ」

……そうですか。

そいつは言った。

「人間の欲にはざっくり切り分けると食欲、睡眠欲、性欲がある」とは知っていますね」

「ああ」

そいつは三つ立てていた指にもう一方の手の指を一本横に添えて立てた。

「もう一つあるですよ。分かりませんか？」

そいつの面は楽しそうに歪み、そして楽しそうに喉を鳴らした。

「自殺欲ですよ」

そいつは本当に楽しそうに……笑った。

第四話 イキトシイケルモノ / 3 (後書き)

アポトーシスは本来「計画死、組織的死」という意味の方が近いですが、この話では肉体形成時の「必要死」の方を使いました。ちなみにアポトーシスもホメオスタシスも広辞苑に載っています。

「あら、珍しいわね。ここに来るなんてどんな風の吹き回しよ」

久々にあったソイツは言葉とは裏腹に微塵も驚きを含まずにウチを部屋に招き入れた。

「いよお。久しぶりだな」

鏡はウチが靴を脱いでいる隙に部屋の奥に何かを隠した。ま、そこから辺はお互いの立場上仕方のないことで、一々気にしていたらこいつとは付き合えないから見なかったことにするのが一番だ。

「前に会って一年は経ったわよね。生きてて安心したわよ」

これまた微塵も思っていないことをぺらぺらと口にしゃがる。既に鏡の身内ではないウチは、鏡に心配されるようなことはない。こいつはそういう女なのだ。

「ま、お互い連絡は取りづらいからな。で、どうよ？」

「どうって、何がよ？」

冷蔵庫の中から冷えたクッキーをいくつか投げてよこす。ウチはそれをあの頃のように当たり前のように軽く摘んで受け取る。

「あの野郎だよ。落としたん？」

おうおう、動揺しちゃって。鏡は閉めようとした冷蔵庫のドアに指を思いつきり食われながら頬を赤くして言い張る。

「いや、前にも言ったけどあいつとはそういう関係じゃないから」

その態度で大方の人間はわかっちまう物なんだよ、お嬢さん。昔のこいつでは考えられない話だが、こいつもいつの間にか女になっ  
ていたってわけか。

「もう、そう言う話は無し！ したら追い出すから」

「はいはい」

ウチはあの頃のようにいつもの場所にかけてあるステンレス製の  
コップを取り、クッキーの後に腹に向かって投げ込まれたペットボ  
トルのミネラルウォーターをそれに注ごうとした。

が、しかし躊躇ったあげくポケットに突っ込んであった硬貨を数  
枚、鏡に先程の危険投球の仕返しとして勢いよく投げた。

「お金なんかいらないわよ」

それを大して見向きもせずを受け取った鏡は、同じ飲み物を取り  
出し封を開けて飲んだ。

ほんと変わったな、ウチ等

「で、どうしたのよ。何かあったの？」

落ち着いたところで鏡から当然の質問を受けた。

「まあ、ね」

「何よ、歯切れ悪いわね。あんたらしくくないわよ」

「けっ、お前が言うなってもんだ。」

「あんたとの接触自体危険なんだから用がないなら帰ってくれない  
かしら？」

「いや、用はあるんだ。うん、大いに」

ウチは何を躊躇ってるんだ……聞くだけで、何も問題ないはずだ。  
それなのに私の喉から肝心な単語が這い上がってくれないのだ。

「ウチの職業は理解してるよな？」

「勿論」

ウチは目の前にいる高海鏡とは反対と言うべきグループに付いて  
いる。

削強班が魔を殺すなら、ウチの方は魔を生かすという表現が適切  
だろうか。つまり『逃し屋』みたいな物だ。この職についている輩  
共はウチのようにまともな人生を送れなくなっただならず者の魔法使  
い達がほとんどである。しかも大部分は『転落』した奴であり、つ  
まりは前身よりそれなりのが出来た奴だったのが多い。自分



達は先の見える人生を送る資格がないことにやっと気付いた輩共によって門戸が叩かれるという、まさにアウトローのために存在する職だ。

ウチ等の仕事は主に魔の保護であり、それは時として削強班との殺し合いも勃発させる。幸いな事は、ウチが殺してきた魔法使い共に高海鏡という女が混ざっていなかったことだろう。もしウチがこいつを殺していたらその『ウチ』は自分でも想像できないことをしでかす危険人物になっているだろうな。

しかし今回の件は……異質だった。

「尼土有、聞いた事あるか？」

やっとこさ口から必要な単語が滑り落ちた。尼土有と言う人物の名を聞くと鏡の目が変わった。

「……さあ」

ああ、わかった。やっぱり面倒事だったか。受ける時点でこの件のきな臭さは感じていたんだがな。

「ここは監視されているのか？」

「いえ、監視はないわ。盗聴も盗撮もされていない」

言葉とは違ってそれとなく視線を多方面に巡らす鏡。しかし本当に無いのか、次に開かれた口からは知りたいことが発せられた。

「尼土有、有さんには関わらない方が良いわよ。あの魔は特別だから」

「何故だい？ その特別であるが所以を知りたいんだ」

「馬鹿ねえ。いくら何でもそれは話せないわよ」

緊張しきった顔の眉を無理矢理曲げて微笑もうとするが感情が顔に出やすい鏡には難しかったようだ。口元がひくつくだけで不気味な貌が出来上がっている。

「例えばだ。お前がウチの立場だった場合、お前だったら莫大な金を用意されていてもソイツに関わることを拒否するか？」

鏡は少し黙りこくると、何を思ったのかすくと立ち上がり、星空がちりばめられた天上が覗ける窓のカーテンを閉めると小さく呟い

た。

「愚の骨頂よ」

そうか。わかったよ。

「なあ、今晚泊めてくれよ。いいだろ？」

振り向いた鏡の目は無機質な視線をウチに突き刺す。

「帰った方が良いわ。もしかすると私の手が何かしでかしてしまうから」

「そう。それは恐ろしい」

やはり、か。高海鏡、お前は深く関わっているんだな。

この件は最初乗り気ではなかった。それは当然だ。名も知らぬ魔について調査してくれと言われることはたまにある。魔に関する情報網を本来の目的外で使用するため、やってはいけないことだが、そんな規定など無法者共には鍵の開いた檻だ。縛られるような真面目ちゃんは存在しない。小遣い稼ぎのために依頼を受けるのはざらである。

だがしかし、その報酬が莫大だったらどう思うか？

一攫千金のチャンス？ 馬鹿な、有り得ない。わざわざ自分から墓穴に飛び込むようなもんだ。大金を払って頂けるならどうぞ上から砂をおかけください、ってな。こんな危険な臭いしかしい依頼、まともな奴は無視を決め込むってもんだね。

でもウチは違った。否、ウチが違ったのではなくウチにとって違ったのか。

その依頼書の糞長く、細やかな字で紙面いっぱいに書かれていた吐き気を催すような文章の一角に故き友の名を見つけてしまった愚かな人間は、遙々地球の反対側に来てしまったって分けた。

鏡は尼土有のことを有さんと呼んでいた。つまりは何故か『高海鏡と尼土有には繋がりがある』と言うことか。わざわざウチに対し

て尼土有と親しいことをアピールしてきたのだ、余程のことなのだろう。

でも、ウチは異常者だから余計に尼土有に興味を抱いてしまった。何故かはわからないが今のウチは高海鏡よりも尼土有という名の方に引きつけられている。会ったことも見たこともない魔にだ。

ウチを威圧的に部屋から追い出そうとする鏡の視線を背に受けながらゆっくりと体を動かす。気持ち悪い程に興奮している。

「じゃあな。この件が終わったらまた顔出すわ」  
生きていたら、の話だけだな。

「ねえ、加々美」

零れた様に小さく響いた音を拾ったウチは背後にいる鏡に顔を向ける。その姿は何かを纏っているか、ウチの目に眩しく映った。

「私、あんたのこと未だに好きよ」

「嘘つけ」

「そう嘘でもないわ。でもね、これだけは言っとくわ」

俯くように立っていた鏡は右手をゆっくりと挙げウチの心臓の辺りを指さした。前髪の奥に隠れた水晶の危険な光に気圧される。

「しかるべき状況で出会ってしまったら……私は何ら躊躇せず貴方の心臓を撃ち抜くわ」

それは重い覚悟の響きが幾重にも反響した聞こえを覚えさせる声だった。

「ああ、ウチもだゾ」

階段をゆっくりと下りるウチの足は震えでちぐはぐな位置に落ちるが、そんなことを認識できない程……

ウチは期待と快楽とに酩酊していた。

「鏡を……この手で……」

相も変わらずカビと古くさい紙の臭いが充滿している部屋に缶詰となつているウチ等は、誰も周りにいないことを知つていながらも小声で先生達の陰口を言つていた。

「大体あいつの発音がおかしいのよ」

あいつとは鏡に童話の写本という何とも言い難い課題を出した教師のことだろう。

「確かにあの人の発音は聞き取りにくいな。でもウチ等だつてこつちの意見を伝えづらいんだからどつこいどつこいだろ」

触つてしまった神に祟りあり、ウチの言葉は鏡のぶつける矛先が無くて燻っていた苛つきの対象役を買つてしまったようだ。ピシツと指をウチに向けて何やら叫ぶ鏡。とりあえず落ち着けて。

「あんたのそういう考えがダメなのよ。いい？ あいつは教師で私達は生徒。あちらにはより正確な情報を生徒に伝える義務があるのよ。それなのにあんたはこういう事は常に自分の落ち度と比較してその度合いで物事を捉えようとするわよね。そう言うの、私嫌いよ」  
何言つてんだよこいつ……。

「イライラをウチにぶつけるのは止めないか。それに会つてそういう時間が経つていないウチを知つた風に言うのもどうかと思つぞ」

「うるさいわね」。ストレス発散しなきゃこんなのやってられないのよ」

それが本音か。そう言つて童話の本を向かいの離れた机へと投げつける。本を大事に扱わないとはけしからんやつだ。

投げた本がポンという小気味好い音を立てて机に綺麗に落ちるのと同じ頃に図書館の扉が開かれる。そしてヒョコツと生えてくる生

首、じゃなくてこちらを覗いてくる誰か。

「あの、そろそろ鍵を閉めたいんですけど」

そう言った……に違いない。自慢じゃないが日本語と英語しかわからないウチには彼女の発した言葉の大半が未知の単語だったのである。

「あ、わかりました。私達も今すぐ出ますね」

そう鏡は言った。こっちは英語だったからウチにもわかる。やはり鏡はウチとは比べものにならない程の知識を持っているのだろう。最近こつという事でひしひしとそれを実感する。

急いで荷物を整理して図書館を出たウチ等は何とも無しに鏡の部屋へと向かう。既に決まったパターンだった。一緒に時を過ごすときは大体鏡の部屋に入り浸っている。

「相変わらず綺麗な部屋なこと」

整理整頓と書かれた半紙を壁に貼っていても、その言葉に引けを取らない様なほど綺麗に清掃されている部屋に靴を脱いで入る。鏡は部屋に土足で入られるのを嫌う気がある。日本人だから仕方ないのかもね。

「あんたも少しは部屋を綺麗にしときなさいよ。アレじゃ男の部屋よ」

いや、それは男女比較における偏見だろ。男も女も部屋が綺麗な奴もいて汚くする奴もいる、そこに性は関係ないさ。

「なんならベッドの下でも覗いてみるか？ いかわしい物が出てくるかも知れんぞ？」

「出てきたら速攻あんたとの縁を切るわ」

酷いねえ。そこまでいなくても良いだろうに。

適当に鞆を床に放り投げると鏡が冷蔵庫から彼女のお気入りのジューズを引っ張り出してきた。

「飲むつしよ？」

「勿論頂くよ」

返事する前に放り投げられたペットボトルをいつもの通りキャッチし、封を開けてそのまま口へ運ぶ。

「直飲みかよ。コップあるから使いなさいな」

「女同士なんだから気にするなつて」

律儀に手渡したペットボトルの飲み口をティッシュで拭き取り嫌そうな顔をする。いや、本気でそう思っているわけでないことはわかっているさ。こいつは嫌なことは事前に予測できる場合はしつかりと回避する人間だからね。ウチが口付けることはいつものことなので本当に嫌ならこいつはそもそもウチにペットボトルを投げて超越す事なんかしないんだ。

「お前つてさ、分かり易いよな」

可愛らしく両手で掴みながらコクコクと喉を鳴らしている鏡はウチを一瞥したが自覚しているのか、頬を軽く赤らめ無視を決め込んだ。

無視されて手持ち無沙汰となったウチの手は自然にテレビのリモコンに伸びる。

この寮では基本的にテレビの持ち込みは禁止されている。では何故ここにその禁止物が存在してるのかというと、

「優等生はずるいよな」

成績上位者はそういう諸々の規制が驚くほどに緩くなるのである。

「ま、頑張った者へのご褒美みたいな物でしょ？ 良いじゃない」

しよつちゆうこいつの横にいるウチからしたら「頑張った」と言う言葉に大きな疑問符を記したいがそこは流しておこう。いちいち突っ掛かっているとこいつはきついしつぺを返してくるに決まっている。

いつもはテレビを付けても結局聞き流すのだが、面白そうな番組をやっていたのでウチはそれに目を惹き付けられた。どうやらCG

技術を大量に活用した冒険物の映画らしい。こういう物は途中から見ても大して面白くはないのだがウチは画面に現れる創造物に焦点を合わせ続けた。伝説上の怪物、龍だった。おっとこちらではドラゴンか、二本足で立つタイプの方だ。羽を広げて炎を吐いている。実際に生きている様にすら見えるとはCGと言つのは本当に凄いものだな。おっと、伝説で思い出したわ……。

「なあ、この学校が保管している禁書って見たことあるか？」

ウチと同じく（こちらは何も考えずにだろうが）画面を見ていた鏡は首を横に振る。

「知らないのか？　ここって結構有名なんだぞ」

「禁書ってあれでしょ？　危険な魔法が記されているって言う」

「おやおや、こいつ、何も知らないんだな。」

「それは偽情報だな。禁書って言うのはそんな代物じゃないんだよ」  
ウチの話に興味を覚えたのか、テレビの電源を落としてウチに続きを話せと迫る鏡の目は爛々と輝いていた。

「禁書って言うのは本じゃないんだ。アレは実際に見るとわかるんだが羊皮紙がただ巻かれているだけなんだよ」

「へえ。あんた見たことあるんだ」

「まあね。一度だけお目にかかれたんだよ」

あれはウチがまだ十歳にも満たない頃だったはずだ。親が連れて行ってくれた博覧会にて自慢気に偉そうな魔法使いが禁書なる物を見せつけていた。

「正直あんなの手に入れたところで何の得になるだろうかと考えてしまうほど外見は見窄らしい物だったね。でも親が言うには禁書という物は文字ではなく別の物が書かれているらしい。ウチが見たのは禁書の外側だけだったから内側に何が書かれているかはわからないけど、何やら紋様のような物が描かれているらしいぞ」

それを見たらどうにかなくなってしまふのか、そこからはウチは想像を巡らすことしかできないからわからないが恐らくそんな感じだろう。



「で、そこに書かれているのは魔法とは違った系列の代物らしい。持っている本人が言っていたから多分本当だろうよ。」

「違う系列？」

いや、詳しいことはウチも知らんよ。ただ確かなのは万人がその中を見たらそれを得られるなんて言うゲームに出てくるような物とは違って、それを会得出来るのはほんの一握りの人間らしいという事くらいだ。

「つまりウチ等がそれを手に入れたところで果たして書かれている物が理解できるかは、確率的には分母に天文学的数字が付くってわけよ。」

興味深げに話を聞いていた鏡は、ウチの話が終えたことを察し、何故か勢いよく立ち上がった。

「んじゃ、行ってくるわ。」

おいおい、何言ってるんだこのお嬢さんは？

「行くってお前……まさか探し出そうとか考えてるのかよ。」

「そうよ。面白そうじゃないそれって。」

ニタニタと嫌らしい顔をしてそう言う鏡さん。

「お前人の話聞いてたか？ もし万が一億が一見つけても、その中身を理解できない確率の方が多いんだぞ。」

「あら……。」

既にドアのノブに手をかけていた鏡は振り返り、

「分母が天文学的数字なら分子にも天文学的数字を置けばいいじゃない。」

そう、屁理屈っぽいことを吐き捨てて出て行った。

「おいおい、そう言う問題じゃないだろ。それにそもそも見つかる確率すらほとんど無いだろうに。」

呆れの意を口は呟くが、ウチの足は既に鏡を追いかけていた。

まあ、なんだ？ こいつといると何かと人生が楽しくなるんだな。そしてそれが少しだけ悔しくもある。

「悔しいが、あいつは人を惹き付ける何かがあるんだろっな……」  
恥ずかしい考えを呟いて火照ってしまった頬を手で覆いながら、  
既に廊下の大分先まで進んでいた鏡の背を追った。

私にあほらしい課題を出した教師の研究室のドアをノックする。  
後ろには何故か付いてきた加々美がいる。

「はい、どうぞ」

いつもの微妙におかしい発音の間延びした返事がドアの向こうか  
ら響く。

「失礼します」

ドアを開けると大きな机に乱雑に置かれた本が壁を作り出してい  
るといふ何とも作業しづらい環境であるように思える部屋に、ぽつ  
んと背の小さな女性が椅子に座していた。髪は長く、座っていると  
床にまで届いてしまいそうだが本人は気にせずにいるようで、たま  
に生徒が彼女の髪の先に付いたゴミを取り除いている姿を見かける。  
「あら」。課題の提出かしら？」

やはりおかしな発音である。しかし理解できないほどではないた  
め話すのに障害はない。眼鏡の奥にある彼女の目は口調とは裏腹に  
眼光鋭く、少しだけ威圧感さえ感じる。

「いえ、それは期限の日に出します。今日は訊きたいことがあって  
後ろにいる加々美の手を取って先生に突き出す。

「こいつが言っていたんですけどこの学校には禁書なる物が保管さ  
れているらしいですね」

加々美は「ウチに責任転嫁するな」と言つが事実この私に話した  
のは加々美であり、先生に変なことを探るなど叱られるのも加々美  
の役であると思う。だって、私に話すのが何より一番の失敗なの  
だから。

「うっん、私も聞いたことはあるけど先生方からでなく生徒の子か

ら聞いたのよね。本当にあるかどうかは私知らな〜い」

手にしていた本を左右に振りながらつまらなそうに言う。見た目が若い先生なので何だか幼子がいじけてしまったようにも見える。理由は自分だけ秘密を教えてもらえないと言うところだろうか。それにしても自分の事ながら失礼な想像だ。

「面白そうね。今度学園長にでも聞いてきてあげるわ」

「本当ですか？ 先生って結構怖い物知らずですね」

後ろから「お前もな」と小さなつつこみが聞こえたが当たり前のように無視した。

ここの学園長は見た目が威かつがましく、堅物のように聞く。そのような人物に「禁書ありますか」と訊くとは何と蛮勇なことか。

「でも交換条件があるよ〜」

「はい？」

交換条件？ 教師が生徒にそういう物を求めるとは不埒な。

「課題の追加よ〜。写しだけじゃなくて感想も付け加えといて〜」  
うわっ、面倒事を増やしてしまったか、我ながら不覚なり。後ろの加々美の（隠す気が無い）押し殺した笑い声が頭にくる。

「感想文と言ってもちよいちよいでいいよ〜。貴方があれを読んで感じたことをちよつと書くだけで良いから〜」

「なら今感想文を書いたら直ぐにでも学園長に訊きに行ってくださいます？」

「おいおい、先生にだって都合という物が」

「いいよ〜」

加々美の遮りは更に先生の遮りで上乘せされた。なかなかわかっていらつしやる先生である。

「う〜ん、口頭でいいや。はいどうぞ」

どうぞと言つ言葉と同時に私に突き出される手、今言えつてことか。読んでいる事前提の様だ。

「えっと……あの姫は何とも愚かだと感じました」

「うんうん」

何故か先生は嬉しそうに頷く。予想通りの在り来たりの感想、そう言いたげであった。

「自分で好きな人を凍りづけにしたあげく、動けない恋人に許しを請うなんて間違っているとしたかと思えません」

「そうですね」

先生は何やら紙に文字を書き始める。採点だろうか。

「で、私が貴方に写しをさせた理由わかる？」

鋭い目でこちらの顔を覗き込むように尋ねる。理由……短絡的に考えれば「心にゆとりを」だろうけどそんなのが答えな分けがない。それは初めから用意されていた答え、これが答えならば初めから先の質問は意味が無いのだから。

「失敗ですか？」

そもそもこの課題を出されたのはあの魔力の暴走が原因だった。ならばそこに理由があるのだろうか。

「そうですね。貴方達は後一步で大惨事にでもなるかという危険な行為をしていたのよ？ わかっていたかしら」

私達は勿論頷く。あれはとてもじゃないが今の私達では制御できる暴走ではなかった。そして途中まで実行されてしまった魔法は歯止めが利かず驚くほどの速度で膨張し、破裂した。

「ミス高海が緩衝魔法を事前に唱えておかなかつたらきっと死人が出ていたわよ」

「ごめんなさい……」

時は戻せない。あの姫が青年を凍りづけにしたのは一瞬の感情の高ぶり、嫉妬の果てであった。凍りづけとなった青年に何度も許しを請うたが勿論青年の口は動くはずもない。その驚愕と恐怖に満ちた表情のまま固まってしまった青年の見開かされた血眼ちめは永遠に自分をそのようにさせた姫を見つめ続け、それが姫を責め立てていた。永遠を約束された姫は後悔の念に身を委ねて自決することも出来ず、ただ青年と共に洞窟に籠もるだけであった。

「私達が更に大きな失敗を犯していたら誰かが犠牲になっていたか

も知れませんが。そうなら私達は一生、その人の近親者や友達に怨恨の眼差しで睨まれ続けることになったと思います。丁度童話にて姫が青年の眼差しに押しつぶされ続けるのと同じ様に」

「そこまでわかっていたのならもう良いわ。この世界、罪を犯した者は法で裁かれるよりも早く同胞に裁かれることの方が多から肝に銘じておきなさい。失敗は死に繋がるのよ」

失敗は死に繋がる。衝撃的な言葉であった。まだ頭の何処かでは楽観的に考えていたのだろう。しかし先生に両肩を力強く掴まれ私の目を通して頭の中を覗こうとせんばかりに近くで見つめられると、その先生の言わんとせん事が脳裏に勝手に焼き付けられたように言葉が浮かんだ。

魔法使いの世界に「赦免<sup>しゃめん</sup>」は無い。

殺したら殺されるだけだ。何故ならお互いの目指す先は等しく、その道は重なり合っている。その細き道に他人を殺すような失敗をしでかす凡愚な輩がいたらどうするだろうか？ 答えは簡単である。巻き込まれる前に突き飛ばして崖に落とせばいい、それだけだ。

「はい」

身震いが起こる。数分前まで嘗めきっていた教師によって諭された可能性。その言葉の重さは自分がしかした魔力の暴走時に感じた死の恐怖と同等であった。いや、目に見えない恐怖は目に見えた恐怖以上に恐ろしく、私の奥底へと入り込んできた。

「苛めすぎたかしら」

私の心を覗いたかのように、先生はうってかわって優しい瞳で私の頭を撫でてくれた。その掌の暖かさに何故か涙が溢れてくる。

「あらら、御免なさいね」

悔しいが、私はこの先生に、嘗めきつていた先生に全てを打ち明かしたいという程に好意を抱いてしまった。私はこんなにも弱い人間であっただろうか。たった数分で尻尾を振ってしまう人間であっただろうか。

「鏡……」

後ろで何故か私と同じく目を赤くしている加々美は私の手を取り包んでくれた。

やっぱり暖かい。加々美は私には珍しい「友達」と呼べる存在である。だから悔しくはない。だから繋がれたその手を引きつけ思いつきり加々美に抱きついた。

「ちよつと、おいおい」

何も言わないで。少しだけあなたの体を貸して頂戴。貴方なら悔しくないのだから。

「参ったな」

少し嬉しそうな加々美の咳きが耳元で響く。その息の温もりは私の耳を赤く染め上げ、私の加々美に抱きつく腕の力を更に強くさせた。

「ゴメン、ちよつとだけで良いからこうさせて」

「……わかった」

私達は暫くくつき合った。女同士だからだろうか？ 加々美に体の熱を与え、与えられることに何も抵抗がない。ずっとそうしていたくさえあった。

「仲良いのね」。先生もそんな友達欲しかったわ」

その後我に返った時にはあまりの状況に顔から火が出たがそれはそれでまた思い出という名の記憶の断片となるだろうから良しとした。

幾ばくか時が過ぎ、チャイムが鳴り響いた。

「あら、もうこんな時間じゃない。今日はもう帰りなさいな」

お互いに恥ずかしくて目を合わせられず、少し離れたところに無言でただ立っていた私達に先生は帰るように言う。

「そうそう、これは訊いておかなきゃいけないわね」

「なんででしょう?」

「禁書の事よ。まだ興味あつたりする?」

そう言えばそうだった。ここにはその事について訊くために尋ねてきたのだった。

「興味は……もう余りありません」

「そう、それが良いと思うわ。万が一って事もあるでしょう? 貴方の肩に載せる事の出来る責任なんてまだまだ小さいのよ。その若さでは重さで簡単に押し潰されちゃうわ。だからね、もっと大人になつてからまたここに来なさい。その時までにはちゃんと学園長に話を訊いといてあげるから」

「はい」

何故だろうか心が清々しい。私は一体先程まで何に心濁されていたのであろうか。そんなことを考えられない程に今は気分がすっきりしている。

「それとミズ星井、貴方の課題は実は私が出したのではないのよ」

「そうなんですか?」

先生は椅子のキヤスターを転がせ加々美の目の前へと移動した。

「貴方のこと気にしている先生がいてね、その先生に折角だからってあれを渡されたの」

「はあ。そんな物好きな方は何方でしょうか?」

しかし先生はフフフと含み笑いをするだけで答えはしなかった。

背中を押され廊下へと追い出された私達はお互いの顔を見つめ、お互いに首を傾げた。

「あの反応、どういう意味なのかしら」

「わからないね。ま、ウチを気にするという時点で余り期待していないけどね」

加々美は手をひらひらさせながらおちゃらけた様に言う。そのにやけた表情が無性に私のSっ気を駆り立てる。手が勝手に加々美の頬を抓る。

「何だよ」

「さあ？」

悔しい。何か悔しい。ほんと悔しい。悔しくないはずなのに悔しい。

でも何に私は悔しいのだろう。

「鏡、お腹すいたから早く帰るゾ！」

こいつの笑顔は私に何かを与えてくれる。

「悔しいわぁ」

「何が？」

既に戻る気満々の加々美は私を置いて歩き出してしまっていた。

「別に」

本当はわかっている。

「けど、恥ずかしいから言えないじゃない」

私の声は『しっかり』と加々美に聞こえなかった。



これ程までに生きるのが辛いなど考えたことがあつただらうか。全てが辛く、全てが憎い。今すぐにでもこの首を掻つ切るのも良いが、私の頭はもっと別のことを望んでいる。

全て消えてしまえばいい。その消滅に私が巻き込まれるだけで良い。自分一人いなくなるのではなく、世界が欠ければいい。

何故だらうか。私は一体何故このような考えを持つようになったのだらうか。

「先生」

それはこの静かな部屋でなかったら聞き取れない程の声だった。声の方を見ると一人の生徒らしき人物が立っていた。

「ちよつと宜しいでしょうか？」

やはり響かない声が続く。

「はい、何でしょう」

彼女は小動物のように細やかに動き、鞆から本を取り出した。

それは私が先日図書館で借りた物であった。

「先生もこういう物読むんですね」

本を私に見せて顔を綻ばす。

「私が読んだらおかしいですか？」

彼女は慌てて「滅相もございません」と手をバタバタとさせ否定したが、そのようなことを訊いた時点で既に遅い。

「てつきり先生はこういう物に興味無いのだと思っていましたので私、借りようとした時に私の一つ前に先生の名前が書かれているのが何故か嬉しくてここに来ちゃったんですよ」

何て屈託のない笑顔だろう。この院で彼女のような生徒が在籍し続けるような事が出来るのか疑問に思える程に幼稚な印象を受ける。まあここにいるという時点で彼女が優秀な魔法使いである事が証明されているのだが。

「私だつて恋愛小説くらい読みますよ。それに私くらいの子はそういう物を好むと聞いていたのですが」

「あゝそうですね。でも先生はいつも格好良くてこういう本と結びつけなくて」

「かつこ……いいですか？」

「はい！」

即答だった。彼女は私をどの様に見ているのだろうか。私のことを格好いいなどと表現する人とは今まで一度も出会ったことはなかった。

いつも人は私のことを賢い等と煽てる。尤も、その大半は「小賢しい」という意味を含んでいたに違いないが。

「それで？」

「え？」

「それで、何ですか？ 用事はそれだけですか？」

「はい……」と縮こまる女生徒。

くだらない。本当にこのような生徒がここに在籍しているのだろうか。

「貴方、名前は？」

私の問いかけに彼女は一瞬だけ表情を強ばらせたが直ぐに満面の笑みを浮かべる。

「シタニアです」

シタニア……そう言えばそのような名前の生徒が私の掛け持つクラスにいたな。

「そう。シタニア君、貴方はこの学院の生徒なのでしょう？ ならばそのようなことで師を呼び止めるというのは間違っているとは思いませんか？」

この院では甘えて良いのは一部の人間だけで良い。一握りの天才か、今までの人生の大半を努力という投資活動で過ごしてきた愚者だけだ。

そう、愚か者だ。どうせ努力しても辿り着くのは人の先。一方、天才は人の先でなく世界の先に辿り着ける人種だ。口惜しいことに私は愚か者の方である。その事に気付いていれば私は今と違った道を歩めていただろうに。何も知らない輩共は私のことを口々に天才と謳うがそれは大きな間違いであることを以前は逐一説明したくなつた物だ。「私は違う。あれらとは違うのだ」と。

「す、すみません」

私の言葉は少々厳しかったのだろうか、シタニアという生徒は一礼すると一目散に去っていった。彼女が振り返る際に空中にキラリと光る物が流れた。

「泣いていたのか？ 何と軟弱な」

シタニアと言ったか。生徒の顔など覚えるのは面倒であるが彼女の顔は私の心に深く刻まれた。

それから幾日ほど経ったある日、それは人気のない廊下での出会い。

「シタニア君、この前の小説は読みましたか」

廊下の先で私を見つけた途端、あからさまに目を逸らした彼女に私は何故か声をかけてしまった。

「あ、はい……」

「そうですか」

そして幾ばくかの静寂。

「えっと、それだけでしょうか」

「え、ええ」

何をしているんだ私は。この生徒に自分で注意したことを自らしでかしてしまっている。

「……ふふ」

「どうしました？」

「だって……あははははは」

彼女はあの日の出会いの印象とは違って大きな声で笑い始めた。しかし何故笑われたのか。

「私、何かしましたか？」

「先生の顔が可笑しいのですもの」

未だ笑い続ける彼女の目には涙すら浮かぶ。何と失礼な。

「人の顔を笑うとは感心しませんね」

「ち、違います。先生の顔が可笑しいんじゃないやなくて表情が可笑しかったです」

だって先生つてば目を見開いて固まるんですもの、とシタニアは言った。む、その光景を想像してみると確かにそれは笑われても仕方ない和我ながら思う。もしかすると私は以前にも他の人間の目前でその表情をできてしまっていたかも知れない。気を付けねば。

「ご忠告感謝します」

「そんな、忠告だなんて」

何を思ったのか、涙を浮かばずシタニアは私の頭を撫でた。私はあまりの出来事に言葉を失う。

「あ、ご、御免なさい……」

「い、いえ……」

今までこのようなことをされたことはない。

このこみ上げてくる熱い物は何だ？ 羞恥か？ 怒りか？

「わ、私妹がいるのですけど……」

シタニアは尻つぼみな言い方で言い訳をし始める。

「先生と同じくらい背丈で、匂いもどことなく似てるからつい……」  
そう言いながらも彼女の手は私の頭から離れようとはしない。その掌の熱がじわじわと私の頭に浸透し始める。

心臓が跳ねる

「止めなさい！」

思わず大声を上げてシタニアの手を力一杯引き剥がしてしまった。頭に血が上るのが自分で分かる。頬が紅潮するのが自分で分かる。耳が紅くなるのが自分で分かる。でも、自分が分からない。

私は何に駆り立てられているのか

何かから逃げるように私は彼女から逃げ出した。自分でも訳が分からないが咽せるような熱い息が口から吐き出される度に喉の奥から何か逃げ出そうとする。

怖い

私を呼び止める声が遠くに聞こえたが私の体は止まろうとしない。既に自分の体ではないかのように勝手に体が動いている。

怖い

私は恐いのだ。

学院の隅の方にある人つ気少ないトイレに駆け込むと同時に私は体の中身全部をぶちまけるように洗面台へと胃の中身を吐き出した。トイレに誰もいなかったのが幸いであった。このような姿を見られてしまったらどの様な噂が立つであろうか。

「いや、そんなことはどうでも良い」

跳ねる心臓を押さえ付けている自分を鏡越しに観察する。

「久方ぶりな私だ」

鏡の中にいる自分は弱々しく、その首は簡単に折れてしまいそうなほど細い。

「なんてことだ。もう考えないと誓ったはずなのに」

旧い私は新しい私に誓わせた。

「これだから人間は嫌いなんだ」

『生きている』と言うことを考えるなど。

「お願いだ、その煩い心音を止めてくれ」

それが唯一の私の誓いだから。

「その耳障りな息音を押しつぶしてくれ」

それが唯一の私の禁忌だから。

「私は生きていたくて生きているんじゃないんだ」

もう自分を生物としてみるな。決して自分の体を顧みるな。お前はただ目的だけのために時間をむさぼってればいい。それだけで良いんだ。

それだけで許されるのだから。

「アケミ……貴方が羨ましい」

早く辿り着かなければならない。それが私の誕生であり終焉なのだから。

「死が欲しく、生を望むのだ。そうしなければならぬのだ」

鏡に映る私はその時生まれて初めて自分に微笑みかけた。

「自分を恐れるなんて馬鹿げていると笑われるだろうに」  
笑いたければ笑えばいい。それが私のあり方なのだから。

生きとし生けるもの、その全てが生を望むなんて事は有り得ないことなのだ。

生きることが欲の延長線に存在するモノならば、死も欲の先にあつて良いはずだ。

「そうだ。だから私は早く辿り着かなくてはならないのだ」

ただ死ぬだけでは駄目なのだ。

何と他人が羨ましいことか。

彼等は簡単に死ぬことが許されるのだから。



「神は生きなくて良い……」

寮での夕食中にテレビをじっと見ていた加々美はそう呟いた。

「急に何よ」

加々美は、目はテレビの画面に釘付けのままだが、甘い物は別腹と言わんばかりに大きなプリンを掬い続けていたスプーンを止めてその切っ先を私に勢いよく向けた。

「ちよっとお、少し飛んだわよ」

スプーンにこびり付いていた黄色い欠片が私に飛んできたのである。

「ああ、悪い」

少しも謝る気のない態度で謝罪の意を言う。

「いや、何さ。ちよっと思い出してね」

「思い出したって、その神はなんたらかんたらって奴？」

「そう」

『神は死んだ』なら分かるがこいつがそんな哲学チックなことを話題にするわけがない。

「神は生きる必要はない。何故なら神はその名が全てであり、その名だけが存在である、だっただけな」

「何の話よ」

「いやね、前に読んだネットの記事というか論文のような物に書いてあったんだよ」

ああ、そういう事ね。恐らく今テレビで流れている映画に出てきている狂信的な信者であるヒロインを見てそのフレーズを思い出したってところだろう。

「それが意外なところにあつたもんでさ、勝手に覚えていたみたい」  
「何所よ？」

「聞いて驚け。何と魔法院だ」

……それは本当に驚いた。あの魔法院が神をそのように表現するような事を許すなんてにわかには信じられない。

「いや、確かだぞ。間違いなくあれは魔法院のページにあつた。魔法院がネットなんぞに手を染めているとはいとをかしと思つてずつと覗いていた時期があつてね、意外だったから印象深かつたようだ」

日本語を披露できる相手が私くらいしかいないのだろう、中学生レベルの古語知識を晒したようなことを言う加々美は部屋の隅に置いてある私のパソコンの電源を勝手に入れた。

「相変わらず新品同様だな」

「まあね。私はパソコンなんて興味ないからね」

「そのわりにはトンデモスペックな代物をお持ちで」

「それ、学校がくれた物よ」

あらら、どうやら私の言葉は加々美の耳奥の何処かを刺激してしまつたようだ。スイッチが入つた加々美はいつもの「これだから優等生は」とほどほどに長く続く愚痴をこぼし始めてしまった。ま、今回は手だけはパソコンを弄っているので私は適当に相槌打つているだけで良いので楽でいい。

「おっとこれだ」

どうやら目的の所へ辿り着いたらしく、愚痴をこぼすのを止める。そこには確かに加々美が言つたような内容の文章が掲載されてい

た。  
「これ、誰の論文よ？」

「うーん、名前は書いてないな。でも院のページ内に掲載されているって事は少なくとも院生の物じゃないね」

確かにそうだ。院生の論文を魔法院が公開するわけがない。そんなこととしてみる、例えばそれが上質の物でも世界中の魔法使いが穴を捜し始める。そんなリスクをあのプライドの塊である院が進んで負

うわけ無い。

「これは……」

何かを見つけたらしく、加々美は手を止めた。画面のポインタは一点に止まり、その形容はポインタがリンクボタンの上に居ることを表していた。私はネットには疎いのだがそれくらいは分かる。しかしその部分には何もなく背景と同じ色であった。

「あゝ、飛んで良いか？」

「何よ急に了承なんて求めて」

さつきは勝手にパソコンの電源入れたのにさ。

「いや、一応お前のパソコンだからね。もし変なページに飛んでしまったら、勝手にやった場合凄く責められると思ったんでね」

はいはい。あんたはそう言うところだけはちゃっかりしてるわね。

「じゃ、押すぞ」

何故かそう大層なことでもないのにゴクリと喉を鳴らす。

「……ああん？」

加々美は何所ぞの不良ヨロシク、決して嫁入り前の女性が上げて良いような物では無い声を漏らした。いくら私しか居ないからって流石にそれは駄目でしょ加々美さんよ。

「何だこれ」

そこには一色だけと言うシンプルな背景に小さな文字が打ち込まれていた。

「何々、『私は生きるのが嫌いである。これは生きるという行為が嫌いなのではない』……だとさ」

「いや、こつち見られても」

加々美は言葉の最後の方で私の方へ首を振り向かせ、私の意見を求めるように語尾のイントネーションを上げた。

「『生きること自体に対する嫌悪感ではなく、自分が生きていることに嫌気がするのである』」

ページ内に書かれている短い文章をゆっくりと読み上げる。

「『生物として間違っていることは分かる。しかしそれでも自分が

生きることを正当化する寛容さを私は持ち合わせておらず、また、未来永劫得ることはないであろう。生を実感する毎にこみ上げてくる吐き気を我慢する度に私はそれを確信する。』

そんな内容の文章が暗い背景に何のデザイン性もなく、淡々と白い文字で並べられている。

「『いつから私はこのようなことを考えるようになってしまったのか。いつから私はこのような人間となってしまったのか』だって」  
そこで文章は終わっていた。本当に短い文章であった。先程の神云々（うんぬん）の文章の数十分の一の長さくらいしかなかった。

「まあ何というか『痛い』わね」  
パツと頭に浮かんだ言葉は『痛い』だ。

こんな文章をインターネットに、しかも魔法権威の象徴である魔法院のページに載つけるとは、頭が残念なのかも知れないと思えない行為である。

「こいつは何がしたいんだらうな」  
「さあねえ」

こんな到底知り合いにもなりたくないような雰囲気を出す文を書く人間の考えることなど、私達のような一般人には理解し得ない物と決まっているものだ。

「でも一つ分かることは、この人は一種のナルシストなのかも知れないって事だわね」  
「何でそうなる」

私の意見に加々美は頭上に疑問符が浮いているような反応をする。  
「さっきのページで神は生きている必要はないって言うていたでしょ。それとこの文章を繋げればこの人の考えていることが分かるわよ。この文章だけだと何か過去に辛い事があって死を望んでいるのかと推測してしまうけど、ひとつ前のページがあるとそうなるわね」  
「へえ、流石変人だ。変人同士理解し合えるって分けね」

この子は何をおっしゃるのか。少なくともお前には言われたくはないわい。その周りの人間が避けるような変人に声をかけてきたお

前にはね。

「恐らくこの人は自分を神聖視しているのよ。それが無意識かどうかは分からないけどね。だから自分が生きていることを実感する度に嘔吐感が沸き上げてくるんでしょうね」

神は生きてはならない、ってね。

「それまた難儀な」

難儀ねえ。本人も自覚しているようだし何とも可哀想な人だこと。それにしてもこの人は誰なのかしらね。かなり気になるのだけれど」

「ここにも名前は書かれていないしね。でも間違っても直接院に尋ねちゃ駄目だゾ」

「分かっているわよ」

当たり前だ。こちらから院に自分の存在を知らせるなどという愚行は例え血迷ったとしてもしでかす気にはなれないわ。あいつらは例え人生の敗者な落ちぶれ魔法使いでもきっかりマークするような奴らだからね。ま、そのおかげであれ程の知の群雄達の宝箱へと成長できたのだから褒めるべき習性なのかしらね。

「お、そろそろ消灯時間ね。んじゃウチは部屋に戻るわ」

消灯時間三十分前を知らせる小さなベルを聞き取った加々美は、朗らかな笑顔を咲かせながら部屋を出て行った。人の気分をもやもやさせておいて何とも腹が立つ顔をするのだろうか。

「院にも面白い人間がいるにはいるのね」

私はまた要らぬ興味を持ってしまったようだ。そしてまた死へと続く階段を登ってしまうことになるのだろうか。

「駄目ね」。私ってほんと魔法使いには向いてない性格みたい」

でも、だからといってこの刺激的な世界から離れる気なんて微塵も湧かない。

そう、この世界こそ私の泳ぐ水なのだ。

「魔法院の変人、興味あるわあ」

ああ、つくづく死に急ぐ自分に呆れるわ。でもだからこそ私は生きていくのかしら。

「あーやだ、まるで反対じゃない」

そこは人気少なく時が止まったように感じられる場所だった。唯一その場に立つ者が感じられる「時」は決して止まることのない太陽の歩みと時折流れる風によって靡く草花の動きだけであった。

ここは生を感じられない。だが死も感じることはない。この世界にただ自分一人取り残されているような錯覚は私にとって唯一無二の快楽であった。世界を感じるのではなく、世界に自分が居ることを感じるのがいつの間にか私の欲の対象になっていた。

生きることは嫌いなのに？

そつだ。自己矛盾だと言うことは分かっている。それでも自分の意見を忠実に述べるなら、今ここにいることを私の体は求めている。この空間に漂うことを欲している。

その華奢な体躯で死にながら生きる気分はどう？

悪くない。あくまで「悪くない」だ。貴方が言いたいことも分かるがもう少しだけ大人しくしていてくれ。

太陽に傷だらけの手を翳す。またやらかしてしまった。自分が自分でなくなるといつも体に傷が増えることになる。

当然よ。貴方の体なのは確かだけれども、同時に私の体でもあるのだから。

分かっている。私は貴方から貴方を護るために、貴方から貴方を奪ったに過ぎない。嗜虐的な貴方はいつも自分を傷つけていた。私にはそれが耐えられなかった。

誰にも迷惑かけていなかったのに？

貴方は上手だった。上手い具合に体を痛めつけて数日後にはその疵痕は消え失せた。だから貴方の両親は気にしなかった。

そう。それが問題であった。

体が弱い貴方に傷が多少増えたところで貴方の両親は気にもとめなかった。元々傷が出来やすい体なのだから仕方あるまい。貴方の親の最大の過ちは「体が弱い者が自分を傷つけまい」という過信であった。

そうね。そのおかげでやりやすかったわ。

でしょうね。貴方は親の目を盗んでは自分の体を傷つけその痛みに酔いしれ、同時にその傷害行為に溺れた。誰かを傷つけるのではなく自分にその欲望を向け続けた。だから私は貴方から体を奪った。耐えきれなかったのだ。貴方が体を傷つけるのが。

だけどそれが貴方の過ちだったのよ。

そうだ。私は貴方になった。でもそれは私を私でなくしてしまった。私を思い出せなくなってしまう。そして貴方も私を思い出せないでいる。



貴方は誰？

その答えは持ち合わせていない。私は貴方ではない他の誰かである。そうとしか答えられないのだ。だから私は今ここにいるのだ。

貴方は本当に出来ると思っっているの？

そうではない。やらなくてはならないのだ。私は貴方を得て私を失ってしまった。だから私は知らなくてはならない。

貴方をこんなにも護りたくて、こんなにも愛しているわけを。

好き勝手やっちゃって。私の体でのほほんと生きないでください。  
さる？

その事については平謝りするしかない。だから少しの間だけでいい。私に協力してくれ。私を傷つけないでくれ。

貴方が生きようとしなければね。

何故だ。何故貴方はそうやって生きることを嫌うのだ。死が恐くないのか？

死が恐いなんて考えたこともないわ。

やはり貴方はそうなのか……。痛みを喜ぶ貴方は致命傷の激痛への恐怖はなく、死という未知なる物に対する畏怖が薄い人間だった。そう、貴方は簡単に死へと歩み寄ることができたのだ。だから私は貴方の体という玩具を奪い取り、貴方の体という遊び相手を奪った。

母親みたいな心配の仕方ね。

よしておくね。貴方の両親はご健在だろ？

私はこの院で必ず私を知る方法を見つけ出す。そして貴方に貴方を返す。

そしたら私はまた好き勝手に生きられるのね？

そうなる。でもその時は今度は私が貴方に眠り、貴方が私にするように時々貴方を操るわ。その為の研究もちゃんとやっているのよ。もう絶対に貴方を傷つかせない。

最悪ね。

「先生？」

時が動き出す。

普段は誰もいないここに他の人間が現れた。

「シタニア君か」

ここに生徒が来るのは珍しい。ここにはあまり歓迎される存在ではないからである。

「窓から先生がここへ向かっているのが見えたので追いかけて来ちゃいました」

てへつと可愛らしく自らの頭を小突く。外見優れる彼女がやると中々似合う行為である。

「ここに来るのは危険だと教わりませんでしたか？」

「それは先生だつて同じですよね？」

にこやかに、しかし内に何か潜めたような表情で彼女は言った。

「それに先生がいれば安心だと思つたので」

「それは私に対する嫌味ですか？」

少なくともこの院の生徒ならば私がしようもない魔法しか扱えないことは知つているはずである。それでよく私を馬鹿にしたような小声が聞こえてくるが、私はそのような物に構っている暇はない。

「違いますっ！ 気分を悪くさせてしまったなら謝ります」

「……構いませんよ。慣れていきます」

そんな物は私の研究の弊害にはならない。よつて流すに限る。

「先生は魔法が苦手なのかも知れませんが、先生にしかできない術系があると聞きました」

くだらない。私の術系はそのような事に使う物ではない。人間の能力を尖らすことを目的としている。それは組み合つた歯車を組み替え直してより円滑に、より素直に回すように。

「貴方には理解できないでしょうけど私は私しか守れませんよ。それはそういう物なのです。それに今はまだ研究中ですので大したことはできません」

「そうだったのですか」

『嗚呼、驚いた』と言わんばかりの大げさなジェスチャーをしてみせる。彼女はこのような女の武器とも言える仕草を頻発する人間のようにである。

「それにしても……」

彼女は目の前に立つ大きな樹木を見上げて大きな声を上げた。

「大きな木ですね。これがこの世少ない神の木という物ですか」

「ええそうです。これ程までに強い力を持つ木は更に数える指の数を減らさなくてはなりません。それほどまでにこの木は特別で、偉大で、危険なんです」

「危険、ですか？」

「ええ。だからこそここに院は建っているのです」

世界に幾つかある魔法院は必ず神の木の下に存在する。それなのに生徒の多くはこの木の本当の意味を知らずにこの魔法院に集う。その危険性すら理解しようとせずに。

「この木を見て貴方は何を思いますか？」

私の問いに彼女は再び木を見上げて全ての息を肺から出すように深呼吸すると、木の中に何かを見てそれを私に説明するように答えた。

「神を……感じます」

ほらこれだ。この生徒は大方同じ事を言うだろう。だがそれが当たり前なのかも知れない。魔法という物を知ると必ず神と言う存在まで感じているような錯覚を覚えるという。

「それは正解でもあり間違いでもありません」

「と言うと？」

「神はこの木自身なのですよ」

えっと彼女は驚くように後ずさる。まあ当然だ。目の前にある物が神だと言われたら普通は同じような反応をするだろう。

「宗教とは大きく離れてしまった神。そのうちの一つがこの木なのです」

「なら私達は先程から神様の目の前でお話ししていたのですか？」

「いえ、それも違いますね」

「はあ……」

私の言葉が通じないために彼女は首を傾げる。

「神はここにいて、だがしかし、ここにいないのですよ」

「は、はあ」

シタニアは訳が分からず唖然とした顔をしたままである。意地悪い性格だと自覚しているが生徒のこういふ表情を見るのは中々に私の心を清々しくしてくれる物である。

「貴方が思う神と、私が思う神は違うのです」

「つまりそれぞれの思う神がこの木という形で存在しているということですか？」

「ほう。貴方はやはりこの院の生徒たる素質は持ち合わせているのですね。貴方の言うとおりこの木は様々な神の姿で存在しています。しかしそれは逆に言うと一人の神が存在し続けることは出来ないのです。ましてやここは世界中の思念が集まる坩堝るしほでもある」

「刻一刻神は変わると言うことですね」

「おみごと」

ふむ、割りと賢しいな。彼女の雰囲気で嘗めきっていたが結構鋭いところもあるようだ。

「だから神は居ないんです。その存在は確かにあるのですが姿は無いのです。何故なら皆が思う神は区々だから」

「ほへえ」

あまりに彼女の知識とかけ離れてしまったのだろう。彼女はただ感嘆の声を漏らすだけである。

「ですが今私達がしていることは危険なのです」

「それは何故ですか？」

「いくら思念が区々であっても、神の木を目の前にした者の中に『神に近い者』が混じっているとそれはとんでもないことになってしまふのです」

「『神に近い者』とは？」

「史上いくつかの発見例があつたのです。神という者に干渉できる者の存在が確認されています。その存在は驚異であるのですよ」

まかり間違つてその者が人を憎んでいたらと考えるとぞつとする。その干渉力が強大であつたら人は滅びるであろう。ましてやこのご時世だ。人が世界の癌であるという考えを持つ人間も多数いる。その思念がどれだけ人間を脅かしているかを理解していない人間ばかりなのだ。弱い干渉力の『近き者』でも、その多くの人間の思念を背負い込んでいたらやはり人は神に滅ぼされてしまふと考えられている。

「では何故ここを開放しているのですか？」

「例えここにそのような人物がここに立つても何も起こらないから

です」

「でも先程先生は……」

「そこからは貴方自身が調べて自分の道の糧としなさい。魔道に進む者ならば先人に聞いてばかりでは感心できませんよ」

尤も、私の方が彼女より歳低いのだから先人と言えないという揚げ足も取られるが。

「そうですね。自分で調べてみます」

彼女は恥じるように顔を赤らめながら笑った。素直な笑い顔に好感を持てる。

「やっぱり先生は凄いですね。色んな事を知っていらっしやるのでしょうね」

「確かに貴方以上に知っているでしょう。しかしそれでは私は満足できないのです。私はもつと知らなくてはならない」

「先生？」

いけない。いつもの癖が出てしまったようだ。

「いえ、何でもありません。それで、他に何か用はありますか？」

ここに来たのは私を追ってきたのだと彼女は言った。それだけの理由でここまで追ってくるであろうか？

「昨日のことを謝りたくて」

昨日……ああ、あのことが。

「いいのですよ。聞けば貴方には妹が居るみたいですね。貴方のあの行動は妹さんが好きなのだという証明なのです。確かに教師にすべき行為ではありませんが私はこのような人間なので特例でしょう。だからお気になさらずに」

「あ、有り難うございます」

彼女は再び屈託のない笑顔を見せる。何と微笑ましい人なのであるうか。彼女が笑う度に私の中に温かい何かが滲み出てきていることが自分でも感じられる。彼女の笑顔は人の心を穏やかにする力を持っているに違いない。

そう、何かが滲み出てくるのだ……

『その子』

熱い何かが

『私と同じ匂いがするの』

腕に激痛が走る。

「くっ、何のつもりですか」

私の腕に刺さるナイフを握っている手は間違いなくシタニアの手だった。

「あれ……私何してるんだろ？」

彼女は刺さっているナイフを見つめ、自分がしたことに疑問を抱いているようにその手を見つめる。

それは急に訪れた。

彼女の笑顔が急に歪み、その手に隠していた何かを私に向けたのだ。それが鋭利なナイフだと気付いた時には私の腕に深く差し込まれていた。何の躊躇もなく彼女は私を刺した。

「あれ、おかしいな……私、何で先生刺してるんだろ？ 先生分かります？」

巫山戯る。分かるわけ無いだろ。

『あらそう？ 貴方ならきつと分かるはずよ？』

「あー思い出した。私先生のことが好きだったんですよ」

「……………」

いけない。体軀はあちらの方が大きい。それに私はこの体を手早く動かせないのだ。背後に大木を迎えている私はあまりに不利だ。

「でもこの前先生に覚えて貰ってないことを知って……………それで……………」

「そのようなことで殺されかけるといいうのも不本意すぎますね」

「だって……………あの子もこうしたら言うこと聞いたから……………」

『その子、私と同じよ』

「あの子？」

彼女はナイフにべつとりと付いた私の血を眺めて恍惚とする。その顔はとづくに理性を失っていることを知らせるには十分すぎる情報であった。眼が逝かれている。

「そう。私の可愛い妹。シスベラって言ってね、すっごく可愛いんですよ」

その見開いた眼は瞼で覆われる頻度が少ないために血走り始めていて、それが彼女の顔の狂相っぷりをさらに誇張させていた。

「あれはいつだったかしら。あの子が私を拒んだからつい頭に血が上って手に持った果物ナイフをあの子に刺したんですよ。そしてあの子、泣いて私に許しを請い始めたの。その時私知っちゃったんですよ」

『人を傷めるのが大好物なのよ』

「人を従わすには暴力が一番だって」

その目に映るのは私の体のみ。

「聞いて安心しましたよ。先生は身を守る手段が少ないって」

「うち、あの問いはその事を確かめるためだったのか。」



「私、これでも優等生なんですよ？ だから殺傷能力を持つ魔法も少しばかり学習していたりするんです」

「ますます分が悪い。私の術はまだ完成していないので頼りにならないし、どうすべきか。」

「でもね、先生。私はコレが一番好きなの」

「ナイフを逆手に持ち変える。それはよく殺しに慣れた者が構える方法だった。興味本位で覗いた護身術の本で見たことがある。」

『私に任せてくれないかしら』

「貴方は黙っていて」

「先生？ 誰と話しているんですか？ 私を無視しないでくださいよ」

「一歩一歩ナイフをちらつかせながら近づいてくる狂気。私は一体どうすべきなのだ。」

『貴方はここで死ぬわけにはいけないのでしよう』

「その通りだ。しかし、だからといって……。」

『あの子の考えは私にはわかるのよ』

「……分かった。一時的に私は退く。後は頼むぞ。」

『任せて。必ず……』

「先生？」

「必ずこいつを殺してみせるわ」

「……あはは。先生ったら何言ってるんですか」

「既に残り数歩と言うところに来てシタニアは立ち止まった。」

その顔は自信に満ちていた。

「先生が私に勝てるんですか？」

シタニアは小さく何かを呟いた。

「でも何だか不吉なので一応保険張つときますね」

するとナイフは赤く光り始めた。

『あれは何？』

（恐らく単に熱を与えただけかと。ただし実際に熱を刃に与えているのではなく、熱の殻を刃の周りに形成していると考えた方が近いように見えます）

『そう。貴方の知識は頼りになるわね』

（いえ、こういう事態では知識を持つていたとしても犬死にしてしまうことの方が多いでしょうからあまり誇れませぬ）

更に赤くなつたナイフを構えるシタニア。その目は殺意に満ちている。

「先生私ね、昔から小さい女の子が大好きだったの。だからね、先生を見たとき体中を電気が巡つたんですよ？」

「あらそう。私も貴方と同じで小さな子を傷つけるのが大好きなのよ。でもねお前はそう簡単に私を殺せないわ」

「え……先生？」

急に変わった口調に驚いたのだろう。今、体を支配しているのは彼女であり、私ではない。だから言葉を発することが出来るのは彼女だけである。

「ほらどうしたの？ 私を殺すんでしょ？」

また挑発か。一体彼女は何を考えているのだろうか。マタドールでもお手本にするつもりかね？

「ふふ。赤い布ならぬ血染めの袖で遊んでみましようか？」

「……へえ、先生結構余裕ですね」

追いつめたはずの脆そうな子供が恐怖に怯えていないことで怒りがこみ上げてきたのだろう、シタニアの眉間に青筋が立ち始めた。もう後戻りは出来ない。この世界、殺し殺され等ざらにあるのだ。

「じゃあね先生。先生は妹と違って私に服従しそうにないからいら  
ないわ」

何と自分勝手な。これで優等生だといふのだから聞いて呆れる。

「あら違うわよ？ 貴方も十分自分勝手なのだからお互い様でしょ  
？」

「精々痛がつてくださいね？ じゃないと私、今夜の楽しみが無く  
なってしまうますもの」

「っへ、いつちよまえに発情してんじゃないよ。あんたごときに私  
が殺せるなんて勘違いしないでよね」

シタニアはゆっくりと前に体を傾け、その頭が私と同じ高さにな  
ると同時に襲いかかってきた。しかしそれはあくまで人の速度、ま  
してや少女のそれだ。『私』はそれを難なく横に避けた。

「人間の急所の中でさ、素手で簡単に仕留めることが出来るのは何  
所だと思う？」

「……さあ、興味ありませんね。私が興味あるのは先生がどんな叫  
び声を上げてくださるかだけですもの」

上気した頬を手で恥ずかしそうに隠す。もはや壊れている……殺  
傷行為がそれほど楽しみか。

「そう。知っておくといいわよ。私のような小さな体でも出来るこ  
とがあるの」

『私』はシタニアがナイフを構えている左手目がけて右手を一直  
線に伸ばした。刃物を持つ手を何の躊躇いもなく素手で狙う。

「そんなの避けられるに決まってるじゃないですか」

そう言っつてシタニアは左手を退いた。退いてしまったのだ……。  
「バーーーーーカ」

『私』は伸ばした右手を引く力を利用して腰を大きく捻り、左手  
を勢いよくシタニアの背中に伸ばし、服を思いつきり引つ張った。  
体重の全てを後ろに預け、全ての力で彼女を引つ張ったのだ。

「なん！」

既に重心が背中側に移っていたシタニアの姿勢ではそれに耐える

ことは出来なかった。体を強く地面に叩き付けられてうめき声を上げた。

「誰もが思いつくところだよ。でもね、普通の人間は躊躇うのさ」  
倒れたシタニアの左手を全体重かけて踏みつける。ゴキリと小気味よい音が静かな世界に響き渡った。

「つつつつ」

シタニアは声にならない声を上げる。ナイフを握ったまま踏みつけられたために関節を全て砕いてしまったようだ。

「でもね、私は躊躇わないの。貴方と同じで人を痛めつけるのが大好きな人間なのよ」

痛みで左手を抱くようにしたまま転がっていったシタニアを、獣が地を這うように追いかけて馬乗りとなる。

「綺麗な血を流して頂戴ね」

そして諸手を大きく振りかぶり、中指だけを尖らせるように拳を造り、その二つの凶器をシタニアの両目に叩き下ろした。

「ギャアアアア」

遠くの森で鳥たちが騒ぎだした。それほど彼女の叫び声は大きく、それほど彼女の負った傷は致命的だった。

致命的？ そう、致命的だった。

『止めなさい！』

「ふふ、貴方は黙ってなさいな」

『もういいでしょ。もう戻りなさいよ！』

「嫌よ。折角こんなチャンスが巡ってきたのだもの。最後までやらせて貰うわ」

最後まで……最後までと『私』は言った。

『私』はシタニアが『私』から転がり逃げる際に手放してしまったナイフを拾った。既に魔法は消え失せていた。しかし、

いけない……。

「残念なことに血で涙かどうか分からなくなっちゃっているけどまあいいわ」

ナイフを振り上げシタニアの太ももに勢いよく下ろした。トスツと小さな音がした。

「っはあ」

シタニアは血涙流れる顔をしかめて泣き叫ぶ。既に痛いであろう足を手で庇おうとする反射すら見られない。

「貴方なら分かってくれるでしょう？　小さな女の子が流す血つてすつごく扇情的なのよね」

シタニアのももに突き刺さっているナイフを上下左右に揺すり抉り、噴き出した血を指で掬って嘗め取った。

「最後までやらなきゃ勿体ないわ」

『最後つて貴方……』

「安心して。バラバラにするのは趣味じゃないのよ」

大きく草が動く。『私』の口から出たバラバラという言葉にシタニアは体を跳ねらせたのだ。

「あら？　貴方削られる方が好みだったりするの？」

シタニアは見えないであろう潰れた目をこちらに向けながら、勢いよく顔を左右に振った。当然だ、そんなもの喜んで受ける人間は居ない。

「そう、勿体ないわね。痛みを味わうという高尚な趣味を理解できないなんて」

地面に何か垂れた。それは恍惚とした笑みを浮かべる『私』の口から漏れた涎であった。

「さ、続けましょう？」

それからシタニアの反応が無くなるまで『私』はナイフを振り下

ろし続けた。その度に響き渡る悲痛な声は誰にも聞きつけられることはなかった。そう、それは元々シタニアが求めていたことだった。まさか自分が逆に殺されるとは思っていなかっただろう。

『酷すぎる……』

転がる死体には数えきれないほどの穴が空いていた。刺し傷なんて物じゃない。『私』がナイフを刺す度に抉ったために大きな穴となっていたのだ。そこから零れ出る血が地面を塗りし、足下は泥のようになっていた。

「何て……美しいのだろう……」

げに恐ろしくは『私』の感覚であろう。このような光景を見て感嘆のため息を流すとは……。

「あら、それは違うわよ？」

「貴方は私を護りたかったのではなく、羨ましかったのだから」

『そんな、そんなわけない……』

「違わないのよ。私は知っているのよ？ 貴方が考えていること全部」

『嘘だ……』

「貴方は自分のことが分かっていないだけなのよ。貴方は私のことが分からなくても私は貴方のことがわかる」

『……』

「思い出しなさい。よく貴方が何気なく考えていることを。そして直ぐに忘れてしまうことを」

いえ違うわね、と彼女は続けた。

「貴方は必死に忘れようとしていたのよ」

その日、院から学生一人が消えた。  
何、この世界ではよくあることだ。騒がれることでもない。

きっと、きっとそう……。

きっとその学生は魔道の犠牲者になってしまった敗者なのだ。  
皆がそう思い、そしてその事を直ぐに忘れていった。  
誰も見ていない。神の木の近くに何かを埋めようとしている子供の姿など。

これ程までに生きるのが辛いなどと考えたことがあっただろうか。  
全てが辛く、全てが憎い。

(私は自分を知らなかったのだ)

今すぐにもこの首を掻っ切るのも良いが、私の頭はもっと別の  
ことを望んでいる。

(私は自分に失望した)

全て消えてしまえばいい。その消滅に私が巻き込まれるだけで良  
い。自分一人いなくなるのではなく、世界が欠ければいい。

(もう、何も信じられない)

階段に座る私の目の前で誰かが立ち止まる気配がした。  
「君は何かを背負い込んだようだね」

顔を上げるとそこには長く髭を伸ばした白髪の老人が立っていた。長く毛深いまゆ毛の奥には優しげな目がどっしりと居座っていた。

「院長……」

「全てを話す勇気があるなら、私も君の力になろう」

生ける魔法使いで最も偉大な者の一人に数えられる院長は優しく微笑んだ。その瞳は私の中を見透かすように、しかし凍らせてしまった私の中身を溶かすような不思議な力を持っていた。

「私は！」

言って良いのか？ この人物に話してしまっているのか？

「私は……」

いや、もう私一人ではどうしようもないことなのだ。今まで信じていた自分のあり方を否定されてしまったのだから。もう、何もかも放棄してみたい衝動に駆られているのだ。そうすれば楽になるなどと、決して有り得ない未来を想像して。

「学生を殺してしまいました」

それは私にとって、私達二人にとって大きな意味をなす出会いであった。

そして私は、

そして『私』は、

別々の器に分かれることにしたのです。



必死に上半身を足に近づけようと呻いている友に声をかける。あれだ、その必死な顔を見ているとついイジワルしてみたくなるものだろ？ それがいつもは強気で意地っ張りで実は負けず嫌いな可愛い女子だと特にさ。

「相変わらず体固いなお前」

そう言いつつ体を床に押し付けてやる。あくまでサポートだ。うむ。

「っ痛！ 痛いから止めれ！」

ウチの体重の半分もかけていないのに何と軟弱な。これじゃ先が思いやられますな。

「何ぶつぶつ呟いてんのよ！ さっさと退きなさいよ。重いだよ」

「失礼な。これでも結構痩せてる方よ」

勿論そんなこと今の鏡の耳に届くわけもなくウチの足をバンバンと叩くので、しょうがなく退いてやることにした。背中が重みが消えるとバネのように上半身を跳ね起こし、勢い余って床と背中がくっついた。

「あゝも〜最悪よ。何でこんな所まで来てこんな事しなくちゃいけないのよ」

仰向けのままに鏡は周りの人間が分からないように日本語で不平を漏らす。

「あら、あの先生見たら分かるでしょ？」

そう言っつてウチは校舎の一教室にいるよぼよぼな教師を指さしてやった。あの人はまだそんなに歳食っていないのに研究に精を注ぎすぎているため体の方が音を上げている、典型的な魔法使いの姿と

して良い例だ。

「……………いや、確かにある程度は体力も必要よ。でもわざわざ体育の時間なんて入れなくても良いじゃない」

「そうか？　ウチは結構嬉しいが」

鏡はウチの顔を暫し見つめると、急に蔑むような含み笑いを見せた。見せやがった！　どうせ『あんたは体を動かす方が好きなタイプだものね。つぷ』とか考えているんだろ。いや、事実先週似たような言葉がこいつの口から飛び出たからな、大方間違いではないだろう。

「なんだ、また背中押して欲しいのか？」

「あら、私そんなこと考えてないわよ」

鏡はふざけてコロコロと転がってウチから逃げていった。

「あ……………」

そして辿り着くは仁王立ちしている教師の足下とな。全く、何て罪作りな女だい、ウチという人間は。

その後授業中に遊んでいたとして軽く説教され、見るからに落ち込んでいる鏡はウチの方に戻ってくるといきなり靴を踏んづけてきやがった。

「あんたの所為よ」

「はは、面目ない。お詫びに今日はお前が好きなあれ奢ってやるよ」  
鏡様があまりに憎しみに満ちた目をしなさるので、対鏡用最終兵器を繰り出させて貰う。

「……………まあそこまで反省したなら良いわ」

コウカハバツグンダ。むしろ何故か頭を撫でられるというお釣りを貰えたというこの威力！

「ならこれが終わったらさっさと着替えるわよ。良いわよね？」

「はいはい」

表情が一瞬で反転してうきうきな鏡さん。あの、鼻唄漏れてます

よ？

「ふふふふ〜ん」

何と言うことだ。あの運動が大の苦手な鏡が体育で鼻唄混じりにストレッチですよ！ これ程までにあの最終兵器は少女を無力化してしまう物なのか。恐ろしき物よ。

「もう、遅いわよ〜」

まだまだ頭のどっかがおかしな鏡さんは、手を振る等という普段のこいつを知っていると思わず目を逸らしたくなるような行為を大衆の面前でして見せた。いや、ウチ以外の人々は逆に珍しい物を見たとしてその光景に釘付けになるようだ。皆が皆、鏡を興味深げに見ていた。

しかし、更衣室の入り口で既に制服に着替え終えている鏡は周囲の目など気にせずはまだ着替えてないウチの手を取り、更衣室の中へと強引に引っ張った。

「ほら、ちゃっちゃと着替えなさいよ。何でこんなに遅いのよ」

そうは言いながらも満面の笑顔なメルヘン空気漂う少女、鏡さん。凄く気持ち悪いです。

「あら、今なんか聞こえたわよ」

「いや、何も言っていないよ。それに遅れたのはウチが今日後片付けの係だったから。失念していて授業終了直前に思い出したのだけど、お前ってば既に校舎寄りに立っていたから間に合わなかったの」

「いや、言い訳は良いからさっさ着替えなさいな」

「……………」

いや、今はただ従った方が良さそうだ。今の飢えた鏡に口で勝てそうにない。……普段から勝てたことは皆無だけど。

「ん？ 何？」

ふと、ウチと鏡の目ががつつりと合う。そりゃそうだ、何故か着替え中ずつと見られているのだから。

「いや、お前女の着替え見て楽しいか？」

流石にここまで至近距離だと、いくら同性でも恥ずかしいものだ。うぐん、楽しいと言うよりは興味深いかかな」

そう目を細めながら言う。その表情にウチの心臓はとくんと一拍跳ねた気がした。

「貴方の軀って綺麗ね」

「……絶交して欲しいのか？」

「そ、そう言う意味じゃないわよ！」

分かつているって。それに今のは照れ隠しだ、察しなさいな。

「そんなこと言われたの初めてかね。自分から見たらこんなの普通すぎて特徴のない体型だと思うのだけど」

「そう？ 私からしたら結構理想の体型よ。羨ましいわね」

「ふぐん。よく分からないね」

つと、着替え終わったのだからさっさと向かわなくては。と言うかこいつは急かせていた割にまだ机に全体重預けっぱなしじゃないか。

「ほら、早く行くんだろ」

「おっと、そうだったそうだった。あんたがゆっくりしてたから私までゆっくりしちゃったじゃない」

「どんな理屈だよ。」

「ほら、さっさと行くわよ」

今度は我先にと教室の扉まで走る。恋は盲目、食欲は猪突、ねこまっしぐら。

「はぁぁぁぁ 最高だわ〜」

鏡は自分の部屋に戻って早々机に買ってきたケーキを並べ始めた。

並べる事でまずは視覚的に楽しみたいのである。小綺麗な小さなケーキが六つもあるとなんだか輝いて見えるね。

「で、あんたはどれが欲しいの」

「お、くれるのか。てつきり独り占めする気だと思ってた」

「流石にそれはないわよ。ただし一つだけよ」

まあ今回はわびの意味もあるからそれはしょうがないか。むしろ一つ恵んでくれる方が奇跡かと。

「好きなどうぞ」

「迷うね。六つも選択肢があると一つ選ぶのに色々考えちゃう」

「そうね。でも一つよ」

にこやかに『一つ』という言葉強調する鏡、少し意地汚い中身が漏れ出ているようだ。

「それにしても随分奮発してくれたじゃない。ありがとね」

「そりゃね」

お前がショーケースの前で涎垂らす寸前まで屈んで選んでいるものだから……。

「え、私そんなだった？」

「ああ、あれは流石に他人様の目に晒すものじゃないと思って取り敢えずお前が好きそうな奴まとめて買ったのさ」

「うわ、恥ずかしい」

いや、今更恥ずかしがって意味無いぞ。その場で気付かにならん。

「まあ過ぎたことは良い。取り敢えずウチはこれを……」

そう言っただけで恐らくブッシュドノエルを小さく切り分けた後で更にクリームを載せた物へと手を伸ばすと、

「……………」

あからさまに機嫌を損ね、ぶすつとする鏡の視線にその手が射抜かれた。

「っと思ったがこっちが良いかも」

しょうがないと、今度はその横のモンブランのような物に手を伸

ばす。

「……………」

……一体どうしろと？

「ふ〜。ケーキだけでお腹いっぱいになると言うのも中々乙ね」

「そうね。ついでに貴方のお腹も『乙』の漢字みたいに膨らむこと  
でしょうね」

「今言っな！」

鏡はやや涙目になり横で一緒に寝ころんでいるウチの足を蹴った。  
気にしていたのだろうか？ 可愛いやつめ。

「あなたは良いわよね。痩せていて」

「そうか？ それにお前だってそんなに太ってないだろ」

「『そんなに』？」

嗚呼、横から凄い形相で睨まれているのが見なくても分かるやい  
……………。

「ちっとも、からっきし、これっぽっちも。貴方考え過ぎじゃない  
？」

「そうかな。あ、丁度いいから見てもよ」

そう言い、起きあがってすると服を脱ぎ始めた。おいおい、  
女同士だからっていきなりそれはないだろ。少しは了承得てから行  
動しような？

「って……………あれ？」

そして現れたのはどう見てもぽっこりと膨らみかけている小さな  
お腹だった。どう言葉で表現しようとも、どんなに言い繕ってもそ  
のお腹は膨らんでいる、間違いなく。

「まああれだけ食べればお腹の一つや二つ、膨らむわね」

「うっ」

鏡は自分の体の現状を知り、呻き始めた。気持ちは分からなくても  
無いが女二人の個室で、片や半裸のこの状況で泣かれるともし誰か

がこの部屋に訪れたら色々誤解を招いてしまうので止めて欲しい。

「あんたは良いわよね。痩せてるものね！」

「いや、単に食べた量の問題だろ」

「へえ、痩せている奴は余裕ね」

「こいつは何言ってるんだか。」

「はいはい。何だか分からんがウチが悪うございますよ」

「……………」

おっと、人生の選択肢を誤ったか？ 何故だか震え始める鏡さん。ウチ、貴方の怒りを買うようなこと言いましたっけ？

「脱げ……………」

「は？ 今こいつは何て口走ったんだ？」

「あんたも脱げ！」

「ちよつ、お前頭大丈夫か？」

「うるさい！ あたしだけ恥ずかしい思いするなんて悔しいじゃない！」

出た、いつもの『悔しい』発言だ。こいつはよく悔しいって言葉を使う人間である。それに今ウチのお腹を見たって膨らんでいるわけもなく、より一層鏡の頭に血が上るだけだろうに。こいつは根に持つからな、それだけは避けるべきだ。

「お前つてよく悔しがるけどな、それつて可愛くないぞ」

「……………うがああああああああああああ」

「待て待て……………おい、正気か？」

オーケー、分かった、了解だ。今のは間違いなくウチの口が滑った。そこは認めよう。だが今すべき事は何故か手をワキワキさせながら迫ってくる親友の事だ。

「何する気だよ」

「何って脱がすに決まってるじゃない。女同士だもの、恥ずかしくないでしょ？」

「この世には同性でも恥ずかしい事っていっぱいあるんだゾ！ 新しいこと学べて良かったな、友よ」

「さて、まずは上着からよね」

ああ、駄目だ。確実にこいつはウチの話なんて聞いてない。座りながら両手両足で後ろに逃げていたウチの背中に壁が迫ってきた。

ジ・エンドって言う奴？

「うりゃー！」

壁にぴったりと背中が張り付いているウチに鏡がのし掛かってきた。

「ほら、加々美ちゃん。脱ぎ脱ぎちまちようね」

何故か鏡の口から赤ちゃん言葉が出る。なんだか耳に気持ちいい甘い響きだった。

「……分かったよ」

鏡がウチの制服のボタンを外していくのを止めずにずっと見守ることにした。下手に逆らうと何されるか分からないからね。

「はい上手に脱げましたね。偉い偉い」

「その口調どうにかならないか？」

そうは建前として言うが実はもっと鏡のこの口調を聞いていたい自分がいたりする。不思議と心が落ち着く心地よい魔法だった。

「あら、もう言葉しゃべれるようになれまぢゆたか？ 加々美ちゃんはおかちこいんでぢゆね」

「……もう好きにして」

そしてウチのお腹を注視する。当たり前だがウチのお腹は出ていなかった。

「やっぱり」

「うん？」

鏡の口からため息が漏れ出す。

「あんたの体って綺麗ね。何でそんなに痩せてるの？」

「ま、一応毎日何かしら運動して体動かしてるからな」

運動という言葉に顔を思いつきりしかめる。そんなに嫌なのか。



そんな心構えだと一生痩せることは無さそうだ。

「ちよつと触って良い？」

「お好きにどうぞ」

そんな子供のような好奇心で満ち輝いている目をされてしまつては、断るに断れないよ。

ウチに言われたように本当に鏡は好き勝手にベタベタツンツンとウチの体を触りまくつた。

「うへ、こつてこんな風に筋肉付くのか。それにここも随分固いのね」

「腹筋すご……あんた腹筋の筋トレしてるの？」

「何よこれ。足の太さ私とほとんど変わらないのに筋肉が詰まってるのね。人体って不思議ね」と、まあ本当に好き放題に。

そして行き着くは……

「えつとここも触って良い？」

鏡の顔の目の前に位置するウチの胸である。

「お前にもあるだろ」

「いや、筋肉質な人の胸ってどんなかなって凄く興味があるンよ。そう言つとウチの返答を待たずにいきなりブラをずらし上げ、当たり前のように揉み始めやがった。おいおい、それはないだろ。

「何だ、期待はずれ。普通じゃない」

「当たり前でしょ。筋肉が詰まってるんでも思つたの？」

そつつまらなそうに呟きながらも、未だ胸を揉む手を止めないでいる。こらこらお嬢さん。

「いい加減にしような。いつまで人の胸触ってる気だ」

胸を揉まれ続けて何だか間違いが起きそうだったので、ウチは逃げようと壁を使って起きあがった。……のだが目の前にいた鏡のスカートに思いつきり足がひっかかり大きく前にずっこける事となつた。

そしてお約束の展開が待ち受けていた。先に言っておくがウチは

計ってこうなつたわけではなく、偶然こうなつただけ。そう、何かの間違いで。

「あのさ」

「何よ」

やはり鏡は不機嫌だった。当然か、思いっきり床に押しつぶしているからな。

「事故だ」

「分かつてるわよ。でも取り敢えず明日もヨロシク」

それは……きついね。流石に出費が大きすぎるわ。でも明らかに怒りに満ちた目で見上げてくるそのオーラに反論する気は削がれ、ただ頷くことしかできなかった。

「でもお前瘦せたかつたんでしょ？」

「……………」

無言でより一層眼力を強めた視線に下から射抜かれる。あちゃー、やっちまったなおい。

「ちよつと待って、今は流石に口が過ぎたから謝るわ。だからそのウチの腰に回した手で何かするのは止してくれないかい？」

「うらあああああああああああああああ！」

鏡は腰を持つ手を思いつき横に引つ張ってウチを投げ飛ばし、その勢いのまま今度はウチの上に乗り上げた。腰に鏡の重さと熱を感じる。そしてふわりと鼻に届く鏡の髪の毛の匂いがウチの心を支配した。

「あゝもゝ駄目だね。こうなつたらもつとあんたの体を弄くりまくつてやる！　つと……加々美？」

ふと気付くと鏡はウチの顔を至近距離で覗き込んでいた。女のウチですら惚れ惚れするような曲線美を描く鏡の目がウチの目の前にあった。そしてより一層髪の毛のシャンプーの匂いと、いつも鏡が愛用しているフレグランスの柑橘系の匂いが強く折り重なり、ウチの頭を朦朧とさせる。

「……ん？」

「良かった。てつきり頭でも打って、呆けたのかと心配したわよ」「  
ああ、それも当たらずも遠からずだな。実際今一時だけ意識が薄  
かった気がする。」

「お前が思いつきり床にたたきつけてくれたからな」

「あんたが私にしたことをやり返したただけなのだけれど？」

まあ、それもそうか。でも事故と故意ではかなり違うと思うぞ。

そう思っていると今度は鏡が無言でウチの顔を覗き込んでいた。ど  
うしたのだろう。

「鏡？」

「貴方って……結構綺麗な顔しているのね」

いやいや、えんが媚雅を具現化したような姿をお持ちな鏡さんには到底  
及びませんよ。

声をかけた理由は同じ日本人だからと言っただけじゃなく、本当は  
一目で懂れてしまった貴方に近づきたかったから。ウチは初めて貴  
方を見かけたときに貴方の側で貴方の笑う顔や泣く顔をずっと見て  
みたいと思っただわ。

最初はこの学校に来てそんなに勉強するつもりは無かった。しか  
し鏡が優等生だという事を知るとウチもその横にいたいがために少  
しだけ勉強するようになった。

ウチがこの学校が好きなのは鏡がいるからなんだ。長期休みだつて  
実家に帰る事無く寮にいるのは、家に帰り辛いという理由以上に鏡  
もここに残るからだつた。

気付けば自分の生活に全て鏡が関わっているんだ。

恥ずかしいから口には出せないけどね。

「お前にはかなわないよ。自分でも分かっているんだろ？ みんな

がお前のこと敵視している理由の一つにお前が凄く目立つ顔しているからと言つのがあることくらい」

「その言い方だと逆の方向に聞こえてしまつわね」  
普段と違う小悪魔の様な仕草で微笑む姿に再び心臓の鼓動が速まる。

「ねえ、加々美」

その降りかかってくる熱い息に鼻を焼き付かれる。その瞳の潤いの熱さに目を焼かれる。

「貴方、顔が真っ赤よ」

分かつてるわ。でもどうしようもないのよ。

「ね、私達女同士よね」

そうね。だからウチは簡単に貴方に近づくことが出来たわ。でもだからこそそれ以上近づけないと言つことに気付いたときは一人で部屋に籠もって泣いたわ。あれ程までに泣いたのは初めだった。それほどまでにウチの中で貴方のことが大きかったのね。

今ウチの頭を覗くことが出来るならきつと今までずっと見てきた『親友』の姿が映像として延々と流れているでしょうね。

「……………惜しいことにね」

……………言ってしまった。この状況で自分の本心を隠しきれないほどウチは大人じゃない。

もう、楽になりたい。貴方がウチを見てくれる度にウチは不安でたまらないの。

貴方の目に映るウチは可愛いのかな？

貴方はウチの何所を見ているの？

貴方の一番の仲良しはウチでいいのかな？

貴方はウチのことどう思っているの？

「そう……そう……」

苦しさから逃れたいがために放ったウチの言葉の意味を理解したのだろう。いや、前々から気付いていたのだろうか。ずっとウチの目から逸れないその堅い視線はウチにその事を教えているような気がする。

違うかも知れない。ただそうであることをウチが勝手に想像し、勝手にこじつけているだけに過ぎないかも知れないのだから。

「ならば、今から私がすることも女同士なら悪戯に過ぎないわよね  
そう言っただけをぎゅっと下ろした。

自分から『する』と言ったくせにさせるのか。そこがまたフェミニンで、ウチの心をかき乱す。

「鏡、もう戻れないよ」

「……………」

閉ざされた瞳に涙が浮かぶ。その涙はどういう意味なの？

「ウチね、貴方のこと……………」

「悪戯よ。悪戯なんだから言葉は必要ないじゃない」

鏡はウチの言葉を遮るように小さく叫んだ。言わせてくれない。

そもそも言っただけで良かったの？

「わかった……。ちょっとの間だけでいい、目をぎゅっと閉じていて。そうすればウチ等はウチ等のままでいられるから」

もういい、ウチの手が短い所為で高い嶺に優雅に座っている貴方を手に入れられないのなら刹那に感じるだけでいい。届かないのならウチの風が貴方の髪を躍らすだけでもいい。

それだけでも、ウチは嬉しい。

自分がどれほど小さな人間だったかを自覚しているウチは、

ただ立つだけで大きく眩しく強く気高く美しく在る貴方に憧れた  
ウチは、

貴方と一緒に時を過ごせるだけで今まで生きていた意味を見いだ  
せるわ。

親に見限られ、周りの者に疎まれ、壊れそうだった自分のちやち  
な心を、これ以上ぼろぼろにならないように、これ以上毒針で抉ら  
れないように護るために必死で逃げ込んだここで、ウチはウチの生  
きる理由を見つけることが出来た。

貴方はウチを受け入れてくれた。

貴方は誰もが無視するウチを見つめてくれた。

貴方はウチの声に応えてくれた。

どんなにそれが嬉しかったことか。

「鏡、ずっと友達でいさせて」

それだけでもウチは生きられるから、生きる気力がわき上がるか

ら。

貴方の横にいたいから。

「貴方が私を嫌いにならない内はずっと友達でいてあげるから安心しなさいな」

有り難う。好きよ、鏡。

そしてウチはぎゅっと目を閉じたままの鏡の首に手を回し、そのまま軽く、お互いが簡単に離れられるように柔らかく、引いた。

鏡の唇はとても甘かった

第四話 イキトシイケルモノ / (終)「好きと嫌い」と(1)(前書き)

今回も章の終話ですが分割です。長すぎると携帯からの方には読みづらいと思われますので。



第四話 イキトシイケルモノ / (終) 「好きと嫌い」と (1)

好きと嫌い

白髪に黒縁眼鏡が映える老師が、見ているだけではらはらさせる足取りで生徒の間を往来している。いや、はらはらしているのは少数の生徒だけかも知れない。ほとんどの生徒は机に伏せているか他の授業の予習復習をやっているようである。老師もそれを気にしていないようで、ただ朗々とその左手に持った分厚い本を読み聞かせていた。

あれだけ重い本を軽々と持っているという事は、それだけあの腕で繰り出す拳骨はさぞや痛いでしょうね。

そんなどうでも良い事を鏡かがみは頭に浮かばせながらふと教室を見回すと、せかせかと老師の口から漏れた言葉一字一句逃すまいと自身の教本に書き写している女生徒に目が止まった。

いや、止まったのではなく初めから私の目はあいつを捜していたのかも知れない。

しきりに教本を黒く染め上げている加々美かがみは他の者と比べると何処か異質だった。何というのだろう、オーラとでも呼ぶべきなのかな？ とにかく彼女が纏っている雰囲気は明らかに目立っていた。

あいつ、急に真面目になったわね。

そうなのである。あの日から加々美は一生懸命に勉学に励むよう

になった。何か目標が出来たかのように。

鏡がじつと加々美を見ていると、不意に加々美が顔を上げ鏡の方に振り返った。その顔はどことなく自信に溢れ、見ているこっちが恥ずかしくなるような生に満ち満ちた表情であった。

鏡は加々美と目が合うと耳まで赤く火照らせ慌てて顔を教本で隠した。

何よ！ どうしたのよ私は！

加々美の顔を見る度にどきまぎすると言つ不審な鏡は、自分の異変に気付いていなかったのである。

「ねえ」

「な、何かしら」

授業が終わって皆が思い思いの行動をし始めた頃に加々美が鏡の机にやってくると、やはり不審者モードな鏡は冷たい手を服の中に入れられた様な反応をした。

「ウチに何か用ある？ さっきもこっちずっと見てたけど」

「べ、別にないわよ」

完全にはれていたようである。その事を知った鏡は、今度は首まですで紅潮させた。その様は何か重い病気でも患っているのではないかと思うほどに赤かった。

「そう？」

「あ、うん」

既にまともな思考回路を保てていない鏡は、適当に返答しつつまるで乙女のように（いや、実際乙女なのだろうが）可愛い仕草で場を流そうとしている。

その仕草をここで語るわけにはいかない。何故ならあまりに……その……不気味なのだ。こうくねくねと、あ、いや、何でもない。

その、普通の子がやるとぶりっこ可愛くなれる仕草で何故か不気味一番な鏡を見ても、加々美は何とも無しに鏡の姿をにこやかに見つめていた。その顔に浮かぶ笑みは今加々美が何を考えているか誰もが推し量れる仕様となっていたりする。

「あ、そうそう。今度の日曜で良いよね？」

加々美は一度先程まで自分が座っていた席に戻ると荷物をまとめ今度は空いている鏡の隣の席に座り込み、鏡の顔を覗き込んで尋ねた。だが、その座る際の空気に混じる加々美の匂いに鼻を鳴らしている鏡には加々美の言葉が届かなかったようである。今度は実に見事な間抜け面をしている鏡の顔を軽く両手で挟みこちらに向けさせた。

「聞いている？ デートのことなんだけど」

「で、デート？」

急に現実世界に戻されたショックか、はたまた加々美の手に顔を挟まれたショックか、鏡は大声を上げてしまい皆の注目を集めることになった。

「馬鹿、なんつー大声上げてるのよ」

「ご、ごめんなさい」

周りの興味が薄れるまで苦笑いで固まっていた二人は、引きつった表情筋を揉みながら話を続けた。

「デートは日曜で良いよね？」

「い、いいわよ」

あの日から二人の関係は大きく変わった。前は友達関係、大きく言っても親友同士だったが、今ではその二人は「モーシヨンかけて

る人、かけられてる人」の構図である。あの日から吹っ切れたのだらう、加々美はひたすら鏡に自分をアピールし続けている。「好き」と直接的には言わないが何かと鏡に近づき、そして計画的に少しだけ距離を開けて焦らすという、恋する乙女がやるような恋愛戦術をずっと続けていた。そのおかげで鏡の心はぐるぐるのぐにやぐにやになっていたりする。そして今度はデートに誘ったのである。

その必要性がないことを加々美は未だ気付いていない事が可哀想でもあるが。

「ね、何所行きたい？」

頭を軽く傾げて流し目気味に顔を覗き込む。もちろんやや上目遣いでだ。その艶っぽい視線の威力は鏡の震える唇を見れば一目瞭然である。

「そう、そうねえ、貴方の好きにして」

「ふふ、良いの？　ウチの好きなところで良いなら鏡の部屋になるのだけど」

「いや、ちよっ」

未だ数日しか経っていないのに加々美は随分と女の武器の使い方を勉強したようである。鏡は既に鼻息など気にしていられる状態ではなく、加々美が鏡の頬を突ついて正気に戻らせなかったら他の生徒がそれに気付いてしまっていたらどうか。何とも危険である。

「嫌？　なら鏡が決めて」

そう言っつて頬杖をついてにつこりと切り札の満面の笑みを喰らわせた。

その攻撃に鏡は心の中で悶絶したが、何とか応えようと頑張りを見せた。

「面白い物で良いんじゃない？　それに私、丁度欲しい物があるのよ」  
「わかった。ならそれでいこうか」

丁度次の授業の教師が入ってきたところで話が終わった。加々美

は満足そうに次の授業の教本を取り出しながら一方の手でペンをくるくると回していた。

「晴れて良かったね」

加々美は雲一つ無い快晴の空に手を伸ばして空気をいっぱい吸い込んだ。

ここは学園とはかなり離れたショッピングモールである。思いつきり羽を伸ばせるようにと知り合いに会いにくいここに来た次第である。

「そうね」

加々美も鏡もうつすらとメイクをしていて、服も普段の寮での私服とは全く違っておしゃれさんであった。普段の部屋着は地味も地味、決して異性に見せられるような服装ではないが、部屋に女二人きりなので全くもって当人達は気にしていなかった。

そして何より違うのは、加々美の首に掛かっているアクセサリーであろうか。学園では生徒は絶対に胸元に金属を触れさせ続けることは許されていない。学園の中に住み着く妖精がその金属目がけて悪戯してくるからである。低級の第一である妖精は金属が嫌いで、よくそれを身に着けている人間に攻撃して騒ぎを起こしたため学園内で力弱き学生達は金属類を身に着けるのを良しとされない。第一達にとって金属とは人間の象徴であり、敵の印だからだ。

しかしここには妖精はいないので気にせず自由に自分を飾ることが出来るのである。それは自分を飾ることに興味を覚え始める彼女等の年齢にとって非常に嬉しいことなのだろう。加々美は三日月をかたどったネックレスをチャラチャラと弄くっついて楽しそうだ。

「で、何か買うものあるんでしょ？ 何を買うつもり？」

「うーん、まずは時間も時間だしお昼ご飯にしましょう」

鏡の提案に加々美もこくりと頷き、近くにあったごちんまりとし

たお店に入った。

あくまで学生、そんなにお金をお昼ご飯に割ける程持ち合わせていないため普通の学園内にあるカフェテリアと同じくらいの出費で済む物を選んだ結果、ちよつとしたサンドイッチかホットサンドの二択となった。

「はは、やはり普段から貧乏性だところという時でも値段を気にしちやうもんね」

しかし加々美はそうは言いながらも美味しそうにホットサンドを口に運ぶ。口の隅に付いたチーズがその言葉を更に飾っていた。鏡もさほど気にした様子もなく日差しが差し込んでいる窓の外を細目で眺めながらサンドイッチを食べていた。

鏡のその様子は加々美の恋する乙女な目には何とも優美に映っていた。それは賛美歌流れる小さな教会のステンドグラスを眺めている様である。小さき美しさの中に神々しさがあつた。

鏡のその挙動全てに熱をあげる程に加々美は変わっていた。あの日を切っ掛けに自分の本心が分かつたのである。まだあの時は友達という関係を望まれていたが、自分の魅力で鏡を振り向かせあわよくばそれ以上の関係になろうと躍起になっていた。もともと憧れの対象でもあつた親友だ、腕を伸ばす事が許されるなら彼女は必至で掴もうとするだろう。あの後でも鏡は加々美との間に距離を置こうとしなかつたのだから。

「それ美味しい？」

何故かこちらに視線をくれない鏡に不満を持った加々美は無理にでもこちらを向かせようとする。しかし鏡はただ頷くだけで、窓の外に向かっている目は一向に鏡を見ようとしなない。

「ねえ鏡、ウチ寂しい」

「な、何おかしな事言ってるのよ！」

「おや、今の言葉におかしさなんて無いはずだよ。貴方が変なこと

考えてなければね」

「あ、いや、ちよつと待って……嘘、恥ずかし」

自分の言葉で墓穴を掘った鏡は、そのあまりの恥ずかしさにトイレへと逃げていった。

「くくつ、可愛い奴め」

にやける加々美はその後ろ姿を見ながらランチサービスで付いてきたコーンスープの残りをゆっくりと飲み干した。

店から出ると鏡は「付いてきて」と、加々美をとある店へと連れて行った。

「ここは？」

尋ねたくもなるものである。何故なら目の前に建っているお店らしき建物には看板もなく、あるのはドアの横に開店中と書かれた小さなプレートのみである。窓にはカーテンが被さっており、中を覗くことは出来ない。それが更に怪しさを助長していた。

「入れば分かるわ」

鏡はそう言つて店の扉を開けずかずかと入っていった。

「入る前に聞きたいと言うことくらいわからんかね」

加々美も大人しくそれに従った。

店の中は思いの外明るく、澄んだ空気で満ちていた。何か薬草の類を焚いているのだろう、その澄み様は紛い物の感じがした。

「驚いた。こんな物売ってるのか」

加々美が手に取ったそれは魔法使いなら一度は使ったことがあるう、小さな魔杖であった。

「そ。ここは魔法具を扱ってるお店よ。こついうところ初めて？」

鏡の問いに加々美は首の上下運動だけで答える。目の前に広がる興味を引き続ける品々に視線を巡らすのに精一杯になっていたのである。

「あまり弄くつちゃ駄目よ」

その子供のような姿を面白く思いながら鏡は奥へと進んでいった。

「あ、ちよつと待つてよ」

慌てて加々美もそれに続く。

店の奥には恐らく店主であろう女性がいた。

「あら、久しぶりね」

……撤回、声が太い男性がいた。所謂オカマとでも言うのだろうか、そう言う類の人のようだ。

「こんにちは。ウイシユルもお変わりなく」

鏡はスカートの端を軽く持ち上げ丁寧なお辞儀をして見せた。その割には呼び捨てである。相手方も嫌な顔一つせず対応していたのは鏡が常連らしいからか。

「その後ろのカワイコちゃんはお友達？」

「あ、初めまして。ウチは……」

だが加々美が自分の名を言おうとした瞬間に鏡の手が彼女の口を塞いだ。

「ここでは自分の名前を言う必要はないわ」

「そうよ！ 誰が聞いているか分からないのだから迂闊に名前なんて言っちゃダメ」

「良く言いますよ。女主が誘導したような物でしょうに」

お互いに腹を探り合うように引きつった笑顔をぶつけ合う二人に挟まれて、加々美は何も言い出せなくなってしまうた。

「ふう。相変わらず貴方は強い女ね」

「あら、貴方ほど強い『女』じゃありませんよ」

「ふふふふふふふふ。今変な強調したわね」



「気のせいですわ」

見てるだけで胃の壁に穴が空きそうな光景に加々美は後ろ足を踏みそうになるが、その手を鏡ががちりと掴んだので動けなくなつた。

「それはそうと、例の物は手に入りましたか？」

やっとこさ話題転換である。流石というべきなのだろうか、商売の話になるとウイシエル女中は当然のように露骨な営業スマイルに顔を作り替えた。

「勿論よ。貴方のために正規ルートで手に入れた純正品なんだからね。感謝しなさいよ」

「分かつてますよ。いつも有り難うございます」

そう言つて鏡はウイシエル女中から何か小さな物品を手渡された。「それは？」

鏡が受け取つた物が見慣れない物だったのでつい加々美は尋ねた。「悪いけど店内で買った商品について語るのは止してね」

「分かつていますよ」

ウイシエル女中は周りをちらちらと様子見しながら小さな声で言つた。よくわからないがそう言う決まりらしい。

「他には何か欲しい物ないかしらん？」

そう言つて体をくねらせる店主。何とも気持ち悪いものである。

しかし鏡は見慣れているのであろう、気にもせず「新作」と書かれた棚へ歩み寄つた。

「ウイシエル？ これ、なんですか？」

鏡はわっか状の物が入つた透明なケースを手を取つた。中に入っている代物は見る限りただの装飾も何もされていない指輪である。

「その魔法具はお遊びよ。ただ単に持ち主の指のサイズに勝手に合うようになっている商品よ」

「ふん」

玩具同然の魔法具を棚に戻すと、今度は人の頭蓋骨を象つた様な物を指さす。

「これは？」

「火が無くても光る髑髏よ。お部屋のインテリアにどうぞ！」

「悪趣味すぎるわ」

さらに横の木箱を指さす。

「これは？」

「ああ、蓋を開ければ分かるわ」

店主の許可が下りたので鏡は興味深げに蓋を開けた。

「あら、これは珍しい」

それは以前授業で習ったことのある珍しい茸であった。欠片を煎じて飲むと一瞬で天国へ連れて行ってくれる茸である。その威力はベニテングタケの数億倍とも言われている。よく暗殺に使われたこととで有名だったりする。

「止めときなさいな。貴方達のような学生では少々無理しないと買えない値段よ」

ウイシエル女主の言うとおり、横に張られた値札シールには鏡や加々美の生活費一年分を軽く超える数字が書かれていた。

「高い……」

「ウイシエル、こういう物は鍵の付いた棚にでもしまっと思ってくださいよ。じゃないと一瞬でも欲しいと思った人間に辛い現実を思い知らせるだけです」

それが良いんじゃない、と店主は超え高々に笑った。悪趣味な人間である。

鏡と店主のやりとりを寂しそうに見ていた加々美がふと何かの気配を感じ、辺りを見回すと不思議な光景が目に入った。

「店主さん、あの黒い扉は？」

その方向を指さして加々美は尋ねる。

「ああ、あそこは近づかないでね。あそこはとんでもない貴重品ばかり入ってるから」

つまり金持ちの人しか入れないビップルームと言うことか。しかし加々美はそんなことよりも気になることがあった。

「そこに……誰がいるんですけど」

そうなのである。二人には見えていないだろうが、いや、実際には加々美にも見えていない「誰か」がそこにいた。

「私には誰かいるようには見えないけど？」

「私にもねん」

二人の目には黒い扉しか映っていないかった。だがしかし、

「いえ、確実に誰かいます。ウチ、生まれつき念じれば人の心臓を透視できる目を持っているんですけど」

加々美は普段は黒いが、今はうつすらと赤みを帯びている自分の左目を指さした。

「その黒い扉の前に心臓だけが浮いている光景がウチの左目だけに映っているんです」

つまり右目には二人と同じ光景が映り、左目には心臓が浮いている光景が見えていると言うことである。実際には右目が心臓を映像としてでなく存在として感知し、左目が映像として確認するため透視しているのだが加々美本人は自分の事ながら分かっていなかった。人間は意識しなくても目の中に入ってくる情報は問答無用で脳へと通すため、偶然宙に浮かぶ心臓が右目によって感知されたのだ。左右の目をパチクリと入れ替わりに閉じてみせる加々美の様子から女主は真実味を薄らと掴み始める。

「ちよっと待っててね」

状況が理解できた女主がそう言って箸を握りしめカウンターから出るや否や、その心臓の持ち主は店の外へと逃げていった。大きな音と共に商品がいくつか棚から転げ落ちたので、二人にも姿の見えない誰かがいたのが分かった。

「うち、こそ泥ね。守衛は何をしているのかしら」

「あゝ、恐らくあれかと」

そう言っつて鏡が指さす方向を見ると、艶やかな黒い毛をした猫が高く積み上げられた本のてっぺんで熟睡していた。

「もう、あの子またサボって」

本の山の主となっている猫に向かって店主は何かを投げた。

『いやあああああああ』

そのピーナツツのような物体は猫の横腹に当たると大きな音と共に爆発した。その音と爆風で目が覚めた猫は店主の足も手へと颯爽と走り寄ると、

『痛いじゃろ。年寄りもつと大事にせえ』

と、喋った。

「い、いやあああああああああああああああああああああああああああああ  
あああ」

その現象に頭がパニック状態になったのだろう、加々美は膝をついたと思えば後ろ向きに這って逃げた。猫は喋らないということが頭に常識として入り込んでいる人間にとってその現象は頭の中で大暴れする情報らしい。

尤も、正確には猫が喋っているのではなく、猫の考えが魔力によって空気をふるわせて音として表れているだけなのだが、その事に血管を跳ねさせている加々美は気付くことは無かった。

「こらこら。お嬢さんは学校で人工魔の話は教わらなかったの？」

壁にぶつかって涙目になりながら猫を震える指で指す加々美を見て楽しそうに女主は言った。

「この子は人工魔よ」

「あはは、加々美はその頃は未だ真面目じゃなかったからきつと情眠貪つてたのね」

人工魔とは低級第一の妖精をモチーフに、人間が魔法で作り上げた生き物である。妖精の中にも人の言葉を話す者がいるが、そのような妖精は大体そこの魔法使いでは遠く及ばない程の強大な力を持つ者が多いので人間の使い魔になろうとはしない。妖精は妖精独自の呪術を使うので、人間が力づくで従わせようとはしないというのも他の理由としてあるが。人間が使う魔法は所詮一部の呪術であり、人間の魔法を制御できる魔法具は数多く存在するが、その他の

系にも有効な物はほとんど知られていない。

『で、主人よ。この老いばれに暴力をふるったのは何故かね』

猫が喋り、そして加々美が再びビクリと体を跳ねらせ、それを鏡が笑う。端から見ると楽しそうである。加々美はそれどころではないのだろうか。

「あなた、『真実の魔眼』持つてるから引き取ったのに、開店中に寝ていて目を開けていなかったら意味無いじゃない！」

『そうは言っても老骨な者でな、横にならんと辛いのだよ』

そして大きな欠伸をして見せた。この状況では挑発にしか受け取れない行為である。案の定女主のこめかみに青い筋が立ち始めた。

『真実の魔眼』とは意図して睨むことにより相手に呪いをかける『魔眼』の一つで、その者が魔法で姿を隠しても瞬く間にその正体を暴くことが出来る力である。猫は気配を察知することが得意なのでこの魔眼を持つ猫の人工魔は人気が高い。

「もしまたこそ泥が入った時にあなたが寝ていた所為でまんまと盗まれたら、あなたの今後を今一度考えてみるわ」

『まあ待て。こんな老いばれを置いてくれるような物好きはあなたくらいじゃ。それなのにあなたにまで追い出されてしまった暁には儂はどう生きたらいいか考えつかん』

「ならせめて横になっているだけで、起きていなさい。いいわねん？」

『仕方ないのう。なら眠気覚ましの薬草でも焚いておくれ』

どうやら人と猫との言う不思議な会話は終わったようだ。猫は踵を返すと再び本の山を登り頂上に居座った。欠伸はするが寝る様子は無さそうだ。

「もう、役立たずねえ」

店主がそう笑って振り返ると、加々美は自分が未だ床に座り込ん

でいることにやっと気づき、慌てて立ち上がりスカートの皺を直した。

「お嬢ちゃん良い目持っているのね。どうかしら？ 今度から私のお店で働かない？」

「いえ、結構です」

瞬時に断りの言葉を吐く加々美。その目はまだ目を開いている黒猫に視線を浴びせていた。

「残念ねえ。そうだ、お礼と言っちゃ何だけど、これプレゼントしちゃうわん」

そう言っただ々美の手に先程のサイズが変わる指輪の箱を置いた。「結構値が張る商品だけどあそこに入っている物が盗まれるよりはちっぽけな額だから気にせず持って行ってね」

店主は黒い扉を顎で指しながらウインクを決めた。

「いいんですか？」

「勿論よ。助かったわ」

「あ、有り難うございます」

加々美は嬉しそうにそれを胸に抱く。

その姿を何処か面白くなさそうに鏡が眺めていた。

「もう一つ私の買い物につきあってよ」

店を出ると足早に先を歩いていく鏡はそう言い捨てた。

「ちょっと、どうしたの？」

「どうって？」

一応話は聞いてくれるが振り向こうとも、足を止めようともしない。

「何怒っているのさ」

「怒ってなんか無い」

そうは言ってもその態度を見ると誰もが同じ評価をするだろう。

「怒っているってば。あの人は男だけど女というか……とにかく恋愛感情なんて無いよ」

加々美は女主から形的に指輪をプレゼントされた事を鏡が嫌がっているのかと思ったようだ。

「当たり前でしょ。もしあったら私、あんたのこと好きでなくなるわ」

やはり歩く足を止めない鏡。むしろその動きは速まった。

焦る加々美は気付いていない。今の鏡の言葉に何より自分が欲しかった言葉があったことに。

「ここって……」

鏡が立ち止まった場所にあったのはどこからどう見ても宝石店だった。

「こんな高そうな店に用なの？」

「そうよ」

言葉短い返答であった。その頬は赤く染まっているのが気になるが。

「付いてきて」

そう吐き捨ててまたも加々美を置いていく。加々美も訝しげにその後ろ姿を見つめていたが言われた通り追った。

その先では鏡が店員に何かを渡していた。恐らく受け取り票であろう。

「はい、高海様ですね。しばしお待ち下さい」

驚いたことに店員は日本語で応対していた。それだけこの店が高級品を扱うような上級店だと言うことだろう。

「ご注文のお品はこちらでございます」

帰ってきた店員の手には紫色の小箱が収まっていた。

「あ、開けなくて良いです」

「はい？」

「そのまま下さい。入っている事が確かならそれだけで良いです」

「はあ……」

本人は加々美に聞こえないようにしているつもりなのだろうが残念ながらばつちり聞こえていた。

（ウチに見られたら困る物なのかな……）

加々美は広い店で一人にされて孤独感に浸ってしまったのだろうか。その顔は涙無くとも泣いているように歪んでいた。

（楽しくないな……）

自分が知らないことを見せつけられるとは思っていなかった。

（デートってこういう物なのかな……）

一緒に新しい物を発見する物だと思っていた。

（もっと楽しい物だと思ってた……）

そしてその喜びを分かち合う物がデートだと信じていた。

そしてその嬉しそうな鏡の顔を見ることが加々美の一番の楽しみだった。

なのに現実には知らない鏡を見せつけられただけだった。

「お待たせ」



鏡は、何かを隠すような笑みを浮かべてガラスケースを覗いていた加々美の肩を叩いた。

「あ、うん」

「どうしたのよ？」

振り向いた加々美は暗い顔をしていた。

「ううん。何でもない」

「そう」

鏡は分からなかった。加々美が何故こんな顔をしているのか。

違う、分からなかったのではない。それどころではなかったのである。

「ん、良い感じね」

店を出るといつの間にか夕暮れとなっていた。その橙に焼ける夕日を見て鏡はそう呟いた。

「何が？」

「ひ・み・つ」

3文字の言葉に合わせて立てた人差し指を一回ずつ振る。

「もうちよつとだけ私の我が儘につきあって頂戴な」

鏡は加々美の腕を優しく握り、引っ張って歩き出した。それが加々美の中にあつた黒い何かを消し去ってくれた。

「うん」

幼い子供の様なあどけない顔を浮かべる加々美に先程までの暗さは皆無であった。好きな人に触れられる、それはどんなことよりも心地よい物である。

鏡が加々美を連れて行ったのは公園であつた。

「ここに用があるの？」

しかし鏡は何も言わず何やら緊張した顔をして公園の中を覗き込

んでいた。

「……よしっ」

何かを決意したのだろうか、自分の頬を軽く叩くと小走りで誰もいない公園の中心に立った。

「星井加々美さん」

「え、あ、はい」

いきなりフルネームを、しかもさん付けで呼ばれ加々美は戸惑う。私の前に立つてください」

照れ隠しのような笑みを浮かべ続ける鏡は不可解なことを言い出す。

加々美はその言葉に従い、鏡の前に2歩分程の距離を空けて立った。

それを確認すると鏡は恐らく先程魔法具のお店で受け取った物だろう、小さな袋を取り出した。そして目を瞑り、一拍何かを思い、その袋の中にあつた金色の粉を空目掛けて振りまいた。

「どうしたのよ？」

「ふふ、ちよっとね」

やはり照れ隠しの表情を浮かべ続ける鏡だった。何を隠しているのだろうか。

暫くすると不思議なことが起きた。

「何これ……」

周りが止まった、そう言うしかない現象が起きた。

「流石本物ね。大枚叩いた価値があるわ」

そう言うって鏡は袋を丁寧に折りたたみポケットにしまった。そして今度はさっきの宝石店で受け取っていた紫色の箱を取り出した。

「加々美さん、受け取ってください！」

突き出される鏡の手。その手は大きく震えていた。

「え？ え？」

いきなりの事に加々美は戸惑う。それもそうだ、いきなりこんな

事されても普通の人間は戸惑うだけである。

「……………」  
だが鏡は何も言わず俯きながら小箱が収まった両手を加々美に突き出しているだけであった。

「……はい」

加々美は恐る恐る鏡の手にある紫の小箱を手を取った。

「開けて」

未だ俯いたまま何かを我慢するような声色で鏡は言った。

「うん」

ゆつくりと小箱を開く。

「これって……………」

そこにあつたのは指輪であった。黒の地色に炎の様な赤色が強いオパールが埋め込んであつた。

「私に？」

加々美の言葉に鏡は頭を起こし、大きく頷いた。

「加々美！」

鏡はいきなり大声で加々美の名を叫ぶ。その大きさをや本来の通常営業の公園であつたなら間違い無く誰かが聞きつけて心配そうに走り寄ってくるほどの大きさであった。しかし今は誰も見てない聞いてない気にしていない、鏡にとって一番望まれる状況だった。

「っひゃい」

加々美はその声の大きさ体を跳ねますが、その目はしっかりと鏡の目を見つめていた。

「好きです」

鏡の口はそう放った。しっかりと音を持ち、凜として夕暮れの空気に響いた。

「え……………嘘……………だって……………」

貴方ウチの告白を避けたじゃない、そう加々美は言いたがったが口がそれ以上動かなかった。もう口を開く余裕など先程の一言で吹き飛ばされてしまっていた。

（だってそうでしょ？ 一度告白して駄目だった相手にこんな事されたらウチ……………」

うれしさのあまりに涙が零れる。叶わない思いだと思ったけど、どうしても振り向かせたくて躍起になっていたのと言うのに。

「あの時は悔しかったから」

「悔しいって貴方っ」

鏡は自分の心を声として全て吐き出そうとするかのように声を強めた。

加々美は自分の心を何とか落ち着かせようと声を強めた。

「だって悔しかったのよ！ 貴方から告白されるのが！」

「何よ……………それえ……………」

あんな思いをしたのに！ あんなに辛かったのに！ そう言う思いが涙となって加々美の頬を流れる。嬉しさと疲労と怒りとで全身の力が消え膝をついてしまった。

「ウチがあの後どういいう思いでお前の前に顔を出したと思ったのさ！」

「ごめん」

「どういいう思いでここ何日か過ごしたかと思ったのさ！」

「ごめん……………」

「あんなにお前に振り向いて貰おうと頑張っていたのが馬鹿みたいじゃないのさあ！」

遂に自制していた「お前」という呼び方が口に出てしまった。

「ごめんなさい。私、あの時無意識に貴方の言葉を遮っていたの」  
「……………」  
「本当よ。あの頃は未だ貴方のことが好きだなんて思ってなかった。いや、気付いてなかったって言うのかな」  
加々美の涙浮かぶ睨み目に気圧されて言い訳がましく鏡は綴った。  
「でもあの後気付いたのよ。私は加々美のこと好きだったんだって」  
「何よ……………」  
どうしようもない怒りの感情に言葉を発するしかできなかった。

だが既に、その口は微笑んでいた。

「約束して」

「うん」

「今後一切ウチに対して『悔しがらない』って」

「え？」

その顔から察するに、鏡は自分の口癖が「悔しい」であることに気付いていないようだった。

「悔しいのは貴方のプライドが高いから」

「うん」

鏡は素直に頷いた。プライドの件は自分でも分かっていたのだろ  
う。

「でもウチのこと好きならプライドという壁の内側にウチを置いて」

「うん」

「もうウチを貴方の外にしないで。ウチを貴方の中に入れて」

「はい」

鏡が最後にしっかりと頷くと、加々美は感情のままに鏡に抱きつ  
いた。

「今度は言わせてくれるよね？」

「……………」

「鏡……………」

「私も加々美を愛してるわ」

動かない世界の中で唯一動いていた二人も動きを止めた。

二人は抱き合い、お互いの心をつなぎ合わせようと体を触れ合わせ続けていた。

帰り道。

「ねえ鏡、さっきの粉は何だったの？」

「ああ、あれね」

何が楽しいのか、鏡は軽く吹きながら答える。

「あれは幻想魔法の粉の一種よ。ちよつとの間だけ周りとの因果を遮断して擬似的に時を止めたように見せてくれるの。事実、周りの人間は例え目の前を通ったとしても私達に気付かずに素通りしてくれる用になるの」

「そうだったの？ 結構凄い粉なのな」

「凄いわよ。何せ私の全財産の半分は使ったから」

鏡は笑いながら凄いことを言う。

「そんなにお金使って良かったの？ そんな事しなくてもあそこなら誰も通り過ぎそうになかったと思うけど」

「うーん、何というか……邪魔されなくなかったのよねえ」

またプライドの問題ですか、と加々美は思った。この変に高いプライドを登り切るのは大変そうだ、とも。

「それにこれも高かったでしょ？」

加々美は指輪が入っている小箱を振って音を立たせた。

「まあね。貴方っぽいなと思った時からその石が気に入っちゃっ

てね。でもどつちも加々美の為だから」

先程の宝石店でこの赤味が炎の様に見えるオパールを見かけてから、加々美に贈るのならこれしかないと思っただという。鏡にとって加々美は赤い髪を持った炎の様な強かな女性だった。それに石その物もそれなりに価値はあったがその周りの部分が特殊な金属でできており、リングの値段を跳ねあげていた。妖精が認知できない金属と言う魔法のリングであった。二人だけの部屋で着けて欲しいと思っらしい。

「おや、少なくとも粉の方は貴方のプライドの為さ」

「……うん」

やっと自分の行為の意味を知ったのだろうか、鏡は唸り始めた。

「私って格好悪いわね……」

「そうね。でも気にすること無いんじゃない？ 貴方は貴方、それが全てよ」

「ん？」

「格好悪いところも全部含めてウチは貴方が好きって事さ。察しなさいな！」

「……うん」

楽しそうに笑い合う二人。星も二人祝福するかのよう瞬いていた。

「ねえ、そろそろ指輪着けてみせてよ」

「駄目。お披露目は鏡の部屋までお預け」

「そんなさ」

そんな二人のいちやつきぶりに呆れたのか、普段は多い羽虫も今晩だけはほとんど飛んでいなかった。

「そうだ、これは貴方に渡すね」

そう言っただけで加々美はウィシエル女主に貰った魔法の指輪が入った小箱を鏡の手に置いた。

「サイズは確実に合うのだし、丁度いいじゃない」

「そうね。もしかするとこれも運命だったのかもね」

二人は互いの手にある小箱をこつんとぶつけ合った。

「そう言えば何時の間私の指のサイズ知ったの？」

「貴方が私の横で居眠りしていたときにチヨチヨイとね」

ここ数日勉強に励んでいた加々美はつい鏡の部屋で寝てしまうことがあった。その時だろう。

「……私の寝顔変じゃなかった？」

よく考えれば好きな人の目の前で寝ていたのだった。乙女になっている加々美はその事に今更気付き慌てた。

「そうねえ」

鏡は加々美を後ろから抱くと耳元で囁いた。

「襲いそうになるのを必死に抑えていたわ」

しかし指輪を付けた加々美を見るのはまだまだ先になりそうであった。

「何よ……これ？」

「学園が……燃えてる。火事？ そんなまさか、絶対に有り得ないわね」

「そうさ。魔法使いがうるちよろしているこの学園でこんな大火事があったたまるもんか」

漆黒であるはずの空は、地にて盛んに火柱を上げる炎に焼かれて真昼の様に白かった。



第四話 イキトシイケルモノ / (終)「好きと嫌い」と(1)(後書き)

ちよつとした解説的な物：

加々美は鏡と成績的にはそれほど差はありません。それなのに鏡に対して劣等感を抱いているのには理由があります。一つ目は鏡がトツプではないにしろ優良生徒に選ばれている事、二つ目は不真面目ながら一応は勉強している加々美よりも殆ど勉強していない鏡の方が成績上位のため、三つ目は加々美の生い立ち故に抱いてしまった負の感情です。

このまま加々美が勉強に精を注いでいくと鏡よりも成績が上になることもあり得ました。

第四話 イキトシイケルモノ / (終) 「好きと嫌い」と (終)

二人は急いで学園の敷地に入った。燃えているのは校舎だけの様だ。寮や衛生館に火の手は見受けられなかった。

「あそこに人が沢山いるわ」

確かに鏡が指さす方向に生徒の群衆が存在していた。皆燃えさかる校舎の方を見て口々に何かを話し合っている様である。

その時、誰かが叫んだ。

「おい、奴だ！」

炎に照らされる生徒達の顔が一斉にこちらを向いた。その色はまるで何かに怯えている様であった。

「奴って何よ？」

「分からないね。でも、どうやらウチ等ほとんどもなく歓迎されていないみたいね」

加々美がそう考えている訳はその生徒達の行動が故である。

皆、手に杖等を持ち、間違いなく二人に向かって構えているのだ。「動くな」

生徒の一人が大声で叫ぶ。その力み過ぎて震えている腕を限界まで伸ばして二人を威嚇する。

「どういうことよ」

「わかんないってば！ 取り敢えず動かないが吉みただけど」  
「同感ね」

じりじりと生徒の群衆と二人の間が縮まっていく。無論生徒達が歩を進めているのだ。

「困むぞ」

先程の生徒が皆に命令を下している。近くで見たらその生徒の顔

がようやく把握できた。その男は間違いなくこの学園一の優等生で、鏡も何度かその生徒と特別講義で顔をあわせていた。しかも生徒会長でもある。

生徒達の内数人が二人を囲む様に広がって立つ。

「万事休す、ね」

「訳が分からないままに死ぬのは嫌よ」

二人はただ立ち呆けている事しかできなかった。

「星井加々美、気でも狂ったか」

二人を囲んで立つ生徒の一人が言葉を放つ。その怒りに煮える声は炎に身を委ねる校舎に反響した。

「どうやらあんたが目的みたいね」

「らしい。でも皆目見当がない」

「巫山戯るな！ お前がしたことは全部こちらに筒抜けなんだぞ」

そう言つて男は何かを取り出した。

「先生達を殺し回っているのは君だろ」

それは水晶球であった。

「会長が飛ばした使い魔によつて私達は貴方の行動を見させていた  
だきました」

困っている内の一人である女は槍などと言つ物騒な得物を深く構える。

「少なくとも我々は先生四人の殺害を目撃した。星井加々美、君には驚かされたよ」

他の、杖じゃなく斧を持つ男もその得物を振りかざす。加々美を殺す気だ。

「まさか学園長にまで打ち勝つとはね」

そして二人は確実に追い詰められる状況になった。

誰もが加々美に向かって殺意の籠もった目と個々の武器を向けている。

「悪いけど会長の言葉は信じられませんね」

その状況でも鏡は凜として立ち向かっていた。一步前に出るだけで周りの群衆に緊張の風が舞う。何かおかしいな行動を見せてしまったら即座にあらゆる武器がその威力を示す結果を招くであろう。

「鏡君、君はどうしてその女と行動を共にしている」

「それは簡単な話です。私達はさつきまでこの敷地内にいませんでした。証拠もありますよ」

そう言つて帰りに立ち寄つた店でお菓子を買ったときの領収書を丸めて会長の足下へと投げた。二人で仲よく食べようと思つて沢山買ったのに、この空気では絶対にそんな夢にたどり着けない。

会長はそれを広げた、が直ぐに捨ててしまった。

「こんなのいくらでもねつ造できるだろう」

「そりゃまあ」

「我々はこの目で見たのだ。この目がある限り君達の下らない嘘にひっかかりたりはしないさ」

「はあ」

まずいわねえ、と二人は同時に囁く。

「鏡君、取り敢えず君はその女から離れてくれないかい？ でないと君まで巻き込んでしまう事になる」

「いえ、もう十分巻き込まれていますけどね」

鏡は不敵に笑つた。この状況でその様な顔を作れるとは如何に大物であるかが分かる。

「何にせよ、私に加々美から離れるわけ無いんですけどね」

「どつという意味だ？」

「どつという意味ですよ」

そう言つて夕方に使つた魔法の粉が入つた袋を取り出し、中身を空中に振りまいた。驚愕の表情を一瞬だけ浮かべる生徒達は手を動かす事叶わずただ見るだけしかできなかった。いや、殺す覚悟が無かつたというのが正しい表現になる。他の誰かが仕留めてくれる、そういう考えがここにいた誰にもあつたのだ。当然だ、いくら魔法使いの端くれだろうと学生の身分で人を殺そうと思える狂者はい

ない。戦闘訓練を受けていない者が他人に簡単に致命的傷害を与え  
る気にはなれないのだ。

「さて、どうするよ？」

時が止まったよう見えるが実際は「そう見えているだけ」なので  
二人はその位置に立ったまま相談し始めた。

周りの生徒達は二人を囲っていたことを忘れたかのように、自分  
達が何故ここにいるのかを互いに問い合っている。

その光景は鏡と加々美には見えていない。

「未だ時間があるけど取り敢えずここから逃げましょうか」

「だね。ウチ等がここについても損しか生まないみたい」

二人は囲まれたままで景色が止まっているその場から走り去った。  
勿論、何所に誰がいるか分からないのでゆっくりと動きながらであ  
るが。

「あんだ、変なことした覚えない？」

「悪いけど貴方と違って外向けは結構大人しい人間なんでね。そん  
な覚えはないさ」

「……余裕ね」

「ま、焦っても仕方ないからね」

燃えさかる校舎の直ぐ傍で二人は物影に隠れていた。会長達も二  
人が逃げるにしてもまさか炎の真っ直中に逃げるとは思わなかつた  
だろう。そこを逆に衝いて二人は今いる物影へとやってきたのだ。

「とにかくウチの姿をした何かが教員達を殺して回っていたって事  
は確からしいね」

「メタモルフオーゼかしら？ でもそんな物使える輩は限られてい  
るわね」

霊力が影のまま現実に影響を及ぼさせる現象ならば、魔法と

は影を形にする現象である。つまり思い浮かべた「現実」を作り出すということだ。よってその想像をより自分に信じさせる事ができる者こそが優秀な魔法使いとなる。また形とは本質、つまり姿を変えろという事は自身を変えろという事だ。しかし自身を塗り替える事が出来る者は同時に絶対の自身を持つていないと存在崩落することとなる。自分を騙せる事ができ、尚且つ自分を描ける者だけが扱える魔法がメタモルフォーゼという高度魔法なのである。

「ああ。そして間違いなくそいつはとんでもない化け物レベルの魔法使いだつて事も判るね」

会長はその者が学園長にも敵つたと言った。この学園で最高実力者である学園長にも敵つた言うことは魔法使いの中でも上位の方にいる人間だと言うことになる。

「ま、とにかく今はこんな所で思慮にふけているより行動を起こすしかないわ。少なくとも寮に行つて私達の荷物の一部を持ち出さないと逃げることも出来ないわ」

「間違いなく寮の中にも生徒達がいるだろうね」

「分かつてると思うけどもう実力で何とかするしかないわよ」

鏡は魔法の粉が入っていた袋を叩く。既にほとんど使い切つてしまった後なのでただただ粉が巻き上がるだけであった。

「『姿隠し』なんて高度な魔法は二人とも使えないし、手詰まりね」

「そうだな……」

二人は黙るしかなかった。その間にも炎は校舎を飲み込み続け、真昼のように世界を照らし続けている。

その時、鏡が何かに気付いた。

「ねえ加々美」

「うん？」

「あんた映画つて好きだつたわよね？」

鏡があまりにひよんなことを言うものだから加々美は顔を上げてその顔を覗く。

「こんな時にそんな話？ まあそれなりに見ているさ」

「これ程の炎が上がっているくせにさつきから何所も崩れない建物  
って映画とかでもあった？」

「そう言つて炎にまみれる校舎を指さす。」

「……確かにおかしいね」

「でしょ？ でも熱は確かに感じているわ。これはちよつと試す価値あるわね」

鏡は近くに落ちていた木の枝を持ち、木に燃え移っている炎に先端を差し込んだ。炎は枝にも燃え移つたが、鏡が枝を振つて鎮火すると、

「やっぱりね。これ、幻術か何かね」

枝には何一つ焦げた跡が出来ていなかった。

「でも確実に熱は感じてるわよ？」

「うーん、そう言う魔法もあるんじゃない？ この世界には魔法の系は沢山あるんだからどんな魔法でもその存在の否定は出来ないわよ」

そこで何を思ったか鏡はすぐと立ち上がると校舎の中へと入り込もうとした。加々美は当然の反応としてその手を取つて止めさせる。

「ちよつと、正気？」

「正気よ」

「そう、なら元から馬鹿だったのかね。今も中に犯人がいるかも知れないんだぞ？」

「いないかも知れないじゃない。それに荷物が無くとも校舎の中にある代物をちよつと失敬すれば逃走金にもなるじゃない。どうせ他の人間はこの炎に気付くまでまだまだ時間かかるわよ」

それはそうだけど、と言う加々美を置いて鏡は嵌め殺しの窓を割り、中へと侵入した。

「あんたはどうするの？」

窓越しに手を差し伸べる鏡の顔は楽しそうであった。自分の状況なんて何のその、普段では味わえないスリルに酔っている様だった。

「……行くよ。まさか自分が火事場泥棒になるとは思ってたわぁ」

加々美もそれに続き、中へと入り込んだ。

「熱いわね」

熱風だけは確実に存在しており、それだけでも二人は先に進むのを諦めそうになった。簡単な話である。熱風の所為で目がまともに関けられないのだ。

「どうするの？」

加々美は呆れたように呟く。

「……………」

自分から言った手前、やっぱ止めようとも言えず鏡は黙り込んでしまった。自分の口から「できない」と言う単語を出すのは彼女のプライドがやはり許さなかった。

そこで呆れ気味にその手を加々美が取り、堅く握った。

「悪かったね。本当は解決方法知っているんだわ」

そして加々美は教員の研究室がある方向へと歩き始めた。目を細目にし、さらに熱風を目に直接当てないように手で護りながらという苦し紛れの方法で辛うじて歩いている程度だが何とかなるようだ。「そうか、あそこなら確実に防災ゴーグルが備え付けられているわね」

「ねえ……………」

前を歩いている加々美が立ち止まった。

「貴方の目にはあれが何に見える？」

加々美は何かを指さす。それは他の大きさが統一されている扉と違って一つだけ小さく、材質も違っていた。見るからに古めかしく、黴すら生えていそうな扉であった。

「扉、ね」



「よね？　でさ、貴方ここでこんな扉見たことあった？」

鏡はブンブンと首を横に強く振った。

ここは何度も通っているが一度たりともこのような扉に気付くことはなかった。恐らく封印がされていたのだが、それが何故か今姿を見せてしまっているのだろう。

「どうする？」

加々美は少し興奮したように息を荒げて問うた。火事場泥棒の行為は彼女の冒険心を煽ってしまった。

「何にせよ今はゴーグル優先よ。このままだと間違いなく目が潰れるわ」

二人は名残惜しそうにその場を離れる。

二人がその廊下の角を曲がるとその扉がたちまち消えてしまったことに二人は気付いていなかった。

「よしこれね」

鏡は壁に掛かっていたゴーグルを二つ手に取り一方を加々美に投げた。ここは魔法の研究用の特別な形をした陶器を作る場所である。しかし実際はそういう用品は外部から購入している物がほとんどで、本当は教員達の趣味の部屋であるが表向きはそうなっている。授業で使うのも一人の生徒で在学中に一回程である。その上教員達の研究室のさらにその向こうに構えてあるため生徒は一層寄りつかない。

「これが在れば何ともないわ」

「そうな。気道が焼けるほどの熱風でなくて良かった」

ゴホンゴホンと加々美は空咳をあげる。

「で、さっきのところに戻るの？」

「興味は大いにあるかな」

二人はにんまりと悪い顔を合わせ、再び来た道に戻った。

が、そこに扉はなかった。

「しくじった。まさか封印じゃなくて移動式だったとは」

鏡の推理では時間によって出現位置が変わる扉らしい。

「ここで待っているはいささか愚かね。いくら何でも時間の無駄よ」

「ならどこへ行く？」

「そうね、普通に考えたら展示室かしら？」

展示室とは魔法使いの間で有名な絵画が飾られているギャラリーームである。あるのは普通の人間ではその価値を見いだせないような代物ばかりで、魔法を嚙ったことのある人間だけがその価値が理解できると言われている。

「駄目ね。いくら何でもあその物は買い取ってもらえないね。何てったってここにしかない物なんだから直ぐ通報されてしまうさ」  
「だったら……」

鏡は目ぼしい物を思い出そうとするが普段からそういう事を考えて生きている訳ではないのでなかなか思いつかず貴重な時間を沈黙で浪費してしまった。

「そうだ、付いてきて」

鏡の横で同様に悩んでいた加々美は何かを思い出したのか、駆け足で燃えさかる炎（と言っても実際は幻影であるが）の中を進んでいった。

「火事場泥棒の適正は私より加々美の方が高そうね」

鏡は苦笑しながらそれを追った。

付いてこいと言った割には速く走るの、鏡は辛うじて加々美の後ろ姿を見失わないのがやっとであった。これは二人に体力的な差があるためだ。それに幻影の炎の所為で視界が悪いので余計に追うのが困難であった。

しかし、その追いかけてこは急に終わりを告げた。

階段を上った先にあった光景に鏡は驚愕と緊張のあまり階段の最上段で立ち止まってしまふ。

そこには加々美が二人いた。

「まずいわね。阿呆みたいに金目の物に集中した所為で完全にそいつのことを失念していたわ」

自分の失態に悔やむ言葉をあげるが既に時遅し、出会ってしまったからには何とかして逃げなくてはならない。汗でべとべとになりかぶれの痛みすら走る背中に新しい汗が噴き出た。

しかし加々美は一切焦っていないかった。

「鏡、こいつ動いてないよ」

加々美は目の前にいるもう一方の加々美の頭をこんこんと叩く。

確かに動く気配はなかった。その様子に鏡は胸をなで下ろす。

「焦ったわよ。死に目って奴が今訪れたのだと覚悟したわ」

鏡もその動かない加々美に近づき、その姿を頭のとっぺんからつま先まで観察する。

「良くできてるわね。間違いなくこれが動いていたらあんだだと勘違いするわ」

そうね、と加々美は動かない加々美を弄くりながら応える。

「これから走るの禁止ね。なるべく直ぐに隠れられるようにしながら進むわよ」

「了解」

そして再び加々美は先を進み、それを鏡が追う。しかし先程と違いお互いに無言で慎重に歩き、時々周りを観察し合っている。警戒においては二人いることはとても便利なのである。

「あれ、まただ」

先往く加々美は再び立ち止まった。

「また知らない扉だ」

「さっきのがここに来たのかしら。入ってみる？」

「判断は君に任せるさ」

「そう……」

鏡はゆつくりと扉へと近づき、そのノブへと手を伸ばし捻った。鍵はかかっているようでも、押すとゆつくりと開いていった。

「暗いわね」

「そうだな。まあこんなの灯りが在れば良いだけのことだし」

加々美は自分のポケットからライターを取り出した。

「あら準備が良いわね」

「必需品さ。魔法使いなら持つとけて本に書いてあった」

加々美がライターに文字のような記号を指で描くとそのライターは着火せずとも火を放った。

その明かりはまるで大きなランタンのそれのように明るく、部屋を隅々まで照らしてくれた。

「本がいつぱいあるだけね」

「待って」

加々美はしよぼくれた様に見渡したが、鏡は何かを思いついたのか緊張した顔を見せた。

「ここつてももしかすると禁書とか言う物があるんじゃないの？」

「いや、流石にこんなに安易な場所にあるわけ無いでしょ。ま、金目の物があるならそれに越したことはないけどね」

「ならお互い手分けして高そうな本を探しましょ。あと、禁書とかそれっぽい物を見つけた時は呼び合うこと、良いわね？」

加々美は頷き、二人はバラバラに辺りを弄くり回った。

その部屋は広く、どう考えても床から天上までの距離はこの校舎の一階分の高さを遙かに超えていた。魔法という物は何でも有りと聞くが、ここまで自由な物なのかと鏡は感心していた。しかし何時までも魔法の優秀性に驚いている訳にはいかなかった。ある目的のために鏡は行動していた。

時が経つ。

「ねえ、この本とか禁書っぽくない？」

鏡が本の隙間を逐一探していると、加々美が何やら古くさい本を持ってきた。

「どうしてそう思うの？」

「いや、古そうだし、表紙も何だかそれっぽくない」

「でもきつとそれは違うわよ。何なら開いてみると良いわ」

「あーほんとだ」

鏡の言うとおりそれはただの本であった。加々美はがっくりと肩を落とすが再び本の背表紙を調べ始める。

「ねえ、今日は楽しかった？」

それはつまらなそうな鏡の言葉。

「勿論さ」

それは楽しそうな加々美の言葉。

「指輪有り難うね」

それはつまらなそうな鏡の言葉。

「気に入ってくれたのなら嬉しいわ」

それは楽しそうな加々美の言葉。

「高かったでしょ？」

それはとてもつまらなそうな鏡の言葉。

「うーん、そこまで高くはなかったよ」

それは楽しそうな加々美の言葉。

「そう」

それは鏡のため息。

「ねえ、それ本気で化けてるつもり？」

「え？」

「そんな物でさ、私の目が誤魔化せると思った？」

鏡はその手に持つ魔導書に自分の感覚を重ねる。

これが所謂魔法具の『展開』である。本来魔導書はただ魔法が説明されていたり、その探求の歴史が書かれていたりするのが主であるが、古い魔導書には魔力が宿るので、それに自分の魔力を注ぐだけでその魔法を行使出来るようになっていく。

だが誰でも出来るわけではない。

鏡は既に実家にあった伝家として管理されている古の魔導書『レデエ』に幼い頃から触れていたために、幼くして魔導書と自分を重ね合わせる事が出来るのである。

余談だが、この学園においても彼女以外に生徒の身分で魔導書を扱える者は在籍していない。彼女が色々と優遇されているのにはこういう理由もあるのだ。

「レデエは門外不出の所為で持ち歩くことは出来ないけど、ここにも魔導書があつて助かったわ」

鏡は右手を加々美へと向ける。

「そもそもね、貴方初めから大きなミスしていたわよ」

「……………へえ」

加々美の様子が豹変する。嘗めるような目線で鏡を威圧する。

「あんた、姿形は真似てもフレグランスの匂いまでは真似できないみたいね」

偽物と思っていた加々美に近づいた時にいつもの彼女の匂いが薫った時点で既に鏡はどちらが本物が気付いていた。

「ふふ、何だ初めから気付かれていたのか」

偽の加々美は楽しそうに破顔すると空中へ浮いた。

「まあね。でもあの時点ではこっちに武器がなかったから大人しく騙された振りをしていただけ」

鏡は手に持つ魔導書を叩く。

「でも、もうこれが在れば少なくとも貴方に負けるわけ無いわ」

「あははは、凄い自信ね」

「そりゃそうよ」

自信に満ちた顔を見せる鏡が呪文を唱え始める。鏡は自分の力に確信を持っていた。以前加々美と一緒に行った実験での魔力の暴走は間違いなく絶命に及ぶ威力があった。つまりそれだけ鏡自身に眠る想像のふり幅の遊びは大きいらしい。あれを緩衝魔法無しでここで放てば間違いなく相手は御陀仏だと考えた。無論自身の身を守る緩衝は行いがそれを先にしてしまうと感づかれてしまったためにギリギリのタイミングで行うしかなかった。これが本当の生死をかけた戦

いなのだ。少女は身を興奮で震わせた。

しかし、その詠唱は何者かがドアを開く音で途切れてしまった。

(つち、仲間がいたか)

入ってきたのは本物らしき加々美を抱えた男であった。その出で立ちは物語に出てくる『吸血鬼』のようで、赤い眼が冷たく光り、白銀に輝く長髪麗しき青年であった。だが鏡にはその者が放つ魔力の異常さが伝わっていた。

(尋常じゃないわね……何よこいつ)

実際は吸血鬼等という種族は実在しないため、あれは人外ならば第二ということになる。そんな者と、いくら優秀でも十代の少女が対峙できるわけもなく、恐らく迂闊に構えた途端に殺されるだろう。即座に判断し相手を刺激しない様に鏡は身を硬直させる。顔も相手の頭を小突かない様にと逸らす、その口は苛立ちにひん曲がっていた。

「禁書は見つけたかね？」

その青年は姿に似合わず老人のような嗄れた声を出した。

「申し訳ありません」

偽の加々美は浮いていた体を地に落とす。

「そうか、ならば続ける」

「はい」

どうやら偽の加々美は青年の僕のようだ。深く辞宜をして畏まる。青年は背中に抱えた加々美を床へと下ろす。

「やはりこの人間は素晴らしい」

青年は壁際へと静かに逃げていた鏡に話しかける。その顔はやはり凍てつくような何事にも動じないと思わせる表情を浮かべ続けている。



「君もこの人間の体が目的だったのかね？」

その言葉に含まれる重圧は正しく彼が人間を超える存在であるという証明のように感じられる。それほどまでに鏡はそれに気圧されているのだ。

「何のことだか」

「気付いてないのか。この女は最高峰の媒体の素質を持つ人間として前々から注目されていたのだ」

そう言っただけで寝ている加々美の顎を持ちその顔を確かめるように眺める。気を失っている綺麗な顔は苦悶に少し眉を歪めていた。

「だが今回は思わぬ収穫があった」

その青年は鏡へと歩み寄る。鏡は歴然とした力の差を感じているために迂闊に動けず、ただその姿を睨むだけしかできなかった。

「お前も中々な素質を持つ様だ」

鏡の腕を掴むと軽々と腕を吊すようにして鏡を持ち上げる。掴まれた部位にかかる、握り潰さす様な力と体重の所為で腕に激痛が走る。

「痛いわね！」

「ほう、中々活きが良いな。だが私は刃向かう輩は好きでないのにな、あまり抵抗するでないぞ」

鏡は青年に力任せに投げ飛ばされ、壁に叩き付けられた。反動で体がゴムのように跳ね返り、床に崩れ落ちる。

「痛い……」

「黙らせる方が先か。まあ肉体さえ欠損せず手に入れられれば中がどうなっているか知らないな」

激痛に絶え絶えとする意識を辛うじて繋ぎ止めようとしている鏡を他所に、僕の偽加々美を呼ぶ。

偽加々美は探索を中断し、青年の足下まで瞬時に移動し跪いた。

「この女を黙らせる」

その命に偽加々美はサディスティックな笑みを浮かべる。こいつは教師を殺すときも同様な顔をしたに違いない。

「ちょっと待ちなさいよ」

首だけを何とか擡もたげて青年達に怨恨籠もった目を向ける。恐らくその目には並々ならぬ殺気が含まれていただろう。しかし青年は何も言わずただただ鏡をその冷たい目で見下ろすだけであった。

「何故加々美を狙う」

「先程言っただろう。彼女の体は優れた媒体になる。どうやらこいつの近親者共はそれに気付かず外へと野放しにしたようだがな」

青年が言う媒体というのは精霊や神、悪魔との交流が可能な人間のことである。シャーマンの様な類の魔法使いが媒体としては有名である。

「だから私が欲した。それだけだ」

「わざわざ加々美に罪をかぶせようとしたのは？」

「気が狂い魔道に飲まれた、とでもすればお前等は何の疑問も持たぬからな」

確かに、魔法使いはそう言う考えをして割り切らなければやっていけない節がある。気が狂う者は頻出し、逐一事件として裁判等と面倒なことをしている暇など魔道を進む彼等には存在しない。そういった敗者という雑草は通る者が根こそぎ引っこ抜いて道の外へと放り投げてしまえばそれで良いのだ。

「それに禁書を探すのに熟練した魔法使い共は邪魔だからな。丁度いい駒があったという物だ」

やはり感情の無いその顔で淡々と述べる。

（ふざけやがって。お前等なんかに加々美を渡すか！）

しかし不慣れな魔法で目の前の二人に渡り合えるとは到底思えず、鏡の頭は絶望の色で染まりきっていた。果たして先程自分が使おうと思っていた魔法はこの第二に通用するのか。

「さて、お前にも眠って貰うか。やれ」

青年は僕に促す。鏡の下へと一歩一歩わざとゆっくりと歩く僕の足音は鏡の耳に絶望の音となりて響き渡る。

僕が鏡の首を掴み、そこだけで持ち上げた。当然鏡の首は絞まり、もうほとんど残っていない気力ですら奪いされそうになっていた。

しかしそこで鏡の癖が出た。

それも最高のタイミングで、最高の状況で。

鏡は悔しがったのだ。

もう頭の中は靄で霞み、あらゆる事を放棄したい衝動に駆られていたはずなのだが、最後に鏡の頭は勘違いを起こした。

今、鏡の首を絞めているのは加々美だと。

好きなはずの加々美が私の首を絞めているのだと。

目に映る僕の姿がそのまま脳に情報を伝わってしまっているのか。

それが鏡には悔しかった。

好いた対象であったはずなのに何故か悔しかった。

多分、そう、彼女はやはり何処かで自分が魔法使いとして上だと考えていたのだろう。

だからついつい悔やみ憎しみ、  
何も考えられない頭が何かを考えてしまったのだ。

鏡の体が床へと落ちた

その首を掴んでいた偽の加々美の腕に既に力は無い

当然のことである

その体に首は無く、既に偽物の命は事切れていたのだ

「馬鹿な。この女、元魔師だとも言うのか」  
ソイサラ

青年の足下に偽の加々美の物と思われる生首が転がっていた

首はちぎれたような跡は無く、その断面は積み木を崩した様な凹凸の有様であった

それは無詠唱の魔法であった

元来小さな魔法、つまり人間行動の延長線上にある魔法、もしくは魔法具に頼った魔力の行使においては無詠唱も多い。しかし人間行動外に位置する魔法は詠唱無しでは普通行使できない。

だが極少数、それも人類史としての極少数の人間は生まれつき幾つかの魔法を行使できる。それは地球の誤算であった。人間は本来そのような能を持って生まれることを許されていない。しかし、地球が何かを誤り、幾希に人に魔法を先天的に与えてしまうことがある。第二である魔と同様な形けいを与えられて生まれてくるのだ。魔は初めから霊力と言う物理現象ではない『第二現象』を行う事を許されて生まれてくる。つまりその形に霊力の行使が含まれているので

ある。そもそも第二とは人間を模倣して作られた者、つまりオリジナルが存在する。そのオリジナルこそ地球錯誤ほしのあやまりである元魔師であった。彼らには魔法と言う名の第二現象を与えてしまったのだ。

その様な者達は悪魔の子または英雄と呼ばれる者達に多く、その者達が持つ魔法を真似て作られたのが現代にも一部の魔法として残存している。

つまり、元魔師の生誕は新たな魔法の誕生を意味する。祝福されるか禁忌と嫌悪されるかは時代によって変わるが、その誕生が世界に新たな波を生み出すと言うことだけは確かである。

「ざけんな」

既に正気を失っているのだろうか、血走る焼けた目をもって青年を炙るように睨む鏡は、その手を何かを掴むように強く握った

空間が歪む

部屋の一角が混沌と化す

それは崩れたジグソーパズルを赤子が組み直したかの様にあべこべに組み直され、その形を維持できない本や壁や本棚は屑となって宙に散った

「何だこれは……」

青年は驚愕により、初めて顔を変えた

やはり目の前の人間は元魔師であった

間違いなく彼の深い知識の海には存在していない魔法系列であり、その様は理解できる物ではなかった

まるで空間その物を壊したような、奇々怪々な有様を結果として残したのだ

(恐らく女の視界内限定に効果が及ぶ物であろう。しかし、それが分かったとしても対処のしようがない)

「あ……ああ……」

鏡は何かを押さえるように頭を抱え悶え苦しんでいた

鏡の目の前だけが異様な光景と化している

奇怪な形をしたオブジェの様にくっつき合った本と本棚と壁の材質から目を逸らそうとしているのか、目も必死に覆い隠す

何かが鏡の中で芽生え始めている

それは熱い芽であった

鏡の中でその形を象<sup>かたど</sup>らんと広がる

鏡の全てを支配するかのように即座に広がっていった

だが 見えない

鏡は苦しむ

その見えない物に体中を蹂躪される痛みに、

その熱さに血肉が踊り狂わんと跳ねる痛みに、

鏡の頭は支配される

苦しい、熱い、だが満ちている

今鏡は快感に身を躍らせていた

それは在ってはならない感覚

全てを手に入れることを本気で可能と思えてしまうほどの自信と、その反対に全てを擲<sup>なげ</sup>つてこのまま死絶に及びたいと欲す欲望が滾<sup>たぎ</sup>る

鏡の中の異様さに気付いたのだろうか、青年は左手を鏡へと向け何かを呟いた

瞬間、黒い一本の線が宙に現れ、素早くその切っ先が鏡へと伸びるその先端を追うように青い炎が黒線の末尾から上がりこれも鏡を  
目指しもの凄い速さで進む

だが届かない

黒い線は鏡に届く前に何も無かったかと錯覚してしまう程綺麗に  
存在を抹消された

青年は冷静に反応し、今度は聖水を召喚した  
聖なる泉の水はその名を持ち、呼ぶ者に応えるためによく召喚さ  
れる

鏡を大量の聖水が飲み込んだ  
鏡はその流れに身を任せ溺れるしかなかった

それも直ぐに終わる

鏡の口が開かれると周りの聖水はたちまち飛沫となりて先程まで  
水気など無かった空間へと散らばり、床を濡らした

やはり無音

詠唱が聞こえることはなかった

「そうか、転移魔法の類か」

青年はその様子を見て自分なりの答えを導き出した  
しかしその答えを得たところで解決には繋がらない  
彼はその魔法に対抗する手段を持ち合わせてはいなかったのだ

加えて鏡の魔法は彼が会得している転移魔法とは全く毛色が違う。彼女のそれは恐らく転移ではなく交換、つまり二つの存在を同時に入れ替えてしまうのだ。召喚はその存在の大きさに左右され術者を選ぶ代物だが、鏡の交換はそれを二つ同時に、さらにその存在を分散して転移させるといふ、魔道に歩む者から見たら驚きで身震いするであろう魔法であった。それを十代の少女が行使するのだから悪夢である。

青年は再び左手を伸ばし呪文を唱える

だが今度は鏡から仕掛けてきた

その目を青年の方に向けると目が刹那に光った

青年はその意味を察し自身を鏡の背中側へと転移させる

が、青年の背中に激痛が走った

振り返るとそこには既に動けるようになっていた加々美が本棚の

欠片を何本も持って立っていた

どうやら背中に加々美が持つ物と同様の物を刺されたらしい

「小娘え！」

完全に人間の一方を忘れていたという己の愚かさに憤慨し、その怒りを加々美へと向かって叩き込もうとした

「残念」

その手が届く前に加々美が指を鳴らすと青年の背中に刺さっていた木片が破裂し、青年は激痛に耐えきれず大きく体を仰け反らせた  
「つぐ」

だが直ぐに立ち直り拳を細い加々美の体に力任せに叩き付けた

加々美の体が吹き飛ぶ

彼女が衝突し粉々に砕け散った壁が煙のように舞うた

恐らくただの人間であつたら加々美の呪文は致命傷であつたに違いない

しかし青年の爆ぜたはずの肉片は何事もなかったかの様に瞬時に



元に戻ってしまつて いたのだ

その事は加々美や鏡にとつて初めての人外との殺し合いであること  
とを知らせていた

加々美は自分の体が未だ首から下に繋がっている事を辛うじてう  
つすらと開けることが出来る目で確認した

しかしその体を埋め尽くす痛覚に抗う事が出来ずただその場で蹲  
つたまま鏡の勝利を祈るしかできなかつた

何とか意識が削がれることは避けられたが、既に普遍的な少女の  
体躯である加々美の肉体は、許容可能な損傷以上の傷害を負つてい  
たのだ

その光景に鏡は怒り狂うが視界の内に加々美という存在がある限  
り彼女の魔法を使えなかつた

それを感じ取つたのか、青年は息絶え絶えな加々美を背に立ち、  
長い詠唱を始めた

恐らく、大きな魔法が行使される前兆だ

詠唱とは魔法をより正確に世界に現わすための鍵である。言葉と  
いう鍵を使う事で一定範囲共通の影を構築できるためより現実に現  
わしやすくなるのだ。

未熟な魔法使いは共通の言語を使い、純粹に構築されてきた影に  
よつて魔法を使用するが、ある程度慣れた者は各自の母語を用いて  
魔法を行使できる。未熟な魔法使いが母語を用いると曖昧な影を巻  
き込んでしまうため、現れる魔法も無駄の多い粗末な物となつてし  
まう。一方で熟練の魔法使いは既に頭の中に一定の影を保っている  
ため、母語による自由な表現でより範囲を広めた魔法を使う事が出  
来るのである。ただしその際でも自身を「だます」ために冒頭文句  
として鍵符を打つ事が多い。何故なら最終的に魔法を現すのは地球

であり、その地球を動かす事が出来るのは大きな意思だけであるためだ。とある幻想をあらゆる人々が思い浮かべると、その中にいる「影を形にする力を許された者」、つまり魔法使いの素質を持つ者によって地球に影が届き、地球が形を生みだすのだ。共通言語でも母語でも、影を引き連れる言葉は単語であり、それを並べる事で地球に囁くのだ。そして地球が耳をその方向へ傾けると、その単語以外の部分によって広い「意味」を伝える事が出来る。

詠唱が長いと言うことはそれだけ魔力を従える力が広がることとなる。有効詠唱<sup>エキソン</sup>だけではその効果として現れる現象に曖昧さが生じてしまうため自身の力をわかまえている魔法使い達は修飾詠唱<sup>イントロン</sup>を挿入することによりそれを補うのが定石である。つまり影をより忠実に自分に説明づけることが必要なのだ。無論、有効詠唱<sup>エキソン</sup>を更に重ね、その効果その物を目的としている効果に因る結果を超える範囲に広げると言う方法もあるが、その様な選択肢を選べる魔法使いはほんの一握りである。

彼の口から現れる文節はその殆どが有効詠唱<sup>エキソン</sup>であった。これはつまり目の前の青年はそれだけ高等な魔法使いであるということとなる。ただし、彼が人間でないことは火を見るより明らかで、彼を魔法使いという定義に含めるかどうかは疑問が残るが。だが彼の呪文は人間の物と同じであり、詰まるところ彼は肉体以外人間と同じだと言うことを表している。

鏡も彼の詠唱の途中で自身が記憶している魔法を唱えようとしたが間に合わなかった

相手の詠唱が長いくせに速過ぎたのだ

彼の詠唱が終わると鏡目掛けて無数の氷の柱が降り注ぐ

それは人がすっぽりと入ってしまう程太く、その先端は突き刺さるのが目に見えている程鋭かった

鏡は何とか一本目の柱を避けたが、その柱は床に刺さると床を凍らせ一拍後大きな音と爆風を従えて大爆発を起こした

鏡の足に無数の氷片が突き刺さり血飛沫を吹き上がる

鏡は呪文を唱え、崩れ落ちていた壁を流用して厚い壁を拵えたが、その様な物では青年の氷柱は完全には防げず際どく避けるしかできなかつた

そして避けたところで次々と起こる爆発は止められず、氷片は鏡に降り注ぐ

体を動かすのが不得手な鏡は自身の体を魔力で操ることで運動能の飛躍的改善が可能だという事に、氷柱が迫る最中に瞬時に辿り着いたがそれでもやはり限界はあつた

何とか氷片から身を守るためにも新たな壁をこさえたが力足らず、体中のあちらこちらに氷片が突き刺さってしまった

(不味い……)

その痛覚を超えた痛みに軋む頭を何とか鎮めようと頭を大きく振るが流れる血に目が奪われ落ち着くに落ち着けなかつた

(不味い不味い不味い……)

既に体が泥人形のように脆くなっている所為で頭が防御を諦めたのか、鏡は攻撃に全身全霊を捧げる事が出来た

身を守るという意思が消えかかっていた

しかしこちらは魔導書がなければある程度の長さの文しか詠唱できない未熟な魔法使い

その様な者に出来ることは限られており、彼女は青年が作り出した魔力の籠もつた氷片を彼に向かって高速で撃ち返すことが精一杯であつた

だがその氷片には確かな魔力が籠もっており、その速度は本能が魔法に直結した鏡の意志と相乗し音速に届く程の速さで青年に向かうその威力を恐れた青年に転移による回避しか選択を許さなかつた

加々美が衝突した事で崩れかかっていた壁に氷片の集団が豪速で

突き刺さる

その威力凄まじく、壁は大破して崩れ飛んだ  
加々美は何とかその崩落に巻き込まれまいと体を動かし、跳ね立  
った

そしてそれを見つけた

それは崩れた壁の向こうにあった小さな空間に嚴重に保管されて  
いたのだろう

赤い守護精霊と思わしき使い魔が四隅に囲うように立ち、その中  
心の緋色と乳白色が混ざった石で作られた格子状の箱に収められた  
それを

「禁書だ……」

それは小さな呟きだった。しかしその場にいた生存者全員の目を  
それに集める

「ここにあつたのか」

青年は驚きを禁じ得なかった

いくら隠されていたとしても、これ程簡単に見つけられる様な場  
所に保管しているとは思わなかったのである

彼は元々加々美を僕に持ち帰らせた後に一人残り、じっくりと探  
索つもりであつたので、こうも簡単に見つかるとは思っていなかった  
鏡という予定外の獲物が手に入りそうだったために予定変更をし  
たが、それでも探索に時間をかけようとは考えていた

その為に偽加々美が教師を殺し回つたのだというのに

青年は予想外の現実に暫し呆然とする



戻せない為に永久的欠損は免れないであろう

「違……………違つ……………私はそんなこと望んでない!」

鏡は自分の行為を否定するがその足下に転がる物が全てを語っていた

鏡は考えてしまったのだ

加々美が自分よりも上の存在になってしまつと

自分が加々美よりも下の存在になってしまつと

それを彼女のプライドが許さなかつた

例え愛した相手でさえ、

例え先程まで守ろうと必死であつた相手でさえ、

彼女のプライドという『思考の根本』にとっては例外にならず、

それを邪魔してしまつたのだ

「鏡ああああああああああ」

加々美はそれに気付いたのか、  
はたまた体の痛み故か、

大声で鏡の名を叫ぶと力なく泣き崩れてしまつた

「違つ……………私……………違つ」

否定しても無駄だつた

「私が加々美を傷つける訳無いじゃない」  
言葉に信頼を得るため無理に笑おうと引きつった顔を作り出す

しかし加々美は泣き崩れたまま一向に鏡を見ようとしな

怒りで狂った目を向けてくれても良かった

浮かぶ涙で苦痛を訴えてくれても良かった

殺したいと泣き叫んでくれても良かった

私を見てくれればきつと分かってくれるからと思ったから

私が加々美を傷つける事を望むことなんてありえないと分かっ  
てくれると

しかし加々美は鏡を見なかった

そんなチャンスすら与えてくれなかった

「そんな……わけ」

その目から零れる涙が意味する事は彼女自身分かっていた

鏡の体は隠しきれない感情を涙と共に押し出してしまうおうと必死  
だった

加々美が鏡に再び歩み寄ってきた時にその感情を内包しておかな  
い様にと必死だった

愛しい者を二度と傷つけまいと必死だった

その為に思考の根本を捨て去ってしまおうと必死だった

人格が壊れても良かった

歯車の軸であったそれを抜き取ってしまったても良かった

そう思えた

こうなっ

て初めてそう思えた  
こんな現実を作り出して初めてそう思えた

しかし遅かった

私のプライドが加々美を傷つけたなら

それを心の中から排除したかった

そんなモノ消し去れば良い

そうすればまた私は加々美を愛する資格を得られると思ったから

だけど

加々美は

私を見なかった

私が流す涙を見なかった

それはきつと

加々美が結論付けたから

鏡は加々美を自分の欲のために傷つけたと

鏡は加々美以上に自分を守りたかったと

加々美は鏡にとってその程度の存在だったと

鏡の様子など見ずに既に結論付けてしまったから

加々美は嘆く

自分は鏡に捨てられたのだと、鏡は約束を守らなかったのだと

その事が

腕の痛み以上に



彼女を苦しめていた

心身共に大きな傷を負って泣き続ける加々美を鏡は顎を振るわせながらずっと見ていた

その目にはもはや涙は無かった

加々美が二度と自分の領域に戻らない事を悟ると涙は止まった  
流れ落とそうとした種を体にまだ残したまま……………

既に青年はいない

それは廊下に迫る無数の足音を感じ取っていたためだ  
彼は自分の身を案じて校舎外に転移していた  
手に入れようとした三つの獲物を全て諦めて  
その足音の中によく知った音を聞き取ったのである

扉が大きな音を立て吹き飛び、数人の男が剣を持って威勢良く入ってくる

その出で立ちにはまるで騎士のようで、甲冑には鳩と鴝の羽が描かれていた

それは『秩序の哨兵』<sup>こへいひょう</sup>と言う名の騎士団であった。平和の象徴である鳩の羽と正義の象徴である鴝の羽をモチーフにしたシンボルが目印である。彼等はこの世界で魔に対抗するために人間達が作り

出した集団の中でも最大の規模を誇り、その活動範囲はヨーロッパ全域に渡る。

扉が外れた入り口から見える人々の中には生徒会長等数人の生徒もいた

「こいつ等です！ こいつ等が先生達を！」

生徒会長が鏡と加々美を指さして叫ぶ

その言葉を聞くと、一人の人物が部屋の中に入ってきた

その者が歩く度に大きな金属同士がぶつかり合う音が立つ

それは秩序の哨兵でも特に有名な女性の魔法使い、マーレード・モロウであった。彼女は『鉄塊』と言う二つ名で呼ばれている。その名の由来は彼女が常に鎧つている鎧にある。その鎧はあらゆる魔法を受け付けられないと言われている魔法具で、彼女の体は殆どそれで包まれており、露出しているのは関節の部分だけであった。

彼女の家に代々伝わるその鎧は大地の精霊の祝福を受けた由緒正しい魔法具であり、名は持たぬがその存在は世界に広く知られている。魔が使う霊力、第一が使う古代霊力、人間が使う魔法に粗方有効であるとされ、これを巡っての争いが起こるほどの宝である。

これまた余談だが、精霊と妖精は全くの別物である。前者は太古からの地球の住人である一方、後者は第一から派生した種族である。精霊はその物が魔力となる存在であるが、第一に過ぎない妖精は魔と同じく地球の力を利用しないと霊力を行使できない。

「マド、どうしますか？」

騎士団の一人がマーレードに指示を仰ぐ

彼女がこの分団のリーダーらしい

「待て、様子がおかしい」

兜の甲面を上げて中の顔が露出される

その中から現れたのは鋭く綺麗な目をしたうら若き乙女の顔であった

「まさかあれは……」

生徒会長は察したようだ

恐らく彼もこの学園に禁書が隠されていたことを知っていたのだろう

「禁書です！」

彼の言葉に騎士団や生徒達はざわめき始めた

禁書を初めて見る者が殆どであったが、その名は知っており会長の言葉に大きな反応を示したのだ

「見るな！」

数少ない、禁書を知る者であるマーレードは配下の者に命令を下す「禁書を見るな。いいな、これは命令だ」

その危険性を知っているマーレードは自身も必死に目を逸らそうとするが目はその一枚のパピルスに惹き付けられそうになってしまっ

530

禁書はあらゆる人間における欲をその紙面に見せるという。その欲の幻想などを見せるのではなく、欲を持つ者全てを惹き付ける呪いがかかっているのだ。

故に殆どの人間が欲望に負けてそれに目を向けてしまうのである。恐ろしいのは、見た者の中で禁書との適正が高い者は無条件に禁書に書かれた呪いの一部を受け取ってしまう事だ。それこそが禁書と呼ばれる所以である。

なら何故魔法使い達は禁書を欲するのか？ それはごく一部の人間は禁書から恩恵を受けられるからである。

そう、『元魔師』の様な類似希な才能を持つ輩共は……。

鏡は何かが自分を下から覗き込んでいる感覚に囚われる

それと同時に何か大きな存在、そう、まるで悪魔のような強大な

存在が自分を天高くから見下ろしているような感覚にも

そして見てしまった

パピルスの黄土色の紙面に二本の銀色の線が浮かび上がる

(な……に……?)

その銀色の線は上下に分かれ、目のような模様が浮かび上がった

(だ……れ……?)

その目に鏡は惹かれる

それはまるで鏡を誘っているように瞬きを繰り返した

「あ……あ」

「何だ？」

マーレードは禁書の付近に立っていた少女が呻き声を上げ始めたため危険を感じ取り目を開いた。

「マド、あの女が禁書を！」

「いかん、見るなと言っただろ！」

だが時既に遅く、部下7人の内2人とそして生徒の数人が石と化した

「なんてことだ、これが禁書の呪いか」

一瞬でその者達の全身が石となってしまったのだ

マーレードは恐怖で全身を振るわせる

その震えの本当の理由をまだ彼女は分かっていたいなかった

「あ……あ、あああああ」

禁書を覗いていた少女が奇声を上げる

「何が……起きています？」

その様子に異質な感覚を覚えた各人は手をこまねくしかなかった

それは突然であった

鏡の左腕に禁書から何かが伸びる

それはまるで銀色の化け物の手が鏡を求めようと直線的に伸びていた

それは鏡の左腕を掴むとぐるりとその腕を囲み、うねりながらその腕を登る

鏡の首まで辿り着くと、その少女的な体躯に染み込むように消えてしまった

「この者、禁書と同化したのか？」

マーレードはじつとその場面を観察していた

既に自分が禁書の呪いにかかることが無いと分かっているため熟視し続ける

禁書に囚われた少女は動きを止めた

「……………奴を捕らえろ。好機は今のみだ！ 絶対に逃すな！」

マーレードは知っていた。禁書に囚われた者は直ぐにはその力を行使出来ないと言われているのだ。魔法使いの間に伝わる説話に、危険な禁書を得ようとした魔法使いが使い魔に殺されるという話がある。その時の状況として禁書に飲み込まれた直後で立つのもやっとなんと言え、労々としている魔法使いを使い魔が壺の中に閉じこめたと伝えられている。

それは禁書の中に住んでいた怪物が乗り移った宿主つまへつの中を覗いている時にその魔力と生命力を根こそぎ奪うからだとされている。そしてその後宿主は怪物の方に移った生命力と魔力を頼りに生きてい

くという。つまり宿主が禁書の怪物に寄生する形になってしまつのである。

「マドの命が下りた！」

騎士団の男達は一斉に腰から杖を抜き出し鏡に向かって呪文を唱え始めた

それは封印の魔法であつた。魔力を各自で分担することで人一人丸ごと包むほどの魔力の殻を作り出しその中に対象を永久的に封じる強力な魔法で、これを扱えるようになるには十年以上の特化した訓練が必要とされる。

しかし彼等の思い描いていた結果は訪れなかつた

所詮は説話、多数の支持を受けた物だけが遺される形態であるが故に少数の考えは受け入れられなかつた

だから彼等は誤つてしまつた

禁書の怪物に因る略取を物ともせず、逆に禁書の怪物を己の体内に封じ込んでしまつという人間が存在することをその物語は知らせていなかったのだ

「ふふ、はははははは」

鏡は今まさに殻に閉じこめられそうになつた時、狂い嗤う

「これが禁書の力なのね」

そう言つて殻に手を伸ばす

「馬鹿な……」

騎士団は口々に驚きの声を上げた

彼女はその殻をいとも簡単に破り去つてしまつたのだ

「そんな、あり得ん」

だがどんなに口で否定しようとも現実が変わることがない  
その最悪な事態を受け入れるのに皆々は幾ばくもの時も必要とし  
なかつた

彼女の腕に殻が吸われていく

それで何が起きているかが分かつた

「そうか。封印魔法は大地の力を借り受ける魔法であつた」

「あれには恐らく大地母神に当たるいずれかの神として崇められた  
第一の断片が保管されていたのだろう」

「ならば……とても不味いではないか……」

騎士団の生き残りは一斉にマーレードの『鉄塊』と呼ばれる所以  
である宝鎧に目を向けた

その魔法具は大地の祝福を受けた物で、それはつまり今の鏡にと  
つてエネルギーの塊のような物であるのだ。例えあらゆる力を受け  
付けないとされる鎧であっても、鎧その物が従う力には対抗できる  
わけがないのである。

それは精霊の反乱であつた。

「撤収だ！」

マーレードは叫ぶ

命を重んじる彼女は部下の命をこれ以上失うことは良しとせず、  
撤退の命を下した

「了解」

騎士団は全員が素早く動き入り口へと移動した  
既に石化してしまつた仲間を助けることは出来ない  
それがマーレードの顔を悔しさに染めた

もしかしたら何所かに禁書の呪いをも解呪できる魔法使いがいる  
のかもしれない

その者の下に彼等を連れていけば助かるのかもしれない

しかし目の前の悪魔が許さないのだ

「退け。君達もだ」

マーレードは彼等と共に生徒達も逃した

そして一人入り口に残る

たった独りで禁書を取り込んだ魔法使いと対峙せんと構え立った

彼女は自身を盾にしようと考えたに違いない。せめて生徒だけでも生き延びるようにと。崇高なる騎士マーレード・モロウは自己の犠牲でより多くの人が助かると知れば喜んでその身を捧げるといふ人間であった。

「さあ来い悪魔」

マーレードは鏡のことを悪魔と呼んだ

それ程までに彼女は鏡に恐怖を感じていた

だがその震えは彼女の物ではなく、鎧にいる無数の地の精霊の恐怖心による現象だと言ふことに気付いていなかった

鏡は左腕を床に付けた

すると彼女の左手に逆十字の模様が浮かび上がり銀色に輝き始める

「これが禁書？」

鏡は自問する様に呟く

左腕を上げると床が十字状に剝り貫かれる

そしてその床の一部は鏡の左腕と一体化していた

「これは……凄い」

鏡が驚いたのは鏡のみが知る感覚である

見る限りその塊は人間が片手で持てる物ではないが、鏡は一切の



重みを感じないのだ

「……………」

マーレードは少女が大きな塊を軽々と持ち上げている様を見て内心大いに焦っていた

精霊による守護が期待できない今では、いくら自前の鎧が堅くてもあの様な塊を全力で振り回す事による衝撃に鎧が耐えきれぬ訳が無く、既に敗北を感じ取っていた

「だが、退けぬ！」

マーレードは全霊を以て己の得物である鉄棒に呪文をかけた

鉄棒はダイヤモンドの原石を棘状に纏い、その殺傷能力を飛躍させた

だがそれでも勝ち目はなかった

鏡が左手を大きく振りかざす

マーレードは鉄棒を前に構えるだけで攻撃態勢になることすら諦めていた

既に自分の役目を終えたと悟り、その目をギリと閉じて来るはずの衝撃をただただ待っていた

自身が扱う魔法の全てが大地の力を借りた物ゆえ目の前の悪魔に對して何の力も持っていなかったのだ

しかしいつまで経ってもその鎧に十字状の塊が振り下ろされることはなかった

マーレードが目を開くとそこには誰かの背中があった

「加々美、あんた……………」

それは容疑者である少女の背中であった

彼女は鏡とマーレードの間に立ち鏡による攻撃を阻もうとしてい

ただ

「そこを退け！ 私は犯罪者の手など借りぬわ！」

「……もう止めよう。鏡、もう良いだろ？」

マーレードの言葉など聞こえていないかのように彼女は鏡に顔を向け訴える

その手に握られた何かの破片は彼女の腕の震えを誇張していた

「もう奴はいないんだ。だから良いじゃないか」

「……でもこいつ等はあんたのことを」

それがあまりに意外だったのであろう、鏡は目を見開いてその現実を拒絶するように首を振った

愛しき者に降りかかる火の粉を吹き飛ばそうとして挙げた手を、その者によって下げる事を拒まれたのだ

しくじった、鏡はそう悔やんだ

禁書の力を試そうとして自身に先程目覚めた元魔師としての力を使わずにいた事をだ

目の前に加々美が立った時点でもはやこの力は使えなくなってしまう  
まった

いや、もしかしたら加々美の後ろから覗くマーレードだけを狙う事は出来るのかもしれない

しかし確証が無いため加々美を巻き込んでしまう可能性がある限りそんな冒険は鏡にはできなかった

「きつと分かってくれるさ。それにもしかするとウチが偽物と対面している場面を使い魔を通して見ているかも知れないじゃないか」

「それは無いわ。だったらここに入ってきた時の生徒会長の言葉はもつと別の物だったでしょうに」

「それは……」

二人は全く目を逸らさずに互いの目を見つめ合う

そうでもないと言いが起こってしまうことを予感していたから

拒絶した加々美が鏡を撃つか  
拒絶された鏡が加々美を潰すか

予感と言つにはあまりにはつきりとした未来を感じ取れていたのだ

「それに、私はもう戻れない！」

鏡はうつすらと涙を浮かべて叫んだ

その右手は石と化した人々を指していた

「貴方と違つて言い訳のしようが無いのよ」

その目に浮かぶ涙は量を増し、鏡の左腕はゆっくりと誰にも当たらないように下ろされた

左手の塊は粉となつて崩れ落ちた

「大丈夫、この人なら分かってくれると思う」

そう言つて加々美は後ろの騎士に目配せをした

「よく分らんが……貴様が無実だと言うことが証明された暁には  
その禁書の女の罪も大分軽くなるはずだ。仕掛けたのは我々だからな」

「だから証拠が無いのよ！ それに生徒の方はどちらにせよ私の罪  
でしょ」

偽加々美の死体は既に男と共に消え失せていたのだった

鏡は幼い頃に戻つたかの様に地団駄を踏む

一度でも捕まつてしまつたらもう二度と日の目を浴びる事は叶わないであろうと鏡は考えていた。騎士団の犠牲者を出してしまつたのだ。加えて禁書を取り込むことに成功した魔法使いでもあり、元魔師でもあるのだ。そんな者を彼等が世間に再び送り出すはずが無かつた。

禁書によつて起きた事故はその所有者の責任となる。そしてこの場合所有者は鏡となつてしまうのだ。所有者とは魔道における定義として保管者でなく結合者、つまり魔力的に繋がった者となると言う、訳のわからない法が存在する。例えばその時点においては鏡が所有者でなかつたとしても、罪は禁書に溜まり、その後この禁書と繋がった鏡がその罪の責任を問われてしまうのだ。禁書を持つ際に背負い込む負の世襲財産とでも言うべきなのか。

これは魔道協会という全ての魔法使いを総合管理している国際機関が決めた法である。その理由は『禁書を一般の魔法使いの手に置いておきたくない』と言う事である。禁書と言つのは世情を混沌に招き入れる要因になりうるからだ。よつてその罪を被りたくない者は魔道協会に禁書を提出しなくてはならないのである。これによつて回収された禁書は指定された施設にて管理されている。

その指定された施設の一つがこの学園であつた。

「そのこの騎士の御嬢さんが思つていられるほど魔道裁判は綺麗じゃないのよ……。私は知つてるのよ」

鏡は感情を何とか押し殺して吐く様に言葉を繋げる

「……確かに私は裁判自体に知識は及んでいない。だが我々は正義と平和を守る者だ。貴様が正義を訴えるなら我々が耳を傾けよう」

「ほら鏡、この人もこう言っているんだし……」

「嫌よ！ 絶対に嫌！」

鏡は魔道裁判の非道さを熟知している為絶対に従う気はなかつた

魔道裁判は鏡の両親を死刑にした。

その罪は真実とはかけ離れていて、てんで不合理であつたが、新たな優秀な魔法使いの体を早急に手に入れたかつたとある魔法院の要望に応えなくてはならなかつた一部の裁判官は弁護人と手を組んで鏡の両親を死刑へと追いやつたのだつた。

その事は既に大人の頭を持つていた鏡に深く根付いていた。

しかし絶対の権力に逆らうことが出来ないという社会の有様を知った鏡はその事を忘れようと必死に目を逸らし普通の魔法学生として日常を過ごしていた。

ところが今日、あの男の所為で全てが脳裏に再来し、深く焼き付かれてしまった。トラウマとなっていた魔道裁判を思い起こしてしまったのだ。

「鏡……お願いだ。これ以上罪を被らないでくれ」

「嫌よ……あそこには絶対に行かない」

「鏡……」

加々美は鏡によって奪われた左腕のことを頭から放り出していた人は誰にも間違いがあるのだと、そう思って

絶対に鏡の中に自分が入りこめないと思い知らされたのに頭の隅で彼女を庇っていた

しかし、もう一つ鏡が加々美の提案に従わない理由があった。

考えてしまったのである

今の自分なら復讐が出来る

彼の魔法院の輩共と魔道裁判に関わった輩共に一矢報いることが出来る

禁書のおかげである秩序の哨兵が諸手を挙げて逃げ散る様な強大な魔法使いになった自分ならばと

それに鏡には元魔師としての力があり、これによってその思いは更に彼女の頭を占めていった

「加々美」

「……何？」

「私と一緒に来て？」

「……」

鏡が差し出した右手を加々美はじつと見つめる  
その目の意味する物は何なのであるうか

せめて近くにいて欲しい、互いの思いは一緒だった

「待て、それは私が許さんぞ」

「力無き者が吠えたところで何も変えられないわよ」

「何だと！」

鏡の言葉にマーレードは怒り心頭に発し、無謀にも襲いかかろうとした

しかし加々美がそれを抑える

「鏡……」

鏡は加々美の口の動きを目で追う

自分が期待している動きをすると信じていたから。

思いは一緒だった

二人は互いを求めていた

鏡は例え二度と自分を好いてくれなくとも加々美を敵から守るために彼女に横にいて欲しかった

加々美は例え鏡が絶対に自分を受け入れる事が無いと分かっててもその横にいてその人生を眺めていたいと思っていた

加々美は鏡を愛していた

鏡は加々美が愛しかった

数拍前まではそうであった

思いは一緒 のはず だった

「私はお前の事が大好きで……大嫌いだ」

しかし加々美は思いを変えた

それは鏡が考えもしなかった言葉であった  
単に断られるならまだしも……

「行きましょう」

「しかしこの女も……」

「良いじゃないですか。それに力尽くって言うのも無理な話でしょう？」

「それはそうだが……わかった」

無言のまま固まる鏡を放って二人は話し合いの結果を出した

「じゃあね、鏡。好き……だったよ」

二人は部屋を出て行ってしまった

一人残された鏡は呆然と立ちつくしていた

加々美が目を開くとそこには寝る前に見ていた天井があった。

当たり前だ。

カーテンから朝日が漏れている。いつの間にか朝になっていたの  
であろう。仮眠のつもりがすっかり熟睡してしまったようである。

左腕が頬を軽く叩く。

「ああ、おはよう静納しずな」

彼女は左腕に挨拶をする。

別に彼女の頭が可哀想な状態になっているのではない。

「いいよ、下りな」

左腕がブルリと震えると袖の中から狐がすり出てきた。左腕は狐が化けていた物であった。いや、この狐の姿も静納という存在が化けた物ではあるが、彼は実体化する際は狐の姿を好むため加々美も彼を狐として扱っているだけに過ぎない。

「最悪な夢見だったよ。悪夢って奴だ」

加々美は左腕に化けていた静納という狐の額をクシャクシャと撫でながら白い歯を零した。

「全く、折角高いホテルを選んだのにこれじゃ気分が冴えないね」

静納は加々美の言葉を理解しているのか、その頬を加々美の手に擦りつけて鼻を鳴らした。

「あまり思い出さたくない物なんだけどなあ。やっぱり昨日あいつにあつたのが影響したんかね？」

狐に尋ねても言葉持たぬ為返答はない。

静納とはシャーマンとして開花した加々美の相棒である。姿は狐だが実は霊体であり、具現化しているのは加々美の能力が非常に高だからだ。霊体の時の姿は辛うじて動物に見えなくもないが、地上に存在する動物のどれにも似ていない。その様は白い紐に近く、四肢も尾も存在している。しかしその頭部には目も鼻も存在していないため生物として生きるための構造は殆ど無いと思われる。霊体故にお腹の中を開くわけにはいかず、どうなっているか分からないのだ。

彼は加々美が寝ている最中や仕事はずっと左腕になっているが、休憩中等で他に誰もいない状態では実体化したがる。どうやら撫でられるという行為が大変にお気に入りらしく、それをされるには実



体化しなくてはならないためである。

ちなみに左腕となるのは彼の尾だけであり、左腕となっている間は常に加々美の背中側にそれ以外の部分が浮いている構図となっている。体長は4メートルを優に超えるためその半分を占める尾部分を除いてもそれだけで加々美を軽く超えてしまう。

「おっともうこんな時間か」

テレビの電源を入れると天気予報と共に時刻が表示されていた。

「今日は依頼主と直接の面会だったさ。仕事で特定の依頼主と対面するのは初めてだから緊張しちゃうね」

くすくすと笑いが零れる。

彼女は自分の口から緊張という言葉が出たことが面白いらしい。

「緊張なんて平和な言葉、何ヶ月ぶりに口から出たのかな？」

加々美がカーテンを開くと眼下に無数の建物が無秩序に建っていた。

「やっぱり日本は違うね。うちみたいな人間でも平和を感じてしまうのかね」

顔を洗い室内に置いてあった電話でロビーに朝食を注文する。

「あ、ホットサンドってありますか？ おお、あるんですか。ならチーズとハムが挟んである奴をくださいな。ええ、ありがと」

それから部屋のドアがノックされるまでの間に身支度を調えた。

食事を終わると皿の上に落ちているチーズの滓をフォークで弄くりながらあの時のことを思う。

「例え左手をもがれてもあいつの事を嫌えなかった……。それ程までにウチの頭は奴に侵されていたって事かね」

自分の事ながら笑えてくる。一生の怪我を負わされた相手を好きでいるなんてあほらしい。

「でも……そう。きつとそんなことが頭に入らないくらいあいつが輝いていたから」

鏡は何でも持っていたから。魔法使いとしての素質を、妬まれるほどの美貌を、魔性の魅力を、そう……何でも持っていたから。

「眩しすぎて自分の姿が見えない程にウチは目を細めていたのかもしれない」

自分の状況が分からないままにあいつを引き留めようとしていた。

だってあいつ、そのまま何処かに行ってしまうそうだったんだもの。

「でも結局見放したのはウチ」

それはあいつが教えてくれたから。

「人間の醜さつて奴をあいつが教えてくれた」

そう、鏡かがみという鏡かがみに映っていたのは人間の醜さかい性と、ウチという何の取り柄もない見窄らしい人間だった。

力を手に入れた鏡は人格が変わった様に思え、そんな何もかもを手に入れそうになっていいるあいつにウチの様なちんけな魔法使いはとてもじゃないが釣り合わないと思えたのだ。

いや、もっと大きな理由があった。

高嶺の上に神が飾った宝鏡を手に入れようと崖を登ったが

最後の一步で泥塗れの自分の姿がその鏡面に映し出されると

見窄らしい自分にその美しい鏡を手に入れる資格があるのかと悩み  
何も手にせず崖を戻っていった

近づく事が恐かったのだと思う。  
あいつに近づく汚い物をもつと知ってしまうと思ったから。  
ウチにはその事だけが耐えられなかった。

いつかの話と同じ。

あの文章の主は自身を神聖視していたが、ウチは鏡を知らず知らず  
に神聖視していた。

だからあの時に自分の思いを理解したウチは、  
親愛なるあいつと、  
嫌悪なるあいつが、  
好きで嫌いになった。

だからウチは大きな物を手に入れた代わりにあらゆる物を失って  
しまったあいつから、  
ちっぽけで何の取得も持たない自分を逃がすという残酷な事を、  
傍で鏡が濁ってゆく様を見たくないからという理由で、  
良く考えずにやってしまったんだ。

自分が鏡にとって最後の理性の留め金だったとも知らずに。

「どうやらここね」

依頼主が指定してきた場所はこの駅の下にあるユニークな形をした像の下だった。

既にそこには一人だけ誰かを待つように立ち呆けている人物がいた。

「……………嘘でしょ？」

その人物が予想外過ぎて刹那の間、現実を受け入れる気になれなかった。

そこに立っていたのはどう見ても子供であった。

その少女の白い肌は周りの日本人と大きく違うためひどく目立っていた。

「……………はあ」

加々美はため息をつく。もしかすると依頼が子供の悪戯だったかも知れないのだ。もしくは通貨の種類を間違えているとか。

「ま、人は見かけによらないって言うしね」

自分を頼りない言葉で元気付け、やっとの思いで現実を受け入れさせる事に成功した加々美はその少女の下へと階段をとぼとぼ下り始めた。

第五話 貴女と私 / 1

1

ねえ有、貴方は知ってる？

人間は見た情報を確実に保存することは出来ないのよ。

どうやっているかですって？

簡単よ、「きつとこういう景色だった」って勝手に想像しているだけなの。

だから同時に見た物でも一方だけを情報として抽出できたりするの。

貴方も経験したこと無いかしら？

状況記憶の中では目の前に二人の人がいたはずなのに、片方だけの姿だけを忠実に覚えてるって事とか。

それはね、もう一方の人を想像するだけの情報を貴方が取り入れなかったからなのよ。

それはつまりその存在を理解しようとしなかったって事。

ふふ、やっぱりあるのね。

ねえ、私の可愛い有。

貴方、自分の顔を思い出せるかしら？

そう、そうよね。

貴方は自分の顔を思い出せないわよね。

私も同じよ。

でもね私は貴方の顔だけは確実に思い出せるの。

どうしてですって？

おかしい事言うのね。

毎日顔を合わせているのだから当然よ。

それに好きな人の顔は覚えられるものでしょ？

ふふ、恥ずかしがらなくても良いのよ。

ねえ有……貴方は私が護るわ。

そう、絶対に……。

だからね、貴方も私を守って……。

小さなドアのノック音で目が覚めた。それは起きている人間には届いても寝ている人間には届きそうにない程小さかった。それでも私の耳には届いてしまったんだ。だって昨日の夜に期待して布団に入ったんだから。

「尼土様、お時間です」

もう一度小さくコンコンとノックの音が鳴ると数秒間だけ無音の時間が訪れる。

「……………失礼します」

その言葉と共にドアがゆっくりと開かれた。

そこにいたのは何処か楽しげな椒ちゃんだった。でも私と目が合うと直ぐにいつもの機嫌が悪そうな顔になった。

「起きていられたのですか」

「うん、おはよう椒ちゃん」

「ええ、おはようございます」

椒ちゃんは私が黙っていたのがどうも気に入らないらしい。

多分さっきの顔を見られたのが嫌なのかな。

「今日も良い天気だね」

「……………まだカーテンが閉まっているのによくお分かりになりますね」  
話題転換のための苦しまぎれな言葉に椒ちゃんは呆れたような態度を見せてカーテンを開く。長方形の窓枠いっぱい朝の白い光が降りかかっていた。その光を見るだけで私は目がぱっちり覚める。「まあ尼土様の仰るとおり今日はよい天気なのでその戯れ言も許しましょう」

外を見る椒ちゃんの横顔は差し込む日差しの力を得てか、いつも以上に綺麗だった。いつも通りの髪型にいつも通りのメイド服、しかし一つ違うのは、いや、本当だったら違っているはずだったもの

があつたんだ。

「ねえ椒ちゃん、昨日の約束忘れちゃった？」

私の言葉が指す物が分からないのか椒ちゃんは軽く首を傾げる。

「『尼土様』は禁止つて言つたよね？」

「……………本気だったんですか？」

はい、本気です。全く、何を言っているんだい椒ちゃんつてば！

お姉さんはね、それを楽しみにしてこの朝を迎えたんよ！

「勿論だよ。後、約束忘れたらお願い聞いてくれるとも言つたよね？」

「言いましたっけ？」

「言つたよ！」

椒ちゃんとはぼけているようだけど、昨日お互いに約束事を決め合つたのだから、その約束を破つたときの罰として決められた「願いを出来るだけ叶える」という約束も有効だ。

「分かりました。尼土様は何がお望みですか？」

やっぱり覚えていたみたいで、あっさりと納得してくれた。

「ほらまた」

「……………有様は何がお望みですか？」

「そつだな……………」

うーん、実は何も考えてなかつた。椒ちゃんは徹底して約束を守ると思っていたから冗談で言つただけだったんだもん。

私の言葉を今か今かと待ちわびて、ちらちらと覗くその目の下にあるぷっくりとした唇を見て私はナイスでグッドな考えを思いついた。

「そつだ、おはようのチューでもお願いしようかな」

「……………本気ですか？」

勿論！ つと首を縦に振つて表現する。椒ちゃんの眉がほんの少し吊りあがつた。

「御主人様に報告しますよ？」

「う、それはちよつと……………」

非常に不味い気がする。いや、椒ちゃん相手なら朱水も許してく



れそうだけどそれでも少しの間不機嫌になる姿が目に見えていた。

「それに人間の口は雑菌だらけで、睡眠中に口の中でどんどん増えるんですよ？ そんな口に私がキスをしると？」

椒ちゃんを私を叱るように一本指を立てる。その勢いを見たなら椒ちゃんを知らない人は間違いなく拒絶していると思うだろう。でも私みたいに椒ちゃんを少しでも理解している（自称だけどね）者にしたらこの椒ちゃんの言葉はただの上辺だけの言葉だってことくらい簡単にわかるんだ。

「私、別に口にしてとか言っていないよ？」

「……そうですね。早とちりだったって事は認めます。でもしませんが」

「そっか……残念……」

わざとらしく落ち込んでみる。椒ちゃんにはこの攻撃が一番有効だと言っことを既に私は知っていたりする。するとやはり椒ちゃんは大きく揺らいだ。因みに今の椒ちゃんの頭の中は絶対にこういう考えが巡っているはずだ。『私はしたくありませんけど有様が酷く残念がるため、仕方なくです』ってね。上辺の言葉を飛び越えられる踏み台を用意してあげれば椒ちゃんは結構簡単に越えてくれるんだ。

「……分かりました。ほっぺだけですよ？」

「うん！」

頬を赤らめてすっごく可愛くなった椒ちゃんはベッドの上にいる私の横へとふわりと座った。私の肩にそっと顎を寄せ、腕をぎゅっと掴む。

（ほっぺ！ ほっぺ？ ほっぺですよ！ 椒ちゃんってば可愛すぎるよ！）

小さな呼吸と共に漂う椒ちゃんの匂いに鼻血が出そうになるのを必死に抑えて何とか平常心を保とうと頑張る。頭がこれ以上熱くなったらきつと椒ちゃんを押し倒しちゃって抱きついちゃうかも知れないから。

「目……閉じてください」

「う、うん」

「御主人様には内緒ですよ」

「勿論だよ」

頬に少し湿った柔らかい椒ちゃんの唇がちよつとだけ触れる。

「……これで良いですね」

直ぐに離れてしまったが唇が触れたとこだけがとんでもなく熱い。

「私はもう下に行きますからね」

少し目が涙ぐんだ椒ちゃんが困ったような恥ずかしいようなそんな顔をして言うものだから、嬉しさのあまり言葉を発せられなかった私はただただ頷くしかできなかった。

「早く着替えて下さいよ。後……」

椒ちゃんは私をちらちらと見ながらぼそぼそと呟く。

「もう少しはだけにくい寝間着にした方が宜しいかと」

椒ちゃんの目線の先を見るとそこにはぱっかりと開かれた私の胸元があった。椒ちゃんに気を取られていて自分の姿に注意できていなかったようだ。

「う、うん」

私の返事を確認した椒ちゃんはメイド服の皺を正してドアへと歩いていった。

「ではまた後で」

しっかりと丁寧なお辞儀をして椒ちゃんはドアを閉めた。

私はクラクラと上せた頭を支えきれずに再びベッドへ崩れ落ちてしまう。丸めた布団を抱くようにして何とか椒ちゃんへの抱きつき欲を誤魔化してみた。

「あゝも〜可愛すぎるよ〜。どうしよう、私この生活に耐えられるかな」

この前の三連休以降、椒ちゃんは私の家に住むようになった。

叔母さんは椒ちゃんについてあまり探求せず、簡単に了承してくれた。多分私達の雰囲気から何かを感じ取っていたのかな？あの笑顔の中に大人の余裕を見た気がするもん。

さっきのことはこれが理由だったりする。この家には「尼土様」に該当する名字の人物が二人住んでいるのだから名前で呼んで貰わないと困る。それに気付いたのは昨日で、ついだからと色々約束事を決めただ。

（と、言ったところで本音は勿論椒ちゃんに名前で呼んで貰いたかっただけなんだけどね）

こじつけているわけでもないのだから時椒ちゃんはちゃんと頷いていた。

（なのに忘れるなんて……もしかしてわざと？ 私にお願いしてもらうため……な分けないか）

自意識過剰にも程があるね。我ながら反省猛省。

リビングに入ると既にテーブルに二人とも着いていた。

「有ちゃんおはよう」

いつものように手を軽く振って叔母さんは挨拶をしてくれた。

「おはようございます」

私もいつものように返す。

叔母さんの名前は尼土 志保里しほり、私の母親という人物の妹だ。叔母さんは多分魔のことについて何も知らない。一度もその様なことを示す言葉を叔母さんの口から聞いたことがないし、普通の人間としか思えなかった。

「おはようございます」

椒ちゃんもポテトサラダを分ける手を止め二度目の挨拶をしてく

れた。

「うん、おはよう」

「ふふ、今日のサラダは椒ちゃんの手料理よ」

「え、ホント？」

「は、はい。お口に合うか……」

「合う合う。絶対合うよ！ 椒ちゃんの手料理だもん、むしろ口を合わすよ」

椒ちゃんはこの家に来てから少しずつ料理を覚えていった。叔母さんに教えて貰っているようだ。たまに私も教えるが教官としては圧倒的に叔母さんの方が優れているため叔母さんが教える事の方が多い。椒ちゃんは叔母さんに教わっている間よく楽しそうにしていた。

「ほら、有ちゃんも席に着いて」

「はい」

椒ちゃんが分けてくれたポテトサラダの小鉢を受け取って自分のいつもの席とその横に置く。

座る席はいつも同じで私と叔母さんが対面する形だったのだが、椒ちゃんが来てから叔母さんの左に椒ちゃんが座るようになっていく。あ、私から見たら右になるのかな？

そうなった理由は叔母さんが「こんな可愛い子私の横以外許さない」って駄々を捏ねたからだ。全く、いい歳なんだから駄々なんて捏ねないで欲しいよ。みっともないと言うより見てるこっちが恥ずかしくなる。

3人で「頂きます」の挨拶をしようとした時に椒ちゃんが席を立った。

「あら、もう来たの？」

椒ちゃんは叔母さんの問いに頷くと玄関へと向かっていった。その間にチャイムが鳴る。

「椒ちゃんって凄いい子ね。忍者とかじゃないの？」

叔母さんは自分の言葉にクスリと笑う。あながち間違っていない気がするから私は取り敢えず同意の意を示しておいた。

玄関が開く音がすると、次にドタドタと廊下を走る音がし、そして最後に制服姿の由音ちゃんが元気よく登場する。

これも最近の日常である。

由音ちゃんは本当に私の家が直ぐそこであるアパートに引越して来て、最近は殆ど毎日朝食を共にしている。最初の頃は朝食を三人だけでとっていたが叔母さんが誘ってくれたおかげで食卓が更に賑やかになったのだ。実は政府公認で学校に行く必要も無いらしいのだけれど、体裁のために以前通っていた学校の制服を着ている様だ。

「おはようございます!」

「あら、おはよう」

「由音ちゃんおはよ〜」

由音ちゃんは元気よく挨拶をする。

「今日は早かったわね。いつもはもうちょっと遅いのに」

「いや〜珍しく起きられて。本当は毎日戴きますの挨拶の前に来たいんっすけどね」

頭を掻きながら照れ笑う。

普段は由音ちゃんってばお寝坊さん気味なので食事は先に3人だけで始める形になっている。最初の頃は待っていたりもしたのだけれど遅刻ギリギリになることが二日連続したために今の形になった。「取り敢えず退いていただけませんか?」

入り口を塞ぐようになっていた由音ちゃんの後ろで椒ちゃんが呆れたように言う。

「おっと御免なさいっす」

由音ちゃんは素直に言葉に従い、私の隣に座った。

椒ちゃんも静かに自分の定位置となつて席に座る。ちなみに由音ちゃんと椒ちゃんが対面するような席位置だ。つまり私の右手

側に由音ちゃんが座っている。二対二で御見合っている感じと言えは分かりやすいか。

「なら珍しく四人で言えるわね。じゃあせうのっ」

叔母さんが合図するとみんな口々に「戴きます」と言っつて各自のご飯に箸を付けた。

「そう言えば二人とも朝は洋食だったんですつてね」

「洋食と言つても自分は焼いたトーストにマーガリン塗つた奴と牛乳だけつすけどね」

「菅江様、トーストを焼くという表現はおかしいですよ」

椒ちゃんは相変わらず由音ちゃんには手厳しい。

「私達の屋敷では朝は洋食となつております」

椒ちゃんは焼き鮭の小骨と箸で格闘している所為で顔をしかめながらも答える。

ちなみに本来椒ちゃんは食事をとる必要はないらしい。だけど流石に何も食べていないと叔母さんが不思議に思うだろうから食べて貰う事になっている。一応臓器の種類は人間の体と同じだから食べることは出来るらしい。

「悪いわね、この家だと朝は和食と決まつているのよ」

叔母さんはこの食事が楽しくてしょうがないようで、さっきから私達三人を忙しく見回していた。

「いえ、この様な朝食も趣があつて楽しいです。それに志保里様の手料理は本当に美味しいので大好きです」

「自分も大好きつす！」

椒ちゃんと由音ちゃんの返答に気をよくしたよつで、いつも素敵な可愛い垂れ目が更に垂れていた。

「由音ちゃんはその朝食でお腹持つの？」

普段しっかり食べてる私からしたら由音ちゃんの朝食メニューが

とても少なく思えてしょうがない。食パン一枚だけでよくお昼まで持つもんだ。というかそんな食事でその胸ですか……お姉さんが今まで摂ってきた栄養はどうして由音ちゃんみたいにしてくれなかつたんかね。

「結構平気つすよ！」

由音ちゃんは元気よく答える。その頬にはご飯粒が幾つか張り付いていた。

「菅江様、みつともないですよ」

そう言つて椒ちゃんが苦笑しながらそのご飯粒をとって焼き鮭が載つてる皿に置いた。由音ちゃんもさり気なく顎を出して取りやすいようにしていた。

流石に椒ちゃんは取つた米粒を食べたりはしないがその行動は凄く意外だった。

（珍しい……椒ちゃんが由音ちゃんにあんな事するなんて）

こうしてみると二人は年が近い姉妹みたいだ。近すぎて仲がギクシヤクしてるとかそんな感じ。性格的にお姉さんは椒ちゃんかな？

「はい？ 私の顔にも付いていたりしますか？」

椒ちゃんは私の視線にてつきり自分の顔にもご飯粒が付いていると勘違いしたようで、自分の頬を手の甲でぐりぐり拭つた。

「うんにゃ、付いてないよ」

「はあ……」

不思議がるが直ぐまた再びの鮭との格闘に戻つた。本当に無意識にやつたんだらうな。

「うふ、んふふふふふ」

叔母さんも同じ事考えたのだろうか、凄く楽しそうだ。

「ちょ、叔母さん、口からお米吹いてますよ」

「あらあら御免なさい」

叔母さんつたらほんと若々しいというか、凄く一緒にいて楽しい人なんだけど、たまには大人なりに落ち着きを持って欲しい。

「こんな可愛い子達と一緒に食卓を囲めるなんて最高ね。おばさ

ん生きてて良かったわ」

「私は可愛くないですかそーですか」

「いやねえ。有ちゃんもすごくプリチーよ！」

「……プリティです」

椒ちゃんが何故か叔母さんの言葉を後追いする。

「はいはい。一応そう言うことにしときますよ」

「本当よ」

叔母さんはわざとらしく涙声になる。ほんと、幼い人だ。でもそこが良いのかもね。

私がこの家に来た頃の記憶は何故かほとんど無い。多分私の力がそうさせているんだろうけど。だからいつの間にかここに住んでいるって言う感覚なのかな？

叔母さんの陽気な性格のおかげで私達は仲良く生活してきた。だから直接の親子ではなくとも何ら苦痛無く、楽しい生活を送ってこられた。これって結構幸せな事だと思うんだ。

「そういえば由音ちゃんって中学生で良いのかしら？」

叔母さんはご飯を一生懸命口に詰めてる由音ちゃんに訊いた。そう言えば私も直接本人に訊いた事が無かった。口に詰まりに詰まったご飯をよく噛んで飲みこんでから由音ちゃんは答える。

「いえ、高校生ですよ」

「え？ そうだったの？」

意外だ。私もてっきり中学生だと思っていたよ。あれ、でも前に矢岩君から十三歳って聞いたはずんだけどな。

「はい。高校生っす」

「あらあら、私ってば失礼なことを」

「いえいえ。よく間違えられるんで慣れてるっす」

由音ちゃんは手をおばさんみたいに振って笑う。その姿を椒ちゃんは訝しげな目で見ていた。私にもそれとなくわかる。今の由音ち



やんは何かを隠してる。いつもの顔じゃなくて何処か辛そうな、そう、この前一緒に風呂に入ったときに見せていた直ぐにでも壊れそうな笑顔と同じ顔をしていた。

「小母様は何のお仕事をなさっているんすか？」

「椒ちゃんのお目線に気付いたのか由音ちゃんは慌てて話を変えた。」

「うーん、言っただけ分かるかしら？ 皆がね、安全に過ごせるように頑張る仕事よ」

私も同じ事を訊いた時に今と同じ答えを返されたっけ。何故か叔母さんは仕事を教えてくれないのだった。

「へえ。なら社会にとって重要な仕事なんですね」

「そうね。結構大事かもね」

叔母さんはくすくすと笑う。何が楽しいのだろう？

「椒ちゃんは朱水ちゃんのお屋敷のお手伝いさんをやっているのよね？」

「はい。一色家でお仕事をさせて貰っています」

本当は微妙に違うんだけど話がややこしくなるから叔母さんにはそうやって誤魔化しておいた。

「いきなり現れた時にそんなお洋服着ているのだから。私驚いちゃったわ」

確かに普通は驚くと思うかな。だって椒ちゃんはいつでもこのメイド服を着ているんだもの。この前一緒に学校まで歩いていった時間なんてみんなの視線集めていて結構恥ずかしかったものさね。椒ちゃんの方は全然恥ずかしそうには見えなかったけどね。

「この服に私は誇りを持っていますので服を替える気はありません」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」  
「……あの、同じ服を何枚も持っているので着替えてはいますよ？」  
「だ、だよー」

皆が皆同じ事を考えたのだろう。誰も口に物を運ばなくなったの

を不審に思った椒ちゃんが真実を明かしてくれた。

「当たり前ですよ」

椒ちゃんはちよっぴりいじけたように口を尖らせながらちよっぴり骨を取り終えた鮭を箸で割った。

「あらこんな時間。おばさんはちよつと早く出て行かなくちゃいけないからもう失礼するわね」

「そうなんですか？ 行つてらっしゃい」

「行つてらっしゃいませ」

「行つてらっしゃいませ！」

椒ちゃんは丁寧に一礼して、由音ちゃんは元気一杯に手を振って叔母さんを送り出す。

「私達もそろそろ食べ終わらなきゃね」

私達の余裕も残り僅かだった。既に食べ終わっていても良い時間だつていうのにこつも遅いのは、きつと四人全員が最初から揃っているのが嬉しくて仕方がなかったからだと思う。みんな嬉しくていっぱい喋っちゃったから口に物が入らなかつたんだよね。

「ん、終わり。んじゃ二人は歯磨いてきてね」

いつもの習慣で私がい終わった食器を運ぶ係だ。

「いえ、私は先に有様の制服をアイロンがけしておきます」

椒ちゃんはご馳走様と言った後、一礼して二階へと上がっていった。

「有君、流石に歯は一緒に磨けないっすよ」

「……ああそうか」

同じ洗面台だと二人で歯は磨けないよね。いつもは微妙に時間がずれてるからすっかり忘れてたよ。

「じゃあ由音ちゃんが先にどうぞ」

「はい」

由音ちゃんは元気いっぱいでリビングを出て行った。

本当に、あの時と違って凄く好い表情をしてくれる。お風呂での

由音ちゃんは今にも泡となって消えてしまいそうなほど儂げだった。あの後椒ちゃんに言われて隠れていたのに、「仕事っす」と言い捨てて一人で出て行った時は、その背中をもう二度と見られないかと思ってしまう程霞んで見えたものだった。

「よし。戸締まりも良いね？」

玄関でお互いの仕事の報告を交わす。これも日課となっていた。

「はい。全て施錠済みです」

「ガスと蛇口は？」

「確認したっす」

やっぱり3人もいると出かけ際のチェックは簡単で良い。これが一人だと結構時間を食うんだよね。

「よし、じゃあ行こっか」

「はいっす」

「お二人とも気を付けて」

玄関で二手に分かれる。私と由音ちゃんは学校へ、椒ちゃんは朱水の家へ。

椒ちゃんは朝と夜は私の家にいるが、私が休みの時以外は昼の間朱水の家でお仕事をしている。本当は朱水はしなくて良いと言ったのだけれど椒ちゃんがやると言って頑として聞かなかつたらしい。何か、椒ちゃんらしい。

「行ってきまゝす」

「行ってくるっす」

私達二人は玄関で手を振り続けてくれている椒ちゃんに別れを告げて学校へと歩き始めた。

「ねえねえ有君」

家から学校は由音ちゃんが私に付いていてくれることになっている。彼女は割りとお寝坊さんだけど一応毎日この時間にだけは間に合っている。朱水にああ言った手前流石にここで遅刻は出来ないらしい。

「なあに？」

由音ちゃんの表情に釣られ私もつい頬が緩んでしまう。

椒ちゃんは相変わらず微かに不機嫌そうな表情を作っているけど、由音ちゃんは常にニコニコしている。

「今日は有君にとって良いことがあるっすよ」

「へえ、何かな？」

「学校に行けば分かるっす」

あやー、そんな言い方だとお姉さんでもばつちり分かつちゃうんよ。

「……何というか、察しが余程悪い人じゃないと今の言葉で大体分かっちゃうよね」

もしかしてさっきの高校生発言ってこの事だったのかな。変に心配した私が馬鹿みたいだ。いや、何も無かつたんだもの、喜ばしい事かな。

「あー、もつと言葉を選べば良かったっすね」

早い段階でばれてしまった所為で少しショックを受けてる由音ちゃん。何か可愛い。

「そっかそっか。でも制服はどうするの？」

今着てるのは違う学校の制服、そりゃ数日は他校の制服でもいられるだろうけどやはり新しいクラスに溶け込む際に障害になっってしまう傾向があるために早い段階で指定の制服は欲しいものなのだ。

「もつとつくに注文済みっす」

おお早い。流石引越準備は万全と豪語するわけだ。

「実はもう持ってたなり」

そう言っただけのフアスナーを開ける。そこにはちゃっかり私の学校の指定制服が入っていた。どおりでいつも以上に鞆がパンパンなわけだ。

多分私を驚かそうとして最初から制服を着るのは止めたのだろう。詰めが甘いよ由音ちゃん！

「なら今日のお昼に制服姿見せてよ」

「いいっすよ。教室に向かえば良いんですか？」

「ううん。私達はいつも屋上で食事してるから屋上に来てよ。屋上へ行ける校舎は一つしかないから迷わないと思うよ」  
「だけど由音ちゃんの顔が固まる。」

「ん？もしかして高いところ苦手だったりする？」

あんなに自分を売っていたのにそんな弱点があるのだったら少し間抜けだ。でもそれはそれで何かかわいげがあつて良い。

「……達っすか？」

「ん？あ、まさか由音ちゃんつてば朱水の事忘れてたの？」

どうやら凶星だったらしい。由音ちゃんは頭を抱えて悩み始める。

「ううん……折角楽しい昼食になると思ったのに。鬼神さんの目の前だったなんて」

朱水の前だと緊張して食事が出来ないのかな？でもこの前夕食に誘われたときはバクバクと朱水の前でも平然と食べていたけどなあ。

「折角二人きりになれていちゃいちゃ出来ると思ったのに……」

……そっちなか！

「で、今日の学校が騒がしかったのは貴女が転校してきたからなのね？」

「は、はい」

屋上には私達三人しかいなかった。屋上は相変わらず他の人がいない。

朱水と一緒に屋上への階段を上ると踊り場には学校指定の制服に着替えていた由音ちゃんが既に立っていた。

うん、確かにそれだけだったよね。他に由音ちゃんは何もしてなかったし、変な事もしてなかった。

それなのに空気が一瞬で凍り付く。

そして聞こえるのは朱水の歯ぎしりだけだった。

そんなこんなで今、由音ちゃんは屋上の縁に座る朱水の前に正座させられている。流石にそのまま正座するのは痛そうなので朱水は自分のハンカチを由音ちゃんの足の下に敷いてあげていたけど。

私はと言うと、自分だけ食事を始めるわけにはいかず、朱水からちよつとだけ離れて縁に座って二人を見守っている。

「まあ確かに？ 私だけよりも貴女がいた方が有も安全よね？」

「……はい」

「でもそれって私にとって凄く不快なのよね」

「……はい」

朱水は本当に泣きそうな由音ちゃんを責め続けていた。

「私が有と一緒にいられる短い時間を！」

「……………」

「貴女は！」

「奪う気なのって訊いているのよ！」

流石に可哀想じゃないかな？

「ねえ朱水、そんなに言う事もないんじゃないかな？ それにここに呼んだのは私だし」

「……………だって本当に大切な時間なんだもの……………嫌よ」

ちよちよちよ！ 今朱水がとんでもなくレアな顔しましたよ！  
まるで幼稚園児が臍を曲げたような顔！

朱水があんな顔するなんて考えもしなかったよ。

「御免なさい……………。昼飯は自分の教室で食います」

由音ちゃんはさり気なく涙を拭ってゆらりと立ち上がり、こちらを一瞥もせずにとぼとぼと疲れ切った様子で歩き始めた。その後ろ姿はとてもじゃないが見てられなかった。

「……………」  
「わ、分かったわよ」

私の無言の訴えが通じたようで、朱水はそれを追って由音ちゃんを止める。

「私も少し子供染みた態度だったって思うわ」

朱水は由音ちゃんを無理矢理方向転換させてこっちへ連れてこようとその背中を押している。

完全に由音ちゃんのその目は充血していた。あそこまで言う事無いよ朱水……………。

「ほら、仲直りしましょ？」

朱水は仲直りの握手を求めて由音ちゃんの前に手を差し伸べる。  
由音ちゃんは大人しくその手を握るが手を振る元気は無いようだ。

その様子で朱水は完全に負けを認めたとようで、縁に座った自分の膝に由音ちゃんを座らせた。

「悪かったわよ」

「……自分も浅はかな考えだったつす」

「いえ、貴女は有にとつて最良の環境を作ってくれようとしたんだもの。それを責めた私が完全に悪いわ。御免なさいね……許してくれるかしら？」

朱水は由音ちゃんの肩に顎を乗せてその背中を包むように座る。

（いいなあ由音ちゃん………つて待て待て、そうじゃないだろ私！）

「許すも何も、自分は朱水さんの意に背くような形にする気はありません」

「そう。なら私は今後も三人で食事したいわ」

「……いいんすか？」

微かにだが由音ちゃんの顔色に赤味が戻る。

「いいわよ」

どうやら一件落着の兆しが見えたようだ。

（それにしても二人はくつつきすぎだと思っただ、うん）

「ふふ、ねえ由音ちゃん、有のあの顔見て。あの子ったら嫉妬してるわよ？」

「し、してないよー！」

「あら、有の事は私にはお見通しなんだから隠しても無駄よ」

そこでやっと由音ちゃんは笑顔に戻ってくれた。

やっぱりあの時の彼女を知ってしまった私には、彼女の笑みこそが何よりの『彼女の証』に思えてならなかった。



そしてやつと三人でお昼ご飯を食べ始めた。朱水は由音ちゃんの抱き心地が相当気に入ったのか、今も抱きながらお弁当を食べている。

「ねえ由音ちゃん。貴女のお弁当とっても個人的ね」

朱水は目の前にある由音ちゃんのお弁当を興味深げに眺めてそう言った。

私はその言葉に一体何所が個人的なのかと不思議に思い覗いてみると、

「キャラ弁……ですかえ」

そう、それはアニメや漫画のキャラクターをご飯や色取り取りなおかずで作るあの『キャラ弁』だった。

「あゝ悪い事は言わない。お姉さん的にはそれは止めた方が良くと思うんよ」

流石に高校生にもなって、というか中学生でもそれは子供染みていると思うんだ。

「うう、やっぱ不味いつすかね？」

「うん、かなり」

由音ちゃんも多少は自覚しているようで、恥ずかしそうにお弁当の蓋で隠そうとした。でも朱水がその蓋を取っ払い、そのお弁当の中に入ってた卵焼きを勝手に食べてしまった。

「私は好きよ。それに、うん、美味しいわ」

いや、後半は全然話に関係ないよ。でもその言葉は不思議と由音ちゃんを元気づけたようで、由音ちゃんもちっちなフオークでお弁当を再び突き始めた。

（なんか微笑ましいな）

二人が仲良く食べているのを見てみると私の心はすっごく温かくなってきた。

「椒もね、昔はこういう風に私の膝に乗ってお昼寝していたものよ」  
「そうなんすか？ 何だか淒く見てみたいっす。きつととんでもな

「可愛いんでしょね〜」

由音ちゃんは椒ちゃんの寝顔を想像したのか、フォークを止めてポーっとしだした。そして涎がジュルリと出そうになると慌てて動き出す。

そう言えば前から思っていたけど、椒ちゃんはあからさまに由音ちゃんに対して敵意みたいな感情をむき出しにしているけど、由音ちゃんは椒ちゃんに対して全くそういう感情は無いようだ。むしろ好いてるんじゃないかな？

「ねえ有、貴女も由音ちゃん抱いてみたらどう？」

どうって朱水さん、貴方の物じゃないんだから勝手に決めちゃ駄目ですよ。でも本当に気持ちよさそうに朱水が抱きついているものだからつい私もやりたくなってきてしまった。

「えつと良いかな？」

一応由音ちゃんに確認しようとしたが、それよりも早く由音ちゃんは私の膝に座ってくれた。

「……ご、これは！」

気持ちいい何て物じゃない！ ギュツと、ギュツとしたい！ それも激しく、情熱のままに！

「えつと、どうつすか？」

不安そうにこつちを向く由音ちゃん。だけどこつちを見ないでおくれ。今の私は確実に他人様に見せられるような顔をしていないんだ。朱水の顔が私の横にあってよかったよ。

「き・も・ち・い・いー」

一文字の度のため息が出るほど素晴らしかった。

「そ、そうつすか？」

由音ちゃんも気分が良いらしく私の体に自分からすり付いてくる。すると由音ちゃんの髪の毛のサイドアップが私の頬を軽く擦り、それす

ら気持ちよくなってきた。

(ああ、小動物系って言う言葉、この子みたいな子に使うんだろ  
うな)

暫し食べる事も忘れてその感触を楽しんでいると朱水がいきなり  
私の横に座った。

「朱水？」

「……………」

そして朱水はさり気なく、そう、本当にさり気なくだが私に寄り  
かかりながら食事を再開した。

(まさか嫉妬？ 何だろう……今日の朱水すごく可愛い)

いや、いつも以上と言った方がその切れ長なツリ目に睨まれずに  
済むかな？

「幸せ」

思わず口に出る。幸せの重みを二つ同時に感じている今の私は間  
違いなくこの学校一の幸せ者だった。

「そうね、何だか今まで在った事の何もかもが全て何かの物語で、  
私達はただその物語を読んでいたに過ぎないって、そんな幻想すら  
覚えるわ」

どうやら朱水までこの幸せ空間にやられてしまったようだ。

でも、彼女は違った。

「ね、由音ちゃんもそう思うでしょ？」

由音ちゃんは朱水の言葉に力なく笑うとその視線は弁当へと移り、  
そのまま動かなくなってしまった。

「あ、由音ちゃんが編入した教室ってどうだった？」

抱きとめているはずの由音ちゃんが何だか凄く遠くに感じられた

ので思わず言葉で繋ぎ止めようと話題を変えてしまった。

「一年二組っす。まだクラスメイトの名前全然覚えてないから誰がどうのって言えないっすが、みんな親切な人だったっす」

でも私が喋ると笑う人もいたっすけどね、と由音ちゃんは言った。多分彼女の口調の事を笑ったのだろう。由音ちゃんは変わった喋り方をするものだからその子はい笑っちゃったんだと思う。

「きつと由音ちゃんが来てみんな喜んでるよ？」

「そうっすか？」

「勿論だよ。こんな可愛い子が転校してきたんだもの」

「そうね。特に男子なんて大喜びでしょうよ」

朱水と二人で頷き合う。

多分言いたかった事は同じ、私達はさっきからずっと同じ事を考えていた。

由音ちゃんは皆に好かれる子なんだよ、って。

(椒ちゃんはちょっと特殊なケースだから例外なだけだもんね)

予鈴が鳴り響く。

「っと、時間だね」

慌てて私達は鞆にお弁当箱を仕舞う。

「それじゃ由音ちゃん、放課後は迎えに行くから」

「あ、自分が行くっすよ」

「うんそれは止めた方が良いよ。上級生の教室って結構入りにくいものだよ？」

下級生だから入りやすいとも言えないけど、横柄な態度を取られ

ない事は間違いない。

「それと由音ちゃん？」

朱水は由音ちゃんの頬を手で優しく挟むと言い聞かせるように言った。

「何か学校での心配事や問題があったら遠慮無く私達に言うのよ？ 貴女さつきから何か隠しているようだから一応言っておいてあげるわ」

そうなのか……。私は全然気が付かなかったけど朱水にはお見通しだったようだ。

「はは、やっぱ朱水さんには気付かれてしまったっすか」

「ちよつと待った。由音ちゃん？ ここは学校よ？」

朱水はその発言に暫し首を傾げるが自分の言葉の間違いに気付いたららしく、言い直す。

「朱水『先輩』は鋭いつす」

ああ、確かにそうだった。朱水や私しか居ない場合は構わないが、他の生徒の前でいきなり転校生が先輩である私達を親しげに呼ぶのはおかしいかな。

朱水はそう言うところにも気が利くようで、由音ちゃんに気付かせてあげたみたい。

「それで、何を隠していたのかしら？」

由音ちゃんは少し困った顔をするが朱水の真っ直ぐな目に観念して鞆の中から何かを取り出した。

「これなんですけど」

それはパツと見てもアレにしか見えなかった。

「ちよつと、由音ちゃんつてはいくら何でも好かれすぎだよ！」

そう、それはどう見たってラブレターだった。

それは一時限目と二時限目との間の休み時間の話だった。

廊下は何やら騒がしく、特に男子の野太い声が響いていた。

「なあ、何かあったのか？」

丁度トイレから戻ってきた輪島に問いかけてみる。廊下を通ってきたのだからこの喧騒の原因を知っているかもしれない。

「ん？ ああ、君中が何だか凄いことになってるって話だ」

「お、あいつ今日は顔出したのか」

君中はサボり癖が酷く、あまり学校に出ない人間だ。どうやら今日は出ているみたいだが……。凄い事って何だろうな。

「でな、あいつがどうやら今日一年に転校してきた子に一目惚れしちゃったんだと」

「マジかよ！」

あいつが人間を好きになるとは……。これが他の奴だったら恐らくさほど大ごとにならないはずだった。しかし君中だとそうはいかないのである。

君中は顔は良いんだが所謂オタクで、二次元に現を抜かしているらしい。それもそう言う類のアニメを見たりゲームをするために学校に来ないと言う重症のレベルで、サボり癖と言うより半引き籠もりなのかも知れない。

そんな人間が二次元以外の人物を好きになる等もしかしたら生まれで初めてなのではないだろうか？

「マジだよ。今ラブレター拵えていやがる」

「おいおい、あいつらしくないな。そんな積極性なんて何所に隠していたんだよ」

「気になるなら廊下に出ればいい。そうすりゃ分かる。クラスの連

中が大騒ぎしているんだ」

いや、眠いからパスだな。どうも最近眠くてしょうがないんだ。それに出来れば行動的な時の君中に関わりたくないっていうのがあるしな。

それは二時限目と三時限の間の休み時間だった。

授業を終えた先生が教室から出ると勢いよく反対のドアが開かれた。その大きな音にみんなの目が一点に集中する。

しかし当の本人は他人の目など気にならないようで、真っ直ぐこちらへ向かってきた。

「宇津居、次の時間ちよつとつきあってくれ！」

……………ガツデム！！ よりにもよって俺かよ！

それは三時限……………いや、もういいか。

さっきの休み時間に俺に告白の付き添いという面倒で尚かつとんでもなく恥ずかしい役を求めてきた君中によって、強制的に俺は一年生の教室がある階へと連れてこられた。

「で、どの子なんだ？」

こいつ君中はなかなかどうして人の迷惑を考えない人物で、こういうやる気満々の時は断らずにこいつに付き合った方が後々楽だと言ふことは経験上熟知している。断ると恨みの言葉を延々と耳元で囁かれるという罰が待ち受けているのである。

まあ勿論一番上等な答えは断る云々の前に「関わらない事」である事に間違いないが、それは運次第である。こいつから近付いてきたなら防ぎようが無いのだから。

「あ、あの子」

君中が指さす方を見る。その方向には一人の座っている女子が幾人の男子に質問攻めされているような生徒の塊があった。

「あいつ等……………俺の嫁を……………」

……ああ、何だ？ 嫁って……未だ彼女でもないのによくそんなこと言えるなこいつ。

しかし彼の本気で妬んでいるのであろうその形相を目の前にして  
いる俺にその事に対するツッコミを入れられる勇氣は全く湧いてこ  
なかつた。本気で恐いぞ……。

とにかく分かつていることはこいつを敵に回しちゃいけないって  
事だけだ。

「男子があれだけ集まっているって事はそれなりに可愛いんだろう  
な」

「……当然だろ！」

いや、そんなに凄まれても今日転校してきた下級生の顔なんて知  
っているわけ無いだろう。勿論今のも口に出す勇氣は無いがな。

「で、どうすんだ？ あの集団に突っ込んでいって渡すのか？」

「そ、それは流石に……」

急に怖気出す君中、やはり集団は例え今の様な興奮状態でも苦手  
らしい。

「なら廊下呼び出してみるか？ 何なら俺が呼び出し役を買って  
やっても良いぜ」

「おお、頼む」

君島は俺の腕をがっしりと掴むと何度も頷く。いや、そんなに掴  
まれたら動けないのだが。

とまあ、早いところ教室に帰りたい俺はさっさと事を済ませよう  
とする。こいつが告白するのに躊躇える状況だといつまで経っても  
進展しないからな。

「じゃ、行ってくるわ。あ、あの子の名前は？」

「知らない」

……おいおい。ま、今日初めて知った人物の名前何ぞ知るわけ無  
いか。それじゃ行ってみるか。

いや待て、俺が行くよりもっと簡単な方法が在るじゃねえか。



「ちょっと待ってる」

君中にそう言っておくと俺は教室に入ってとある人物の横に立つ。

「あ、宇津居先輩」

「よう。ちょっと良いか？」

彼は同じ部活の後輩だ。こういう時は同じクラスの人間に話を持ちかけるのが一番ベターなやり方だろう。

俺は廊下に出るようにジェスチャーをする。少し後輩の顔が引きつったのは気のせいではないだろうな。

「あ、ついでにシャーペンも貸してくれ」

「……はい」

俺ってそんなに恐い先輩として認識されてるのか？ 結構心外なんだが。

後輩は俺の言葉にちゃんと従ってシャーペンを持って廊下へと移動する俺の背中に付き添っていた。

「あの、俺何かしましたか？」

まあいきなり呼び出されたらそうなるわな。

「いや、用があるのはお前じゃないんだ。今日転校してきた子がいるだろ？」

俺の横で何故か殺気じみた目を後輩に向けている馬鹿の所為で余計に後輩は緊迫した表情を見せていたが、俺の言葉で何とか安堵したらしい。見て分かるほどに顔が変わった。

「ああ、菅江さんのことですね」

「菅江！」

「……あの？」

隣の馬鹿がおかしな反応するものだから後輩は一步後ろに下がっていった。俺もこのままこいつから離れたいんだぜ。

「まあこいつは無視してくれて良い。それより、その菅江って子のフルネーム分かるか？」

「一応分かりますけど」

「よし、ならちよつとここに書いてくれ」

俺は教室の柱にあるプラスチック部分を指さす。ここならシャーペンの筆跡は手で擦るだけで消えるからな。

「分かりました」

後輩は俺達の意図が分からず戸惑いながらも一応彼女の名前らしき漢字を書いてくれる。

「菅江……ゆねであつてるか？」

「そうです」

「分かった。ちよつとそのペン貸して？」

後輩に借りたペンを君中に渡すと、やっと俺がやっている事の意図を理解した君中は自分が持つてきたラブレターに彼女の名前を書き足した。勿論後輩に見えないように俺が二人の間に入って壁になつてあげている。流石にそんなところを後輩に見られるのは君中としても恥ずかしいだろうからな。

書き終わった君中からペンを引つたくると後輩に礼を言って返し、ついでに菅江さんを呼び出して貰うことにする。

「はあ。良いですけど」

「なら頼むな。もう休み時間残り少ないんであまり説明せずにここに連れてきてくれればいいよ」

後輩は一応頷くが俺の横の馬鹿が未だに彼を睨んでいる事に怯えて、逃げるように彼女の元へと走っていった。

「これで良いだろ？」

睨んでいたことなどに対する追求とかはする気になれない。いや、出来ないと言つた方が正確だな。

「ああ」

未だ後輩の後ろ姿を睨んでいる君中は言葉少なに答えた。

多分こいつにとってはクラスの男子全員が敵なんだろうな。それが例え菅江さんに仲よさげでもそうでなくても関係なくな。

後輩は菅江さんに廊下にいる俺達のことを知らせるが、こっちに連れてこようとはせず、ただ廊下に行くようにと告げただけのようにだ。彼女一人でちょこちょここっちへやってくる。

まあ分からなくもない。この馬鹿がいる限り俺もきつと同じ行動を取る自信があるぜ。

菅江さんは少しおどおどとしているが一度も立ち止まらずこっちへと歩いてくる。

(それにしても……)

その子の第一印象は「小さい」だった。

まるで中学生の一年みたいで、失礼だがどう見たって高校生には見えない。

「お前の趣味はああ言う子なのか」

「分かってないね。高校生ながらあの純粹無垢な体ていを表している御姿！ 神々しくもあるう」

嗚呼駄目だ、こいつは本物だ……。俺の頭の中は今後のこいつとの交友関係を断とうかどうか論議している真つ最中だ。

転校初日に知らない男子に、しかも上級生に呼ばれたのがやはり不安なのか、彼女は俺達の前に立っている間ずっとキョロキョロと辺りを見回していた。仲間連れで何かされるとでも考えているのだろうか？ いくら目の前にいる奴の一方が酷く興奮しているからと言つて幾分失礼では無からうか？ まあ、鼻息荒い君中を目の前にしたら普通の女子はそう考えちまうかもな。

「あの、御用ですか？」

「……………」

女の子の割に随分と変わった口調だった。キャラクターを作っているのかね？ しかしぱつちりと開いた目と、首を傾げる仕草の所為で何だかその言葉が妙にマッチングして、可愛く思えてきた。

『おい、君中』

『分かつてる』

小声と肘で君中を急かすが、こいつはこの場に及んで未だ恥ずかしいらしく後ろ手で隠した手紙を菅江さんの前に差し出せないようだ。ここまで来て踏ん切りがつかないなら始めからやらないで欲しいと思ったが、誰しもこの様な状況では多少の怯えを持つものなのかもしれない。当事者でない俺だからこそ平然としていられるだけなのかもな。

(ラブレター何ぞ作ってる段階で恥ずかしいって気付かなかったのかねえ?)

一分ほど固まっている三人の間に言葉は無く、菅江さんが更に怯え始めたのでしようがなく俺は助け船を出してやった。

「これ貰ってくれるかな?」

そう言つて君中のラブレターを奪つて菅江さんに渡した。

彼女は直ぐにその手紙が何なのか察したようで、困った顔で俺を見る。

「はは、いきなり貰つても困るよね。でもちゃんと読んで欲しい。

そして返事も……そうだな、今日の放課後にでもしておくれよ」

彼女はペコペコと何度もお辞儀して、俺の言葉が終わると直ぐに教室の中に帰つていつてしまった。

「これで良いだろ?」

「ああ、助かった」

ああ、助けたぜ。大いにな。

君中の先程までの積極性は何所へ行つてしまったのか、一番大事な時に発揮できなかった。良く言う『ヘタレ』って奴だな。そのくせ周りの連中には敵意むき出しの視線を送り続けている。

「お、もう時間がないぞ。じゃあ戻ろうぜ」

俺達は一仕事終えた喜びと達成感で気分が良くなって階段を気持ち悪いくらいスツキリとした表情で駆け上がる。

でも気付いてなかった。俺は大ボカをしでかしていたんだ。

それに気付いたのは放課後、それも菅江さん達を目の前にして。

達？ そつ、『達』だよ。

何故か分からんが菅江さんの横に一色さんと……尼土さんがいるんだよ！

そして失敗したというのは……

「あの、御手紙読みました」

何故か菅江さんは君中でなく、俺に返事をしてきたんだ。勿論俺の横に君中の姿は無い。俺の所に来られたのは後輩にでも俺の事を聞いたのだろう。

（多分彼女はあのラブレターを俺の物と勘違いしたんだろうな）

ああ、大いに考えられる。渡したのは俺だし、返事を求めたのも俺だ。

（と言うか自分の名前くらい書いとけよ）

いない君中に文句を言ってもしょうがないが言わざるを得ない。

だってそうだろ？ 片想い中の子を目の前にしてふられてるんだぜ俺。しかも勘違いで。

「先輩のこと何も知らないので……」

んああああああ！ 尼土さんが俺をちらちら見てる。しかも頬を赤らめて。乙女な尼土さんは告白現場を見ているだけで恥ずかしいらしい。ああもう可愛いなあ！

いや、勿論俺の主観かつ妄想での判断だが。

「だからいきなりお付き合いはちょっと……」

それに引き替え堂々としている一色さん。彼女は何度も告白されて全員を振ったことで有名だ。だからこんな場面を見ても何も感じないのだろう。むしろその絶対零度な冷たい視線で観察されていて俺は居たたまれない気分になっていたりする。

俺なんかが貴方の前にいて済みませんってな。

「あの？」

「あ、ああ、はい」

どうしようか。

「えっとさ、言いくいんだけど……」

「はい？」

言わなくちゃいけない。主に俺の榮譽のために。俺は尼土さんが好きなんだから君に告白したという事実があっちゃいけないんだ。

「それ、俺が書いたんじゃないんだよね」

「……………え？」

分かる、分かるさその反応。俺だって予想できない状況なんだってばよ。

「隣に男がいたら？ あの手紙はあいつの物なんだわ」

照れ笑いな物を無理に作っておちゃらけようとしてみた。そうした方がお互い気まずくならず済むと思つての判断だった。

が、それがいけなかつたんだわな。

「あら。ならどうして由音ちゃんが全部言い切る前にその事を注意してくれなかつたのかしら」

「ちよつと朱水」

どうやら俺は一色さんを敵に回してしまつたようだ。

「由音ちゃんに恥をかかせたのよ？ 貴方はそれが分かっているのかしら？」

「す、済みません」

ずっと後ろで黙りこくつていた一色さんは二人の前に出でて俺に強烈な目力を浴びせてきた。それだけで俺の心臓は跳ね上がった。無論ときめきで無く、生命の危機の察知で。

「あれだ、多分私達が三人で来たから変にプレッシャーを与えちゃつたんだよ。ね？ ね？」

「はは、まあそんな感じですね」

嗚呼……優しすぎるぜ尼土さんはよ！ もっと惚れてしまつわ！  
尼土さんは俺の肩に手を置いて一色さんに向かうように立つ。

その手の重みが俺にはとんでもなく頼れる強さに思えた。

「ほら、こう言ってるんだし責めるのは可哀想だよ」

「……………有がそう言うならそれで良いわ」

一色さんは尼土さんの一言で直ぐに俺に対する怒りが冷めたらしく、他の二人に別れの言葉を告げると何処かへ行つてしまった。

あの一色さんがこうも簡単に引き下がるとは思つていなかったの  
で他の二人の前だが胸をなで下ろしてしまった。

「ふふ、やっぱり朱水って怖い？」

……おいおい、俺尼土さんに話しかけられてっぞ。

信じらんねえ……奇跡だろこれ。

「いえ、別に恐いとかじゃないです」

「そう？ みんな朱水を怖がってるから君もそうなんだと思ってた」  
尼土さんは俺の目を覗き込みながらくすりと笑う。尼土さんの綺麗な唇の艶がどうにも俺の視線を釘付けにして止まない。  
きつとこれは俺が見ている夢なのだと、本気で思えてきた。幸せすぎる。

「それもちょっと違いますよ。一色さんは美人過ぎて近寄りがたいだけなんか……と……」

「ここら俺は馬鹿か？ 惚れている相手の前で他の女子を褒めてどうするよ？」

「あはは。それもそうかもね。朱水ったらすっごい美人だから」  
尼土さんも相当可愛いよ……とは言えない俺である。それに言っても多分尼土さんは笑っただけだろうけど、心の中では恐らく俺を変な男と評価してしまうに違いない。それだけは避けたい。例えば彼女に恋人がいようと、俺は尼土さんに嫌われるのだけは勘弁だ。

「あの……」

放置され気味の所為で何処となく居辛そうだった菅江さんはやっと言葉を發した。

「ああそっか、由音ちゃんは手紙の人に会わなきゃだね」

菅江さんの言葉に尼土さんは本来の目的を思い出したため、二人は行ってしまった。けれど尼土さんは途中で振り返り俺に手を振ってくれた。

「幸せすぎるだろ……」



それと、俺は大事な事を再確認した。尼土さんは異常なほど可愛くて魅力的な女子だったって事をな。

後日談として一応報告しておくが、勿論君中は菅江さんにぶられた。理由は俺の時のと同じだったらしい。

2

人の声や獣の鳴き声も聞こえぬ静かな夜道には俺しかいなかった。いや、無音ではないな。電灯から静かに漏れる煩いノイズが俺の耳をさする。

俺は暗闇とは言えない闇を一步一步ゆっくりと歩む。それがどうやら俺の頭を悦ばすようで、地に靴底が触れる度に俺の心臓は小さく跳ねる。

歩く度に闇の影が遊ぶ。俺が足を地から離そうとする度に闇の中にある影から赤子のような手が伸びてくる。

そして俺の足を掴んで止めようと喚く。俺はその喚き声が、腕の千切れる激痛に苦しむ叫び声に代わるのが楽しく一人夜道を陽気に歩いているのだ。

無いはずの音が聞こえる。いや、無いわけではなく、気付こうとしていなかった音に気付けたただけだ。嗚呼、俺は何て愚かなのだろう。

こんなにも気持ちのいい音があるなど知らずに生きていたなんて。

だが、無音の夜道である。

「よお」

目的の地には既に先客がいた。

「先輩……」

菅江由音、俺の後輩と言わなければならない人物が墓石の前に膝をついて何かを祈るように屈んでいた。

「お前もか。まあ今日じゃないという意味がないからな」

「そつつすね」

由音はこいつらしくない曖昧な表情で答える。それも仕方ないことなのだろうが。

由音は墓石の敷地内に立てた小さな蠟燭に明かりを灯していた。俺の持つてきていた魔法具とは違って暖かな炎で身を溶かすそれは、深夜の墓場にあっても人の心を落ち着かせてくれているようだ。

「ちゃんと引き取って貰わなきゃいけませんもん」

由音は自分が持つてきた木札をその墓石の前に静かに並べ、そこに書かれている文字をちゃんと識別できるように蠟燭を近づけてその文字達を朗読し始めた。

「……今年が多かつたつすね」

全ての文字を読み終わった由音は最後に蠟燭の炎に息を吹きかけてかき消した。

その儀式は死者の導きだ。殺した魔の魂をこの墓石に眠る者に引き取って貰うという、何とも御都合の良い儀式である。木札に書かれた名を呼ぶ事で魂を呼び出し、墓に一緒に眠って貰うという物だ。呼び出した木札を燃やすと依代を失った魂は墓の中に眠る物に引き込まれる。

「仕方ない。それだけ殺さなければならぬ輩がいたと言っただけだ」  
「……そうっすね」

危険因子とされた者は絶対の言葉の下に排除しなくてはならない。逃がしてはいけないのだ。尤も危険因子は人間と魔の双方にとって不利益な物となるため魔も協力的になる事があるため、排除自体は楽な場合がある。

しかし俺達が殺す者は危険因子だけではない。人間が生活する上での敵となる存在、削強班に仇なす者、危険と判断した第一、それ以外にも多様な理由で命を奪ってきた。その全てが罪に問われる事が無いのだというのだから自分の事ながら驚きだ。

俺も由音に続き引き継ぎの儀式を行う。その間、由音は静かに俺の様を眺めていた。

「終わったな」

「はい。お疲れ様っす」

二人は目の前に積もっている燃えがらをそれぞれの思いで見つめる。

その時、由音が不思議なことを訊いてきた。

「先輩は人間をどう思っていますか？」

「魔でなく、人間か？」

「そうっす」

由音は恐らく俺の本性での答えを求めているのであろう。周りに人の気配が無いか気にしながら小さな声で訊いた。

「人間は……おかしな物を作る」

「それ、私達のことっすか？」

由音の口から笑うように息が漏れた。自嘲の音を含んだその声は

寂しく闇へと消えていった。

「そうだ。お前然り俺然り、そして決して完成されていない物を、な」

「そうだ、俺達は完成品ではない。」

「……自分は先輩を補えられているっすか？」

「ああ、助かってる」

「そうっすか……何か嬉しいっす」

由音は頬を搔いて恥じらうように小さく返す。

「由音、俺はお前の御蔭で人の心でいられる」

「はい」

「だから……死ぬな」

あまりに利己的な意見だろう。だが俺はどうしてもこれを言わなくてはいけなかった。

「やはり最近死に急いでいるように映ったっすか？」

「ああ」

尼土有の警護に就いた初日に由音は敵と呼べるかは定かではないが恐らく尼土有を狙っていたであろう者との争いがあり、生き残った。その間、例え近くにいたとしても手を出すにはいかず、己が仕事をやるしかなかった。

何とやるせない気持ちだったことか。半身ともいえる存在の綱渡りを近くで監視することすら許されないのだ。

「少しでも良い、自制心を持ってくれ」

「その言葉、先輩に言われたくはないっすね」

由音はおちやらけたように言う。

「それはそうだな」

その態度に俺の口からも知らずと安堵の声が漏れる。

何に対する安堵かは考えたくないが。

「さ、もう行きましようよ。こんな夜中に男女が二人きりって言うのは何かと誤解を招きやすいシチュエーションですし……ってあ痛  
っ  
っ」

アホらしいことをほざく頭に拳骨を一発振り下ろした後、燃えがらを拾い集めて墓石の文字を灰でなぞる。

「お前は自分の墓場の前くらいは真面目になれないのか？」

「へへ、御免なさいです」

その墓石には菅江由音と矢岩玄の戒名が掘られていた。

煤けた壁に小さくある円い窓からは暗い空が見えた。暫くスツキリと晴れた青空を拝めていない私は今日も自分の心に陰鬱な靄を溜め込むしかないのだろうか。

隣の部屋から漏れてくる軽快な音楽に耳を傾けながら私は空をよく見ようと窓に顔を近づけてみる。

「いやねえ」

丁度私の息が窓に白い曇りを作るほどに近づいたときにぽっぽつと水滴が窓に当たり始めた。

「今日も雨なのね」

窓の木枠は長年の結露で黒い染みを作っていたがそんなことは気にせずそこに顎を乗せてじっと外を眺める。外の世界は確かに暗いが存在する人々は天候に左右されることなくいつもの生活を送っているようだ。

「人間は強いわね。既に天候からは逃げられる程の力を持っているのだから」

うつすらと窓に映る自分の分身に話しかけてみたところで相槌という反応は来ない。勿論始めから分かっていることなので何も落胆すべき事ではないのであるが、今の私は切に変化を求めているためにその様な妄想を思い浮かべてしまう。外が晴れれば庭に出ることを許されるのだがこのような天候ではあの過保護男は私を出させてくれないだろう。

「はあ……陰鬱だわ」

漏れ聞こえる音楽が邦楽から洋楽に変わると、隣の部屋から足音が立ち始めた。

「御嬢様」

襖がゆつくりと開かれ、黒髪の男子が現れた。

「何かしら？」

彼は私をまるで鉋物のような目で見る。氷のように冷たいわけではなく、ただただ無機質な視線であった。

「お庭に出たいのですか？」

ゆつくりとそして落ち着いた様子で言葉を並べる。彼はいつも落ち着いていた。

「そうね、でも貴方がそうさせてくれないのでしょうか？」

「私とて御嬢様の気が晴れるために努力するのはやぶさかではありませんよ」

そう言つて近づき私の手を引いて立たせようとする。普段になく乱暴な様に少し戸惑いながらも私はそれに従い、慣れない姿勢のために痺れた足を頑張つて立たせた。

彼は私よりもやや背が低い。その事を彼は気にしているようであり私に近寄ろうとしない。勿論私から近づけば逃げるようなことはせずその場に留まり私に応じてくれるけれど。

「温、貴方少し背が伸びたんじゃない？」

「……先に庭に下りていきますので多少濡れても構わないような召し物に着替えてからおいで下さい」

私の言葉をさらりと流して彼は部屋から出て行った。やはり身長は気にしているようで例えば背が伸びたところで私より低くては彼にとって意味がないのだろう。

私は彼に言われた通りに革作りの上着を羽織り、後を追った。

長い長い廊下の先にはY字に別れた分岐点があり、私は庭へと続く方へ足を進める。もう一方は屋敷の本館へと繋がっているが、普段は何枚もの厚い鉄扉で閉鎖されていて誰も通過できないようにな



っている。私達は二人だけで別館に住んでいるのだ。

食料はリフトというのだろうか、エレベーターが上下に動く箱なら、あれは横に動く小さな箱であり、唯一常時本館と別館を繋いであるその線で運ばれてくる。また、内線で連絡すれば機械に入る程度の代物ならば簡単に要請できる。機械に入りきらない大きさの物は隔月で開かれる鉄扉を擦り抜けなければならず不便であるがまあそこは諦めるしかない。

再び長い廊下を突き進み大きな部屋へと出る。そこにはガラス製の大きな戸があり庭へと下りることが出来る。

ガラス越しに見える暗い昼空に再三の溜息を漏らしつつも、久しぶりに庭へと下りられる事への喜びによる高鳴りが入り交じる状態で温の姿を探す。

「温、何所？」

辺りを見渡したが彼の姿は見あたらず暫く私は立ち呆ける事しかできなかった。幾らかの時間が経ち私の頭もそろそろ冷静でいられなくなってきた頃によくやく男は登場したのだった。

「何所行つてたのよ！」

「そう邪険にならないで下さいな」

彼の手には恐らく今まで作っていたのであろう湯気の立っている白い液体が入ったマグカップが握られていた。

「ホットミルクです。今日は少し冷えますのでこれをお飲みになつて下さい」

またいつもの過保護っぷりが露出しだした。この男はいつもこうだから困る。

「あのさあ、私の体ってそんなにひ弱だったかしら？　一々私に構わないでくれない？　過剰は嫌いよ」

私は差し出されたホットミルクを飾り棚の上に置いて、彼の手に

ある唐傘を奪い取り勝手に庭へと下りる。彼は私の反応を予見していたようで、当たり前のようにミルクを再び手にとつてしなやかに歩き、私が丁度傘を広げた際に傘の下へと潜り込んできた。

「傘は私が持ちますので御嬢様はこちらをお持ち下さい」

彼は素早く私から傘を奪い返すと空いた私の手にマグカップを滑り込ませる。少し冷えていた指先にじわりとマグカップの熱が伝わり、それが何とも心地良く私は少しだけ興奮していた自分を鎮めることが出来た。

「では参りましょうか」

そう言つて私の行きたい方向へと勝手に歩き始める。まあ行きたい方向とは言つても探索経路はいつも同じなので別段驚くべき事ではない。

雨降りる庭を歩くのは幾らか久しく、私の頭の中では既にその時の光景は失われているようで、見る物見る物その全てが違う物に見えていた。露滴る樹木の葉や、ぽちゃりと響く池に垂れる水滴の音、雨粒による少しぼやけた景色、何より新鮮なのは私の手に付く雨の感触と音と冷たさだった。雨で冷たくなった右手を、持ち替えたマグカップで暖めつつ私はずっとその新世界に浸っていた。それこそ本当に自分が世界へと溶け込んでしまったかのように静かに……。

新しい世界を味わっている私の目に何かが映り混んだ。私は無意識にその方向へと振り向きそれを確認する。

「あら、まだあの子ここにいるのね」

それは見覚えのある傘であつた。そしてその傘の持ち主はこの世でただ一人であり、その人物は今現在本館で匿かくまわれているのだ。その旨は内線で連絡を受けているのでこちらも承知している。

「ええ、未だいらっしやいますね。それと最近はあの方の御客分も

本館にいらつしやるとか」

「あれ、そうだったの？ 変な気配がしていると思ったら本館の方だったのね」

なるほど納得である。最近になって胸がむかつくのは近くに新たな異分子が加わっていたからなのね。

「そうだ、今度その方も含めてこちらにお招きできないかしら？」  
きつと私に新たな刺激を与えてくれるに違いない。もう何年もこの箱庭に押し込められているのだ、たまにはこういう我が儘を吐いたところで大きく反発されることもないだろう。

と思つて口にした言葉であつたが結果的には温の眉を縦にするだけであつた。

「御嬢様、我々はですね……」

「あー分かつているわよ。はいはい、了々な弟様の言うことはちゃんと聞きますよーだ。御免なさいねー」

まったく、たまの我が儘、それも数年ぶりの我が儘くらい大目に見てくれたって良いじゃないのさ。

「御嬢様、今恐らく『たまにはいいじゃない』とでもお考えでしょうが」

「……………」

「我々は存在自体が危ういのですから勝手は許されません」  
分かっているわよ……言ってみただけよ……。

私達は人間と魔の間で取り決められた定義によって『危険因子』へと認定されているのだ。生まれついたこの力が私達を苦しめているのだ。

(いえ、苦しいと思つたことはないわね)

何故ならこの状態が『当たり前』だと思わされて生きてきたのだから。

本館に住んでいる者達は私達の肉親であり監視員でもある。この大きな牢屋から私達が逃げ出さないようにと言つよりも、むしろ私達に誰も近づかせないように。

危険因子に認定されている私達がこつやって生きていられるのは私達の能力の特殊性にある。

それは条件的な能力だからである。そして破壊的でもないため、限定さえ設ければ私達は「無害」であるためである。つまり『事実上の排除済み』となるため生きる事を許されているのだ。しかしこの管理から一度でも外れた場合は即座に物理的な排除を行いに使者がやってくるだろう。

伏原家ふしはらに生まれし男女の双子、相たすくと温あつし

二人は生まれるべくして生まれた存在

予め予言されていた誕生

既知であつた二人の誕生はこの大きな檻を作らせるにあつた

全ての準備が整つた上での生誕故に私達は生かされている

何もかもが予定通り

周りの人間は私達に人を近づかせないだけで良い

そして必要なときは力を利用すればいい

そう、私達は有益な道具なのだ

その名が意味するは「あい」と「をん」

その意味は「始まり」と「終わり」

始まりは終わりまでを見つめ、終わりは始まりまでを見返す

私達は双子でなくてはならなかった

一人で生まれてしまえばたちまち消えてしまうから

一つの存在で未<sup>み</sup>も過<sup>か</sup>も見<sup>み</sup>ることは出来ない

人間が同時に前後の光景が見られないのと等しい

二人で生まれなくてはならなかったのだ

そう、私達の力は未来視と過去視

姉の伏原相が未来視、弟の伏原温が過去視の能を有する

私達は魔にとっても人間にとっても至宝となる可能性を持つ存在  
なのだ

「御嬢様、これ以上はお体に障ります」

私が立ち呆けているのを横でただ見守っていた温は雨脚が激しくなったのを確認すると小さく私に声をかけた。その声で自分を取り戻した私は既に目先にあの傘の人物がいないことを今更知った。恐らく何分も前に通り過ぎていったのだろう。

「……そうね、戻りましょうか」

温は私の冷えた肩へと手を回しゆつくりと肩を押してエスコートしてくれた。彼は私の身の回りの世話をするように教育されている私達に接近することが一応は許されているのは両親だけであり、それも時間を限られているので会える短い期間で弟は教育されていたようだ。

私はそれを横目で見るだけでのうのうと育ってきた。この違いは私達の能力の違いに由来する。一般に過去を覗く者は未来を覗く者よりも下に見られるためだ。私はその事にあぐらをかいて今まで生きてきた。

弟は何も言わない。不平不満を言うこともなくただただ私の世話をしてくれる。

いつも思うのだ、私は弟無しでは生きられないのだと。

ガラス扉を閉じ、冷たい風がようやく肌を撫でなくなると私の心を締め付けていた感情が昇華していった。

上着に張り付いている雨粒を備え付けのタオルで拭き取っていると温が新しいタオルを渡してくれた。

「御嬢様、先程の件ですが一応申請だけでもしておきますか？」

「……どうしてかしら？」

「彼女はあの方の関係者ですので恐らく無理が通るか」と

そう言えばそうだった。現在の魔の重鎮として君臨するあの方に

縁深き彼女なら、私達との接触もあの方の手助けで容易になるのかも知れない。

「そうね、お願いして良いかしら？」

「はい、承りました」

雨で濡れたタオルを温に手渡すと彼は相も変わらず鉱物のような目のままニコリと笑った。

「御嬢様、御気分は晴れましたでしょうか？」

私は心の中で首を横に振った。

二人は対となる者

『あい』の前には何も無く、『をん』の後には何も無い

よって二人は互いにだけは干渉できないのである

二人は対となる「もの」

やや赤錆びた階段を上る度にローファアの靴音がカンカンと静かな朝の空気の中を泳いで行く。このアパートは見たところ築十年は経っているであろうか、壁は完全に汚れきっていた。雨水がもたらす緑色の苔も隠しきれない程生えそろってしまっていた。そのアパートの一室、二階の一番奥の部屋に備えられているドアホンをゆっくりと押す。

「由音ちゃん？ 起きてるかなー？」

暫く待つが何の返事も無い。なので今度は控えめにドアをノックしつつドアホンを連打する。

「由音ちゃん？ 遅刻しちゃうよー」

今朝は最近の朝とは違っていた。由音ちゃんがいなかったのである。珍しく私達が家を出る時間にも間に合っていないかった。そこで私は椒ちゃんに別れを告げた後に由音ちゃんのアパートへと来たわけだ。場所は毎日見ているくらいなので勿論覚えていたが、こんなに近くまで寄って見たことはなかった。なので改めて興味に乘っかりその外観を観察する。

「由音ちゃん？」

そろそろ隣の部屋の住人から苦情が出そうな気がしたのでドアホンのみに再び戻し、何度も押す。お寝坊さんなりに寝坊してるならどうにかして起こさなきゃ可哀相だもんね。十二回程押した位に部



屋の奥で何かが盛大に倒れる音が響き渡り、暫くしてドアがゆつくりと開かれ何だか顔色が悪そうな由音ちゃんが現れた。この青さでは起きたばかりだからという理由ではなさそうだ。

「ちよつと、由音ちゃん大丈夫？」

その表情を見れば体調が優れないのは明らかであり、何故由音ちゃんが来られなかったと言う理由も瞬時に悟った。

「へへ、ちよつとばかしまずいっすね」

由音ちゃんは無理に作った笑顔を見せるがその口は震えているため余計に辛そうに映るだけであった。

「ちよつと部屋入るよ？」

由音ちゃんの体を抱いてくるりと方向転換させて部屋の奥へと押していく。ふらふらと今にも倒れそうな彼女の体は少しの力だけで従っていた。

「今日は勿論お休みだよな？ もう病欠の連絡はした？」

由音ちゃんはゆっくりと布団の上に座った後、暫し私の顔を虚ろな目で見て首を左右に振った。

「そっか、じゃあ私が電話するよ」

取り敢えず由音ちゃんの担任には欠席の連絡をしておこう。これで由音ちゃんは何の気兼ねなくゆっくりと眠れるはずだ。携帯電話で学校の事務に連絡して由音ちゃんの担任に彼女が今日病欠することを伝えて貰う。由音ちゃんが持つ携帯電話は一般の相手に対しての使用は禁止らしいので私の物で連絡を取った。ついでに言うと同じ理由で由音ちゃんの電話番号を教えてもらえなかったりする。

由音ちゃんを抱きかかえてゆっくりと寝かせ、布団を被らせた。熱のこもった深い息を耳に感じながら彼女の小さな体をガラス細工のように丁寧に扱う。由音ちゃんは見た目通りとても軽かった。

「ありがとっす。有君が来なければ自分は恐らく無理にでも学校行ってたっすね」

「無理は禁物！ 今日はゆっくり眠りな〜」

寝かせた由音ちゃんのおでこを軽く撫でて落ち着かせる。由音ち

やんはとろんとした目を閉じて小さく頷いてくれた。その弱弱しい様にあれこれ構わずにいられなかった。

「うん、私に何かして欲しいことある？」

取り敢えず朝ご飯を軽く食べた方が良いかな？ 薬を飲むにも空腹はいけないもんね。

「由音ちゃんの朝食は冷蔵庫にある奴で作って良いかな？」

「あー冷蔵庫じゃなくて冷凍庫の方です」

「冷凍庫？」

由音ちゃんに言われたとおり冷凍庫を開くと……

「ああ、食パンか」

袋に開けられた痕跡がない食パンが一斤丸々入っていた。

「はい。冷凍すればかなり日待ちしますから大分前から仕込んであるっす」

由音ちゃんは目を閉じながら得意げに言う。主婦の知恵とかそういう生活知識を自慢したいのだろう。

「何枚焼くのかな？」

凍った食パンの氷の架橋を剥がし、取り敢えず一枚だけトースターに放り込む。

「一枚で良いっす。そんなに食べられそうにないっすから」

「了解」

言われたとおり一枚だけそのままレバーを下げる。ジーンと小さな音が流れ出し次第に芳ばしい匂いがトースターから躍り出てきた家にあるトースターはずっと使っていないため埃を被りに被っているが、使い方が分からないというわけではないので良い具合になったパンが飛び出てくるまでに食器棚からお皿などを取り出すくらいは準備できる。

ガシャンと小気味良い音が鳴ってトースターが飛び出てくる。

「ありや？」

見事に真っ黒、どういう事なのだろうか。

「ああ、熱感知式なんで一枚で焼くときは一枚焼きボタンを押さな

いと加熱時間が増えるんっすよ」

由音ちゃんは私が黒いパンをお皿に移している姿をくすくす笑いながらそう教えてくれた。そうだったのか……やはり経験が浅いと分からないものだね。

「それくらいなら食べられますから平気っすよ。あ、冷蔵庫にあるマーガリンも一緒に下さいな」

「ごめんね。よく分かって無くて黒こげにしちゃって」

言われたとおりにマーガリンも持って由音ちゃんの枕元に置いた。

「あ、飲み物もいるね。牛乳？」

「そうっすね。お願いします」

冷蔵庫の蓋側のケースに収められている牛乳をグラスに注ぎ、上半身を起こした由音ちゃんの横に置いて私もそばに座った。

「ありがとうございます」

マーガリンを黒こげになったパンに塗るシャツシャツという音だけが部屋に響く。普段は叔母さんや椒ちゃんがいるため賑やかだが、二人きりになると流石に無言の時間が生まれてしまう。おまけに相手は患っている様で、あまり余計な動作をさせたくないという気持ちも何処かある。

「テレビつけましょうか」

由音ちゃんも気まずく思ったのだろう、ゆっくりと食<sup>は</sup>んでいたパンを一旦皿に置き、リモコンへと手を伸ばす。しかし弱り切った彼女の力では上手く体を支えられず床に崩れてしまった。

「大丈夫？ 無理しなくて良いからね」

「情けないっす」

由音ちゃんは体を捻り仰向けとなって照れ笑いを見せる。

「ふふ、由音ちゃんは何もしなくて良いよ。全部私がするから何でも言っつてね」

体を引きずって布団の上に戻している由音ちゃんの代わりに私が立ち上がって机の上にあるリモコンを取って彼女に渡した。彼女はテレビをつけチャンネルをニュースにあわせた。

「時に有君」

由音ちゃんは再び口に運んだパンを咀嚼しながら訊いた。

「ニュースは好きですか？」

「え……っと、さあ？　あまり見ないからわかんないや」

「そうっすか」

どういいう意図で由音ちゃんは私にそう問いかけたのだろうか。彼女の半開きでテレビを眺める目には感情という色が全く感じられなかった。

「事実と……」

「ん？」

パンを全て平らげて残った牛乳を一気飲みし、大きな溜息をついた由音ちゃんはそつとそつと喋り始めた。

「事実と真実の違い……いえ、『そうであったであろうこと』と『あったこと』の違いは人に偽りの世界を見せるっすね」

「……どういう意味？」

テレビ画面の光りが映り込んだその瞳には何処か悲哀に満ちた影が混ざり込んでいた。

「例えばこのニュース」

由音ちゃんは今映っている画面を指さす。それは五十代の男が知り合いの店主を殺したという報道であった。

「仮につすよ？　この犯人として逮捕された男性が無実だったとします。そうであった場合、『真実』は彼は何の事件も起こしていないって事ですよね？」

「まあそうなるね」

「ですが今後裁判での判決で有罪が下されると『事実』として彼は殺人を起こしたことになるっす」

「……うん、だね」

くるりと振り返り由音ちゃんは私の顔を覗き込む。その顔は恐いくらいに無表情だった。

「事実なんて書類でいくらでも生み出せるんっすよ。大きな権力を貪っている輩共なんかそりゃいと也容易くやってのけるでしょう」

お皿とグラスを横に置いて由音ちゃんは続ける。

「逆に言う事実さえ作れば真実は永遠に隠せられるんす。例えば自分のような存在、例えば有君のような存在。もしかしたらこの世界の大部分はズレた事実ばかりだったりするかもですね。自分はそのずれによって隠された世界に生きる側の人間、だからこんな報道番組などを見ていると自分が世界から拒絶されているような感覚に襲われるんです。自分が絶対に関われない世界、交わることが出来ない世界、そんな世界があるんすよ」

由音ちゃんは淡々と言葉を吐く。既に横になり目も閉じていて口だけが動いているような姿で、彼女は心の中にある何かを吐き続ける。

「あちらの世界の住人はこちらを知らないから羨ましいです。あっちもこっちも知っている自分達のような存在は二つの世界を比べてしまい、その差に絶望してしまうんすよ。何でこんな世界にいなきゃいけないんだろっつて。でも考えるだけ無駄、あちらの世界には絶対に渡ることが出来ないんです。溝が深すぎて絶対に触れられないんっすよ。だからせめて雰囲気だけでも味わえれば……あわよくば一時だけでも世界の違いを忘れられれば、そんな夢物語を常に頭のどっかに描き続けて生きているんっす」

「……………」

私はただ相槌を打つことしか出来ず、彼女の口から出てくる言葉を一つ一つ丁寧に拾って頭の中で理解することに全力を出していた。きっと彼女は私に何かを伝えようとしているんだ。私はそれを理解しなくちゃいけないんだ。恐らくそれ故に今ここで私に由音ちゃんは語っているのだから。

体が不調だからなのか、由音ちゃんが今まで隠し抱え持ってきた

気持ち溢れ出してきたようだった。その流れに押し流されるでなく、しっかりと受け止めてあげたかった。

あの日、私の肩に由音ちゃんの重みが加わった時から私は由音ちゃんを受け止めてあげたくなつたんだ。私を守ると言ってくれた彼女の体はこんなにも小さいのだと、抱きしめて肌で感じたから……。

「こちらの世界でもそりや幸せなことはありません。先輩方とか有君達とかと知り合えた事、これは自分にとって凄く大きな事つす。皆がいるから自分は生きていられるんつす。明日また皆に会える、その事がただ嬉しくて。生きる理由がいつの間にか自分でなく他者へ移り変わっているつすけどそれでも生きる理由があるだけ幸せもんつすね」

それくらいしかないつて言う方が本当の状態ですが、と由音ちゃんは続けた。いつの間にか由音ちゃんの目尻から筋が生まれていた。「人間は所詮欲だけで生きていますから。欲を満たす手段が少ないこちらの世界だところやつて生きていくしかないんすよ」

由音ちゃんの言う欲がどういふ物なのかは分からない。彼女は他人との繋がりを持つ事でそれを代替的に満たしていると言つ。

「欲、か」

欲……そうだね、欲つて言葉は何処か卑しい響きを持つかも知れないけど絶対に必要な物だね。例えば今私が抱いているこの感情、由音ちゃんを笑顔に戻したいつて感情もただの私の欲でしかない。

「そう言えば前に誰かが言つてたよ。葬式とかで泣くのは詰まるころ自分の欲の表れだつて。自分に都合の良いその人を亡くしたところが惜しいから泣くだけなんだつて。こつという言い方だと何だか酷く冷酷に聞こえるけど事実なんだよね。誰かを好きになるつて言うのも結局は欲だもんね。自分に都合のいい相手だからこそ手元に置いていたくなる、自分が求めている理想の相手だからこそ近づきたくなる。全部欲望だ」

人間から欲望を除いたら何が残るのだろうか。

「そうっすね。欲があるからこそ人間は生きていけるみたいな物ですから」

「だね。だからさ……」

「はい？」

私が言葉を溜めたので由音ちゃんはまぶたを開け私の顔を凝視する。

「由音ちゃんもたまには欲を出しても良いんじゃないかな？ 例え

ば……またこの前みたいに甘えてみるとかさ」

その目は更に見開かれ驚きの色を示した。

「……………そうっすか。自分は甘えたかったんっすね……………。はは、人に言われて気付くなんて情けなさ過ぎっす」

由音ちゃんは力なく言う。

「そう言えば何で自分はこんな話をしているんでしょうかね？ 鏡

先輩にも話したこと無いのに」

「それはね、由音ちゃんの心が参っちゃっているからだよ。病気の時って自分が弱くなるものだよ？」

「……………それもあるかも知れないっすが、きっと有君だからって言うのもあると思っす。鏡先輩でも朱水さんでも椒さんでも多分自分はこんな事言わなかったっす。有君にだど何故か自分は弱みを見せちゃう様っすね」

由音ちゃんは自分の言葉に恥ずかしくなったのか、布団を顔が完全に覆われる程頭へと持つてきて隠れてしまった。しかし今度は足がはみ出してしまっていた。病気の時に足を冷やすのはお勧めできないなあ。しかし無理やり布団を剥がすのも気が引けるのでそのまま由音ちゃんに語りかける。

「前にも言っただけどさ、私で良かったら甘えて良いよ？ 由音ちゃんを見ていると何だか不安なんだ。頑張りすぎてないかなってね」

あのお風呂の時の様子を一回でも見たら誰でもわかる。由音ちゃんはきつと誰かに寄りかかりたくてしょうがないんだけれど状況が

そうさせてくれないだけ。だから、私が……。

「ねえ、どうしても欲しい？ お姉さんにさ、思いつきり甘えてよ」  
そうしてくれた方が私にとっても気持ちが良いんだ。独りで何かを抱えている姿を遠目に見るよりも、その抱えた荷物を一緒に持つ方が私は好きなんだ。お節介と一言で片づけられてしまうかもしれないけど、それでも何もせず黙って見ている訳にはいかないんだ。由音ちゃんは迷っている様でなかなか答えを返してくれなかった。だが5分ほど隠れた布団の中で唸っていた後に、急にびよこんと首を出し火照った顔を私の目の前にまで突き出して小さく呟いた。

「何でも良いですか？ 後、誰にも言わないで欲しいです」

「私に出来ることなら何でもいいよ。それに勿論誰にも言わないよ。二人だけの秘密だね」

そうっすか、と赤すぎる顔を両手で隠しながら頭をブンブンと振る。何故そうするか分からないが少しだけ元気になったみたいで見る側としては嬉しい限りだ。

「じゃあ……えっと……」

そう言い淀み目を逸らしつつも布団を片手で開く。その表情はあからさまに羞恥で満ちていて耳まで真っ赤っかだった。それにその表情と汗のおかげでとても艶やかに見え、女の私でもドキリとせざるを得なかった。

「ふふ、いいよ」

その無言の甘い誘いに私は乗り、由音ちゃんの横へと体を滑り込ませた。スカートだから布団の中ではくしゃくしゃになるかと思っただけど、由音ちゃんと添い寝できるならそんな事ためらう理由としては小さ過ぎた。

いざ隣に私の顔が来ると要求してきた由音ちゃんは明後日の方向へと顔を逸らしてしまった。折角だから近くで味わいたいのに残念なり。だからと言っては何だけど、私からも要求してみた。

「お姫様、添い寝だけじゃなくて抱きしめてもよろしいでしょうか？」



「え、あ、お、お願いします……」

了承の言葉が下ると即座に由音ちゃんの背中を自分の胸元へと抱き寄せた。自分でも分らないくらいに無性に由音ちゃんに触れていたかった。

「由音ちゃん暖かい」

「それは布団にずっとくるまっていたからっすよ」

「それにいい匂い」

「それはリンスの匂いっす」

「それに気持ちいい」

「それは……」

由音ちゃんは再び羞恥で口が動かなくなったようだ。こんな由音ちゃんならずっと見ていたいと思う。

「ねえ由音ちゃん？」

「……あい？」

もう眠いのか、やっと顔を向けてくれたトロンとした目をした由音ちゃんは本当に可愛かった。由音ちゃんの少し芯が硬い髪の毛を優しく手櫛で梳くと彼女は猫の様に首をくねくねと捻り手に頭をなすりつけてくる。

「いつでも甘えてね」

「……そんなこと言ったら毎日添い寝要求しちゃいますよ」

由音ちゃんは私の胸におでこをギョツと押し付け小さく呟いた。

そのか細い声は私の心臓を激しく焦らせることになる。

「はは、それじゃ私が朱水に殺されちゃうかも」

「有君がいなくなるのは嫌です……」

そう言っただけで由音ちゃんは再び目を閉じた。その手はしっかりと私の制服の裾を掴んでいて、まるで赤子だと私は思ってしまった。

由音ちゃんが寝静まるまで私はずっと彼女の背中を優しくさすり

ながらその熱さを感じていた。由音ちゃんがゆっくり落ち着いた呼吸をする頃にはその眠りを妨げないようにテレビを消し、部屋の明かりを弱くした。

何時間経っただろうか、突然鞆の中で携帯電話が震えた。子供の様なあどけない寝顔を見せてくれている由音ちゃんを起こさない様にと裾を掴む指を丁寧に解いて慎重に体をずらして布団から脱出し、急いで鞆の中から携帯電話をとりだした。

そのディスプレイには朱水からの着信と分かる文字が羅列していた。瞬時に自分のしくじりに気付いたがまずはこの電話に出ることが先決だ。

『ちよつと有、今貴女何所にいるのよ。無断欠席になってるわよ』  
開口一番朱水の怒った、しかし冷静な声が結構な音量でスピーカー部分から漏れ出てきた。由音ちゃんが起きやしないかその寝顔をちらりと確認したが未だ安らかに眠っている様だ。

「あやー、自分の方を連絡して貰うのを忘れてたよ」  
取り敢えず由音ちゃんの所にいる事とその理由を一通り説明してみる。

『あら、そう言うことだったの』  
意外にも朱水はあっさりと納得し、あつちで便宜を図ってくれろと言ってくれた。

『ですが有』  
「うん？」

朱水は少々声のトーンを下げた次に連ねる言葉の重要性を暗示する。

『言ってみれば今の由音ちゃんは無力な女子でしかないわよね？  
そんな状態の彼女に貴女の護衛が務まるはずが無いじゃない。貴女

はすぐに私に連絡すべきだったのよ』

朱水の声はどんどん低くなりその怒りがフツフツと煮えたぎっている様が十二分に伝わってくる。電話越しでその姿は見えないが容易に想像できた。間違いなく指でトントンと体の何所かでリズムを取っているはずだ。朱水が苛立ちの際に行う癖なのだ。

これは まずいぞ

「あーホント御免ね」

『御免？ そう言えば、許しを請うと言う行為は生きていられるから出来ることよね』

「あーうー」

『これに懲りたらこまめに私に連絡すること。いいわね？』

「はい」

逆らえるわけ無い。勿論逆らう気は更々無いが。こまめに連絡しろって言い方だと何だか束縛されているようだけどもまあ私達の場合仕方ないことだと割り切るしかないかな。

『取り敢えず椒をそちらに送るから。一步もそこから出ないこと、いいわね』

そう言って朱水は電話を切った。

その口調にはわずかな焦りも滲み出していて、私がやってしまった事が如何に危険なことだったのかを理解させるに十分な重みを持っていた。

「大人しく椒ちゃんを待つておくか」

自分がどういふ存在なのか今一実感できていないが朱水の言葉に従う方が正しい道と思われるので素直に待つ。

ただ座っているだけでは手持ち無沙汰であり、何とも無しに初めて由音ちゃんの部屋を観察し始めた。テレビをつけるのは由音ちゃ

んの睡眠の邪魔になるため絶対禁忌だからね。

部屋の全体を見てまず思ったのが整理整頓されたジャンルという言葉だった。物が沢山ある割にその全てがきつちりと整理されている事から連想できたのだろう。何時ぞやに見た由音ちゃんの二つの大型ファイルと一緒に、沢山抱え持つが整理はしっかり行き届いている感じた。

何より一番目に付くのは壁一面を埋め尽くしている本棚だろう。そこには漫画という漫画がぎっしり詰まっていた。

「これって床抜けないのかな」

普通に考えてこれ程の本があると一人住まい用のアパート、ましてや築十数年は経つていよう建物の床にはとてもじゃないがかけたくはない重圧をかけている事になる。それも一部分に集中してだ。由音ちゃん達は魔法が使えるようだからもしかして何か特殊な事してるのかな？

「あ、この匂いだったんだ」

由音ちゃんがいつも振りまいている甘い匂いの正体を本棚の一角に見つけた。

「うわ、これって結構高い奴じゃん。お金使ってるなあ」

それは女子高校生が毎日使えるような物じゃなく、結構お高いフレグランスだった。名前だけは知っていたが勿論使ったことはなく匂いと商品が一致しなかつたんだねえ。由音ちゃんがこんな良い物を使っていたとは知らなんだ。それを間近に覗くとふわりと箱に付いた移り香が薰り、パプロフの犬よろしく脳裏に由音ちゃん的笑顔が浮かんだ。

「匂いってやつば重要なんだなあ」

誤って落としてビンを割るようなことが起きかねないのでその芳しい匂いを嗅ぐだけにしておくか。再び私は顔をフレグランスから離して漫画の方へと向ける。電灯を豆電灯だけにして居るため部屋は薄暗くどんなタイトルがあるまでは判別しにくかったが、近くで見ると色んな出版社、ジャンルの物が混在しているようだ。

「結構男子向けも多いんだ。由音ちゃんのイメージ的に少女漫画ばかりかと思ってたよ」

矢岩君が言っていた通り漫画好きな様で、私が知らないようなコアな作品も持っている。いつか今度漫画のお話してみたいな。由音ちゃん凄く楽しそうに話してくれそうだもん。

「……ん」

本棚を観察していると由音ちゃんが寝返り小さな呻きを上げた。苦しいのかと思って急いでその顔を覗き込んだが寝顔は安らかなままであったため胸をなで下ろす。寝返った拍子に布団がめくれてしまったのでゆっくりとそれを直してあげた。

ふと思うことがありぐつぐつと寝ている由音ちゃんの寝顔を見る。その幼い顔には不釣り合いな生き方を背負っている少女は私のことを守ってくれるという。

だけどそれで良いのだろうか？

本当に守られるべきは彼女の方なのではないだろうか？ 私より幼い容姿なのに、私より過酷な人生を送っているのに、それなのに彼女の傍には誰もいない。確かに矢岩君や鏡さんは由音ちゃんの味方のように今はいない。

今、由音ちゃんに一番近いのは私ではないだろうか？ 今由音ちゃんを支えられるのは私だけではないだろうか？

でも、私は結局由音ちゃんのことを何もわかっていないんだ。この子がどんな過去を持っているのか私は一切知らない。そんな私に彼女を支える資格などあるのだろうか……。

ドアホンが鳴り響く。

「結構早いなあ」

朱水がこちらに椒ちゃんを向かわせてくれると言ってからさほど時間は経っていないかった。

「今開けるよ」

私は急いでドアへと駆け寄った。しかしドアの磨りガラスに映る人物は明らかに椒ちゃんではないと分かった。身長が大分違うのだ。顔や服装までは磨りガラスのため分からないが背丈だけでも優に判別できる。

そして気付いた。今さっき私は声を発してしまったのだ。

どうするべきか……。寝ている由音ちゃんを起こすべきなのかと思っただが、もし全く私達に関係の無い安全な人物であった場合の事を想像すると由音ちゃんの安眠を邪魔するのは気が引ける。

再度ベルが鳴り響く。間違いなくさっきの私の声は相手側に届いていたようだ。相手は中に人がいるのを分かってドアホンのボタンを押している。

由音ちゃんを起こそうと一歩戻ったが踏みとどまり、頬を軽く叩いて決心をつけた。ドアチエーンをしつかりしていれば何とかなるかも知れない。鼓動が激しくなった体を何とかドアへと運ぶ。

私はドアチエーンをしつかりと穴にかけてから恐る恐るだがドアを開いた。

「……………おや、由音ちゃんは不在かい？」

そこにはもみあげ部分だけ伸ばし、後はショートヘアという特徴的な髪型をした女性が立っていた。その第一声で私の心臓は落ち着

きを取り戻すことが出来た。

「菅江さんのお知り合いの方ですね？」

「まあそうなるね」

その女性は私の顔を数秒凝視するにつこりと笑って一歩後に下がる。由音ちゃんの知り合いなら取り敢えずは安心だね。勿論このチエーンを外す気はないけど。だって削強班だったら私は敵対する存在なのだから。

「そういう君は誰かな？ いや、言いたくなかったら別に良いよ」

「あ、菅江さんと仲良くさせて貰っている者です。今菅江さんは体調が悪くて眠っているのですが……」

「あら、そうか。ならウチは引き取るさ。由音ちゃんにお大事にと伝えておいておくれ」

その人は気さくな笑顔を浮かべそう言った。そのさわやかな雰囲気には私は完全にその人に気を許してしまっている。

だから彼女の予期せぬ次の行動には反応しきれず、微動だにできなかったのだ。

「所でお嬢ちゃん」

突然その人は瞬く間に私に近づき、

「ちょっとお姉さんとデートしてみない？」

私の顎を指で摘んで持ち上げる等というキザなことをしたのである。

「え……え……？」

「お姉さんね君のこと気に入っちゃったの。どう、デートをさ？」

「いえ、そんなこと言われても……」

目の前の人は確かに凜とした風貌で朱水に近いかつこよさを持った女性ではあるが正直「何言ってるの？」と言いたい気分である。流石に口悪く言うのは控えて丁重にお断りしとこつ。

「あの、申し訳ありませんがそう言うのはちょっと……」

「はは、そうかい。そりゃ残念」

その人は私の顎から手を外し再び後に下がった。私あまりに顔が近かったために（氣にくわないが）ドキドキしていた心臓を何とか静めようと深呼吸している様を彼女は相変わらずさわやかな笑みを浮かべながら見つめてくる。

だが急に彼女は道の方へと振り返ると舌打ちをした。さわやかな印象を持っていたその人が舌打ちをした事は多少なりともショックだった。

「おっと、お姉さんはもうお暇いとまするね。じゃあね〜」

そう吐き捨てるのと滑らかな動きで階段を下り私の視界から消えていってしまった。畳みかける様な目まぐるしい展開であった。

「何だったんだろ……」

台風一過、あつという間の出来事だったがどつと疲れてしまった。取り敢えずそのままドアを開けておいて外の空気を肺に送り込んでおく。そうしていると遠くから車が走る音が聞こえてき、見知った高級車が場違いと言わざるを得ないアパートの駐車場に止まった。

「今度こそ椒ちゃんか」

運転席の執事さんは私と目が合うと深く会釈してくれた。こちらも忘れずに会釈を返す。

階段を上がってくる椒ちゃんは何かを思慮しているような表情であった。

「有様、先程ここに訪問者が来られませんでしたか？」

「あ、うん……」

「……………」

私のあからさまに弱気な言葉に椒ちゃんの目がキツと厳しい光りを帯びる。

「で、出ってしまったと」

「ごめん……なさい……」

何も言っていないのに私が出してしまったことをズバリと言い当て



られる。

「謝るといふ行為が出来るのは有様の首が真つ二つに分かれていないからですよね」

何だか似たようなセリフを少し前に聞いたような気もするがここは平謝りするしかない。

「本当にごめんなさい」

「御生存なさっている有様にお会いできて感謝感激のあまり涙が出そうですわ!」

「……ごめんなさい」

この後も5分程ひたすら椒ちゃんの皮肉たつぷりな説教を脳味噌に詰め込まれることとなった。その間私の頭はひたすら上下運動を繰り返すしかなかった。

「菅江様、こちらをどうぞ」

椒ちゃんは彼女の説教声によって起きてしまった由音ちゃんの上半身を抱き起こし、黒い液体が入った小瓶を差し出す。

「これは一色家に伝わる滋養強壯の妙薬です。良薬は口に苦しと言いますので非常に不味でありますどうぞお飲み下さい」

「おお、ありがとうございます」

椒ちゃんの言葉通りとても不味い様で由音ちゃんはペロリと一度舌だけ漬けて目を見開く。

「うおお! 凄美味っすね……」

「それはそうですね。とびっきり苦いのをお持ちしたので」

「……………」

由音ちゃんは笑顔な悪魔となった椒ちゃんから私に視線を移して救いを求めようとす。しかし当然の如く私にその術は無く、ただ優しく見返すことしかできなかった。

「まあ効力の程は太鼓判を捺しますよ。後はぐっすりと眠れば明日にはまた騒がしい貴女を見られそうですね」

そう嫌味っぽいことを言うが、由音ちゃんが薬を飲んでいる間中ずっと心配そうにその背中をさすり続けていた。

「ぷはー、不味かったっす！」

やっと小瓶丸々飲みきった由音ちゃんはその鼻が潰れてしまう程酷い臭い故に摘んでいた鼻から指を放して一言叫んだ。

「元気そうですね。後はゆっくりと寝なさいな」

椒ちゃんはハンカチを取り出し由音ちゃんの額に付いた汗を丁寧に拭う。そして彼女以外の二人がびっくりするような事をした。

「う……え？ な、何すか？」

「こうすると梓はぐっすりと眠れるんですよ」

何の前兆もなく椒ちゃんが由音ちゃんを包み込むように抱きしめたのである。由音ちゃんも私も椒ちゃんのそのあまりに予想外の行動に絶句するしかなかった。

「ゆっくりお休みなさい。貴女は有様を護衛する役目があるのですから」

「……はい。ありがとうございます」

まるで仲の良い姉妹のように二人は抱き合っていた。椒ちゃんは心音を聞かせるかの様に由音ちゃんの頭を胸で抱く。最初由音ちゃんは驚きのあまり目をぱちくりとさせていたが次第にその温もりに酔い、まぶたをゆっくりと落としていった。

「梓と同じですね。この子もこの方法が効いたようです」

そう言っただけでおねむな由音ちゃんの体を寝かせ、丁寧に布団を正した。まるで梓ちゃんのおでこを撫でる様に由音ちゃんにもそうする。気のせいかな、由音ちゃんは先程よりも更に安らかな寝顔をしているように思えた。

「所で有様」

由音ちゃんの寝顔をじっと見ていた椒ちゃんは何かを思い出したように体を跳ねさせ、こちらに振り返った。

「先程こちらに來た訪問者はどの様な出で立ちでしたか？」

ああ、そうか。何故だか車から降りてきた時点で椒ちゃんは誰か  
がここに来ていた事を察していたのだった。

「どうって……変な人だったとしか。あ、髪型が特徴的だったよ。  
もみあげだけを伸ばしたショートって感じ」

手振りでその特徴である髪型を形作り、何とか伝えようと試みる。  
その表現で椒ちゃんは何かをつかめたようで右手を顎に当て考え込  
んだ。

「先程こちらへ向かう間に車外に通る不審人物を見かけたのですが  
恐らくあの者ですね」

「不審？ 確かにキザで変な人ではあったけど、外見におかしな  
所はなかったし、むしろ凜々としたかつこいい人だったよ」

「いえ、外見が不審なのではなく気配が不審だったのです。菅江様  
が起きてこなかったのもあれなら仕方ありません」

そう言えば由音ちゃんも他人の気配は察知できるって言っていた  
様な。その由音ちゃんはさっきの人が來た時に起きるようなことは  
なく、椒ちゃんが到着して初めてそのまぶたを持ち上げたのだ。

「あれは気配が無いわけではないのですが……何と表現すればよい  
のでしょうか、異質と言いますか……」

珍しく椒ちゃんが言葉を濁す。それ程珍しい人だったのだろうか。  
「まあとにかく何も起きなかったのならそれで良いのです。今度  
からはこういう事が無いようにお気を付け下さいまし」

「はい」

本日何度目かの言葉にしっかりと応える。流石に耳に胼胝たしだが自  
分が悪いのでひたすらその音を耳に突っ込むしか選択肢がないので  
ある。

「もうこのような時間ですか。折角ですから菅江様に御夕飯を作っ  
ておきましょうか」

そう言って部屋から出て行ってしまった。出て行くときに離れる  
なという朱水の言葉を思い出して椒ちゃんを呼び止めようと思った

が、椒ちゃんに限ってまさか忘れていることはあるまいと思いつまる。

案の定、椒ちゃんはすぐに戻ってきてくれた。

「何してたの？」

「長にお使いを頼ませていただきました」

「どうやら執事さんに夕飯のお買い物を頼んだようだ。でもよくよく考えると執事さんのような服装の紳士がスーパーにて買い物をしている状況はあまりに不釣り合いで、想像するだけでフツフツと笑いがこみ上げてくる。」

「では長が戻るまで私は大分汚いキッチン周りを綺麗にしていますね」

「あーやっぱり気になっていたんだね。椒ちゃんは由音ちゃんの部屋に入るや否やキッチンを見て眉を上げている。確かに水垢とかがこびり付いていて決して清潔とは言えない状態であったしね。」

「有様は菅江様を見てあげてくださいまし」

「りょーかい」

その後椒ちゃんはスーパーの買い物袋を片手に帰ってきた執事さんから材料を受け取ると、梧さんから見て学んだという塩高菜粥を手際よく拵え再び目を覚ました由音ちゃんに食べさせた。由音ちゃんは椒ちゃんがレンジで運んでくれるお粥をはふはふと熱そうに食べていて、その微笑ましい様子を執事さんと私はじつくりと堪能したのだった。

やれやれ、参ったね〜。

ちよっかいついでに情報を頂こうかと思って尋ねた先によもや夕  
ーゲットがいるとは思わなんだ。

「二つもミスを作っちまったな」

一つ、最初にかけた言葉が本人に対しての問いでなく菅江由音の  
事であったこと

一つ、尼土有に顔が割れたこと

前者は大したミスにはならないであろうか？ 確かに消極的に考  
えれば尼土有が菅江由音の関係者であることをウチが知っている  
という事実が露見するという、最悪の事態を想像してしまう。だがま  
あ人間そう鋭い生き物ではないので安心して良いはずだ。恐らくこ  
っちは安全であろう。

だが後者は不味い。非常に不味い。大した準備も無しにいきなり  
対象と顔を合わせてしまったのだ。

「準備できていればもう少しまともな誘い方が出来ただろうに」

軟派なふりをして誘ってみたが当然の如く断られる。初見の人間  
に誘われてついてくるような軽い奴などそうそういないもんだ。

「こりゃ回りくどい方法にせざるを得ないな」

依頼主に何て報告しようかと悩み続けるウチは重りを巻いた様に  
重い足を前に運び続けた。どうにも依頼主は嫌味皮肉が好きなよう  
で、またウチはねちねちと脳味噌を削られるような言葉を聞かされ  
続けねばならないのだろうかと肩を落としたのだった。

「と、まあそんな感じで……」

私の依頼主、長髪の少女は溜息混じりにウチに厳しい一言突きつけた。

「使えないわね」

「はは、ごもつともで」

確かに今回はウチの落ち度でしかないため、その言葉を黙って受け入れるしかなかった。

「最大のチャンスに出来る接触をこつとも簡単にドブに捨てるとはね。流石の私も予想できませんでしたわ。こんな無能を雇うとは私も愚かだわ。あら、それとも足元を見られてこんなのが送られてきただけなのかしら？」

庇護の傘を持たぬウチは一言一言に針が仕込んであるような毒言の雨を諸手広げて浴びる。流石にこれは心にクするね。

「良いこと？ 星井加々美、貴方は私と契約した以上私の期待を裏切るような結果を出してはいけないのよ。それが分かったら下がちなさい」

依頼主は先程閉じた書を再び開いた。それは間違いなく魔導書であり、その事実はウチにとっては違和感を覚える物であった。そう、間違いなく目の前の少女は人間ではないのだ。よって靈力で奇跡を起こせるはずであり、魔法を覚える必要はないのである。ましてやこのウチの培った勘がこの少女はとても危険な存在であることを常に訴えている。それ程まで強力な魔が何故に。

「はい、御嬢様」

しかし契約とは全く関係の無いことなのでその事について尋ねるのは憚<sup>はばか</sup>られ、深々と自分らしくないお辞儀をしてその場から去ろうとした。

だが何故か呼び止められた。

「ちょっと良いかしら」

「あ、はい」

「前から言おうと思っていたのだけど、貴方私のことを何と呼んでいる？」

何と呼ぶって……どういう意味だ？

「……ああ、そう言うことですか。御存知の通り『御嬢様』ですが？」

「そう、そうよね……」

少女は何か喉の奥に引っかかったような顔を作る。何か不味いのだろうか。

「出来ればで良いのだけれど私のことは他の言葉で呼んで頂戴」

「はあ。勿論それは構いませんが何とお呼びすれば？」

彼女は特に候補は考えていなかったようで、ただウチを見つめ返しているだけとなる。

「では『御主人様』でど……」

「それも却下」

代替候補を言った途端ぴしゃりと下げさせられる。一体何なのだろう。

「……もう名前で良いわ。ただし様付けじゃなかったらその頭が地べたに転がるようになるから気を付けて下さいね」

「りよ、了解しました」

少女の実力を推測するにその言葉は決して誇張ではなく、ウチ程度など簡単に捻り潰してしまうのである。

「あ、そうそう、これも忘れていたわ」

そう言っただけ彼女は机に山積みとなつていて本の間隙に挟んであった封筒を取り出し私に投げ渡してきた。

「これは？」

「後で読んでおいて頂戴。どうやら近日中に別館に隔離されているあの御二方と面会することになるわ。正式に政府に許可されたため私と貴方だけで別館に渡ることになるから準備しておいて」

「これまた突然ですね」

少女は冷めているはずの紅茶で喉を潤し一息つく。

「外の世界を知りたいんですって。私自身はあまり世間を知らないのですが貴方なら十分御二方を楽しますことが出来るでしょう？」

「まあウチはそれなりに世界を歩いていますから」

「そう、頼りにしているわ。とても釣り合いが取れないですけど今回の過失はこの件で目を瞑ってあげますわ。もう下がって良いわよ」  
そう言いつつも空になったティーカップをウチに持って行けというジェスチャーをする。ウチは再び彼女に近づき未だ掴まれている器を受け取らんと手を伸ばした。しかし彼女は直ぐには離さず小さく口を開いた。

「私のことは何と呼ぶのでしたっけ？」

「からたち 枳様、です」

「よろしい」

その少女、枳という一風変わった名前で驚愕に値する程長い髪を持つ魔は、ウチなどでは到底理解できない難解な魔法書へと再び目を落とし黙りこくった。これは無言での「早く出て行け」というアピールであり、それを最近理解したウチはまた嫌味な言葉を浴びる前にドアへと走り逃げたのだった。



暗い暗い部屋の真ん中にそれは置いてあった。しつかり壁に打ち付けてある時計の鉄格子越しに見える細い針が円を二回描く度に一度、それは体全体を攣縮させる。

「素晴らしい。生物として定義される必要の無き生物よ、私は君が欲しかった」

それは度々苦しみを訴えるような呻き声を漏らすが目の前的人物はただひたすら観察を続けるだけである。

「君のような歪んだ存在は私の下に集まるべきなのです。ええそうですね、私はその為に生まれたのですから」

その男、春日井京鹿は手に持つ本をゆっくりとした動作で床に置き、座り込んで何やらその本に書き込む。その書き込んでいるはずの筆記用具は存在せず、また文字自体視認できない。それでも彼はひたすら書き続ける。

書くのは彼の頭の中に存在する目の前のモノの存在意義である。

「歪みは必ず誰かが正さなくてはならない」

彼は自身の存在の意味を深く理解していた。

何日か前に告白してあっさりと言碎し、一時は再び登校拒否に戻った君中がいつの間にか自然に登校するように戻ってきた頃、俺達の教室から一人の生徒が消えた。

いや、正確に言うと消えたわけではなく転校したことになってい

る。でも生徒の中では「消えた」と表現されているのだ。

その理由として居なくなった時の状況が挙げられる。一夜にしてその人物の家族が家ごと居なくなっていたのだ。そう、家ごとだ。

「今日もあいつは居ないか」

そう呟かれない声が朝の教室を出入りする生徒の心から漏れ出す。あいつがこのクラスの中心的人物だったから当然のことだ。

消えた生徒は豊島瑞穂である。あいつは消える前日もいつもと変わらない明るさでクラスメイトに手を振って別れた。誰もがいつも通りだと思っていたのに次の日の朝では近くに住むクラスメイトの証言で豊島の異常な消失を知らされたのである。

「家が消えるって何だよ……」

そいつ曰く家が壊されるような大きな音は絶対に無かったらしい。ならどうやって豊島は家ごと消えていったのか。

そんな事を考えながら今日も住宅街で一カ所だけぽつんと開いた四角い土地に足を進めていた。最近何も考えずに歩いているとここに来てしまう。自分ではどうしようもないくらいここに引き寄せられるようだった。

「やっぱりねーな」

数日前には豊島の家があったそこは今や茶色い地べたを俺に見せつけていた。そのやや赤い色を見てると毎度疑問が俺の脳内で浮かび上がってくる。例えば家が丸ごと消えたとする。勿論そんなこ

とは非現実的すぎるが実際消えてしまった現場を目の前にしている俺には多少そんな現象も信じてしまえた。

「だけど……家が消えたとしてもこうも地面は平らなのか？」

家つてのは普通少し地面を掘ってから建てられる物じゃないのか？　だが目の前の正方形は俺が侵入することに何ら躊躇する気持ちを抱かせることのない程、真っ平らなのだ。おかしい、異常な程におかしい。いや、一日で家が消えること自体がおかしいが俺にはどうしてもこの地面の状態を見ると人間くささを感じてしまうのだ。例えば何らかの自然現象で家が消えたとする。いや、勿論俺の勝手な妄想で、そんな自然現象が無いことは百も承知だ。そう、仮定の話だ。そうだとして家が消えた後には普通何が残る？

「えぐれた大地だろ」

なのにここには何かが建っていた痕跡が一切無いのだ。まるで誰かが埋め立てたように綺麗な地面であった。

「何だよ……何で俺は震えてるんだ。馬鹿らしい」

何か大きな恐怖に立ち向かっているようなそんな気分陥って、俺はその正方形のご真ん中で身震いして座り込んでしまった。

何分か座ったままの状態だったが流石にずっとここにいると不審者と言われてしまうかも知れないのでそろそろ家に戻ろうかと、変な座り方をしていたために痺れきった足を制御しようとしているといつぞやの声に呼ばれた。

「や、またあつたね」

振り返るとそこには二人の男女が立っていた。二人はどちらも黒っぽい服を上着の下に着ていて何だか異質な存在のようだ。世界からいつでも切り取られるような、そんな違和感だった。

「……………こんちは」

片方は間違いなくケーキ屋であつたあの女だった。

「やあやあワンちゃん、こんな所でどうしたの？」

……………ワンちゃん？ 俺のことなのか？

「俺は犬じゃ……………」

「いいや、お前は犬だな」

ケーキ屋の女……………たしかそう、高海とか言つたな。その高海の横にいた男は俺をチラリと見て犬呼ばわりと来た。

「いや、今の言い方だと勘違いされるか。言い直すとお前は犬憑きだつて事だ」

「犬憑き？」

「ああ、間違いなくお前は憑かれている」

おいおい、憑くやら何やらのオカルトは勘弁だぞ。そう言うのはつきり言つて受け付けたくないんだつてば。ただでさえ今立っているここでオカルトじみた事が起きたんだからさ。

しかし目の前の男はいたつて真面目な顔をしたまま俺を見下し続けている。まるで俺の中の何かを見ているかのようにじつと俺の首を見続けながら。

「気を付ける、それはもはや害悪でしかない」

そう言い捨てる二人は何も言えない俺を放つて行つてしまった。

「何だよ……………犬憑きつて」

既に二人の姿は小さくなっている。赤茶色の地面は俺の孤独を強調する様にただただ静かに太陽の熱を吸い続けていた。

「何だつたんだ」

気になる単語を言われたからだろうか、面倒ごとは嫌いなはずの俺の足は図書館へと向かうのだった。

きつと長い間日光に当たっていたから頭が沸騰しちまったんだろ。

ふわりと自分が浮いている感覚が分かる。ここはどこであろうか。その水は温かく、どこか懐かしい匂いがした。

泳いでいるのか漂っているのか分からない。ここにいると私が私でなくなる……そんな気がする。でも、それがどこか心地よくて。

仄暗い水の中をひたすら落ちていく。いや、上下が分からないのだから私が向かっていく方向が下なのかは分からない。何かに引き寄せられるように私は水の中を滑っていくのだ。体はぴくりとも動かず呼ばれるがままに私は漂い続ける。

そっだ……ここは恐らく……私の名前の由来。

「あら、懐かしい顔ね」

それは女の声。しかし私はどうしてもその声の主を思い出せなかった。その名がのど元まで出かかっているのにあえて嚙下しているような感覚に襲われる。思い出したくないと、私が思っているのか？

「そっね、それで良いわ」

その者は私を無い目で観察すると無い口で嘲る。

「ここに貴女が来るなんて余程弱っているようね」

「弱っている？ 私がかしら？」

「そうよ。貴女はあんな玩具に力を分け与えるから私の下へと流れ  
てきてしまったのよ。貴女は力を解放することは得意だけれど、抱  
える虚は他の魔と大差ないのに無茶をするから。まあ御蔭で貴女の  
秀麗なその顔を間近で見られたのだから感謝しているわ」

それは人を小馬鹿にするような不快な声で水を震わす。

「玩具？」

「そうよ、あんな玩具のために貴女は大きな危険を自ら招いている。  
気付いているのでしょうか？」

「鬼神城の事かしら？ ならば私は決して彼女達の招起は間違いで  
ないと断言するわ」

くくくと嫌らしい笑いが零れた。それは私を囲うように反響し続  
ける。私は苛立ちに声を張り上げようとなるが相手の正体が分から  
ない以上こちらから手を出すわけにはいかないと口を閉ざした。

「前に私があれを察知したのは確か二人しかいない頃だったわね。  
次に起動したら一気に七人とはね。一体どれくらいの間、無能者共  
が管理していたのかしら」

鬼神城の個々の能力は歴代の力強い魔の写しであるとされている。  
確かに今回招起出来た私の一つ前は何百年も昔だと言われている。  
その間誰も鬼神城を起こすことは出来なかったのである。

「へえ、貴女つてば随分長生きなのね」

「ふふ……はははははは。言うに事欠いてこの私に長生きとな？」

良いか魔の王たる資格を持つ者よ。私の名を思い出せとは言わない。しかし、しかしだ、私の存在を忘れることは絶対に許さんぞ」

私は……こいつを……知っている？

『……様』

誰かが私を呼んだ。きつとそう、私はまだ耳を外に向けていたのだ。だから人の声を聞くことができた。まだ還るわけにはいかない……まだ。

「そうね、そうして足掻いていなさい。貴女にはそれがお似合いなのよ」

少し……眩しい。

「あらおはよう」

「お嬢様、こんな所では風邪をひかれますぞ」

目を開けるとそこには心配そうに覗き込む智爺の顔があった。その顔にはまた幾つか皺が増えているようだ。私が心配ばかりかけているからだろうか。

周りから察するにどうやら私は書齋でうたた寝していたようだ。

「そうね、風邪は困るわね」

「ええ、ちゃんと御自分のお部屋でお眠り下さい」

御蔭で変な夢まで見てしまうし、やはり注意力が散漫しているよ  
うね。

私がしっかりと頷く様を見届けると、智爺は何かを思い出したように自分の服のあちこちを探り始めた。

「おお、ありました。これが本日届けられました」

手渡された封書の表には何も書かれていなかったが、微かに漂う魔の気配で送り主が分かる。

「へえ、あの子達からこういう物が送られてくるなんて珍しいじゃない」

「私の知る限りお嬢様に直接宛ててある物は初めてですな」

つまりそれだけこの中に書かれている文は重大って事かしら。

「……そう、あの子も元気でやっているようね」

読み終えた手紙を机の上に置いた。中に入っていたのは一枚の手紙だけで、そこには短い文で願望が綴られていた。その中に鬼神城の一人の名が組み込まれていた。

枳……貴女は私から離れてしまったけれども、まだ私の手が届く範囲に残ってくれているその優しさ、嬉しく思うわ。

「ねえ爺、私がやってきたことは間違っていないわよね？」

「間違っているかどうかは未来のお嬢様が決めることでございます」

「……そうね。流石智爺、完璧な答えだわ」

もう一度机に置いた手紙に目を通し、深く溜息をついた。

「ほんと……私ったら何やっているのかしら」

それは後悔と己への嫌悪感だけが込められた暗い靄であった。

大きな扉が開かれる。誰もいないのに勝手に動き出す扉の上部にはこちらを覗き込む監視カメラが目敏く赤光を点滅させている。



「これ、一体何回あるんですか？」

ウチは目の前で悠々として開く扉を待っている少女に尋ねる。

「確か二桁はあるわ」

二桁……流石と言える鉄壁の監視だ。ウチみたいな貧弱な魔力しか持たない魔法使いでも分かるくらい強大な魔法がこの扉にはかけられている。

「まあ待ちなさいな。最初の5つは致死能力のある魔法がかかって  
いるから近寄らない事ね」

うへえ……流石徹底管理されてる魔の檻となる施設だ。侵入も逃走も許さないか。

ウチ等は魔の姉弟に会うことを許可された。厳重管理されていると聞いた割にウチのような者が中に入れるというざるっぷりには呆れるが、もしかすると今日の前にいる少女の御蔭なのかも知れない。彼女の事は詳しく知らないがこの館に住み込めるといつくらいなのだからやはりそれなりに権力をもっているのだろうか？ そのひたすら長い髪に包まれた幼く美しい顔立ちを持つ女性はウチの疑惑の視線を察したのか、くるりと振り向きウチに威嚇の目を向けたが直ぐに前へと顔を戻した。

「変なこと考えているようだけれど私に刃向かったら死ぬわよ」

「いや、決してその様なことは」

「まあ良いわ。貴方ごときでは私を殺せることは出来ないからね」

「ごもっともで。おそばにいた数日間です分にその歴然とした差を見せつけられましたとも。」

二十一枚の鉄扉を越えるとやっと長い廊下に辿り着いた。そこは薄暗く、不思議な雰囲気立ち込んでいた。

「えっとこつちだったかしら」

Y字の分かれ道にぶつかり、少女はどちらに進むべきか迷っていたがウチと目がばつちりと合うと気まずく思ったのか、確信を得な

いままに一方に進んでいつてしまった。ウチに情けない姿を見せた  
くないのだろう。

「相変わらず綺麗な空気ね。ここはいつ来ても体の中が洗われるよ  
うだわ」

確かに異様な程この空気は人を落ち着かせる。もしかしたら鎮  
静効果を持ったお香でも焚かれているのかも知れない。言葉の通り  
「管理」されている二人だから。

「ああ、どうやら正解だったようね」

広い部屋に出るとそこには黒髪が艶やかな二人の人物がいた。

「お久しぶりです。ほら、貴方もご挨拶なさい」

「は、はい」

しかしウチの目にはその二人がどうにも姉弟には見えないのだ。

「初めまして。枳様に雇われている星井と申します」

そう、目の前には女性二人しかないのだ。

「ふふ、貴方面白い人ね」

二人の片方、背の高い女性がウチを嘗めるように見る。

「その気配の理由、当ててみたいわ。温は正解言わないでよね」

「はいはい」

もう一方の背のやや低い人物の口から漏れた声にウチの体はビク  
リと跳ねた。その容姿から女性と確信していたために、事実の裏切  
りがウチには衝撃だったようだ。

「男……性」

ウチの疑惑の目ににこりと返したその人は間違いなく男性の声を  
していた。即座に喉仏の有無を確認するがよく分からなかった。

「姉の身代わりになれるように女として育てられましたから。声も  
実は女声に変えられますよ」

つまりは何だ、姉の方が襲われそうになったときに切り札として  
弟である温という人物がなりすますらしい。横にいた枳さんが小声  
で教えてくれた。道理で喉仏が見えない訳だ。その女装訓練の賜物

なのか、顔を必ずやや下に向ける事で喉仏を隠しているのだった

「温は容姿だけは本当に女の子だからね。そりゃ貴方が驚くのも仕方ない事よ。あ、私は相ね」

伏原相、温姉弟。強大な魔と言われているだけはある。やはり法則に則って、二人の容姿は美しかった。力を大きく持った魔は元来美しいらしい。古い血の名残であろう、人を惑わす為であったその容姿が甦っているらしい。人を容易く食すためにおびき寄せ目的で外見の美しさを現地の基準で再現することだ。

「ほら温、用意しておいた取って置きのお菓子持ってきてよ」

相さんが花びらをまき散らすようにはしゃぎ出す。

「はいはい。御嬢様はお菓子がそんなに楽しみですか」

「そ、そんな分けないじゃない！ 今のはお客さんと久しぶりにお喋りできるからよ」

相さんは顔を真っ赤に染め上げてそっぽへと顔を向ける。その幼い行動にウチの緊張は一気にほぐれた。なるほど、魔の宝とてそうはかけ離れた存在ではないらしい。

温さんが扉から出て行くとウチの目の前にすすつと相さんが滑り込んできた。

「貴方のその気配、私知ってるわ」

この子を知っているというのだろうか？ 確かにシャーマンは数多く日本にもいるが、自慢ではないがここまで具現化された霊体を保有するのは現在においてウチくらいのはずだ。

「それ、動物霊でしょ。見えるのよね、貴方から狐の姿が」

「せ、正解です」

霊体の視認……だと？ 魔なのに霊体を可視出来るというのか。

今まで殺してきた人間、魔、そのどちらもウチの相棒である静納をしつかりと捉えることはできなかった。何故ならこの子はあまりに層がずれていて、自身を層に留めているまともな者には見られる

モノではないのだ。

つまりそれだけこの伏原姉弟は異質者と言うことになる。人間よりももつと地球に近い存在である魔は、層にしっかりと留まっているはずなのだから。

「でしょでしょ。それにしても凄いわね。ここまではっきりとした霊体を見るのは初めてよ」

「一応私に従属するに値する資格を持つ者を選んだつもりですから……」

相さんのはしゃぎっぷりに水をさすような冷たい言葉がウチに投げかけられる。

「なのにこの体たらく」

無論その言葉の主は枳さんであり、その言葉が出てきた口の上にあるビードロの透き通った目は呆れの情を目一杯表現していた。冷たいを通り越して痛い目線である。

「そうなの？ 貴方のパートナーになるには十分な力を持っていてそののに」

「パートナー？ あり得ませんね。こんな者が私と対等な存在とは絶対に認められません」

力強く枳さんはそう言い放った。酷い言われようであるが、最重要事項において大きな、しかも絶対に取り戻せないミスをこいたウチには返す言葉がないのである。

「まあその狐の動物霊とやらが相様の目に映っていると言うなら嘘の経歴書ではないのでしょうか。私には見えませんが貴方様がそうお褒めになる程なのですから腕は確かなのでしょうかね」

やはり静納の姿は枳さんにも見えていなかったようだ。ここに来たことは少しウチのメリットとなったのかも知れない。何というか、

枳さんの中での地位向上という点において。

「そうねえ。これ程の霊を現世に喚び留められるのならきつと貴方という深き者の横にいても恥ずかしくないわね」

深き者、か。その形容をされると言うことはやはり枳さんは他者から、しかも魔の宝として名高い伏原の姉弟から認められる存在だと言うことが。

これは良い位置に潜り込めたもんだ。この立場は利用できるな。

「御嬢様」

台車に大きなケーキを載せてきた温さんが開いているドアをノックして皆の視線を集める。

「どうせならもっと落ち着くところでお茶にしませんか？」

「それもそうね」

相さんは自分の周りを見渡してから頷いた。確かにこの部屋にはテーブルが無く、あるのは暖炉、ソファーと絵画が幾つかといった感じで実に寂しい部屋である。そもそも応接室は二人の生活において不要な施設であるため、ここは単に庭に下りるためだけに作られた部屋らしい。

「じゃあ二人とも付いてきて下さいな」

温さんが台車をリターンさせてこちらを振り返らずにそう言った。その物腰は間違いなく男のガサツさを含まず、女のそれであった。

「さあ二人とも急ぎましょう」

相さんの目は台車の上にあるケーキを追っていた。その姿に再びにやけそうになるが我慢する。しかしそれでも気付かれたのか、彼女はくるりと振り返りウチに笑いかけてきた。

「ほら貴方も」

そう言って相さんはウチの後へ手を伸ばした。

そんな事をされたのは初めてだったため、最初自分の後ろに何かあるかを忘れていた。

そしてそれは起きた。

………伏原相はウチの後に手を伸ばして静納の本体に触れ、そして静納を眠らせたのだ。

まさか……有り得ない……静納が干渉されたのか……。

驚きのあまり固まってしまったウチの顔を窺っているその綺麗な顔は、

弱者を見下すような歪な笑みを浮かべた様に見えたのだった。

俺は思った。今後二度と『地獄』という言葉をお口にすまいと。

地獄というのは死者が相応の罰を受ける所なんだ。つまり死者は地獄では生きてるってことだ。罰を受けるには生きていなければいけないのだから。

だからここは地獄じゃない。そう、この世には地獄なんて無いんだ。目の前の状況を目から取り入れ続ける脳はそんなくならない事を考えていた。

死者は生きてはいないんだ。そんな当たり前なことを俺は知った。初めて死を目の当たりにしてだ。

床一面に広がる人々の死体は生きていない。そりゃそうだ、ああされれば誰だって生きていられない。だから地獄じゃないんだここは。なら今俺は一体どこにいるんだ？

そもそも目の前の肉塊は本当に人間だったのだろうか……そう疑問に思うほど原形を留めていなかった。

現実とは思えない……しかし地獄ではない。どこか離れた世界、そこに俺はいた。

そう言えばここには地獄じゃなくても地獄に相応しい者はいたんだった。

そいつは俺の首筋に一本指を突きつけてそう言った。

「見物料ちよーだい？ お前の命で良いからさ」

そう言う、目の前の何とも落ち着いた顔をしている女は先程までの暴力の嵐には似合わない、静かな雰囲気を持っていた。しかし待ってくれ。こいつはさっきまでは確かに……人間じゃなかったんだ……。姿がどうという意味じゃない、あれが人間の仕業ではないということなんだ。

それはまるで本の中にだけ存在する鬼だった。姿かたちは人間だけれども、その中には残忍で非情な赤い獣が隠れているんだ。

そいつは腰を抜かせてへたれている俺の姿にクツクとニヒルな笑みを浮かべ、その血まみれの足を俺の太ももに押し付けてきた。その痛みは鈍麻になった俺の感覚を賦活させる。その痛みと共に先程まで見ていた肉の飛び散る光景がフラッシュバックした。

夢なら覚めてくれ、そう良くあるフレーズを何度も何度も心の中で叫んでいたんだ。

由音ちゃんの家から出ると既に空は黒い布を纏っていた。色味の悪い壁も暗闇を削る橙の灯りのおかげで少し綺麗に見える。

「ねえ椒ちゃん」



外通路にて暗い夜空に何かを感じているのか、ただ押し黙る少女に話しかける。

「椒ちゃんって由音ちゃんのことどう思う？」

敢えて二つの意味でとれる様な質問を投げかけた。

椒ちゃんが由音ちゃんを少しでも好意的に捉えているならそれでいいし、もしそっちの答えが返ってこなかった場合でも私はそのまま頭からその考えを洗い流してしまっても良かった。いや、少なくとも嫌いではないだろうと半ば確信していたのかもしれない。だからどっちでもよかったんだ。それに私が首を突っ込む事でいつもの椒ちゃんの天邪鬼が発生しないとは限らないからね。

椒ちゃんは数秒口を不動にし、クスリと唇端を曲げるとそのまま階段を下りてしまった。

「あやゝ、その反応は予期してなかったよ」

私は心が見透かされた様に思えて少し恥ずかしくなり、ちよつとの間顔を見られたくないと追えずにいた。二人が仲良くなっている事に嬉しさを覚え舞い上がってしまった事を当事者に指摘されたものだから。既に階下にいる椒ちゃんが私を見上げたただ待っているのが視界の端にぼんやりと映っていた。

通路の手すりに体を預け夜風を髪に誘う。空高くには綺麗な星空が広がっていた。夜の人は黒い布だけでは満足しないのだった。

「うん、帰ろうか」

頬の紅潮の治まりを確認すると私は階下にいる椒ちゃんに手を振った。

由音ちゃんが元気を取り戻したのを確認すると執事さんは一人で車に乗り込み朱水の家へと向かった。本当は私達二人を送ってくれと言ってくれたのだが、椒ちゃんは家に夕食のための食材が不在である事を思い出し、帰りがてらお店で調達するからと断ったのだった。

数歩先にある黄髪の左右の棘が上下に揺れる様はどこか楽しげで、聞こえぬ鼻歌が耳に触れた。いや、その実彼女は軽やかな足取りで自身の気分の良さを表わしていた。

「由音ちゃんが元気になってよかったね」

椒ちゃんが楽しそうだと自然に私の心も浮かれてくる。暖かい空気に乗ってそのままお空へ浮かんでしまいそうなのな雰囲気だった。

「そうですね。あの方の騒がしさはどこか落ち着く所がありますから」

「ありゃ〜」

相変わらずの反応だなあ。

「明日からまた由音ちゃんが来ると良いね」

それらは何気なく放った言葉だった。いや、その言葉だけじゃない、少し前からの言葉全てがそうだった。

椒ちゃんはこちらへと振り返るといつもの何所か不機嫌そうな顔で、尚且ついつも以上の眉間の皺をこさえて私にジロと視線をぶつけて来た。

「……有様は随分と菅江様の事を気にかけていらっしやるのですね。あからさまな不機嫌口調である。間違いなく先程までの上機嫌は塗り潰されてしまって、今少女の胸にあるのは私に対する怒りだけだった。」

その赤い目を見た瞬間自分が何ともお馬鹿な事をしていたと気付かされた。椒ちゃんはきつと由音ちゃんの回復を喜んでいたのではなく、否、それもあつただろうがそれ以上にこの時間が嬉しかったのだ。それなのに私は由音ちゃんの事ばかりを口にしてしまった。そりゃいくらなんでも怒るよね。

「二人で歩くだなんて久しぶりだもんね」

そうだった、最近私は椒ちゃんと二人きりで長い時間を過ごす事は出来ていなかったんだ。折角仲良くなれた……はず……なのだから

らもつと椒ちゃんと近づきたいと思っていたのに。それなのにあの時から私は由音ちゃんの事ばかり気になってしまい椒ちゃんとの関係は流れに甘んじていただけだったのだ。思えば四六時中由音ちゃんの事を考えていた自分がいた。椒ちゃんでも朱水でもなく、由音ちゃんをだ。

朱水の事は大好き、椒ちゃんだって好きだ。でも由音ちゃんへの感情は二人とは違うんだ。好きという単純な言葉では表せない物を私はあの小さな頑張り屋さんに対して抱いているんだ。朱水に対する憧れでなく、椒ちゃんに対する親しみでなく、そう、それはまるで子愛だった。母性本能というのだろうか、私という母親を知らない女でもどうやらそれは宿る様で彼女を見るたびにそつと頭を撫でてあげたくなるのだ。

「そうですよ……」  
零れる言葉は湿った重みに耐えかねて直ぐに落ちていった。心の奥底に潜り込んでいた感情だったのだろう。

「……今くらいは私に構ってくれたって……いいじゃありませんか」  
「……………」

はい？

「今なんて？」

「っ……知りません！」

今度は私ではなく椒ちゃんの頬が紅くなつた。

いやはや椒ちゃんがあんな殺し文句を習得しているとは思わなんだ。その可愛い後ろ姿をそのまま抱きしめたい衝動に駆られたが、既すでにの所で押しとどまった。

由音ちゃんに対する愛情とはまた違う物を椒ちゃんに感じていた。それは可愛い物を愛でる気持ち、連れ添ってその姿をずっと眺めていたかった。

始めは苦手だった。

でもそれは次第に愛情に変わった。

それは彼女を理解し始めたから。

私は椒ちゃんをもっと知りたかった。

でも彼女はきつと自由にさせてくれない。

「椒ちゃん」

「……………何でしょうか」

先程より大きく離れてしまった距離を言の葉が渡る。静かな屋外では私の呟きの様な声さえも彼女に届いてしまった。

夜の住宅街は家庭から漏れる薄い灯りと頼りない小さな街灯だけで照らされている。ここは田舎と言う程寂びれてはいないが都会とは決して言えない、そんな場所だ。それでもぼつぼつと私達以外の人々が道を往来する。皆家を目指して足を運んでいた。

薄ら明かりに照らされる人形の様な少女は私の言葉が続かないのを不審に思い、足を止めてこちらへと目を配らせた。

「何かありましたか？」

どうしよう……………言いかけた言葉の危険性に気付いて口を噤んだ所為でうまく言葉を探せないや。どう続ければいいのか、その赤い目を見返しながら必死に考える。口が動かない理由である焦りはその言葉の危険性から来ていた。

言える訳が無かった。

「好き」なんて無責任な二文字をこの口でこの雰囲気と言える訳が。

私は嫌な奴だ。繋ぎとめようとしてその言葉を使おうとしてしまったんだ。

確かに椒ちゃんを好きなことは変わりない。でもそれは由音ちゃんだって同じ事だ。二人とも好きだ、でも違うんだ。

私だつて分かっている。椒ちゃんから好かれていゝのであろう今の私が「好き」だなんて言葉を使つたら冗談では済まなくなる事くらい十分承知している。

椒ちゃんがどういふ反応をするかは分かっている。そして心の中でもどういふ反応をするかさえも。だから軽々しく口に出せない。うっかり言つてしまったとしても彼女は大きく捉えてしまつかもしれない。

嘘ではない、しかし否定しなくてはいけない言葉になるから。

私が本当に「好き」と言える相手は一人しかいないのだから。口に出して、そして一切の飾りつけも要らない素の「好き」でいられる相手はただ一人だけなのだから。

私は今でも彼女に恋している。あの黒髪を揺らす姿を見る度に胸がときめき、あの主張し続ける瞳に見つめられる度に手を握りしめてしまう。その艶やかな唇から零れる声を聞く度に心地よくなり、その手に触れる度に私は彼女に魅了される。

椒ちゃんに対してとも由音ちゃんに対してとも違う感情、それはきつと『恋』

尼土有は一色朱水に恋してる

愛情だけなら二人に対してだつて沢山持つている。だけでも朱水に対してだけはもつと別の大きな物を孕むんだ。自分の物だけにしたい、全てを知りたい、人様には決して言えない黒い物だつて心の隅っこにこっそりと隠し持っている。お互い恋人と言える存在にな

った今でも私は彼女に恋しているんだ。

愛は沢山の人に振り撒ける物

恋は本当に好きな人にしか差し向けられない物

だから、椒ちゃんに対して「好き」なんて言葉を使う訳にはいかなかった。

私は三人をそれぞれ違った感情で好きになっていた。庇護愛、親愛、恋愛、三人をそれぞれの理由で愛しているんだ。

「えっと……その……」

私はずっと意味の無い繋ぎの単語を連ねているため椒ちゃんの眉は次第に吊り上がってくる。その様子を見て幾人かの通行人は二人の顔を何事かと交互に注視していた。

「だから何なのでしょうか」

強まる声が夜の空気を震わせる。

そこにもう一つの震えが加わった。

「久しぶりね椒」

それは数秒前には絶対に感じられなかった存在、しかし今ははっきりと色濃く目の前にいた。

「……どういっつもりですか？」

椒ちゃんの強まっていた声は急に小さくなった。しかしそれは無理やり感情を抑えたような響き、今にも留め金が外れて中身が零れ

出しそうな小箱を雁字搦めになっている鳶の軋みだった。

椒ちゃんは一度瞼を深く閉じ、ゆっくりと私とは逆の方向へ体を向けた。

椒ちゃんの目線の先には驚く程に長い桃色の髪の毛の女性が立っていた。背丈はその靴底の厚みを差し引くと私と椒ちゃんの間くらいだろうか。その太ももにさえも髪先が届いている程の長さだった。

「枳」

彼女は不思議な事に私達以外の誰にも気づかれていない様であった。その洋服の奇抜さたるや誰もが足を止めると言っても過言ではないくらいなのに、誰も見やしないのだ。一方でメイド服という目を引く服を着ている椒ちゃんは当然の様に通る人全てに一度なりとも顔を向けられていた。

目の前に立つ少女はまるで私達にしか見えていない幻だった。

「姉様、そう付けてはくれないのね」

響く声は鈴の音の様に他者を惹きつけんとする。しかし、誰も振り向かないのだ。

その手に持たれている傘は不思議な形をしていた。広がる骨は三本しかなく布地は三角形を形作っている。その三頂点には長細い宝石のような物が垂れ下がっていた。傘が揺れる度にその宝石も大きく揺れ動く。

「……何か御用で？」

再びの小さな声と共に椒ちゃんから何か恐ろしい物が溢れ出していた。目に見えないそれが私を包むと、私の足は嘆傷のごとく震えだした。怒りという言葉では不十分な表現となるであろう。普段の椒ちゃんには無い、赤黒い物が漏出していた。

「久しぶりに妹の顔を見に來ただけよ」

そうか、これが彼の枳さんなのか。考えのすれ違いから朱水の下を離れ、そしてその際に槐さんに呪いをかけた人物、かつては椒ちゃんと仲が良かったはずのあの枳と言う人物なのか。

「御冗談を。貴女が考えも無しに行動する者じゃない事くらい姉妹なら全員知っています」

椒ちゃんから攻撃的な風が吹くが枳さんはそれを気にも留めない様子で平然と受けていた。

「そう。なら良いわ」

興味が無いと言わんばかりの適当な返しでその威力をいなす。

「……有様にそれ以上近づいたらただじゃおきませんよ」

「ふふ」

私と枳さんの間に立って視界を遮る。

「最近朱水様の周りにまとわりつく存在がいるから顔を拝みに来たのよ」

「……消えなさい。それと、有様に手を出したら姉妹全員が貴女のお相手をして差し上げますよ」

二人は互いの腹を探る様に睨みあう。椒ちゃんの顔は私からは見えないけど恐らく今までに見た事の無い様な顔をしているのだろう。私の前に立っている事がむしろ幸いだっただのかもしれないと、少しばかり失礼な事を考えてしまっていた。

「尼土有」

急に聞き慣れない声で名を呼ばれたため反射的に姿勢を正してしまった。枳さんが私を指さす。

「いずれ邪魔が入らない場でお会いしましょう」

私はその言葉にたじろいでしまい何も返せずただ椒ちゃんの頭越しに枳さんの顔を見ていた。

「……失せる」

椒ちゃんの声が一層低くなり、滅多に聞けない音を漏らした。

「ふふ、怖いわね」

長髪の訪問者は小さく手を振って踵をめぐらせた。去っていく際



も誰にも視線を配られず道のど真ん中を闊歩している。きつと何かの魔法が働いているのだろう。

「今のがあの枳さんでいいんだよね？」

「……ええそうです」

未だ肩を強ばらせて息荒くしている椒ちゃんは何とか平常に戻ろうと深呼吸をしていた。その行為が終わるのを横で待っていると彼女は急に振り返り私の目前へと顔を突き出した。

「有様、あの女の誘いには絶対に乗らないでくださいね。彼奴は他の姉妹と違います。有様をどう思っているかなど私達には到底知り得ない事なのです」

声の強さから察するに相当危険な人物らしい。普段落ち着き払っている椒ちゃんがあの状態だ、私だけでは絶対に近づいてはいけな  
いと言う事は分かった。

「……今のでお腹がすきましたね。早く夕飯を作っちゃいましょう。小母様もお腹をすかせているでしょう」

私の緊張が伝わったのか話題を変えて表情を和らげた。確かに緩んだ空気に晒された途端にお腹がぐうと鳴りそうになる。

「うん。今日は何を作るか決まっているの？」

「はい。極一般的な家庭で最も好かれる料理と聞くカレーを作りたいのです」

おお〜好いね！

「中辛と甘口の一対一が私の好みだよ」

「中辛とは何ですか？」

歩きながら不思議そうに首を傾げる椒ちゃん。もしかしたら市販のカレールーの存在を知らないのかもしれない。朱水の家だもの、スパイスから作っていても何らおかしな話ではないよね。

「椒ちゃんはカレーのレシピを誰から習ったの？」

そう尋ねるとごそごそとエプロンドレスの裏から四つ折りに畳まれた紙を出し私に見える様に広げてくれた。そこには少し乱雑な文字でカレーの材料と思われる品々が書かれていた。

「カレー一つ、ジャガイモ四つ、ニンジン是不味いから入れないで……」

ああ分かった、間違いなくこれを書いたのは梓ちゃんだな。しかも「カレー一つ」って書き方じゃ初心者のかちゃんには理解できないよ。それに「作り方は箱の裏に書いてあるやつを見てください」か。

「とりあえずここに書いてある通り大体の市販カレールウなら裏に作り方書いてあるからそれに倣って作るうか」

「そうなんですか。便利なんですね」

便利というか、むしろ書いてない方が少数派だというか。

「そろそろスーパーに着くから後はそこで考えようよ」

「はい」

私達は大通りに出て人々の隙間を縫う様に歩いて行った。

「これが『るう』なのですね」

椒ちゃんは初めて見るであろう長方形の小箱をカタカタと鳴らして中身確かめる。

「これを溶かすだけでカレーができるのですか。不思議ですね」

「正確にはこれだけじゃ駄目だけどね。後は具が要るんさね」

裏に書いてあるレシピをよく勉強し指を折って必要な物を考えていた。

「それも買うんだからそれを持ち歩いて材料揃えればいいと思うよ。ひどく長い間ルウと睨めっこしているものだからちよつとしたアトバイスをしてみる。カゴに入れておけば何時だって見られるもの。

機転の利かなさを恥じたのか私に大きく開いた目を向けると顔を真っ赤にして野菜売り場がある方へと逃げて行ってしまった。

「もう、ほんと可愛いなあ」

にやける口を指で押し戻しながらその軌跡を追う。しかし野菜売り場には椒ちゃんの姿は無かった。何処に言ったのだらうと外回りの太い通路に顔を出すと鮮魚売り場にて試食品を配っている店員の小母さんに掴まっていた。普段なら会釈だけで通り過ぎしていたはずだけれども、今回捕まった相手は強敵の様で通路を通る人の目の前に試食品を出すものだから思わず手に取ってしまったのだらう。

日本人は試食品を手にとると買わないといけないのではないかという薄らとした脅迫観念を持ってしまふ気がする。礼儀というか義理というか。おまけに子供が食べてしまふとおねだり攻撃をする裏切りの伏兵となってしまうから怖いよ。

椒ちゃんもそれが分かっている様で買わない物は試食品があっても見向きもしなかった。そんな娘の足を止めるとはなかなかの兵だ。

そのやたらと目立つ格好をしている人物の背後に立つと、少女は配られたプラスチックの小さなトレーを私に差し出した。

「ん？ 貰ったら食べた方がいいよ。戻すのはマナー違反だ」

勿論そんなマナーなど無いが、要は回転寿司での皿戻しと同じで手を触れた物を戻さないってことだね。

「有様……」

「何かな？」

椒ちゃんはトレーの中身を見て不思議そうにしている。私もそれを覗くが別に至って普通のマグロの刺身だった。爪楊枝が刺さっていて御丁寧にワサビまで添えられていた。

「この黄緑色のは何ですか？」

その細い指先が指すのはツンとくる刺身定番の御供だ。

「ワサビだよ。初めて見たんだ」

「はい。私はそもそも食べ物には疎いもので……」

そういやそうだった。最近では椒ちゃんが毎日物を食べているから忘れていたけど元々朱水の家では食事を取る必要が無いからという事で特別な機会が無いと食べ物をお口にしないんだった。

「初めてか」。ならそれを口に入れる際には覚悟してね」

「覚悟ですか？」

意味が分からず眉を上げるが私がそれ以上何も言わないため疑問に思ったまま爪楊枝で黄色い物体を持ち上げそのままぱくりとやってしまった。あちゃー、そもそも他の物と一緒に口にするとという発想すら無かったか。

ワサビを生まれて初めて口にした椒ちゃんは目に涙を浮かべて私の腕を掴む。

「な、何ですかこれ。ベロの根っこが痛いです」

そりゃそうだ、塊でいつたら普通はそうなる。試食係の小母さんもワサビを多く入れ過ぎたと思ったのだろう、椒ちゃんの様子を見て既に用意してあったトレーからワサビを半分ずつ取り除く作業に没頭していた。

「はー」

空気を通して本能的に揮発性物質を消そうとしているのか、鼻を摘み口からゆっくりと押し出すように息を吐いていた。

「どう？ 初めてのワサビの刺激は」

「……………これって一般の人間でも手に入るのでしょうか？」

はい？ どういう意味かな？

しかし椒ちゃんは私の答えなど待つことも無く体を九十度回す。

「これ、欲しいです」

そう言っただけ作業を終えた小母さんに向かって小机の上にある練りワサビのチューブを指さす。

あらら、意外すぎる反応だや。

店員の小母さんは最初目を点にしたが鮮魚売り場の隅にあるチューブが大量に刺さっている箱を示した。椒ちゃんは跳びつく様にその場へと駆け寄りワサビのチューブを数本一掴みで抜き取った。

「気にいったんだね……………」

その凄まじい速度に呆れすら覚えるが椒ちゃんに新たな好物ができた事には素直に拍手を送っておこう。おめでとー。

「有様、カレーの材料を早く揃えますよ！」

俄然やる気が出た（と言うよりも帰る気が出た）椒ちゃんはカレーの小箱の裏を見てその通りに急いで材料をカゴに入れる。もはや私に一瞥もくれず、ただただ材料を選んでカゴに落とす作業だけを繰り返していた。

「さあ帰りましょう」

やっとその目が私の方を向いた時には既に両手にスーパーのレジ袋がぶら下がっていた。

「カレーよりワサビの方が楽しみでしょ」

「ま、まあ」

こしょこしょとレジ袋の取っ手を弄くって音を立てる。

「カレーには入れちゃ駄目だからね」

そう言うつと一時目を丸めた後こくりと頷いた。しかしその頷き方は私には了解と言うよりも「成程その手があったか」と言う頷きとしか捉えられなかった。椒ちゃんが気に入ったのがワサビの風味なのか辛さなのか問題だ。後者なら熱い物に入れてしまうと和らいでしまうからね。

帰り道、時々レジ袋の商品の上の方に置いてあるワサビチューブの束を嬉しそうに確認する椒ちゃんがいた。

家に帰ってみると叔母さんがソファアの上で空腹を訴えていたのだ、急いでカレーを作り三人で美味しく頂いた。椒ちゃんにとって初めてのカレーなので余計なアレンジはせず箱にあるレシピ通りに作ってみた。ここからのアレンジは彼女自身に任せただ方が良さそうから、我が家なりの作り方と言う物を伝授する必要は無いとの叔母さんの判断だ。確かに料理を覚えてきた椒ちゃんなら自分で調整できるだろうから。

食後のデザートとして私と叔母さんがプリンを食べている横で、  
椒ちゃんはワサビのチューブをしゃぶっていた。

その行為に愕然とした叔母さんだが「ワサビ、好きなのね」と一  
言だけ言葉にして後はそのリスの種喰いの様な光景を甘いプリンと  
共に美味しそうに平らげたのだった。

「人間は強くなったわね」

それはウチに向けられた言葉では無かった。しかし話しかけている対象は間違いなくウチだった。まるで我が子の成長を喜ぶかの様に言う。

「雨を求めて雨乞いをしていた彼等は、今では雨を嫌悪すべき物として認識している」

ウチの前には伏原姉弟が神妙な気を纏って鎮座していた。やはり人とはかけ離れた存在、ほんの少しの間会話した程度だと気付かなかったその気は、暫らくした今では随分と存在を主張していた。殺気などという尖った物ではなく、神秘性を帯びた輝きの如き気だった。今まで会った人物の誰もが持ち合わせていないそんな靈気を二人ともが走らせている。

「強いよね、人間は。だから私達が生まれた」

ウチの隣には瞼を硬く閉ざしてコーヒーをちびちびと口に運ぶ枳さんが座っている。彼女の髪はウチの手元まで伸びているが、その関心はウチ等の会話には及んでいない様だった。

「でも結局武器を使うことよりも自身に備わった力を使う様に作られた私達は人間に申し掛かる事は出来なかった」

強いよねえ、伏原相はため息交じりにそう言った。

檻の様な別館に招かれたウチ等は応接室が無いため彼等の生活感漂う一室に案内された。そこは姉である相さんの部屋らしく、畳が敷かれそして壁一面に文庫やら新書やらが敷き詰められていた。小説の文庫なら何と無く伏原相という人物が読んでいてもおかしくは無いと感じられるが、新書の方はビジネスマナーやら自己啓発をテーマにしている物やら彼女の一生において何ら関係の無いであろう物が多く占めていた。

部屋に連れられてすぐの頃、ウチがその本の壁に見入っていると相さんはひょこりとその間に顔を入れ満面の笑顔を咲かせたのだ。た。

「私は人間が大好きなの」

彼女が言うには人間の考え方や風習その他諸々が彼女にとって興味を覚える物らしく、その為に新書の方は内容が雑多らしい。文庫も暇潰しのついでに人間の思想を読み取るためとの事だ。

「私は人間が好き。これは純血の魔の中では圧倒的少数派なの」  
それは知っている。純血の魔が人間を嫌っているからこそ未だに純血が存在しているのだ。尤も、その少数派がいるおかげで自分に魔の血が流れていると知らずに生きている混血種が世界中にごまんというわけなのだ。

「そしてその少数派の中に一色朱水と言う深き魔が存在する。貴方の主人である枳がここに留まっている理由も私達が一色朱水と繋がっているから、同じ少数派として交流があるためなのよ」

一色朱水、聞いた事がある名だ。確か人間に混ざって生活をしているという風変わりな領主のはずだ。まあ、純血種の領主の中で彼女の様に若い者はあまりいないため彼女の行動が異常と言えるかは比較対象不足なのかもしれない。しかし頭の固い他の領主はそうは



思っていないと聞く。

「主であるあの方と縁深き私達ならきつとあの方の情報を得られるから、そう思つてここに居るのよね」

相さんは枳さんの顔を覗いて尋ねるが、枳さんは目を逸らす事は無くともその口を開ける事は無かった。

それにしても驚きだ。よもや依頼主があの方の鬼神の僕だったとは。しかし少しおかしな話になる。何故なら鬼神は今や……

「貴方は一色朱水を知つてるのかしら？」

ウチが相さんの問いに答えようとするとそれを遮るように枳さんの口から小さい声があがった。

「あの方の事はどうでもいいではありませんか」

枳さんは何とも嫌そうに言う。どうやらそこら辺は触れて欲しくは無い部分らしい。

「主として素性を明かさねば従者の信頼は得られない、そういう者なのよ枳」

「……………」

枳さんはウチを睨むとどかりとソファアへと荒々しく座つて内心を表わす。恐らく話題を変えろという命令だろう。

しかしそれはウチ以外にも伝わった様で先程からずっと静かに事の成り行きを見守っていた温さんが口を開いた。

「御嬢様、今日お二人を招いたのは不快に思わせるためではないでしょう」

「あらそうだったわね」

相さんは枳さんの反対側のソファアへとゆっくりと身を沈め、ウチに手招きをした。

「今日は貴方の事をもっと知りたいから招いたのだったわね。貴方の過去、見て来た物、世界の有様、それらを私達に聞かせてちょうだい」

過去、その言葉を聞いた途端鳥肌が立つ。ウチはどうやらまだあいつを忘れずにいられているらしい。

「では何からお話しましょうか」

ウチは脳裏に浮かぶあいつの笑顔を再び奥底に大切にしまってから自分の過去から他人に言える部分を抽出して三人に語ったのだ。た。

「やはり人間と言うのは面白いものね」

それは恐らく人間を愛玩動物の様に捉えた言葉だった。

かつて見て来た決して表沙汰にならうはずの無い世界を教えると、相さんは熱心に聞き入り、うんうんと何度も相槌を打っていた。余程人間が好きらしい。

一方その他二人の反応は冷ややかで片や臉を堅く閉じてコーヒーを一定間隔で口に運び、片や外の景色をぼくと眺めていた。相さんと違って温さんはどうやらそこまで人間に興味は無いそうで、ウチの話より何ら変わらぬ外の景色の方に興味を惹かれるらしい。

「それに貴方の経歴は本当に面白いわ。事實は小説よりも奇なりとはまさしくこれね」

確かにウチの様な人生を送る人間はそういないだろう。彼女が読んでいる小説に出てくる人物達と近い物があるのかもしれない。狙い狙われ、常に命を落とす危険がある獣道だった。獣道で出会った獣、互いの喉笛に如何に相手より速く噛みつくか、それだけを考える毎日だった。

「満足満足。枳、貴方良い者を見つけたわね」

「お言葉ですが私が見つけた訳ではございません」

「あらそうだったの。まあ良いわ」

相さんは手付かずだったコーヒを一気飲みすると深い息をついて落ち着きを取り戻そうとした。

「ふふふ、楽しい時間をありがとう。お礼に私達の事を答えられる範囲でなら何でも教えてあげるわ」

「はあ……何でもですか」

「あら御不満？ 私達のような存在はあまりいないと思うのだけれども貴方には魅力的でないのね」

「いえ、いきなり求められてもどう質問したらいいのか」

正直な話彼女達と深く関わろうとは思っていなかった。こういう大木と深く鳶を絡めてしまうと後々自由が奪われ身動きが取れなくなってしまうからだ。終いには鳶を干切られそこで果ててしまうかもしれない。

「むう、何でもいいのか」

彼女が思っていたものと違ってウチがそこまで乗り気でないからか、いじけた様に唸る。決して子供とは言えない年齢であるはずだがその行為は彼女を彼女たらしめていると感じた。

「お話のお礼という形でとりあえず御嬢様がお話したいだけ我々の事を教えればよいのでは？ そこから何か疑問に思う事があれば答えていく形はどうでしょう」

温さんは興味が無さそうな素振りを見せていたにもかかわらず全て耳に収めていたのか、的確な提案をする。相さんもそれに同意し、自らの生い立ちから言葉にして綴り始めた。

伏原家は魔王の血を引く純血の領主の家系であった。かつて予言を行える力を持つ者が血脈の一人として誕生した。予言とは一定の世界が見えている未来視とは違ってその捉えた未来のブレが大きい能力である。未来を直視するわけではなく未来を霧の中から触り見る力だったため一人でも押し潰される事は無かったが、やはり負荷

は大きかったようで短命であった。その最期の時、彼は幾十年の後未来視と過去視を持った双子が誕生する事を予言した。これに喰らいついたのは魔よりも人間の方で例外中の例外としてその双子の危険因子認定の条件的棄権を決議した。その条件に則って伏原家は檻となるこの屋敷を本館の真横に建設する事となる。双方にとって有益だと確信を持っていたからだだった。

そうして生まれながらにして危険因子の認定判を薄紙一枚挟んで捺されている双子は現在もこうして健在なのだ。

「とまあそんな感じね」

相さんは二人の現状の理由を簡潔に語ってくれた。全てを語り終えると一息つこうと目の前にあるドラ焼きを頬張り始める。だがその目はしっかりとウチを捕らえていて質問は今か今かと爛々と輝かしていた。

「ではその……未来を見る過去を見るとはどういった感じなのでしょう」

その質問に待つてましたと言わんばかりの勢いで相さんは体を机に乗り出し、声を張って答える。

「私の場合は文字として見えるのよ」

「文字、ですか？」

ウチはその意外性故に空中に指で平仮名の「あ」を描いてしまった。脳内で文字が見えるとはそれまた何とも奇妙な能力な事で。

「そうよ、文字として見えるの。瞼を閉じると暗闇の中に赤く光る文字が浮かび上がる時があつてね、それを並べ替えたり繋げたりする事で未来が分かるのよ」

その後彼女はやや詳しい説明を教授してくれた。普通の人間や魔は文字を脳内で思い描く時は必ず意味を思い浮かべてから図式変換するらしい。だからこそその「文字」なのだ。意味の無い場合それは文字とは言えずただの記号でしかないからだ。ある意味を持ってこそ文字と言つ道具が存在できる。だから本来は意味が先にあるのだ。

しかし彼女の場合意味を頭で響かせる前に脳裏に文字が浮かぶという。

「でも実はこれ少し違った条件だと誰にでも起こる事なの。例えば一枚の紙に『犬』と書かれているとする。人はそれを見る、つまり脳内へ図式として取り入れる。そしてその後その後にその記号が持つ意味を過去の知識から検索するのよ」

確かにそうだった。その流れでいくと先にあるのは文字だ。では一体彼女の何所が特別なのだろうか。

「じゃあ貴方、今頭の中で『犬』という漢字を思い浮かべて」  
言われた通りに瞼を閉じて犬の文字を頭の中で描く。こういうのは過去に見た映像の継ぎ接ぎでできると聞く。ウチの頭の中でできた文字は白地に黒字で犬と書かれていた。

「できました」  
「じゃあ訊くけれど、今貴方の中で意味が先に出た？ それとも文字が先に出た？」

……そういうことか。確かに先に文字が出るのはおかしいのだ。イヌという動物を知っているからこそそれが『犬』という漢字で表わす事が可能な事を思い出すのだ。決して漢字が先に浮かぶ訳ではない。

「どうやら分かった様ね。だけれども私の頭では時々文字が先に浮かぶの。その文字の意味を思い出し、文として成り立つようにしたのが私の未来視なのよ」

外部に始めからある、つまり紙などに書かれている文字を理解する行為と同じ事が彼女の脳内で起きているのだと言う。

「一度私の能力を解明したいと言う事で数日ずっと機械の中で過ごさせられた事があったわ。実は瞼の裏に何らかの現象で文字が浮かび上がっていて、それが見えているのではないかという意見があったためのの。そして出た結果は白、私の瞼は他人と全く同じでそんな風にはできていなかったのよ」

もし瞼の裏に浮かび上がるのだとしたらそこからは普通の人間と同じだったという訳か。

枳さんは先程のウチの過去話中には全く示していなかった興味を今では明らかに抱いていた。手にコーヒーカップは在らず、諸手を組んで膝上に置きじつと相さんに目を注いでいた。如何にウチの価値が彼女の中で小さいかが分かる違いだね。

一方の温さんは相変わらずでお外の方ばかり見ていた。  
「ほら温、貴方も喋りなさいよ」

そこで本日は初めてまともに温さんの目を見る事になる。相変わらず完璧な女装だった。口を開かねば男と分かるまい。

「と言うと過去視について語るべきですか？」

ウチに尋ねられても思ったが相さんが目で訴えかけてくるのでしっかりと頷いた。その容姿に似合わぬ男の子の声で彼は自身の能力について語り始めた。

「私は御嬢様と違い音が頭を巡ります。その人物の発した声、また聞いてきた声や音が私の耳にも届くのです」

これまた面白い力だ。この姉弟が異常なのは分かっていたがその力の出方さえも特殊だったとは。

過去に聞いてきた音や声の全てを聞ける訳ではないと言う。聞けるのは本人に今でも根強く残っている物、つまり本人がその音を聞いて識別できる物だけらしい。例えばある人物の声を聞いてそれが誰の声なのかが当てられるなら、十中八九温さんはその声の記憶を盗み取る事が出来るのだと言う。

記憶を盗む、か。まるであいつみたいじゃないか。

「ですので対象者の過去全てを覗けるという訳ではないのです」

「ま、それでも大変希少な能力には変わりないけれどね」

なるべく小さく見せようと温さんが自身の能力にぼる布を被せようとしているのを相さんが不愉快に思ったのか、何度か口を挟み弟の力を称賛していた。

「ま、これで私達の未来視過去視がどういう物なのか分かってくれたかしら？」

「はい、大変勉強になりました」

ウチがそう答えると御満悦に鼻を鳴らした。話好きらしい相さんは閉じ込められている鬱憤を晴らすようにその後も次々と自身の事について語りだした。それは本にしてまとめられる程多く、ウチ等はその言葉の雨粒を傘を広げる事無く浴び続けるしかなかった。

「っとまあそんな感じかしら」

たっぷり二時間舌を動かし続けた相さんは顎が痛いのか耳の下をぐりぐりと押し続けていた。舌も疲れただろうに。

「んで、質問は在る？」

その言葉にまだ喋り足りないのかと他の二人はほとほと呆れかえったが口にする事は無くただ押し黙って目を合わせないようにした。必然的にウチとしか目が合わなくなった相さんは期待があった目でウチの言葉を待っていた。

「えっと……」

もはや質問を思いつくには多すぎる情報を得てしまったため何について尋ねればいいのかという目星さえも見失っていた。魚群の中の一匹を目で追う如く難しい作業だと思つ。

「そうですね……じゃあ今から一番新しい未来を見てもらう事ってできますか？」

それは苦し紛れの冗談だった。未来を見る事は意識的にできる事では無いとさっきまで何回も言っていた本人に対して未来視を要求したのだ。でも相手もウチがそれを理解している上での言葉だと知っているだろうから平気だろう。

「そうですね……」

相さんは顎に手を当て考え込むように瞼を下ろす。ウチの冗談に乗ってくれたようだ。

「うん、見えたわ」

ウチ以外の二人も相さんの言葉に閉じていた目を見開く。まさか、冗談でしょう、その音の無い声が二人から漏れ聞こえた。

「聞きたい？ ねえ聞きたい？」

相さんは楽しそうに言う。勿体ぶっているのはその言葉が戯言の未来だからなのか、それとも自分の力を誇示するための舞台の飾り付けなのか。

ウチはこくりと一回頷いた。彼女はウチの承諾を見て咳払いをして口を開く。

「今夜、侵入者が来るわ。それもとびつきり危険な人物が」

相さんは何とも愉快そうに言うのだった。



見てしまっただけでこんな状況になるなんて

出会ってしまっただけで全てが壊れるだなんて

分かる事は一つ

俺は何とも救い難い不運な人間だったことだった

「少年、君は強運の持ち主だな。まあそれが良い運なのか悪い運なのかはまだ分からないけどね」

その人は一つしかない腕を俺に差し伸べた。

「捨てる神あれば拾う神あり、だな。ウチとの出会いが君にとってどちらなのかは後で自分で考えておくれ」

差し伸べられた手は冷たく、その炎の様に赤い髪から想像していた熱さを感じられなかった。

狐火、熱を持たない炎

その冷たい炎は体を震わせていた恐怖心を溶かしつつくす。

「さあ、連れて行ってあげよう。君はもう今まで過ごしてきた世界にはいられないんだよ」

言葉は あっさりと 受け入れられた

三人だけの屋上、誰の目も届かない昼休み、だからなのか朱水ははじけていた。

「久しぶりの感覚だわあ」

由音ちゃんの小さな肩に顎を載せ肺の奥底から全力で空気を絞り出した。最初の頃の反応とは大違いで今は由音ちゃん無しの昼食では落ちつかないらしい。

「久しぶりといっても金曜休んで土日挟みの四日ぶりっすよ」

「んー」

由音ちゃんのこそばゆく恥ずかしそうな態度など眼中に無い朱水はただ自分の快樂のために小さな体を抱きしめる。

「最近はおぼろが私の膝の上に乗ってくれていなくて寂しかったのよね。これくらいの子が膝に乗ってくれる幸せと言ったら筆舌に尽くしがたい、いえ、言葉にすることすら無粋よね」

「ごめんね私は大きくて」

あまりに由音ちゃんにはかり朱水が構うものだからつい憎まれ口をたたいてしまう。しかし朱水は気にした様子も無く何度目かの深呼吸のついでに言葉を漏らす。

「良いのよ有は。立った時に一番抱きやすいのは有くらいの身長だもの。それに座った時お互いの顔が真横に来るのって素敵でしょ？」

そう言って隣にいる私の顔をその綺麗な目で覗く。確かに同じ高さに見えると言っているのは色々都合なのかもしれない。その下にあるぶつくりと誇張された唇の方に視線が行ってしまうのはこの距

離だから仕方ない事だと思っただ。淡い期待って大事だと思っ、うん。

久々に顔をまじまじと見られた所為で真っ赤に火照った事を隠すように椒ちゃんお手製のお弁当に顔を落とす。いけない、この前の黙考の所為で朱水への感情を再認したというか再燃させたというか再びドギマギしてしまう様になった私は朱水の顔を間近では真っ直ぐに見られなくなってしまっていた。朱水の目にはどう映っているのだろうか。

相も変わらずこの空間だけは人がいなかった。迷い込む事も何かしらの用事で来る事さえも無い。完全に鉄扉一枚で空間という概念以上にきり離されている屋上に私達はいた。私と朱水、それと最近になって加わった由音ちゃんはお互いにお弁当を持ち寄って広いコンクリートの床の隅でフェンスに体を預けながら気楽にお昼を過ごしていた。通る風は気持ちよく、その風の速さと相反して時はゆっくりと流れているように錯覚できた。

ふと大きな遺風が吹く。潮の香りが微かに混ざったその風に顔を向けて風上を望むと遠くの海が目に入った。そう言えば私は今までにこんなに近い所に住んでいながらも海という物を目の前にした事が無かったんだ。

「海、行ってみたいな」

私は二人に聞かせる為に言った積りはなく無意識のうちに言葉にしていたのだが他の二人はしっかりと耳に収めてしまっていた。

「海っすか？」

「まだ泳ぐには早いわよ。きっと冷たいわ」

「うっん。泳ぎに行きたいんじゃないんだよね。何と言うか海ってものを一度でいいから見てみたいと言うか」

遠望にて見る海と近くで見る海とはきつと違う物なんだと思う。

私が今ここで思い浮かべている物は私の中での海だ。きつと現実の

海は違った姿なのだろう。それに本物を見た事の無い私には砂浜と塩水というキーワードくらいしか思い浮かべられないんだよね。

「まあこの時期なら人混みもさして無いでしょうし行きたいなら私も一緒にいっていくわ」

朱水は卵焼きが口の中に入っている由音ちゃんの頬を何度もぷにぷにと突きながらそう言った。食事の邪魔をされている形である由音ちゃんは嫌な顔一つ見せず私の目を見ながら美味しそうに頬張っていた。

「もし行くとしたら由音ちゃんも来てくれるのかな？」

ごくりと口の中の物を呑みこむための小さな頷きとその後には肯定のための大きな頷きが現れた。

「そっかそっか。じゃあ椒ちゃんも誘って四人で散歩にでも行こうか」

皆が付いてきてくれるという事が嬉しくついにやけが顔に出てしまうが、隠す必要のある相手では無いのでそのまま表に出す。

「アイシスも誘おうか？」

しかし朱水の顔は少し困った感じになる。

「アイシスに話が及ぶと間違いなく梓に伝わって、その後あの子達全員に伝わるのよね」

使い魔さん全員、か。以前ピクニックに行った時なら大人数で行っても全然おかしくない所だったから良いけど、今回行くのは時期でない冷たい海、しかも行って何かする訳でも無くただ見てみたいという好奇心だけの散歩である。

「とりあえず椒には話を通しておいて。あの子を外す訳にはいかないでしょうから」

そりゃそうだねえ。一応名目は私のボディガードって事で朱水から暇をもらっているのだから椒ちゃんから徒に長時間離れる事はよろしくない事だ。

「まあ私がいるのだから別に護衛云々は気にしなくていいのだけれども、仲間外れにする訳にもいかないじゃない？」

朱水はそう言つて目線だけで膝上顎下の由音ちゃんを示す。確かに……由音ちゃんが来る以上椒ちゃんも呼ばないと後で面倒な事になるかもしれない。同じ家に住んでいるんだから絶対に話題を避けられないよね。

「所で、朱水さんはお昼ご飯食べないんっすか？」

由音ちゃんは自分の小さいお弁当を空にすると頭上にある朱水の顔を覗きこみ当然の疑問を口にした。未だに朱水はお尻の横にちよこんと置かれた梧さん特性お弁当に手をつけていないのだった。まあお昼休みはまだまだ時間があがるが、こんな時間になつても袋から出しもしないとは何か理由があるのか。

「いえね、食べるにいくいと言つかなんと言つか」

朱水は由音ちゃんのお腹に回している両手を離して彼女の目の前に持ち上げる。そりゃ膝の上に誰かが乗っていたら食べるにいくい事この上ないだろうに。

朱水はお昼にサンドイッチを好むため梧さんはその要望に応えてよくお弁当に色鮮やかな三角形を敷き詰めている。しかし今日は偶のお箸が必要なお弁当だった。サンドイッチは片手でも食べられるが今日のはそうもいかない。

「だつたら普通にすればいいのに」

また嫉妬心からこの様な事を言つてしまう。良くない良くない。

「いえ、由音ちゃんみたいなのが膝の上で食事してくれる事の幸福感に比べたら食欲を満たす事で得る物なんて比べ物にならないくらい些細なのよ」

そ、それは確かに分かる。実はさつきから私もその二人の姿を見ていたら膝が寂しくなつてしまったよ。由音ちゃんはきつとこれからも朱水に取られちゃうだろうから他の人を探そうと思つて幾つか顔を思い浮かべる。由音ちゃんと同じくらいの背丈と言つたら私の中では椒ちゃんかアイシス、梓ちゃんくらいしか思いつかない。でも学校には三人は来てくれないし、そもそも椒ちゃんは絶対に私の膝上には乗ってくれないよね。これは確信できる。梓ちゃんなら結

構あつさり乗つてくれそうだ。でもそんなことしたら後で椒ちゃんに何を言われるか……。ならアイシスは……………。

「……………うん、ないな」

「どうしたの？」

私の漏れ出してしまった自問自答を見てしまった朱水は怪訝な顔を  
をする。

「いや、その、何でもないよ」

少しお馬鹿な姿を見せてしまった事に軽い自己嫌悪を感じ、そそくさとご飯を口に運ぶ作業に戻る。うん美味しい。椒ちゃんが作る料理はどんどんパーティーが増え味も良くなりさらに彩さえも考えてお弁当が作られるようになった。毎日こんな物が食べられるなんて私幸せだよ。家に帰っても食べられるし、ほんと素晴らしい生活だ。椒ちゃんをお嫁にもraitたいよ。

「……………有、ゼーんぶ聞こえているわよ？」

なんてことだい、口に出していたとは知らず内心を朱水の耳にお届けしてしまった様だ。

「私が料理できなくてごめんなさいね？」

口調は穏やか、されど怒りは隠し切れていない朱水さん。由音ちゃんの姿を見れば一目瞭然、回された朱水の手が籠っているみたいで苦しそうだった。被害を受けるのが私でなく由音ちゃんなのは勿論彼女がすぐ近くにいたからである。朱水は憤りを感じると即座に力が籠りこまねいた手を硬くしたり、余った力を発散するべく指をトントンと自身の体に叩きつける癖がある。終いには物に当たり散らす事さえも。その力は削強班の由音ちゃんでも逃げる事叶わず、ギジギジとお腹を圧迫され続けていた。食べた物がこみ上げてこない事だけを今は願っています。

「いや、そのね。うん、人って料理とかだけじゃないと思うんだ」

苦しい、自分で言っていて苦しいよ。勿論そんな言葉だけじゃ朱水の苛立ちは治まらず、由音ちゃんは助けを求めて私に手を伸ばす。助けを出さない訳にはいかず、私は辛うじて思いついた苦肉の策に

出た。

「はい、あ〜ん」

そう、両手がふさがっていて物が食べられない朱水に今食べ物を与えれば空腹から来る苛立ちだけでも静まってくれらるだろうと考えたのだ。素早く梧さんが結んだであろう綺麗に結ばれた包みを解いて弁当箱を開け、中に入っていた唐揚げを朱水の唇に運んだのだ。

「あ……はい」

そのあまりに唐突な行為に朱水は鳩に豆鉄砲、あらゆる力が抜けっぱくりと口を開ける。そこに唐揚げを押し込んでみた。

「美味しい？ いや私が作った訳ではないんだけどね」

「はい、美味しいです……」

まだ驚いているのか朱水は昔の様な口調で答えるともぐもぐと黙って口を動かす。とりあえず一難去った様だ。

「有君、自分も自分も〜」

私達の行為を見て由音ちゃんもして欲しいと大きく口を開ける。

だけど私のお弁当じゃないんだよねこれ。

「じゃあ由音ちゃんは椒ちゃんが作ったお弁当からあげるね」

残しておいた卵焼きを由音ちゃんの大口に放り込んであげた。その間もずっと朱水は黙ったままだった。

「な、なんすかこれ。ワサビの味がするんすけど」

その奇妙な味わいに顔をしかめる。何って椒ちゃん開発のワサビ風味卵焼きだけど。事前にワサビ味だと知って食べると美味しいと思えるんだけど、いきなりだと由音ちゃんの様な反応になってしまっただけかな。ちなみに私はさっき食べたけどこれはこれでイケる気がした。後で椒ちゃんに報告だい。あ、残しておいたってさっき言ったけど別に食べないって意味でなくて偶然残っていただけなんだからね。勘違いイクナイ。

「不味くは無いですけど……どうせなら砂糖は入れない方がいいのでは？」

「おお、それナイスアイデアだよ。言っておくね」

その様なやり取りをしつつ朱水の咀嚼を終えた口に再び唐揚げを運ぶと朱水は静かなまま口を小さく開けそれを受け入れた。どうしたんだろうか、とつても大人しい。

「朱水？ どうしたの？」

「……ん」

小さく返事をするがそれがどういう意味なのかは伝わってこない。

午後の授業に向けた予鈴が鳴る。

「戻ろっか」

急いで残りのご飯を口に入れ、また朱水の口の中にも入るだけ詰め込んで仕度をする。朱水は苦しそうだ。たが何とか飲みこんで大人しいままお弁当を片付けた。ラストスパートで詰め込んで大分残ってしまったお弁当の残りは放課後にも一緒に食べようと朱水に言うと、これまた小さく頷くだけであった。頬が紅いのが気になる、風邪でもひいているのだろうか。もしそうだったら無理やり食べるのは良くなかったのかもしれない。だけど歯磨きの時間も考えるとああするしかなかったのも事実なんだよね。空腹はどちらにせよ良い事ではないんだし。

「んじゃ忘れ物が無いなら行こうか」

「無いっす」

「ん」

二人はそれぞれの返事をして荷物を手にする。

また風が吹く。暫らく止まっていた事に気付かなかったのか。その風に黒髪を翻す朱水から向けられる視線は、いつもの私に向けられるそれとは違った物だった。



第五話 貴女と私 / (終)「半身」(1)(前書き)

長いので三分割でお送りします。

第五話 貴女と私 / (終)「半身」(1)

半身

応接間では無い応接間に一色朱水は座っていた。その顔色は驚きと呆れが入り混じる絶妙な物であった。

驚きは目の前の惨状故に。壁の一角には大穴が開いており、雨風が入らぬようにと応急措置として張られた青いビニールシートが見る者に痛々しい印象を与えていた。

呆れは目の前の双子故に。彼女等はそんな状況でもものほほんと日本茶を啜っていた。

「これまた酷くやられたのですね」

そんな双子の態度に隠しきれない感情を抱く朱水は「酷く」の所を強調した。

「そうね。思っていた以上に手強い侵入者だったみたい」

双子の姉、伏原相ふしはらさすくはそんな事を気にもせず相変わらずの他人事口調で言うのだから朱水は更に呆れる。

「侵入者が現れる事が事前に分かっていたのなら何故本館に連絡を入れなかったのですか？」

それも侵入者と言われるだけの事はあり、実際にこの箱牢に押し入る事が出来る輩と分かっていたのだ。朱水にはそれが納得いかなかった。

「貴女達は……その……」

苛立ちから思わず心中の言葉を口にしてしまいそうになり慌てて閉口する。しかし相は朱水が言いたい事を見透かしている様で、お茶を一度大きく音を立てて啜った後に口を開いた。

「重物、でしょ。分かってはいるわ」

聞き飽きたからもう二度と言わないでくれ、音にされないそんな

心を顔で示している様だった。

「そうですね……。貴女達を物として扱っている様で不快に思われるかもしれないが貴女達の力を考えると仕方のない扱いなのですよ」  
今度は相の横にいる双子の弟の方、伏原温ふしはらあつしがため息をつく。

「物として扱われる事には慣れてるのでお気になされずに」

それに同意する相の声が続いた。それは何とも嫌気が滲み出ている言葉であった。

「そうそう。今更よね」

二人とも息のあつた仕草で日本茶の残りを飲みこみ、湯呑みを空にする。

「……そんな貴女達がこのような危険に曝される事は絶対に避けられるべきなのです。連絡していただけたら早急に私の部下でも何なりとこちらに向かわせたのですけど……」

そうならなかったからこの結果を招いた、そう想わせる口ぶりであった。言葉と態度は穏やかであっても完全に責めている口調である。

心配と言えば心配であったろう。しかし朱水の心を埋めていた心配は非情な物である事を双子は感じ取っていた。一色朱水は身内以外に冷たい、これは彼女を知る者ならば誰でも分かっている事であった。

「間に合っていたから。いえ、間に合う事を知っていたために連絡しなかっただけよ」

相は未来を知る事が出来る大変貴重な能力を持つ魔である。その彼女が言うのだから「分かっていた」という事実を疑う事は出来ても否定できる者はいない。朱水も例外でなく、相の既知を否定することは無理である。故にその言葉で納得するしかなかった。

「わかりました。ですが建物は空気では直りません。被害を最小限に出来たかも知れないとだけは伝えておきますね」

つまり今後は連絡するように、と言う『命令』であった。直属の頭首ではないが魔を統べる者として一色朱水は伏原姉弟の上に立つ

ているのだ。双子もそれは分かっているので素直に首を縦に振った。

今この時から見ると昨日の事である。起き立てでありながらさわやかな顔をして朝食を愉しんでいた一色朱水は一本の電話を受け取って、丁度トーストに塗っていたマーマレードの様に眉を動揺で曇らせる事となった。

電話の主は縁深いとある領主であった。その領主が言うには彼の管理下にある魔の生ける宝である伏原姉弟が何者かに狙われたらしい。何重にもあつた扉は全て破壊され正々堂々真正面からの侵入を許したとの事だ。本来なら早急に領主である彼が伏原家に出向くべきなのだが、姉弟は自分達が興味を抱く人物以外に対しては心を開かないためこういう時でさえもこの領主は一色朱水の力を借りようとしてきたのだった。

そして今一色朱水は幾重にもあつた鉄扉が打ち抜かれた伏原家の離れにいた。

「それにしても酷い有様ですね。侵入者の姿は見たのでしょうか？」

一色朱水はその性格故に年下の、ましてや部下相当の相手に対しても丁寧な口調だが、一方の伏原相は目上の相手である鬼神に対してでさえも気にせずいつも通りであった。いい加減朱水も慣れて来たもので彼女の態度にいちいち目くじらを立てたりはしない。いつも通りと言う表現なら温の方も等しいが、こちらは朱水と同じく普段から淑やかであるため彼女の苛立ちを煽る事は無い。

「見たと言えば見たわ。とりあえずわかる事は女で、割と若いってことくらいかしら」

「若い……ですか？」

女と言う事に驚きはしないが若いと言う単語に朱水は耳を動かした。

「ええそうよ。容姿と年齢が合っているならあれは十代やそこらね」  
朱水はその言葉を聞いてから再び壊れた壁の大穴を隠すシートを

見焦がす。

「そうですね……。それで、その者はどの様に侵入してきたのですか？」

朱水の問いに相でなく温が口を開いた。相は細かい説明を省いてしまつと分かつていたために咄嗟に間に入ったのだ。

「素手でした。魔法による補助を受けていた様ですので恐らく人間だと思えます。大きく一度揺れたと思うと次に館に轟音が何度も響き渡りました」

恐らく最初の揺れは本館への侵入、轟音は二十一枚ある鉄扉を破り抜いた音であろう。最初の五枚に致死性の魔法を枳が追加したにも拘わらずその女はそれすらも潜り抜けて来たのだつた。

「一応侵入者が来ると言う事実は既知していたので頼れる人物に横にいてもらいました。何時襲いかかってくるかまでは分かっていなかったので付きつきりで」

朱水は温の言葉で眉を動かしたが静かに温の述を耳にしていた。温の言う頼れる人物と言うのが枳かいたちであると朱水はしっかりと理解していた。

「侵入者は登場いの一番に御嬢様に掴みかかろうとしましたがあの方の部下さんが守ってくださいました」

「部下……それが貴方達の手紙に書いてあつた人物なのね」

「はい。どういう経緯かは存じ上げませんが枳様はこちらに住まわれている間に星井加々美ほしいかがみと言う女性を雇い始めました。彼女も枳様と共に本館の方に住まわられています」

途中から朱水が目線を落として押し黙つたため温は暫らく様子を見た後に再び述を繋げた。

「星井様は体術が得意な御方で、侵入者と互いに潰しの一撃を殺しながら打ち合いました。恐らく奇襲のみが作戦だったのでしよう、侵入者はその手が御嬢様にたどり着けないと悟ると即座に方向転換し、壁を壊して庭へと下り逃げました。故に私達に危害が及ぶと言う事はありませんでした」

それに続き星井加々美も庭に下り立つたがその前に三人の無事を確認する事に時間を数秒費やしたために、既に相手の背中が靈力で乗り越えられない様に細工してあるはずの壁の向こうにあったと言  
う。

「諦めが早いのですねその女」

「女とはどちらを指していられるのです？ 星井様なら一度戻って  
こられ報告をした後に再び出て行っただけに帰ってこられません  
が？」

例え知り合ってから短くとも隠し心に気に入った相手を貶される  
のは心に重りを抱く彼ですら怒りをたぎらす様だ。珍しく朱水に対  
して棘のある言い方をした。朱水はその棘を顔で受け止めながらも  
無視して自身の内を告げる。

「勿論侵入者の方よ。その星井と言う女性の安否は確認できている  
のですか？」

温は朱水の反応に少し驚きを内沸させた。温の予想ではまず朱水  
が気になる事は侵入者の行方であって、その口から人間の安否を気  
にする内容が零れるとは夢にも思っていなかったためである。しか  
し温はその驚きを表には出さず、静を装い答えた。

「御本人から電話を何度か受け取っています」

「そう、なら安心ですね」

再びの意外すぎる呟きに、静けさを決め込んだ温と違い、相は顔  
を訝しに歪めた。されど二人とも朱水の変化の理由を聞き出すなど  
と言つ無粋な真似はしなかった。

「それで、あの子は今何処にいますでしょうか？」

あの子とは当然ここに厄介になっている鬼神城の一人、枳の事を  
指す。一色家から距離を置く事を望んだ彼女は、しかし朱水の手が  
届く範囲に居を構えた。朱水がここへ足を運ぶ事に了解した理由の  
九割分が彼女である。

「貴方が来ると分かったら本館へ戻ったわ。まだ顔を合わせられな  
い様ね」

事情を深く理解している相は枳のその幼い行動に苦笑いを浮かべる。

「……あの子がまだ私と会いたくないと言っなら私から会いに行くべきではないですね」

それは自分を止める言い方であった。しかし本心と裏腹というので無く、拮抗する感情を言葉という重りを置く事で片側に傾けさせている、そんな様子であった。朱水の返しに双子は内心で同じ事を思いつく。一色朱水も枳も相手を恐れる故に近づけないのだと。

朱水はここで初めてテーブル代わりの台車の上に置かれたお茶に口をつける。既に出されてから時間が相当過ぎていたため冷めきっていたが、喉の奥から飛び出してきてしまいそんな言葉を飲みこむのには適していた。

朱水が一息ついているために無言であるので双子も何も言葉にせずただその姿を眺めていた。

「とにかく貴女達が無事である事は幸いでした。しかし先程も言った様にこういう事が事前に分かっていたならせめて私にだけでも通達してくださいな」

「善処はするわ」

相の緩い返答に朱水は苦い顔を構えたが頭を小さく左右に振り、反応しそうになる自身を抑えた。伏原相とはこういう魔だと自分に言い聞かせる。

「館は業者に頼んで直してもらいます。領主会に報告するので恐らくこの様な事が二度と起きない様にと今度から更に堅固な城になるでしょう。あの子にも力を借りてくださいな」

「そうは言っけれど今回の侵入者みたいな奴に対して意味のある行為かしら？ 枳の魔法ですら効かなかつた化け物よ？」

確かに、と朱水は内心で同意した。二十一ある鉄扉の内、本館側の五枚には枳による種類の違う致死性の魔法がかけられていたのに関わらず侵入者は少なくとも内部に侵入して白兵戦を行える程に体を保持していた。

「侵入者は五体満足でしたのですね？」

「そうよ。目だった怪我も無かったわ。あれを見た時に一番始めに思ったのはあの通路を通ってきた癖に『綺麗過ぎる』と言う事だったわ」

無傷という事実を見せつけられると無駄な足掻きなのかと諦める気すら湧いてしまうものだ。

「でも待って。そうなる少しおかしいわね。そんな力を持っているたあれは何故に引き下がったのかしら」

相は自分の言葉に違和を感じたのか、独り言の様に小さく疑問を挙げた。

「無傷でいられる程の実力を持つ者が何故か拳を何度か振っただけで逃げ帰ったのですね……確かに妙な話です。その星井加々美と言う人間は格闘に優れているのですか？」

「どうかしら。あくまで彼女のは人の動き、幾らか拳を交えただけで諦めを抱かせる程の代物とは思えないわね」

相の言葉に温も頷いた。その線は薄いらしい。

「どうにも分からないですね。それに目的も明確ではないのですね？」

双子は同時に頷く。それを見て朱水は頭を抱える。

「正々堂々真正面から来た理由も分からないのよ。だってそうでしょう、逃げる時には越えられないはずの壁を越えていったのよ？ なら来る時だってそっちを使えば賢いじゃないの」

二十一の鉄扉がある通路を形成している壁は厚く、女の侵入経路から察するにその壁を壊す事は出来ないと言う事は推測できる。

「ふむ……」

朱水は何を思ったか急に手を二回打ち鳴らす。



「梧、ちよつといいかしら？」

そう、朱水が誰もいない背後に向かって言い放つと不思議な事に鬼神城が一人、梧が現れた。それはまるで最初からそこに居たかのように落ちつき払って直立していた。彼女は閉ざされた瞼を開ける事無く、「何でしょうか」と応えた。

「通路の外壁を調べてきて頂戴な。大きな衝撃を受けた跡があれば女の限界が分かるわ」

了解と小さく呟くと再び梧は姿を消してしまった。

「相変わらずあの子は気配がつかめないわね」

相は少しだけ悔しがる。

「星井加々美のペットは簡単に見抜けたのに、あの子はどうにも駄目だわ」

自分の目に誇りと自信を持っている彼女にとって梧の存在は力不足を指摘されている様なものだった。

「仕方ないですよ。あの方は鬼神城、相当な実力者でないと星によつて選ばれませんもの」

温は梧の事を熟知しているような口ぶりであった。温の力は過去視、もしかしたら鬼神城の過去ですら覗けるのか、と朱水は疑問に思った。鬼神城は過去に実際に存在していた深き魔の力を引き継いだ新しい命である。つまり鬼神城として以外の過去を持っている事になる。しかし朱水は温にその事について訊ねる事無く疑問を心に放り捨てた。好奇心で過去を暴く事は彼女達にとって不快な行為であろうと察したのだった。

梧が戻ってくるまでにはさほど時間を食う必要は無かった。戻ってきた梧は朱水に耳打ちする。

「そう……。分かったわ、もう戻って結構よ」

朱水がそう命を下すと梧は一度深く礼をすると空気と同化する様に消えていった。

「壁には何一つおかしな点は見受けられなかったそうです」

朱水は観念したという響きで言葉を吐いた。

「相手の実力を推し量る事は出来ない、か。お手上げね」  
相も同じ響きで呟いた。

朱水はその姿を見て頃合と知り、帰り支度を始めた。

「とりあえず報告書を貴女達の領主に送ってください。この件は先程も言った通り領主会に持ち込むのでそこでまた侵入者の目的その他諸々を議論すると考えられます。よろしいですね？」

双子は一度顔を見合わせてから同時に頷いた。朱水はそれを見届けてから立ち上がる。

「では私は帰りますね」

帰り支度と言っても今回の訪問は状況視察のためであり、荷物は小さなポシェット一つであるためそのベルトを肩にかけるだけで終わってしまふ。

「いずれこの館は修理等で騒がしくなるでしょうから相は喜びそうですね」

朱水はにこやかに笑いかける。相はその言葉にこちらも唇端を小さくだが上げた。

「朱水様」

急に温がボソリと朱水の名を呼んだため、既に一步扉へと歩み進んでいた朱水はその温らしくない仕草に戸惑いながらも足を止めて応えた。

「なんででしょうか」

しかし即座に温の口から言葉が紡がれると言う事は無かった。立ったままの朱水の視線と行儀よく座っている温の視線がぶつかり合う。相も温の普段とは違った様子に声を出す事が出来ないでいた。

長い沈黙であった。

口を開いたかと思うと温は何も音を発さずに再び両唇を付ける。声にする事を躊躇っている、それがあまりに容易に分かる姿であっ

た。

朱水に、彼の特殊性を熟知していた故その言葉を待たずに振り切つてこのまま帰ろうかという考えが浮かぶ。それは怯えであった。彼女は未を覗く伏原相よりも、過を暴く伏原温の方が甚だ恐ろしいのだ。しかし朱水は怯える心を蹴りやつて無理やり声を絞り出した。「言いたい事があるのでしよう?。」

朱水の唇が微かに震えていた。温はその震えを見て開けた口を再び閉じる。

「言いなさい。命令です」

朱水の口から殺気さえ纏つた低い声が躍り出る。それは自身を奮い立たせる意味もあった。

その声の主の目色を見て温は一度目を深く閉じ、喉を往来していた言葉を吐き出した。

「景様はどうなっていますか?。」

それはやや広い部屋に異様な程響いた。

そして世界を凍りつかせた。

温の視線は朱水の目を真っ直ぐと射抜き、

相はその温を驚きの目で見つめ、

朱水は宙に視点を泳がせた。

朱水の手は血が滲む程固く握りしめられていた。

長い間その状態が続いた。お互いに何も出来ないでいる。

ジリリリリリ

静けさを砕く様に内線の電話がけたたましく吠える。相は驚きに跳び上がった勢いで受話器を手に取り耳を当てた。

「私は……これで」

これを機と、扉へ逃げる様に足を動かす朱水を温は憂いを含んだ目で見つめる。その唇が動く事は無かった。

ノブへ手をかけると朱水は少しだけ体を止める。内線での連絡を受けている相も顔だけは朱水の方へ向ける。

「温……貴方の力は凶器なのよ」

それだけ言い捨てると朱水は二人の反応を見る事も無く、そそくさと扉の向こうへと消えて行った。

「はい。分かりました」

相は受話器を置く小さく溜息をついた。

「父親からよ。加々美さんから連絡が来たって」

相は心労から少しだけふらつきながらソファーへとお尻を置いた。しかしその相の言葉に温は何の返しもしなかった。

「温？」

「分かって……います……」

「何が？」

温は涙を浮かべた目を相に向ける。相は初めて見る温の表情に衝撃を覚えた。

そして同時に朱水に対する怒りも。

自分の大切な弟を泣かした相手は例え鬼神であっても憎むべき相手である。彼を困らせて良いのは永遠に彼と交じり合う事の無い私だけなのだ、彼に影響する事が出来ない私だけなのだ、そう相は苛立ちを噛みしめる。そうでなければ彼が壊れてしまうから。

例え頭の中でちよっかいを出したのは温の方なのだと思えても、それは感情で塗り潰されてしまっていた。

「分かっています、私が疎まれる者だと言う事くらい……」

温は相を求める。いつも気遣って大事にしてきた姉に、いつも一歩引いて見守ってきた姉に、初めて自分から抱きついた。

「どうして私達はこんななのでしょう」

女のそれには見えない温の顔が悲しみに歪む。鉱石の瞳から藍方石の涙が零れる。相は益々朱水への怒りを煮えたぎらせながらも優しく最愛の弟の小さな体を抱きしめた。

「私は貴方を絶対に疎んだりしないわ」

「姉さんの嘘つき」

やっと温の顔に明るみが垣間見られたとき相は喜びのあまりその小さな肩を抱き潰してしまう。温も心を固めていた鎧を外したか、心の中での姉の呼び方を口に出してしまっていた。

「本当よ。私の言葉は話半分に聞いていてちょうだいな。貴方は唯一無二の存在だもの」

「そうですか。こんなにも長く姉さんを見て来たのに理解できていなかったんですね……」

「それはそうよ。だって私達は……」

お互いだけは絶対に覗く事が出来ないんだからと、相はそれをまるで嬉しい事であるかの如く囁いた。

第五話 貴女と私 / (終)「半身」(2)

夜、本来は暗いはずの世界は人工的な灯りによって、行動するの  
に何ら差支えない程に明るかった。特に駅の周りは人々が常に集う  
ため例え終電時間になっていようとともその電灯が消える事は無い。  
そんな中、宇津井一つじはしむちはため息をつきながらとぼとぼと歩いてきた。  
ため息の理由は二つ、ゲーセンでの散財行為と連絡をしていないの  
に今の今まで遊んでいた事である。一人で行っていたなら恐らく帰  
るタイミングはいくらでもあつたが、友達達と集団で遊んでいると、  
時と自制心を忘れてしまいついついこの時間まで遊んでしまったの  
だった。また連絡をしていなかったのは携帯電話を家に忘れてきて  
しまったためである。このご時世でも数は少なくとも一応公衆電話  
がちらほらと各所に配置されているが、彼は公衆電話を利用する事  
に抵抗を感じてしまい十円玉を財布の中へ戻してしまった。無論友  
達の中にはしっかりと携帯電話をその名の通り携帯している者もいた  
が、借りるまでして連絡する必要は無いと考えてしまっていた。こ  
うも遅くなるとは毛頭思っていなかったのだ。

「まっずいなー」

人の流れから外れ壁際へと足を落ち着けた一は腕時計をチラリと  
見て再び大きなため息をつく。アナログ時計の短針は10と11の  
間をゆっくりと歩いていた。

それは突然の誘いだつた。妹の我儘に付きあつてシューティング  
ゲームの共同プレイをずっとしてきて、いい加減げんなりしてきた  
日曜の昼時、輪島から救いの電話が来たのだつた。

『おう、今から暇か？いつものゲーセンが今日だけ50円で何で  
もプレイできるらしいぜ。お前も行かないか？』

電話の途中で一はもう動き出しており、妹の怨み顔を背に一は急  
いで家から脱出したのだつた。ドアを閉める際に聞こえたケーキと

いう叫びは恐らく帰りに買って来いと妹様からの命令であろう。当然この時間では彼女が求めている様なケーキ屋にあるケーキは入手できない。親だけでなくその後妹からもちくちく責められるのかと思うと、もうちょっとだけ夜の世界に浸っていても罰は当たらないだろうという考えすら浮かぶ。

彼は再び大きくため息をついた。

ミント味がきついガムでも噛んで頭を落ち着かせようと、寄り掛かっている駅の壁と反対に位置するコンビニへとふらふらと足を進め始める。

そして一は見つけてしまった。コンビニの駐車場に停めてある原付から鍵を抜き取るうとしている、クラスの皆が探していた人物を。

「豊島……」

ある日突然家ごと消えた少女、とよしまみずほ豊島瑞穂が平然とそこにいたのだ。つた。

彼女は他の通行人に溶け込んでいた。つまりおかしな所が一点も無いと言う事だ。当り障りのない服を着て、当り障りのない髪型をして、そして外見的に目につく部位も無いのだから当たり前なのかもしれない。しかし一にはそれがとてもおかしく思えた。

彼女の消失は異常まみれで、その癖当の本人は異常ではない事が、『異常』だった。

彼は驚きのあまり立ち止りその光景を目に納め続けた。通行の邪魔だと嫌な顔をする他人の事など気にかげずただただくつついてしまった両足の裏を剥がせずにはいた。豊島瑞穂がコンビニの店内に入るまで彼は石となっていた。

しかし彼女が商品を手にとってレジに並ぶ頃には彼にかかっていた魔法は解け始め、一歩一歩ゆっくりだがコンビ二へと近づく。そして彼女がドアを開ける際に丁度目の前に立ちふさがる形で向かい合った。

通行の邪魔をされた豊島瑞穂はいつも教室で楽しく会話していた眼前の宇津井一を、まるで他人を見る様な目で見つめる。その無感情な目に曝されながら彼は震える唇と舌で声を作った。

「よお……どうしてなんだ？」

ぐしゃぐしゃに絡まり、玉になってしまった思考の糸から辛うじて引つ張り出せた先端はそんな言葉を彼に吐かせた。訊きたい事は幾らでもある、だけど妙に緊張した彼にはこれが精いっぱいだった。

豊島瑞穂は何も言わずに佇んでいた。言葉だけでは無い、何の仕草も見せず手に持ったレジ袋の重みに対する力と時々下りる瞼だけが彼女が生きている証だった。それがどうにも一の心を傷つけた。前に立ちふさがる男を邪魔だと手で押しどけてくれたっていい、何か反応してくれ、一は心の中でそう呟く。けれども相手は微動だにせず、店内と店外の境を挟んで立ちすくんでいた。

「どう……いや、その、すまん」

無言の圧力に耐えきれず怯える様に引き下がっていく足を止める事は出来なかった。言葉尻には二人の間は車一台分は空いていた。その障害の無いアスファルトを彼女は滑る様に踏みしめる。一はそれを首から上だけで追う。

けれども原付のスタンドを上げ、方向転換をし、エンジンをかけた豊島瑞穂は最後に唯一反応を見せた。

「……けて」

最後の二文字だけがエンジンの音に紛れてでも確かに一の耳に届いた。その言葉を聞いた途端一は跳びかかる様に手を伸ばした。何も考えず、本能だけで体が動いていた。そうしなければならぬ、



そんな何かを―はその二文字に感じ取ったからであつた。しかし一歩間に合わず彼女は走り去つてしまふ。それを勢いの余り転んでしまった―は四つん這いのまま目で追つていた。

「つたく、消える時には綺麗さっぱり消えたくせに今度は濁しやがつて……」

その目は先程までのそれと違い、熱意に溢れる物だつた。

「まあ人助けならゲーセンよりかは深夜帰りの理由として心強いわな」

すりむいた両腕の血を一度拭くと元気よく飛び立つ。生気みなぎる―は地面を何度か強く蹴るとその勢いそのまま前へと走り出した。

「へへ、帰宅部の足をなめんなよ！」

今夜だつたから良かった。当たり前の話だが原動機付自転車に生身の人間が追い付ける訳なく、赤信号頼みだつたのは言うまでも無い。しかし原付のテールライトは沢山いる車の中からも見分ける事が出来た。小さいライトである事と、そのライト同士の間隔の狭さ、何より左側通行の原則のおかげで進行方向に対して左側の道にいれば目だけは追い付く事が出来たためであつた。

「どうせなら法定速度も守つてほしいがな」

自分の走る速度なんて普通の人間なら知る由も無く、豊島がどれくらいで走っているかなんてはかり知ることすら不可能だが、それでも何とか追う事が出来ていた。本当に赤信号様様であつた。

そして辿りついたのは町の一角にある閉鎖され長い間放置されているスーパ―の建物であつた。駐車場の隅、人目につきにくい場所に豊島瑞穂の原付は置かれていた。その白い壁にはスプレーでたん

まりと落書きされており、つまりそれはここらにはそういう人物がうろついている事を警告していた。その数の多さから間違いないこの四階建ての大きな箱状の建物は不良のたまり場となっているはずであった。しかし実際には落書き以外の痕跡は外見では見当たらないため周りの住人も知らんぷりを決め込んでいる状態である。事件でも起こって初めて動きだすのだろう。

「あいつは何所だ？」

切れ切れない息を整えようとゆっくりと歩きながら周りを一周したが、人っ子一人見当たらなかった。まあ廃スーパ―である故それは当然なのかもしれないが。彼は顎に手を当てチェーンが巡っている入口を観察する。誰かが出入りしている形跡は皆無であった。ならば従業員用の通用口か、トラックがバックで着ける運搬口かともう一周してみるがやはり何処もチェーンで縛られていた。

お手上げ状態かと夜空を仰いで暫らく星空を眺めていると、彼は視界の下半分を占めている建物の姿を見てある事に気付いた。

「そうか、屋上か」

らせん状のスロープで車が屋上の駐車場へと登れるようになっていた。という事は必ずそこに屋上から入れる入口があると言う事だ。屋上の入口まで調べる物好きな住民はいないだろう。一はその傾斜の強さに嘆きたくなるが景気付けに顔をびしゃりと叩くとループを上っていった。

「やっぱりか。深夜の俺は冴えてるな、これからテスト勉強は深夜にやっておこう」

まあ本番は日中なんだがな、と一人でツツコミを入れつつチェーンが外されている扉を押して中の音に耳をそばだてる。古い建物なので両開き戸であったことが幸いだった。これが自動扉であったなら恐らく無法者達に割って侵入されていた事だろう。

「静かだな」

多人数がいれば恐らく少しは物音がするだろうと考えていた一は静けさに安堵の息を零す。ふと床隅を見ると幾つか懐中電灯が転がっていた。恐らくこの中に出入りしている連中が用意している物なのだろう。

「へへ、拝借拝借」

その内で一番小さい物を手に取りスイッチを付けるとしつかりと灯りがついた。先客がいる可能性が十分以上にあるためちよつとずつしか使う気は無かったが、そのちよつばけな存在が何とも頼もしく力強くあった。

「藪をつついて蛇を出すか……はたまた人間様が出るかー」

彼は意を決して薄暗い建物へと進んでいった。

表から見える綺麗な階段を下りると缶やゴミクズが転がっている踊り場に辿り着いた。既にそこは死角、見えないからと入口数メートルの場所に数々の物が捨て置いてあった。恐らくこの調子で行くとフロアはそれこそゴミだらけであろうと一は覚悟の唾を飲む。

始めに辿り着いた四階はがらんどろとしていた。廃屋にする際に中の物を全て持っていったのだろう、あるのは後から持ち込まれたゴミだけであった。

足元のゴミを蹴飛ばした時、男の声が遠くから響いた。直線で結ばさほど距離は開いていないであろうが、階が違ったためそれだけ声も小さくなっていた。

「……やべえな。だけど帰ろうにも帰れないしな」

脳裏に豊島の声が蘇る。助けて、彼女は間違いなくそう言っていた。最初が聞き取れなくとも唇の動きで大体察する事は出来る。

「ついでないな俺ってホント。何でこういう時に限ってケータイを家に忘れてきちゃってんだ」

流石に公衆電話に頼っても良いと思いきもするが、ここにそんな物あるはずも無い。そもそもあっても通じる訳が無いのだ。

彼は暫らく悩むが足音を立てない様にと滑らす様に足を動かし階下を目指し始めた。

三階も誰もおらずゴミがあるだけであつた。外から見える一階を溜まり場にするはずが無く、必然的に男の声は二階からという事になる。一は覚悟を決めて二階へと下りる。三階から二階へと続く階段を覗く時点で微かな明かりが階下から踊り場に漏れていた。間違いない、誰かがそこにいる。

「……………」

拳を硬く握りしめ、生まれて初めて殴り合いの喧嘩をするかもしれないという未来に震え、踊り場で呼吸を整える。しかし一方で、まだ大丈夫だ、まだどうかなくなっているという状況を見てしまった訳ではない、そう自分を説得していた。それはこの時点で全てを忘れて再び階段を上ると言う大変利口な行為に繋がる意思であつた。それに反して耳の奥からは豊島瑞穂の声が何度も響き渡っていた。助けてという言葉、そしてこの様な場所に深夜いる事、階下から聞こえた男の声、その三つは平和な状況に身を置いている一高校生である宇津井一には大いに心を擦り削る要因であつた。

「クソツ、どうにでもなれ」

絶対にあり得ない、考えられない、万が一億が一にもあり得ない事だがこういう場所にふさわしい人物達と豊島は友達なのかもしれない。そんな希望としては弱過ぎる光を心に抱いて一歩ずつ、一段に両足を置くという面倒な行為を繰り返して下りて行った。

嬉しい事に階段横直ぐに現場が位置すると言う事は無かった。壁に身を委ね、コソコソと奥を角から盗み覗く。すると豊島ではない女が、これまた分かりやすい恰好をした男達に囲まれているのが見受けられた。彼等の足元にある設置型の電気スタンドが彼等を照らしているおかげで遠目でも何が起きているかくらいは把握できた。状況及び立ち位置から察するに間違いなく女はその不良グループとは仲好し小好しではなさそうだ。一は息をひそめ事の成り行きを見守ろうとだけする。現段階では豊島瑞穂の姿が見当たらないので単身で踊り出るまでする必要は無さそうだからである。何かあった時は手元の懐中電灯でもそこらに転がっている空き缶でもあちらに投げ注意を引きつけて走り逃げるだけでいい。一度他人に見つかつたと知れば余程神経図太い人間でないなら暫らくの間ここでの悪さはしないであろう。警察にでも駆け込めばいいんだ、そう一は手を決めていた。

だから予想外過ぎる次の展開には頭が付いていけなかった。

男達に何かを怒鳴られている間はその女は静かにしていた。基本口調が怒鳴りというステレオタイプな不良だったのでその言葉自体は怒りを表わしている訳ではなさそうであった。それ故に女が落ち着き払っているのだらうと一は信じていた。しかし一人がいやらしい顔を作つてあからさまに胸を掴もうとすると、女は動いた。

「おい……おいおい……おい……おい」

一は絶句にならない絶句をする。上手く口が動かないのだ。何故なら女がやってしまった事が現実的でないからであった。

胸を掴もうとした男の頬を引つ叩くのかと、遠目でいる一を含め誰もが思った。掴もうとした男本人ですら日ごろ喧嘩で鍛えた肉体に小さな女が繰り出す平手打ちなんぞが効く訳が無いと、平然とそれを迎え受けようとした。何よりそれを口実に無理やり襲おうという下衆な考えがあった。

しかし次の瞬間には彼は考える事を許されなくなった。

女の平手打ちで顔がひしゃげ、振り切った腕と一緒に頭も彼の体から離れて行ってしまった。

その場にいた不良たち全員がどよめき、目を見開いて口々に化け物だと叫ぶ。しかし人間は瞬時の判断はあらかじめ脳内に用意された選択肢が無いとなかなか出来ないものである。また、集団心理というものがあり、それは厚く、同時に鈍くあるがため『逃げる』という当たり前の行為が誰一人出来ないでいた。誰かが一人でも逃げればそれに付いて行くのであろう。だが度胸がある彼等は脳内に逃げるといふ行為に対する嫌悪感を構えており、それが靄となって緊急時であるにもかかわらず隠してしまっていたのだった。

だから彼等の人生は終わってしまったのだ。

それはまるでつむじ風であった。女は自分が立っていた点を中心に円を描く様に走った。その速さ凄まじく、中心からより外側に位置する男達から走りながらに彼等の命を次々と奪っていった。逃げる事を許さない様に困う様である。

女は走りながらくると腕を回す。すると男の首が持つて行かれる。その繰り返しであった。一分もかからない行為である。その数秒間で幾つもの命が消えて行った。

喋る者など存在していなかった。静けさが再び場を支配する。そして何を思ったかその女は息絶えた男達の体を観察し始めた。

（狂ってる……いや、違う……あれで正常なんだ……）

女にとってその殺人行為は正常な行為だったのだと、一は崩れかかる体を壁に預ける事で何とか保っている状態の中そう感じた。あれはそういうイキモノなのだ。

女は全ての死体の観察を終えると更に不可思議な行為を始めた。その体の一つを踏み潰し始めたのだ。

医学的知識の無い一でもその異常性は理解出来た。女が踏むと死体はまるでそうできているかの様に柔く潰れたのだ。骨の砕ける音がするという事は確かにその体は生物として硬いはずであるのに、それでも内臓が弾け出る程に潰れ爆ぜるという事は、それだけ女の足から受ける圧力が異常であるという事になる。

飛び出てきた臓物さえも楽しそうに執拗に潰していた女は、その行為に飽きてきたのか次の死体に跳び移ると今度はその腹部に爪を立てる。

（高々爪で人間の腹が割れる訳無い……のに）

それなのにメスと同じ鋭さなのか、あっさりとその皮膚は爪の侵入を許し内部を露呈させた。そして無邪気にその中身を掘り始めた。犬の穴掘りの飛び散る砂よろしく臓物が出し入れされる手に引き抜かれて辺りに散らばり落ちる。

(やべえよ……なんつーもんに関わっちまったんだよ俺は)

一は青ざめる唇を噛みしめる痛みで辛うじて意識を保っている。そうでもしないと口から魂が抜け落ちてしまいそうだった。生まれて初めて見る怪奇現象に逃げることにすら出来なかった。

だがいけない、それではいずれ戻って来た怪物と顔を合わせてしまう事になる。即ち死を意味する。

動かない足を、大きな音を立てない様に細心の注意を払いながらも何度も叩いた。それこそ必死とまで言える程に。彼の頭がもう少し落ち着いていたらその力では逃げる足を失うという最悪の結末を招くであろうと気付いただろうが、今の彼には出来ない相談だった。

体の穴掘りを終えた女は、それでも沢山残っている死体の残りに喉を鳴らす。三つ目の死体の千切れた首根っこを掴み、立派な体格の男性の体を軽々と持ち上げてみせた。それを見て口をにんまりと曲げ、勢いよく振りかぶり壁に投げつける。そこから更に狂気であつた。続け様に転がっている死体を全て同じ壁に投げつけ、その山となつた死体に駆け寄り欲望のままに壁に叩きつけて破壊し続けた。

血の雨が降る。女が腕を振るう度に肉の潰れる音が広いフロアに響き渡つた。赤く染まつた壁には血が糊となつたのか髪の毛や肉片が一面にこびりついていた。

一はその音を聞く度に体を跳ねらせ、足へ振り下す拳の威力を高めていった。



しかし急にその音は聞こえなくなった。自分の存在がばれたのかと恐る恐る下ろしていた顔を再びもたげた。

(……………いや……………ばれては……………無さそうだ)

女は拳を壁に押しつけたまま固まっていた。恐らくその拳と壁との間には肉片が挟まっているのである。

(何だ……………どうしたんだよ……………)

その姿勢のままずっと女は固まっていた。動から静への急激な変化は彼の壊れかけの心を更に引っ掻き続ける。

そして気付いた。

いる。

誰がいる。

(俺の後ろに……………誰がいる)

顎を伝う唾液に気付かない程に精神がめためたになっっている一は、そこで初めて突然訪れた静けさに紛れる他者の呼吸を後ろから感じ取った。いつからいたのだろうか……………もしかしたらずっとそこにいたのかもしれない。

ずっと後ろで一を見下ろしていたのかもしれない。

(振り向け、振り向け、振り向け、振り向くな)

もつ壊れる。

でも動いてしまった。

一の首は後ろを確認してしまった。

「豊……島……」

それはここまで追ってきたクラスメイトであった。その顔に浮かぶ表情とは言えない相はコンビニで見た物と全く同じだった。他人を見る冷やかな目だった。

「逃げろ、逃げろよ、逃げてくれよ」

一は豊島瑞穂に擦れ声で小さく叫ぶ。お前から見えないあつちにとんでもない化け物がいるんだ、そう伝えたかった。

だが絶望の声が響く。

「遅かったじゃない」

その声の持ち主は間違いなく先程まで肉を碎き、血の雨を浴びて恍惚としていた化け物だった。

「とよ……しま……？」

一は驚き以上に恐怖で顔をひきつらせる。

二人が繋がっている事実よりも、立っている場所からは絶対に見えていないはずのない豊島の存在を察知してしまった事に何より恐怖

を覚えた。

( なら、俺がいる事だって気付いていたに決まっているじゃないか )  
全身が震える。歯がカタカタと音を立て始める。もう駄目だ、そう思うしかなかった。覚悟と言えたらどんなに綺麗な表現だっただろう、それは絶望の受容でしかなかった。

「 ついでにそいつを連れてきて 」

一の眼から涙があふれ出した。男だとか、女の目の前だとか、そんな体裁どうでもよかった。

這いつくばったまま動けないでいる一の襟首を掴んで豊島瑞穂は引きずり運ぶ。彼女が一步動く度に一は怪物の下へと少しずつ近づいていく。

( …………… )

涙は流れているが最早一は感情と呼べる人間反応を失いかけていた。

引きずっている手に液体が絡まる。しかしもう考えることすらやめてしまった一にはそれが何かなど、どうでも良かった。

殺される、それだけが彼の頭を埋め尽くしていた。

電気スタンドの灯りに照らされた女の顔を間近で見ると、停止していた一の脳は再動した。

(外人……)

その女は上下共に黒っぽい地味な服であったが、その金髪は光あれど薄暗いこの場でとても目立っていた。顔は間違いなく日本人のそれではなく、白い肌と碧眼はその者が日本人以外の血をひいている事を知らせている。

怪奇現象と既に結論付けていたため、その生地の薄い袖に包まれている腕が細くとも一は驚く事は無かった。

「見てたんだ？」

無意識に逸らしていたのか、そこでようやく一は自分の周りに散らばっている物に視点を合わせた。

初めて現物を見る一はその生理的恐怖を覚える物体に戦く。赤い物体が敷き詰められた床に立っている女は、その様子を見て嗜虐的な笑みを浮かべた。

肉塊の全てに目を向けて現実にかけている事を再確認させられた一は呆然としていたが、急に顔を上げ目の前の女を睨んだ。

女はその視線に刺激されたのか、一に歩み寄ると彼の首に一本指を突き付けた。

「見物料ちよーだい？ お前の命で良いからさ」

その言葉に一は気を失いかけた。もう駄目だ、声にはならないが口だけでそう呟いた。

しかし女が口を開いて何かを言いかけた時、三人の後ろの方から

新しい声が響いた。

「ちょっと待つてくれないかい」

その声はこの状況に似合わぬ落ち着いた物であった。豊島瑞穂を除く二人はその声に振り向く。

そこには赤い髪をした女が立っていた。癖の強い波打った髪はその赤と相俟あいまって炎の印象を与える。恐怖など微塵も感じていないであろうかその顔には笑みすら浮かんでいた。

「探したゾ。ようやく追いついたって訳だ」

その赤い女を見ると怪物は舌打ちをした。

「面倒な人間ね。そんなにあの双子が大事か？」

だが赤い女は怪物のその言葉に一笑する。

「どうだかな。契約内容には書かれていなかったが一応命令は受けてたからねえ。仕事としては大事かもな」

「そう。また襲うかもしれない私を潰しておきたいのね」

「いや、それだけだったらここまで追う気は無かったさ。お前さんに興味があったのさ」

怪物はその言葉に怪訝な顔を浮かべる。

「興味？」

「そうそう。ウチの目が間違っていないならさ、お前さんをウチはよく知ってるんだわ。だけれどもお前さんはウチを知らなそうだからね」

赤い女の言葉に怪物は小さく何らかの反応を見せたが、女の次の言葉を静かに待った。

「……アイシス・クラスエンさんじゃないのかい？」

怪物は目を丸めると次には高らかに笑った。

「はははは。そうか、そうか。さすが狭い国だ。こんなに早くあいつの関係者と出会えるなんてね」

「……そうかい。ならお前さんとあの人は別人って事でいいんだな？」

「そうよ。でもどうして私とあいつを間違えたのかしら？」

赤い女は一瞬躊躇った様に見えたが、ゆっくりとその黒い手袋に包まれた左手の指を彼女の左目に当てた。

「心臓が見えるんだ。んで、アイシスさんの心臓とお前さんの心臓がそっくりなもんでね」

「そう……」

怪物はどうにもそれが面白い事らしく、暫らく震える様に笑っていた。

「いいわ、教えてあげる」

やっと笑い終えたと思うと怪物は一步前に出、胸に手を当て高らかに言った。

「私の名前はミレイミル・クラスエン」

指を赤い女に向けて付き出す。

「お前が知っているそいつは私の偽物なのよ」

「……………偽物？」

「そうよ。私が本物のミレイミル・クラスエン。あいつは私の偽物なのよ」

赤い女はその言葉に絶句を余儀なくされる。

「教えて欲しんだけど、あいつは今どこにいるの？ 折角飛び出してきたのに会えないなんて寂しいわ」

ミレイミルは頬に手を当てアンニユイなため息をついてみせた。だが赤い女はしっかりとその裏の意味を察知していた。

「冗談、誰が教えるか」

赤い女はぐらつく内心を隠しておどけた様に言った。

「……そう。私ね、いささか短気なの。だからさ、怪我する前に言った方が得よ？」

附着していた血が黒くなった手を今更ながら拭う。

(まずい……あの人も殺される)

怪物、ミレイミルの狂気を一部始終覗き見ていた一は赤い女の未来を容易に想像できてしまった。あの馬鹿力に人間が対抗できる訳が無いのだ。

一はそれを何とか伝えようと小さく首を振ってみる。今すぐ逃げろ、目の前にいるこいつは化け物なんだ、敵う訳が無いと。赤い女はその一の小さなサインに気付いたが、小さく二本指を振って応えただけであった。

(くそつ、格闘技でもやってんのか知らんが、そんなもんじゃこの化け物に殺されるだけだつーの)

今度は手を前後に振る事で逃げろとサインを送る。しかしそこまで大きい動作は流石に後ろにいる怪物に察知されてしまう事となる。「何、してるのかな？」

ミレイミルはカツンとわざと大きな靴音を立てる。その音で一は再び体を固まらせる。肉食獣を手前に手を打ち鳴らしたものだ。「大人しくしてないと先に殺しちゃうよ？」

先に、ミレイミルはそう言った。焼け付く恐怖に一は流す涙など疾つくの疾うに枯れた目をゆらゆらと揺らす。

そして行きつく先は今さっき怪物には敵わないと確信していた赤い女の目であった。藁にも縋る思いという言葉そのままであった。助けてくれ、そう目で訴えた。



赤い女は静かにその視線に伝えていたが、一をじっと見ると何かに気付いた様に見開いた。その予想外の反応に一は疑問に思うが後ろの狂気がそれを続ける事を許さなかった。

「面白い殺し方を考えつくまでのストックにお前もしてやろうと思っただけだね、邪魔が入ったからもう良いかも」

足を這いつくばっている一の背に載せそう言い放った。

（お前も？ どういう意味だ……豊島の事か？）

一はずっと押し黙って立ち続けている豊島に顔を向ける。

「でもそうね、まずは目の前の邪魔者を消さないかね」

そして一の横を怪物が通過する。それでも一瞬たりとも恐怖が緩和される事など無かった。どうせ殺される、もはや諦めの域であった。助けを求めたのも気の迷い、始めから無駄だと分かっていた。

「前は殺し損ねたけど今回は仕留めさせてもらおうよ」

そして狂気の怪物は一瞬で赤い女の懐へ潜り込んだ。

第五話 貴女と私 / (終)「半身」(終)

赤い女は顎下から襲いかかる一撃を擦れ擦れで避ける  
そして即座に腹部に襲いかかる二の撃を左手で受け止めた

(冗談だろ……あの化け物の一撃を人間が止められるのかよ)  
一はその現実を目を疑った

先程、不良共を流れる様に一撃で仕留めてきた怪物の手を止めさせたのだから仕方ないのかもしれない

その赤い炎の光は希望の光となった

肘による三の撃が突き刺さろうとするのを後ろに跳ね避ける

離れた赤い女はポケットから何かを取り出した

(電……池?)

それはどう見ても単三電池であった

ミレイミルもそれが電池だと分かると馬鹿にするように笑う

そして再び泳ぐ様に懐へ潜り込むと今度は足に拳を振り下した  
「っち」

人間である加々美は腰より下の攻撃に対する防衛手段を持たないならば当然その一撃を止める術は無く、甘んじて受けるしかないはずであった

しかしその雷速の拳が左足に届くと思った時には、既に加々美の体ごと標的はその場から消えていた

(何だ？ 何が起きた？)

ミレイミルも不可解な現象に体を止める

(今、直前まで確かに女は、いた)

二人が見失った赤い女を探していると一の後ろから足音が響く

「何所見てるんだい？ ウチはここだよ」

振り向くと確かにそこに赤い女は立っていた  
しかし大きな違いがあった

(左腕が……無い)

電池を宙に浮かして弄ぶ赤い女には先程まで存在していた左腕が  
欠損していた

そこだけ細かに揺れる服に厚みが無く、黒い手袋も消えていた

「そう、やっぱりね」

ミレイミルはそれを見て何かを納得したのか、小さく呟いた

「左手が特殊だったのね。道理で左手だけで私の手を止める訳だ」

首だけ振り向いていたミレイミルは構えの為に体も赤い女に向ける  
「面白い奴ね。あまり他人に興味を覚えないんだけど貴方の名前は  
知りたいわ。教えてくれる？」

それは相手を戦士と認めた故の行動であった

赤い女はそれに素直に応じる

「星井加々美」

女は短く、本当に名前だけを答えた

それだけで十分と、加々美は考えたからだ  
倒す相手に向ける最小限の礼儀であった

「そう、覚えておくわ」

ミレイミルは言葉の最後に地を蹴り、跳ぶ

一回の跳躍だけで大きかった間隔を、一を越えて縮める

「簡単な話」

今度は腰を落とさずに真正面から跳びかかる

「体の二か所以上を狙えば消えるって事よね」

右手を胸に、左手を右足に叩きつける

人間なら腰を使わないその体術は威力を落とす事になるが、ミレイミルには関係の無い事であった

平手だけで人間の首を刈り落とす事が出来る彼女には

左手が何故か消えている加々美に対してその二撃は致命的であった

あつたはずだった

また同じ事が起きた

届くはずであった二つの拳はまたも風を作るだけであった

今度は消えた訳では無かった

加々美が後ろに滑ったのだった

滑ったと表すしか出来ない現象であった

後ろに跳んだのではない

体は一切動かなかった

直立の姿勢のままであった

それなのに加々美は後ろに動いたのだった

まるで何かに引かれたように

衣服すら揺れずに

加々美は避けた

「ほんと、面白い奴」

ミレイミルは微かに悔しさを含んだ、されど言葉通りに面白そうに言う

「そいつはどうも」

今度は加々美から攻める

二歩分程にしか離れていなかった間隔を潰す

一本の腕しか無い加々美に何が出来るのか

ミレイミルは疑問を抱くが、加々美が距離を縮める為に要する短すぎる時間では答えを導く事叶わず、その必殺の強力で迎え撃つ

互いの拳が互いの体にぶつかり合う寸前、加々美が跳んだ

気味の悪い事に、絶対に寸前の体勢では出来ないであろう回転跳びをしてミレイミルの頭上を越えたのだ

「気持ち悪い動きするのね！」

背後にいる加々美に蹴りを喰らわせようと振り返ったミレイミルは、突き出されていた加々美の手を目の前にして一瞬怯む

「気持ち悪くてすまんね」

加々美はウインクした後その手中に握り込んでいた何かをミレイミルの眼前に放り投げた

(さっきの電池か?)

ミレイミルだけでなく、固唾を飲んで見守っていた一もその意外な代物に啞然とする

だが次の瞬間、一はその行為の意図が理解出来た

後ろに跳びのいた加々美がパチンと指を鳴らすと、大きな音が鳴って電池が爆発したのだった

それは電池の爆発としては異常であった

中に火薬か何かを詰めているのか

しかし火薬特有の臭いも煙も発生しなかった

爆発は大きく、ミレイミルの胸から上は削られた様に吹き飛んでいた

(あ……あ……)

一はそのグロテスクな惨状に顎を震わせる

先程まで見ていた狂行は遠くで起きている事で、何所か映像でも見ている感覚にあつた

しかし今は吹き飛んだミレイミルの肉片を被り、死に直に触れてしまったのだった

「あ……あ……あ……」

ただの高校生である宇津井一は一晚で幾つもの死に触れた  
それは彼の精神に大きな痕を残すであろう

「落ちつけ少年！」

広い部屋に響き渡る加々美の怒号に似た叫びは直前の爆風同様に  
窓を震わせた

その声に一は正常意識を取り戻す

「少年、君は強運の持ち主だな。まあそれが良い運なのか悪い運な  
のかはまだ分からないけどね」

加々美は一つしかない腕を一に差し伸べた

「捨てる神あれば拾う神あり、だな。ウチとの出会いが君にとって  
どちらなのかは後で自分で考えておくれ」

一は震える手をその手に繋ぐ

それを確認すると加々美はニカリと笑みを浮かべる

「さあ、連れて行ってあげよう。君はもう今まで過ごしてきた世界  
にはいられないんだよ」

加々美の言葉に一は暫しの硬直の後、弱弱しくも頷いた

「今の音では周りの住人に聞こえただろうから早く出ないと警察と  
鉢合わせだゾ」

強い力で引つ張り上げられた一は腰が抜けているのかまたへたりと崩れ落ちてしまう

「まーしょうがないわな。普通の人間には今みたいなのは衝撃だろ  
うな」

加々美はしゃがむと一の肩を担ぐ

「ありがとうございます」

「いいってもんさ。同じ毛色の好よしみって奴だ」

「同じ毛色ですか？」

一は彼女の髪の毛に視点をずらす

それを見て加々美は大笑いする

「違う違う、そっちの意味じゃないゾ」

その大笑いが本当に楽しそうだった所為か、一の心も大分落ち着き釣られ笑みすら浮かぶ程になっていた

だが立ち上がった二人は目の前の光景に愕然とする

豊島瑞穂が立っている、それは別におかしな事では無い

だがその奥に頭を失ったはずのミレイミル・クラスエンが何処も欠損していない体で立っていたのだ

「不死者……か」

一は真横の加々美の口から零れた言葉にショックを受ける

（フシシャって不死者だよな？ それって……死なないって……事  
だよな……）

死な、ない

それは永遠に追いまわされる恐怖



見てしまったからこんな状況になった  
出会ってしまったから全てが壊れた

恐怖の再来に一は全身の力を失った

加々美がその重さに耐えきれず持っていた肩を離してしまったた  
め、一は床に崩れ落ちた

「しつこいのはお互い様みたいだな」

「そうね」

ミレイミルは何事も無かったかのようにさわやかに応える

ゆっくり、ゆっくり、一歩ずつミレイミルは二人への距離を縮める  
その顔は不気味な笑みの相を形作っていた

加々美は内心で焦る

それは手元にもう電池が無いからであった

自分一人でここから脱出する事は間違いなく容易な事であった

しかし足元に崩れ落ちている少年を失いたくないという思いが彼  
女にはあった

肉片の海に浮かぶゴミに電池が無いかを軽く伏せた目で素早く探す

そして彼女は二つの物事に気がついた

一つは先程の爆発で吹き飛んだはずのミレイミルの肉片が消えて  
いる事

中電灯

一つは足元に崩れ落ちている少年のズボンに突き刺さっている懐

中電灯

「少年、君は本当に運が強いんだな」  
そう言つて加々美は自分の体でミレイミルから隠す様にその懐中電灯をしなやかな動作で抜き取り、その体の傾きをスピードに変えて前に向かって走り出した

「もうちよつとだけ黙つてておくれよ」

ミレイミルはその手に持つ物が一瞬何か分からなかったがそれが懐中電灯だと分かると瞬時に理解した

懐中電灯ならば電池が入っているはずだと

喰らつた爆発の威力を考えるに防ぐ事は叶わぬと悟つたミレイミルは、ならば先に術者を殺せば良いとその殺戮の拳を正面へと叩きつけた

だがやはり加々美に当たる事は無かつた

加々美はその拳が届く位置直前に予備動作無しで突き出された左手の右側へと曲がつたのだった

それはまたもや物理現象を無視した軌道であつた

ミレイミルの側面外側に立つた加々美は、今度は相手の脇腹に押し蹴りと共に懐中電灯を叩き込んだ

その強力な蹴りはミレイミルの体を吹き飛ばす

「んじやいずれな！」

加々美が指を鳴らす

ミレイミルの体は壁の一部と共に爆発の破壊現象で吹き飛んだ

相手の復活時間の速さを考えると長居は出来ぬと、加々美は急いで一の下へ駆け寄ると肩を担ぎ立ち上がらせた  
「さっきので分かっただろ。あれは再生が早いんだ、ウチ等もとつとと退くぞ」

相手の同意の有無など気にしていられない加々美は一を一瞥もせず走った

加々美の肩に身を委ねる一はそこで初めて本当に生を喜ぶ

(とりあえず……生きて出られるんだ)

そしてその虚ろな目は一人の少女を捕らえる

「豊島……彼女も助けてあげてくれ」

自分でも図々しいのは分かっていた

肩を貸してくれている加々美が自分一人の為にどれだけ負担を被っているかも分かっていた

それでも豊島瑞穂を助けたかった

彼女がいるだけでクラス全体は明るくなるから

彼女はクラスの宝だったから

彼女はクラスに必要だったから

何より彼も彼女の笑顔が大好きだったから

しかし加々美の口から出た言葉は冷酷な物であった

「お前さんは分からないだろうけど彼女はもう死んでいるんだ」  
「……………」

『彼女を助ける事は時間的に出来ない』等の答えなら覚悟していた  
その時は自分じゃなく彼女を助けてもらおう覚悟すら出来ていた

心の奥底では本当は助かりたいという気持ちが蠢いているが、それでもそんな言葉を吐くだけの覚悟はあった

しかし加々美の言葉は違った

「そうなんですか……」

聞こえてきたのは彼女の死亡宣言

「そうですか……」

悲しいという感情と共に嬉しいという感情が湧く

彼女が死んだという事実が悲しいのだった

だから自分が助かるという事が嬉しいのだった

一はそんな感情を抱く自分を殺したかった

デパートの屋上からスロープを駆け下り商店街に逃げ込む。

「恐らくあいつはあの屋上からウチ等を発見しようとしているはずだ。だから屋根伝いに逃げるぞ」

一の前を走る加々美はモールの屋根を指さす。

「よし、あそこで一時休止だ」

モールの十字路に向かって二人は全力疾走する。

「所で少年、どうしてあの場所にいた？」

携帯電話でタクシーを呼んだ加々美は、タクシーが着くまで足を休めようとどっかりと座り込んだ。

「それはですね……」

一は加々美に豊島瑞穂の失踪を含めて全て話した。

「少なくとも分かるのは家を消した張本人があいつでは無い事だな」  
「そうなんですか？」

「ああ、あいつは大した魔法を使えないみたいだからな」

「魔法……ですか」

一の驚きの声に加々美の方も驚きの声を上げる。

「察しが悪いな少年よ。よもやさつきまで目の前にしてた物が普通の現象だと思っていた訳ではないだろうに」

その言葉に一はコクコクと頷く。

「ま、それも追い追い教えるさ」

加々美はポケットから飴玉を取り出すとそれを一に投げて寄越した。その小袋にはステープラーの針が刺さっていた。

「お昼にチラシと一緒にもらった奴さ。折角だからと5つ程貰っておいた」

気持ちのいい笑顔を加々美は浮かべる。

それは一の心を口の中の甘い飴以上に温めた。

「そうそう、さっき訊きそびれたんだけどさ、もしかして警察とか呼んでた？」

その質問に携帯電話を家に忘れてきた事を伝える。

「おお、君は本当に運が強い。流石だな」

「呼んではいけなかつたんですか？」

「そりゃそうさ。呼んでしまったら来た警官全員が殺されたたる？」

「はい……」

まだ一つ目の飴が残っている口に二つ目の飴を放り込みながら加々美は言う。

「んで、連絡が途絶えた警官達を心配に思ってたまた警官が来るわな」

一はその起こり得た未来に顔を青ざめた。

「ああいう存在相手に一般人が対抗できる訳ないんだよ。それに下にパトカーで待機している警官もいるだろうから、その場合ウチは入れなかっただろうね」

彼女が来ないという事はつまり一の死を意味する。

「良かった……」

「うん。良かった」

安堵のため息を漏らす一に二つ目の飴玉が投げられた。

「そろそろタクシーが着くはずだから移動するゾ」

「はい」

一は入れたばかりの飴玉を噛み砕く。

「助けてくださってありがとうございます」

タクシーが到着するはずである場所が覗ける物陰に潜む一は隣の

加々美に囁く。

「まあね。さつきも言ったけど同じ毛色だからな」

「あの、それってどういう意味なんですか？」

先程は髪の色かと思ったが彼女の髪を見た事を笑われた。

「君が面白い物に憑かれてるって事さ」

一は以前おかしな二人組に言われた事を思い出す。

「それって『犬憑き』って奴ですか？」

「お、分かってんじゃないん。何？ 占い師にでも言われたかい？」

「いえ……何と言うか知人というか他人というか……」

「ふーん」

二人の顔を振り切る様に頭を振り一は話を戻す。

「その犬憑きって何なんですか？」

「聞いたことあるかもしれないけど犬神って奴さ。でもね、その憑き方は間違いない血追いじゃないね」

その時指定した場所にタクシーが到着したため二人は移動を開始する。

「どういふ事ですか？」

加々美は足を止め一の方へ振り返った。その口の両端は上がっていた。

「お前さんは『犬神迷い』って言って、犬神が勝手に憑いてしまった大変珍しい存在なんだ」

こちらに気付いたタクシーの後部座席のドアが開く。

「そしてウチは狐憑き。憑かれ者同士、仲良くしようぜ」

人気の無いモールの屋根の下、加々美は惚れ惚れする程明るい笑顔を浮かべたのだった。

(第五話 完)

## 第六話 少女達 / 1 (前書き)

お久しぶりです。今話は平和的かと思えます。その為少しだけ実験回でもあります。故に少しだけ読みにくい部位が出てくるかもしれませんが。

さて、今回の話はキャラ回です。というのも間違はなく鬼神城の名前が覚えにくい&キャラが掴みにくいと思われるので彼女達にスポットライトを浴びせてみようというのが動機でした。なお、キャラのイメージはみてみんさんの私のページ(<http://55.mitemin.net/>)へ飛んでもらうとよろしいかと。へたっぴでごめんなさい……



静かな音が響く。それは風の音。静かだからこそ響く新しい音。

程好く晴れた空の下、一人でいる事が不思議と嬉しくなるような場所、そんな所に私は立っていた。風が吹く度に前髪が揺れて髪型が崩れていくのが分かる。普段の私ならなけなしの体裁感覚を保つために髪型を直すのだろうが、今は私しかいないためそのような事に時間を費やす気はない。利き手をそんな瑣末な事の為に動かすことすら億劫となる。

自然の一部になると言う事がこんなに気持ちのいい事なのかと生まれて初めて知る。もっとも、自然から離れてしまっている私達が自然の一部になれているなどという妄想はほとほとおかしな話かもしれない。だけれども大きな力の前にならそんな叛骨的な考えさえも小さ過ぎる芽だった。いや、叛骨という言葉は不適か。

雲が動く。止めどなく流れていく。雲の形を目で捉えるには私は一度じっくりと空を見上げるだけでいい。小さな目玉二つで私はあの大きな雲を大量に捉える事が出来る。

それは遠いから。私とあの雲の間には距離以上の絶対的な何かがあつて、それを越えられない私だからこそ彼等をこのように見渡す事が出来るのだと思う。

遠いから。

そう、遠いから見渡せる。

遠い、存在

逆に言えば、近いと見渡せない事になる。

あまりに近くにいるとその全容を知ることができなくなる。

ならば近づくよりは遠くでいた方が良いのか？

姿を捉え続ける為に距離を空けていた方が良いのか？

近づけば、見えなくなる所が増える。それは怖い事なのかもしれない。  
ない。

でも近づかないと見えない事もある。それは怖い事なのかもしれない。  
ない。

風が流れる。あの雲と私とに風は当たっている。それなのに私と雲の距離は遠ざかっていく。私はあの雲の様に軽くはないから当然のことなのだ。

だけれどあの雲とその横の雲ではそこまで大きな差は開かない。同じ風に当たって、同じ方向に流れて、同じ速さで泳いでいる。

それは羨ましい事だった。いつでも寄り添っていられる幸せ、それが私の望みなのかもしれない。

でもそれは難しい事なのだ。私は深く理解していた。

今ここに私が独りでいる事が何より彼女との間に大きな壁が一枚存在している事の証なのだから。

風が流れる、雲達は仲よく泳ぐ。  
風が流れる、私は置いてかれる。

それは私と雲が違う存在だから

時が流れる。

彼女にも同じ時が流れている。

彼女と私が同じ存在なら私は彼女の横につれそっていけるはずだ。  
でもきつと近くにいないとはぐれてしまう。あの雲とあの遠くに  
いる雲とでは違う風が当たっているからお互いに離れてゆくのだ。

だけれども近くにいる事が怖い。私と彼女の違いに気づいてしま  
うから。

だから遠くでいた方が幸せなのかもしれない。遠くでいれば彼女  
の凜とした姿の全身を脳に刻み込めるから。

でも近くでいた方が幸せなのかもしれない。近くでいれば彼女の  
可愛らしい部位を見逃す事がないのだろうから。

遠いから見える。近いから見えない。

近いから見える。遠いから見えない。

風が流れる。

時が流れる。

「ここにいらっしやっただのですね」

振り返ると木陰に顔を暗めた柵ちゃん柵ちゃんが立っていた。少しだけ閉じられた様ないつもの目を私に向けていた。

「うん、柵ちゃん柵ちゃんに教えてもらってね。椒ちゃん椒ちゃんのお気に入りの場所なんでしょ？」

「そうですね。ここで椒姉様をよく見かけます」

柵ちゃんはその後に小さな声で「ここには花がありませんから」と付け足した。

「そっか。なら柵ちゃんはここが苦手かな？ 花好きだもんね」

私の言葉に柵ちゃんは首を傾げる。ほんの少し閉じられていた瞼が、ほんの少し開いた。

「そうですね……よく御存知で」

どうやら私が柵ちゃんの好きな物を当てたのが不思議らしい。でも誰が見ても分かる事だと思っただけでも。毎日楽しそうに花の手入れをしている姿を見ていれば彼女が仕事として花と向き合っているのではない事くらい誰だって、ね。

傾げた首を再び真っすぐに正すと、彼女はいつも彼女が持っている静の雰囲気静の雰囲気を纏い始めた。動くのは瞼と小さく動く胸だけで、それ以外の部分は全く動かさずにじっと私を見つめている。恐らく私の言葉を待っているのだろう。彼女はよくこんな感じで言葉を聞いていたから。

「柵ちゃんはどうしてここに来たの？」

私の言葉の意味を何度か脳内で反響させてようやく自分が何をしにここに来たのかを思い出したのか、慌てて、しかし『彼女の割に』としての慌てぶりで口を開いた。語頭が少し詰まっただけの変化だった。

「権姉様権姉様が尼土様を探しておられました」

「権さんが？ 何だろうね？」

見当がつかないのはお互いさまなのか、柗ちゃんも首を横に振った。

「それで探してくれていたんだ。ありがとうね」

「いえ、折角の時間を邪魔してしまった様で申し訳ないです」

そんな風にしゅんと落ち込む柗ちゃんの肩を後ろから押して館へと向かう。

「いいんだって。私にはあんな御センチな気分なんて似合わないんだから」

柗ちゃんは私の言葉が当然のごとく理解出来ないため、静の雰囲気醸しつつも私と目が合う度に首を傾げていた。

柗ちゃんに連れられて何やら騒がしい台所の戸枠を潜ると、そこには私を探していたと言う権さんの他に梓ちゃんあおきと梧さんがいた。

騒がしいという言葉を脳に直接ぶつけるとスロットマシーンから吐き出されるコインの様に権さんと梓ちゃんの名前がコロリと出てくるが、実は今回の騒がしさの原因には梧さんもすっかり含まれていた。と言っても声で騒がしいのではなくその手に持つ物の所為である。幾つもの鍋を調理台に並べ、沢山の調理器具をせっせと洗い、水切り籠に放り投げる様に置いていたのだった。ガシャン、シャリント、陶器と金属の音が鳴り響く。

「泥土様をお連れしました」

柗ちゃんは大きな籠に入った沢山の食べ物を見ている議論していた残り二名に声をかける。

権さんは私を見つけるといきなり柗ちゃんに抱きつき、そのお腹をさすった。

「な〜いす、柵ちゃん。うりうり〜」

うりうりという言葉の通りに、うりうりと柵ちゃんの体のあちこちを撫でまわす。柵ちゃんは顔を赤に染めて小さく抵抗するがそんな物お構いなしに権さんは柵ちゃんを弄くりまわす。

権さんのセクハラ疑惑なスキンシップが数十秒たつても終わらないので好い加減声をかけようとすると、こちらに背を向けたままの梧さんが大きな咳払いを一つした。それでピタリと権さんは止まり、私に顔を向けてニカリと笑った。

「はい、今思いついた料理を呟いてくださいませし」

「へ？」

余りの唐突ぶりに考える前に脳の他の所が反応してしまった。

「思いついたメニューを何でもいいから言ってくださいな」

いきなり言われても、と言いつうになる口を押さえ梓ちゃんが弄っている食材の数々を確認する。きつと今晚のメニューを私の思いつきにしよつて計画なんだろう。そう推測した私は今ある材料でできる物を脳内検索して口にした。

「青椒肉絲とかどうでしょう？」

しかし私の意見を聞いた権さんは口を尖らせる。

「駄目です、ピーマンは人を幸せにしません！」

そんな農家の人が聞いたら憤慨しそうな言葉を堂々と言う。梓ちゃんの教育に悪いのでは？ ちなみに梓ちゃんはピーマンを頭に乘つけて遊んでいる。

「それに尼土様、今材料を見てから言っただでしょう。それじゃ不純なんです」

一本指を立てて優しく叱る様に言う。その仕草口調がお姉さん風で、なんだか心が温かくなる。つい頬をかいて照れ隠しに笑ってしまった。

「むむー。こうなつたら他の人に頼みましょう。そつだ尼土様、よかつたらアイシス様に訊いて来てくださいな」

「いいですよ。何処にいるか分かりますか？」

私以外の三人はお互いの顔を合わせるが誰一人答えを出せなかった。しかし相変わらず背を向けたままの梧さんが水を止めて手を拭きながら答えてくれた。

「アイシス様なら恐らく槐姉様の部屋かと」

意外な所にいるんだなと内心思いながら梧さんに礼を言っただけで台所を後にする。梓ちゃんが付いてきたそうなのを目をしてはいたが、手に持った人参に一度視線を落とすと自分の仕事を優先すべきと判断したのか、寂しそうに手を振ってその場に立ったままだった。

「さて困った。よくよく考えるまでもなく私は槐さんの部屋の位置を知らないんだった」

長い廊下で独り言を呟いても誰も応えてはくれず、ただ自分への呆れを増幅させるだけであった。

「朱水の部屋なら分かるんだけどなあ」

一度も入った事はないけれども、どの部屋が朱水のかという事だけはしっかりと覚えていた。きつと目を瞑っていてもあの部屋に壁伝いに辿り着く事が出来るくらいだ。しかしそれ以外の部屋、特に個人の部屋は私自身のを除いては全く分からないと言うのが正直なところである。と言うのもそれぞれの扉において外見上に一切差が見受けられないからだ。ネームプレートなり何なりつけていてくれないのにと何度思った事か。

廊下の一面を飾っている大きな窓ガラスから覗く空にはやはり雲が流れていた。

「朱水、今どこにいるのかな……」

今朱水はこの屋敷にいない。詳細は教えてくれなかったが数日前

に事件があつたらしく、その事について話し合う領主会とやらに出席するために屋敷を離れている。

領主会と言うのはその名が示す通り全国の魔の領主が集まる会合の事で、何処で開かれるかは一般の魔には教える事は出来ないとの事だ。少なくとも今回の頭首会が開かれる場所は泊りがけでないといけないらしく、私は朱水がこの町から離れている間だけ朱水の家に厄介になっていた。その理由として朱水不在のための守護力不足がある。未だ実感はないのだが私はどうやら普通ではないらしく、私という存在を奪おうとする人がいる可能性があるため、常に守護者が周りを囲っている状況でありたいと朱水は考えている。そういう訳で最大の守護力である朱水自身の不在は彼女にとって大変な悩み種のらしく、悩みに悩んだ結果がこの状況である。

今この館にいるのは椒ちゃん等使い魔さん達、アイシス、そして私と由音ちゃんだ。朱水と執事さんはいない。悩みに悩んだと言うのは主に由音ちゃんの扱いである。彼女はあくまで削強班、最終的には敵であるはずだ。そんな彼女を屋敷に数日間だけといても泊める事は、朱水の心を曇らせるだけでなく頭首としての面子にも影響するらしい。しかしそれでも私を守るためなら仕方ないと言う事で由音ちゃんも朱水の屋敷に泊まる事を許された。私なんかの為に色々迷惑をかけてしまっているが、私が出来た事などその言葉に甘えることしかないと言うのが悔しい。私にそんな価値があるのだろうか。

窓に映る自分の薄らとした像を見ているとふと朱水と槐さんの事を思い出す。思いだした理由はきつと二人が似ているからだろう。鏡でなく、曖昧な鏡像を作るガラスの様な物で互いを対としている、そう思える程に二人は似ていた。双児の相似とまではいかないが、他人とは思えない、そんな感じであったから。

そう言えば朱水の身の回りの世話は槐さんがやっていると聞いて



いた。ならもしかすると朱水の部屋の近くに槐さんの部屋があるのではと考えつく。朱水の部屋なら分かるためとりあえず足を動かす。このまま呆けているよりかは正解に近づくだらう。

朱水の部屋の前に立つ。今ここに朱水はいないという事実が私の中で寂しさという感情を生みだすが、いつまでもくよくよとしていく訳にはいかず、槐さんの部屋を探す。とりあえず左右の部屋の扉をノックしてみたが何ら反応がなかった。それでも一応という事で中を覗こうとするとドアの鍵に断られてしまう。仕方がないのでその隣の扉も同様に確認してみるがやはり鍵がかかっていた。しかし朱水の部屋から三つ隣の部屋のドアがちょっぴり開いている事に気づく。その隙間から中を覗くなどという卑しい行為はせず、ちゃんとドアをノックした。しかし期待していた返事は無かったため、ゆつくりとドアを押し開いた。

想像していた内部とはあまりに違って暫し呆然と立ち尽くす。中は完全に和室であったのだ。私に用意されている部屋がこの館と同調した洋室であったから何処も同じなのだろうと言う考えが崩れ去る。入口には段差がありそこで靴を脱ぐらしい。行儀良く脱がれた小さな靴がそこにはあった。それは間違はなくアイシスのだった。流石この屋敷によく出入りしているだけはある、しっかりと靴を脱ぐという習慣が身についているみたいだ。

「アイシス？」

私が入っても何の反応が無いと言う事はもしかしたら寝ているのかもしれないと思い、擦れ声で名を呼んでみる。しかしやはり呼び声に応える音は無かった。

「いないの？」

体を大きく動かして可能な限り靴を脱がずに覗ける範囲全てに目を向けると、入口から中を隠そうとして置かれている屏風と小さな箆笥との隙間に二つの細い足を見つける。肌の白さにそれがアイシスの物であると確信する。ここまで声をかけて反応しないと言う事

やはり寝ているのか、はたまたイヤホンかヘッドホンで音楽でも聞いているのだろう。私は靴を脱ぎ、行儀良く置かれた小さな靴の横に、こちらにも真似て行儀良く並べた。

「アイシス、ここにいたんだね」

屏風と箆筒で作られた壁を迂回して越えると、そこにはぱつちりと目を開けて耳に何もつけていないアイシスが、座ったまま壁に寄り掛かって足を放り出していた。始め、ショートパンツから生える一對の足の美しさに目を惹かれるが、それよりも彼女が熱中している物が何であるか分かるとそれについての興味が増幅していく。

「何読んでるの？」

未だ私に気付かないアイシスの目の前に腰を下ろし、その顔を覗く。本に視線を送らないのはせめてものマナーだ。私自身読んでいる本のカバーや中をいきなり見られるのには抵抗があるから。

アイシスはそこでやっと私の存在を知る事になり、驚きのあまり右頭部と右半身をくつつけていた壁で頭を擦ってしまい慌てて手で押さえた。何とも痛そうな行為だった。

「うわ、ごめん」

「びつくりしましたよ」

まだ痛いのか擦った部位を揉む様に手で覆いつつ、片手で本を閉じる。見ないと決めていたのだが動揺した所為もあってついチラリと表紙を見てしまう。

「あや、意外な物読んでるね」

アイシスは私の言葉にクスリとする。

「よく言われます。しかしボクくらいの年齢ならこういう小説こそ読むと聞いていますよ」

そう言っただけで恋愛小説と分かる本を、口を隠すように両手で掲げる。学生をターゲットにした、それも女子をメインに置いたレーベルだった。表紙に漫画調のキャラが描かれているので電車とかで読むならブックカバーが是非とも欲しいタイプだ。しかし待つて欲しい。確かこれは女子同士の恋愛物しか出さないとどう何と

も尖ったレーベルとして有名なはずだ。

脳裏にチラリと朱水の顔が浮かぶ。嗚呼『アイシスよ、お前もか』

「そうだね。でもアイシスが随分熱中しているもんだからてつきり  
難しい解析書とかかと思つた」

そこでアイシスは一層唇端を上げる。

「それもよく言われます」

「あやー」

アイシスは閉じた本を壁と自分のお尻の間に隠し、両手を顔の前  
で広げる。その仕草の可愛さにドキリとしたりしなかったり。

「して、何用で？」

「ん〜つとね、今すぐ食べたい物を言ってみて」

「食べたい物ですか？」

暫らくアイシスはヒントを探して槐さんの物であろう今いる部屋  
を見渡すが何も思いつかない様で眉を曲げてしまふ。しかし横にあ  
る、大きくて丸い手鏡を立てられる古風な鏡台に目を止めると、そ  
の上にあるべつ甲の櫛を指差す。

「日本ではクシに鶏肉を刺して炙る料理があり、それが大変美味と  
聞いています」

「おお、焼き鳥の事か。ただしクシ違いだわさ」

これまた渋いチヨイスだ。しかしたまには焼き鳥みたいな味の濃  
い物を食べたくなるよね。

「そつかそつか。うん、じゃあ私交渉してくるよ！」

「はあ、質問の意図すら教えてもらえないのですか。まあ粗方分か  
りますか」

アイシスは入口のすぐ横、しかし屏風等によって入口から一番遠  
くに位置する本棚に読みかけの本を置く。本の合間に入れるでなく、  
単に棚の残り板へ横に置いただけだった。

「そっいやどうして槐さんの部屋にいたの？」

「見て分かりませんか？」  
そう言って本棚を顎で示す。

槐さんよ、お前もか……

諸々の器具を洗う音が消えている台所に戻ると、梓ちゃんが大きな鍋の周りを布で拭いている所だった。小さな体が横にあると一層鍋の大きさが際立つ。

「聞いてきましたよ」

籠の中の食材を全て野菜と肉類、魚介類、調味料とに分ける一仕事を終えて椅子にてくつろいでいる権さんに成果を報告する。

「御苦労さまです」

ぺこりと座ったまま上半身を傾けて丁寧にお辞儀をする。

「それでアイシス様は何て？」

「焼き鳥、だそうです」

自信满满食う気満々食欲満点な私は力強く答えた。しかしその答えによって権さんは固まってしまう。

「……尼土様」

「……はい、何でしょう」

「焼き鳥に必要な食材を挙げてみてくださいいな」

笑顔に隠れる威圧的な気配に逃げたくなるが、料理系の梧さんがそれとなく私の背後に立ち、退路を断っている事実気付くと白旗を上げつつ恐る恐る口を開く。

「えっと、鳥……鳥肉です」

「他には？」

権さんは指を一本立てる。

「んつと、長葱？」

「他には？」

今度は後ろから聞こえてくる。振り向くと梧さんがいつも通りの表情で立っている。救いなのは彼女が平常運転だと言う事か。

「ん……醤油とか？」

「……………はあ」

両者から同時に溜息が漏れる。

うっう、なんだかひどく傷ついたんですけど。

彼女達にとって私とアイススが用意した答えは意味を成さないらしい。確かにこれだけの食材があるのに焼き鳥というリクエストでは空気を読めていなかったみたいだ。猛省。

しかし次には梧さんは一度逸らした目を再び私に向けて、「塩ダレと醤油ダレ、どちらがよろしいでしょうか？」と、平然と訊いてきたのだった。

私、小縫若菜こぬいわかは何時でもあの人を見ていた。でもきつとあの方は私の視線に気づいていない。いや違う、気付いていながらも他の視線と一緒に束ねられてどこかにほっばかれています。一色朱水は誰にでも視線を送られる程の美人だからだ。

気だるい午後の授業をノートの右上の余白にシャーペンで意味を成さない模様を延々と描いて過ごす。私の中で価値を失った授業はそれでいても学期末には私に試練を与える。窓の下に設置されているエアコンの空気口の暗闇に目を惹かれても耳だけはとりあえず黒板の近くから発せられる音を拾い続けていた。

鐘が鳴る。

退屈な授業が終わったとしても退屈じゃない時間が始まるとは限らない。それが人生なのだと最近気づいた。部活をやめてから私は日に日に学生生活に魅力を感じられなくなっていった。もつとも、部活が生甲斐であった訳ではない。本当はその部活に去年度までは存在していた人物を視界に入れる事が私の生甲斐であったのだ。その人は二年生になった途端部活をやめてしまった。この学校では一年生は必ず部活動に参加しなくてはならないため、彼女、一色朱水はきっかり一年間だけ書道部に入部し、達筆な小筆作品を幾枚も作っては私達の憧れの視線を浴びていた。小粋に英字横書き作品を書くなど茶目っ気もあり、私達は一色さんが部室にいる間はちらちらと、たまには堂々と彼女の拳動を盗み見ては心に花を咲かせていた。しかし突然の退部の報告に私達は心の花を枯れさ

せるどころかその根を引き抜く事になる。その後彼女は一度たりとも部室に足を運んだ事がない。

彼女を失った部室にはただ暗い空気が淀めいていた。

彼女の筆を動かしている間の厳かさを持った表情も、皆でお茶をしている間の上品な微笑みも、春の優しい顔も夏の少し疲れた様な顔も秋のうとうとと眠そうな顔も冬の唇の赤さが際立った顔も……全てを、私達は、失った。

その空気に耐えかねて新学年早々に部活をやめる部員がちらほらと現れ、その流れに私も乗った。確かに部員の大部分は彼女と同じ時を過ごしたいと思つて部活に入ってきた人達であつたし、そのほとんどが今は部員名簿に名前が載っていない。しかし私の様に彼女よりも先に入部しており、本気で書を愉しんでいた部員ですら、彼女の消失による心の穴を埋められる事が出来ずに部室から離れていったのだつた。書道部ができて以来、最も部員数を確保した去年度はテニス部を超えるマンモス部活となり、放課後に残っている生徒の四分の一が書道部であるとさえ言われていた。しかし今では部員数は両手で数えられる程らしい。

それ程に彼女の影響は大きかつた。

鞆に荷物を仕舞い、両隣に座っている友達にさよならをして教室を出る。そして既に教室の前にいた同じく書道部をやめた親友達と合流する。彼女達も一色さんよりも先に入部していたが私と同じく耐えきれずに逃げ出した口だつた。

すると突然廊下にいた皆の視線が一か所に集まつた。その注目的は言うまでも無く彼女だつた。皆は口ではそれぞれの会話を楽しんでいたが、目と頭では一色さんを追っている。彼女は歩く百合の花、つまりあの有名な、立てば芍薬から始まる文句その物だつた。

いつも彼女は独りだった。

教室でも部室でも特別教室でも、彼女の横には必ず誰かがいた。だがそれは友達と呼べる間柄では無く、彼女の横にいるのは取り巻きとされていた。冷たい訳じゃない、無口な訳じゃない、笑わない訳じゃない、それなのに彼女には誰にも近づかせない何かがあった。

今も独り、廊下を歩く。

声をかける廊下の生徒達、それに応え笑顔と挨拶を振りまく一色朱水。それはいつもの光景であった。そして彼女は書道部の部室がある階上へと向かわずに昇降口へと下りていく。私はちらりと窓の向こうの校門を見る。そこには毎日停まっている、知識が浅い私でも高級と分かる黒塗りの車がやはり存在していた。一色さんの家の車らしく、毎日彼女はその車へ乗り込んで消えていく。

廊下の生徒は再びそれぞれの話に集中し始め、口と足がばらばらに動き始める。私達も放課後に何処へ遊びに行くかという話を始め、駅前のクレープ屋に行こうという結論に至る。

まだ生徒の多い廊下をどのクレープを食べるかという議論をして歩いていると大きな物音が立った。再び皆の視線が一か所に集まる。見知らぬ女生徒が自分で落とした沢山の本を慌てて拾っていた。一番近くにいた私が手を貸そうと足を踏み出すが、その時には女生徒は恥ずかしさ故の迅速さで本を集め終えてしまった。顔を胸にある本の山へと向け誰にも視線を送ることなく彼女は立ち去る。親友達は彼女が誰だか分かるかと口々に質問し合うが誰もその名を答えられなかった。私も知らないと答える。この廊下にいたのだから同じ二年生であろうが誰も彼女を知らなかった。しかしそれは些細な話題、直ぐに他の話題へと移ろう。そんな事よりも小腹を空かした女子高生はクレープの甘さの方が興味を持てるのだ。



食堂にある自販機前でジュース片手にお喋りを終えた後、昇降口にてローファーに履き替えると、私の横で下駄箱の蓋が開く音がした。その人物をチラリと見て私は驚きに持っていた上履きを落とすてしまう。

それは先程の女生徒であった。

そんなはずはないと何度も確認するが、やはり廊下で本を落とすた彼女だった。

つまり彼女はクラスメイトであったのだ。

いくらなんでもこの時期になって顔も覚えていない生徒がいるはずがない。しかし現に私は今隣にいる生徒の名前どころか顔も知らない。驚きのあまり最初コソコソとしていた視線はついにじっくりとした物に変わってしまい、靴を履き替えた女生徒と目があってしまった。彼女は先程と違って直ぐに視線を逸らす様な事は無く、私の奇妙な視線をしつかりと受け止めて小首を傾げた。その瞳に見返された私の体は不思議な事に力を奪われ、よろよると下駄箱に寄り掛かってしまう。彼女はそんな私を尻目に小さくさよならと言って昇降口から出ていった。

私がなかなか昇降口から出てこない事を心配に思った親友達が下駄箱に寄り掛かっている私を見つけると、吐き気でも催していると勘違いしたのか背中を優しく摩ってくれた。その心地好さに心を湿らせている中、私は女生徒の下駄箱に書かれている名前を確認した。

尼土有、それが女生徒の名前だった。

長い間行列に並びはしたが、それに見合う美味しいクレープを食べて満足した私達はそれぞれの帰路につく。まだブレザーを着ていても汗ばむ程ではないにしろ日は確実に私を照らし続け、歩く気力を削いでくる。せめて涼みつつ進もうと、思いつく限りの寄り道ポイントを脳内で列挙し、その道順を考えつく。そう言えばもう5月、校則で認められた衣替えの季節だ。この暑苦しいブレザーから解放される日が既に訪れていたのだった。朝はまだ寒かったため衣替えの事を完全に忘れていたのか。

来たる快適な日々を思いつつも暑くなる体をずりずりと運んでいると、再び彼女と出会った。彼女、一色朱水はやはり独りだった。

人は誰でも自分が特別な存在である事を望む。自分が怪力の持ち主であらゆる敵を投げ飛ばす妄想、学校中の異性が自分を好きになるという妄想、ある日突然自分に何かしらの特殊な力が目覚め謎の組織との戦いに巻き込まれるという妄想、そんなあり得ないと言いきれるものだったり、大人が夢見る様な現実に近い妄想だったり。誰もが思い浮かべ、そしてその内の幾人かはその妄想を口外する。絵にしたり文にしたりする人も跡を絶たない。

私にもその様な欲がある。

一色朱水の初めての友達になる事だ。

彼女は何時も独り。

そんな彼女が選ぶ友達はさぞや特別な存在なのだろう。

自分でも厭らしい考えだという事は分かっていた。彼女と友達になりたいというよりも、彼女の友達という特別な存在になりたいのだ。彼女に近づきたいのではなく、彼女と同等の扱いを受けたいのだった。いつもどんな時でも視線を集める彼女は何時しか私の欲の

形になつていた。いつも独りでいる彼女が選ぶ最初の友達、それが私だという妄想を何度繰り返したか。

私だけがこんな考えをしているとは思えない。でも皆口にしないから分からない。

分かっている、こんな事を口にしたら白い目で見られるに決まっている。

でも分かっている、皆同じような事考えている筈だつて。だから皆の視線が集まるんだから。

一色朱水に近づきたい人間は、彼女の心よりも、彼女の隣という地位が欲しいんだ。

だけど私に憧れの心が無い訳ではない。彼女の隣と言う地位が勿論欲しいが、彼女の心も欲しいという気持ちも少なからずある。あまりに容姿が端麗だから普通に仲良くなるという発想が持ち辛いのだった。違う生き物、そんな考えすら浮かぶ始末だった。

一色朱水は今も独り。

これはチャンスではないか？

例え声をかけたとしても私と彼女以外その事を知る事は無いのだから。

例え失敗して変な印象を与えてしまつても、彼女は誰にも言いふらしたりしない。

だつてそんな相手すらいないんだから。

勢いというのは怖い物だった。乾いた口を何とか開き彼女の下へと速足で向かう。誰もいない、二つの意味であるこの言葉が私を突き動かした。

一色さん、こんな所でどうしたの？

そう、声をかけるつもりだった。

しかし彼女のおかしな様子に気づき私の足は止まった。

彼女は止まっていた。

横から見る彼女の顔は、今彼女の心をどんな感情が支配しているかが分かるものだった。

彼女は視線の先にある何かに見惚れていた。

私も彼女の先にある物を確認する。

それは先程の女生徒、尼土有であった。

一色朱水は熱い視線を本屋の前にいる尼土有に送っていた。

私の頬には何故か涙が流れていた。



第六話 少女達 / 2 (後書き)

実験回1。皆さんにとっては普通の事、私にとってはチャレンジ。  
かぎかつこを使わないという物。

梓ちゃんが椒ちゃんにお仕事で呼ばれてしまい、台所にいるのは私と権さんと梧さんの三人だけになっていた。

そして私の手には包丁が一挺握られている。

「あの〜」

私の情けない声に梧さんはまたもや振り返りもせずに応じる。彼女はどうかやら仕事中は会話で相手を見ないらしい。普段は律義と言える程に語りかけると必ず正面を私に向けて応じてくれるのに、台所で会う梧さんはそうはしなかった。

「何でしょうか」

掌の上で次々と豆腐を細かく解体していく梧さんの技を横目に私の手に収まっている代物は鈍く光るだけだった。

「流石にこれはやった事がないというか……正直怖いです」

私の前に置かれているまな板の上には鶏が一匹丸々横たわっていた。内臓と羽は除かれてはいるが生前の形を十分に残しているそれは、私の様な料理経験がまだまだ浅い者にとつておいそれと刃を突き刺せる物では無かった。

「あらあら〜。なら泥土様はこつちをお願いしますね」

権さんはそう言つて野菜の小山を指差す。自分から手伝つと言つたのに何ともお粗末な結果だった。

今晚のメニューは朱水がないという事もあつて普段と違う物を作りたいとの思いで、アイシスのリクエストである焼き鳥と、椒ちゃんや梓ちゃんが好きそうな味が濃いメニューとしての麻婆豆腐、それと初挑戦のラーメンだそう。ラーメンだけでなく焼き鳥も実は初挑戦らしい。流石に製麺機は持っていないため麺から作るとい

う事はないが、スープを数時間かけて作るという本格仕様だ。ちなみに思いつき故のメニューであるためラーメン用の生麺など屋敷にある訳なく、梶ちゃんがお使いに行っている。

本来料理係は私が白旗掲げた鶏を手際よく捌いている梧さんと、今はいないが梧さんのお手伝いをしている梓ちゃんの二人である。

しかしたまに権さんが乱入するらしい。彼女自身は料理好きであるが、そもそも食事をとる必要のある人物が少ないこの屋敷に料理係はこれ以上要らず、彼女は泣く泣く清掃係をしているとの事だった。梓ちゃんも実は仕事が無い為に梧さんの手伝いをしているらしい。そんな話をしている梧さんの横で料理を続けている梧さんから否定の言葉が無いという事はこの話が事実だと物語っている。

「実の所、私は始め、料理などに興味はありませんでした」

梧さんはそう切り出した。鬼神城の中で唯一刃物の扱いに長けるからという理由で与えられた役職だったという。

「今でこそこつこつ楽しんで料理をしていますですが最初の頃は何を作って良いか分からずお手上げ状態でした」

そんな梧さんを助けたのが清掃後の雑巾を洗いに来た権さんだと言う。食材の山と料理本を見比べて悩みこんでいた梧さんに気付き、「私はこれが食べたいかな」と言ってくれた事が梧さんにとって最大の手助けとなった。梧さんが悩んでいる原因が『食』への興味の薄さなのに、権さんは同じ状況であるにもかかわらず先導してくれたのだった。

「大げさよ」。載っている見本が綺麗な色合いだったからつい呟いちやっただけなのに。本当は梧ちゃんの形の良いお尻を触ろうと近づいただけなのよ」

うわあ……良い話で入力されていた思い出にわざわざ墨汁を練り混ぜなくても。

「はい、そういう事におきますね」

「む、梧ちゃん意地悪」

表情を一切変えずに、しかし声で楽しそうにしている事が分かる



梧さんと、その梧さんの横に立って頬を膨らませている権さん。これじゃどっちが姉か分からないや。

それから梧さんによる権さんへの称賛を忍ばせた言葉が連なる。権さんは梧さんの為に度々厨房に来ては悩んでいる彼女にリクエストをしたり、料理本を買ってきたり、一緒に料理をしたり、外で料理を勉強してきたりしていたらしい。そんな梧さんの言葉を聞く度に権さんは照れ笑う。

言われなくとも気付いた。権さんだつて始めは料理が好きであつた筈はない。だから多分梧さんのお手伝いをしているうちに自分でも料理が好きになつたんだと思う。

権さんはそんな優しいお姉さんだつた。

しかし御褒美だと主張して梧さんのお尻に向かつた手は、梧さんの手によつて捕まり彼女の冷たい視線を浴びる事となつた。

やや小さ目の寸胴にスープの材料を流し込み火にかけ始めると、二人は下拵えが終わつた残りの材料を冷蔵庫へと仕舞い、一息つこうと椅子に座つた。

「私達はこれから火の番をしなければなりません、尼土様はお暇でしょうからどうぞお部屋でおくつろぎくださいな」

権さんは一緒に座つた私に氣遣つてそう言つてくれたが、折角の機会なので二人とお話がしたいという願望が浮かぶ。権さんとも梧さんとも言葉を交わした事は数えるくらいしかなかった。二人が無防備になつている今こそ好機だと思ふんだ。

顎を机に載せ、備え付けのテレビの画面を薄く開いた目で注視する権さん、机の下に隠してあつた煎餅を取り出してバリバリ食べる様はほとんど主婦のそれだつた。梧さんは何所から取り出したのか、

作りかけのぬいぐるみ皮と思われる物に針の続きを通していた。

「わんちゃんですか？」

茶色い布色であり、やや長い四本足と尻尾、それに長細い顔なので犬のぬいぐるみのはずだ。梧さんは先程と違っていつもの様に律義に私の方へと体を向けて応えてくれた。

「そうです。柵にあげる物です」

「柵ちゃんってぬいぐるみが好きなんですか？」

すると今度は榎さんが机とくつついていた顎を宙に浮かせて応えてくれた。その顎は赤くなっていて少しだけ間抜けに映る。これが榎さんの可愛さなんだろうなあ。

「柵ちゃんの部屋に行ったらきつとびっくりしちゃいますよ。部屋中ぬいぐるみで埋まっていますから」

彼女曰く、柵ちゃんがテレビで動物園の特集をしている所を食い入る様に見ていた所、梧さんが動物のぬいぐるみを作つてあげたら非常に喜んだため、それからもちよくちよく作つてはあげているらしい。

「梧ちゃんは両手が暇な事が嫌いなんですよ。いつも何かしら作業していますもの」

「……確かに」

自分の癖を他者によって初めて自覚した梧さんはぬいぐるみに驚きの眼差しを注ぐが、それでも手を止めることなく針を泳がしていた。

「柵ちゃんも可愛い物好きだから喜んでぬいぐるみを飾っていますね、部屋の一角がぬいぐるみによって占拠されているんですよ」

榎さんは楽しそうに妹達の事を喋る。梧さんの好きなものが手芸や料理、柵ちゃんの好きなものが花や可愛い物なら、榎さんの好きなものってきつと姉妹なんだろうね。

火の番をしている間だけでなく、調理再開後も榎さんの姉妹話は

止まることが無かった。梧さんは仕事モードなのであまり反応していなかったけれども、そんな梧さんの横顔に何度も槿さんは笑顔に向けて沢山喋っていた。

それでもやはりその姉妹の話の中に柾かいたけという名前は現れなかった。

夕食を終えて自分の部屋に戻ってみると、自分を囲っている世界の温度差から寂しいと思わず呟いてしまう。体をベッドに放り投げ、大の字になって天井を見上げる。

先程まで鼓膜を震わせていた少女達の声と食器の音がこだまの様に脳裏に反響する。あれだけの人数での食事だったため、テーブルマナーやエチケットなど何所かに放り投げて、各自が好きな様に口に物を運び、口から声を発していた。今日の夕食は使い魔さん達も椅子に座り、しっかりと食べていた。

彼女達は普段から物を食べる必要性は無いが、それでもたまに朱水の提案で椅子を並べ食事をする催しが開かれているらしい。栄養を外部から摂取する必要はなくても味覚はある為、一緒に美味しいと頬を緩ませる事は出来るのだった。

アイシスは自分がリクエストした焼き鳥の塩気に驚き、慌てて水を喉へ流し込んで、それ以降一本たりとも手を触れずにいた。既に皿に取り分けていた為戻すのも如何なものかと思ったのだろう、きよるきよると周りを見回して私の視線に気づくと皿上の焼き鳥を指差し、食べてくれないかという手振りを繰り返してきた。しかし私はその為に席を立つ前に、アイシスの隣に座っていた由音ちゃんやアイシスに何かを告げて皿を譲り受けた。美味しそうに鳥肉を歯で取り外し幸せそうに噛みしだいている由音ちゃんをアイシスは奇異

の目で眺めていた。その隣では椒ちゃんが麻婆豆腐を熱そうに頬を膨らませながらも次々と蓮華にて胃に収めていた。辛さが利いている味だったため、辛い物が好きな彼女はえらく気に入った様子だった。更にその横では梶ちゃんが梓ちゃんのラーメンをふうふうと息を吹きかけて冷ましながら食べさせていた。彼女達の反対側には私と槐さん、権さん、梧さんが座っていて、権さんと梧さんは台所から続いている話題で持切りであり、私は槐さんと言葉を交わす形になっていた。

「あーそういや後で部屋に来るって言うってたなあ」

食器を片づけ終え、皆で自家製アイスクリームを食べている時に直前までとは打って変わって声量を落とした槐さんがそう告げてきたのだった。何の用かと聞き返したが彼女は笑顔の裏に答えを隠したままであった。他人に聞かれるとまずい事なのだろうか。しかしそれを敢えて私に言うという点が腑に落ちない。何故なら私と槐さんの直接的接点はほとんどなく、また重要な内容であるなら朱水同席の状況で告げられる物だと思っているからだ。

楽しかった時間の余韻に寝転びながら暫らく浸っているとドアを打つ音がする。脱力しきつた体を勢いづけて立たせ、ドアを開くと案の定槐さんが立っていた。

「おくつろぎの所申し訳ございません」

「いえ、良いんですよ」

いつもの槐さんの年上の雰囲気は何所へ行つたのか、目の前にいる女性はもじもじと体を動かし落ち着きのない拳動を示していた。

「尼土様、折入ってお願いしたい事があるのですが」

そう言っただけ私の手をぎゅっと握る。なんだろう、とても重大な事なのかな。彼女の顔には困惑の相が貼りついていていた。

「私に出来る事なら……」

「尼土様でなければいけないんです」

槐さんは私の眼前へ顔を寄せる。間近で見る槐さんはやはり朱水に似ていた。私よりも背が高い槐さんにこう迫られると一種の圧迫感があるが、その不安そうな表情のおかげで何所か可愛らしい。

「私じゃなきや？」

「はい、こんな恥ずかしい事妹達には頼めませんもの」

眉尻を上げた彼女の喉から唾を飲み込む音が聞こえた。

プラスチックの風呂桶が床を鳴らす音が浴槽に響き渡る。

「なんともお恥ずかしい限りで」

槐さんは私の後ろに座り、スポンジを桶の湯に浸しながら照れ笑う。

「普段から朱水様と入浴しているものでして独りで入るのには少々抵抗があるのです」

「だから私なんです」

「はい。こんな情けない事を妹達に頼む訳にはいきませんから」

槐さんから出てきた頼みとやはら意外すぎる物であった。私と一緒ににお風呂に入りませんか、それが彼女の口が放った言葉である。想像していた方向との違いの所為で私は拍子抜けして直ぐには反応できず、その間槐さんは唇を固く結んで羞恥の念を堪えていた。

「尼土様は朱水様よりも御髪おくしが長いですから洗いがありませんね」  
槐さんは私の後ろ髪かみの先端をまとめて持つと興味津津と言った様子で弄ぶ。

「ここまで長い髪は枳あざくらいしか見た事ありませんね」

彼女の口から件の女性の名が出てきた事に驚くが、私は唇を結んで余計な反応は控えた。槐さんと枳さんの間にどのような出来事があったのかを知っていれば当然の行為だと思う。

「でもあの子とこういう風と一緒に風呂に入るなんてした事無かったからちよつとドキドキです」

しかし槐さんの方が枳さんの話を続けるため、こちらとしても無言でいる事は叶わず、言葉を選んで返した。私は一度だけ椒ちゃんと一緒に時に枳さんに出会っている。しかし余計な心配はかけまいと思い、見た事無いという体を貫こうとした。椒ちゃんが朱水に報告していたなら嘘を吐いたと分かっってしまうだろうが、例えそうであつても槐さんなら私の意を汲み取ってくれるだろう。

「枳さんって……髪が長いんですか？」

槐さんは私の頭にシャワーを浴びせながら更に声色を和らげる。

「そうですね。あの子は髪のお手入れが趣味みたいな子でしたから。膝裏にまで届くくらい長いんですよ」

「それは凄いですね」

あの時は緊張で思考が停止していたので改めて彼女の長い髪を思い浮かべる。風呂椅子に座ったまま自分の太股をなぞり、それがどれだけ長いのかを実感する。私の髪は一番長い部分がお尻に届くくらいで、気に入ってはいるが生活する上で色々と不便な所もある事を私は知っている。つまり膝裏まで行く髪を持つ生活の苦労は多大であるはずだ。

「よくお風呂上がりに食堂で髪を乾かしながら他の妹達と楽しそうにお喋りしていたんです」

彼女の言葉は語尾に向かうにつれて少しずつ間を取っていった。

この浴室には温泉施設にありそうな壁に備え付けられた鏡は無い為、彼女が今どのような表情を顔に浮かべているのか確認できないけど、きつと悲しい目をしているに違いない。

二度と戻る事の無い風景を湯気の向こうに見ているのだろうか。

「ご、ごめんなさい、こんな雰囲気にしてしまって」

「いえいえ」

「まずは御髪から洗いますね。こんなに長いと洗いきれなかったシャンプー等の残さを髪が背中に保持してしまう為、肌荒れの原因になつたりするんですよ」

彼女は雰囲気を開しようとはわざとらしく口を動かしていた。

「ほうほう、知りませんでした。勉強になります」

「でも尼土様の背中はお綺麗ですね。上手に洗い落せているってことなんでしょね」

そう言つて槐さんは私の背中を優しく摩つた。その不慣れな感触に思わず声を上げそうになるが、洗ってもらっている手前そんな失礼な態度は良くないと我慢する。

「シャンプーは朱水様と同じでよろしいでしょうか？」

槐さんが私の前に腕を伸ばして手に持ったのは、液体物を詰める為の空ケースとして売っている代物だった。当然商品名など書かれていない。

「もしかして……特注品とかですか？」

「御名答です」

流石朱水、こだわっている所はこだわっているね。

「朱水様の髪質に一番合う様に調合されているのですが、だからと言つて他の人には合わないという訳ではなさそうですし。折角の機会ですからお試ししてみませんか？」

槐さんは悪戯っぽくそう言った。だけれどこちらの返答待たずして彼女は既にポンプを押して手に薬液を出していたりする。

「お願いします」

答えられる選択肢は他に無いはずだがそれでもちゃんと声にしておこう。悪戯の共犯者としてね。

槐さんに髪を洗ってもらっている間、自分でシャワーヘッドを持つて体を温める。彼女は私の髪を両手で優しく包み擦り合わしたり、

指を滑らせ解したりして丁寧に洗ってくれる。その気持ちよさに顔が緩んでしまっているのが自覚出来ていた。いやはや、鏡が無くて本当に良かった。湯を浴びるのが私だけでは悪かろうと槐さんに訊ねるが、彼女は慣れているから平気だとやんわりと断った。確かに季節柄、浴場の空気は裸であつても寒くなく、彼女が平気と言つのも本当だろうけど、自分に当てるついでに彼女の足にも湯がかかる様にした。

そうそう、もう一つ鏡が無くてよかったと思う事があるんだ。

どうにも槐さんの裸体を直視出来ないでいる自分がいた。多分朱水に似ているという事実が私の脳内で彼女の裸を朱水の物と重ねてしまっているからだと思う。そりゃ女同士でお風呂に裸で入ることなんて当たり前前の事で、重々分かつている事だ。以前由音ちゃんが入った時だって微塵も恥じらひは無かつた。だが待てしかし、相手が朱水となると別の話である。朱水とだと彼女を直視できずに始終床のタイルを見ている自分が容易に予想出来る。そんな朱水と似ている槐さんでも私のおかしな頭は反応してしまう様で、脱衣所で服を脱ぐ瞬間から無意識的に槐さんから視線を外していた。しょうがないじゃないか、ドキドキしちゃって顔に出ちゃうんだから。きつとこの顔を晒してしまうと槐さんに自分が何を考えているかを悟られてしまうに違いない。そう言つた意味でも鏡が無い事が嬉しいのだった。鏡面に相手が映るって事は、同時に相手からも自分が見えるって事だからね。

槐さんが丁寧に洗ってくれるものだから私の長い髪では時間がかかっていた。しかし彼女はそんな事を気にしていない様で楽しそうに鼻歌交じりで指を動かしている。

「はい、そろそろ終わりますよ。シャワー貸してくださいな」

言われた通りシャワーヘッドを手渡すと、槐さんは髪の上からゆっくりと先端までヘッドを移動させてシャンプーを落としてくれた。四往復程した後、彼女はシャワーを床に当て私に訊ねた。



「普段はシャンプールの後に何か付けていますか？　一応ここにはリンスとトリートメントがありますか」

リンスが朱水のもので、トリートメントは賓客用に念の為備えてある物だと言う。朱水は髪質が優れていて、トリートメントを付ける必要が無い。トリートメントを髪に馴染ませる時間の無駄を嫌い、リンスを好んでいるらしい。また、使い魔さん達はリンスやトリートメントを使う必要がそもそも無いらしい。羨ましい事に髪が傷むという現象は彼女達には起きず、髪に付着した埃等を落とすためのシャンプーだけでいいとの事だ。食事もしなくていいと言うし、ほんと凄いい肉体だ。

「長いから髪先の痛みが心配なんでいつもトリートメントを付けているんですよ」

でも折角の機会だから恐らくこれまた特注であろう朱水のリンスを付けてみたいという願望もある。しかしそんな事を自分から口外するのは少々我儘であるという意識が働き、言葉にしなかった。まあ何時か髪を切った時にでも使わせてもらおう。

槐さんはトリートメントの容器を手に取り、先程同様、丁寧に薬液を延ばしてくれた。

「槐さんって普段どういう事をしているんですか？」

今度は自分だけシャワーを浴びるといふ事もせずに、シャワーヘッドをタイルに置いて彼女の優しいケアを受ける。水音の無い静かな空間と、髪への優しいマッサージとが私に自然に口を開かせていた。

槐さんの仕事は家計管理だとは知っていたけどその言葉だけではどういふ物が具体的なイメージが湧かず、前々から疑問だったんだよね。それに普段の私生活もこの館に住んでいない私にとって未知であり、あわよくば聞いてみたかったりする。

「そうですね……お金の管理と朱水様の御付でしょうか」

槐さんはこの屋敷に関わる金銭の全てを管理しており、彼女が不要と判断すれば朱水ですら希望品の購入が却下されると言う。

「朱水様に浪費癖は無いのですが、たまに突発的に物に執着なされるんです。そして悪い事にその目当ての商品は大抵の場合結構な御値段でして……。多少の贅沢なら構わないのですが、そういう場合に限って一級品を所望されるため、言いくるめるのに一苦労です」

「へー、朱水にそんな一面がねえ」

「私は値段の相場と言う物を勉強しております故、余りに逸脱した商品は申し訳ありませんが例えそれが朱水様の渴望であつてもお断りしています。お金と言うのは有限、切り詰められる所はしっかりと切り捨ててはいけません。この前だつて大変でしたんですよ」

彼女は思い出し笑い混じりに言葉を弾ませて語る。それでもその手は未だに優しく私の髪をいたわってくれていた。

「『有とツーショットの写真が撮りたいの』と言う理由でカメラを所望されたのですが、『あの子との初めての写真なんですからまともなカメラじゃなきゃ嫌よ』と仰るんですよ」

「うええ、ごめんなさい」

朱水の事なのであるうが何と無く私も謝らなくてはいけない気がしてついペこりと頭を下げてしまった。

「いえいえ、尼土様は悪くありませんよ。それですね、カメラに明るい知人に御相談なされた所、朱水様は何十万もするカメラのパンフレットを複数取寄せまして……。カメラというのはこだわればこだわるだけお金がかかると言う事は理解しておりますが、如何せん素人による記念撮影程度の目的です。故にそれ程の高級品を持つ必要は無いと再三の説得の後、朱水様が折れるという結果を勝ち取りました」

あの朱水を言いくるめるのは大変だっただろうに。本来は他人事ではあるがやはり自分が間接的にでも関わっているので申し訳ない気持ちになる。

それにしても意外な話だった。朱水と言えばお嬢様のそれであつて、今の話の様に制限を科されるとは思つてもいなかった。成程、お金持ちがお金持ちである所以は、収入の大きさだけでなく支出の

無駄を省いた結果なのかもしれない。

だがそこでまた新たな疑問が湧いてしまう。この館の収入源ってそう言えば何なんだろうね。だって朱水は高校生だし、使い魔さんも執事さんも大体この館にいるんだもん。まさか内職って事は無いだろう。しかしこんな事を訊ける程私は無粋ではない。この質問は胸にしまっておこう。

「まあそうやって今まで支出の管理をしてきたのです。無論、朱水様のお口に入る物はなるべく高品質であって欲しいですし、そこに糸目はつけません。また領主であられます故、みすばらしい外見であられる訳にはいきません。ですけどやはり無駄と思う所はきつちり財布の口を締めていきますよ」

でも流石に何もかも審査するというのは可哀相と思い、しっかりと高校生としてはほんの少しだけ大きい金額のお小遣いは手渡しているとの事だ。確かに私と一緒に帰っている時に私に合わせて買い食いしているからね。それは妹達も、そして槐さん自身も、はたまた執事さんも同様で、給与と言う名のお小遣いにて趣味を満喫しているという。梧さんの手芸材料や、槐さんの本棚にある本がそれであるろう。

「ああそういやさつきアイシスを探している流れで槐さんの部屋に無断で入っちゃいました。許可を取ってから入室すべきでした」

「いいんですよ。アイシス様にも私が働いている間なら自由に入りしていいと伝えていきますし。アイシス様は私の本をご覧になられていたんでしょう？」

「はい」

本の内容が内容だったが、そこは他人の趣味、触れないでおこう。「そうそう、尼土様も読書が好きだとか」

「そうですね、槐さんが……って椒ちゃん経由ですか？」

「勿論です。あの子が楽しそうに話していたのでしつかり脳裏に刻まれていますよ。でもその話をしている時には朱水様も横にいらして……」

槐さんは何故か少しだけ言葉を溜めて間を開ける。

「尼土様、椒に読書が趣味だと教える以前に朱水様に趣味を伝えた事はあられますか？」

嗚呼……そういう事ですか。槐さんはこれまた何とも楽しそうな声色であつた。

「『私はそんなこと教えてもらつてないのに』と落ち込んでいらつしゃいましたよ。流石に椒の前では毅然としていられましたが、私と二人きりとなつた途端ため息交じりに、ですね」

その後が大変で槐さんはずっと朱水を慰めたんだとか。重ね重ね申し訳ないです。

そんな事を話している内に髪の毛のケアは終わり、槐さんは私の髪を頭に巻きつけタオルで包んでくれた。こうした方が更に馴染むという話だ。

髪を包み込む際に前髪も一緒にしようとする前に槐さんが来た時に、思わずあからさまに目線を逸らしてしまった。

「……………ふふふ、私も朱水様が知らない尼土様を教えてもらおうかしら」

槐さんは今の動作で私が一体何を考えているのかを察してしまつたのか、ボディソープを掌に出し悪戯な笑みを浮かべる。

「朱水様と同じ方法で御体を洗わせて頂きますね」

そう言つて槐さんはぺたりと薬液で冷たい手で私の両腕を掴んだ。その力は簡単に外せそうな程に優しくかつた。

「な、何をなさるつもりで？」

動揺のためか何故か敬語になつてしまう。

「ですから体を洗わせて頂くんですよ」

私の体の表面をほんの少しだけ力が籠つた掌が滑る。その朱水の手に似た優しい暖かさは体の触れた所を熱くさせる。

「いや、ちよ、ちよっと待つてください。朱水ってこんな毎日してるんですか！」

「朱水様は肌が弱いので手で洗うしかないのですよ。ですから湯浴

みの相手が要るのですね」

な、成程、確かに理屈は分かる。独りじゃ背中洗えないもんね。だけれどこの状況はいただけない。非常に精神衛生上よろしくないって！

だって……対面の先に……槐さんの裸があるんだもの。目のやり場に非常に困るんだって。いや、それより他人にこんなに触られるという事の方が重大な気がするけれど。

しかしそんな事知ったものかと言わんばかりに槐さんの手は私の体をまさぐる。

「ま、待つてくださいよ。ほら、さつき槐さん自身が言ったじゃないですか。薬品の落とし残しがあると肌が荒れるって。だからまずは髪の毛を洗いましょうよ」

なんとかこの状況を打破するための案を練るために時間を作らなくてはいけないと思い、口から出まかせを言う。その割にしっかりと理屈に合っていた所は我ながら評価したい。

しかし槐さんは不敵に微笑み、どこ吹く風かと手を動かし続ける。「そうですね。ですから背中だけは髪を洗ってからにしましょうね」

「あうう」

万事休す、もはやされるがままである。

数分後には耳裏からつま先まで丹念に洗われてしまっていた。柔らかい掌が通って行った私の体は異様に熱くなっていて、体を洗いながら同時に汗をかいてしまっている様だった。

「あわわわわ」

「ふふ、大事な所は流石に御自分で洗われた方がいいですよね？」

「も、勿論！」

しかし両手を私の両腿に置いて白い歯を見せてつけている悪魔は、未恐ろしい事に自分で問うているにもかかわらず手を少しずつ足の付け根まで進めて来る。

「え、槐さんもお体を洗ってはとうですか？　と言うか私が洗って

あげます！」

守りは無理と悟った私は攻めに転じる為に、中が既に冷めきっている風呂桶に浮かぶスポンジを手取る。このままでは冷たいであろうが、それも私の体を弄んだ罰と言う事で足元に置かれたボディソープをスポンジに出すと勢いよく彼女のお腹に擦り付けた。

「……そうですね、お願いします」

ようやく私の体から手を離れた槐さんはくるりと回り、背を私の方へ向ける。私は彼女が振り返られない様に椅子を前に出して体を密着させた。これはこれで十分恥ずかしいが先程までの悪魔の所業よりは断然ましである。槐さんの体は綺麗で、羨ましい事に本当に肌に染みや出来物は存在しなかった。髪を洗う前に体を洗ってしまったているけど、恐らく彼女達の体には無関係な話なんだろう。

「前は自分で洗ってくださいね」

こちらから見えている部分を粗方洗ってあげた後、彼女の前にスポンジを突き出す。

「それじゃ不平等と言う物、お願いしますよ」

「断固拒否です！ えっちい人の体を洗ってあげられる程私の器は大きくありません」

「残念です」

落胆の心など一切含まれていないその言葉を吐くとスポンジを受け取って自分の体を洗い始める。その間に私も……………。

「気持ちいい〜」

湯船に肩まで浸かると条件反射に言葉が喉元を通って行く。

「そうですね。お風呂は心の癒しです」

私の隣に座る槐さんも、これまた深く息を吐き出して気持ちよさそうに目を閉じる。

「朱水様のいらっしやらないこの屋敷で過ごされて如何でした？」

覗き見ていた私の視線に気づくと彼女は微かに唇を曲げる。

「朱水がないのはちょっと寂しいけれど皆さんがいるから楽しかったです」

普段あまり接する事の無い榎さんや梧さん、それに目の前の槐さんと沢山関わられたのが何とも嬉しい。明日は他のお手伝いさんにも積極的に語りかけていこうっと。

湯気の世界で見る槐さんは、髪を下ろしている所為もあってかいつも以上に朱水に似ていた。

「槐さんは朱水と雰囲気は凄く似ていますよね」

「……ええ」

……それは触れてはいけない事だったのだろうか。彼女はお湯を揺らしていた腕を止め、私の目を普段とは違った目で見返してきた。間違いなく今の彼女は普段の優しいお姉さんでは無い、そんな気がした。怒りの視線ではない、しかし少なくとも好意的な代物では決まらなかった。暖かい湯船に浸かっていながら私の体は凍えた様に震えた。

「あの、ごめんなさい」

「……一体何を謝られていらっしやるのでしょうか」

彼女はわざとらしく首を傾げる。これ以上踏み込まないで欲しいという意味であろうか。

私が二の句を継げずにいると、槐さんは私に擦り寄り、両肩に手を載せ耳元で囁いた。

「朱水様には絶対に今の言葉を言わないでください。約束してくださいますか？」

「……はい」

「そうですね」

槐さんは無理やり喉を震わせた了解の音を確認すると私を開放してくれた。触れられた部位は体を洗っていた時とは違って冷感を帯びていた。

「理由はお教えできませんが今の言葉は朱水様を非常に傷つけます

ので」

私は何度も顔を見て彼女の信頼を得ようと必死だった。

「折角の雰囲気壊してしまい申し訳ございません」

「そんな、私が悪いんですって」

「いいえ、尼土様は悪くないのです。もっと上手く出来たはずでしたのに、お風呂で気が緩んでいた所為で……情けない」

槐さんは己への腹立たしさに唇を噛む。しかし何時までも後悔の念に染まっている訳にはいかないと思ったのか、お湯を掬って顔を洗う。再び上げられた顔は既にいつもの優しいお姉さんである槐さんの物に戻っていた。

「むむむ、いけない雰囲気ですね……ここは権式で行きましょう」

「はい？」

「要するにこうするんですよ！」

彼女は急に私の背後に回るとガバリと抱きついてきた。

「いきなり何なんですかあ」

慌ててその腕を剥がそうとするがこれが中々強固に絡みついている。どうやっても魔の手から逃れる事は叶わなかった。

「権の抱きつき癖もこういう時には役に立ちますね。ほら、尼土様も元氣になりました」

「元氣ってそういう意味じゃないと思いまあぁあつす」

私達は同時に湯船から上がりシャワーで体を再び洗う。これくらい広いお風呂だと二人同時に動いた所で不便な思いをする事が無いから好いよね。

「それじゃあ上がりましょうか」

槐さんは来る時に脱衣所から持ってきたお風呂セットを小脇に抱えてそう言った。

「あれ……？」



「どうかしました？」

お風呂セットとはシャンプー等で、朱水専用の物の事である。さつきまで私達が使っていた朱水専用の風呂桶に諸々一式が収納されていた。賓客用は浴室備え付けであるが朱水が普段から使う物は区別するために脱衣所に仕舞って管理しているらしい。そのため今日も槐さんは浴室に入る前にそのセットを戸棚から取り出していたのだった。そしてここである事に気づく私であった。

「スポンジ……」

「スポンジ、ですか？」

「あるじゃないですかスポンジ」

「はあ……ありますねここに。………あらら」

「あるじゃないですかここに！」

槐さんの言葉通り朱水が体を洗う時にスポンジを使わないというなら、どうして朱水専用のお風呂セットの中にスポンジがしっかりと収まっているのか。

答えは簡単だ。槐さんが嘘をついているとしか考えられない。

「あららーばれちゃいましたね」

「どうしてあんな嘘をついたんですか？」

「尼土様の反応が非常に楽しかったのでつい」

槐さんは舌をペロつと出す。そんな物で誤魔化されるもんか！

「まあまあ。それに尼土様の為にもなつたはずですよ？」

「私の為？」

「本番のためですよ」

本番？ どういう意味であろうか。

槐さんは私の手を取り、彼女のまだ水滴伝わる胸へと当てた。ふにと柔っこい感触に指が跳ねる。

「尼土様は恐らく朱水様と初めてお風呂に入る時に始終空回りしてしまうでしょう。そうならないために私で段階を踏んでみた、そう考えていただければ無事解決です」

もはや呆れを通り越して脱帽の域だった。彼女の言葉を否定する

だけの自信が無い私は喉の奥に溜まり込んだ言葉を吐けずに齒痒く彼女を怨念籠った視線で見ることしかできなかつた。

「そんな怖い顔をなさらずに。可愛いお顔が台無しですよ」

「可愛くなんて無いもん」

「既にその反応が可愛らしいです。朱水様が尼土様に夢中になられるのもこれなら致し方無いですね」

「むう〜」

駄目だ、完敗だった。私はこの人には敵わない。朱水を言いくるめる事が出来るくらいなのだ、伊達じゃないのだろう。これが長女の貫録と言う物なのか。

「ほら、早く御体を拭かないとこんな時期なのに風邪をひいてしまいますよ」

槐さんは立ちっぱなしの私をふわふわと肌触りの好いバスタオルで拭き始める。自分でやると言いかけたが、彼女がどうにも嬉しそうに拭いているので好意に甘える事にした。槐さんは世話好きな人なのだろう。恐らくここに私を呼んだ理由である『寂しいから』というのも、独りでお風呂に入るのが寂しいのではなく、本当はお風呂で世話をする相手がいないから寂しいという本意があつたのかも知れない。

「なら槐さんの体を私が拭きますよ」

「ふふ、よろしくお願いしますね」

槐さんにバスタオルをもう一枚取ってもらい、それを彼女の体に優しく押し当てる。

「たまには拭かれるというのも心地好いですね」

「朱水は拭いてくれないんですか？」

槐さんは私の言葉に苦笑いを浮かべる。

「それは当然ですよ。主従関係なんですからね」

「そういうもんなんです」

でも主従関係であつても必ずしも従者側だけが主に尽くす必要は無いと思っただけだなあ。

私達はお互いが体を拭き合うという幼子がやる様な行為を恥ずかしげも無く行っていた。十分に体の水滴が消えると、私は下着と寝間着の下側を着て髪をドライヤーの温風に当てる。その横では既に上下共に寝間着に着換え終えている槐さんが私を待っていた。

「もう髪乾いたんですか？」

まるで始めから髪を洗っていなかったと錯覚してしまう程の早さであった。ドライヤーの騒音の中で何とか聞きとれた単語達から解釈するに、彼女達の髪は水気をあまり吸い取らないと言う。その為タオルで拭けばそれだけで髪は乾ききってしまうのだとか。髪の手入れ等も本来は不要なのだが枳さんはどうたらこうたら……。最後の方は槐さんの声が小さくなったため上手く聞き取れなかった。

それにしても槐さんは予想よりも遥かに枳さんに対して未だに親しみを覚えていた様であった。てっきり彼女の名を言葉にする事すら思わしいと感じるのだと勝手に想像していたのだけれども、実際の槐さんはそうではなく、枳と言う名を普通に声に出していた。確かに今もほとんど音量を抑えていったが、それも恐らく枳さんに酷い事をされたという自分が枳さんを軽々しく話題にするのは体裁上好ましくないとでも思ったためではないだろうか。

「今夜は少しだけ暑いですね」

彼女は私の視線から逃げる様に背を向けて、当り障りの無い話題を振った。

もしかしたら……彼女は話したいのかもしれない。

朱水とも、妹達とも違う存在である私に話し相手になって欲しいのかもしれない。彼女達の前で被害者である自分が枳さんを楽しげに語るなんて事は出来ないのだから。

「槐さん、訊いても良いですか？」

「はい、何でしょう」

「枳さんってどういう方だったんですか？」

直球を叩きつける。怒られたって良い、これが見極めになるだろうから。

槐さんは目を丸めると口を固く閉じた。そしてそのまま私の目を不思議な感情のこもった瞳で見つめてきた。

「言いたくなかったら別にいいんです。ただ興味があったと言うか……」

私の言葉は広い脱衣所で空しく崩れた。ようやく槐さんの口が開いたのは私の耳に響く脈音の数えが三桁に届いてからであった。

「私だからこそ、枳の事をお教えできるのだと思います」

「……はい」

彼女は一度ニコリと破顔すると脱衣所の出口へと進む。

「どうぞ私のお部屋へ。この様な場ではあの子達と鉢合わせてしまいかも知れませんかからね」

彼女は本当に嬉しそうに手招きをしていた。良かった……私の思い違いでは無かった様だ。

「お待たせしました」

一度私を自分の部屋に通してから、槐さんは飲み物を取りに台所へ向かっていた。帰って来た彼女の手にはウーロン茶の大きなペットボトルとグラスが二つ握られていた。これから訪れる時間が心待ちにしていると語っているその顔は大変晴れ晴れしかった。それ程に彼女は枳さんに対する感情を溜め込んでいたのだろう。

「しばしお待ちを。写真があつたのですが……」

本棚にあるアルバムを持ってきて床に置き、ページを一枚ずつゆつくりと捲る。私も横からそれを見させてもらった。そこにはこの屋敷を撮った写真、朱水が写った写真、お手伝いさんや執事さんが写った写真、何所かの景色が収まった写真等、色々な物が挟まれていた。

アルバムのページを捲るスピードは非常に遅かった。彼女は挟ま

ついている写真一つ一つを懐かしむ様に見て、一つ一つを私に紹介していたのだ。その声色は温かく、被写体に対する彼女の愛が詰まっていた。

「ありました。この髪の毛の長い子が枳です」

朱水の写真が集められていたページ群を通り、使い魔さん達が現れるようになって来てから数ページが過ぎた辺りでやっとお目当ての写真が見つかったらしい。

「ふふ、ほんと可笑しくらい長いわね」

写真の中で微笑んでいる女性の桃色の長髪を槐さんは指でなぞる。

「この人が枳さん……」

他の使い魔さんと同じくメイド服を纏った女性は、膝裏にまで届く長髪を風になびかせていた。あの時の女性とこの写真の人物が同一とはどうも信じられない。椒ちゃんとの潰し合う様な視線のぶつかけ合いを目の当たりしたのだから仕方ないのかもしれない。私の中では彼女は危険な人物であると刻みこまれてしまっていた。

「枳は椒ととても仲が良かったです。それはもう、朱水様と枳とで椒をとり合いするくらいにまで」

クスクスと遠い記憶を思い出しながら槐さんは笑う。

「椒も枳に懐いていてよく二人で行動を共にしていました、そうです、ね、枳と梓みたいな感じでしょうか」

「相当な仲好しさんだったみたいですね」

枳ちゃんと梓ちゃんの間は姉妹の中でも特に密着していて、仕事以外の時は常に二人で過ごしていた。そんな二人と同じ様だったと言うのならその仲はかなりの密つぷりであつたんだろう。

それがああなつてしまうのか……。

更に一枚ページを捲ると花柄の日傘を得意気に差している枳さんの写真が何枚かあつた。他にも日傘と思われる傘が複数立てられた傘立だけを撮った写真も収められていた。

「あの子には収集癖がありまして、特に傘に対して異様な愛を示し、月に一度は新たな傘を求め出かけていました」

「良い趣味をお持ちで」

傘立ては複数あり、折り畳み式の日傘の山も別に存在していた。一体どれだけの数の傘があるのだろうか。枳さんの手に収まっている傘はどれも日傘であったが、それは撮影が常に晴れの日に行われていたからであって、傘立ての中には普通の雨傘と思われる物も立てられていた。中には洋傘だけではなく和傘まで飾られていた。蛇の目傘と言っのだろうか、綺麗な赤や紺の和傘が広げた状態で床に置かれていた。

「そうですね。あの子が買ってくる傘は確かに良い物ばかりでした。目が肥えているのでしょうか」

それから日傘を差した枳さんが続いていた。姉妹と一緒に写っている物でも彼女は日傘を差している。写真の中の彼女は皆微笑んでいて、私が知っている彼女とは全くの別人であった。

この頃の枳さんと出会いたかったと思ってしまうのはいけない事なのだろうか。

いや、そう思っているのは私だけじゃないはずだ……私の目の前に私以上にこの枳さんに会いたい人物が座っているのだった。彼女は悲しそうに微笑みながら四角い紙を一つ一つ名残惜しそうに目で追っていた。私が帰ってしまったえば二度と他人に枳さんの事を語れなさそうで……。

「おしまい、ですね」

枳さんの姿が写真から消え、他の姉妹だけが写る様になってから数枚ページを捲った後、槐さんは寂しそうにアルバムを閉じた。重いページで圧された空気の音が空しく部屋に響く。

放心に近い状態の彼女はアルバムを膝に、私を無言で見つめる。私はその意図の分からない視線に耐えきれず視線を外し、畳の網目を見ていた。重苦しい空気が私の首を更に横にしていた。

「あの……戻ります」

暫らく彼女からの行動を待ってはみたが、彼女はただただ虚ろな目を時折瞼で隠すだけで言葉一つかけてくれなかった。何と声をかけたら良いのか分からない私は逃げ去る事しか考えられず、背を丸めて罪悪感を胸に一歩一歩と後ずさる。靴まで後数歩となった時、彼女の体に再び魂が宿ったのか、急に立ち上がって私に駆け寄ってきた。

「ごめんなさい……気まずい思いをさせてしまって……。また私、やってしまったのですね」

枳さんの話をする彼女はかなり頻度で先程みたいな状態となつてしまい、妹達を怖がらせてしまうのだと言つ。だから妹達の前では枳さんの話をしないと決めていたのだとか。

「駄目ですね……尼土様になら大丈夫だと思つたのに」

「槐さん……」

槐さんは咄嗟に掴んだ私の右手に視線を落とすと、やっと自分が私の手を握っている事に気付いたかの様に、手の力を緩めた。力が入っていない私の手は自重で滑らかに落ちた。

「明日も……」

「はい？」

「明日も良かったら一緒にお風呂に入りませんか？ 朱水様が戻られなかったらの話ですが」

朱水が明日の夜までに戻るのなら槐さんは朱水の入浴のお手伝いをしなければならぬ為、私とは入れないのだと言つ。

「良いですよ！」

槐さんは私の了解の返答を聞くと顔から悲哀の相を消し去りいつもの使い魔さん達のお姉さんに戻っていた。私はその顔を確認すると静かに部屋を後にした。

物音一つしない廊下は私を優しく包んでくれている様だった。

本当に彼女が求めていたのは湯浴み相手ではなく、離れていった妹についての話を聞いてくれる役であった事は分かり切っていた事だったが、私は自分でも理由が分からない恐怖心でその手を振り払ってしまっていた。

何時ぞやの椒ちゃんの強い言葉、実際に目の当たりにした枳さん、過去と現在という単語の間にある大きな溝、これらが槐さんの言葉を耳に入れる事を拒み続けていた。広い視野を持たないと言うのは良くない事と分かっている、相反する枳さんを受け入れるのは信頼している人を裏切る様で心に穴をあける行為だった。

物音一つしない廊下は私を責め立てる様にうるさかった。

部屋に戻ってもテレビから流れる雑音を耳にしながら私はぼうつとして今日という時間の残りを食いつぶしていた。

枳さんの問題は難し過ぎる物であった。そんな難問に傍観者ですらなかつた私が首を突っ込んでしまっていた。いや、私の道にいずれ必ずや飛び出てくる問題なのだろう。最初は本人があちらから出てきてきたのだから。私は寒気を覚え自分を抱く様に体を縮ませる。夜の空気は確かに暖かいのに、私は得体の知れない寒気に襲われ続けていた。

後一時間で曜日が変わる頃、ドアをノックする音が響いた。自分がいつの間にか浅い眠りに浸っていた事を知らせる突然の来訪者は、ノックの後に中を覗く様な真似はせず行儀良くそこに立ち続けてい



る。

「は〜い」

目覚めたばかりなためにおかしな発声となった返事をしながら私はドアのノブを握る。するとその時再びドアがノックされた。その音の発生位置があまりに低いため最初は誰かと思ったが、このまま居留守を続ける訳にはいかずドアをゆっくりと開けた。

「ありや、由音ちゃんか」

夜の廊下には癒される底抜けに気持ちの良い笑顔を浮かべている由音ちゃんが立っていた。久しぶりに見る髪を下ろした由音ちゃんはドアが完全に開かれると同時に私のお腹に抱きついてきた。

「うあつ！ びっくりだよ」

「えへへ、有君ちいっす」

可愛らしい八重歯を見せつける由音ちゃんはいつもの挨拶をした。夜でもその挨拶なんだね。

「今日は全然お喋りできなかったから寂しかったっす〜」

由音ちゃんは甘え声を出して巻きつく力を強める。そう言えば今日は由音ちゃんと顔を合わす事が少なかったと今更ながら気付いた。「今日はどんなこととして過ごしてたの？」

彼女にとって決して居心地の良い場所では無い筈であるこの屋敷で果たしてくつろぐ事は出来ていたのだろうかと心配に思う。

「たはは……割と部屋に籠ってたっす。だって監視の目が怖いんですもん」

どうやら彼女の行く先々で何人かの使い魔さん達が現れて声をかけられたらしい。それは確かに気持ちの良いもんじゃないね。

「誰と会ったのかな？」

「えっと、椒さんと柵さん、それと槿さんっすね。特に柵って人の目が怖かったです。狩られるんじゃないかって思うくらいジツと見つめてくるんですよ」

「んー、お姉さんは柵ちゃんに関してはきつと他の思惑があったんだと思うな」

と言うか間違いないく櫛ちゃんはいつもの可愛い物好きが発動して由音ちゃんを凝視していただけに過ぎないだろうね。監視と言うより何か語りかけて欲しくて近くにいたと言う感じかな。槿さんだつて恐らく構いたかつただけだと思う。まあ椒ちゃんは……十中八九監視の視線だつたと思うけど。椒ちゃんは真面目だからどんなに仲良くなつていたとしても由音ちゃんの持つ肩書が光る限り、彼女はこの屋敷で由音ちゃんを自由に歩かせる気は無いのだろう。

「それで何度か有君の部屋に来たんすけど全然居ないし……心細かつたつす」

「あはは、ごめんね」

罪滅ぼしに頬をぐにゅぐにゅと揉んであげると、由音ちゃんは目を細めてもつとやつてとアピールしてきた。ああもうほんと癒されるな。

「それじゃ今から少しお話ししようか？」

「いいんすか！ やつたーっ」

由音ちゃんは歓喜の声を上げるとベッドまで走り勢いよく跳び込んだ。真夜中なのに元気いっぱいだね。

「居場所無くつて辛かつたんですよ」

「居場所……」

そうか、そうだったのか……。この恐怖心がどこから生まれるのかやつと分かつた気がした。

「ん？ どうかしたんすか？」

「んー、ちよつとお姉さん悩んでいた事があつただけどつた今解決したんだよね。手伝つてくれたお礼にこれからいっぱいお話し相手になつてあげる」

「何もしてないつすけど御役に立てた様で光栄つす」

私も由音ちゃんの隣に腰を下ろす。やはりこの子の横にいるのは心地が良い。

「朱水の屋敷はどんな感じだった？」

「こんな家に住んでみたいっす。流石と言うか何と言うか、本物のお金持ちって感じの家っすね」

確かにそれは同感だ。ここは豪邸という言葉が恐ろしい程に似合うくらいの大きさで、もはや小規模な城だね。庭には彫刻などが品よく並べられていて、その間を埋める様に草花が植えられていた。桐ちゃんが手入れしているおかげで植物は元気の良い姿を披露してくれている。L字型の屋敷は部屋が沢山あり、そのほとんどに高級調度品がしっかり備えられている。また部屋それぞれに違った趣を演出するために家具やカーペット、その他の備品を部屋ごとに統一した様式で揃えていた。例えば槐さんの部屋が完全なる和室である様にね。

「後、食事が楽しかったっす。あんなに大勢の人達で物を食べるっていうの初めてだったんで」

「そうなんだ」。確かに学校でも私達と屋上で食べているもんね」  
「出てきた料理には予想外過ぎて面食らったすけど美味しかったんで文句無しですね」

ああー分かるよその気持ち。こんな屋敷で頂く夕食がラーメン、焼き鳥、麻婆豆腐だなんて驚きかもしれないよね。でも普段の食事はコース料理も多いって話だから今日は本当に特別だったんだろう。  
「そっぴやアイスと随分仲良くなっていたみたいだね」

「まあ立場上は鬼神城さん達よりは会話しやすいですしね」  
「難儀だねえ」

由音ちゃんは由音ちゃんで大変らしい。しかしここに由音ちゃんがいる理由である私は肩をすぼめる事しか出来なかった。私の意思だけで彼女を屋敷の外へ解放してあげる訳にはいかないんだよね。そんな事したら後で朱水にこっぴどく叱られるだろうし。

「まあ有君がいるんだから仕方ないっす。それに状況的にはいつも以上に安全なんすから」

確かに鬼神城と呼ばれる使い魔さん達が6人もいるここなら私の

身は安全なんだろう。

「そうそう、前から訊きたかったんっすけど……」

口を動かして続けて数十分もすると由音ちゃんの口がいきなり大きく開いた。どうやらおねむの様子だ。

「眠いんだ？　じゃあそろそろおやすみしよっか」

「ええー、自分まだまだお話したいっす！」

「でも由音ちゃんの体は眠りたいって言ってるよ？　それに明日だって同じ状況なんだからさ」

「うむむ……やっぱりもう少しだけ……」

中々頷かない由音ちゃんはベッドの中心に移動すると布団を丸めて抱きしめる。梃子でも動かないという意思表示なのだろうか。しかし布団と密着したら逆効果に眠くなるんじゃないかな。

「そうだ、このまま一緒に寝ましょうよ！　お泊り会って奴っす」

うむむ、完全に眠りに入る前までいっぱいお喋りできるというのは魅力的だけれども、間違いなく後で椒ちゃんとのいざこざが起きる訳で……。

しかし期待の眼差しを爛々と浴びせてくる由音ちゃんに負け、彼女を横にすると私も隣に並ぶ。

「明かりは消していいよね？　それとも小さいのだけつけておく？」

「完全に暗くても平気っすよ」

「うん……わかった」

彼女の些細な言葉一つに私は反応してしまう。これでは折角彼女が明るく振舞っているのにこちらからつまずかせてしまうかもしれない。けれども良くない事だとは分かっているけどどうしても思い出してしまうのだった。

暗闇の中独りで湯に体を沈めていた由音ちゃんを。

部屋が暗くなると、隅にある消灯と同時に点灯する小さなランプだけがこの部屋で明るみを生む物となる。

「由音ちゃん、手握って良い？」

「いいですよー」

彼女が嬉しそうに伝えてくれた事に私は内心で安堵のため息をつく。小さな手は少しだけ冷たかった。

「有君、訊いていいですか？」

「なあに？」

「有君と朱水さんの事です。ちょっと興味があつて……」

「はは……うん、答えられる内容なら良いよ」

まだ夜は長い。由音と言う少女を実感できるこの時を私は大切に扱いたかった。私が知らない彼女をほんの少しでも感じたいと思っていたのかもしれない。

それは枳さんに対する物とは正反対の感情であつた。今の枳さんだけが私を知るべき存在であり、槐さんの中に眠った過去の枳さんを知る事は私の本心は求めていなかった。

姉妹に存在する『ある可能性』がたまらなく怖かつたんだ。

第六話 少女達 / 4 (前書き)

実験回2。今度は逆です。

4

『はいはい』

「……………」

『はい？』

「……………」

『ごめんそっちの声が聞こえないわ』

「……………私」

『ありゃ、通じてたのか』

「……………うん」

『どうしたんだよ若菜。ふられたでもしたの？』

「……………」

『ん？』

「……………そうなのかも」

『……………そっか。それであたしに電話かけてきたって事が』

『ごめん』

『良いって良いって。あたしも前に若菜にお世話になったしね』  
「そうだったね。懐かしいな」

『あの時はほんと助かったよ』  
「瑠衣凄かったもんね」

『あはは、あの頃は若かったからねえ』  
「やだなあ、今だって若いんだよ」

『ふふっふー、少しは元気になったかね』  
「あ……うん」

『で、癒されたいのか。あたしの癒しボイスで』  
「はは……うんそんな所かな」

『オッケー、癒してしんぜよう』  
「うん……」

『で、誰に告ったの？』  
「……………」

『前から訊いてもはぐらかしていた相手か』  
「うん」

『告った後も名前出せないのかー』  
「しゅめん」

『ちえー。まあいいや。何か話してみて、気が紛れるかもよ』  
「うん……………」

『……………』  
「……………」



『……若菜』

「……私ってさ」

『うん』

「……魅力ないのかな」

『おやおや、随分ネガティブだね』

「ちよっとね……」

『あたしから見た若菜は十分魅力的だよ。まず何より可愛いだろ』

「……ありがとう」

『そしてこうやってふられたからと言って泣きついて来る所もすげー可愛い』

「うう、それはもっと恥ずかしい」

『はは。まあ魅力的だって事は自信あるよ』

「……ありがとう」

『詳しく言えないなら薄らとした答えでも良いからさ』

「うん」

『どんな相手だったか教えてよ』

「どんな……か」

『そうそう。なんか言い方からして直接告ったわけではなさそうだし』

「あまり傷もえぐらない……って事ね」

『やっぱり興味はあるからねー』

「……………もう」

『んでどういう奴さ?』

「一言でいえば高嶺の花、かな」

『へえ、かつこいいんだ』

「……………うん、凄くかつこいい」

『どんな感じ? ねえどんな感じよ?』

「そうだな……………完璧に『上品』って言葉が似合う人かな」

『へー珍しいタイプだね。そんな奴学校にいたっけ? 若菜ってバイトしてないし』

「いるよ」

『ふーん。あたしなんかより視界が広いんだね』

「ううん、誰だって見つけれられるよ」

『ん?』

「凄く目立つ人なんだ」

『へえ』

「すっごくかつこよくて皆の憧れで……………」

『ほうほう』

「それで……………皆が狙って……………」

『若菜?』

「……………私」

『ん？ どつたの？』

「私……最低だ」

『なんでさ』

「私……自分が嫌いだ」

『まあ落ちつきなさいな』

「……………」

『まあいい、一旦話を換えようか。告つてはないんだね？』

「うん」

『相手に彼女がいたという事実が発覚したとか？』

「……………そんな感じかも」

『あー、そりゃショックだわ』

「うん」

『でもさ……こつこついう事言つのもなんだけどチャンスが無いわけじゃないと思つ』

「……………」

『だからさ、チャンスを窺っていればいいと思つよ』

「……………うん」

『彼女は知り合い？』

「ううん。でも同じ学校」

『へえ。誰？』

「……………私も良く知らない人」

『まーたはぐらかしてるだけじゃなくて?』  
「違うよー。ほんとによく知らないんだよ」

『敵は可愛い?』

「うん、凄く」

『むむー』

「お似合いだなって思っちゃった」

『あーでもさ、中身で勝てばいいんだよ』

『人間中身の方が最終的には大事なんだから』

『……若菜?』

『泣くなって』

『……駄目だ』

『急にどうしたの?』

『……私ほんと最低だ』

『何故に?』

『……中身なんて見てなかった』

「私、あの人の中身なんて見た事無かった」

「……………」  
「気にした事も無かった。今思えばあの人の性格について深く考えた事も無かった」

「不安なの」

「こんな感情で人を好きになって良かったのかなんて」

「でも私には近づく事が出来ないから」

「目でしかあの人を捉えられないから」

「会話なんて交わせないから」

「仕方なかったんだ」

「それでも懂れてしまって、それでも好きになってしまった」

「好きだなんて言葉すらおかしいのかもしれない」

「今日になるまで自分の感情に気付けなかったのに」

「それなのにあの人のあんな顔見ちゃったら……………」

「私、居ても立ってもいられなくて……………」

「逃げて……………」

「泣いて……………」

「そして気付いたの」

「私、あの人の事好きだったんだって」

「そんな在り来たりの展開」

「……………気付けた事だけでも良かったじゃん」

「はぐらかしていたんじゃないじゃなくて単純に懂れの人としていたからな」

の

『そっか』

「自分に自信が持てないから、あの人を私なんかが好きになっちゃいけないんだって」

『自分を押えこんでたって訳か』

「届かない手なら伸ばすだけ惨めだから……辛いから」

『……………』

「懂れているだけにしよう……」

『……………』

「皆きつと同じなんだから、って」

『……………若菜』

「気付かない様に気付かない様に過ごしてたのかもしれない」

『……………若菜』

「……………何？」

『一つ聞かせて欲しいんだけど』

「うん」

『それって……………男か？』

「……………」

『……………』

「……………」

『……………』  
「……………」

『……………分かったよ。そっかあの人か』  
「……………私の事、気持ち悪いと思う？」

『女が女を好きになっちゃいけないなんて思わないよ。別にいいんじゃない』

「そっ……………そっ……………」

『それにあたしだって若菜の事好きだよ。ちゅーしたい』  
「……………馬鹿」

『なんだよー』

「うっん、ありがとう……………嬉しい」

『そっかそっか。そりゃ良かった』

「やっぱり瑠衣に電話して正解だったよ」

『ならお礼はちゅーで手を打ってあげよう』  
「何それー」

『ところで、そうなる気になる点が一つ増えるんだけど』  
「何が？」

『その人の恋人の存在』  
「あ……………うん」

『可愛いつて言ってたよな?』

「……………女子だよ」

『……………そつかあ。ならさ、チャンス大じゃん』

「どうして?」

『あの人が女もイケるって事は若菜になびく可能性もあるって事っしょー!』

「まあ考え様によつてはそうだけど」

『頑張れ!』

「うっ、でもライバルが強過ぎだよ」

『その彼女……………でいいのかな? その彼女は何年生なの?』

「……………それが不思議な話なんだけど」

『勿体ぶつて何さ』

「いや、自分でも不思議だからあまり言いたくないなあって」

『不思議?』

「うん。それがさ……………彼女同じクラスらしいんだよね。これも今日知つたの」

『……………はあ?』

「だよね、普通そう言つ反応だよね。でも私だつて訳が分からないんだもん」

『もう5月だぞ。それに一年生じゃあるまいし、新しい顔なんて無いだろ』



「うん……その筈なんだけど今日初めてあの子を知ったの」

『酷い話だなあ』

「そんな言い方しないでよ。私だって好きで知らなかった訳じゃないんだから」

『まあそりゃそうか。で、なんて子さ？』

「確か尼土って子」

『ふーん、知らない子だなあ』

「でも4組だよ？ 瑠衣もよく来てるでしょ」

『うむむ。その子影薄いんじゃない？』

「そうなのかな……。でも見たら忘れられないくらい可愛い子だよ。尼土有さん」

『そう言ってる若菜自身が覚えてなかったくせにー』

「それはそうだけど」

『大人しそうな子なの？』

「多分そうなんだと思う」

『ならクラスの陰に隠れていたのかな』

「かもね。ほら今日の帰りに私達の目の前で本を落としてた子いたでしょ？ あの子だよ」

『そんな事あったっけ？ 覚えてないや』

「あの後でもう一度下駄箱で会ったの。クレープ屋へ行く前に私、下駄箱で気分が悪くなってたでしょ。その時にあの子の名前を知ったの」

『そっか。そういや今日食べた新作、結構美味しかったね』  
「え？ あ、うん。また食べに行こうね」

『今度は若菜達が食べていたのを注文してみたいな』  
「じゃあ今度は私がハニーミントを食べてみるね」

『あれね、最初の一口目は奇妙な味だと思っちゃうけど、真ん中辺りまで食べ進めていくと病みつきになって来たわ』

「凄く美味しそうに食べてたもんね。私達は見た目で判断しちゃって他の新メニューを選んじゃったけど」

『まあ緑色の蜂蜜見せられたら誰だって引くよな』  
「瑠衣は変わっている物大好きだもんね」

『人を物好きみたく言うなってー』  
「えー物好きでしょ」

『つと、ごめん。話を逸らし過ぎた』  
「良いよ別に。私もっと瑠衣と喋っていたい」

『嬉しい事言ってくれるじゃん』  
「ふふ」

『それで、どうやってその子が彼女だって知ったの？』  
「……えっとそれなんだけど」

『ん？』

「正確には付きあっているかは分からないの」

『そうなの？』

「うん。多分二人は知り合いですらないと思う」

『……どういう事？』

「なんて言ったらいいのかわからないんだけど……雰囲気というか」

『なんかややこしいな』

「ごめん」

『まあ上手く言えるようになった時にでもまた電話しておくね。若菜からの電話なら大歓迎だから』

「うん、ありがとう」

『あ、ママに呼ばれたわ。多分夕飯だな』

「長電話してごめんね」

『気にすんなって』

「……私、もうちょっと尼土さんについて調べてみるね。真似てどうにかなる物じゃないとは思っけどもう少しだけ頑張ってみたい。瑠衣のおかげで勇気が湧いて来たよ」

『おお、恋する乙女は小さな化け物だねー』

「酷い言われようだ」

『とじろどれ』

「うん？」

『その、誰だっけ？』

「誰って?」

『今言つてた名前の人。あまなんとかって』

「尼土さんだよ」

『おおそれそれ。それって誰?』

「やだな、何ふざけてるのさ」

『おいおい笑われたって知らないもんは知らないぞ』

「……え」

『いや、私その人の事知ってるのか?』

「え……っと……さっき瑠衣は知らない人だつて言つてたけど」

『ああそうだよな。やっぱりそうだよな』

「瑠衣……?」

『んで、その尼土って人がどうしたのさ?』

「……え?」

『え、つて言われてもいきなり知らない人の名前出されてもこっちは困るんだけどね』

「何言ってるの？ さっきからずっと話していたじゃない」

『そっちこそ何言ってるのさ……っとまずい、ママが怒鳴り出した。悪いけどもう切るね』

「あ……うん行ってらっしゃい」

『じゃあねー。また明日な』

「はいはい」

「……」

「……」

「……」

「……」

体にかかる柔らかな負荷を感じて私は目を覚ました。目を開いていつもと違う天井をしばし見つめた後に、自分が今朱水の家に厄介になっている事を思い出す。カーテンの隙間からは誘惑の日が零れ落ちていた。

体を起こそうと力を入れるがどうにも持ち上がらない。その理由は何かと顔を左右に傾けてみるが布団の上に何かが載っている訳では無かった。金縛りか何かかと思っただが、私の左側の布団が大きく膨れている事に気付くと、就寝前の出来事が頭中に再来した。自由に動く右手を使って布団を押し退けると私の左腕に絡まっている物が確認出来た。勿論一緒に寝ていた由音ちゃんだった。

「由音ちゃん……おはよ」

私は返事の期待できない挨拶を呟きつつ、剥いだ布団を彼女の頭だけが出る様に向け直す。まだ夢の中にいるあどけない顔した少女は私の左腕に抱きつく形で寝ていた。彼女の膨よかな胸は規則的に動き、少しだけ開いた唇は時折わずかに動いて音にならない言葉を呟いている。何と心温まる寝顔なんだろうか。

寝ころんだまま一度大きく伸びをするとドアがノックされる。

私はその時自分が目を覚ました本当の理由を悟った。きっかけは足音だろうか、それとも第六感だろうか。どちらにせよこれから起こる事件の要因の一人が今ドアの前にいるのだった。事件の予感で私は目覚めたのだろう。因みにもう一つの要因は私の横で既に丸まっている。

「有様、おはようございます」

家で聞き慣れた言葉がこの屋敷でも響いた。私は返事をしなければという焦りを持ちつつも、左腕にかかる柔らかな重みを思うと先に言葉を考える必要があるのではと考える。要するに言い訳のことだね。

「……………失礼します」

二度目のノックは無く、部屋のドアが開けられた。彼女は私の顔を見ると少しだけ表情を和らげ、そして直ぐにいつもの何所か不機嫌そうな顔に戻った。

「起床される時間を事前に知らされていなかったもので有様の休日での起床時間に参りました。朝食の用意が来ております」

首を彼女、椒ちゃんのいる方向とは反対に向けて時計を確認すると、なるほど確かに私が日曜に起きる時間くらいだった。

「おはよう」

「はい、おはようござ………います」

椒ちゃんは挨拶半ばで何かに気づく。もっとも、気付かない方がおかしい状況であるが。何せ私の頭すぐ横にもう一つ頭があるのだから。お互い目を合わせれば自然ともう一つの頭が見えるつてものだ。

「……………」

「……………こ、これはね、えつとね、そのね、えつとね、」

椒ちゃんはみるみる攻撃色に目を光らせ始める。私は混乱した頭の中から何とか言葉を引き抜こうと努力するが、殺気立つ椒ちゃんを視界に収めている状態では無理な話だった。

靴音を大きく鳴らしながらベッドに勢いよく歩み寄る椒ちゃんを私は茫然と眺めるしかなく、彼女が布団をこれまた勢いよく剥ぎ飛ばすのもお行儀良く待つしかなかった。私がさつき布団を剥がした時とは比べ物にならないくらい乱暴な行為であったので、流石に由音ちゃんも目を覚まし、瞼をこする。

「ん……………おはようっす」

「ええ、おはようございますっす!」

椒ちゃんも私の方など一瞥もくれず、由音ちゃんの眼前に乗り出し殺気だった微笑みを浮かべる。

「どうしてこちらに菅江様がいらっしやるので?」

声色が大分低くなってしまうている椒ちゃんは襟首を掴もうとしている両手を抑えるかの様にシーツを握り込んでいる。

だが笑顔、なので怖い。

そしてそんな椒ちゃんを前に由音ちゃんは余裕のあくびをかます。

「どうして……あーそりゃ一緒に寝たからっす」

「……………潜り込んだなどでは無く合意の下でという事ですか」

ええ分かりました、と小さく頷きながら今度は私に向かって睨みを利かせる椒ちゃん。

「大変仲がよろしい事ですね」

「いや、そのね、由音ちゃんの話し相手になっていたらいつのまにかそのまま寝ちゃったみたいで」

これは当然嘘だが椒ちゃんの剣幕を少しでも和らげようとするには必要な方便だった。

「ならそういう時は事前に私でもお桐でも呼んでくださいまし。責任持って丁重に部屋まで運びますから」

丁重という所を強調したその言葉は赤い目から放たれる気に比べたらまだ大人しかった。睨みは自重せずに敵意を私に与え続けている。正直噛みつかれそうで怖いくらいだった。

「御主人様の屋敷で破廉恥な事をなさらないでくださいますか?」

破廉恥とまで言われてしまったが反論するだけの勇氣は私には有らず、ごもつともですと首肯せざるをえなかった。

「以後気をつけます……………」

「ええお気をつけくださいまし。もし私で無く御主人様でしたらどんな事になっていたでしょう」

朱水だったらかあ。朱水の場合は自分も由音ちゃんと寝たいとか言いだしそうな気がする。あの人ってば私だけに意識を集中させて



いる訳じゃないから……。まあ私も人の事は絶対に言えないけどね。私が独りで結論付けていると由音ちゃんが火にガソリンを注ぐかの如き言葉を漏らす。

「もしかして椒さんも有君と寝たいんっすか？」

椒ちゃんはその言葉に一瞬固まるが、見る見るお顔を赤くさせて後ずさった。

「じよ、じよーだんじゃありませんっ！ 私がそんな破廉恥な行為を望む訳ありません」

「女同士で寝たくらいで破廉恥ってちよつと過剰すぎるっす。自分はいく鏡先輩と寝ますがおかしいな雰囲気になった試しなんて皆無っす」

まあそれが普通なんだろうけど。しかし椒ちゃんは納得できない様で床に目を伏せたまま黙りこくる。拳を力強く握っているその姿は痛ましく、私はいても立ってもいられず椒ちゃんに近づく。椒ちゃんは私が近づくのを察知して一瞬だけ逃げようとしたが再び目を伏せて留まってくれた。

「椒ちゃんは朝ご飯食べちゃった？」

彼女の事だ、ここで私が謝ったりしたらそれこそ燃え上がるだろう。ならば私が取べき行動は一つ、椒ちゃんと由音ちゃんを一刻も早く引き離す事だった。

「……私はこの屋敷では朝食をとりません」

「それって規則なの？」

椒ちゃんは私の目を見ると首を左右に振った。

「なら用意して貰おうよ。私から梧さんに頼むからさ」

しかし椒ちゃんは迷っているのかあまり良い色を示してくれなかった。そこに思いもよらない手助けが入った。

「用意して貰う必要は無いですよ。恐らくですが私の分も朝食は用意されている筈ですから、椒さんは有君と一緒に私の分を食べてください。自分は後でも構わないので」

「そうなの？」

椒ちゃんは私の問いに小さく頷いた。由音ちゃんがあんなに大人な対応をしてくれるとは思わなかったため驚いたが、折角の好意を無駄にする訳にはいかないのでこのまま押し切る。

「由音ちゃんもああ言ってくれているんだし、一緒にご飯食べよ？ほら、私達って毎日顔を合わせて食べているでしょ。だから一緒に食べないと一日が始まった気分になれないと思うんだ」

「……分かりました。有様がそうおっしゃるのなら」

椒ちゃんは目から攻撃色を失い、手を口に当てて小さくだが応えてくれた。

「ん、それじゃ顔洗って着替えてから向かうから待っててね」

椒ちゃんの気が変わらない内にと、私は急いで廊下に出てトイレに向かう。しかし廊下に出て数秒後に結果的に二人を一つの部屋に残してきてしまった事に気付く。だけれど平常の雰囲気に戻った椒ちゃんと、元々実は大人な由音ちゃんとなら衝突は無いだろうと自分に納得させた。納得しなければいけないと言ったものか、このまま部屋に戻った所で何を変えられるのかという意見が脳内に生まれただった。私に出来る事はいち早く用事を済ませ、体を二人の前に置く事なのだろう。

トイレから戻ると二人は意外にも私のベッドに腰掛け隣り合っていた。その光景を見た私は入り口で固まってしまい、二人の目が私を射抜き続けていても暫らく動けずにいた。私がいつまでも凍ったままにいる為、不審に思った椒ちゃんが私の目の前に来るとやっと言葉が喉を過ぎてくれた。

「どっしたの！」

「どっしたって……それは有様がかけられるべき言葉でしょうに」  
いやまあその通りなんだけどね。それでも私が出た時と帰った時でのこの雰囲気の違いと言った物は、誰にだって私と同様の反応を

要求すると思うんだよね、お姉さんは。一体何があったのだろうか……しかし折角の雰囲気壊す訳にはいかない為、悔しくも放っておくしかないのかな。

「じゃあ朝食行ってらっしゃいっす！ 自分は後からゆっくりと頂くっす」

私の背中を押す由音ちゃんはウインクを浴びせて廊下へと私を力いっぱい運ぶ。それに釣られて椒ちゃんも廊下へと進む。しかし振り返ると由音ちゃんはドア枠を挟んで部屋の中にまだ立っていた。「もしかしてかもしれず、菅江様は有様の部屋で時を過ごそうなどと考えていやがりませんよね？」

私が由音ちゃんの行動にただ首を傾げていると、椒ちゃんは大変苛立ち極まった様子で問いただした。その今にも嘔みつこうと威嚇している犬の如き姿勢に対し、由音ちゃんは一切の焦り、怯えを抱えずにケロリとしていた。経験なのか性格なのか、とにかく由音ちゃんは基本的に強い子の様だ。そう考えると由音ちゃんを怯え泣かした朱水の変身は、分かる人にとっては最大級の恐怖だったのだろう。私はただただあの姿に見とれていたけど。

「大丈夫っす。物色したりしませんって」

「当たり前です！ その様な行為をした暁にはとつとこの屋敷から追い出してさしあげます」

「まあ由音ちゃんなら大丈夫だよ。ほら行こう」

由音ちゃんの首に手を伸ばしそうな椒ちゃんの手を掴んで食堂へと歩を進める。さっきの落ち着いた雰囲気は何所へ行ったのか、いつもの二人に戻ってしまっていた。

「よろしいのですか？ あの人絶対いかがわしい思いを持っていませんよ」

「大丈夫だって。由音ちゃんは意識的に他人に嫌われる真似はしないと思うよ」

度を過ぎたコミュニケーション以外はね、と言いたくなかったがそ

れでは椒ちゃんを抑える力が弱まるので口を結び付けておこう。椒ちゃんは私の意見をしぶしぶと飲みこんでくれたのか、最初は止まりがちだった足を今では円滑に動かしてくれている。

長い廊下を私達は隣り合って歩いていった。朝の陽射しが窓ガラスを通して私達に降り注ぐ。椒ちゃんの香りが私の鼻をくすぐり、ここに来て初めて二人だけになった事に気付かされた。

私は本能のままに足を止めた。

「忘れ物でしょうか？」

私の顔を傾げて覗くその可愛らしい少女は私に合わせて足を止める。ツンツンと跳ねた横髪が今日も元気に揺れている。

「忘れ物、そうかもね」

「私が取ってきますよ。有様は先に食堂へ……」

「ううん、大丈夫。忘れ物は目の前にあるから」

彼女は困惑色を浮かべた瞳で立ちつくす。私はそんな彼女に向けて忘れていた言葉を投げかけた。

「おはよう、椒ちゃん」

「はい……おはようございます……？」

椒ちゃんはこれで私から二回おはようと挨拶をされた事になるだろう。だけど本当の『おはよう』は今回が初めてなんだ。目をしっかりと見て相手の存在を確かめて、何より挨拶したいという気持ちから出た言葉、意味のある言葉だった。

椒ちゃんの困惑いっぱいの表情が面白おかしく私は隠しきれない感情をクスクスともらしながら先を歩く。椒ちゃんは不思議と私に対して怒りはせずに少しだけ速足な私について来てくれた。ガラス越しの朝世界は美しく、自分がどうしてこの屋敷にいるのかを少しだけ忘れられそうだった。

「分かりました。菅江様の分は急いで作りますので」

梧さんは由音ちゃんの案を二つ返事で受け入れてくれ、直ぐに台所の方へと戻っていった。椒ちゃんも彼女を追って台所へと消えていく。独りポツリと残された食堂のテーブルにはフランスパンとチーズオニオンサラダ、それに緑白色のスープといった朝食が三人分置かれていた。ああそうか、アイシスの分か。なら誰かがアイシスを迎えに行っているのだろうね。

スープから立ち上る湯気が食欲を誘うのだがアイシスが来て椒ちゃんも帰ってくるまでは手を付けるわけにいかず、かといって席に座って目の前の食事をお預け食らうのも耐えがたいため、私は朝食前の散歩としてテーブル周りをぐるぐると歩いた。絨毯の赤さが起きたての目に眩しいが、ここにはこれ以外にも視線を奪う物が多々あって時を潰すには十分だった。暖炉には一応一式が揃っていたが煤汚れ等が無いため恐らく飾りとして設置されているだけだろう。その煉瓦組の段上には綺麗に輝いている紫水晶の群塊が大胆に置かれていた。その長さたるや私が両手を伸ばしてやっと勝てる位の長さである暖炉より少しだけ短いといった物だった。加工された物では無く天然のまま置かれているそれは、オブジェクトながら見る者に己の気高さを語りかけていた。

数々の調度品を誰の目も気にせずに間近で鑑賞できる折角の機会だからと惜しげも無く注意を無機物に注いでいたため、真横に椒ちゃんも立っている事に気付くまでに結構な時間がかかった。椒ちゃんも私の姿をどんな目で眺めていたのだろうか……今注がれている胡乱うらんな視線が答えを教えてください。様な気がしたが何も考えないでおこう。悲しくなるもんね。

「お待たせして申し訳ございません」

「いやいやいやいや」

「では朝食を頂きましょうか」

冷やかな笑みを浮かべながら私の顔から右に大きくずれた位置を注視している椒ちゃんは、手を朝食の前に置かれている椅子に向けて着席を催促する。私はそれに従ってとぼとぼと足を浮かして力

を緩める様に椅子に落ちた。何ともかつこわるい姿を見せてしまったもんだ……最悪だあ。

「アイシス様はしばし手が離せないで先に食べていて欲しいと仰っている様です」

「ありやそうか。でもだからと言って由音ちゃんを急いで呼んでくる訳にはいかないね」

「そうですね。アイシス様が来られた時に料理が並んでいないという最悪の事態は避けなければなりません」

隣に椒ちゃんが座ると料理の匂いに紛れて彼女特有の香りがふわりと流れる。

「この屋敷には朝にご飯を炊くという発想が無い為、朝食は洋食になっってしまったがよろしいですか？」

「もつちろくん。全然問題無いよ」

「そうですね。たまには朝にパンを頼張るのも良いかもしれませんね」

小母様には言わないでくださいね、と言って椒ちゃんは楽しそうにフランスパンにマーマレードを塗った。

「このバゲットも梧桐様の手作りなんですよ」

フランスパンを持ち上げて自慢げに私に見せびらかす。なるほど、フランスパンと言ってもそれぞれに名前があるのか。

「御主人様が気にするため砂糖もバターも全然使っていないのだそうです」

一口分に千切って口に入れてみたら確かに菓子パン等とは違って大きな味はしなかった。まあこれを主食にする人達にとって砂糖を塗り込む必要は無いんだろうね。日本で言うところにご飯を炊く時に砂糖を入れる感覚なんだろうか、随分気味の悪い行為に感じるや。

「良かったら何か塗りますか？」

椒ちゃんは網カゴに入っている小瓶を幾つか取って私の前に並べてくれた。小瓶の中にはフルーツジャムが収まっている。これも恐らく自家製なのだろう。

「椒ちゃんのお勧めはどれ？」

彼女はしばし小瓶の群れを眺めていたが最終的に黒い物が入った小瓶を選び出した。

「御主人様は良くこれをつけていられます」

受け取った瓶のふたを開けてみると匂いでブルーベリーのジャムだと分かった。出来ればこの時くらいは朱水じゃなく椒ちゃんの好みで選んで欲しかったという思いがあったが、だからと言ってそれを理由に選び直してもらおう訳にはいかず、バターナイフを使ってパんに薄らと紫色のジャムを塗る。塊では黒色でも塗るとやはり綺麗な紫色を露呈してくれた。

「スープはほうれん草のポタージュだそうです」

取っ手付きの大きなカップに入ったスープを椒ちゃんは美味しそうに飲む。彼女のこの様な姿を普段から見ている自分としては、この屋敷ではこれが異例として扱われるのが不思議でしようがなかった。確かに栄養を摂取する必要が無い体ならば料理を口に入れる必要が無いのだろう。しかし味を楽しむ事は出来るのだから使い魔さん達も皆食事をすればいいのにと感じてしまう。もっとも、朱水と執事さん二人の食費である現状と、その一つ上の段階である、椒ちゃんと枳さんを抜かした計七人の食費とでは差が大きすぎるのだろう。それに現実的な話、必要の無い摂食は資源浪費と見られる可能性が高く、暗黙的にやめておこうとしているのかもしれない。

「……お口に合いませんか？」

手が止まっていた私を不審に思い彼女は訊ねてくる。私はそんな事はないと主張する為に手に持っていたスープをごくごくと飲み乾した。温かさが自分の中の感情を和らげてくれそうだった。自分の首を絞めてしまうこの考えを一刻も早く体の奥底に呑み落としたかった。

サラダの大皿からそれぞれの分を取り分けっているとアイシスがあくびをかましつつ食堂に入ってきた。手がつけられないという事は

何らかの作業をしていたのだろう、睡眠不足がありありと確認出来た。

「おはようございます」

「おはようございます、御二方」

「アイシスおはよう」

そこでもう一度大きなあくびが起きた。

「寝てないの？」

「いえ、仮眠は取ったのですがどうにも眠気が取れず」

アイシスはこの屋敷に所蔵されている書物で調べ物をしていたらしい。彼女が言うにはここにある本は滅多に見られない特殊な物で、一般人が手に入れられる物では絶対に無いという稀少本らしい。もともと閲覧許可は取っていたのに今までは雑務の所為で上手く時間が取れずにいたのだけれど、ここにきて仕事に追われずに済む長い休みが期待出来そうだったため欲望のままに数冊読破していたとの事だ。目の下にクマをばつちりとこしらえた彼女は私の隣に座り、パンに手を伸ばすと何もつけずに干切っては口に放り投げる。

「この休暇の間に全ての本に目を通しておきたいのです」

「でもちゃんと休まなきゃだめだよ」

「それはそうなのですが……ボクの中では肉体よりも精神の方に天秤が傾いているためどうしても知識欲が上回ってしまうのですよ」

これがアイシスを天才に仕立て上げた土台なのかもしれないね。

私よりも年下なのに魔法の大学で教鞭を執っているくらいなもの、普通の精神じゃない事は確かなのだから。

「御部屋にミントティーをお持ちしましょうか？」

「助かります。今は睡眠欲より知識欲です」

そして再び大きなあくびをする。正面にいたら口の中の物が丸見えだっただろう。サラダを取り分けてお皿をアイシスの前に置くと、彼女はじつとサラダを見つめた後ミニトマトをフォークで弄くり始めた。相当疲れているのだろうか、あまり話しかけずに彼女がしたようにさせてあげた方がいいかもしれない。疲れている時の周り



からの干渉は気持ちの良い物じゃないからね。

「皆は今日もいつも通りこの屋敷にいるんだよね？」

首を百四十度回転させて椒ちゃんの方へと向けると、私越しにアイシスを見ていたのか二人の顔と顔が異様に近づき一瞬だけ面食らったが、椒ちゃんの方が平然としているためこちらも内心を押し殺して平常を装う。

「はいいつも通りです。私達は外へさほど出ませんので」

そっかぁ。なら今日も色々な人とお喋りしてみたいな。

私は唇にだらしなくオニオンを張り付けたまま呆けているアイシスの口をナプキンで拭いつつ今日の計画を思案していた。

沢山の花に囲まれたそこは色を散りばめた美術品であった。風が吹く度にふわりと好い香りが巻き起こり、色が揺れる。レンガを境に花の絨毯が出来上がっていた。壁となっている地帯もある程だ。

その色色の中で唯一暗めの色が頭高く存在している。その淡褐色の髪をした少女は私の存在に気付くと如雨露を水平に正して丁寧なお辞儀をしてくれた。

「おはよう柵ちゃん」

少女は私が彼女に用があるのだと分かると如雨露を地面にゆつくりと置き、私の近くへとすると歩み寄って来た。いやはや、椒ちゃん柵ちゃんの二人とよくもまあこんなに仲良くなれたものだと我ながら驚きを禁じ得ないね。柵ちゃんは出会った当初は無言で距離をとっていたはずなのに、いつの間にか私に歩み寄って来てくれるまでになっていた。

「お花いっぱいだね」

嬉しいという感情が声に現れてしまい少しだけ上ずってしまった。

「どうかなさいましたか？」

「ううん、特別用があつて来たわけじゃないんだ。気にせず水遣り続けてくれていいよん」

あまり汚れていないレンガに腰をかけて、再び日課である草花への水遣りへと戻った柗ちゃん。姿を観察させてもらう。柗ちゃんはやはり私の視線が気になるのか、時々振り返り困惑の顔を向けていた。

お花畑は一人の力で管理するには少し広すぎ、それから四十分は水遣りで時間を消費していた。柗ちゃんはスプリンクラーやホースを使う事を嫌い、如雨露を使って自分の手の加減で水を与える事にこだわりを持っていろいろらしい。その為石敷きの道を何往復もしており、せわしなく彼女の体は前後左右に転がっていた。やっと日課を終え私の所へと戻って来た頃には道とお花畑の隙間にある土の所為で靴が泥まみれとなっていたが、一仕事終えたという充足感で満ち満ちた足取りだった。

「始終見ておられたんですね」

「なはは、ちよつと邪魔だったね」

「いえそんな。所で本当に御用があまり無いので？」

「用と言つちゃえば用なのかもしれない。柗ちゃんとお話しに来たの」

「私と、ですか？」

柗ちゃんは私の行為が意外らしく本当に驚ききつっていた。一体どういう意図の下による驚きなんだろうか。

「これから時間ある？」

「はい、あります。そもそも今が自由時間ですので」

おお……本当に土いじり趣味だったのか。

「じゃあお話して良い？」

「はい喜んで」

柗ちゃんは空になった如雨露を胸に抱いて目尻を下げた。

テラスの上にある日の当たる白いウッドチェアに、二人共が庭に向かう形で座っている。二人の間に置かれていた小さなウッドテーブルには緑茶の入った湯呑みが二つ置かれていて、朝景色の中に湯気を立ち上らせていた。緑茶は柗ちゃんの趣味らしい。この屋敷では基本的に二種類のお茶が出され、柗ちゃんが出すと緑茶となり、権さんが出すと紅茶となるという事実が最近になって判明した。

私はまだ熱い緑茶を息で冷ましながらズズズと啜る。柗ちゃんが音を立てて啜っているのだからそれを真似てみたのだった。彼女が出したお茶なのだから彼女が気持ちよくなれるようにしたかった。

「良い天気ですね。風が心地よいです」

柗ちゃんはちょびちょびとお茶を啜りながら空を見上げる。空にははぐれたカルガモの雛みたいな小さな雲がポツリと寝ころんでいるだけだった。その雛も上空の強い風に追われ、らしくない速さで青を泳いでいる。

「そうだね」

私の口からは同意だけの声が漏れる。仕方の無い事だった。空はただ青く、見る者に何も考えさせない力を纏っていたのだから。

いけない……空の魔力に酔っている場合じゃないんだ。折角の好機、柗ちゃんとお話するんだ。折角

「花が好きなんだね」

「はい。大好きです」

私達はお互いに目を合わせる事無く好き好きにテラスから臨む景色を堪能している。

「どうして好きなの？」

「どうしてですか？　そうですね……可憐だからですかね」

「可憐？」

「細い体に綺麗な頭もたげて短き命を繰り返す、とても可憐です」  
なるほどねえ、と心中で呟く。単純な可愛い物好きという理由か

ら来ている趣味ではないんだね。

「もしかして動物もその理由？」

「御存知なんですね」

「あはは、ごめんね。嬢さんから聞いちゃった」

「いえ、そんな謝られる事ではありませんっ」

櫛ちゃんは立ち上がり、声を少しだけ張り上げ目を大きく開いた。勢い余って湯呑みから緑茶を零してしまったが幸いにして服にはかからず床を濡らすだけで済んだ。

「申し訳ございません……私、つい心で思った事を口に出してしまっ様で」

「それも良くやっちゃう。直らないよね」

「はい、恥ずかしながら」

お茶を零してしまっというさらなる失敗が彼女の中で重りとなっってしまった様で、椅子に崩れ落ちた。

「大丈夫、私も良くやるんだからこの二人の中なら問題にならないんさね」

「はい、ありがとうございます」

「で、動物は何で好きなの？」

放っておくと更に自分を責めかねないので慌てて話題を戻す。

「確かに思えば尼土様がおっしゃる通りなのかもしれません。花と同様、動物にも可憐の影を見ているのかもしれない」

「うむむ〜むつかしい表現をなされる。まあ要するに動物も可愛いつて理由だけで好きな訳じゃないって感じだろうか。」

「嬢姉様に訊かれたのなら私の事を可愛い物好きと表現されているられたでしょう」

「はは、大正解」

「でしょうね。もっとも、可愛いという理由も勿論ありますが」

由音ちゃんを初めて目撃した際の櫛ちゃんを知っている私にとっては『可愛い物好き』と言う表現は正にどんぴしゃりで呑みこむのに何ら抵抗無い言葉だった。

「今度柗ちゃんのお部屋に遊びに行つて良い？」

「はい、喜んでお迎えますね。その時にはとびっきりのお茶を用意しておきますから事前にお知らせください」

ぬいぐるみだらけの部屋、非常に興味があるんだよね。榎さんに言わせればびっくりするらしい。そんな少女趣味な部屋を見学してみたいというのは一女子として当然な願望だと思ふんだ。

「所で尼土様は好きな花はありますか？」

「花？ そうだなあ、考えたためし無かつたや」

花を見るのは好きだけれども一体どの花が好きなのかと問われると答えが中々喉から現れてきてくれなかつた。

「柗ちゃんは『これだ』つて言う花あるの？」

「はい、あります。庭桜と言つ、木に咲く花です。白くて沢山咲き乱れ、あらゆる方向へと顔を向けてその綺麗な笑顔をどんな人にとつて向けてくれるんです」

「素敵な花だね」

柗ちゃんは普段見せない明るさで楽しそうに語つていた。柗ちゃんが押さえている花は私が最初思い浮かべていた足元に生える様な物だけでなく、木々に咲く花も含んでいるらしい。

「じゃあさ、私や朱水に似合う花つてないかな？」

これがきつかけになつて一つの花を特別好きになれたらと思ひ、柗ちゃんが思う私に合いそうな花を紹介して貰おうと訊いてみた。ついでに朱水の分も訊いておいてあげよう。

「尼土様と御嬢様に、ですか？」

「うん、沢山知つてる柗ちゃんならそういうの見つめてくれるかなつて思つてさ」

しかしどうやら私の思いつきの要求はとても難しいらしく、柗ちゃんは思慮の渦に吞まれてしまった。

「見つからないなら別にいいんだけどね」

あまり人を困らせる様な質問をすべきでなかったと今更ながら反省し慌てて取り下げようとしたが、柵ちゃんはもう少し待ってと首を横に振った。

「そうですね……」

「うんうん」

「尼土様には勿忘草、御嬢様には月下美人……なんてどうでしょうか」

「おお……見事に分からない花の名前が出てきたぞ。こいつは困った。」

「どついう花なの？」

しかし柵ちゃんは詳しい説明はしてくれなかった。面白げに微笑み口を結ぶ。

「……実物や写真を見ていただければ良いと思います。最初に自分が感じた印象、それが花に対する気持ちになるのですから」

「ほうほう」

流石の花好きなだけはあつて的を射たアドバイスをしてくれるもんだ。好きになれるかなれないかは結局自分が決めるものだからね、確かに他人の感想を混ぜるべきでないというのは納得できる。

それにしてもワスレナグサかあ……ゲームのアイテムに出てきそうな名前だよ、これ。

私達は会話が途切れるとお茶を啜り、景色を楽しんだ。ここには朝の空気と二人の息遣い、そして遠くの鳥達のさえずりだけが存在している。

魔法瓶も急須もあるんだ、まだまだこの時間を楽しめそうだ。

微かな眠気に襲われてうとうととしていると柵ちゃんが一度解いた三つ編みをこしらえ直しながらジッと私を見つめているのに気づいた。

「……ん？」

「梶ちゃんは私と目が合ってから視線を逸らさずずっと私に注ぎ続ける。これは間違いない何か話して欲しいという意味表示であった。梶ちゃんは構って欲しい時に相手の目を注視する癖があるらしく、両手を前で組みながら姉である槐さん達にその紫白色の瞳を向け続けている場面を度々目撃した。ただ梓ちゃんに対しては積極的に自ら関わりに行く事が多いようだ。」

「梶ちゃんって普段は何をしているの？」

「細い指で束となった髪をささと編んでいる彼女はそこでようやく私から視線を外した。会話する際は一般的な目の動きをするみたいだった。」

「御存知かもしれませんがこの屋敷の清掃を槿姉様と一緒に任されています」

「自由時間はどういうこととして過ごしてるの？」

「そうですね……午前中なら花の世話をし、午後は梓と一緒に過ごしている時が多いです」

「確かに梶ちゃんと梓ちゃんのペアを見かける頻度は異様に高かった。姉妹の中で一番仲が良いんじゃないかな。」

「梓ちゃんとは普段どういう風に？」

「えっと……本を読んであげたり髪を梳いてあげたり、ですかね。後はお昼寝中の世話だったり一緒に映画を見たりしています」

「ああ確かにそうだったね。映画好きなんだ」

「はい、二人ともテレビっ子なので。毎週私が映画をレンタルして二人で見えます」

「二人が寄り添ってテレビ画面を眺めている光景はよく見られた。ほんと仲が良いんだね。よくよく考えると梶ちゃんが独りである所はあんまり見かけた事が無い気がする。」

「梓ちゃんが仕事とかでない時は？」

「その場合は自室で雑誌等を読んでいますかね」

「雑誌？」

「はい、雑貨品やインテリアをメインにしたカタログ調の雑誌です。可愛いのがいっぱい載っているんですよ」

なんて素晴らしいのか。これはますます柗ちゃんの部屋に行ってみたくなるってもんだね。きつとすごく可愛い部屋なんだろうなあ。「尼土様の自室にはどのような物が御座いますか？」

突然質問を返され慌てて部屋を思い浮かべるが、出てきた自室の女子っぼさの微弱っぷりに失望する。カーテンも寒色で家具もいたってシンプルな代物であり、辛うじて女の子っぼい物と言ったら少しだけある小物くらいだった。これじゃあ叔母さんの方が可愛い部屋してるんじゃないかな……。まあそれもどうかと思うんだけども、心が冷える為、深く考える事を停止した脳はわずかな単語だけで質問に答えた。自己防衛機能って素晴らしい。

「普通の……物……」

「普通、ですか？」

「うん、しんぷるいずざべすと」

「はあ」

柗ちゃんはよく分からないと眉を曲げるがこっちの方が過去の自分に眉を曲げたいよ。なんでもっと女の子の子供の趣味してなかったのだろう。今度叔母さんの部屋を参考にさせてもらおうかな。

いや待てよ、その前にもっと良い先生がいるじゃないか、目の前に

「よかつたら今度柗ちゃんのお勧めのインテリアを見繕みつくろってよ」

きつと柗ちゃんなら素敵素晴らしい物を知っているに違いない、

そんな確信が私の中にあつた。

「はい、喜んで。私なんぞの意見でよろしければ何時だって進言させて頂きます」

これはとても素晴らしい収穫を得たもんだね。これで少しでも私の部屋から殺風景の三文字が薄まってくれと嬉しいなあ。柗ちゃんは柗ちゃんて自分の趣味が活かせるからか凄く嬉しそうで、勢いでまだ熱いお茶を間違えて口に含んでしまい痛そうに舌を出して微笑んだ。



柗ちゃんは用事があるらしく、最後に私の湯呑みをいっぱいにしてくれてから屋内に戻ってしまった。私はまだ熱いお茶をズズと啜りながら今度は独りで景色を楽しむ。すると視界の隅に何やら動く影があり、それを追って私の目も動く。その影は遠目に見ても誰なのか十分に分かる個性を持っていた。私は無感情に立ち上がり、この行為に自分で驚きながらも折角立ったのだからとその人物の後を追ってみる。行き先はもう分かっていたから追うのは簡単なんだよね。

「椒ちゃん」

その人物は彼女のお気に入りと聞く場所に立っていた。何をしてもなく、ただ佇んでいた。

「有様……」

由音ちゃんの来訪を毎度察知する椒ちゃんにしては珍しく、声をかけるまで私の存在に気付かなかったのか、振り返ったその顔は驚きに満ちていた。

「どうなさいました？」

「椒ちゃんに会いにきたんだよ」

「はあ、お暇なんですね」

ちくりと刺さる言葉を遠慮無しに投げかける彼女は、それでもにこやかな表情を浮かべてくれていた。

「ここが好きなんだってね」

「そうですね。ここは風を感じますから」

しかしおかしな事に椒ちゃんは自分の言葉に何所か失言が在ったみたいに慌てて私の表情をうかがってきた。だけれど私には今の言

葉の何所に問題があったのか理解できなかった。

「確かにここは風が強いね」

「自然に出来た風の流れなんです。ここから先は地面がデコボコになっていて、その合間を風が流れ、そしてここで再び一束になるんです」

ほうほう、道理で他と風の強さが違う訳だ。またいつもの魔法的な現象かと思いきや普通の自然現象だったのか。私達が顔を向け合っている間も、風は途切れる事無く泳いでいる。草はサワサワと歌い、耳も風の存在を知らせていた。

「ああ、だから花が咲いてないのかな」

「はい？」

「いや、風が強いから花びらが耐えられなくて自然淘汰されてしまったのかなって」

周りの緑にはぼつぼつと鮮やかな色が混じっているが、ここにはその様な物は無かった。

「いいえ、そういった理由では無いのです」

茶色と緑に支配された地の中心に立つ黄色の少女は挑発的な視線を私に向ける。私にはそれが苦痛だった。最近の私に対する顔とは違っていたのだった。

「私が抜いたんですよ。ここの花は人工的に消されたんです」

人工的という言葉は私が使うと変な気がしますが、そう彼女は唇端を曲げる。

「椒ちゃんか……どうして？」

「どうしてって、以前お教えしたはずですよ。私は花が大嫌いだと嫌いだから排除するんですよ、椒ちゃんはまだ私に挑発的な視線を注ぐ。私は自分の目が微かに潤い始めた事に気付く。まずい……椒ちゃんの目の前で涙しそうだ。年下に泣かされるとい悔しさよりも、椒ちゃんに自分がこんなに弱いのだという事を分からせてしまうのが嫌だった。

しかし急に椒ちゃんの目が緩む。

「……冗談ですよ。まあ半分は、ですが」  
「半分？」

彼女が目を逸らした隙にばれない様に涙を袖で拭う。瞼を一度下すだけで雫は落ちてきた。

「私が抜いているというのは嘘ですが、原因が私にある事は事実です」

曰く風上に彼女が立つ事によって彼女の力である糜爛の呪いが微かに風に漏れ流れてしまうのだという。それを連日浴びてしまった所為で一部の生命力が強い草以外は絶えてしまったのだった。

「生きるって事は迷惑かける事に等しいのですね」

椒ちゃんは足元に生えている背の低い草を撫でながらそう呟いた。

彼女達は本来いてはいけない存在

だから彼女達が与える影響は不自然

それは彼女も分かっている様だった

突然何かに気付いた椒ちゃんは私の靴を指差した。

「靴紐が解けていますよ」

指の延長線を見ると確かに靴の紐が解けていて土で大層汚れている。深夜に降っていた雨の所為で今朝の土は湿っている為、泥汚れの段階まで来ていた。こりゃ酷い。

「そのまま歩いてしまったから紐であんよまで汚れてしまってますね。どうぞこれをお使いください」

そう言つて椒ちゃんは黒いハンカチを差し出してくれた。それにしても『あんよ』ねえ……椒ちゃんってたまに幼児語を使うんだよね。可愛いから絶対に指摘しないけど。

椒ちゃんの事だ、指摘したら絶対真っ赤になって噛みついてくるもん。

「でもハンカチ汚れちゃうよ？」

「良いんです。その為の黒なのですから」

もう一方のポケットから白いハンカチをチラリと見せてしたり顔を作る。なるほど、こういう時の為に二つ持ち歩いているのか。流石メイドさんだね！

私は受け取った黒いハンカチを使ってパンツについた泥を拭うがこれがなかなか落ちない。私が悪戦苦闘していると彼女は私の手からハンカチを抜き取り、代わって泥を落としてくれた。コツを知っているのか、見る見るうちに汚れはハンカチに移って行った。

「ありがとう」

「いえ。ついでに靴紐も結んでおきますよ」

彼女は自分の指が汚れるのを気にもせず整った蝶結びを作ってくれた。綺麗な細い指が汚れていく様を見るのもそうだが、彼女の足元で跪いているのは気分が良いものでは無かった。

それにしても椒ちゃんの近くにいると本当に心地好い香りです。けそうになるなあ。

「ありがとう、椒ちゃん」

「ふふ、有様も女性なのでから身だしなみに気をつけてくださいませ」

もう一方の靴の紐も解いて再び結び直してくれた。左右対称となった靴紐はバランスよく靴上に載っている。

彼女の手と紐と一緒に視界に捉えているとふと思いつく。

紐……そうだ私はあの紐を借りっぱなしだったんだっけ。あの紐とは以前由音ちゃんを侵入者と勘違いしていた時に、持っておいてくれと渡された物だ。

「ねえ椒ちゃん、前に借りたあの紐って返した方が良いんだよね？」

椒ちゃんは最初何の事か理解していないのか、しゃがんだま目をパチクリとさせていたが、私が紐の形状を手で形容すると私が何を指しているのか分かった様だ。立ちあがると私の手を取って言い聞かせる様に声を低める。

「あの紐は私に返さなくてよろしいのです。私よりも有様の方が必要としているはずですので」

「そうなのかな。うん、分かったよ、大事に持っておくね」

「それと有様、ちゃんとしっかり携帯していますか？」

……今は机の引き出しに眠っております。

「あー、ごめんなさい」

「常に持ち歩いていないと駄目ですよ。緊急時には必ず必要となりますので」

命を救ってくれるというとっても大事な道具だとは念入りに教え込まれたのだが、つい甘えが私を支配してしまっていた。そしていつの間にかその存在すら忘れていたのだった。

「そうですね、忘れてしまうというのなら鬼眼の輪に巻きつけておくというのはどうでしょう。あの紐は私達と同様、本質的に汚れる事は無いので体に常に付着していても清潔です。………す、すみません」

自分の言葉で思い出したのだろう、慌てて椒ちゃんは私の手からその手を離れた。本質的に汚れる事は無いと言っても表面に汚れが付着する事はあるわけで、今まさに椒ちゃんの指には泥が付いていたわけで。しかしこちらこそ申し訳無さに縮こまっていたので、椒ちゃんと一緒に汚れたのはむしろ嬉しかったりする。

「おててを出してくださいな。どうして後ろに隠すんですか」

自分の指を黒いハンカチで綺麗に拭ってから今度は私の指をと構える。

「いや、拭かなくて良いよ」

「良くありません！ 有様はもつと身だしなみに気を配ってくださいまし」

後ろ手にした腕を無理やり掴み出されて指を払拭されてしまった。丁寧に伝う柔らかい布地が気持ちよく、汚れにこだわっていた心ごと綺麗に浄化された気がした。

「はい、これで良いです。後で石けんでも丁寧に洗ってくださいね」  
「はは、まるで子供を相手にしている様な言葉だなあ。」

「とにかく、あの紐は常に携帯しておいてください」

「うんわかったよ」

未だにあの紐の本当の意味が分かっていないけれど大事なものである事は間違いなさそうなのでしっかり言いつけ通りにしておいた方が良いだろう。

「そうだ、あの時は時間が無くて訊けなかったけど今なら説明して貰えるのかもれない。」

「ねえ椒ちゃん、あれってさどういう物なのかな？ あの時って焦ってたから紐自体の説明は端折っていたでしょ？ 良かったら教えて欲しいな」

「ああ……確かにそうでしたね。良いですよ。ですが立ち話では足が辛いでしょから歩きながらにしませんか？」

椒ちゃんはそう言って屋敷の方向へと足を進め始める。私もそれを追って彼女の足跡を重ねて踏む。私の靴よりも少しだけ小さかった。

「あれは私達の臍の緒なのです」

「臍の緒？」

触った感じはとてもじゃないが生物の欠片の様なグロテスクな印象を得られなかった。自分の臍の緒どころか人間の臍の緒を直に見た事の無い私でも、あれが一般的に示される臍の緒とは違う物だと分かる。確かに編みである普通の紐とは違って網目など無くゴムの様な見た目だったけど、触り心地は布に近かった気がする。

「ただ実際に私のお臍についていたわけではありません。母体との繋がりであった物という意味で臍の緒だと表現しています」

「母体、かあ。椒ちゃん達のお母さんって？」

「すみません、勘違いを生みやすい言葉でしたね。母と呼べる生き物がいるわけではないのです。私達の母体はこの星その物ですから彼女は地面を軽く踏み鳴らす。地球がお母さん……なんかファンタジーなお話だ。」

「星との繋がりの名残があつた紐なのです。そしてあの紐を使うと再び胎内、つまり私達が存在していた場所に帰る事が出来ます」

つまりその力が私に以前説明してくれた緊急時用の脱出方法なんだね。そんなにすごい道具だとは知らず、無造作に机に仕舞っていた自分が馬鹿に思える。

「私がそこに飛ばされても平気なの？」

反射的に口から出た私の質問は椒ちゃんを困らせる。どうやら答え辛いみたいだ。

「平気かどうか……それは分からないのです。何せ前例がありませんから」

椒ちゃん自身、まだその場所に戻った事は無いらしい。ただ悟さんは何度も出入りしている為、現実世界に戻る事は実証できているとか。しかしそれはあくまで鬼神城という存在である彼女の場合であり、私や朱水がその場所に行っても戻ってこられるかどうかはやってみないと分からないとか。また、何度も覗いているはずである悟さんはその場所がどういった様子なのかを語るうとはしないらしい。

「でも悟さんは紐を持ってないって言ってたよね？」

「はい、所持はしていません。悟姉様の分は御主人様が携帯していられますから」

ほうほう、存在しないわけでは無く単純に『持っていない』という意味だったのか。でもそうなるとう紐を持っていないのに悟さんは胎内へと帰っている事になるよね。

「はいそうです。姉妹で唯一、戻り紐が無くとも単独で還る事が出来ます。そしてこれまた唯一、術者による召喚が無くとも再びこの世界に戻るんです」

「うへへ、凄いやねそれって」

つまりいつでも逃げられて、そして何ら犠牲無く帰ってこられるんだから。ゲームで言う所のセーブ&ロードの関係、何度でもやり直せるってことだ。便利の二文字では勿体ないくらいの凄技だね。

「勿論です。我々鬼神城はそれぞれ能力が違いますが誰もが一流の存在なのです」

彼女は自慢げに鼻を鳴らした。

「おまけに梧姉様の場合、この世界に戻る場所は私達の様に一か所に限定されているのではなく、もう一つ選択肢があるのです」

「もう一か所？」

「紐の在り処、です」

という事は朱水の近くつて事か。朱水は常に紐を持っているからだ。違った見方をするとしたら、いつでも犠牲無く梧さんは朱水の下へと飛んで行けるのだ。逃げる為だけでなく、守る為にも彼女は地球に戻る。それは従者という立場からすると最高の力なのだろう。

「凄い……凄すぎる」

私は感嘆する事しか出来なかった。私の驚ききつた顔を見ると椒ちゃんは楽しそうに再び鼻を鳴らした。

彼女にとつて姉妹というのは誇り高き存在であるらしく、その姉妹の自慢話をしている最中は熱中しすぎてしまい、たまに地面の段差に足を取られかけていた。悪いと思ったがその姿を笑ってしまうと彼女は頬を膨らませた。

テラスに到着し椅子に腰かけても椒ちゃんは姉妹の自慢話を爛々と輝く目をして続けていた。その楽しげな様子を見ているだけで和んでしまう私は、相槌を適度に挟んで彼女がもっともつと心地よくお話できる状況を作ろうと努力していた。

お昼前の幸せの時間を空の湯呑みを横に過ごした。

部屋に戻ると既に由音ちゃんの姿は無かった。昨日の言葉からするときつとまだ私の部屋にいるだろうと思っていたので無人の箱は



ちよっぴり寂しい。話し相手を失った私はしょうがないのでバッグに忍ばせていた携帯ゲーム機を取り出し、妙に綺麗に整っているベツドへと身を投げた。

画面の向こうの箱庭で動物と戯れて時を過ごしているとコンコンとドアがノックされた。私はうつ伏せでお尻をドアに向けた状態のまま返事をする。椒ちゃんか由音ちゃんだと思っていたからだっただけが唯一の音であった。その静寂すぎる来訪者は誰なのかとやっと顔を入口方面に向けると、一つの目と出会った。それは静寂なのが納得いく女性であった。

「 梧さん……」

来訪者の意外性に驚くと同時に今の自分の無様な姿を客観的に想像して慌てて姿勢を正す。スカートでなくてほんと良かった。

「 何かあつたんですか？ 」

梧さんは視認できる片目を私に冷ややかに向けて無言で立っている。その態度が呆れではなく彼女の標準なのだ知っている私はとりあえず落ち着いて対応できたのだった。

「 昼食はどのようなメニューがよろしいでしょうか？ 」

ああ、お昼ご飯のリクエストを取りに来てくれたのか。こういう時は相手に任せるといふ答えは失礼だと最近理解した私はまずは調査から入る。

「 もう由音ちゃんとアイシスには訊いたんですか？ 」

梧さんは言葉無くただ首を横に振った。動く前髪の奥に普段隠れている右目がわずかな間だけ見えた。

「 うーん、そうですね 」

二人に訊いてないなら私が答える内容でメニューが決まっちゃ可能性大だね。二人も私みたいに前者の意見に乗っかるうとするかもしれないから。

「 じゃあお昼は甘い物が食べたいかも、です 」

「 甘い物ですか。ならホットケーキでよろしいでしょうか？ 」

「おお、名案ですよそれ」

メープルシロップとバターが染み渡った暖かいケーキを想像するだけで涎が垂れてしまいそうになる。しかし冷たい視線を浴びている事を思い出すと涎より涙がこぼれそうになった。

「では他の方にも訊いてまいりますので昼食まで今しばらくお待ちください」

梧さんは綺麗なお辞儀をして一步下がった。元々部屋へは一步しか入っていなかったのでもそれだけで彼女の体は廊下という別の領域へと移ろってしまった。

いけない、このまま逃がしてなるものか！

「あの」

声をかけると梧さんは一度閉じたドアを再び開き、隙間から顔を覗かせる。

「はい」

「急いでいますか？」

梧さんは首を傾げる等の身ぶりは一切せずにいいえと短く答える。私はその小さな口の動きを見た途端小さくガツポーズをしてしまう。自制心よりも感情の高ぶりが上回ってしまったのだ。梧さんの目が一層冷たく光った気がしたが見なかった事にしよう。

「じゃあ良かったらここに」

そう言って私の横を叩く。柔らかいマットレスが良い音を立てた。「……分かりました」

おお……。おおお……。まさか本当に乗ってくれるとは思ってもしなかった。梧さんは使い魔さんの中で一番距離がある人だったのでつきり断られると構えていたのだけど、彼女はすんなりと承諾し、私の横へと座ってくれた。やはり律義な性格な様で、ここだと指定した私の横に実際に腰を下ろしたために、私達はお互いの睫毛の本数が数えられるくらい近かった。いくら手の短さから起る表現の制限であったとしても、それを説明して今更距離を開けるのは失礼すぎるので、恥ずかしいがこのままの距離でお話するしか

なかった。梧さんは照れくさくしている私とは違って視線を逸らさずに私の言葉を待っていた。

「えっと」

いざ目の前に来られると何と切り出して良いのか分からなくなり、とりあえずの場繋ぎ言葉を口にする。親交が薄いので何から喋って良いのか分からない事に今更気付いたのだった。

とりあえず、常套的に行こう。

「梧さんって普段はどんなことしているんですか？」

梧さんは私の言葉が終わらない内に少しだけ眉頭を下げた。何だそんな話か、そう言いたげであった。私はくじけずに隠れて手汗を拭きつつ言葉を紡ぐ。

「梧さんの事もっと知りたいなあって」

梧さんはしょうがないと諦めた様子で瞼を一度深く下ろすと答えを聞かせてくれた。

「御嬢様と長の御食事の用意をさせていただけます」

勿論梧さんと言ったら料理だった。包丁捌き鍋遣いはお見事なもので、齧った程度にしか料理できない私からするとプロとの差が見受けられない程であった。

「習得したレシピって幾つくらいあるんですか？」

「そうですね、三桁はあると思います」

三桁……返って来た答えはとんでもない数字だった。飲食店も簡単に開けそうな量だよ。今度ご教授願おうかな。

「やっぱり和洋折衷、それどころか中華その他各国の料理を？」

「一応はですね。ただ御嬢様の好みは和食洋食ですので偏ってはいません」

おお、めっけものだね、良い情報を聞き出せたもんだ。

「良かったら今度一緒に料理しませんか？」

親睦も深めて朱水の情報も掘り下げて。私の提案に梧さんは刹那に戸惑いを見せたがゆっくりと首を縦に振る。

「御嬢様方の食事の用意に差し支えない時間ならいつでもよろしい

ですよ」

ありがたい事に梧さんは二つ返事だった。普段からの言動を見ていると冷たい人だと思ってしまうがちんだけど、実際の人物は優しい所も沢山持っていた。桐ちゃんへのぬいぐるみプレゼントとか正にだよ。微笑む事は無いけれど、行動で優しさを体現している人だった。

「梧さん自身はどんな料理が好みなんですか？」

「私、ですか？」

「はい。料理をする人が好きな料理って興味あるじゃないですか」

「そうなのですか？ 私が今まで作った料理の中で一番舌に残っているのはポトフですね。シンプルですが具材が作り出す味の層が楽しめるので料理として非常に興味深い存在です」

「興味深い、ですか？」

「はい。薄らとした囲い味の中に具材個々の味を見いだせる素晴らしい料理です」

なるほど、梧さんはそう言った見方で料理を捉えているのか。単純に美味しいかろう好かろうではないんだね。

「好い機会です。尼土様の好みもお教えください」

おっと、これは意外な、梧さんの方から話を広げてきたのだった。「意外」とは失礼だけど、今まで感じ取ってきた印象からすると梧さんは自ら会話を伸ばそうとはしない人物だったから。もしかしたらこれは梧さんとの距離が縮まったという事なのかな？

片方だけ臨める瞳には温かい光が映っていた。

「私は単純な料理が好きですね。おうどんとか唐揚げとか」

「単純な物ほど奥が深いのです。ポトフも単純な調理方法ですが煮込む時間、スープ自体の味、具材の大きさ等の諸々の要因で全体の表情が変わりやすいのです。唐揚げだって同じですよ」

「そうなんですか」

やっぱり料理に力注いでいる人は言う事が違うね。梧さんはベツドに置いていた両手を膝上にて組み合う。

「いずれ研究して美味しいうどんを尼土様に食して貰いましょうかね」

「本当ですか！ 楽しみにしてます」

「悟さんからこんな言葉をかけられとは……やだ、ほんと嬉しい。

私は悟さんから見えない方の手を強く握って過剰な喜びを表に出さない様にする。自然に映っていると良いなあ。感情に流されて大げさにしてしまうと引かれちゃうもんね。

「お仕事以外の間は何をしていますか？」

「調理以外ですか？ そうですね……権姉様の言う通りですね」

「ああ、手が寂しくない様に常に作業をしているって話だっけか。

「お裁縫とかですよ。女性っぽい趣味でうらやましいです。私はちよつと男っぽいんで」

「女性的、ですか。その様な趣味だとは思っていませんでしたが。女性的というのやはり櫛の様な趣味を指すのでは？」

確かに櫛ちゃんは女の子の子してるよね。お花とか動物とかぬいぐるみとか。でもそれは少女的であって悟さんのみみたいな女性的な趣味とは少し違う気がする。

「そんな事ないですよ。悟さんの趣味だって可愛いです。ほんと羨ましい」

「可愛い……」

「はい、可愛いです」

「悟さんはここにきて初めて目を私から大きく逸らした。もしかして照れてるのかな。ホントか〜わいつ。」

「……後は得物の手入れなどをしております」

「悟さんは咳払いをして強引に話題の路線を修正した。今度は何とも女性らしさの欠片も無い奴が来たもんだ。脳内に光を反射しているナイフを白い布で丁寧に拭いている悟さんの姿がぽつと浮かぶ。

これが妙に似合っていた。悟さんは使い魔さんの中で唯一、マスクキユリンというか男性的な凛々しいかっこよさを持っているからかな。趣味もその容姿から繋がりにくい物だから普通以上に可愛らしく捉

えているのかも。

「その、刃物の扱いが得意だと聞いたんですけど」

「そうですね。刃物の手入れ方法、扱い方に関しては他の姉妹の追随を許さないでしょう」

扱い方ってつまりソウイウ意味だよな。武器的な、ね。

「ははは、凄いですね」

梧さんの表情が少しだけ暗む。私の反応が今一だったからだろうか。あやゝ、私の馬鹿あ。

「そういや梧さんって背高いですよ。かっこいいなあ」

ここは戦術転換、褒め褒め攻撃で行こう。

「姉妹でも槐姉様だけにしか負けていませんから」

「私もそれくらい欲しかったです。朱水と一回りくらい離れているから悔しいんですよ」

「御嬢様は立派に成長されました。しかし尼土様程の背丈が何かと便利と聞きますが」

まあ高からず低からずだからね。それに可愛さなら由音ちゃんクラスにならないと無理だし、同性受けなら朱水の様な高い背の方が良いし。

……って、何考えているんだか。自分の思考の根本が朱水寄りになっけてきている事にびっくりだよ。

「高い方がかっこよくて羨ましいですよ。私なんて中途半端ですもん。それにモデルさんとかも背高い人が多いですし」

「モデル……？」

「はい。やっぱり背が高いと足も長いですから見栄えが良くなるんですよ。梧さんもスタイ……」

「あの」

礼儀正しい彼女にしては珍しく相手の言葉に被せる様に口を開いた。

「はい？」

「それは何なのでしょう？」

「それとは？」

「モデルというのは何なのでしょう？」

「え、知りませんか？」

いけない、また不用意に相手を傷つけそうな言葉を口にしてしまった。幸い悟さんは気にした風も無くコクコクと頷くだけだった。

「ファッションモデルです。ブランドの服を着て、そのブランドの広告塔になるお仕事ですよ」

「はあその様な仕事が存在するのですね」

普通に生活していたら絶対に耳に入れる単語だとは思っただけだね。

「すみません。私テレビや書物に食指が動かないものでして。世間に疎いんです」

「いえいえそんな。それに知らなくても生きる上で差支えないですし、知りたいならこれから知っていけばいいんですよ。なんだったら料理を教えてもらおうお礼に私が教えますって」

ポンと胸を叩いてみせる。どくと来いってね。

「それも面白いのかもしれませんが。好い機会です、尼土様の様な表を闊歩できる方の目線を借りてみるのも一興ですね」

悟さんは組んでいた手の上下を入れ替える。その刹那、彼女の唇が微笑みの相を形作った様な気がした。瞬き一回で見逃してしまいそうな光景は、それでも私の目に焼きついてくれた。

そうだった、私は悟さんが微笑んでいる所をかつて一度だけ見たんだ。それは朱水に抱きしめられている時、彼女は確かに喜びを目に見える形にしたんだ。

つまり、私に対して一瞬でも笑顔を作ってくれたという事は、それだけ悟さんにとって私が近い存在になりつつあるという事なのではないだろうか。

「尼土様？」

「あ、ごめんなさい」

嬉しさから魂が一瞬抜けてたや。

「ついでによろしいでしょうか？」

悟さんは私の横にある物を指差す。それは先程まで遊んでいた携帯ゲームだった。

「これは何ですか？ これもパソコンという物ですか？」

「あーこれはゲーム機ですね」

ハードの名前なんて言っても分からないだろうからとりあえず大まかに教える。モデルを知らない人がゲームのハードウェアに知識が及んでいるはずが無いだろう。それにしてもパソコンは知ってるんだなあ。

悟さんはそれでもまだピンとこないみたいで、一つしかない瞳を延々とゲーム機に向けていた。

「やって……みます？」

その向けるだけでゲーム機を融かしてしまいそうな視線の悟さんを平常に戻す為には実際に手にとりて理解してもらおうしかないと思つたので彼女の目の前に差し出す。悟さんはより近づいた機体を、難問に立ち向かった時の様な難しい顔をして眺めている。

「やる、ですか。これは能動的に関わる物なのですね」

ゲーム機を手にとつた彼女はその外見をくまなく観察する……と思われたが手に取つた途端焼け石でも掴んでしまった時の様にベッドに即座に置いてしまった。丁寧に置いてくれたため損傷は無いが、意外な展開に私は戸惑ってしまった。

「どうしました？」

「すみません、いきなり手渡されたので」

悟さんは申し訳なさに縮こまってしまふ。勝手なイメージではあったが一番勇猛な方だと信じて疑っていなかった私は彼女のその行為に軽い衝撃を受ける。でも確かにいきなり渡されても困るだけだよな。

「えつとですね、ゲームって分かりますか？」

「はい。梓が持っている玩具でたまに皆で遊びますから」

ああこれはきつとトランプやこの前の人生を疑似的に歩むゲーム



みたいな物を指しているんだろうな。

「じゃあこれはその延長線にある物だと思ってください。この画面の中に架空の世界が在って、その中の人物を操ったりして物語を進めたりするんです。物語を干渉できる映像で読んでいくって感じですかね」

何だか自分で説明してて恥ずかしくなってきたよ。これは照れなにかじゃなくて間違いなく羞恥の心だった。世間一般的に「ゲーム好き」という肩書に向けられるマイナスイメージを今一度叩きつけられた感覚だった。相手がゲームに触れた事の無い人であるからなおのこと高威力である。

いいもん、楽しい物を楽しんで何が悪いのさ。

「という事は一人用なので？」

「そうですね。基本的にマンツーマンです。これがソフトって言うて、この子が本で言う印字みたいな立場ですね」

ソフトを取り出して掌に載せてあげる。梧さんはそれを恐る恐るといった感じで眺める。

「そしてこの機体自体は本で言う紙の部分、つまり印字が載っている部分ですね。字が紙の上に居座って初めて私達が物語を知る事が出来る様に、このゲーム機とソフトの間柄も切っても切れない関係なんですね。両者が同時に存在して初めて成り立つみたいなの」

梧さんは無言でコクコクと頷く。理解しているのか、圧倒されてしまっているのか。

「要は物語その物がソフトで、それを現実世界で形にするのがハード、ゲーム機って感じですよ」

「なるほど、その概念は私達にとって受け入れやすいです。良く分かりました」

彼女は一度ソフトを裏返してから私に返す。どうやら納得してくれたみたいだけどどうして受け入れやすいのだろうか。気にはなつたが梧さんが説明を急かす様に無言の圧を送っているので私はそのまま説明を続けた。

「ちなみにこのソフトはいわゆる箱庭ゲームって呼ばれるジャンルで、土地を開拓して野菜や果実を育てたり家畜を飼ったりする物なんです」

自分が一番好きなジャンルなので少しだけ興奮気味になる。しかし私の波は梧さんの微動だにしない感情船を撫でるだけで空しく消えていった。彼女の不変のまばたきに私の興奮も冷まされてしまった。

「それは『ゲーム』なのですか？」

「……楽しいのでゲームなんじゃないでしょうか」

箱庭ゲームは理解されにくいからなあ。もっと違う物を持ってくればよかった。

「やってみますか？」

こうなったら無理矢理に引き込んでやるぞ。だけれども梧さんは時計をチラリと見ると首を横に振った。そう言えば今は昼食の支度までの合間で、そこを無理に捕まえたんだった。

「申し訳ございませんがそろそろ昼食に取り掛かる時間ですので。貴重なお話ありがとうございました」

貴重だなんて……言葉を発する度に自分を削っていた私にとっては的外れすぎる表現だった。今度は私の身が縮こまる。

「そうだ、これから二人の所へ向かうんですよね？」

「はい」

「だったら私も行きます。もしホットケーキが通ったら皆で焼きましようよ！」

「よろしいのですか？ 昨晚も手伝って頂いたのに」

「いいんですよ。それに皆で作った方が楽しいですって絶対」

ホットプレートさえあればホットケーキは複数人で同時に作れるからね。

「椒ちゃんも良いですかね？」

「一人くらいなら問題ありません。四人分の材料なら確保できます」

四人というと私に、由音ちゃん、それとアイシスと椒ちゃん……

「もう一人忘れてますよ」

「そうでしたか？」

最後の一人を探そうと悟さんは指を折って数える。何度も繰り返しが動くがそれは最後まで四本目までだった。

「思いつきません」

「やだなあ。悟さんってば自分で作ったのに食べないんですか？皆で食べましょうよ」

悟さんは最後の一本である小指で自分の顔を指す。

「そうですね。たまにはつまみ食いも許されるのかもしれない」

五本全ての指が無事に折れた拳を左手で包むと目を瞑って穏やかな顔を見せた。

「じゃあまずは居場所が分かっているアイシスから確保しに行きま  
すか」

私の提案に頷きで乗った悟さんはベッドを整えるとしなやかに廊下へと出ていった。

ぐうと狙った様にお腹が鳴った私は、まだ生地すら存在していないホットケーキを鼻に感じながら悟さんの後ろを追ったのだった。

第六話 少女達 / 中話(1)

Fortune

「すんばらしいお土産だわ！」

壁を覆う本達が女性の大声で揺れた。その声の主である伏原相は鼻息荒く星井加々美の後ろに立つ少年を見焦がす。少年はその強烈な視線に耐えきれず情けなく加々美の後ろに隠れようとする素振りを見せた。

和の匂に満ちた伏原相の私室に五人は立っていた。

畳の上には読み終えた本の残骸がずばらに放置してあり、今回の対面が突然である事を物語っている。万年敷布団の横には本の小山が出来ていて、その麓には色々な出版社の名前が書かれた葉がこれまた小山を作っている。部屋の掃除は二日に一回、弟である伏原温が行っているが、彼が彼女の本に触れる事は無い。故にこの様な有様となっているのだった。相は複数の本を区切りで切って代わる代わるに読むという趣向を持っていて、その際には彼女なりの順番に従って本を手取る。その順番を狂わすのは何人たりとも許されないのだった。それ故に埃一つ無い周囲と、見た目残念な文字と紙の山が共存している。これが片付けられるのは客が来る時くらいである。

この部屋の主は客人の帰還の報告を聞くと彼女を私室に招いたのだった。事前に一色朱水に許可を取っていたので対面は直ぐに可能であった。

だが相の部屋の醜態が晒される原因は加々美の帰還にあったので

はなく、そのお土産にあった。彼女は内線でお土産の存在を知らされると歓喜のあまり部屋を飛び出して本館との唯一の繋がりである通路の前に立ち、客人達の到着を首を長くして待った。それに温も従った為に、客人を招き入れる部屋の整頓を失念してしまつたのだつた。

最後の扉が開くのを目撃した相は踊る様に廊下を戻り、客人達を奥へと呼んだ。客人達はいきなりの登場に面食らいながらも、温の丁寧な先導に従つて奥に消えた相を追つたのだつた。

和室であるのにソファが鎮座している部屋に招かれたのは三人であつた。一色朱水の下を離れてここに住み着いた枳、その枳に雇われている星井加々美、そしてその加々美が拾つてきた少年、宇津井一であつた。

「まずは加々美さん、相手の顔に泥を塗りたくつてくれてありがとう」

相は加々美の手を取り感謝の意を述べる。加々美は微かに警戒する様な顔を作つたが直ぐに返しの笑顔となつた。静納へ干渉された経験が加々美に相への警戒心を築いてしまつていた。

「内線で簡単に聞いたけれど今一度詳しくお話を聞かせてね」

「御嬢様、積もる話を立ち話でというのは如何なものかと」

「あらそうね。じゃあ三人とも座つて座つて」

彼女の号令に従つて客人三人はL字型ソファの長い辺に腰を下ろす。そのソファには枕と毛布が置かれている。恐らく睡眠用だろう。床の布団の方にもしっかりと使用されている形跡が見られるので、どちらも使っている様だ。

もう一方の短い辺に伏原姉弟は座つた。短い辺の端から温、相、ここで直角に曲がつて枳、加々美、一の座位置である。

加々美は相の催促を再び受けると口を開いて夜の出来事を報告し

た。そして一がここにいる経緯までもしっかりと説明し、相が一番気になっている点を満たしてあげた。

「という感じでこの子がここにいます」

言葉の最後に加々美は一の後頭部を掴むと挨拶させるように押した。おどおどと目を動かし続けていた一は抵抗する力も無く、加々美の手に屈服して頭を下げた。

「犬神迷いね、後で調べておくわ。それにしてもほんと最高よ。だって一般人よ一般人っ！」

相は一番遠い一をむさぼりの目で射抜く。

彼女にとつて一般人と関われるというのは夢にも思っていない未来であった。一生をこの箱庭で過ごす覚悟をした深き者は、自身に触れるまっさらな人間が存在するとは考えてもいなかった。

一は一度だけ目を合わすと慌てて逸らし、後は自分の足元を注視していた。いきなり見知らぬ世界に投げ出されればこうなってしまうのは仕方のない事だった。人は慣れる生き物だというが慣れる為の心の遊びを今の彼は持ち合わせてはいなかった。と言うのも、これから会う人物達は皆人外だと彼は事前に説明を受けていたからだ。

彼はその言葉に足を掴み取られ続けているのだった。もしその情報を与えられずにここに連れて来られたなら彼も少しは明瞭な反応をしていただろう。何故なら周りの人物の中に容姿が人間と離れている者など皆無なのだから。だがそうしてもらえなかった彼は鍋いっぱいの水に塩一つまみ落とした時の味の変化程の反応しか出来ないのだった。

枳がため息混じりに加々美の拾い物を睨む。

「捨て犬じゃあるまいし。一体誰が養うのよ」

「ああそりゃウチがです。助手として磨こうかなって思ってます」

「助手？ 貴方自分が普通の人間とどれだけ離れてるか自覚あるの

？ 貴方なんかについてこれる者なんてそうそういないわよ」

しかし加々美は一の肩を強く叩くと自信に満ちた笑みを浮かべる。「大丈夫ですよ。例え犬神迷いであっても憑かれ者であることには違いないんですからシャーマンとしての素質はありますって」

しかし柁は訝しがる姿勢を止めず足を組んで不満を顔にした。

「ねえ、提案なんだけれど」

二人のやり取りをそっちのけで一の観察を続けていた相は体を乗り出す。温はそんな姉の態度を横に、さして珍しくないと言わんばかりにコーヒ―を口にしていた。彼女の好奇心から来る興奮行動は常であつたのだ。

「その子、この家で雇えないかしら。一度人間を身近な所に置いてみたかつたのよ」

柁はその提案に渋い顔を作る。諸々の事情を把握している彼女にとつてそれは当たり前だつた。

「例え雇つた所で結局は本館住まいになるはずですよ」

「それでもいいのよ。人間の部下がいる、何て素晴らしい事なの」  
相は手を組み乙女が星々に願うような仕草をした。

「今日だつて本当はこの人間がこちらに入る許可は下りていないのですから。お二人が人間と関わる事を良しとしない『人間』は多いのですよ」

「許可が下りていないのではなく、問い合わせてもいないだけでしょ。それに平気よ。普通の人間に狂わされる程、私達は柔じやないわ」

柁の言葉は相の得意気な面にぶつかつた途端砕け散つて行く。それが面白くない柁はますます顔をしかめる。

「柁様、どうか御嬢様の我儘を聞き流してくださいませんか。それに私だつてこの出会いに期待しているのです。この方が私達にどのような変化を与えてくださるのかとね」

少女少年は鉱石の目を優しく曲げてやんわりと微笑む。柁は温のまさかの同調に頂垂れた。相が援護してくれた温にウインクを投げ

ると彼は目を閉じた。

彼にとって姉の為の行動は喜びであり、その結果生ずる姉からの感謝の意は最大の褒美であった。

「……わかりました。どうぞお好きに。あの方にも仰ればよろしいのでは」

投げ遣り気味に枳は言い捨てた。相はそんな姿を目の前にしても自重せず自分の意見を述べ始める。

「それに加々美さんのお給料から彼の分を捻出する事だつて厳しいのでしょうか？　いくら命がけの仕事だからと言って部下の給料を払つて余りある訳じゃないのだから」

加々美は苦笑いを浮かべながらも相の言葉を肯定する。確かな給料を頂いてはいるが、それは仕事に対する正当な額であり、更にそこから部下の分の給料を出すというと完全に「割に合わない」と言える。貰える額が二人分になる事は隣の枳の態度からして絶対に取り得ないと考えられた。

そもそも所詮はならず者が就く職業、金持ちになれるほどの給料ではない。

「その点こちらには本当に余るくらい金があるのだから。正しい判断だと思つわ。後はあの方が理解を示してくれる事を願うだけね」  
自分が物の様に扱われているのを理解していた一であったが、彼に口を開く勇氣は無かった。声を出せば一斉に目が集まる。それだけは避けたかったのだ。一晩で多くの死に触れた少年は最早自分を助けてくれた加々美以外と関わる事を恐れる様になっていた。

四人の会話を耳から耳に通しながら、彼はずっと家族と友達の影を思い浮かべていた。二度と会えないと覚悟したはずの頭は、最後の甘えとして皆の姿を映し出していたのだった。

長い青髪の少女が映る。彼はその姿をゆっくりと消していった。





賑やかな昼食が終わり、食器洗いをする梧さんのお手伝いをした後に食堂に戻ってみると、そこは物の見事にもぬけの殻だったとさぐすん。

独り寂しく窓際に持つてきた椅子に座って日光浴をしていると、台所から梧さんが出てきた。梧さんは目が合うと一礼してくれたものの、両手に提げたゴミ袋を自身の背後へと隠しながらそのまま食堂を後にしていった。寂しいという心と共に暇だという理由からお手伝いの続きをしようと立ちあがったけれど、彼女は私の足音を聞き取ると再び食堂に戻ってきて手伝いは不要であるという意思表示をした。出端をくじかれた私は必然的にそのまま尻を椅子にくつつける事しかできず日光の温かさとの寒さを味わう。

何もせずただ時を過ごしていると、とたとたという小さな足音が聞こえてきた。その間隔の狭さからそれが誰のものであるかは明確だった。私は椅子ごと体を入口の方へ向けて彼女の登場を待ち構える。

しかし少し様子がおかしかった。

確かに足音の正体は梓ちゃんて正解だったが、彼女は食堂内を覗きこむ形で首から上だけをこちらに見せていた。その目は何所か怒っているのかいじけているのか、そんな子供の目だった。

「梓ちゃん？」

手招きをしてみるが彼女は同じ顔のままじつと私を睨んでいる。一体どうしたのだろうか。

「どうかしたのかな？ こっちにおいでよ」

何度も何度も呼んでみるとやっと足をゆっくりと滑らし始める。

だけど私の目の前に来ても梓ちゃんは頬を膨らませて無言の訴えを続けていた。一体何なのだろうか。

「私何かしちゃったのかな？」

彼女は私の言葉を見殺しにして私の首元へと飛び込んできた。小さな衝撃と共にふわふわした髪の毛が首をくすぐる。痛くはなかったが驚きでしばらく反応が出来なかった。

静かな空気の中に何か特徴的な音が聞こえる。それは何かを嗅ぐ様な鼻の音だった。梓ちゃんが私の首元で何かをかき分けているのだった。

「やっぱり泥土様もだ」

やっぱりとは何の事だろうか。梓ちゃんは素早く離れると再び頬を膨らませる。

「甘い匂い」

彼女はボソと呟いた。成程、梓ちゃんも食べたかったのか。その膨らみきつた柔らかな両頬を指で押し潰すと「ぶー」と空気を漏らした。

「実は生地が余ってるんだけど梓ちゃんも食べる？」

「ほ、ほんとですか！ やったー」

梓ちゃんはぴよぴよと跳んで喜ぶ。使い魔さん達の中で一番食に興味を持っていているらしい梓ちゃんは、廊下に漂う甘い匂いに釣られてきたんだろう。アイシスが全然食欲を示さなかった為に生地之余りが沢山あったのだから何とないタイミングなのだろうか。皆さんも処理に困っていたし勝手に作っても怒られないだろう。

何より梓ちゃんの喜ぶ姿を見ると何でもしてあげたくなくなるってもんさね。ほの温かな食堂に少女の声は橙に響き渡った。

洗ったばかりのホットプレートを再び箱から取り出し電源を入れて加熱を開始する。その間に梓ちゃんは冷蔵庫からポウルに入ったホットケーキの生地を持って来た。ニコニコ顔の梓ちゃんは涎を

零さない様に口を真一文字に閉じながら生地を菜箸で弄くり遊ぶ。そうこうしている間にプレートが適温となったため生地を落とす。私は普通に丸い形を作ったが梓ちゃんは何かしらの動物の形をスプーンで微調整しながら作っていた。

「猫さんかな？」

楕円の上に小さな円が二つ、これだけで特定するのは至難の業であろうけどこういうのは大抵犬か猫か熊だと決まっているので一番それっぽい猫だと思ったのだった。だけど鼻歌交じりな梓ちゃんの思考は斜め上を行っていた。

「ケロケロですよ」

つまり蛙の事だろう。悲しいかな、私は爬虫類両生類を苦手としていて、それを食べ物で形作るというだけで微かな抵抗感を抱いてしまうつまらない者だったりする。なので手が止まってしまった。

敏感な梓ちゃんは私の仕草から感じ取ってしまったのか、少しだけ眉尻を下げてしまう。

私は申し訳無さに自分が作った丸に五つの半島を追加した。

「泥土様のそれは何ですか？」

「亀さんのつもりなんだけどちょっと失敗しちゃったね」

数少ない好意を抱ける爬虫類である亀を作ってみようと思ったが、出来たのは何とも表現し難い物体であった。右手と左足が細長く、その他三か所が丸みを帯びていた。これでは生地の追加投入でも修正は不可能だろう。諦めてそのまま焼こうと決心付けると梓ちゃんが私の袖を引つ張った。どうしたのかと顔を向けると彼女は亀になり損ねた物体の頭部の反対側を指差した。

「尾っぱ忘れてますよ」

「おおさんきゅ」

せめて尻尾くらいは成功させようと綺麗な三角形を梓ちゃんのスプーンを借りてこしらえる。満足のいく物が出来上がると梓ちゃんは拍手をしてくれた。

なんだか梓ちゃんを喜ばせる為にやっているのに自分の方が楽し

んでいるのは気の所為だろうか。

反転は梓ちゃんがやりたいと言ったので私の分もやってもらう事にした。彼女は難なく華麗にひっ繰り返して自慢げにしたり顔を作る。私はその頭を撫でるとくすぐったそうにはにかんだ。

出来た二つの作品をお皿に載せると梓ちゃんは不思議そうに声を上げる。

「お皿分けないんですか？」

「うん。だって私さっきまで食べてたし、これ以上はさすがに無理かな」

主に体重の方面でね。

梓ちゃんはそれが嫌なのか、私の体に巻きついておねだりの甘い声を作る。

「一緒に食べましょうよ。独りはやだです」

そうは言ってもお昼に雰囲気と甘い誘惑に負けて多めに食べてしまった私にとって、目の亀末遂亀は最早毒の域に達していた。

「どうしても……駄目ですか？」

おねだり声の甘ったるさを更に強めて来る梓ちゃんの魔力を辛うじて振り切つてごめんと断つた。

「じゃあ横にいてくれますか？」

「それならお安い御用さね」

親指立てて答えると梓ちゃんは巻きつく手をすりと離してお皿とフォークを手に取った。私はバターとメープルシロップを冷蔵庫から取り出すと梓ちゃんの背中を軽く押しして食堂の方へと誘導した。彼女はそれすら楽しそうに受ける。子供って可愛いなあほんと。

机にお皿を置くと梓ちゃんはここに座れと言わんばかりに椅子を撫でる。私は従つてその椅子に座ると、今度は梓ちゃんがその私の上に座った。急な事で最初は戸惑ったけれど梓ちゃんが気にせずバターを滑らせているので私もその姿勢のままだった。以前由音ちゃんに座つてもらった時と同じで抱きしめたくなる愛しさをにわかに感じる。これが母性本能って言うものなんだろうね。

「美味しい？」

「はい。甘くておいひいでふ」

口いっぱいにケーキを詰め込みながら無理に喋ろうとするから上手く口が動いていないが、むしろそれが梓ちゃんの気持ちを鮮明に表わしていた。

叔母さんがいるから寂しいと感じた事は無かったが、初めて妹が欲しいと感じた。家族、それは私にとって触れる事叶わない領域だった。周りがにぎやかになって初めて、私は親愛を知り家族と言う物を考える様になって来た。手に入らないと分かっただけでも良かった。

「甘い物、好きなの？」

自然に少女の白い髪に伸びていた私の手はその細い流れの間を泳ぐように滑っていた。慈しみ故にの思わずな行為であった。もう少し両親が長生きしていたなら私に妹がいたのだろうか、そんな無意味な考えが浮かんでしまおう。

違う、無意味じゃない。それはとても怖い考えなんだ。

「はい！ チョコとかクッキーとかとか、甘い食べ物大好きです」

私の上で梓ちゃんは美味しいと揺れる。その姿に私はふとある考えを思いつく。

「ねえ、だったら今度お姉さんと一緒に美味しい物食べにいかない？」

年下だから、妹の様だから、色々な「だから」が交わって私はそれを口にした。無性に彼女に美味しい物を食べてもらいたかったんだ。

しかし梓ちゃんはフォークを止めてしまった。

「ごめんなさい。私はこの屋敷から独りで出る事を固く禁じられて

いるんです」

その声色からかなり厳しく言い付けられている事がはかり取れた。

「固く、なんだ」

「はい。姉様達と一緒にでなければいけないんです。これは絶対厳守なんです」

固く禁じる、絶対厳守、それは幼子が口にするにはやや重たい言葉だった。何かあるのだろうか。しかしそれを訊き出すなんて出来やしなかった。

「ほら、あーん」

気まずさにフォークで彼女の口元にケーキの欠片を近づける。それを躊躇い無く口を含む様を見ると私は安堵に肩の力を抜いた。

「なら今度お土産に美味しいお菓子持ってきてあげるね」

梓ちゃんは体を捻って私に再び抱きついてきた。その小さな体を大事に受け止めて、手を再び少女の長い髪に当てる。手入れの行き届いた綺麗な流れをした髪だった。

うとうとと眠りかけていた梓ちゃんを柵ちゃんに届け渡した帰り、とある部屋の前で立ち止まった。部屋のドアが開いていて、そこから二人の声が聞こえていたからだ。

「こんにちは。書道ですか」

覗くとそこでは椒ちゃんと槐さんが筆を半紙に踊らせていた。部屋は和室で、二人の横に敷かれている新聞紙には数々の作品が並べ乾かされていた。彼女達は低い和机の前に正座をしていて、その形なりはいつものメイド服であったが白いエプロンだけは流石に外されていた。

今まさに槐さんが筆を入れる直前だったみたいで、私の声を聞く

と筆の墨汁を硯で絞り取って机に置いた。

「はい。たまにやっているんですよ」

「渋い趣味ですね」

「趣味と言える程立派ではありませんよ。朱水様のお付き合いで始めたので遊びです」

そうは言うけれどもその横にある作品はどう見たって『お遊び』で書いた物とは思えない程の出来だった。まあ素人の私が判定できるかという点では疑問符を捺したいけど。字の川を目で泳ぎ進んでいくと先にはそこはかたなく期待を含ませた椒ちゃんが座っている。ほんと分かり易い子なんだから、もう。

「椒ちゃんも？ すっごい上手だね」

「ありがとうございます。まあ、私は槐姉様の見様見真似ですが」  
こちらは大層綺麗な字をお書きになられる。いやはや、自分の丸文字が情けなくなるよねこれじゃ。

「お暇でしたら一緒にどうですか？」

槐さんはまだ使っていない白い毛の筆を取り出して立ちあがる。

私はチラリと椒ちゃんを覗き見るがその顔は好意的な色を示していた。

「それじゃお言葉に甘えて。でもド素人なので教えて頂けると嬉しいです」

「ええそりゃ手取り足取り」

槐さんはにこやかに言うが私はその微笑で昨夜のお風呂での彼女から受けた行為を思い出す。私を座らせようとする彼女に腕を掴まれた時には思わず体が跳ねる。

「あら、酷く冷たい。寂しい反応されるのですね」

槐さんは私がどうして今の態度を取ったか十分理解していて、それでいて知らないふりを決め込んでいた。その証拠に彼女は同じ顔を作り続けている。

椒ちゃんが不思議そうにこちらを窺っているので迂闊な事は口に出せず、ジト目で槐さんに抗議するが彼女は手を離さない。むしろ



更に私の背にまで手を回しやや強めに座らせようとしてきた。私だつて元々筆を握るのはやぶさかでは無かったので押されるままに膝を折る。

「では朱水様が使っていた手ならい本をお手本にして書いてみましょうか」

目の前に随分と古めかしい本が差し出される。墨による点がいたる所に出来ていた。

「これは朱水様が小学生の頃に使用していた物なのだそうです。この頃は習い事をしていられたんですね」

口調から察するに使い魔さん達は朱水が小学生の頃にはこの屋敷にはいなかったらしい。

「ではこのページの文字から一緒に書いていきましょうか。書くだけでも心静まりますよ」

そう言つて今度は背中に手だけでなく体を密着させてきた。彼女の意図が分かるので逃げるわけにもいかずただ大人しく従う。多分今私は酷く顔が赤いはずで、椒ちゃんと目を合わせる事すら出来なんでいる。何故か後ろめたかった。

手の力を緩めると言われてその通りにすると、槐さんは私の手越しに握つた筆をすらすらと教本通りに滑らせる。良く分からないけどその文字は先程まで彼女が書いていたそれとは違つて、本当に「教科書通り」に書かれた物だった。趣味で書く文字はやはり人それぞれに癖や趣向が現れているのだろう。

「感覚掴めましたか？」

半紙を十枚ほど消費した後には彼女は私の手を開放して横に座り直した。正直に言うとうちやうち書いて書くかは分かつたのだが、いざやってみるとなると間違いなくイマイチさんしかでき上がらない自信がある。うん、駄目な方向に。

椒ちゃんは寂しいのか、槐さんが私から離れると膝歩きですると私の横へと向かつてきた。

「止め跳ねに気をつければ平気ですよ」

椒ちゃんはアドバイスを交せて私が今筆を落とそうとしている半紙を覗きこむ。すると椒ちゃんに見られている所為で、私の中にやる気と同時に怖気が生まれてしまった。下手な文字書いて椒ちゃんに笑われたらどうしよう。

半紙を視界の中心に捉えながらも、緊張で手が止まってしまった私を二人が不思議そうに眺めているのが容易に想像できる。その想像が余計に私を固めてしまっていた。

「椒、ちよつとお茶を用意してもらって来て。櫛によ」

どうやら槐さんは気付いてくれた様で椒ちゃんを私から離してくれた。ウインクしてらって事は確かだろう。

椒ちゃんはほんの少しつまらなそうに唇を尖らせるが、しぶしぶと言った仕草を見せる事も無く、機敏に動いて廊下へと出ていってしまった。

「ありがとうございます。横で覗かれると緊張しちゃって」

「初めはそうですね。私も朱水様と最初にした時は朱水様が余所見をしている内に書いた半紙をぐしゃぐしゃにしたものです」

にこりと微笑む槐さんはもう完全に女神様だった。何もかも知っているかの如き年長の余裕が滲み出ている、凄く頼れるお姉さんに見えた。

「ささ、今の内にどうぞ。あ、私は教官なんですから勿論覗かせてもらいますよ」

まあ槐さんになら平気だろう。それに誰かが直してくれないと永遠に上手くなれないもんね。

今さつき触れた書の感触を頼りに筆を滑らせる。墨汁は二の足を踏んでくれない。紙に触ればそのまま白に跳び移ってしまう。失敗と分かっててもそれを直す事は出来ないのだ。なので慎重に慎重を重ねゆつくりと筆を動かした。

「……どうでしょうか」

「あら結構お上手じゃないですか」

よかった……思っていたよりも形になっているじゃないか。小さ

な拍手が槐さんの方角から聞こえる。

「これなら私が教える必要無さそうですね」

「え、ちよっとそれはいきなり過ぎでは」

「いえいえ、止め跳ねが出来て手ならい本通りに筆を運ぶ事が出来るなら私のアドバイスなんて不要ですよ。自信を持つてくださいな」

そうは言ってもですね……。しかし槐さんは本気だったみたいで自分の筆を持つと半紙を一枚自分の前に敷いてしまった。こうなったら頑張るっきゃないと、気合いを入れて目と手を必死に動かした。せめて張りぼてでもまともに見えたら良いやとの思いで。

椒ちゃんが戻るまでには結構な時間があつた。槐さんはこの時間柗ちゃんが掃除をしている事を把握した上であんな事を言ったんだろう。柗ちゃんを指名していなかったら椒ちゃん自身がお茶を淹れてしまったため数分で帰ってきてしまうはずだが、柗ちゃんを淹れるとなるとまず柗ちゃんを捜す所から始まるのだった。そしてその結果が二十分以上の所要時間だった。

お茶を盆にて運んで来た椒ちゃんは、私の横によつきり生えた紙の山に驚く。自分でも数多く描けば上手くなれるものでは無いとは頭では分かっていた。そう甘くないってね。でも書いたという結果が目に見えていると少しだけ上手くなっていくという感覚があり、どうしても手が動き続けてしまったのだった。ほら、努力って言葉があるじゃない？ あれあれ。

椒ちゃんは墨汁まみれの私の右手を優しく濡れ布巾で拭いてくれた。しかしそんな物ではやはり落ちないので、諦めてそのままの手で受け取ったお茶を飲む。やはり柗ちゃんが淹れた物と分かる味だった。一息ついていている私の横で椒ちゃんは作品と呼ぶにはお粗末な物を一枚一枚じっくりと眺めていた。

「どうですか先生」

「そんな。教えられる程私自身腕が良いわけじゃないです。そう言う事なら槐姉様にお願ひしてくださいな」

全てを見終わると綺麗に整えて再び山へと戻す。私はその山を再度手に取り、先程から自分の世界に入っている槐さんの横へと立つ。槐さんは集中していたがすっかり周りは見えていたのか、私が向かい始めた時には既に顔を上げ、筆を置いていた。

「添削ですか？ 朱墨が欲しい所ですね」

そう冗談めきながら半紙の束を受け取ると、こちらも一つ一つ丁寧に目を滑らせていった。始終無言だったので内心ドキドキしたが彼女が半紙を再び厚くすると微笑んだので、それだけで私は握りしめていた手の力を緩められた。

「良いじゃないですか。良かったらこれからも私達と一緒にやりましょうよ。椒も喜びますよ。ねえ？」

槐さんが同意を求める様に椒ちゃんに話を振るが椒ちゃんはツンとそっぽを向き、顔をこちらに向けようとはしてくれなかった。槐さんも返事をさほど期待していなかったのか、筆を持つと再び作品を生み出していった。私は興味があつたのでその場に居残り黒を追ってみた。

「今は一文字の作品をやっているんですか？」

槐さんの横にある半紙の大半は漢字一文字の作品ばかりだった。「そうですね。折角だからと私も基本に戻ってみようかと思いついて」

基本、ねえ。そこにある文字達が「基本の形」ならば私の字の何と奇形な事か。自分の字の拙さが恥ずかしいよほんと。

それから槐さんは横にいる私を気にせずすらすらと作品を生産していった。

「そう言えば恋は下心、愛は真心と言いますね」

恋の一文字を書きながら槐さんはポツリと呟いた。

「どう思いますか？」

「どう、ですか」

「あら、尼土様くらいの子ならこの手のお話が好きだと思ってい

たのですけれど外れちゃいましたか」

いや間違つては無いと思います。ただ私が消極的ただけなんで。

「そうですね。その言葉って要は恋よりも愛の方が高尚だって言いたいんですね？」

「額面通り受け取ればそうなりますね」

「私は恋の方が何と無く上に思ってますよ」

こういう話を他人とするのは滅多にないのでかなり恥ずかしいが、槐さんが持つ優しい雰囲気呑まれてしまい口が動いてしまっていた。因みにどれくらいこういった話に免疫が無いかと言つと、『恋バナ』という略語を口にする事すら恥ずかしいという残念な子です。『それはどうしてですか？』

槐さんは筆を止めて静かな眼差しを私に向ける。ついでに後頭部から熱い視線が私に降りかかっているのもしっかり感じていたりする。

「えつとですね、『愛』って沢山あるじゃないですか」

「そうですね。親愛、親子愛、多くの人が指す意味であるう恋愛と、沢山あります」

「つまり一人から放射状に愛は飛び出しているんですよ」

槐さんは私の言葉を絵にしようとしたのか、半紙に愛の文字を書いてから丸で囲い、その囲いから線を放射状に伸ばした。いが栗みたいな感じかな。

「一方で恋って言うのはやっぱり好きな人にだけ伸びる物じゃないですか」

「確かにそうですね。あら不思議、こう見ると確かに恋の方が一途って感じで素敵です」

いが栗の横に、一本線が生えた恋と言う文字が並ぶ。どうやら私の言わんとしている事が伝わった様で、槐さんはうんうんと頷いてくれた。しかし後ろから異を唱える声上がる。

「そもそも優劣を決める事自体がおかしいと思います」

それは何かに駆り立てられている椒ちゃんだった。焦りを隠し切

れていない彼女は興奮気味に声を上げる。

「恋も愛も同等です。そこに優劣をつける必要なんてありません」

私は椒ちゃんが無に反応しているのかが分からず、興奮気味の彼女を視界に捉える事しかできなかった。

「そうね」

だけれども槐さんは流石で、椒ちゃんの心の中にある真意を汲み取ったみたいだった。立ちあがって椒ちゃんの前にはゆっくりと膝を下ろすと、彼女の頭を優しく抱いた。

「ごめんなさいおかしな話をしてしまつて」

「……私こそごめんなさいです」

「そう、ならどっちもどっちだったって事で」

離れた後に槐さんが頭を撫でると椒ちゃんは嬉しそうに目をつぶった。

椒ちゃんの真意が理解できない私はただその行為を外野から目にするだけだった。やはり私には踏み込めない領域があるのだろうか。少し、悲しい。

「少し休憩しましょうか」

槐さんは振り返ってそう言った。私が頷くと彼女は部屋の奥にある戸棚に歩み寄り、中から何かの缶を取り出した。

「日本茶にクッキーと言うのは少しおかしいですが」

それは何とも高そうな菓子箱に入ったクッキーだった。中のクッキーも金色と間違える程に輝いていてとっても美味しそう。在り来りに言うなら宝石の様だった。

「朱水様が何時来られても平気な様に用意しているんです」

そっか、使い魔さん達は基本的に自ら食べ物をお口に入れる事は無いんだもんね。梓ちゃんは例外だけだ。

「その前に泥土様は手を洗わなきゃいけませんね」

「うわ、これすっごく美味しいです」

ホットケーキを何枚も平らげてしまった事を無理やり忘れて目の間に並べられたクッキーを口に含む。上品な甘さという言葉が至極簡単に理解できる味だった。

「御主人様が好きな銘柄なんですよ」

椒ちゃんも美味しそうに齧っている。うんうん可愛い子が美味しそうに物を食べているのを見るのは幸せだね。

そんなおじさんな発想をしていると槐さんがクッキーに手をつけていない事に気付く。ダイエットと言うわけではないだろう。

……あや、今自分の考えに傷ついたよ。

「食べないんですか？」

槐さんは私の問いに困った様に微笑んで答えた。

「御存知の通り私達は物を食べる必要はありません」

その一言で椒ちゃんの手が止まったのは当然だった。同じ使い魔さん、しかも姉の言葉だもの。

「あら、いいのよ椒は食べて。貴方は尼土様と一緒に生活をしているのだから物を食べる事を普通と思いなさい」

椒ちゃんは気まずそうにだが再び手に持っていたクッキーを齧る。しかしそれを食べ終えても新しいクッキーに手を伸ばす事は無かった。

「私だって朱水様の前ではしっかり食べるわ。その役割を椒、貴方が尼土様の前で担いなさい。一緒に食事できる人がいるというのは嬉しい事なのよ」

椒ちゃんは姿勢を正してコクコクと頷く。従者とはどうあるべきなのか、そんな話なのかな。ちょっと仕事の様に聞こえておかしいと感じてしまうけれども。

「そうだ、良かったら皆さんの事について教えてくれませんか？」

「皆さん、ですか。それはどういった意味で？」

槐さんは私が言葉を省いてしまった所為で誤解してしまっているみたいだ。きつと使い魔さん達個々の個人情報を教えて欲しいという意味に捉えてしまったのだろう。

「皆さんと言うか使い魔さん達、つまり『鬼神城』と言うモノを知りたいんです。槐さんなら詳しいかなって思ってます」

それならば主である朱水に訊けばいいとの意見もあるだろうけど、朱水だと言葉に煙を撒いてしまいそうなんだよね。どうやら私に隠したい所がある様で常に何所か中心をずらした解答しかくれなかつたんだ。なので本人に聞いた方が実は詳しい情報が聞けるかもと思つたので、長女である槐さんに問うたのだった。

「そういつた意味だったのですね。……そうですね、朱水様も尼土様が訊ねてこられた時は話してしまっても良いと仰っていたので頃合なのかもしれませぬね」

うわ、完全に読まれていたのか。流石朱水、何枚も上手だった。

「椒、貴方ももしかしたら知らない所があるかもしれないからここに来なさいな」

椒ちゃんは呼ばれた様にちょこんと私の横に座り、とろけさせる匂いを私に振り撒いた。

槐さんはコホンと咳払いを一度すると私の目を真つ直ぐ射抜いて言葉を紡ぎ出した。

私達は魔ではありません。勿論人でもありません。この世に存在する者で私達と同等の位置に存在する者はいないので。何故なら私達は鬼神城という別個の種族、存在なのです。そう、鬼神城と言う名の器に入った存在ですね。

はい？ ええ、器です。私達を指す『鬼神城』という言葉は私達の人格ではなくこの肉体、器を指しているのです。魔王の家系に残る四宝の一つである鬼神城と言うのは、主を守る為の城壁となる人形なんです。ですので鬼神『城』なんですね。



では私達、つまり体の中にいるこの人格は誰なのかという話をしますね。実は私達はかつて世に存在していた有力な魔の生まれ変わりなのです。正確には生まれ変わりとは違うのですけどそう言った方が分かりやすいかと。

生まれ変わりとは言いましたが過去の記憶は皆微かに覚えている様です。私も確かにこの目では見たはずの無い情景を覚えていきますと妹達も同じでしょう。

椒、そんな自慢げに言わないで頂戴な。かつての私がそうであっても今の私はただの従者なのよ。

……はい、そうなんです。椒が漏らしたように、確かに私は姉妹の中で唯一魔王と呼ばれた存在の生まれ変わりです。いえいえ、そんな大事ではありませんよ。魔王と言えど、かつての時代では玉座を温めるだけの存在であり、末期にはただのお飾りに過ぎませんでした。私の前身みたいに力無くともその立場に居座ることだって出来たくらいです。

椒、貴方が私の事を思ってそう言ってくれるのは嬉しいけれど、これは事実なのだから良いのよ。ふふ、貴方は本当に優しい子ね。

はあ、魔王と言うとそんな印象が付きまとうのですか。そうですね、確かに尼土様が仰る様な、力で全てをねじ伏せる事で頂点に辿り着いた者もいました。しかしそれは魔の短い歴史の中のごく一部の時期です。ほとんどの魔王は血で選ばれましたから。

魔と言う物の本質は御存知でしょうか？ ええ、本質です。はいそうですね、人間を減らす為に作られた存在であると言われている。朱水様から聞かれたのですね。昔の魔の本能は権力よりも破壊に向いていました。これが幸いして権力争いが少なかった理由とされています。

あら話が脱線してしまいましたね。ええと、何所まで話したのでしたっけ？ 確か魔の生まれ変わりだという所は説明しましたよね。そうですね、では続けますね。

私達の名前を漢字で書くかどうかという文字かご存知ですか？ そう

ですね、この様に全てに木偏が付いています。これは名付け親である朱水様の趣味と言うわけではなく、風習なのです。ですので朱水様の前に鬼神城を使用した方も、その鬼神城達に私達の様な名前をつけたと記されています。どうして木偏なのか、ですか？ それは私達の本来の姿を知れば納得されるでしょう。しかし私達がある場所はこの屋敷の中で特に嚴重に守られている場所です。泥土様でも入る事は許されないのでしょう。

簡単に説明すると樹木なのです。はい、樹木です。木、です。

意外ですか？ しかしこの国では昔から大木には神が宿ると言うじゃないですか。それと似たものです。もともと、私達何ぞを神と同等に扱うなんて酷く凶々しい話ですが。

ふふ、椒が嫌そうな顔をしているので進めましょうか。

私達の本来の姿は先程言った通り樹木なのです。種類ですか？

榊さかきの一種です。今の時代に生えている榊とは少し違っていて葉色は紫なのですけど。この紫葉の唯一の榊を魔は鬼樹と呼称しています。ああ、樹木と言いましたが実際の姿はまだ幼木と言える程の小さい木です。そうですね、土から出ている部分は泥土様の掌より少し大きい程の長さです。幹から枝が生えていて、その枝に七枚の紫色の葉が生えています。

もうお分かりですね。そう、その葉こそが私達なのです。

伝承では鬼神城の母体、この榊は育つ事も枯れる事も無く、また折る事が出来ないとされています。その為私達には死と言う概念がありません。この体が破損してしまっても使用者、私達だと朱水様ですね、朱水様が再びこの鬼樹を用いて召喚を行うと一切身体的損傷を受けていない状態で復活する事が出来ます。それまでは死体としてこの世に残留していますけど。

椒が言っていた内容と違いますか？ ええ、一体何所ら辺がでしょうか。成程、確かに母体と言う表現が統一されていませんね。正確な母体と言うと確かに椒の言う通り地球なのででしょうか。でしたら鬼樹の事を母樹と呼びましょうか。地球が母体、鬼樹と呼ばれて

いる紫色の葉を生やす榊が母樹ですね。

話を最初に戻しましょう。鬼神城と言う存在についてですね。今まで述べてきた内容の中には一度も鬼神城と言う名を持つ物体は出てきませんでした。実はですね、鬼神城と言うのはこの霊術その物を指しているのです。

ええ、確かに最初に言った内容と矛盾していますね。ですがこれで正解なのです。本来は鬼神城と言う単語はこの霊術全体を指したのですが、『鬼神城』と言う響きが何所か物の名前を表わしている様に聞こえる為この肉体を鬼神城と呼ぶ様になってしまったのです。お分かり頂けたみたいで幸いです。これで鬼神城という存在の説明は粗方できたでしょうか。何か気にある点などありますか？

どうやって生まれてくるか、ですか。私は妹達の受肉の瞬間に立ち会っていますのでお教えできますよ。朱水様が鬼樹を土から抜き取り、特別な清水を溜めた大釜に浮かべて呪文を唱えるとその刹那水面が目映く光り、妹達の体が浮かび上がってきました。いえ、一人ずつです。大釜と言っても人が一人入るくらい大きさです。その際には既に服は着ていましたね。はい、私達は生まれた時からこの服を着ていたのです。私達の容姿は朱水様の思いによって描かれていますので、この服は朱水様が造形したと言えますね。

他に何かありますか？ 戻り紐、ですか。良く御存知で。ああ椒から渡されたのですね。そうですね、仰る通りあれはこの地球と私達を繋いでいた臍の緒です。ですが生まれた時は臍についていたのではなく、歯で噛んでいました。

鬼神城が戻り紐に力を込めるとたちまち本人がこの世から消えてなくなります。そして辿り着くのが私達が生まれた清水の大釜です。召喚と違うのは使用者の呪文が要らないという点でしょうか。その代わり肉体の損傷などはそのままです。

泥土様が使おうとどうなるか、ですか。それは実は分からないのです。あら、椒も同じ答えを？ そうですね、実際に行ってみないと分からないのですよ。

他には有りますか？ 椒の方は平気？ そう、分かりました。

「長い話で退屈でしたでしょう」

「そんな。凄く面白かったです」

普段触れている彼女達がそんなすごい存在だったなんて。話を聞いているだけで私はドキドキしていた。冒険譚とはまた一つ違う、しかし続きを聞きたくて前のめりになってしまっ、そんなお話だった。きつとそれは目の前にしているからなのだろう。

「そろそろお仕事に戻りましょうか、結構な時間が経ちましたから時計を見ると確かに思っていた以上に時間が過ぎていた。」

「そうですね。今日は面白いお話をして頂いてありがとうございます。習字ももうちょっとやってみたいのでまた来ても良いですか？」

槐さんは勿論ですと快諾してくれた。椒ちゃんにもよろしくねと挨拶しようとするが、彼女の何所か遠慮がちな視線にぶつかり舌が止まる。どうしたのだろうか。しばらく顔を合わせていると椒ちゃんは何かを諦めたように肩を丸めた。

「有様、その……そんなに食べて平気でしたか？」

何の事かと始め疑問に思ったが、彼女が指差す辺りを見るとクッキーがごっそりと減った缶箱がもっと食べてと言いたげにその体を輝かしていた。

「おやつなんていか……」

「不可能です！」

「ひゃんっ」

部屋に戻って月曜日に提出しなければならぬ宿題を持って来た事を思い出した私は、再び忘れてしまわぬ内に手をつけ出した。暫らく数字と格闘しているとコンコンという小さなノックと共に権さんが顔を見せた。その手にはお盆があり、どうやらおやつを持ってきてくれたみたいだった。だけど、今甘い物を口に入れるわけにはいかないんだ……いかにいんだっ！

開口瞬後に否定された権さんはいじけた風にしながらも私の横に来てくれた。

「折角美味しい物作って来たんですけどね〜」

ちらちらと私の視界を遮るようにお盆を動かす。その上には確かに美味しそうなモンブランケーキが載っていた。よくある黄色い物じゃなくて白くてふわふわしたとっても美味しそうな物だった。

しかし……食べる事は絶対に許されない。うん。

「はあ、やんごとない乙女の事情があるんですね。悩み多き乙女は素敵ですわ〜。諦めて私だけで頂きましょうか」

ベッド横にある一脚テーブルの上に二つのケーキを置いて彼女は、いそいそと紅茶を用意しはじめた。既に抽出は終わっていたのでティーポットからカップへ移すだけであったが、その琥珀色の紅茶から立ち上る爽やかな香りが私を釘付けにした。

「凄くいい香りですね」

「何の香りだと思えますか？」

「多分ですけど、ジャスミンですか？」

「正解ですよ〜。そこにほんのちよっぴりのレモンともう一つ隠し味が入ってます」

隠し味が何なのかと訊いてみたが権さんはニタリとするだけで答えしてくれなかった。

「せめて紅茶だけは飲んでくださいな。でないところに来た意味が

ありませんもの」

紅茶か……多分紅茶ってカロリー全然ないよね？ だってただの植物の抽出液だよ？ そう言っただけで自分に言い聞かせてから彼女に飲むと伝える。

「はいどうぞ」

「頂きます」

手渡された紅茶の香りを鼻を近づけて楽しむ。成程、確かに少しだけレモンの香りもしている。榎さんが再度一脚テーブルに戻り自分の分の紅茶を淹れている間に、私は少しだけ口をつける。しかし午前に飲んだ櫛ちゃんの緑茶を基準に考えていたので、口内に侵入してきた茶色の熱さに目をひんむいてしまう。

「あぢっ、あぢっ」

「あらあら、冷まさずに飲まれてしまったのですか。このポットは見た目こんなですが中は魔法瓶になっていて高温が長時間保てるんですよ」

榎さんが言うには紅茶の香りをより楽しめるように超高温のままでも結構低い温度だったらしく、あの緑茶と同じ感覚でこの紅茶を口に入れると火傷物らしい。舌先がまだひりひりしている。

「ケーキを食べると痛さ治るかもしれませぬよ。軟膏薬みたいに舌に塗りたくるんですよ」

榎さんはお手製のケーキを食べて欲しい為か再び強引な結び付けで勧誘を開始した。例え火傷しても私は糖分脂肪分を口にするわけにはいかんのですよ榎さんや。

「むう、仕方ありませんねえ。ちよつと舌を見せてくださいな」

言われた通りに舌を見せる。榎さんは立ったまま息が私にかかる程に近くで私の舌を観察する。私の顎を軽く支えて慈愛の顔を浮かべた。上から覗かれるという状況で返し見る榎さんは何だかとても大人で、その細まった目の魅力に惚れ酔ってしまう。

「いけませんね……そんな蕩けた目をされてしまうと無性に襲いた

くなつちやいますよ」

「駄目……です」

辛うじて出た言葉だった。

権さんは唇端を上げると私を抱きしめた。

「ああん、可愛いですね。朱水様の恋人でなかったら私が頂いていたのに。残念でなりません。血涙が出ちやいます、よよよ」

……いけない、今のはほんと危なかった。権さんがおどけた反応をしてくれなかったらどうなっていたか。私って年上に弱いのかも…… 朱水も同級生なのにお姉さんっぽいもんね。

権さんは私を開放すると少しだけ真剣の色を混じらせる。

「尼土様、今みたいな顔は朱水様の前以外ではやつちやいけませんよ。御自分の容姿を御理解くださいな。あんな顔されたら性別問わず落としてしまいますもの」

彼女のそれは凄く大人な意見だった。私くらいの高校生がする様な考え方では無く、色恋を何度も通り抜けてきた者の捉え方だった。「それに私は自分が可愛いという事を自覚している女の子って素晴らしいと思いますよ」

小悪魔的って言うんでしたっけ、権さんは小首を傾げながらそう言った。さっきの発言の後ではその仕草ですら計算づくされた行為なのかと思ってしまう。

未だ大きな鼓動を続けている心臓を隠す為に一度権さんから離れたかったが、そんな事を言ってしまうと権さんの事だ、きつと寂しいと言いながら抱きついてくるだろう。もう権さんの行動は大体見抜けるようになって来ていた。今抱きつかれたら心臓が破裂してしまいそうなのでそれだけは避けなくてはいけない。

「えっと、今宿題をしているんですよ」

「あらあらそうだったのですね。なら続けてくださいな」

宿題と言う単語は思っていた以上に効果的で彼女はあっさりと引き下がってくれた。

「 嬢さんは紅茶の香りを楽しみながらベッドに座り込む。とりあえず距離の確保成功だ。」

彼女はシャープペンシルの芯一本分の間ずっとベッドを温めていた。最初は見られていたという自覚の所為で上手く集中できなかったが、次第に彼女と言う異分子を柔らかに捉える事ができてきた。それにしても嬢さんは勉強している私の横にいて何が楽しいのだろうか。ずっと不思議な笑みを浮かべているのだった。毛先が内側に向かっている赤紫色のショートヘアは彼女の明るい印象を更に強めている。そんな人に温かい視線を送られているというのは意外と心地よいものだった。

「嬢さんって」

私が口を開くと彼女は嬉しそうに立ち上がった。

「はい何でしょう」

軽い気持ちで口にしたのにこんな大仰にされるとは思わず、こちらも手を止めざるを得なかった。まあいいや、また休憩って事で。

「嬢さんって一人だけ髪が短いですよね」

「そうですね。槐も妹達も皆結構長いです」

真正面から見ると梧さんと椒ちゃんも短そうに見えるけど、二人とも後ろ髪は結構長いんだよね。使い魔さん達の中で肩に届かないのは唯一嬢さんだけだった。

「その髪って切られたんですか？」

「いえいえ。朱水様から授かったこの姿をいじる気はありませんよ」。始めからこの長さだったんです」

ふむふむ、朱水はショートもイける、っと。脳内メモ帳に書き込んでおこう。

「他の姉妹と違っつて事で結構気に入っています。ほら、七人もいと個性って欲しくなるじゃないですか」

そう言う物なのかなやっぱ。それにしても嬢さんが自然に『七人』と言った事に少しだけ安堵した。



「尼土様はかなり長いですよ。お手入れなど大変なのは？」  
「うーん、一応ちよつとずつ切って伸ばしてますけど後は普通ですよ」

伸ばしっ放しだと毛先が残念な事になっちゃうから、ちよつとずつ切って伸ばした結果が今の髪だった。幸い私は髪が伸びやすい体質らしく、普通の人よりも早くベリーロングと呼ばれる程の長さに辿り着いた。

「少し触っても良いですか？」

「どうぞどうぞ」

興味深げに権さんは私の毛先を手の甲で持ち上げてふわふわと弄ぶ。

「結構重いんですね」

やはりこれくらいの長さになってしまつと無視できない重さだった。

「どうしてこんなに伸ばしたんですか？」

「どうしてかですか。なんか理由があつた気がするんですけどね」  
たしか大きな理由があつたはずだった。

湿っぽい理由が

他人に言えない理由が

叔母さんの顔がちらりと浮かぶ

「覚えてないですね。そんな大きな理由じゃなかったはずですよ」

「そうなのですか。でもここまで伸ばすのって覚悟必要だったんじゃないんですか？」

「ですね。普通に生活しているだけで髪の毛が邪魔になる事があるんですよ」

でも気に入っているから絶対に切らないけど。

「素敵ですね」

「懽さんは気持ちよさそうに私の髪を指で梳く。冷たい触感が楽しいらしい。」

「所で今は何の教科をやっているんです？」

「懽さんは髪を指でしっかり保持しながら私の肩に顎を優しく載せて覗きこんだ。首筋にピタリと触れた所が人肌温くてこそばゆかった。」

「……………鳥肌が立ちますね」

一瞬で声のトーンが落ちる。

「数学苦手ですか？」

「見たくもないです。ああ……………朱水様との勉強会が思い出されます」  
地獄でした、そう辛そうにため息をつく。曰く、最低限の知識として高校受験レベルの知識を知っておいて欲しいという理由で槐さんから懽さんまでの四人と朱水とで勉強会が開かれたらしい。一応彼女が言う地獄の日々は終わりを告げたが、数式アレルギーと言う後遺症を罹患してしまったのだそうだ。

「嗚呼、蕁麻疹が」

「そんな大げさな」

しかし彼女は本当に腕を掻き始めてしまった。……………本当に肉体的に症状が出ているのだろうか。一步一步後ろに下がってベッドに辿り着くと一脚テーブルにカップを置いてベッドに倒れ込む。そしてこちらに薄らと顔を向けるとわざとらしく言う。

「ああ、これは看病が必要ですよ。心が痛いですよ」

この人は構って欲しくてこういう事を分かりやすくやってるんだろうなあ。なんだかほんと可愛い人だ。私はまだまだ途中のノートを閉じてうつ伏せている彼女の横に座る。すると懽さんは私を押し倒して覆い被さって来た。早業過ぎて私は抵抗する事叶わずそのまま両腕を抑えつけられる。

「何するんですか」

と言っても懽さんだからじゃれただけだろうと分かっているの  
で強くは当たらないでおいた。懽さんはまたニンマリとすると悪戯

の打ち合わせでもするかのようにコソコソと喋る。

「尼土様はこういうのは好みですか？」

彼女の目が一瞬異色に光ったと思うと全てがぐにやりと捻じれ始めた。既視感と共に微かな吐き気がこみ上げる。

「これって……」

「そうです。以前にも見せた力ですね」

目の前の全てが白に変わる。世界が眩しくて私は強く瞼を閉じた。

「もう目を開けても平気なはずですよ」

優しい声が上がから降りかかる。

「これってやっぱり権さんの力なんですね」

声に従って瞼を退けると目の前には確かに権さんがいた。

「そうです。私の力は幻覚を相手に与えるというものです。そしてその幻覚は私も共有する事ができます」

権さんは私に覆いかぶさっていたままだった。上から声がしたと知覚したので、幻影の世界に居ても三半規管は正確であるみたいだ。顔を左右に動かして辺りをよく見るとどうやら私達は海の中にいる様だった。柔らかいベッドは消えていて代わりに私達は仄かに輝く砂の上で重なっていた。幻覚だからなのか、空気も吸えるし、会話だってできる。

「こんな普通の生活では体験できませんよ」

「でしょう……ねえ」

その幻想的な世界に息が漏れる。空気は吸えるのに、漏れた息は泡となって上へと昇って行った。泳ぐ小さな魚の群に手を伸ばすが届く前に散り散りに分かれてしまう。しばらく同じ事を繰り返しているると細い指が私の視界を遮る。

「私の事も見てくださいな」

権さんはそのまま私の右頬と海底の砂の間に手を差し入れ顔を向き合わず。温もりの籠った瞳と、その背後に映る水面の輝きが私を照らす。細い指が私の頬をなでるとゾクリと体が縮まった。だけど決して不快では無かった。むしろ……

「その顔はやっては駄目と先程申しましたでしょう。いけない方です、ふふ」

頬から唇へと指は流れる。

「このグロスは泥土様の好みの色なんですか？」

違いますよね、彼女は小悪魔的に微笑む。そっか、やっぱり権さんはこういうの上手なんだ。

「朱水様の好みですよねこの色って。ふふ、いじらしい子ですね」

私は普段は色つきグロスなんてつけないけれど、朱水の屋敷に泊まるというので持ってきていたのをつけてみたのだった。朱水がいない今で周りの反応を試したかったのかもしれない。自分なりに冒險した結構発色が強いグロスで、口紅なんてまだまだつけられない私でも最大限のアイテムだった。

「やっぱり私には似合っていないませんか？」

「ふふ、それは朱水様の答えを待つてみてはどうでしょうか」

うう、いきなり朱水の感想だなんて怖すぎる。似合っていないなんて言われたら死んでしまいそうだ。あの人そういう所はつきり言う人だから。

「お願いします権様あ」

「あらあら。そうですね、なら私のお願いを一度だけ聞いてくれますか？」

すごく優しい口調でどぎつい交換条件を突き付けられた。うっかり安直に頷きそうになってしまう声色だったけど辛うじて思いとどまれた自分を褒めてあげたい。鈍く光るその目を見る限り安請け合いは止めるべきだ……と言いたいけど、恐らく一番そういった方面に強いであろう権さんの感想がもらえるなら多少の犠牲は仕方ないのかもしれない。

「ただどこちらもただで頷くわけじゃない。」

「お願いって何ですか？ 事前に教えてください」

「あ、先に聞いちゃいます？」

それじゃ面白くないじゃないですか、権さんはそんな恐ろしい

事をのたまった。このお姉さんは一体何をさせる気だったのだろうか。

「聞きますよそりゃ」

「そうですね、私が作った衣装を着てくれませんか？」

「衣装、ですか」

何だ思っていたよりも簡単な……つと危ない、朱水と言う身近な良い例を忘れていたよ。服だから布があるとは限らないだった。布が極端に少ない服とかあるんだよね、はは……。

「肌が少ない奴なら」

「あはは、そんな感じの代物じゃないですよ。むしろ肌なんて全然見えません」

「全然、ですか。一体どんな感じのですか？」

「椒ちゃんの私服用に作っていたパーツがあるんで、それを尼土様のサイズに仕立てなおそうかなって思いましたね」

パーツ？ 権さんが言わんとしている物が何なのか全く理解できなかった。そもそも私は椒ちゃんの私服を見た事が無いんだよね。

あの子はメイド服に誇りを持っていて、どんな時でもあの服を着ているのだから。この前の湖でのピクニックでも一人だけあの服のままだったくらいだ。朱水達は一切椒ちゃんの格好について触れなかつたけど、やはり周りの人達は奇異の視線を向けていたもんだ。

「まあ完成したらお知らせしますよ。ではどうします？」

「のり……ます。似合いますか？ それとも違う色が良いですかね？」

権さんは私を抱き起こして互いの顔が水平に並ぶ状態にした。水中にいなながら水平と言うのもおかしな表現だけど。

「大丈夫ですよ、似合ってます。ただ普段の尼土様を知っているとその差の大きさから違和感を覚えてしまうかもしれませんね」

普段まともに化粧してないとそんな風に思われるんですね。良い勉強になったね、うん。

「後は朱水様に気付く敏感さがあるかですわ。あの方結構そうい

った方面に鈍い時がありますので」

そうなのか、ますます不安になって来たよ。

「グロスを塗っているというのは気付いても、その色の意味を察するかはちよつと保証できません。折角の尼土様の乙女心ですのに」

「いや、そんな」

そんな言い方だとこつちが逆に恥ずかしくなりますって。

「もし反応してもらえなかったら私の所に来てくださいな。その時は私がいっぱいいっぱい褒めて、甘えさせてあげますから」

艶やかな声色を耳元でささやかれると私は背中力が抜けてしまい腕で上半身を支える。凄い武器をお持ちですねほんと。クラクラとする頭を持ち上げて赤紫色の小悪魔を見上げる。相変わらずの温かな表情のままであった。なのにその口から飛び出る音の威力は優しいという物じゃなかった。感情に直にぶつけてくるような感覚があつたんだ。

だけど唐突に彼女は私と距離を取った。舞い上がる砂がうねりを作る。

「あらあら、来客ですよ」

彼女がそう言うところまた唐突に世界が終った。今までいた魚も海月も海星も、そもそもそれらを飲みこんでいた海水も一瞬の内に消えていった。そしてまばたき一回で世界を移動した私は、ベッドの上にいる私達の横に誰かが立っているのに気付くまでにさほど時間を要さなかった。

「權、何しているのかしら」

私の横で槐さんが少しだけ怒っている様子で仁王立ちしていた。

「その幻覚は一体どういう意味があるのかしら」

今までに見た覚えの無い槐さんだったので、私の体はその微かな威圧感に潰されて縮こまった。槐さんがこんな風に表面的に怒りを表わすなんて事あるんだ……。

「別に良いじゃないの。それに尼土様だって嬉しそうだったもの」

「そういう問題じゃないの。ただでさえ朱水様がいらっしやらない

この日に、貴方の力が発動したら誰だつて不安になるわ」

「敵意の源は無いのだからそう焦らなくても」

「まさか、本気で言っているの。僅だつて……」

だが槐さんは途中で何かに気付き、目を見開いて私を凝視した。

間違いない、今槐さんは私から何かを隠した。やはりこの屋敷には私に関わつてはいけない問題が多々あるのだろうか。

「とにかく、事前許可の無い力の実行はよしなさい。良いわね？」

「わかつたわよ」

眼前に迫る槐さんの威圧的な波にたじたじと後ろに反る。二人は見た目同じくらいの歳だけどしつかり上下関係はあるみたいだった。

「ところでどういった経緯で力を使ったの？」

「そんな理由なの……？」

呆れ口調に槐さんは権さんの頭を揺する。

「だつて尼土様があまりに可愛らしいのですもの」

うわあ、面と向かつて言われるなら少しは嬉しいけれど、第三者

に対してそんな風に言われると恥ずかしくて顔が焼けるよ。

「槐だつて分かるでしょこの弄りたくなる衝動が！」

「……酷く分かるわ」

二人は目を合わせた後に同時に私に振り向いた。

ドウイウナガレデスカコレ

「尼土様、どうせならお姉さん達に挟まれてみませんか？」

「きつと楽しいですよ」

ふふふと二人は妖艶に笑む。結局似た者同士って事なのね……。

そして私は二人の間に半強制的に引つ張り納められる。身長的には私と大して変わらない彼女等だけれど、二人から滲み出てくる大人の雰囲気吞まれて体が火照つてきた。そんな私を肴に二人は舌を動かしていた。

「あ、そうでした。紅茶の隠し味って結局何だったんですか？」

槐さんが戻った後に自分もそろそろ帰らなくてはと、空になったカップをティッシュで拭っている権さんに、脳中に再来した疑問を投げかける。彼女は紅茶と聞くと顔を明るく輝かせた。大変に嬉しそうだ。

「飲んで少しピリツとしませんでした？」

「あーやっぱするのが正解だったんですね。てっきり私の舌がおかしいのかと思っちゃってました。これって何ですか？」

「胡椒ですよ」

「胡椒？ 紅茶に胡椒って入れる物なんですか」

甘いケーキに合わせて少し辛味が入った紅茶を用意したのだそうだ。紅茶に胡椒って結構合うらしい。

「女性も同じ、包み込む深みだけでなく時には弾ける辛さも必要ですね」

吹き出しちゃうくらいをしたり顔をしている権さん、「上手い事言った」って言いたげだった。こらえたはずなのだけれどどうやら少し漏れていたのか、権さんは私と視線を合わすと顔を真っ赤にする。

「尼土様のいけずさんめ」

「すみません」

この人は大人と子供の二つの顔を持っているんだなあ。叔母さんと同じタイプなんだろうね。その為なのか、使い魔さん達の中で椒ちゃんの次に親しみを感じる。

「権さん」

「何ですか」

少し怒った口調で応える。

「ポット、持ちますよ」

権さんは私の意図を察してくれたのか、何も言わずに渡してくれ



た。

「ちよつと重いですよ〜」

「これくらいへっちゃらですよっ」

「頼もしいですね〜。惚れちゃいます」

権さんは私の肩に頭を乗っけて甘い声を出す。

いやいやそこで跳ねちゃダメでしょ私の心臓さんってば

二人で食堂に入ると大きな音が響いた。なんだろうと奥の方を見てみると、大きなテレビにかじりつく二つの影があった。柗ちゃんと梓ちゃんだった。二人はどうやら映画を見ている様で、テレビの置いてあるカーペット敷きの一角にて、座っている柗ちゃんの膝に梓ちゃんが重なっていた。梓ちゃんが膝から落ちない為になのか、柗ちゃんは梓ちゃんの細い体を抱きしめている。

「ここまで結構ですわ。本当にありがとうございます」

ポットを受け取った権さんは一礼して台所の方に去って行った。

私が何と無く遠目に見ていると柗ちゃんがこっちに気付いた。梓ちゃんに私の存在を知らせると、その知らせを聞いた梓ちゃんは跳び起き、私へと襲いかかって来た。

「元気いっぱいだね」

「はい、もっちろんです」

梓ちゃんはいつかの様に私の肩に飛び乗った。これによって私はあの時感じた違和感の正体にやっと近づく事が出来た。そうだったんだ、いくらなんでもこんなな軽いわけ無いよ。だって肩に女の子一人乗つけた状態で普通に立っていられるわけ無いもの。多少は重みを感じるけれど、私の足は震えずに立ち続けている。

「ねえねえ梓ちゃん、梓ちゃんってすごく軽いね」

「泥土様の為にですよ」

「私の為に？ どういう意味？」

私の疑問に梓ちゃんではなくいつの間にか私の横に立っていた柊ちゃんが答えてくれた。

「私達は体重、いえ正確には質量と言う概念が無いんです」

うん、その差が分からない。

「えっとですね、固定的な重さが無いと言えば伝わるでしょうか」

「ああそう言う意味なのね。……ってそれって凄いやね」

だって体重自由自在ってことでしょ！ 何と言う女の夢！

「普段は同等身長の間達の人間達の平均体重を保っていますが、場合によって意図的に体重を変えています。例えば今の梓の様ですね」

私から見て逆さに映る梓ちゃんは自慢げに破顔する。

「羨ましい……」

「ですが筋力は一定ですので体重の増加に比例して体の動きは鈍くなっていきます。腕や足に砂袋を結び付けている像を思い浮かべてもらえれば幸いです」

ほうほう。と言う事は柊ちゃんももっともつと重い体重になれるのかな。凄い怪力の持ち主だもんね。

「ほら梓、何時までも乗っているんじゃないの」

「はい」

私の肩からぴょんと跳び下りると梓ちゃんは柊ちゃんの胸に顔をうずめる。ほんとこの二人は仲がいいね。

「今映画を見ているのですが良かったら一緒に見ませんか？ 丁度見始めたばかりなんです」

「あーちよつと待ってね」

脳内で目的を達成できたかを確認する。勿論使い魔さん達と触れあうっていうあれね。

「うん、私も一緒に見たいな」

「やったー。ほら泥土様こっちこっち」

梓ちゃんは私をテレビ前に連れていく。今度は結構な力だった。多分体重を変えているんだろう。靴を脱いでテレビ前に着くと私を無理やり座らせて、今度は私の上に重なった。

追いついて隣に座った柗ちゃんは私の上の梓ちゃんを惜しそうに見る。柗ちゃんはこの状況が忍びないみだった。そんな彼女に気付かないで梓ちゃんは嬉しそうにリモコンを弄くっていた。

「そつだ、お姉さん良い案思いついたよ」

「良い案ですか？」

梓ちゃんは頭出した映画を止めて私に振り返る。

「うん。とりあえず梓ちゃんはちよつと立ってくれないかな」

「はい」

梓ちゃんは素直に立ちあがってくれた。そして私はあぐらのまま隣の柗ちゃんに膝を叩いてアピールする。

「はいどうぞ」

柗ちゃんは理解してくれた様でゆっくりと私の上に乗ってくれた。彼女がさつき言っていた通りで、驚く程にその体は軽かった。便利だねえ。

「んでその上に梓ちゃんだ」

柗ちゃんは私が言う前に手を伸ばして梓ちゃんを捕まえていた。

これで私の上に柗ちゃん、その上に梓ちゃんという図となった。

「これで皆幸せだ」

私は自信満々に言った。だけれども二人には意外に不評だった。

「やはりこれは失礼でした」

柗ちゃんはそう言うのと梓ちゃんを抱えたまま立ちあがってしまった。抱えられている梓ちゃんも少しだけ暗い顔をしている。

「あうー、良い案だと思ったんだけどなあ」

二人が何を気にしているのか分からなかった。

「えつと何所ら辺が駄目なのかな？」

「それは……やはり二人が乗るといっのはちよつとよろしくないと思います」

「それにこのままでは尼土様が画面見え辛いです」

「あーそう言う意味だったのか。きつと私が『お客様』って言う立場だからそんな事気にしているんだらうね。私是一向に構わないのに。」

「じゃあ直列じゃなくて並列になればいいんだ」

「ここは少し変更を試みよう。」

「梶ちゃんは私の右膝に、梓ちゃんは左膝に。これならどう？」

「……よろしいのですか？」

「全然お構いなくだよ」

私が胸をポンと叩いてみせると二人はお互いに見合わせて頷き合った。

「では失礼します」「失礼しまーす」

二人は私の二個目の案通りに座ってくれた。これなら二人の頭の隙間からしっかりと画面を見る事ができるもんね。梶ちゃんは梓ちゃんの手を取っているので満足そうだし、私も二人を抱っこできるから嬉しい。やっぱり膝上に誰かを乗せるのって気持ちいいね。

「で、これ何の映画なの？」

「えっと、これです」

梶ちゃんがDVDのパッケージを渡してくれたが、それを見た途端私は絶句してしまった。それは何とも禍々しい絵面のジャケットだった。

「これってホラーだよ。梓ちゃん平気なの？」

「普通ならこんな映画は子供には厳しいはずだ。しかし梓ちゃんは元気よく「はい！」と頷いた。何て強い子なんだろうか。」

「スプラッター以外のホラーならこの子は平気ですよ、むしろ好んでいるかもしれません」

梶ちゃんは「ねえ」と言って梓ちゃんの頭を撫でる。ホラー好きとか凄いね……私なんてでんで駄目だよ。

「ホラーが一番好きなの？」

「うーん、SF系の方が好きかもです」

そうなのか。まあホラーもある意味SFに近いもんね。宇宙人と幽霊って今の所は同じ。名前だけ存在する物』だから。

「尼土様はホラー駄目なんですか？」

使い魔さん家の末女様は無邪気に訊いてきた。やばい、ここで無理だと答えたら負けだと思つう。何に對しての敗北かは分からないけど。

「平気だよ。お姉さんは結構こつこの見てきているんさね」

「そうなんですか！」

やばい、なんか梓ちゃんが異様に喜び出したぞ。これは絶対まずい展開になる。一旦話を変えよう。

「柊ちゃんはどついつのが好きなの？」

「私は……お恥ずかしいですけど、その……恋愛物が」

おお、乙女さんだね。堂々と言えないなんて初々しいなあ。趣味も女の子の子してるし、ちよつと内気な所もあつて柊ちゃんつて完璧な乙女だよ。髪の毛の両サイドの編み込みがこれをさらに増長しているって感じ。

「恥ずかしがる必要無いつて。私だつて好きだよ」

「そうですかね」

「うん。女の子なら結構普通だと思うんだ」

まあそんな事言っている自分はコメディ系が好きなんだけどね。

「ん、じゃあそろそろ見ましようか」

どうやら梓ちゃんの仕事開始時間から逆算すると今から見ないとぎりぎりとの事だった。梓ちゃんは私達の同意を確認するとリモコンのボタンを押した。

嗚呼、恐怖の時間が始まつてしまつ……

やつと、終わった……。ほぼ半目で出来る限り画面の隅をぐるぐ

るとなぞるように見ていた私は恐怖の時間を逃げ出さずにやり過ごす事に成功した。膝上の二人は食い入るように鑑賞していて私なんて気にしていなかったからばれてはいないだろう。梓ちゃんなんて幽霊が人を襲うシーンになると手を握り締めて静かな興奮状態になっていた。悪戯である時の彼女の目を覆ったりしたら一生嫌われてしまったらうねえ。

「結構面白かったですね」

梓ちゃんが仕掛けてきた。全力で回避しなくちゃ。

「そ、そうだね」

「ですがバランスが悪かったですね」

柗ちゃんは冷静な口調で語り始める。これはチャンスだ、相槌でやり過ごそう。

「ちよつと幽霊の出現するシーンの割合が中途半端すぎました。やはりホラーの系統として王道である、最後の最後に姿を現すもしくは結局始終姿が出てこないという感じの日本的な物だったり、逆にずっと出てきて追いまわされたりする洋画的な物の方が楽しめますね」

「だねー」

「そうですね」

うん、良い感じに潜り込めてるぞ。

「解決できていなかったというホラーお約束の落ちは好感を持ちますが、出現時間の所為で緩急が塊となっている為か、分かりやすい安全展開があったのはいただけません」

「だねー」

「私はあまりそこは気にならなかったですね。それより撃退が物理的な方法だったのがちよつと……」

「そうね、狂人から逃げる作品ならそれで正解なんだろうけど、やはり幽霊物なら撃退不可能故の回避展開でないかね」

「だねー」

……おおう、中々濃い論議が展開されてしまっていますけどどうし

たらしいのでしょうか。

彼女達は私の相槌を横に熱く語り合っていた。それはもはや今見  
ていた映画の感想を飛び出して、ホラー映画全体の話に移り変わっ  
ていた。だけれどもこれなら相槌だけが盾になるわけじゃない。私  
だって生まれてこの方一度もホラーを見た事が無いってわけじゃな  
いんだから。

しかし運の良い事に彼女達は熱くなりすぎて私を忘れて膝の上で  
熱中し続けていた。彼女達は普段は私を客人として捉えているので  
何かと構ってくれるのだが今は忘却の白泡で遮られているみたいだ。

しばし相槌すらやめて彼女達の言葉に耳を傾けていると唐突に彼  
女達の舌が止まった。何かと思つて目を開くと二人は私に対して何  
かを知らせる様な笑みを向けている。一体なんだというのだろうか。  
「尼土様、玄関に向かいますよ」

「いいですね！ 行きましょ行きましょ！」

私は立ちあがった柵ちゃん力強い引っ張りによって無理矢理に  
立たされ、梓ちゃんの有無を言わせぬ背中押しで部屋を追いだされ  
た。

「あー、どうしたのさ？ お姉さん見当もつかないよ」

「今に分かりますって！」

理由を訊いても答えは返つて来ず、私は背中を押す梓ちゃんとそ  
の後ろでニコニコしている柵ちゃんによって玄関へ運ばれて行く。

だけど着いてみても一切変わった所は無く、何故ここに連れて来  
られたかが未だ判明しなかった。

「あ」

橙色の光に満たされた空間でしばらく待っていると、梓ちゃんが  
何かに反応し玄関の扉を開ける。開かれていく両開き扉の隙間はま  
だほの明るく、真ん前の道に誰かがいる事が確認できた。その誰か  
は私達に気付いたのか足を速めた。

「あ……」

黒髪が揺れる。

「朱水」

私が一番会いたかった人が目の前を小走りに進んできた。

「朱水」

私の足も勝手に一歩一歩戸惑いながら進む。

「有！」

目の前に朱水がいる。

「ちよつと何泣きそうな目してるのよ」

「泣いてないよお」

「はいはい」

朱水は私の頬を一度撫でるとその手を肩の後ろへ回す。

「久しぶりの有だわ」

「……うん！」

久しぶりの朱水はとても温かった。

夕食は朱水と私、それと由音ちゃんとアイシスの四人だけが参加した。その時の会話はそれぞれの立場が影響してか、差障りの無い内容となっていた。しかしピリピリとした空気であったわけではなく、お互いに気にしないでおこうという意思の下に支配された場だった。

夕食後は食堂の隣にある部屋にて由音ちゃんとお話をした。他の二人はイソイソとどこかへ行ってしまったのだった。由音ちゃんは私が二人の背中に注いだ視線を遮って声をかけてくれたのだ。おかげで寂しい思いをしなくてすんだからありがたいよね。



部屋に向かう途中、誰かが私の後ろを追って来ている事に気付く。誰かと思つて振り返ると予想していた人物では無かつた。梓ちゃんか椒ちゃんかと思つたのだが、映つたそれは朱水だつた。常に朱水は堂々としていて誰かを追うなんて真似滅多にしないのに。

「有、貴女の部屋に行きたいのだけれど」

何かをしてきたのか、少しだけ息を切らせていた。

「うん、いいよ」

私は朱水の横に並んで一緒に歩く。不思議とお互いに声を上げなかつた。でも顔はお互い向き合っている。凄く心地好い雰囲気だつた。

部屋に朱水を置いてから歯を磨きにトイレへと歩く。するとぼつたりアイシスに出会つた。二人は相手の持つそれぞれの歯磨きセツトを見て目的地が同じだと把握した。

「これからもまた本を読むの？」

「はいその通りです。今は無限休暇ですがいつ有限に転じるか分かりませんので」

「無限かあ、その間つて本当にお仕事できないの？」

「仕事はありませんが給与はその間でも十割払われますよ」

「へー、太っ腹だね」

アイシスは私の言葉が可笑しいらしく、足を止める。

「違いますよ。知の流出を防ぐための犠牲なんです。金だけならマグマの如く湧きますが、知識者は簡単には生まれませんからね」

「うわあ、結構どころかかなり大人な話なんだね……」

「アマツチはこれからどうするのですか？」

「私？ 私は……ああ！」

「どうしました？」

「宿題しなきゃ。今完全に忘れてたよ」

アイシスは宿題と聞くと急に教師の顔になつた。

「宿題と言つのは義務と思つて消費する物ではなく、機会と思つて挑みなさい。その様な心構えではいつまでたつても向上できませんよ」

何とも厳しい事をお言いになられる。やっぱりアイシスは職場では厳しい教師なんだろうかね。

言い返す言葉も無く、私は再び歩き出したアイシスの後ろをとぼとぼと歩く。歯を磨いている間もなるべくアイシスから視線を逸らしていた。目が合うとまた厳しい教師に叱られると思つてしまったのだ。だけどアイシスはもう叱る気は無かつたみたいで、磨き終えた歯を見せびらかす。

「うわ、真っ白」

「ふふふ、ボクは色素など色々いじくっていますからね。もしかしたら後天的な沈着も勝手にいじくられてしまつているのかもしれないね」

よく分からないけど要は魔法で綺麗なままでいるって意味なのだろう。なんて羨ましい。

「私にもそれやって欲しいな」

「ああ、これは魔法じゃないですからアマツチには無理です」

「ああ、あれか。レイって物なのね」

歯ブラシの水を切っているアイシスは私に視線を送るだけで答えを出しはしなかつた。レイでも無いのだろうか。

「ではボクはここで」

「あ、うん。頑張つてね」

私の呼び掛けにはにこやかに応えてくれたけれど、やっぱりアイシスとは大きな隔たりが横たわっているみたいだった。

「目標変更、かな」

この三連休で使い魔さん達と仲良くなるって目標を立てたけど、もうちょっと拡張してみようかな。

「えへへ、なんか楽しいな」

「おまたせ」

部屋に戻るといつの間にか緑茶が用意されていた。どうやら柵ちやんが用意してくれたものを槐さんが運んできてくれたらしい。

「はあ、和むわ」

朱水は私の手を取って目を瞑る。手を持たれたまま私は朱水の隣に座って肩を並べる。

「そんなに大変だったの？」

「そうね、ちよつと今回は大事だったわ」

「そっか」

私は一体なんて声をかけるべきなんだろうか。知らない世界が多い自分が迂闊に言葉をかけても良いのだろうか。

いや、朱水なら良いんだろう。怖くない、朱水だもの。

「ねえ、何があつたの？」

大丈夫、私と朱水なら壁なんて無いんだ。

「……………」

朱水は私が詳しく聞き出そうとした事に驚きを隠せなかった様で、手を離れた。私はその少しだけ見開かされた目を見つめ返す。もつと知りたい、その思いで。

怖くなんて、ない。

「貴女と同じ様な存在がね、知り合いの領地に住んでいるの」

朱水に私の思いが通じたのか、朱水は言葉を濁さず喋ってくれた。

「私と同じ？」

「そう、削強班が『危険因子』と認定している存在ね。ああ、有は認定されていないから安心してね」

「え、うん」

安心してと言われてもねえ。私の意識が及ぶ範囲の話じゃないんだよね正直さ。

「その子達がね、何者かに狙われちゃったのよ」

「子？」

「そうよ、私達と同年代の姉弟よ。姉と弟」

へー、朱水以外の魔に出会った事無いから気になるな。しかも同じくらいの年齢だなんてますます会ってみたいや。その二人に出会えれば、今まで朱水だけが具体例だった魔という存在に新しい像を取り入れられるのだろうか。

でも待てよ、少しおかしいよね。

「でも危険因子だっけ、それに認定されているって事は……」

「そうよ。貴女の言う通り本来なら排除されていなければならぬのよ。でもね、あの子達は例外、認められた危険因子なの」

朱水はその姉弟の事を詳しく教えてくれた。未来視に過去視、そしてその重要性故に生かされているという現状等を。私はその話が進む程、何所か陰鬱な気分になっていった。

「それで今回あの子達が襲われた為に私達領主が呼び出されたって訳なのよ」

「そう言う事だったのか。彼女達がいかに大事な存在なのかが分かる話だった。」

「襲われたって、その人達亡くなられたの？」

「びんびんしてるわ」

何故か朱水は髪の毛を弄りながら呆れ口調で答えた。一体どうしたのだろうか？

「まったく、自分達の価値を理解していながら自己管理をしないな

んで本当お手上げだわ」

うわ、今度は腿を指で小突き始めた。一体朱水の中で何が起こっているのやら。

「と、とにかく無事だったんならよかったよ」

「そうね。それはその通りよ」

苛立ちを飲み込もうとして柵ちゃんが淹れた緑茶を飲む。朱水は柵ちゃんと違って音を一切立てなかった。一気に飲み干してやっと落ち着いたのか、やや崩れていた姿勢を座り直す事で正して再び口を開いた。

だけどその顔は決して明るくは無く、怒りがただ消えていっただけの素の面に過ぎなかった。

「私はね、あの子達に出来る限りの自由を与えたかったの。持って生まれた物を考えると大抵の物を取りあげなくてはならないけれど、それでも彼女達に温かい血が流れる様にしてあげたかった」

その為に朱水は何度か姉弟の上に立つ領主に頭を下げたという。遠い他人であるはずの二人に朱水は何故そこまでしてあげるのだろうか。彼女の顔にある暗闇がその答えなんだろうか。私には分からなかった。

「有」

「……何？」

朱水は吐き出す様に私の名を読んだ。私は応える為に、いかにもまた触れて欲しそうにしている朱水の手に分かたず手を重ねる。ピクリと、下の手は跳ねた。

「有、貴女は私が守るわ」

そっか……守るって、そっちの意味だったのか。

「うん、ありがとう」

ぼとりと水滴が私の手の甲に落ちる。

「守るから」

「……うん」

どうして朱水は泣くのだろうか。

私が弱いから？

私が頼りないから？

朱水の思い通りにならないから？

私が私だから？

「馬鹿ね私。本当、愚か」

朱水が朱水だから？

誰も答えてくれない。きっと朱水も知らない。答えなんて無いのかもしれない。

ただ分かるのは、今の朱水には私がいなくてはいけないという事だった。

悲しいけれど、手放してくれても良かった

私私である為に朱水が傷つくなら

いつそ永遠に交わる事の無いようにしてくれも良かった

だけど朱水は私を求めた

だから私は朱水の横にいる

私は朱水が好きだから

絶対に離れない

「ごめんなさい。こんな事を話す為に貴女に会いに来たわけじゃないのに」

自分の手に重なる私の手をすりりと滑らせ除ける。そして朱水の太股の上に落ちた私の手に今度は朱水のが上になる様に手を重ねた。

重なる手には力が入っていて、少しだけ痛かった。

「ねえ有、ここ二日の事私に教えて」

「うん、私も朱水に喋りたい」

知ってもらいたい。朱水に私の事を知ってもらいたい。それで朱水が満足するなら、それで私の事を好きでいてくれるなら。

「そう、あの子達と仲良く出来たのね」

「うん、いっぱいお喋りできた」

「良かった」

朱水は私の耳下を人差し指の側面で撫でる。くすぐったくて思わず声と共に首が曲がる。それが気に入った様で朱水は何度も同じ事をしてきた。

「他にも由音ちゃんともお話したんだ。それに昨日は由音ちゃんとも……」

「どうしたの？」

「いや、多分気の所為だ」

まずい、何て事を口走ってるんだ私つてば。朱水は気にした様子も無く私の次の言葉を待っている。良い感じに誤魔化せたようだ。選りにも選って朱水に対して由音ちゃんと一緒に寝ましたなんて言うだなんて、凍った水面に走り込む様なもんだ。見えてる危険、回避するに越した事は無い。

「アイシスとは上手く噛み合わなかったからあんまりお話出来てないんだよね」

「なら明日すればいいわ。時間がまだまだいっぱいあるんだもの、焦る必要はないわ」

そうだね。私達はまだ高校二年生、自由な時間であふれているんだもの。でもせっかく朱水が帰って来たんだからちよっと何処かへ行きたいな。

「ねえ朱水、もうへとへと？」

「平気、そこまで疲れてはないわ。どうしたの？」

「明日何所かに行かない？ この前のピクニックの時みたいなさ」

一拍の沈黙の後、朱水は首を縦に振ってくれた。

「やった！」

「何所へ行きたいの？」

「えっとね、海に行きたい」

権さんが見せてくれた幻覚で先に中から見た世界を知ってしまったけれど、やっぱり一度は自分の目で本物を見てみたかったんだ。

「前にお昼休みに海に行こうって話したけど結局行ってなかったし、良い機会だからさ。あの時は四人でって話だったけど、折角だから皆で行こうよ」

「そう言えばそんな話もあったわね。でもこの大所帯で海に行つてどうするの？」

「あーうん」

そう訊かれると答えに詰まるのが正直な所だ。どうにか大人数で行く目的を思いつかないかと脳に鞭を打つ。

「釣りとか、どうかね？」

「残念だけど釣り道具はこの屋敷には無いわ。明日買うにしてもまず槐が許すかどうかね」

うーむ、昨日の話からして槐さんは無駄と思われる出費にはとことん鬼らしいから一時の娯楽の為に釣り道具一式そろえるなんて絶対にしたくないだろう。というか私もお金無いし、始めから意味の無い提案だった。レンタルって言う手もあるだろうけど、そこまで釣りをしたいわけじゃないから黙っておこう。

「やっぱり散歩だけって言うのはおかしいかな？」

「おかしいとは思わないけれど、皆で行くほどの物ではないでしょうね」

「そっかあ」

ならやっぱり少人数で行く事になるのかな。アイシスも屋敷から離



れたく無さそうだったし、仕方ないか。

「じゃあ後で皆に訊いてみるね」

「あら、まず最初に訊く相手がいるでしょう？」

「ん？ 誰？」

「デートのお誘いはしつかりね、リップの素敵なお嬢さん」

朱水は私の唇を爪で優しくはじいて、惚れ惚れする程のかわいいウインクを決めた。

昨日とは違って独りで寂しく広いお風呂に入る事になった。朱水は槐さんと入るらしく、私はそこに入り込む勇氣など到底持つていなくて、その結果が孤独な入浴であった。由音ちゃんやアイシスを誘いに行ったのだが、由音ちゃんは見つからず、アイシスは独りで入りたいとの事だった。外人さんはやっぱり他人と入る事に抵抗があるのかな。

正直な話、私は由音ちゃんとお風呂に入る事に関して、期待していると同時に、避けたいという正反対の気持ちを持ち合わせていた。期待というのは彼女にもっと近づきたいからだ。そうすればきっと由音ちゃんはもっと笑ってくれると思っっているんだ。だけど避けたいという気持ちがある。それはあの子が本当に肌を他人に曝け出す事を嫌悪している節があるからに他ならなかった。一度は許してくれけれど、あれで懲りたかも知れない。私はあの子の心を覗く事は出来ないからどっちなのか分からなかった。

いや、そんなの当たり前だよ。誰だって相手の心なんてそっくりそのままを理解するなんてできない。確かなのは彼女の体にある無数の生傷は彼女の過去であり、それを見られるのは彼女にとって苦痛であるという事実だけだ。

触れなければ傷がつく事はない。だけどこれが正解なのかと考えると、私は鉛筆で塗りつぶしたくなる。弱い私は由音ちゃんがいなというのを盾に、どちらも選ばなかったと結論付けるしかなかった。そうしてもやもやした気持ちを抱いたまま私は湯船に浸かったのだ。

部屋に戻る途中、廊下の向こうから槐さんがこちらに向かってくるのが見えた。彼女も私に気付いたのか小さく会釈すると小走りです私の下へとやって来た。

「尼土様、その、申し訳ございません」

槐さんは開口一番、謝罪の言葉を出した。

「どうしたんですか？」

「つい口走ってしまい、昨晚尼土様が菅江様と一緒に床に就いたと朱水様に知られてしまいました」

「な、なんですとお……と言うか何で槐さんがそれを知っているだろうか。」

「椒は私に対して色々な事を教えてくれますから」

先程までの申し訳無さそうな顔は何所へ行ったのか、誇らしげに彼女は微笑む。椒ちゃんから槐さん、槐さんから朱水に情報は流れるというのだろうか、なんとも恐ろしい話である。

「私を部屋から追い出すとその足で廊下を突っ切って行かれました。恐らく尼土様の御部屋へと向かわれたのでしょうか」

槐さんからは出来る限り早く会って欲しいとお願いされた。寝間着のまま出ていったので体に障らないか心配らしい。

「分かりました。まつすぐ帰ります」

「本当に申し訳ございません」

槐さんは今度は深々と頭を下げる。

「そんな、気にしてませんって」

「……………」

「いや、ほんと頭上げてくださいって。全然気にしませんから」

「本当ですか？」

一転、彼女の声色が変わる。何所か笑いをこらえている様な、そんな声だった。

「そうですね、失敗は誰にだってあります。それにこれで泥土様はめでたく朱水様と一緒に床に就くチャンスが得られたんですもの、むしろ得ですよええ」

……… ああ、つまりわざと漏らして朱水を焚き付けたって訳だ。この人は何て恐ろしい人なんだろうか。

槐さんは手を振りながら颯爽と去って行った。多大な無力感を全身に帯びながら私も廊下を再び歩き出す。この後にひと波乱あると思うと滅法気が重いよ。

私の部屋の前が見える廊下に着くと、成程朱水の姿が視認出来た。朱水は扉の前にある椅子に座って待ち構えていた。槐さんは知らなかったのだろうけど実は部屋の鍵はかけていないので中には入れたから、朱水が風邪をひく事は無いと思っていたのだけど、どうやら槐さんはその先まで読んでいたみたいだ。朱水が例え鍵がかかってもなくても勝手に入る事を良しとしない為に、夜の空気に肌を晒すと思越していたのだろう。流石朱水お付きのメイドさんだ。

「朱水、とりあえず中に入るうか」

私を見つけると何か言いたげに立ち上がったが、私はそれを制するようにして部屋に招き入れた。朱水は少し肌寒かったのか、あっさりと従ってくれた。

「ねえ朱水、今日よかったらどっちかの部屋で一緒に寝ない？」

たまには積極的に行っても良いよね？ 槐さんの後押しも折角頂いたんだし。

「え、ちよつ、な、」

朱水は出端どころか何も行動を起こしていない内に全てを封じ込める真似をされた為に固まってしまふ。面白いなあ。

「どっちがいい？ このまま私のベッドに入る？」

「そ、そうね。少し冷えてしまったので直ぐに温まりたいわ」

強がりでも落ち着いた体を見せつけようと頑張っている朱水は本当に可笑しくて、可愛かった。そんな可愛い朱水をベッドまで押して行き、終いにはそのままのしかかる様にして押し倒した。

「有、どうしたの？」

「別に。どうもしてないよ」

「そ、それならいいわ」

「うん、全然問題ないよ」

たまには積極的に、そう自分に何度も言い聞かせる。

「寂しかったんだ」

「私もそれは同じよ」

「だから今はいっぱい朱水を感じたいなって」

「な、何恥ずかしい事言ってるのよっ」

やだ、朱水つてばまっかつか。でも私もきつと同じなんだろう、さつきから耳と鼻が焼ける程に熱い。

覆い被さったままでいた体を朱水の横に置いて、二人がベッドの中央に横になっている様にする。

「ねえ、足借りるよ」

「足？」

朱水の了承を取る前に私はお互いの足を絡める。ふくらはぎの微かに柔らかいお肉が気持ち良い。他人の足というのはこんなにも熱く感じる物なのかとびっくりした。多分まだ冷たいベッドの中だから余計に熱く感じるのだろう。朱水は戸惑ったみたいだが、私がついでに手を重ねると赤いままの顔でいっぱい微笑んでくれた。

暖かい

「明日楽しみだね」

「そうね。結局私達と由音ちゃん、それに柵と梓だけが同行するといつので合っているのね？」

「うん、椒ちゃんも行きたくないって」

私が何度誘っても椒ちゃんも頑なに断った。その時の表情は非常

に硬く、何かを堪えている様だった。

いや、きつと私は理解しているんだ。だけど深く考える事を止めているだけ。

「残念ね」

「うん……うん」

残念、なのかな。多分そうなんだろうね。

「ねえ朱水」

私はどうしても話題を変えたくて強引に言葉を投げる。

「なあに？」

「朱水って普段何時に寝てるの？」

「うーん、決まっていなわね。その日の気分で、と言うよりも眠い時に寝るって感じかしら」

だから眠くない時は三時間しか寝ない日もあるの、だそうだ。私からしたらそんな睡眠時間信じられないや。

「じゃあ今はどう？」

朱水は少し考える間を置いてから私の手を朱水の心臓辺りに置いて、照れ照れになって答えた。

「体が寝かせてくれなそうね」  
そうだね。

明日はいっぱい歩くっていうのに私達は寝不足になってしまいうだった。でも良いんだ、お互いが眠いなら一緒に歩けばいい。そうすれば遅れないもの。

明日は一緒だよ、朱水。

コンコンというノックが聞こえる。いつもよりも大きな音だった。「おはようございます」

扉が少しだけ開いて椒ちゃんの顔が現れた。

「起きていらつしやってたんですね」

「うん、おはよう椒ちゃん」

一応眠りに就く事は出来た様で、私は椒ちゃんが来る少し前に目が覚めた。遮光カーテンを閉じていなかったため朝日が顔を撫でた為に、睡眠不足な癖に早起きだった。

「御主人様は？」

「ああ、ここにいますよ」

どうやら朱水が私の部屋で寝ている事は皆に知れ渡っている様だった。私の陰に隠れて見えていない隣の朱水の膨らみを指差す。

「起こした方がいいよね」

「いえ、念のために起こしに来ただけですので必ずしも起床なされる必要はございませんよ」

「そっか。ならまだ寝かせてあげて」

「はい、分かりました」

昨日とは違う椒ちゃんがそこにはいた。間違いなく距離を取ろうとして、硬い表情を無理やり浮かべている。それが分かっている。私も私にはどうする事も出来なかった。

「有様」

暫しお互いに視線を絡めさせていると椒ちゃんは姿勢を今一度正して、少しだけ声を張り上げた。

「昨晚ずっと考えました」

「うん……」

「やはり、私も行きます」

「……うん……」

それを嬉しいと感じるのだと、私は私の心を知る事が出来た。



人を好きになる。

それは私にとって初めての現象だった。いや、正確には初めてというわけでは無いのかもしれない。ただ今回のみみたいな本気さは今までには無かった。何処となくこの人好いなあって思う事はあっても、付き合いたいという気持ちまでには発展しなかった。

だけど今回は違った。私はあの人と本気で付き合いたいと思っている。

でも、私とあの方は同性なんだ。

放課後、いつも通り廊下で待つてくれた三人と合流してお喋りを始める。たわいない話題だけれど今の私にとっては大切な時間だった。こうしている間だけ私は自分の抱えている砂袋の存在を忘れられる。それは今の私にとって救いだった。

今日は酷く暑い日だった。そのため私達はずっと涼しい教室で過ごしている。皆口にはしないが暑い中を帰りたくないのだった。教室の中は冷房が利いていて何とも過ごしやすかった。冬では夏の頃の冷房を少し馬鹿らしく思ってしまう私だけれど、いざ夏に近づくとやっぱり冷房のありがたみを再認するもんだ。まあ夏は夏で、冬の頃の暖房を信じられなくなるんだけれど。



掃除が終わってほとんどの生徒が帰宅か部活に向かつてしまつてから一時間程経つた頃だった。私達以外に誰もいない教室に訪問者が現れた。見なれた黒髪の人だった。

その人は教室の隅から隅に目をゆっくり移して中を確認していた。私達と目があつても彼女は目を止める事は無かつた。彼女にとつて私達は、私は無意味な存在なんだろう。ここにある椅子机と同等、わざわざ目を止める必要のない存在なんだろう。

私達は四人とも彼女が首を教室の中に入ったままの間中ずっとその顔を見つめていた。綺麗な顔、その顔が自分達を迎える事無く過ぎていくのを目の当たりにした。そして廊下に引つ込んで行つた。

「尼土さんかな」

「だろうね」

舞華と百が顔を見合す。しかし瑠衣は私の事を思つてか、ただ静かに私に目を配らせるだけだった。

クラスでは二人の関係が最近の話題の大部分を占めていた。二人とは尼土さんと、今教室を覗いていた一色さんの事だ。人々の口を賑わすのは当然のことだった。だってあの一色朱水が初めて友達と思われる人を作つたのだから。そしてその相手が相手だから更にその火薬が増す事になつた。尼土有、クラスでも全く目立たなかつた彼女は数日でその存在を目立たせていた。今ではこのクラスで彼女の事を知らない人なんていない。少し前まで一度たりとも話題に上らなかつた彼女は、たちまちクラスの有名人となつた。元々可愛い人だからアイドル性もあり、広まるのは時間の問題だった。

今では男子の一部が尼土さんに話しかける姿がしょっちゅう見られた。女子だつて普通に喋っている。全く予想できなかった光景だった。いや、尼土有という女生徒を忘れていた私達には「予想」という言葉は合わないのかもしれない。

「一色さん最近尼土さんばかり追つてるよね」

「うん。びっくりというか初めてだと思ふけど」

「何があつたんだろうね」

二人が、皆が疑問に思っている点の答を私だけが知っていた。いや、私と当事者の計三人か。きっと私がその当事者の片割れに特別な意識を持っていなかったらここでべらべらと暴露していただろう。でも私には出来やしなかった。一色朱水に一目惚れされた人物、それは妬み以外の何物でもなかった。

「瑠衣は何か知ってる？」

「いや、知らんねー」

何時もならお喋りの中心であるはずの瑠衣は、この話題については常に全く乗る気配が無かった。何時だって話を逸らしたり、ぼかしてくれる優しい友達だった。

「そんな事よりさ、」

こんな友達が持ててほんと私は幸せ者だと思う。

部活に行っていた生徒が戻って来始めた頃、突然瑠衣が立ち上がった。私含め三人は瑠衣の突然の行動に驚くが、彼女は気にせず鞆に荷物を詰め始めた。もう帰るのだろうか。まだ完全下校時間には時間があるし、外だつて暑いままだ。

「ちよつとあたしこれから用があるから」

「あ、そうなんだ。何ナニ？ デートですかあ？」

「へっへー、大正解」

「……マジでっ？ そんな相手いたの？」

「瑠衣ちゃんすごい」

得意気な瑠衣に対して舞華と百は妬みなど一切無い絡みをする。

そんな三人を前に私は何も言えずに身を固めていた。妬む心を持っている私は何で友達の晴れを素直に喜べないんだろう。勿論瑠衣に對しての妬みなんかじゃないのに。

「ま、相手はここにいますけどね」

「なんだそんな話か」

「び、びっくりい」

「え、私？」

瑠衣が私の肩を掴んだのだった。

「そ、デートしようぜい」

「うん、良いけど」

私の了解を聞き入れると瑠衣はさっさと教室の外へと歩いて行ってしまった。

「置いてくよー」

私は慌てて鞆を掴んでその背中を追う。勿論二人に手を振ってからだ。

追いついた背中に当然の疑問を投げかける。

「何所行くの？」

「んー、決めてない。何所が良い？」

「え、決めてないの？」

「へっへー」

瑠衣は得意気にはにかむ。きっと愁えんでいる私を元気づけようとしてくれているのだろう。ほんと良い人だ。こんな子に彼氏がいないなんて男子は見る目無いよ……。

瑠衣は今年の始めに告白をして振られた過去を持っている。あの時は見ていられない程顔から生気が抜け落ちていて辛そうだった。それでも今は復活してこうハツラツとして日々を過ごしている。私と違って瑠衣はちゃんと好きになる心を持っている。だから勿論私達の事は大切にしたいけれど、恋愛の方もまた再チャレンジして欲しいと願っていたりする。

「もう面倒だからポテト食いに行くか」

「うん、付き合うよ」

「付き合うちがーう！ これはデートなんだから一緒に行くのは当たり前なの」

「はいはい」

結局向かうのはいつものファーストフード店だった。私達にはそれがお似合いって事で。

「ふふふ、ひよんなルートから軍資金を得たので今回はあたしのおごりでっせ」

「うあーい、太っ腹」

「女子高生に使う単語じゃねーな」

瑠衣は先に座っていてくれと私を二階に向かわせる。私は彼女の鞆を受け取って席をとり階段を上る。今日は珍しく私達以外のお客は全然いなかった。女性二人が奥のテーブル席に向かい合っているだけだった。

私がちよつと距離を置いて着席すると彼女達はチラリと私を見たが、直ぐに顔の向きを戻しお喋りを再開した。

「おまたせ」

暫らく待っているとポテトの山が載ったトレーを持って瑠衣が現れた。その山の大きさは食欲以上にカロリーの心配を引き起こした。「その量どうしたの？」

「いやあ、一回くらいやってみたかったからさ」

そりやその気持ちは分かるけどさ。それにしても実際にやるとこんな怪物メニューになるんだね。そんな黄色い山を前に女二人でどうしろと？

四人がけ用のテーブルの真ん中にトレーを置くと瑠衣は私の横に座った。対面すると話し辛いと思ったのだろうか。

「あはは、ちよつと張り切りすぎたかな」

「うん」

まあ残った分は持ち帰られるし、そもそも私の沈んだ気持ちを押し上げようとしてくれてこんな事をしてくれているんだ、嬉しい以外の感情なんて無い。

熱々の一本をつまんで口に入れる。

「おいしい」

「だね、あたしもそうだけどここのポテトは大手チェーンのよりも

ずっと美味しいからはまってる人多いんだよ」

このお店のは皮が残っているタイプで、ジャガイモの味がしつかりあり、さらにカリカリとした触感がかなり利いている。これを食べると他のお店のポテトでは満足できないって言われているくらいだ。

「あの人達……」

「どうしたの？」

瑠衣は向こうの人達に聞こえない様に小声で話しかけて来た。

「変わった服装してるな。この時期に黒まみれだぜ？ それになんかアンダーが合気道のアレみたいな奴だ。それもお揃で」

確かに二人が纏う服は異質な物だった。全体的に黒っぽく春を越えた今ぐらいの時期には珍しい。そして何より瑠衣の指摘通り、アンダーウェアであろうコートのように長い白黒のそれは確かに歪さを演出していた。上着は洋服なのに、その一枚下が和服の様なのだ。

気になるのももう少し彼女達を観察してみたくなった。幸い二人はこちらの凝視に気付いてなく、お喋りに没頭していた。女性と思っていたが片方はどうやら私よりも年下な気がする。あどけない笑顔が幼さを際立たせていた。姉妹なのかもしれない。

「新手的、というか彼女達だけの個性的ファッションって奴ですか。あたしには理解出来んね」

「そうだね」

服装はやや奇抜だけとお姉さんっぽい人はこんなお店にいるのが不思議なくらい上品な雰囲気を感じていた。右側の横髪をくるりと大きく一回だけ巻いた特徴的な髪型は彼女の異質さをさらに助長しているけれど、ポテトを齧る仕草等から滲み出る雰囲気はそれを打ち消す程の物だった。妹さんっぽい人の方はサイドだけ外側に跳ねたショートで、後ろ髪はセミロングに片側だけまとめたサイドアップだった。こちらは言っちゃ悪いけれど子供っぽくてこういう店にいてもおかしくないと思える。

時折聞こえてくる単語はこんなに静かな店内なのによく聞き取れ

なかったが、辛うじて「先輩」という言葉だけはしつかりとキャッチできた。つまり二人は先輩後輩関係らしい。後の言葉は音量としては盗み聞きに十分なはずなのに、外国語の様に聞こえたのだった。多分だけれど分からない会話をしていたって事かな。

「もう食べられないのか？」

私が過剰に人間観察に集中してしまった所為で止まった手を瑠衣はつつく。

「うっん、まだまだお腹空いてるから平気だよ」

「おう、ならいっぱいお食べ」

そう言っ瑠衣は私の方にトレーをずらした。成程、瑠衣はもう駄目なのか。気持ち悪そうに口元を押さえていた。

「そうそう、これからどうするのさ？」

「これから？ 家にそのまま帰ろうと……」

「いやそういう意味じゃない。一色さんだよ」

「……うん」

とうとう本題に入る様だ。私は塩気の強いポテトをこちらも塩まみれになってしまった指で摘まむ。

「いつそのこと告白しようかなって」

「……本気で言ってる？」

「半分は」

私だっ分かってる。一色さんは私の事を微塵も知らないだろうし、出来たばかりの恋人を見限る様な人じゃないはずだ。基本的に瑠衣だっ私の事を応援してくれるだろう。だけど今はあまりにタイミングが悪い、だから避けた方がいいという意味で言ってくれたのだ。勝算なんて零だった。

「これ以上私がのめり込まない内にきっかけが欲しいのかも。だってこれっっておかしい感情だから」

女が女を好きになるなんてやっぱりおかしいよ。

「そんな事無いぞ。人を好きになる事におかしな所なんて絶対に無い、あり得ないさ」

瑠衣は優しいからそう言ってくれると確信していた。だけど私自身この感情に戸惑いを抱いているんだからしょうがないんだよ。好きなのに、好きになりたくない。

「私さ、昔から人を好きになる事が無くってさ」

「そうだったな」

「だからこの感情に気付いた時、最初私は女の子が好きな人種なのかなって考えたんだ。ほら、生涯女性だけを好きになる女性っていうでしょ？」

私はレズビアンというカテゴリーの為の言葉を口にするのを躊躇った。

「最初はそれだと思ってたんだ。でもやっぱり違うみたい。私、戸惑ってる」

「それって単純に初恋の戸惑いなんじゃないか？ 初恋の相手が女性だから発生してしまった戸惑いで、自分の生理的な嫌悪とは別だったりしないか？」

「……わかんない」

正直、分からない。自分が分からない。

もしかしたらこの感情すら自分を乙女に仕立て上げようとしている本能が纏った羊の皮なんじゃないかな。本当は恋なんてしていない、実際はやつぱり一色朱水という綺麗な宝石を指につけたいだけなのかもしれない。それこそ、飾りとして。もしそうだったら何て厭らしい感情なんだろうか。皮の中の動物はきつと狐なんだろう。

私の中に私はあるのに、その私を理解できないでいた。

「だからきつかけが欲しい。多分振られればそれでけじめがつくんだと思う」

「そんな……理由かよ」

「消極的過ぎるかな。始めから振られるの前提だなんて」

でも出てくるのは薄らとした笑みで、自嘲の心しか浮かばなかった。

「若菜の心がそれで回復方面に向かうならあたしも後押しするよ。」

でも傷が深まるだけならあたしは助けない」

瑠衣はそのボーイッシュな雰囲気をもっと強めて熱く睨む。怖いけれど、それは友情の裏返しなんだろう。

「私は……これ以上あの二人を見ている方が傷つくと思う」

「……………そうか。分かった、なら応援してあげる」

瑠衣は私の前のトレーを再びずらし、二人の間に持つてくると数本を鷲掴みして口に放り込んだ。

「涙で流す分の塩分は確保しとけよ」

「……………うん。ありがとう瑠衣」

この季節はまだ朝は涼しくて登校するのに快適だ。周りの生徒も皆汗に湿る事無くてくたくたと歩を進めている。私もイヤホンを挿しながらやや曇り空の町を歩いて行く。今日は朝から体育で非常に心も軽い。最近の体育は私でも一応それなりに出来るバレーボールだから楽しみだと感じられた。これが冬ならきつと持久走になって一番嫌な曜日になってしまふのだろうけど。

信号待ちの群衆のお尻に並ぶと横から肩をつつかれる。振り向くとそこには隣のクラスの豊島さんがいた。豊島瑞穂、彼女は非常に交友関係が広くて全てのクラスに友達がいるという凄い女生徒だ。女子サッカー部で大活躍らしく、度々後輩女子から熱い視線を送られているというモテっぷりだったりする。今日もさわやかなショートが風になびいていてかっこいい。うん、モテるのも納得だよな。

「おはよ小縫ちゃん」

「豊島さんおはよー。今日は朝に部活無いの？」

豊島さんは私の肩に置いていた手を戻して髪をポリポリとかく。

この男性的な仕草が後輩を熱くさせるんだろう。



「いやー寝坊しちゃってさ。こりゃ後で走り込みだろうね」

「大変だね」

「いやーただ夢中に走るのも気持ち良いから好いんだけどね」

それは快活な彼女に非常に似合ったセリフで、ただそれを聞くだけで彼女への親愛感が湧き上がる不思議な言葉だった。

「お、一色さんだ」

豊島さんは信号待ちの車の列を指差す。そこには黒塗りの大きい車が停まっていた。周りの一般車に比べてそれはあまりに異質で、皆の視線を集める存在感だった。

「うーん運転手さん付きってほんと御嬢だな」

「一色さん見えないんだね」

スモークがばっちり入っている為後部座席の方は全く中が覗けない。朝に一目でも拝見出来たらどんなに嬉しいか。

「信号待ちが嫌で『ここからは歩いて行きます』的な展開にならないかなあ。顔見られたらなんか今日の運勢良くなりそうな気がするんだよね」

「なにそれ」。豊島さんって面白いね」

「えー、だってあの美人さんだよ？ 見るだけで御利益ありそうっしょ」

「う、うん、綺麗だよな」

この人は大つぶらにこんな発言をして許されるキャラクターなのか。何て羨ましいのだろうか。隣の男子グループがチラリとこちらに視線を配る。

「あー、あんな子侍らせてみたいい！」

「は、はべ……？」

往来のド真ん中でもない事を言う人だ。まるで自分が上の様な……。そこまで思っただけ私はある事実気付いた。

小縫若菜はあの人を下から仰ぎ見た例しか無いのだった。上から見た例が無いのだった。付き合いたい、そんな感情を持っているはずなのに対等という立場ですら仮想した覚えの無い私だった。たっ

た一度ですら上からの視点で彼女を捉える例の無かった、常に自分を下にして欲望しているにすぎない私。

「あは、ごめーん。おかしな事言っちゃって」

彼女は私の赤くなつた顔を見て勘違いをした。彼女のちよつと不埒な発言で私の乙女回路が起動してしまい、こうなつたと思つたのだらう。本当はそんな理由じゃない、私は惨めさと悔しさで今でも泣きだしたいだけなんだ。

「あ、私急いでるから。一応朝練メンバーに顔見せとかないと放課後の部活を締められちゃうからさ」

信号が青に変わると豊島さんはその場で足踏みをし始めた。

「うん、ばいばい」

お互いに手を振るとその距離は一気に広がって行つた。何て足の速い人なんだろうか。

きっと彼女は自分に大きな自信があるのだろう。だからモテるのかもしれないね。私なんて何をしても苦勞して、周りの友達と支え合わないと大きな事も出来ない人間なんだ。そんな私に一色さんが振り向いてくれるはずもなかった。私に気付いてくれるはずが無かつた。

「もう……嫌」

もう嫌だ、こんな感情ばかり抱いて私は最近の日々を過ごしてしまつている。しょいこんでしまつた砂袋は強<sup>こわ</sup>ついでいて、肌<sup>こわ</sup>に気持ち悪く密着してくる。

もう逃げ出してしまいたい。今日……今日にしよう。

放課後の騒がしい空気の中、体育館裏だなんて在り来りな場所で

私はあの人を待っている。最初は心臓も騒がしく跳ねていたけれど次第に世界と私を分離する事ができ始めてから落ち着きを取り戻してきた。

足音が聞こえる。人が通ると分かるからという理由で砂利が敷き詰められているここを選んだのだった。一瞬先の覚悟をしたかったから。

「来てくれたんですね」

「お手紙ありがとうございます。字からして女性だとは分かっていたのですけど……」

彼女は自分を呼び出した相手が同性だということで、呼び出され慣れているはずなのに何所かおどおどとした空気を噛みしめている。「それで、どのような御用件でしょうか？」

社交性の高いであろう憧れの人はこんな状況でも綺麗な顔で笑顔を作って魅せている。今すぐにも手を伸ばしたかった。

「分かつちやわないかな？ 私ね、女だけど……」

上手く言葉が出ない。

「えっと……」

上手く舌が動かない。

「その……」

いけない、泣きそう。

「御名前は？」

彼女としては助けられたつもりはないのだろうけど、私はその閉じられた質問のおかげで何とか自分を保つ事ができた。

「小縫若菜、です。一色さんと同じ二年だよ」

同じ部活だよ、とは言えなかった。彼女がもう書道部をやめてしまっているというのもあつたけれど、そんな物よりかつて同じ空間で時を過ごしていた私を彼女がまるで初見の様に捉えているのが辛かったから。その瞳が辛かったから。

「小縫さん、ね」

「うん」

しかし一色さんの言葉はそれ以降続かなかった。綺麗な曲線を描いている目をこちらに向けてただ私の言葉を待っている。

そんな状態でだけでも一分程の猶予を確保できた私は彼女から隠した拳を更にぎゅっと握りしめ、最後の決心をした。

「私、一色さんが好きです。ずっと前から、ずっと前からです」

嘘をついた

「そう……ありがとうございます」

一色さんは決して声色も構えも変えずにさらりと返す

「前から……」

あの子に勝つための、そんな嘘だった

「でもごめんなさい」

どうせ振られるんだ、分かっているんだ、だから嘘ついたっていいでしょ

「貴女と私って、同性でしょう？」

なのに一色さんの嘘には酷く憤りを覚えた

「だから、そういうのは無理です。本当にごめんなさい」

自分の事を棚に上げて、私は結局流してしまった涙を彼女に見せつけて怒りを投射した。だけど彼女にはきっと私の怒りなんて伝わらないだろう。

「ごめんなさい。私、もう行きますね」

三度目のごめんなさいを残して彼女は離れて行った。彼女が道に沿って曲がり角へと消えて行った直後、私の足は力を失い膝頭を砂利に打ち付けてしまった。

痛い

そのまま地べたに座り込み放心のままに空を見上げる。せめて晴れ空だったら私の心も少しは癒されただろう。しかしあるのは灰色の雲だけだった。青一点すら見つけられなかった。

いや、今は青を見たくないのかもしれない

「若菜……」

声をかけられて初めて横に瑠衣が立っている事に気付いた。砂利道で他人の気配が分かるからという理由でここを選んだ癖に察知できなかつたみたいだ。

「ほら」

薄手のハンカチが目の前に差し出される。それはどちらかという  
と男性向けのデザインで、瑠衣らしい一面が窺えた。

「ありがとう」

でも上がる手が無かった。無気力感は本当に私の体を蝕み、体を動かす事を拒否した。

「……目、閉じて」

彼女はしゃがむとそう言った。私はそれに従い熱くなった目をぎゅっと閉じた。また涙が頬を伝って行くのが分かった。

「こりや家の人にばれちゃうな」

私の目尻を優しく拭いながら瑠衣は小さく呟いた。きっと目が赤くなってしまうという意味なのだろう。

「今日はさ、あたしん家泊りだよ。そんでさ、明日一緒に学校サボるっぜ」

目を開くと目の前に優しく微笑む瑠衣の顔があった。

彼女の奥遠くに雲の欠けた部分を見つけた

でもその一片の青に、私は憎しみを感じる事は無かった

数日が経ち、私の傷も心身共に薄くなって来たある日曜日のことだ。  
った。

いつものメンバーで遊んだ帰りに喉が渴いたので近くの公園に寄って自動販売機を探す。やっと辿り着いた販売機前で自分の財布に一万円札と合計百円以下の小銭しか入っていないという現状を痛いほど思い知らされてしまった私は、暑さ熱さを感じながらとぼとぼと歩く。このまま公園を突っ切ってコンビニでも探そう、そういう魂胆で歩を進める。

すると、出会った。

一色朱水、そして尼土有

そこで私は二人がキスをする所を目撃した。

私はその時、二人の関係を広めてしまおうと悪巧みを思いついて

しまった。

きつとそう、これは復讐なんだ。

あの嘘の復讐。

皆から奇異の目で見られると良いよ

復讐という言葉は何故か気持ち良かった。きつとそれは相手の動向に怯えたり、相手の心を傷つけたりする事に恐怖心を覚える様な、下からの感情じゃないからだと思う。相手との距離を開けた喜び、突き放せた快感、それが私を歪ませていた。

皆からの視線に耐えられるような二人だったら

その時は精いっぱい応援するよ

好きだったよ、一色さん

じゃあね

私は乾いた喉を理由にして走って公園を抜けた。水分が足りてないからか、目からは何も流れなかった。

第六話 少女達 / 7 (後書き)

小縫若菜、  
こぬいわかな、  
かなわぬこい。



それでも彼女、椒ちゃんは何所か遠慮がちに動いていた。いつもなら振り返る事の無い廊下での一緒の行動、しかし今日の椒ちゃんは私を遠くから眺める様にちらちらと振り返り見る。お互いの立ち位置的には数歩も離れていないのに、凄く遠かった。

私は彼女の揺れる跳ね毛に視点を合わせながらも口を開く事はしなかった。多分椒ちゃんは私と目が合ったと思っっているのだろうけど、その実私は彼女の瞳を見ていなかった。視界に収めていたが直視する事を避けていた。

また跳ね髪が揺れる。

ぎこちないというのだろうか、私はどうにも椒ちゃんと言葉を交わせずにいた。彼女から流れてくる緊張が私を呪っているのだろう、口を開いた所で息は止まる。だが生きる為に呼吸をしなければと、思いだしたように生命活動をやり直し、そして黙るのだった。

食堂の前に着くと彼女が止まる。私もそれに釣られて止まる。まるで距離を保ちたがっているみたいだ。

キリと鋭く赤い目が私を射抜く。しかしそれでも彼女は口を開かなかった。彼女の瞳を覆う色は困惑に近かった。

昨日と違って今日は食堂に先客が二名仲良く座っていた。

「おはよ二人とも」

「おはようっす！」

「ええ、おはようございます」

横に並んで座っている二人は黄と白に輝いていた。二色は混ざらない印象があつたけれども不思議に馴染んでいる。

あ、由音ちゃんが真つ黄つ黄な可愛い花で、アイシスが白い今にも融けてしまいそうな花つて事で。

表情豊かで賑やかな由音ちゃんと、静かに世間を観察するアイシス、随分とタイプの違う二人だけど割りと気が合うみたいだった。きつとお互い専門分野が被っているから話が合うんだろうね。

「有様……」

入ったら直ぐにドアの脇に滑ってしまった椒ちゃんは、部屋を出てから初めて声を上げた。

「私はちよつと用事がありました……」

一步、また一步ドアへと近づく。その体は私に向けながら、だけれども心はドアの外へと向かっていた。

「う、うん。そっか、なら仕方ないね」

嘘をついている、分かってしまう自分が憎い。彼女の陰の落ちた繕い笑顔は直ぐに後ろ姿へと変わる。

（はあ……私何してるんだろう）

自己嫌悪程ではないが自分に対する失望は抱かざるを得なかった。こんな時でも私から椒ちゃんにいつぱいいつぱいに寄り添ってけば上手くいくかもと考えている自分もいたけれど、私の足はそんな勇氣を持ち合わせていなかった。

見えている好意というのはこんなにも人を鈍らせるものなのか。贅沢な悩みだとは分かつてはいるけれど、それでも迂闊に動けないというのは辛いものだった。

今まで好意を受けた事の無い私がどうしてこうなつたんだろう。

「椒さんは食べないんっすか？」

床を踏みしめている感覚を得られない足を擦り動かして何とか椅子に辿り着いた私に由音ちゃんはそう訊いた。

「うん、用事だって」

「そうなんすか。もう用意してあるんっすけどね」

なるほど確かに、机の上には五人分の食事が用意されていた。

「アケミはどうしたのですか？」

私がアイシスの前に座ろうと椅子を引くと、アイシスが不思議そうに尋ねる。私と一緒に朱水が来ると思っていたのだろう。

「朱水はもうちょっと寝たいみたい。結構疲れていたみたいだね」

一度は起きたんだけど、私の顔を見るとおはようとだけ言って再び頭を枕に置いてしまったのだった。

「へー、あの鬼神さんでも疲れるんっすね」

由音ちゃんは楽しそうに危なげな事を言う。ここに椒ちゃんがいなくて良かったよほんと。

「なら三人で頂きましょうか」

アイシスは俊敏にフォークを掴んで見せびらかす様に擡もたげる。余程お腹がすいているのか。

「あ、執事さんは良いのかな？」

自然に五人前の食事を受け入れていたけれど、よくよく考えたら執事さんだつて食事を必要とする体なんだから、並ぶべきは六人前が妥当なんじゃないか。しかし事情を知っている口ぶりだアイシスが答えてくれた。

「あの人は良いのです。どうにもアケミと食事をとるという行為に抵抗がある様でして」

根っからの従者気質だそうで、たまに開かれる朱水と使い魔さん達の食事会にも参加しないという徹底ぶりだそうだ。なら仕方ないのかな。

戴きますの言葉の後に各々食事に移る。今日は人数が多いのであらかじめ全てのメニューが小皿に分けられて一人一人に配られていた。

「そう言えばスガエはアケミと一度だけ協力したと聞きましたが」  
アイシスはぺろりと全ての小皿上の有機物を平らげると、その速さに驚いている私達を見返した後、由音ちゃんに訊ねた。

「協力つすか？」

「ええ、第一との戦いにおいてアケミと削強班が協力したと聞きました」

ああ、この前の事を言っているんだな。私が初めて自分の力を理解して使った時だ。

「正確にはあれは第一じゃないんっすけどね。まあ確かに自分達は朱水さん有君とチームを組みましたけど」

「その事について少しお聞きしてもよろしいですかね？」

アイシスは机に頬杖をつけて片頬を潰す。

「うーん、まあ多少なら」

由音ちゃんは乗り気では無い事をその声で表わす。しかしアイシスがどうしてもという念を込めた視線を送るので由音ちゃんは頭を傾けながら頷いた。

「アケミがいると訊けない事があるのでこういう機会があると逃がす訳にはいかないのです」

成程、朱水がいるとまずい話なのか。でもそれなら昨日すれば良かったのにと、当たり前の疑問が浮かぶ。

「自分達に関わる事は答えられないっすけどそれで良いなら」

「ええ、構いません。必要なはその特殊な第一についての知識なので」

咳払い一つ。

「まず始めに、影<sup>かげ</sup>とやらは一体何なのでしょう」

アイシスが言った影<sup>かげ</sup>というのは、あの「形<sup>けい</sup>」と対となる「影<sup>えい</sup>」とは別物で、黒い生き物の事だ。多分だけどね。

「それが実はまだそれほど分かっていないんっす。かつてこの世に存在していた第一の姿を模した物、しかしその本性は大分違っている、という事は間違いないです」

「ならば奇跡はどうなっているのですか？」

奇跡とは多分霊力とか魔法みたいな力の事を指しているんだろう。いやはや、私はそっちの方面には全く知識が及んでいないので彼女達がこれから始めるであろう会話について行ける自信が無かった。

「持っています。ですけどそれも史書に書かれているくらいの大掛かりな物ではなく、大体が体内に秘める物ばかりです。この前の麒麟を模した影は結局すばしっこいだけだったですし、人間の体に寄生していた時だって体が伸びたり縮んだりしていたに過ぎないっすから。まあ形の異常性と、触れないという特性は明示すべき特徴ですな」

「そう、そこなのです」

アイシスは待っていましたと言わんばかりに仕込み網を引き揚げ

る。「物理的干渉ができない存在をどうやって排除したのですか。そこが知りたいのです」

アイシスの求めている物はどうやら影を倒した方法だったらしい。けどどいつたいその知識を仕入れてどうするのだろうか。

「はあ。ですけどそこは分からないとしか言えないっす」

「分からない？ それはどういった意味で？」

「いや、だって見てないんっすもん」

「見てない？ でも貴方達が対処したのでしょうか？」

どうやらアイシスは朱水から最後までは聞いていないみたいだった。いや、さっきの口ぶりからして、あえて朱水が話をぼかしたのかもかもしれない。だから知識を譲ってはくれない朱水がない今を狙ってアイシスは聞き出しているのだろう。

由音ちゃんは少しだけ顔を真顔に近づける。どうやら彼女も二人の間で交わされたであろう流れを推知したみたいだ。

「自分達では無いっす。最期を見届けたのは鬼神さんとその有君の二人だけっす」

アイシス是由音ちゃんの視線を追ってその赤い目をこちらに寄越

す。椒ちゃんと違って異様な程に赤いその瞳は私を研究対象として映している様だった。直観的に理解できた。

「ああそうだったのですか。アケミはそこをうやむやにしてボクに教えてくれないのですよ」

「それまたどうして？」

「さあ、分かりかねます。普段ならボクに何でも相談してくれたりするんですが、どういう訳か影との事件に関しては奥底に引っ込めてしまうのです」

触れて欲しくないのでしょうか、アイシスはちよつとだけ眉尻を下げる。もしかしたらアイシスには知って欲しくない情報なのかもしれない。でもあの時の状況で何か不味い事なんてあるとは思えない。それに元々由音ちゃん達と一緒に行動する筈だったんだから、私以外の誰かに知られては不味い事なんてするはずない。私と朱水しか知らないというのも、たまたま他の三人が遠くに行っただけなんだから。

「それにしても意外です。貴方達がそう言った所を『知らないまま』でいる』だなんて」

その言葉に由音ちゃんはへへと笑う。

「自分も一応鬼神さんに訊いてみてはと言ったんですけど、先輩方がその必要は無いと仰るもんでして」

そう言っつて片手で器用に畳んだ生ハムを口に入れる。その必要は無い、か。矢岩君達にとつて必要な情報はあの黒い物が消えたという事実だけなのだろうか。

「では今、目の前にいる当事者に訊いてみるというのはどうでしょう」

アイシスは私を手で指し示す。話の流れからこつちに剣先が向かつて来るとは思っていたけれど、由音ちゃんを味方につけてからだとは思わなかった。アイシスが単体で来るなら由音ちゃんを壁にして何とか逃げられるかもと考えていたのに、二人に求められたら答えられないよ。

「というわけでアマツチ、良かったらその時の状況を我々に教えてくれはしませんかね？」

「自分も多少の興味はあるっす。あ、その事は上に報告する事は無いんで安心して欲しいっす」

ビシリと敬礼の構えをとって元気良く宣誓する。既に終わった事案であり書類の提出は疾つくの疾うだから、今更加筆修正する必要が無いからの話だ。赤の他人なら信用するには頼りない言葉だけれども、由音ちゃんなら信じられそうな気がする。今だって一応は私を守るために傍にいてくれるんだから。それにさっきも同じ事を言ったが、元々知られるはずだった物を教えるだけなのだから。

朱水だつてどうしても口外して欲しくない情報だったのなら釘をさしているだろうし。

「わかったよ。でも何から話せばいいのかな。私って何も知らないからどういった物が重要なのかとか分からないよ」

「そうっすね。なら鬼神さんが鬼化した後からを教えてください」  
き、きか？ きかかって帰化？ 色々音は該当する言葉を知っているけれどどれも当てはまりそうにない。

「きかかって何？」

聞いた覚えの無い単語につけからつまずく。こんな私の供述が果たして有識者二人を満足させられるのだろうか。

「そっか。有君って鬼って物を知らないんっすね」

「え、鬼ってあれでしょ。角生えて虎の腰巻の赤い怪物」

青い鬼とかもいるよね。黄色はいるのかな？

「丑寅の鬼門から生まれた姿ですね。それも確かに鬼です」

アイシスは私の言葉でクスリと笑う。どうやら二人が言っている物と私が思っている物は別物らしい。でも鬼って言ったら誰しもあの姿を思いつくと思うんだけどなあ。

「自分達の言う鬼というのは第二なんす」

第二、つまりそれは私達の事だ。

「なら私も鬼なの？」

「いいえそれは違うんす。ちょっと分かりにくいと思いますが、『第二』という分類に含まれる存在には複数種あるんっす」

「その大部分は単純に『第二』と呼ばれる存在、つまりアマツチがそうですね。そして他にもいくつか別の種類がいるのです。いわば種族ですね。例えば人魚、あれは第一と勘違いされ易いですが歴とした第二なんです。つまりアマツチのお仲間なのですよ」

本当に？ 人魚が私達の横に並ぶだなんてちょっと信じられないや。

人魚という単語を耳に入れて、かつて朱水が半魚人と発言していたのを思い出してしまいつい吐息を漏らしてしまう。二人は私の不自然な思い出し笑いに首を傾げた。

「同じ第二なのに種族名が付いているのとそうでないのがあるというので、慣習的にアマツチ達のような存在を『魔』と呼ぶのです」

「へーそうだったんだ。第二イコール魔じゃないんだね」

「そうなんす。まあでも普通は第二として指摘されるのは魔ですから、この事を知らなくても間違いはしませんからね。そしてっすよ、魔の中にちよつと特殊な存在がいてですね、その魔達を更に分けて『鬼』って呼んでいるんっすよ。鬼神さん、朱水さんがこれに当たるんすね」

「特殊？」

特殊ってどういう事だろうか。朱水は私と大して違わないと思うんだけどなあ。そりゃ持つっている力は全然違うだろうけど、人魚と私ほどの開きがあるとは思えない。

そしてふと朱水の下半身が人魚の様に魚になっている様を妄想する。……黒髪人魚、アリかも。

「鬼に化けると書いて鬼化。有君は鬼化を目の当たりにしたはずっす」

「あ……」

確かに私は朱水の姿が変わっていくのを目撃している。あれが鬼化って奴なのか。



「じゃああれが『鬼』の姿なの？」

「それは違います。鬼の姿はまちまちで、鬼として固定の姿は定義できず、外見で決めることは不可能なのです。『鬼』という分類の根拠はその変身能力なのです。以前教えた形と影の関係は覚えていますか？」

「う、うん。多分平気」

確か形が見える姿の事で、影がイメージだったはず。緩く捉えると確かそうなるはず……はず。虚とかいう単語も聞いた覚えあるけどそんな物はもう覚えてないっ。

「鬼という種族は形が後天的に変化できる存在を指すのです。形というのはその者の本来予定されている姿を指すのです。生まれた時の姿、成人した時の姿、今わの際の姿、どれも違うはずですがどれもその人物の姿としては『彼』であり、唯一つなのです。つまりその人物にとって『形』は一つなのです。連続体としてですが」

「う、うん」  
正直、全く分からんですもんもー。多分だけど、形という物は変わらないのが普通だって言いたいんだろう。

アイシスがあまりに難しい事を言うもんだから、私は脳に糖分を回そうとパンに塗るジャムを更に追加した。うん、梧さん特製ジャムはやっぱり美味しい。

「ですが鬼は形を変える事ができるのです。魔の中で後天的に形を変える事ができるのは極一部だけであり、鬼として分類される彼等はその冠だけで強者として扱われる程です。何故なら鬼化は異形に近づく、つまり第一に近づく現象であり、第一は第二よりも強力でされているからです」

ほうほう、今のはちよつと理解出来たぞ。要は人間と猛獣の関係と同じなんだろうね。猛獣に変身出来ればそりゃ強いさね。でも朱水の変身後の姿ってそこまで「異形」って感じしなかったけどなあ。「ちなみに先程出た人魚ですが、あれは異形と認識されています。その為この世界を闊歩できずに、我々の認識から外れた地域に居を

移しています。人の姿から外れたモノは人間側の圧力から、人から離れて生きる事を強要させられている。聞いた事がありますか？」

「うん。朱水から聞いた」

やっぱりそれって日本だけの話じゃ無いんだ。世界各地で同様の決まりが発生して、異形の者は排除されてしまったんだね。

それにしても意外なのは人間であるアイシスが第二の肩を持つような発言をする事だった。由音ちゃんもアイシスの今の発言を驚いた顔で受けていた。まあ、学者さんだから多角的に多視点的に物事を捉えられるのかもしれない。私も正直な所、長い間人として生きて来たから、異形とされている第二達が排除されるのも分かってしまっただった。人間個々の力は小さいからその場その場では間に合わないはずで、自分達を守るためには集団で力を纏い、事前に対処をするものなんだと。異形というのが力の象徴なら、まずそれを集団で排除するのが一番効率的なんだと。

はは、こんな事を朱水の前で言ったらきつと首を絞められてしまっうね。でも朱水のひきつった顔って言うのも興味があるかも。ま、試さないけどね。

「かつての第二は人体を補給しないと生きてはいけない体をしていたので。しかしとある切っ掛け、日本では共存提言を機に第二が人間を捕食する回数が一気に減少しました。まあ人体の中で再生が容易な血液の採取だけは許された場合が多いですが、それでは量が足りません。ましてや異形の者達は人里に近づけませんから無理難題を押しつけられたのです。また、血液だけの採取が許されたのは『生かさず殺さず』の考えが合った為でしょう」

全滅に近づけば必ず危険因子の大量発生に近づきますからね、アイシスは淡々とそう言った後、小休止の為に牛乳を注いで一気飲みをした。

いつしか私はアイシスの言葉の裏に潜む人間不信の様な暗がりがある。その小さな体から滲み出てくるのを目撃したくないが為に、アイシスと由音ちゃんの間を避けてしまっていた。一体アイシスの身

に今まで何があったのだろうか。魔法院というのは大変な所だと聞くから色々溜まっているのだろうか。

「力の及ばぬ海外に逃げるといふ手段もあるにはありましたが、結局は現地の魔狩り者達によって締めあげられるだけでした。つまり本来ならばこの時点で第二、大部分は魔とされている者達の多くは淘汰されるのが当然でした。しかし世界が彼等を救ったのです。たった数年でそれぞれの国の第二は進化と呼べるほどの補正を受けました。そしてそれは異形の者達にも適応されたのです。世界の選択は危険因子の増産ではなく、全体の改変だったのです」

……なんとも凄い話だ。つまりアイシスの言葉を信じるなら人魚はまだこの世界の何所かで、私達の知らない地域で生き延びているのか。人魚だけじゃない、他の魔以外の第二だってこの世に生き潜んでいるのだ。夢があるのか畏怖されるべきなのか。

由音ちゃんはコホンと小さく可愛い咳払いをすると無理矢理に話を元に戻した。

「それで、朱水さんは姿が変わった後にどうやって影を排除したんですか？」

削強班である彼女にとってアイシスの発言は良い印象を掬えないんだろう。だけど由音ちゃん自身今ここにいる理由からその言葉を訂正させる意味が無く、そもそも前から朱水の家に通っているアイシスであるため、由音ちゃんもあらかじめ多少は覚悟していたのかもしれない。折角気が合っていた様なものにもつたいない。いや、それを乗り越えてこそその友情かな。アイシスだけじゃなく、由音ちゃんのあの大人っぷりならできそうな気がする。

「そうでした、その様な話でしたね」  
「うん」

アイシスは自分でも口が滑りすぎたと思ったのか、こちらも咳払いをして誤魔化す。なんだろう、ついでに私も不慣れな咳払いをお見舞いしておいた方が良いのかな。

「アマツチ、続きをどうぞ」

「うん。えつとね私が足止めして、朱水が消したの」

「はあ、消した、ですか」

「うん、良く分からないけど手を突っ込んだら消えていったの」  
そうとしか表現できない現象だった。

「手、っすか」

由音ちゃんは小さい掌をグーパーグーパーと開閉する。

「うん、朱水があのお腹に手を突っ込んだら煙みたいに消えていったの」

「それだけっすか……ほんと凄いつすね」

確かに凄いとしか言えないのかもしれない。鏡さんのあの魔法にすら何ら反応を示さなかったのに、朱水にかかれば一突きだったんだから。

「アマツチ、その消え方について教えて頂けないでしょうか」

由音ちゃんが目を輝かせているのとは対照的に、アイシスは珍しく非常に険しい顔を作ってみせた。なんだろう、アイシスは朱水の行為に対して怒りを覚えているみたいだった。

「消え方？」

「ええ、煙の様にと表現しましたね。それはつまり真上へ上っていったのですか？」

「いや、そう言えば違ったかも。確か……」

「そうだ、地面に消えていったんだ。確かに煙みたいになっただけど、驚く事に、その後地面に吸われていったんだよ」

まるで雫が大地に吸われるみたいに、アレは吸いこまれていったんだ。重力とかによるきれいな落下じゃなく、何所かに吸われる様に落ちていった。

「そんな……馬鹿な」

「アイシス？」

アイシスは怒りに震えた様に更に眉を立たす。どうしたのだろうか。

「アケミがどうしてボクに詳細を教えてくださいなかつたか分かりまし

た

「どういう事っすか？ 全然見当がつかないっす」

「押し戻したのですよ。層を無理矢理に突き破って」

アイシスの言葉に由音ちゃんも息を呑んだ。お皿にフォークが落ちた際の金属音が響く。

やばい、恐らく一番重要な点のはずなんだけど発言の意図している意味が全く分からない。層という言葉は恐らく初めて聞いたはずだった。

「そんな馬鹿な！ いくら鬼神さんが強力だからとして、どうして層を弄くれるんっすか」

「弄くった訳ではないのです。自分の身を削って押し戻したんでしよう」

「そんな出鱈目な……」

どうしよう、話が見えないんだけど。二人の口ぶりからとてつもなく重要かつ深刻な話だというのは理解できるけど、如何せんその内容が汲み取れない。

「ああ、有君は理解できないっすよね」

そんな私の顔を見て察してくれたのか、由音ちゃんが説明してくれるみたいだ。お皿の上に最後まで残っていたニンジンをちよつとだけ覚悟の表情を作ってから飲みこむと、フォークを置いて私に顔を向けた。

「層という物は御存知っすか？」

「いいえ、です」

「層って言うのは三つあるんす。神層、霊層、物層の三っつす。これらの中で自分達が生きているのは物層ですな」

ポケットに入っていたボールペンとメモ帳を取り出して、同心円を四重に描く。そして一番内部の円に神層と書き、そこから外側に向かって霊層、物層、虚と各円に書きこんだ。

「こっつすね」

そして物層の円に棒人間を書きこんだ。これが私達の位置という

意味だろう。

「層というとやっぱ何を思いつきます？」

「うーん、その絵を見るとバームクーヘンを思い出すかなあ」

「おお、いいっすね。じゃあそのバームクーヘンだと思ったださ  
いっす。この周りの虚以外を層と呼んでいるんですね。虚はバーム  
クーヘンから見た空気がって感じっすかね」

そう言つと由音ちゃんは再び絵に何かを書きこみ始める。神層の  
円の中に『神』と、霊層の円の中に『霊体・第一』と、物層の円の  
中に『生物・物体』と加えた。

「一般的に、まあ自分達魔法使い達にとっての一般的ですが、こう  
いう風に層という物を捉えているんです」

そして由音ちゃんは虚と物層の境目の円から神層の円までを太い  
線で結んだ。

「そして虚が全ての層に届くようになってるっていう考えっすね」  
アイシスは由音ちゃんの描いた絵を横から静かに眺めているが、  
その目は賛同も否定もしていない様だった。ただ眺め、無言で過  
す。

私もじつくりとその絵を観察する。そしてとあることに気付いた。

「神……様？」

「ああ、これっすか」

神層という円の中には確かに神という文字が書かれていた。それ  
っつつまり、神様が確かに居るといふ事が分かっているっつという意  
味だろう。

「有君が考えている様な神様とは別物っすよ。これは宗教的な神で  
はなく、概念的な神の事っす」

「う、うん」

「えーっつっすね、有君は神様っつっていると思っつすか？」

神様かあ。日本は宗教に関わりの無い人々が多くて私もその一人  
だけど、だからと言って神様が絶対にいないという否定の心は持ち  
合わせてはいないかな。宇宙人と同じで実際に見てはいないけれど

いてもおかしくなかつて感じ。世界としてはいるのが当たり前で、たまたま私達が発見してなかっただけなのかもしれない。まあ神様も宇宙人も実際に見てしまうと大混乱が起きると思うけどね。

「いないとは思いつけど、やっぱりいてもおかしくないと思う」

自分でも曖昧な答え方だと苦笑する。しかし由音ちゃんは私の答えがむしろ良かったらしい。指をパチンと鳴らし私にウインクをする。

「それですよ。それが共通意識にある絶対的存在の感知なんですよ  
な、なんですよ？」

「絶対……感知？」

「絶対的存在、それが魔法使いが捉えている神の在り方なのです。人類は常に、どんな時代においても絶対的存在をその肌感じてきました。それは一派にとつては神なのかもしれないですし、他派にとつては先祖の霊かもしれないですね。大山もそうでしょうか」

「つまり『よく分からないけど大きな存在』、つて事？」

「素晴らしい答えです」

どうやら正解の様だ。アイシスは満足げに頷き、由音ちゃんはパチパチと手をたたく。年下二人に褒められるというのも不思議な感覚だや。

「それは空だったり、大地だったりするんす。母なる大地、父なる天つすね。人間は人間以上に強大な存在を何所か求めている傾向があるんす」

へー、確かに憧れの的な感情もあるかもしれない。怖いって言う感情よりもありがたみという感情の方が勝っているかな。でもそれは宗教観の違いから来るものかもしれないね。

あ、そっか、宗教的な話じゃないんだっけか。

でもやっぱりその存在がいるという状態でこの世界が回っているんだとしたら、やっぱりありがたみを感じてしかるべきという考え方もできるか。

「ここに書かれている神は我々が予想しているに過ぎないっす。で

すが願望だけで公言している訳でもないんつすよ？」

「へえ。どういう理由からなの？」

「スガエ、それは……」

私が由音ちゃんに更に詳しく訊こうとするとアイシスは難色を示した。由音ちゃんもしまつたと手を口に当て、誤魔化しにっぴりと蕩け笑みを作る。どうやら深くは教えられない模様だ。

「そっか、なら層について教えてよ」

「助かるっす」

由音ちゃんは作り笑みを解き、それでもまた微笑む。こっちの方が由音ちゃんらしく可愛らしい表情だった。

「神と同じで霊というのも存在していると考えられているんす。それがこっすね」

由音ちゃんは霊層という円に描きこまれた霊体という文字を指で摩る。

あ、思い出した。そっいや昔、朱水も層がナンタラカンタラって言っていたや。あれは確か掃除の時間に、幽霊についての話の時に一瞬だけ。

よくまああんなちょっとの出来事を覚えていたもんだ。こっという記憶力をテストに使えない私ってほんとお粗末だよ。

「そして霊と同等の位置に第一がいると考えられています」

アイシスの言葉に合わせて由音ちゃんは指を横に動かし、今度は第一の文字を摩った。

「つまり幽霊と同じで見えないって事？」

「素晴らしい、アマツチは招待したくなる程に優秀ですね」

「そ、そうかな」

御世辞と分かっているにも褒められる事は気持ちの良い物だね。

「物層と霊層の関係は上下左右等の位置的なものではなく、裏表の関係に近いです。神層を含めると三重的に存在しているのです。同じ世界が三つ存在し、それぞれに違った物が泳いでいます。そしてその三つの世界は同じ所に重なり合っているのです」



むむむ、優秀と褒められたばかりなのに全然理解できない自分がいる。

「互いの層の住人は自分の層以外を覗きこむことはできません。ましてや干渉もできません。……というのが基本の考え方です。ですが実際には覗く事も干渉することもできます。アマツチもテレビ等で見た事があるでしょう」

ああ、それが霊能力者って人達なのか。その、層の違いとやらを乗り越えて見てしまう目を持ってるのが為に、見てはいけない物を見てしまっているって事だろう。除霊という行為は層への干渉って事で良いのかな？

「果たしてテレビに映る霊能者が本物かどうかは置いておいて、実際に霊能者は存在しており、我々と通じています。院の教授にも何人かいますね」

アイシスが言うにはその人達の御蔭でこの層という概念ができあがったらしい。見えていない物を否定するのではなく、何故見えていないかを研究する姿勢の果てに掴み取った事実だとアイシスはべた褒めしていた。研究者としての尊敬が向かうのだろう。

「しかしアケミは決して層に干渉したわけではありません。何故なら彼女は純血の魔だからです。魔は地球によってつくられた存在、その身に層への干渉能を与えられるはずがありません」

「つまりアケミは除霊的な事をした訳でもないんだね？」

「除霊、ですか。ああ干渉の事をそう解釈したのですね。確かに除霊も霊層に留まる霊体に干渉している事ですから正しい解釈です。少し話は脱線しますが、悪霊という物も層の違いを乗り越えてしまった例として挙げられますね」

なるほど確かに。こっちからあっちに干渉するのが除霊で、あっちからこっちに干渉するのがポルターガイスト現象だったり憑き物だったりするんだね。

「また補足的に述べると、同じ霊層の住人である第一という者達は古代において実際に人間達の目の前に姿を現しています。これは第

一が層の転移を可能としている為だと考えられています。悪霊は物層に姿自体は現さずに層を越えての干渉のみを行っていますが、こちらは姿までも現しているのです。ただこれは受肉を行っているの層を越えての干渉とは言えないですね」

ああ、確かに今までの説明だと壁画に第一とされている生き物が描かれている事が矛盾点になってしまってもんね。つまり幽霊よりも第一の方が上等という訳なのかな。

「物層に姿を現すという事はつまり、こちらからの干渉も可能となるのです。そして運よく崩壊に導く事が出来たなら、物層では死という状態を迎えるのです。霊層からはもう存在を転層という行為によって消し去っていますから、完全に消える事になりますね。しかし、今回現れたその第一の影とやらはどうやら干渉ができないと聞きます。これを基に、ボクはその者達が第一よりも霊体に近い存在だと推測します。何故ならそれらは霊層に留まりながらも、物層に姿の『影』のみを映し、そして干渉を行っていたと考えられるからです。故にこの事実気付いたアケミはその様な暴挙に出たのでしよう」

「成程……その考察、上司に伝えても平気ですか？」

由音ちゃんの要望にアイシスは未だ眉を微妙に吊り上げながらも快く了承の意を伝える。流石は学者さん、実際に目の前にした出来事ではないのに誰よりも状況を把握してしまっていたみたいだった。それなのに微塵も得意気な雰囲気醸し出さないんだもの、本当にできた子だ。

「じゃあ朱水は何をやったの？」

「そうですね、先程言った通りアケミが行ったのは端的に言えば押し戻しですね」

押し戻し、か。イメージで言うなら朱水が層と層の間の壁にある麒麟を押しつけている絵が浮かぶ。ちよつと暴力的な絵面かもしれないけど、朱水っぽいと思ってしまうにやけてしまう。

「押し戻しっすか……正直聞いた事の無い方法っすね」

「それは恐らく実例が殆ど無いからでしょう。第一と向かい合った第二なんてそうそういませんからね。今回の影とやらは性状としては霊体に近い様ですが、本質はやはりその姿の通り第一でしょうからね」

「ああ確かに。第一の存在期間と被っていないすからね」

「アマツチ、再び問いますが形という物は何だったでしょうか？」

アイシスは急に私に問いを投げる。その顔はやはり微かな怒りが滲んでいた。

「え、形って言うのはさつき言っていた通りその人物の姿その物なんじゃないの？」

「正解です。……アケミはですね、その形を削ったんですよ」

形を……削る？ 私にはアイシスの口から出た言葉の意味が理解できなかった。しかし由音ちゃんはしっかりと理解した様で、口を閉ざし目を伏せた。

「えっと、形って姿その物なんだよね。だったら朱水の体の何所かが無くなっちゃったって事？」

もしかした朱水の裸を見ると私は驚愕に膝を崩す事になるのだろうか。だけどそんな嫌な想像はアイシスの首を横に振る動作でかき消してもらえた。

「形という物が姿なのは正解です。ですが肉体という意味だけの姿ではありません。アマツチ、例えば貴方はアケミにどのような形容詞を用いますか？」

「け、形容詞？ え、そりゃ綺麗とか、美人とか、ちよつと……暴力的？」

私の思いきって言ってしまった最後の単語でアイシスは少しだけ頬を和らげる。なんだか朱水を渡し板にして繋ぎ合えた感じがして嬉しい。人の噂話ばかりしている人はきつとこつという感情に溺れたいんだろつなと理解してしまった。

「そうですね、時にアケミは暴力的になります。まあそこは置いておいて。姿というのはこつ言つた風格も含むのです。そして形とい

う定義まで行くと、その存在価値、存在意義、可能性までもが内包されます。そして魔においてはその霊力の大きささえも形として認識されます」

「それってつまり……」

朱水は自分の力を犠牲に麒麟を消した、って事なのか。

待つてよそれって……

「それって！」

「はい」

つい自分を制御できずに立ちあがって、机に乗り出してアイシスに迫ってしまった。無関係のアイシスを責めているみたいで馬鹿なだけだと分かってはいるけれど、せざるを得なかったんだ。不安と怒りが私を熱する。

ああ、アイシスをさつきから支配していた感情がこれなのだろうか。

「それって朱水は大丈夫なの？ 健康体でいられるの？」

「……わかりません」

「分からないって……アイシス学者さんなんですよ？」

「専門ではありません故」

「そんな……」

したくない、こんな事したくない、だけど私は熱せられて弾けてしまう。

そんな私を黙って見守っていた由音ちゃんが冷ましてくれた。

「有君、まずは座りましょう。ね？」

「……うん」

ありがとう、言葉にせずに脳内で由音ちゃんへの感謝を響かせる。今は高ぶっていて無理そうだけど、いずれアイシスにも謝らなきゃ。手作りお菓子も持つて行ったら許してくれるかな。甘いもの好きだと嬉しいな。

「専門ではありません。しかし現在のアケミは平常と言える様ですし、大きな影響があったとは考えにくいです。彼女とて領主なので

すから考えて行つたのでしよう。緊急時には領民の保護のために牙を剥かなくてはなりませんからね」

「そう、ならいいんだ」

「こんなにアマヅチに思われているアケミは幸せ者でしょう」

アイシスはある態度を取った私に対しても温かい表情を見せてくれた。如何に私が幼いか、いや如何に彼女が大人なのか思い知らされる。器の大きさが段違いだった。

「形というのは虚から作られ、再度虚に戻せます。それを……そうですね、分かりやすく言えば虚をエネルギーにして麒麟の影を押し戻したのです」

「押し、戻した？ それってつまりまた戻ってくることもできるって事？」

アイシスはしばらく下くちびるを指でつまんで考察し、ゆっくりと頷いた。

「安い言葉になってしまふのですが、『可能性は否定できない』です」

「そんな、代償を払ったのに結局は元に戻って来られちゃうだなんて」

「しょうがないんつすよ。相手が相手つすから」

由音ちゃんも目を空の皿に向けながら小さく呟いた。

第一を相手にするってそれ程の事なのか、私は今初めてその恐ろしさを知った。

しばらく無言で誰も彼もが時を貪っていた。虚無感とも少し違う不思議な感覚が私を覆う。朱水が無事だったという安心と、朱水は常に危険な選択肢を持っているという不安が私をかき混ぜる。

ただどいつまでもこうしている訳にはいかない。ここは年齢的に

は一番のお姉さんである私が動くべきだ。

「アイシス、お願いだからこの事は朱水に黙っててくれないかな」

この事とは、私達が朱水の行為に気付いたという事実である。

「どうしてでしょうか？」

「朱水だって覚悟の上でやった事だし、危険な事だって自覚があるからアイシスに伝えなかつたんだもん。だからその事で責めるのは止めてあげて欲しいなって」

アイシスは私の目を三度の瞬きを混ぜて注視した。

「分かりました。しかし全く動かないという訳にはいきません。アマツチへの焚きつけをしておきましょう」

「焚きつけ？」

アイシスは人差し指を一本立たせ左右に振る。

「ええそうです。アマツチ、貴方がアケミの傍に立ってあの人を制御してあげてください。アケミは無茶をする御仁です。その役を担うのがボクでないなら、もう選択肢は貴方しかいないのですから」

「うん……わかった。私頑張る！」

期待されるのは嬉しかった。私自身の力には全くと言っていい程に自信は無いが、朱水に対して言葉をかける位ならお安い御用だ。

「アイシス」

「はい、何でしょう」

「さっきは、ごめんね」

予定通り後でお菓子を持ってアイシスに会いに行こうとは思っけれど、今ここでも言うべきだと確信した。きっと彼女の包容力なら私のごめんも今受け付けてくれるだろうと思つて。

「自分も有君にあれくらい心配されたいっすね」

「何言ってるのさ、由音ちゃんだって同じだよ。だから余り無茶しないでね。お姉さん心配しちゃうからさ」

自分でも真つ向からこういうセリフを吐くのは恥ずかしかつたけれど、今は気が大きいから何だつて言える気がする。

由音ちゃんは可愛く頬を染め上げて応えてくれた。

「お話中失礼します」

いつの間にか食堂に入って来ていた梧さんが急に声を上げたので、私達三人は驚きで座高を高めることとなった。

「ど、どうかしたんですか？」

礼儀正しい梧さんが他人の話を遮るだなんて珍しく、つまりそれは何かあったのだと推測できる。

「アイシス様が以前に御依頼されていたので、その件についてご報告を。今から来られるそうです」

「……今からですか？」

梧さんのよくわからない言葉でアイシスは椅子から慌てて立ち上がる。その顔は切羽詰まっていた。

「はい、あの方が来られるそうです」

「……ボ、ボクはちょっと出かけてきますね。アオギリ、彼女は一体何日ほどの滞在でしょうか？」

「一晩こちらに御宿泊されて、明日には御帰りなられるそうです」

「ならば一日だけ何所かで遊んできますね」

そう言い捨て、アイシスは走ってそそくさと食堂を出ていった。

一体何なのだろうか。あれ程までに本に執着していたアイシスがあっさりと本を放り出して退散するだなんて、余程の人物が来るのだろうか。

梧さんは報告を終えるとそのまま帰ろうと体を回転させる。しかし今の会話から察するにここに『危険な』誰かが泊まるというのだから、私としても無関係ではなく、恐れと好奇心を纏いながら質問しても許されるだろう。

「梧さん、一体誰が来るんですか？」

やはり梧さんは律義に足を止め、再び体を回転させて私達に顔を向けてくれた。

「御嬢様のお知り合いの方です」

うん、それは大体分かる。けどあのアイシスの反応の異常性ときたら。

「どういう人なんですか？」

「……あの方に関しては私ではなく槐姉様にお聞きになられるとよろしいと思われます」

梧さんはそうとだけ言い置いて私達のさらなる問いかけの出だしを無視して、飛び出ていってしまった。もしかして梧さんにとっても苦手な人なのだろうか？

「どうする？ やっぱここに泊るって事は私達も関わるんだろうね」「うーん、一応ああ言われたのですし槐さんに訊いてみるのもありかと」

だよねー。気になってしまったのだからしょうがない、例え後悔する様な話になってもここで引くよりかは気分的にましだろうに。だって、必ず訪れるんだから。

私達はお互いに頷きあつて立ちあがると、ちゃちゃっと食器を整え、とりあえず槐さん搜索へと旅立ったのだった。

この広い屋敷では行き違いも連鎖するのか槐さんはなかなか見つからず、搜索中に本当に屋外へと出ていくアイシスの後ろ姿なんかを見つけたりして時を過ごす間、由音ちゃんは私にぴったりとくっついて来てくれた。妹という物にちょびつと憧れる様になって来た私にとってその行為は正に弱点であり、槐さんの姿を探すよりも実は由音ちゃんの姿を眺めている時間の方が長かったりする。由音ちゃんはまだめに探してくれているみたいだから正直申し訳ないです。でも、嬉しくてつい見ちゃうんだよね。

そうしている間にも刻々と出発予定時刻は迫って来てしまってい



るので、槐さん未発見の状態のまま出発の支度の為に解散する事になった。やっぱりアイシスのあの態度が気がかりではあったけど、遅刻はいけないもんね。

とは言っても支度なんてもうとっくにしている為、お互いに身だしなみ整えて荷物を持つただけだった。まずは由音ちゃん、それから私の部屋に二人で訪れてそれで終了、非常に短時間で済んだ。ついでに由音ちゃんの部屋を覗くと、そこには何故か巨大なクマのぬいぐるみが備えてあった。部屋を決めたのは朱水だろうから、このぬいぐるみは由音ちゃんの為に置いてあるのだろう。まさか常備してあるわけではなさそうだし。由音ちゃんはそのぬいぐるみの頭をポンポンと叩き、行ってくるっすと声をかける。何てほほえましいのだろうか。

槐さんを探すのを一度諦めてしまった私達は、鞆を持ったまま玄関近くの副応接間として使われている待ち合わせの部屋でのほほんとした時を待つ。流石に鞆を持ったまま屋敷を歩き回るのは気が引けたためだった。

ここにはテレビは無い為、お互いにお喋りするしか無く、二人で幾つか言葉を交わして過ごす。私の隣に座る少女は足を上げたり下ろしたりして暇を潰していた。

由音ちゃんはいつもの鞆だったけれど、その中身までどうやらいつも通りの様で結構な大きさに膨れていた。よかつたら鞆の中見せて欲しいという好奇心から以外の何にでもない要望に由音ちゃんは快く応えてくれ、目の前で鞆の口を開いてくれた。

鞆の中にはかつて見た大きなクリアファイルが二つそっくりそのまま入っていた。

「由音ちゃんこれ今日持って行くの？」

流石に不要なんじゃないかと思ったのだけれど、

「一応緊急時に必要な書類ですし、ここに置いて行くというのも気が引けるといっつか」

と言う由音ちゃんの答えに納得したのだった。なるほどね。

キレイ系よりもカワイイ系と表現した方が良い化粧ポーチの中には多少のメイク道具が詰めてあった。そこまではよくある普通のポーチだったんだけど、得意気に由音ちゃんが一度閉じて再び開くと、何とそこにはポーチにぎりぎり入るくらいの長いナイフが仕込まれていた。こつちとしては自慢げに見せられても反応に困るんだけどね、はは。

その後由音ちゃんを取り出したのは、以前に彼女の部屋で見たあの高いフレグランスの小瓶だった。

「由音ちゃんよくそんな高いの買えるね」

「まあ自分の就いている職業なんて命擦り減らしている物っすからね。高給なのは当然っすよ」

成程、警察とかそういうお話じゃないもんね。まともに死因にぶつかっていく職業なんだもん。

「汚い話だけど、実際幾ら貰えるの？」

「んー、教えて欲しいっすか？」

「欲しい欲しい！」

あ、そこ、決して私はお金にがめついわけじゃないかね！

「具体的な給料額は無いんっすよ」

「どういう意味？」

「貯水槽方式なんっす。常に一定額が預金通帳内に表示されているんっす」

んーっと、それってつまり……

「給料無限？」

「まあ形式上はっすね。でもやっぱり使い過ぎると文句言われますから」

「うへえ」

いやいや、それでも凄いや。何ってこつたいその財力は。

「だとだと家とか買い放題なんだ建て放題なんだ」

「だから使い過ぎは駄目っすよー。怒られちゃいますもん。それと不動産は所持禁止っす」

どうやら処理が面倒ならしく、家等の買物物は禁止されているとの事だ。処理というのは……その人物の死亡後のやり取りを指すらしい。死に直面しているのが分かりきっているので、簡単に動かす事の出来ない建物などを財産として所持する事はあらかじめ禁止しているから、そう由音ちゃんは何の事は無いという口ぶりで語っていた。なんだかそんな彼女を見てると切なさが込み上がって来たのだった。

「だから自分含め、全員が賃貸物件なんっすよ」

「へー」

私はそれ以外にも口外して良いと由音ちゃんが判断した裏ネタを幾つか教わったりした。何と言うか私を知る由の無い世界だから仕方ないのだろうけど、凄い刺激的な内容ばかりだった。中には本当に口外して良かったのだろうかという話もあり、後で由音ちゃんが怒られないか不安だった。

出発時刻まで後二十分になると使い魔さん中で一番の仲良しカッブルが現れた。

「お待たせしました」

「今日は天気良くて最高ですね！」

柵ちゃんは梓ちゃんに引っ張られる形での登場であった。梓ちゃんは物凄く張り切っている様子で、腕をぐるぐる回すスピードがいつもの三割増しだ。

外出というので、二人共私服だ。梓ちゃんはどちらかというと男の子向けのハーフパンツを履いていた。多分梓ちゃんが海に突っ込んで行くのを見越しての柵ちゃんを選択だろう。上着はシャツに可愛い感じの薄手カーデを重ねている。柵ちゃんはいつも通りにロングスカートの落ち付いた服装だ。スカートと同じ色のチュニックにアームカバーをつけている。

「梓ちゃん嬉しそう」

私の言葉に梓ちゃんは顔をさらにほころばす。そのまま頭をクシヤクシヤになる程撫でてみたい欲求に駆られる程の威力だった。

「だってお出かけですもの！」

「そっかあ。お散歩楽しいもんね」

「はい！」

梓ちゃんは柵ちゃんの手を離すと由音ちゃんの隣の椅子に大きな鞆を置いた。その大きさは由音ちゃんの鞆ですら入ってしまいそうだった。一体何を詰め込んでいるのやら。

「ねえねえ柵ちゃん」

梓ちゃんの耳に届かない様に小さな声で柵ちゃんに語りかけると、柵ちゃんも空気を読んで小さな声で応えてくれた。

「はい」

「あの子、梓ちゃんって外に一人で出かけられないの？」

「はい、その通りです」

「でもあれくらいの子なら結構普通に外出歩いているよね」  
梓ちゃんは確かに他の使い魔さん達から見たら小さいけれど、でも幼稚園児程に小さいわけでもないんだから一人で出ても良いと思うんだよね。それに人間と違って皆と同じ様に何か特別な力を持っているはずなんだから。梓ちゃんだって一人でも外出したげだったもん。いや、柵ちゃんと一緒の方がもっと嬉しいかもだけれど。

「そうなのですが、如何せんあの子は特別でして」

「特別？」

特別、か。一体この屋敷で聞く何度目の特別という音だろうか。

由音ちゃんの横で鞆の中身を全部取り出して確認している梓ちゃんを見るに、さほど特別な何かを感じる事は無いけれど。

「あの子、人を寄せ付けるんです。それも異性だけを」

「うわ、何それ」

ちよつとびつくり、お姉さん引いちゃったよ。

「私も良く分からないんですけど、あの子の力は『誘惑』だそうなんです……ちよつと御外に一人で行かせるわけにはいかないんです」

う、うん、そんな事情なら仕方ないね。……でも、『誘惑』、か。再び目線を梓ちゃんに戻すと、彼女の幼い笑顔が咲き乱れていた。こんな子が誘惑って。一体どんな事になるんだか。

「その、やっぱロリコンさんとか付いてきちゃうの？」

「いえ、相手の趣味嗜好は関係無いみたいなのです。年齢も幅広く、幼子や御年配の方までふらふらと自分の意思に関係なく吸い寄せられてしまうと」

うわ、大変だそりゃ。だからお姉さん達が必ず付いて、寄って来る人達に帰ってもらっているのか。梓ちゃん一人だとうまく離脱できなそうだもんね。

「難儀だね」

「はい、相当です」

私達はしばらくあどけない梓ちゃんの横顔を見つめてその苦勞の生き道を考えていた。そんな二人を横に彼女は由音ちゃんと楽しそうにおしゃべりを続けていた。

梓ちゃんが荷物の確認を終え、再び仕舞い終わると大体出発予定時刻になっていた。時計が鐘を打つ。

「朱水と椒ちゃん遅いね」

「御嬢様はお電話に出られています」

「ああもしかして今日来るって人の？」

梶ちゃんはコクコクと頷く。もしかしてずっと通話しているのかな。さっきの探索中も朱水を一回も見ていないからね。椒ちゃんはチラリと見かけたけれど、遠くにいたので声はかけられなかった。

「あのさ、その人ってどういう人なの？」

梶さんに訊けとの指示だったけれど、見つからないんだからしょうがない。果たして梶ちゃんは答えてくれるのだろうか。

「華苗様ですか。そうですね、大変賑やかな方です」

おお、どうやら梶ちゃんにとっては普通に答えられる存在みたいだ。

「賑やかかあ。何歳なの？」

「二十七歳だったと記憶しております。素敵な方で、御嬢様の憧れの方です」

「へー。……へ？」

「あこが、れ？」

「憧れってどういう事？」

「……………」

「おーい、柗ちゃん」

答えが返ってこないなのでその顔を覗きこむと、柗ちゃんは私から思いつきり目を逸らして何かを考えていたみたいだった。

お姉さんには分かるよ、きっと今君は何味のオブラートに包もうか悩んでいるんだろうよ。

「大丈夫大丈夫、柗ちゃんを責める事は絶対に無いから安心して吐露ってね」

「は、はい」

「で、どういう事なの？」

「えっとですね、その……かつて御嬢様が憧れを抱いていた方でして、今現在では御嬢様が実質的所有権を持っている会社の社長を若くして務められている御方です」

「へ、朱水って会社持ってるの？」

「まずそれが驚きだよ。なんてことだい。」

「はい。大企業ではありませんが立派な物をお持ちになられています」

「もしかして朱水的生活費、というかここの運営費ってそこから抽出してるの？」

「その通りです」

うへえ……朱水ってどんだけ凄いなだよ。その人が社長なら、朱水は会長とかそいつた役職なのかな。朱水の謎な収入源がひょんなところから発覚したなあ。

ってまた思わずにお金の話になっちゃってるし。私が意図的にそ

んな話にしたんじゃないんだからね！

「華苗様は御親戚の方でして、不安定な頃の御嬢様の様子を見にとよくこちらに足を運んでくださったのです。御嬢様も華苗様を姉の様に慕い、その、何時しか姉妹愛と呼ぶには大きすぎる感情を持っていられた時期が御座いました」

もっとも今では尼土様が御嬢様の愛を一身に浴びている事は間違いのですが、柗ちゃんはそうやってフオーロ―気味に言葉を締めくくった。

「ねえ柗ちゃん、それ以前に朱水が好きになつた人っている？」

「……この様な主の情報あまり口外すべきでは無いとは分かっているのですが、私自身が尼土様には知っておいて欲しいのかもしれない」

柗ちゃんは唾を飲んで一呼吸置く。彼女にとって朱水の私事を口外する事は心を削る行為なんだろう。先程からちらちらと横の二人がこちらに耳を傾けていないかの確認をしているくらいだ。

「私が知る限りでは御嬢様の心を引き寄せたのは華苗様、そして尼土様の御二人だけです」

ほうほう。……という事は、朱水の女好きはその人が原因なのかもしれないなあ。

「んで、その人今日泊まりに来るんだよね？」

「はい左様で」

「そっか」

朱水の初恋の相手が、今日来るんだ……。

「尼土様、大事な点が一つ御座います」

「ん？」

「御嬢様は恐らく華苗様に抱く感情を理解しておりません。自覚しておられないのです。故に御嬢様自身に対してこの件に関しての発

言は控えて頂きたいのです」

「そう、なんだ」

「はい。間違い無く気付いてはもらえないでしょう。ですが確実に一種の……大きな感情を抱いてはもらっしやいました。もしかしたら……」

いつも通りに目を少しだけ閉じている柗ちゃんは二回言い淀んだ。一つ目はきつと恋心という言葉を私の前で使うのを避けたからだろう。でも二つ目、一体彼女は何を言いたかったのか。

もしかしたら、まだ……

私が話を深める覚悟を中々決められずに柗ちゃんと床とを交互に見比べていると、柗ちゃんは何かを察知したように背筋を伸ばした。

「来られました」

それは私の体をも痺れさせる言葉だった。

「もう、来たの？」

「も、申し訳ございません。来られたのは御嬢様の方です」

私の反応が大きかったために誤解をしたのが伝わったのだろうか。

柗ちゃんは大きく頭を揺らして謝った。

「いや、良いつて。それに朱水だったんだから平気だよ」

何が平気なのかは言及せずにはいたかった。

柗ちゃんの言葉通りに直ぐに朱水は登場した。

「遅れてごめんなさいね」

その顔を見ると私の胸の辺りで何かが軋んだ。

「電話が長引いてしまって」

その笑顔で私の何かがキシキシ鳴った。

「どうしたの有？」

朱水はにこやかに私に問いかける。

「朱水、嬉しそう」



「何を言っているのよ。当然じゃない」

当たり前な事を訊くなど、朱水は言う。

「尼土様？」

「嬉しいんだ……」

嬉しいんだ、朱水

直後トタトタという音を響かせ朱水の後を追って来たかの様に椒ちゃんが入室した。

「申し訳ございません、権姉様に捕まってしまいました」

……………

「こんな服、無理です」

椒ちゃんは私と目が合うと顔を真っ赤にして体を両腕で隠そうとする。

「権さんの趣味、なのね」

私の驚きの隙間から辛うじて引き抜き出せた言葉を、椒ちゃんは全力で身振りをもって肯定した。

「嫌だっけ言ったのですけど」

黒と白。ごてごてしたフリルが主張激しい。

その椒ちゃんの様相に私の中の黒は吹き飛んでしまった。

第六話 少女達 / (終) 「今私が好きと言ったらどう答えますか」

今私が好きと言ったらどう答えますか

波の音が聞こえる。

混じる少女たちの声。

連なる戯れの喜びは、未だ遅れ寒さの海を温めていた。

少女たちの周りにいるのは幾らかの海の者、そして迷い込んだ一匹の野良犬。その野良犬はビーチボールを追いかけて来た少女、梓の手を嗅いで一度吠える。梓はその鳴き声で目をぱちくりとするが、自分の足の間に頭を擦り込んでくる犬の温かさに歓喜する。犬と戯れる梓を羨ましく思ってたか、柵は寂しそうに歩み近づくと未だ梓の足に自分の首元を擦りつけている犬の尾を撫で擦る。犬は梓の股を潜り通ると今度はしゃがんでいる柵へと飛び付く。

人懐っこい犬ですね、柵は二人を追ってきた少女達にそう語りかけた。

有は少しだけ怯えながらもその犬の頭をつつこうとするが、犬が俊敏に避けるので中々上手くは触れなかった。そんな姿を朱水が笑う。

その少し遠くでは、椒と由音が腰を並べていた。椒は何をするでもなく広げられたビニールシートの上にその白黒い服を飾る。ビーチパラソルの下にいるからといって日差しは照り返しにて容赦なく彼女を熱していた。それでも彼女は涼しげであった。暑さ寒さには滅法強いのであった。冷めきった目を伏せて砂粒を覗む。

隣に座る由音は魂の抜けかけた椒を気にかけているのか、普段は

見せない親密さで何かと椒に関わっていた。今までは声はかける事あっても能動的に椒に関わる事はあまりなかったのだが。

椒はそんな由音の行為にも何を感じるでもなくただ受け付けて過ぎるだけだった。普段ならいぶかしげに眉をひそめるかなんたりするはずであるが、今日は自分の心に余裕を持ち合わせていない為か、飲み込む一方であった。

椒の口にプレッツェルのチョコ菓子を挿しこむ由音は楽しそうだった。

「椒姉様？」

目の前に柵のやや閉じられた目が並んで初めて自分が呼ばれている事に気付いた。

「どうかしましたか？」

椒は答えず、柵の目をまっすぐと見つめる。しかしその視線には何も意思が籠っておらず、見るという行為意図だけに限られたものだった。

「もしかして何所かに不調が？」

そもそも彼女達にそう簡単に『疲弊』という症状が現れるはずが無いので、柵は体の機能の停止を疑う。しかし椒の首の動きによって否定された。

「そう、ですか」

「平気よ。どこもおかしくないわ」

心配するなと御菓子を口に含みながら器用に告げる椒。しかし柵は離れる事無く椒の隣に座る。

「お、それなら自分が梓さんと遊んできていいですか？」

「はい勿論です。遊んでやってくださいな。あの子も喜びます」  
「やったー」

柵は由音の底抜けに楽しそうな声に口角を上げる。

由音は跳ね立ち、最後に一本椒の口にプレッツェルを突き刺すと、手を大きく振って犬の周りにいる少女達目がけて走る。

「元気ですね」

「羨ましいわ」

椒の意外な言葉に柵は思わずその顔に奇異の目を向ける。しかし椒の何処かへ意識が飛びかけている様を認めると砂へと視線を移した。椒は刺さったままの数本のプレッツェルを口から引き抜くと、一本一本食べ始める。

「美味しい」

「私にも一本頂けますか？」

「珍しいわね。柵が物を口にしたらがるなんて」

そう言いつつも椒は由音が残した菓子箱の箱を取り、柵へと差し出す。

「たまには世に触れてみたくもなります」

「そう、ね」

柵は箱から一本抜き取ると、その先端を少しだけ食んだ。

「梓を放っておいて良いの？」

「今は梓よりも危なっかしい方がいますもの」

「そう……」

柵は素足をビニールシートの上からはみ出させ砂の上で滑らせる。

普段扱う砂とは違う質である事が愉快さを招くらしい。

「尼土様ですか？」

「……そうかもね」

柵は椒が素直に認めた事に内心驚くが、最近の彼女からしたらそれくらいの変化はあって当然なのだろうと独り結論付けた。足に付いた砂の一粒を指でつまむとそれを弄ぶ。

「分かつてはいるつもりだったのに」

「はい」

「初めから私が選ばれることなんて無いと分かっていたはずなのに」  
「……………」

「でも、だめね。多くを望んでしまうのは愚かだと分かってはいたのだけれども」

「そうでしょうか」

柵は摘まんでいた粒を片手だけで器用に遠くへ飛ばした。椒もそのかけらを目で追うが、当然姿形が類似した同胞に紛れたそれを見つける事は出来なかった。

「望む事に初めから恐れを抱くのは無意味だと思います」

「そうかしら」

「そうですね。だって未来は『無い』のですから」

「……………そうね、私達には未来なんて無いわよね」

椒が落胆の音を込めて組曲げた脚に体を押しつけると、柵は慌ててその体を足から引き剥がす。

「そう言う意味ではありません。未来という物は『まだ無い』物なのですから恐れる必要は無いという意味で言ったのです」

椒は脇腹を掴む柵の手を優しく、しかしどこか冷めた様子で外す。  
「生者は常に見えている恐怖と見えていない恐怖に悩まされるもの。  
私達は生きてはいないけれど、『思う』事ができる以上この二つからは逃れられないのよ」

「……………望むというのはある未来を求める事です。ですが姉様はそれを恐れています。それは未来に恐怖の影を勝手に抱いているだけに過ぎません。既にある物に対して恐怖を抱くなら分かりますが、まだ分からない未来に対して必要以上の恐怖を感じるなんておかしいです」

「その様な考えでは誰も動けないわ。未来を予想して初めて予防線が張れるのだから」

「矛盾しています。現に動けていない椒姉様は未来を予想しているからこそでしょう。動かない事が予防線になるというのはおかしい

「思いになられませんか？」

「それは……」

「それに見えてない恐怖というのは『既存だけれども不可視』という物に対する概念です。未来はまだ無いのですから恐怖に思う必要なんて無いのです」

「……違うわ。未来は必ずきっかけが繋がって起こる事。なら『在る』のと同じ、きっかけを作ってしまうのならそれは既に存在する恐怖なのよ」

「では見えるのですか？　きっかけから姉様は未来が把握できるのですか？　姉様の見ているその世界は確実な物でしょうか？」

「……」

「確かにある程度の予想はつけられるかもしれませんが。ですが必ず一つの予想された世界に辿り着くだなんて一体何所の誰が言えるのでしょうか」

柗は再度諭す様に椒の目を間近で覗きこむ。

「今一番したい事はなんでしょうか？」

「……」

椒は柗の手によって挟まれた両手に目を落として答えようとはしなかった。柗はこれ以上自分からだけの思いで進むのは止めようと思ひ、椒の口が開くのを待ち続ける。何より、今自分が抱いている思いが主に対してどれだけ失礼であるかも分かっていたから。

柗は自分の言葉が如何に子供染みた勢いだけの言葉か理解していたが、それでも椒が動くきっかけになればと思ひ、口を動かし続けた。自分の言葉の泣き所を指摘すればどれだけの時間がかかるものか。閉ざしたくなる口を無理やりにも開いた成果だった。沈んでいる姉ならば騙せると思ったのだった。

柗にとって主と同等に、感情が揺らげばそれ以上に大切である椒の想いを無視する事は彼女には出来なかった。

「どうしたの二人とも？」

そんな時に、この度椒の悩みの種である張本人が横から顔を差し出してきたのだった。手には三本の缶ジュース、その銀肌を流れる水滴は己が冷えている事実を物語っている。

「あ、えつと……」

「別に、何でもありません」

「えー。絶対何か隠したよ今」

二人の不思議な行動を遠目で見ていた有は二人の後方に置かれたクーラーボックスから取り出した冷たいジュース缶を持って突入したのだった。白熱の余り二人は彼女が声をかけるまでその存在に気付かなかつたようだ。

「椒ちゃん、教えてよ」

有は甘える様に椒のヒラヒラの服を引っ張る。それに対して椒はツンとそっぽを向いて断固拒否の構えを展開した。そんな光景を目にして柵は小さく安堵の息を漏らす。

「仲がよろしいですね」

「んあつ、そんな事無いわよ！」

「えー、椒ちゃん酷い」

柵の言葉に二人はそれぞれの反応を示した。

(泥土様凄く嬉しそう。きっと姉様が距離を置きたがっていたから、それが怖かったのでしょうか。私という存在が二人の言葉が混じるきつかけになれたのなら幸いです)

「私は梓の所へ行つてきますね」

「お、柵ちゃんこれこれ」

立ち上がった柵に有は慌てて手に持つ缶を渡す。握った缶は冷え切っていた。

「ありがとうございます」

(私が離れる事に恐怖を覚えていない様、これなら平気だろうか)  
柵は二度大きく礼をするとビーチサンダルを履かずに裸足のまま

梓達の下へと歩き出した。一度目は缶についての感謝の礼、二度目は姉をよろしく頼みますという意図であった。

有は空いた椒の隣を埋める。椒を久しぶりに間近に感じられて嬉しいのか、舞い上がってしまったって椒の分の缶を渡す事をすっかり失念してしまっていた。

「えへへ、椒ちゃんだ〜」

「止めてください気持ち悪い」

「んー良い匂い」

有が椒の髪の毛の匂いを嗅ごうとするものだから椒は抵抗して上半身を逸らす。しかし有も負けじとその頭を追う様に体を傾ける。

ふと気がつくと、当然に二つの顔は横に並んでいた。瞼の開閉が妙に同調した二人はそのまま数秒間見つめ合う。

「……ねえ椒ちゃん。少しお話したいんだ」

有は姿勢を正常に戻して口を横に結ぶ。椒は眉頭を一度上げると小さく頷いた。

有の声色に椒の第六感がキリキリと反応した。やけに馴れ馴れしかったのはその隠し持った何かを覆う為の外套だったのだと。

「私さ、朱水と出会ってから色々変わったんだ。いや、色々なんて単語じゃ駄目だね。全部が、そう、全てが変わったんだよ」

有が缶のプルを引っ張りプシュッと小気味好い音が立つ。そして缶を斜めにしてその飲み口から大量に口内へと中身を流し込んだ。

「今までびっくりするくらい人と関わった事無いんだ。……多分椒ちゃんが今思っている像以上に酷い有様だったと思うよ」

「それは……」

椒は言葉に詰まる。何と声をかけたら正解なのだろうか、彼女には分からなかった。有のその運命は彼女自身の力の所為でもあり、また椒の主である朱水の所為でもあった。

未だ遠くで犬と戯れ続けている主へと視線を送る。

「でさ、朱水が私を引っ張ってくれたんだ。多分真っ暗だった部屋



から、陽の光が当たる屋外へとさ。だから私は今こうして椒ちゃんとお話出来てるの」

「はい。存じています」

「朱水は……私の両親を……その、消しちゃったけどさ」

有は上手く自分の言葉を吐露できずに苦しみながら舌を動かす。

「私は馬鹿だからその事について何も思う事が無いんだ。人が聞いたら恥知らずとか親不幸者とか後ろ指さされちゃうだろうけど」

有は力なく笑う。

「でもさ、私には実感が無いんだよね。両親がいたっていう実感が」

「……………」

「両親だけじゃ無いよ。友達だって出来なかった。クラスでも私は浮いていたんだと思う。いや、浮いても沈んでもいなかったんだろ。うな。多分他の人には見えてなかったんだらうね」

「……………そんな事無いです」

椒は自分でも理解できない否定の言葉を口にした。有がそんな悲しいと思える過去を歩んできた事が悔しかったのだった。余りに自分の想像の及ぶ範囲から離れている為、同情の思いは浮かばなかった。

有は椒の否定を無視して自分の言葉を続けた。

「周りとの繋がりが薄く薄いそんな私にさ、ある日突然一本の手が差し出されたんだよ」

「はい」

「その人はさ、私の知らない世界を連れて来た。そして私を更に知らない世界へと連れて行ってくれた」

「有様はそれをどの様に受け取っていますか？」

有はゆっくり振り続けていた缶をシートの上に置いた。波の音以外の水音が消えた。

「嘘偽り無く、嬉しいと思ってるよ」

「そうですね、御主人様が聞いたらお喜びになられるでしょう」

椒は再び主へと顔を向ける。朱水は由音を抱きかかえて楽しそう

に遊んでいた。

「その世界で色々な人と会った。楽しい事もあったし、怖い事だった。普通の生活じゃ出会う事の無い、死との直面だった。」

「はい」

「クラスの人ともお話するようになった。朱水といつつもいるから友達と呼べる人はいないけど、今までの私が見たらびっくりするよな学校生活を送っているんだ」

「良かったです。本当に、良かったです」

椒にとってその言葉は有が元の世界に戻りたがっている事は無いという証に思えた。

「学校の人以外なら友達だってもう出来ているんだと思う。私の一方的な考えじゃ無かったらだけど」

有は遠くにいるもう片方のグループを見ながらそう言った。

「クラスでさ、私に好意を寄せてくれる人がいたんだ」

「そう、ですか」

好意とはどの程度の物を指すのか、椒は有の言葉の先を少しだけもやもやした心を抱きながら待つ。

「この前直接、その……告白って言う物を受けたんだよ」

「……………そうですか。良かったですね」

棘の生えかかった言葉を椒は吐く。自重するつもりはなかった。

「うん、正直嬉しかった。今までは空気と同じだった私に好きだなんて言ってくれる人がいたんだもん、嬉しくないはずが無いさね」

有は置いていた缶を再び持ち上げると残っている全ての液体を飲み干した。

「でも、断っちゃった」

「それは………そうでしょう」

御主人様とお付き合いなさっているのだから、椒は内心でそう呟く。

「不安だったんだ。だってお互い知らないんだから。知らない人を

好きになるっておかしいもん」

「この世には一目惚れという言葉もあります」

「いや、そうなんだけどさ、一目惚れと実際に付き合うのとは別物だと思う。……皆みたいに『とりあえず付き合ってみよう』っていう発想には持ち込めないよ。慣れてないんだもん」

椒はチラリと有の横顔を覗く。その顔は暗がりを纏っていた。

有の言葉は椒にとって矛盾を内包している物だった。何故なら有と朱水はお互いに一目惚れに近い形だったと聞いていたからだ。少なくとも主である一色朱水は一目惚れだったと推測している。

「そもそも有様は……御主人様とお付き合いされているのですから断るのが道理でしょうに」

「……んー」

椒の言葉に、有は屈み曲げていた背を反らし、空を仰ぐ。

「まだなんだよね」

「まだ？」

有は小さく呟く。笑顔に近い表情であったが、眉は困惑を表わしていた。

「付き合ってはいないんだよね。多分だけど」

「多分、ですか」

「うん。状況的にはお互い付き合っているとは思っているんだけどさ、言葉にはしていないんだなこれが」

「……ならちやっちやと言葉にするだけの話では？ 御二方は相思相愛、間違いありませんもの」

椒は自身の感情から苛立ちを濾過せずに言葉を吐き出す。彼女は酷く頭を煮やしていた。自分の性格を理解していて、また、自分の思いをしつかりと把握している彼女には、自分の感情が有に届いている事くらい分かっていた。その上でこの様な言葉を椒本人に投げかける有に怒りを覚えてしまっているのだった。

有は眩しさに細めていた目を椒に向ける。

「ねえ椒ちゃん」

「はい」

「私の事、どう思う？」

その言葉を耳にした途端、一瞬椒の体が冷えた。強烈な日差しに熱せられているにも関わらず、凍える程に。そして体が一度大きく震えると、次の瞬間熱が爆発した。

「……………りません。分かりません！」

椒は暴れる怒りを顔にして立ち上がる。歯を食いしばり、手を拳に握り。もう彼女には有の思考は理解できなかった。何故本人にその様な事を訊くのか、何故敗者と分かっている者に対してその様な言葉をかけるのか。

椒は初めて有に対して本気の怒り目を向けた。今までのとは違って、赤の感情にだけ浸った火花飛び散る程の代物であった。思わずとも殺意すら混じり込んでいた。

だがそれを真っ向から受け止めた有は、遠くに見える沖の様に落ち着いていた。

「……………私さ、今日朱水に告白しようと思ってるんだ」

「……………すれば……………いいじゃないですか」

「うん。だからさ、椒ちゃんに言わなきゃいけない物があるんだ」

椒の足が一步また一步と退く。走り逃げる事はなかった。その気力すら無かった。

「椒ちゃん……………」

「嫌です……………聞きたくないです」

「ううん、聞いて欲しいんだ」

おぼつかない足を必死に動かして、されど進まぬ体に椒は絶望を感じる。

「椒ちゃん」

有は腰を上げゆっくりと椒の前に立つ。椒は怒りの顔を悲しみの顔に塗り替える。

だが直ぐには言葉が出なかった。有は次の言葉を作り出すのに何

度も失敗し、唇だけが動いていた。そして何度も何度も空回りした後、やっと喉を震わせた。

「私は……椒ちゃんの事大好きだよ」

いつか椒に対して使うべきでないと言解した言葉、それを有はとうとう使用した。

「……………」

言葉だけを受け止めれば何と歓喜されるべき響きなのだろうか。だがしかし、椒は瞳が捉える世界から絶望しか抽出出来ていなかった。

有の顔は決して微笑んではいなかった。いつもの愛らしい顔ではなく、酷く冷たい顔だった。

「……私は……どの様に返答……したら……良いのですか」

溢れだす混沌とした感情に椒は舌をうねらせながらも言葉を返す。「教えてください、私がどの様に返答したら正解なのですか！」

少女は心からの叫びを上げる。

相手の考えが理解できなかった。

嫌いだと言ってくれるならそれを優しさと捉える事は出来たのかもしれない。

だが青の少女は自分の事を好きだと言った。

理解できなかった。

理解できなかった。

「有君……………」

側面から聞こえる声に有が振り向くと、そこには信じられない物を見たと言わんばかりの目を向けている由音がいた。

有の視線から解放された椒は力を失う様に砂浜に崩れ落ちる。

「ごめんなさい……二人の様子がおかしかったもんで」

二人のやり取りに遠目で気付いた由音は、ただならぬ様子に慎重に近づいていたのだった。

由音が椒の方へと向かうと、椒は青ざめた顔を瞬時に俯き隠し、砂を巻き上げて走り去って行った。引かれる様に有の手が伸びたが、その足が動く事は無かった。

「何、してるんすか？」

「さあ」

「さあつて有君」

椒の危なっかしい走り姿を不安げに見守っている由音は、これまた俯いている有の腕を掴んでその肩を揺らす。だが力の消え去った少女にとってその干渉は過多であり、最後の柱であった足を崩してしまう。

一度ぺたりと足を折ったと思うと、今度は上半身を砂に押しつけんとばかりに膝に密着させる。

「有君……」

「由音ちゃんごめん、お願いして良い？」

顔を上げないまま有は椒が去って行った方向へと指をさす。由音は目の前の有を放置する事に多大な不安と抵抗を抱いたが、彼女が指を向けたまま動かないでいるのを視界に入れ続ける事の辛さが由音を動かしてしまう。

「有君……不器用過ぎつす」

由音はそう投げかけると椒の後を追いつめた。

由音の足音が耳から消えてから有は腕を下ろし砂へと預けた。

（知ってる……知ってるよ）

顔を上げて遠くの方にいる朱水達を感情の無い瞳で映す。

（でもこれで、私は前に進む事ができるはずなんだ）

それは突然の感情であった。

愛している人の初恋相手が戻ってくるという出来事が彼女にその

感情を生みださせた。

突然置かれた小さな分銅は、だがそれでも天秤の揺れを強め、闘値へ辿り着かせてしまった。

焦りが作り出す強迫的な感情に抵抗できないか弱い彼女は、その潰される程重い感情から逃れる為に、天秤を揺らす分銅の一つを無理矢理に突き放してしまった。

相手の感情など考えもせず。

そうでもしないと支点柱が折れてしまおうと思ったから。

朱水との繋がりが細まると錯覚してしまったから。

どだい無理な話であった。彼女に色恋沙汰についての察しや思いやりや技術を期待するのは、偶然に水中の小さいガラス球を見つけた確率程に絶望的だった。

無色透明なガラス球は向こうに存在する色を映す。だが例え見つけ出しても彼女の持つガラス球は中の粒子が色を潰してしまうのだろう。濁りを消す為の経験が彼女には余りに不足していた。他者との関わりが希薄だった彼女には。

相手の為の嘘も吐けない、自分の為の嘘も吐けない、そんな濁りきった純粹が彼女にこの様な行為を強制させたのだった。

許されるなんて思っていなかった。

今の関係が壊れないだなんて思っていなかった。

そこまで甘ったるい脳を持ち合わせてはいない。

だから、覚悟はしていた。

案の定、椒を傷つけて終わった。

傷つかせないための嘘を吐く事は出来なかった。  
傷つかせないための柔軟な着地は出来なかった。

彼女は幼すぎた。

「有、どうしたの？」

喉の渇きに水分を求めて戻って来た朱水は、シートの上で膝を抱えている有を目撃する。漂う尋常ではないその渋みに朱水は有の隣に座るといふ選択をする。

「椒ちゃんを傷つけちゃった」

「……その言い方から察するに余程の事なのね」

普段とは違う落ち込み様に朱水は事の重大さを察する。

「うん。多分もう椒ちゃんは私のこと嫌いになったと思う。二度と私に笑ってくれないよ」

朱水は有の背に浮かぶ負の靄に眉をしかめ、その靄を払うかのごとく背を優しく摩った。

「好きだって、言っちゃった」

「好き？」

「うん。いけないのに、嘘吐けなくて言っちゃった」

「好きって言ったのに嫌われたの？」

おかしな事を言うもんだと朱水は軽く笑うが、横の有の落ち込み様を再び目にして両唇を付ける。

「だってそうだよ……好きじゃいけないんだから」

「何よそれ。他者を好きになる事がいけないだなんておかしいわよ」



「おかしくないよ」

「そうかしら。私には分からないわ」

朱水は自分の脳が考える言葉そのままを音にしたのだが、それに刺激された有は朱水に怨みの混じった意思を、視線伝えにぶつける。

「だって朱水じゃん」

突然の有からの理解できない感情に朱水は戸惑いを浮かべる。

「朱水が……朱水が……」

ポロポロと溢れだす涙、その意味の不明さに朱水は更に戸惑う。

しかし痛みすら覚える姿を前に、理解できずともただ優しく受け入れてあげたいと少女を抱きしめる。

倒れかけている柱に手を差し伸べる。

その重さを支えられる自信があった

柱に施された彫刻を愛していたから

守るためにどんな力だって使える気がした

「そう、私が悪いのね」

温もりを含んだ音色に少女は興奮から覚める。

「あ……違う……そうじゃないの」

手を相手との間に挿し入れて、自分の身を剥がそうとする。しかし、朱水は更に力を込めて有を逃がさない。

「いいのよ。きっと本当に私が悪いのよ」

直撃した感情の熱によつて、朱水は少女からとつさに零れ落ちた言葉に偽りが混じっていない事を察していた。例えそれが何を示しているのかが分かっていたいなくても、自身に責任がある事くらい理解できた。

「だから私にぶつけないさいな。私は強いから平気よ」

「違うのに……違うのに」

嗚咽で口が回らなくなり始めた有を朱水はしっかりと、されど優しく抱きしめた。

「朱水……好き」

嗚咽が止まり、有の呼吸が整い始めた頃、彼女はそう囁いた。繋がり無の言葉に朱水は疑問符を浮かべる。

「どうしたのよ。自棄でも起こして私にも嫌われないとも考えた？ 残念だけど私は貴女に好きと言われても嫌いになんてなれないわよ、絶対に」

「好きなんだよ朱水」

「……ほんとどうしたの？」

理解できない意図に流石に薄らと嫌気が差した朱水は、思わず力を弱めてしまい有を離してしまう。

目の赤い有はこの涙に流れる弱い海風によってでさえ崩れ流れてしまいそうに脆い印象を与えた。

有は疲れ切った面持ちで呆然と言葉無く宙を見つめる。朱水はしばらく彼女を見守るが何も行動を起こさないので、自分一人では手に負えないと悟り面倒見の良い櫛に助けを求めようと立ち上がった。倒れかかってくるのを押さえる事はできるが、倒れないよう補強する手立てを知らなかった。

しかし朱水が立ちあがると有は飛びかかる様にその手を掴む。

驚いた朱水はその狂気すら感じる瞳に引き込まれながら立ちつくす。

ほんの一瞬だが、生理的な恐怖を感じ取った。不気味だと感じてしまったのだ。得体の知れない獣を前にしている、そんな気分だった。

だがやはり動かない。これでは埒が明かないと思い手を解き放つてしまおうと決心した刹那、有が立ち上がった。

「ねえ朱水」

「……………」

理解できない有にかけ言葉は無く、朱水は彼女の言葉の続きをやや睨みを利かせて待つ。

「付き合ってください」

「……何よ」

滑り落ちた言葉は予想を遥かに超えたものだった。

「だから……………付き合ってください。お願いします」

「それって恋人としての意味よね？」

朱水言葉に有は小さく頷いた。その目に力は無く、そもそも朱水を見てはいなかった。

「呆れた……酷くお粗末ね。私そこまでロマンチストではないけれど、せめてもうちよつと雰囲気良い状況で言っただけで欲しかったわ」

朱水は突き放す様に、オブラートに包む事無く自分の思いを告げる。

しかしいつもの彼女らしい「ごめん」という重みの無い謝罪の言葉すら出てこない目の前の有に対して、それ以上辛く当たる事は出来なかった。

「……………分かったわよ。と言うよりも断る訳無いじゃない。私だって好きなものだから」

朱水の応えによろやく有は顔を上げる。だがそれは喜びに浸っていきそうになかった。朱水はそんな有を見てため息を吐くと、今度は手を振り払って柵の方へと歩き出した。

「待って！」

朱水はその大声に足を止める。それは思ってもみなかった本気の叫びだった。

「大丈夫よ、直ぐに戻ってくるからそこで大人しくしてなさいな」  
「嫌だ……置いて行かないで……お願いだから……」

明らかに再び混じりだした嗚咽の徴候、しかし朱水は振り向こうとはしなかった。

朱水は再び歩き始める。予想していた有の妨害は起きなかった。

「御嬢様……」

「どうやら柵達にも有の叫び声が聞こえていたみたいで、二人は心配そうに朱水を迎えた。」

「柵、幼稚な子をあやすにはどうしたら良いかしら？」

「はあ……」

「直ぐに答えて。あまり時間が無いのよ」

「それなら……」

柵は横の梓をチラリと見た後、彼女に聞こえる事の無い様に朱水に耳打ちで回答を告げた。恐らく今後の教育に支障の無い様にと思つての行動だろう。本人に教育方法を開示するわけにはいかないものだから。

柵の答えを聞くと、朱水は何度目かのため息を吐いた。

「朱水……」

戻ってみると有は再び涙を流して座り込んでいた。腕についた砂を払おうとすらせずに、ただただ彼女は言われた通りその場で朱水を待ち続けていたのだろう。

「有、私には正直今の貴女を理解する事は出来ないわ」

「……………」

「でもね、少しだけ分かる事はあるの。とりあえず貴女は私と付き合い合いたいと思つている。それも契約的に、ね」

否定の言葉は無かった。彼女も自分で分かっていたのだろう。

『付き合っている』という確かな証を欲しているに過ぎないと両者感づいていた。

「……誰にだって不安定な時期はあるわ。私にだってあったもの」  
有は朱水の唇の動きを逃すまいと弱り切っている目をそれでも上げ続けている。

「だから今はただ貴女を抱きしめてあげる。だけど約束よ」  
朱水は有の背後に回って覆いかぶさる様にその弱り切った体を抱きしめる。

「何時かまた告白して。あれではいくらなんでも悲しいわ」  
「……ごめん」

その返しにいつもの有を感じ取った朱水は更に抱きしめる力を強める。

「なんだったら私からいずれするわ。どちらが言い出したかなんて関係ないのよ。私達はお互いを愛しているのだから」

朱水にとって今の有の焦りは何所から来るかなど些細な疑問だった。大切なのは目の前の子が流れて行かないようにしっかりと繋ぎとめておく事、それだけだった。

「汚い顔」

前に回った朱水は涙だけでなく鼻水さえも流れてしまっている残念な状態にある有の顔を嘲る。

「好きよ有、突き放したりなんてしないわ」

そんな状態の有に朱水は優しく強く口付けをした。

「嫌にはなるかもしれないけれど、嫌いにはならないわ」

恐らくただどね、今度はハンカチで有の顔を拭いた後、そう囁き再び唇を付ける。

一つ目は愛情の証

二つ目は親愛の証

「契約的な意味では無く、私はしっかりと貴女の傍にいるわ」

「うん」

「当然でしょ。恋人だもの」

三つ目は恋人としての証

三つ目の口付けは氷が融ける程に長かった。

携帯電話で智爺に連絡を入れてみると、恐る恐るといった様子で柵達が二人に近づいてきた。遠くから猛獣が落ち着いている姿を確認して、帰って来たのだろう。

「御嬢様……」

朱水の電話が終わったのを確認してから柵は声をかける。その間一度たりとも有の方を見たりはしなかった。一方で梓は柵の横ですと有に微笑みかけていた。

「ちょっとこの子を頼むわね。私はもう一仕事あるから」

そうとだけ言い捨て、朱水は向こうへとささと行ってしまった。取り残された三人はお互いに言葉をどうかけようかと無言の牽制を展開してしまう。

最初に口を開いたのは有だった。

「椒ちゃんには悪い事しちゃった」

その一言で柵は現状を把握し、今はいない姉の悲劇を悟った。

「御嬢様と正式に御交際を？」

「……うん。初めから言葉にしておけばこんな事にならなかったんだらうね」

「……………」

正直、柵はその言葉に同意してしまった。尼土有がもつと早く主と付き合っていれば、あるいは姉の心がここまで腫れ傷んだりはしなかったのかもしれない。

しかし自分とて焚き付けた側の者、偉そうに外野から言える立場では無い。

「これからどうしよう。ねえ私どうしたらいいんだろう」

それは決して柵にも梓にも問いかけた言葉ではなかった。

(可哀相に。この人は晴れて恋人同士となったのにこんなにも相を暗めている)

柵は言葉が出ずに目を反らすしか出来なかった。今の自分にかけてられる言葉なんて無かった。

だが梓が口を開く。

「皆が皆を好きになればいいんですよ」

「梓ちゃん……」

「だってそれなら誰も悲しまないじゃないですか」

幼い笑顔を咲かせている少女の分かってしまう努力に、二人は逆に心を沈めてしまう。

「そんな悲しい顔しないでください。私は尼土様の事大好きです。姉様達だって、勿論姉様だって尼土様の事好きなままです」

梓は更に笑顔を強める。だがそれが反して眉の引きつりを招いてしまい、非常に痛々しかった。

「ごめんね、ほんとごめんね」

有は梓を引き寄せると相手の華奢な体躯を考慮せず全力で抱き潰してしまう。

それは見たくない物から視線を外す行為だったのかもしれない。

梓は自分にかかる強烈な力に心の中で苦しんでも、笑顔は崩そうとしなかった。横にある有の頭に己の頬を擦りつけて相手をなだめようとする。

「尼土様」

二人の様相に我慢できず声を上げる柵。その悲痛な相に有は自分

の行為の稚拙さを悟り、弾ける様に梓から離れ退く。

しかし梓がそれを追って今度は反対に彼女が抱きしめた。そして震え怯える青の頭を優しく撫でる。いつも姉がしてくれる優しさだけが詰まった行為を真似て、せめて自分の愛を与えようと。

有の震えはゆっくりと治まっていった。

「何をしているんですか？」

それはさも呆れかえったといった声だった。

三人は強い視線を発信源に一齐向ける。それは仕方の無い事だった。何故ならそれは椒であったからだ。

「ほら帰りますよ。もう車を回してください。長が着く頃です」

三人が口を開けて固まっているのを尻目に、椒は荷物をまとめ始める。

全ての荷物をしまい、後はシートを丸めるだけとなった頃によりやく椒は再度口を開く。

「ほらどいてくださいな。尼土様がそこに座っていられたままでは帰れないじゃないですか」

椒は有の背を優しく押す。だが有は青ざめて意味無く首を振るだけだった。

尼土様

椒は確かにそう言った

それは二人の間に再び壁ができたという事実を物語っていた

あえて椒がそう示唆したのだ



有は椒に隅へと押しやられると砂に体を投じる前に立ちあがり、ふらふらと、されどその足取りの割には速く道路の方へと歩き始めた。それを追うべきか、それとも目の前の傷を隠したつもりでいる姉を慰めるべきか柵は迷ったが、遠くにある主達の影が有の向かう方へと歩いているのを確認すると出かかった足を戻した。

「今のはどういった意味でしょうか」

「あら何が？」

「何がではありません。あれでは尼土様とは……」

柵はそれ以上言葉を続けられず、唇を悔しさで噛む。梓は柵の陰へと身を隠していた。

「何を言っているのよ。これからお二人は恋仲なのだから私が親密な愛称を使つては迷惑でしように」

椒は毅然とした面持ちで応えた。だが柵にはその仮面の内部が嫌でも見抜けてしまっていた。

「そんな……」

柵は目の前の自棄を起こしている姉に言葉を探すがやはり見つけれはしなかった。何故なら姉の言葉に多少なりとも同調してしまつたからであつた。

彼女達の主が選んだ世界に自分達が悪影響を与える訳にはいかなからだ。

「柵、色々ありがとう。でもこれからはもうただの過干渉よ。これが最良の答えなのだから」

姉は終息を急ぎ、穴だらけの幕を張つた。引っ張れば千切れ落ちてしまいそうな程に脆弱な代物であつた。

幕向こうの舞台では一体姉はどの様な劇を演じているのだろうか。しかし柵は容易に覗く事の出来るそれを確かめる気にはなれなかつた。

「……分かりました」

柵は怯える梓の手を強く握りしめた。目が合っても梓は微笑む事は無かった。

行きとは異なり智爺の車での帰りとなった一行は、車の中で誰一人とも顔を上げる事無く過ごしていた。流れるクラシックのメロディが悲しく響いた。

玄関に入るとそこには屋敷を出た時には無かった大きな荷物が連なっていた。

「あらお帰りなさいませ」

荷物を運ぶための台車を運んで来た槐とタイミング良く出会う。

少女達の沈んだ空気に気付かず槐は嬉しそうに告げた。

「華苗様は既にご到着されていますよ」

「あらそう。御出迎えできなくて申し訳ないわね」

「気にした様子は御座いませんでした。以前もお越しいただいた際に朱水様をご不在であった事は多々ありましたし」

「それもそうね」

朱水から視線を外した槐は次に椒の服装に目を留めるが何も口にしなかった。その後順に帰宅した妹達の姿をにこやかに確認していたが、最後尾の有の様子に気付くと目を閉じて一度口を強く結んだ。「尼土様、ちょっと御荷物のお話があるのですがよろしいでしょうか？」

槐は空虚な目をしている有の前に立ち、その手を強く掴む。

「よろしいですね？ ではこちらへ」

半ば強制的な同意取得であったが、それだけ今の有を放って置く気は無いという心の表れであった。

槐は首を縦にも横にも振ろうとしない有の手を引つ張り廊下へと導こうとする。その途中朱水が進行を止める為になのか、小さな動きを見せたが、槐の強い意志を感じ取ると上げた手を下ろした。

有の部屋に続く階段を上らずに横切り、二人がやって来たのは槐の部屋の前であった。

「今アイシス様はいらっしゃいませんから」

そう言つて中に入るようにと手振り以示す。有はそれに大人しく従いのろのろとした動作で靴を脱ぎ畳へと上がる。

「直ぐに冷たい物を持つてきますので足を崩してお待ちくださいな」それを見届けた槐は相手を刺激しない程の音量で着座を促す。だが有は座ろうとはしなかった。一度で催促を諦めた槐は小さく鼻を鳴らすとドアを閉めて言葉通り台所へと飲み物を取りに向かった。

扉なんて些細な足止めでしかなかった。有は逃げても良かったし、槐もそれを最も大きい可能性として捉えていた。あの精神状態ではそれも仕方あるまいと思つたのだ。

だが有は残り続けていた。少し落ち着いたのか、槐が入ってくる顔を上げて少しだけ笑みを作った。

「りんごジュースです。とびつきり甘いですよ」

グラスに注がれた黄乳白の飲み物を勧める。この屋敷でも梓だけが口にしたらるといふくらいに甘さだけを詰めた飲み物だった。

「ありがとうございます」

相手に聞こえるように努力をしたとは思えない小さな声を出して

有はそれを受け取る。その手はもう震えてはいなかった。

「美味しいです」

「そうですか。梓が聞いたら喜びます」

姉達の同意が得られなかった梓はいじけてりんごジュースをこれ見よがしに彼女達の前で飲むのだった。美味しい美味しいと連呼する訴えも加えて。

「甘いけど、酸っぱい」

「あら、そうですか？ 酸味を感じ分けられるだなんて味覚が研ぎ澄まされていらっしやるんですね」

何度か梓に推されて飲んだ事があつたが、一度たりともその中に酸味を掴んだ例は無かった。

「良く分からないですけど、なんだか酸っぱいんです」  
「そうですね」

有はまだ中身が半分ほど残ったグラスを畳に置くとため息を吐いた。

「今日はどうされたのですか？」

この部屋に連れて来られた時点で覚悟はできているのだろうと考え、緩衝材を挟まずに核に話を直結させる。彼女の予想通り有は大きく反応する事も無く、するすると語りだした。

「今日朱水に告白しました。その前にけじめとして椒ちゃんに言ったんです……いや言っていないのか」

苛立ちに頭をガリガリとかく。

「なんであんな事言っちゃったんだろ。私何やってるんだらう」

「何て、仰つたのです？」

優しい声色で槐はそれを聞き出そうとした。後悔をしている者に対して刃物を近づかせる真似はしたくなかった。

「好きだつて」

「……椒に対してそれを？」

「はい……頭の中がグジャグジャになっちゃって、おかしな事を言っちゃったんです。ただ単純に朱水に告白する旨だけを告げればよ

かったのに……椒ちゃんあの顔を見たら……」

繋ぎとめるといふ意図では無く、椒を否定している訳ではないと告げる言葉だったと、そう言いたいのだろうか。

それはただただ蛇足だった。それも毒爪を生やしてしまった危険極まりない蛇足だった。

「これから朱水様に対して告白すると告げた後に、椒の事を好きだと仰ったのですか」

「そうです」

「……そうですか」

妹の心に傷を、それも痕になる様な傷をつけた目の前の少女に槐は初めて怒りを覚えた。しかし同時に同情の気も沸き起こる。それ程までに少女は悲痛な顔をしているのだった。

「好きだけ駄目だったのに……分かっていたのに。何で……どうして……」

自身への怒りの念に歯をむき出して唸る。

「私自身は経験した例はありませんが、やはり複数人を愛する事は許されないでしょう。誰かを選ぶのなら他者を諦めなければなりません。そう言う物なのですから」

「……はい」

「……おかしいですよ。分かりますよ、尼土様の思いが。貴方が仰った事ですもの」

槐はいつもの相手をなだめる笑顔を浮かばせる事は無く、無表情に語る。

「愛という物はあらゆる方向に向かうものだ。あらゆる人物に対して在るものだ。だけれども、最後には一つだけに絞らなくてはいけない。他をわざわざ黒い布で被わなくてはいけない。そうですよね？」

槐の問いに有は答える事は出来なかった。有はその問いに応える

事はおごりであると思つたのだ。

槐も同じだった。試したのだ、悲痛を訴えかける少女の内を。もし領いていたらこのまま彼女を放置する心づもりであった。

領いていたら、有を主に相応しくない小物だと認定しただろう。己を正当化するだけの雑魚であると。

「はつきり言わせて頂きます」

咳払いをした槐は有の前へと移り、下がり切った頭を両手で包み上げさせる。

「椒にした事は許すつもりはありません。尼土様は酷い事をされました。それを私は忘れません」

「はい」

「ですが貴方様は朱水様が選んだ御方。また私自身貴方様を好いております」

槐は目を細め幼子を窺める様に言う。

「故に貴方様を助けましょう。あの子の心が寄り早く癒える為に努力しましょう。後は尼土様、貴方様次第です」

椒との関係を修復するのは有だけに任す。だが椒が己の傷を見つめないように注意をそらせる為に色々と施行してみる。

それが姉として有に対して、椒に対して出来る物の最大だった。

「お願いです。あの子の性格からしてこれから暫らくは辛く貴方様に当たる事でしょう。ですがどうかあの子を見捨てないでやってくださいまし」

「おかしいですよ。見捨てられるのは私の方なのに」

「……では御自分で確かめくださいな。あの子の本心を」

保持していた有の頭を解放すると、一度だけその頭をぼんと叩く。「では戻りましょうか」

有の手を取り力任せにその腰を上げさせる。

「あの子達を、どうかよろしくお願いしますね」

二人してゆつくりと廊下を歩き、廊下の静けさに身を晒していると、皆がいるであろう談話室に今誰かが入らんとしているのが見受けられた。

「あの方が華苗様でいられます」

華苗だという人物はこちらに気付く事無く談話室へと入っていった。入れ替わりに権が部屋から出て来た。その手には盆が収められている。恐らく紅茶を提供したのだろう。

「あらもう良いの？」

すれ違いざまに権は槐に問いかける。

「ええ。ねえ尼土様」

「は、はい」

「暗い顔してる女の子は可愛く映りませんよ。ニコニコしましよ  
う」

「そうですね。何て言ったって今日はお二人の記念日になるのでは  
ありませんか」

「あらあらまあまあ。それって……そう言う事よね？ そうなんで  
すか尼土様？」

有の顔を六本指で押し和らげながら権は訊ねるが、頬を潰された  
ままで上手に答えられるはずが無く、有はひょわいというよくわか  
らない音を発する。しかしそれでも権には十分に通じ、彼女の目を  
輝かせる事になった。

「おめでとつございます！ まあ何てことでしょう。これはお夕飯  
にケーキを足さなきゃですね」

そう言い捨て権は急いで台所の方へと走り去ってしまった。残さ  
れた有は夕食の際に出てくるケーキを見て椒が何を思つかを心配し

だが、いつまでも怯えているだけではどうにもならないと思い唇をキツと結ぶ。

「槐さん」

「はい」

「私、頑張ります」

「ふふ、期待してますよ」

有は立ったままの槐を追い越し談話室へと歩き出す。それを見て槐は両手を合わせて胸にする。

「良い結果を待っていますよ」

談話室に入ると有は目の前の状況に絶句を禁じえなかった。

そこには何故か権がいたのだ。

「あらこんばんは」

「こ、こん……えっ」

しかしよく見れば見知ったはずである権の容姿とはいくつか違う点が彼女には見られた。服が私服であり、何より髪型が違うのだった。だがそれ以外の点は雰囲気も含めて権その物だった。

だが有は直前の廊下でしっかりと権と言葉を交わしている。故にここにいるのは権では無いと頭では理解している。

しかしそれでもなおその容姿では権だと思えなかった。

「貴方がゆうゆう?」

「ゆ、ゆうゆう?」

「あら違ったかしら」

目の前の権似の女性に有は首を傾げる。

ここまで似ているなら双子等の線を疑いたくなるが権に双子の姉妹がいるなんて話は一度たりとも聞いた覚えは無かった。

そこに奥のソファに坐している朱水が楽しそうに声をかける。

「あっていますわ。その子が尼土有ですよ」



「まあまあ。お会いできて光栄だわ。お話聞いてるわよ」  
有はその瞳に似た口調に更に驚く。一体目の前の女性は何者なのか。

「華苗……さんでしょうか？」

「まあ、私の名前御存知なのね」

「え、ええ」

廊下で槐が指摘した人物の横姿を思い出せばこの人物が華苗という存在なのは間違いなかった。しかしその瞳との類似性に混乱してしまっている有にとつて、二つの点を結ぶ線を引く事がなかなかできなかつたのだつた。

「私、四ツ橋華苗と申します。今後ともよろしくですわ」

本人の特定が終了して相手を観察するだけの落ち着きを取り戻した頃、有は更に幾つか瞳との相違に気付く。

何より彼女の方が大人びていた。桐によつて彼女の年齢を事前に知っていた有は、ああ確かにとその年齢に納得してしまう。失礼な話だが。

「こちらこそ。朱水にお世話になっております、尼土有と申します」

「ゆうゆうね、よろしく」

「……あ、ゆうゆうって私の事だつたんですね」

「ん？ それ以外誰を指すつて言うの？」

本気で分からないと言いたげな華苗の表情に有は苦笑せざるを得なかつた。

（想像していたのと大分違うなあ）

「あけちゃん、えんち、むーちん、かたちん、あおちゃん、はじめ、くぬぬ、あずちゃん。それから智さん」

華苗は指を折りながら何かを呟きだした。恐らくこの屋敷の住人なのだろうと、最後の言葉から有は察する。

（智さんって執事さんか。なら、あけちゃん朱水、えんち槐さん、むーちん瞳さん、かたちん……柁さん、あおちゃん梧さん、はじめは椒ちゃん、くぬぬ桐ちゃん、あずちゃん梓ちゃん、皆のあだ名な

「んだらうか」

「ん〜？ どうしたの？」

「いえ、別に」

「ん〜？」

二人のやり取りをにやにやとした目つきで遠くから見ている朱水を有は怨みがましく見返す。

二人が微妙に噛み合わない会話をしているとコツコツと靴音が鳴り、新たな訪問者の影を知らせる。槐と椒であった。

槐は一礼をするとそのまま二人を横切り奥へと向かっていった。

「ようこそ華苗様」

「はじめはじ、お久しぶりね。相変わらず可愛いわ〜」

入口に残ったのは未だいつものメイド服へと着替えていない椒であった。有はその姿をチラリと見た後直ぐに目を反らす。しかし思い直し再び顔を向けると笑顔を浴びせる。椒もその姿を見ていたがこちらは何も反応を表わそうとはしなかった。

「あらまあ。むーちゃんったらまたこんな服をはじめに着せちゃって。ゴスロリって言うのだったかしら、ほんと好きよね」

「嬢姉様の趣味にはついていけませんわ」

そうは言いつつもスカートの裾を持ち上げて膨らまし、得意気に一回転して見せる。ドレス調であるゴスロリ服の儼かな黒フリルが空気を飲み込みながらなびく。黄髪の彼女には黒がとても似合っていた。

「可愛いわね〜。私が着るには流石に年齢的に無理だから、飾る為にもむーちゃんに作ってもらおうかしら」

「華苗様の美貌なら向こう二十年は平気ですわ」

「いやね〜、はじめはじったらそんな御世辞言う様な子になっちゃったのかしら」

「お世辞ではありませんわ。尼土様もそう思われませんか？」

「……え、あはい」

予期していなかった椒による突然の振りに有は反応できる訳が無

く、その場凌ぎの同意となる。まさか椒がこの場で自分に話しかけるとは微塵にも思っていなかったのだから仕方が無い。

「ほら見なさいな、ゆうゆう困っているじゃないの。もう勝手知ったる仲なのだから私に対してお世辞なんて使わなくて良いのよ」  
華苗は椒の服を再度じつくり見渡すと、何度も頷く。

「良いわね。やっぱ頼んでくるわね。むーちんはどちらに行ったのかしら？」

「私から伝えておきますわ。華苗様は御休みくださいませ」

「のんのん、これくらい自分で言いに行くわよ。これでも毎日社長として労働しているんだからね。自分で出来る事は自分でやる主義なの」

そう言って元気よく手を振って彼女は廊下へと出ていった。しかし直ぐに足を戻す事になる。

「聞き忘れちゃったわ。むーちん結局何処にいるのかしら？」

「そうですね今の時間なら……」

「あ、槿さんなら多分台所に行ってるかと」

「ナイス、厨房ね。ありがとうね」

有にウイंकを残して華苗は再び廊下へと飛び出していった。今度は戻ってくる気配は無さそうだった。

ずっと遠くでにやにやと眺めていた朱水がソファの横を叩く。座れという合図だろう。有はそれに従いソファにゆっくりと腰を沈めた。

「変わってるでしょ？」

「うーん、ちよつとね。皆にあだ名つけてるんだね」

「あの人昔からあなのよ」

朱水は可笑しいでしょと手を振って笑う。

もし今日の出来事が無かったら今の朱水の行為で有は腹水を溜めただろう。だがここにいる有は朱水の言葉を痛みとして受け取るなんて真似はしなかった。

「色々聞いたよ。社長さんなんだってね」

「喋ったのつて櫛でしょう？ そうね、あの人はある意味この家の大黒柱なのかもしれないわね」

「でも朱水の方が会長なんですよ？」

「あの会社では会長なんてただの飾りなのよ。御給料を吸い取っている寄生虫みたいなものね。まあ高校生故、会社の経営に口出しできるはずが無いのですから御飾で結構ですけど」

卑下にまみれた嫌な言い方だと有は感じたが、朱水本人がそう比喻するのだから流しておく。

「高校卒業したらその会社に勤めるの？」

「どうかしら。今更のこのこと顔を出した所でひんしゆく買うだけでしようね。ましてや私の年齢を知ってしまったたら社員のやる気が削がれてしまいかもしれない」

「どうして？」

「決まってるじゃない。いつの間にか会長として居座っている、顔写真も載っていない名前だけの上司だった人物が、ある日いきなりぼんと現れ実は未成年でしたなんて言ってみなさいな。普通の頭をしている人間なら『この会社はおかしいんじゃないのか』って思うでしょう」

「うーん、そうかもしれない」

「お情けで御給料を頂いているのが現状だけれども、いずれかは離れなくてはいけないのよ。それまでにあの人に色々教えてもらわないとね。当然有、貴女は私の部下として働いてもらうからね」

朱水はじゃれて有の首を撫でる。

「二つの意味で部下なのだから当たり前よね」

「が、がんばるよ」

自由は無いのだろうけれど、就職先が決まっているという風に捉えればそれも良いかもしれないと考える。

だが有は納得していなかった。この屋敷全ての経費を会社一つから頂いているのだろうか？ それは難しいのではないか？ しかし一介の高校生でしか無い彼女はお金の話ができる程には知識が及ん

ではないので閉口継続を選ぶ。

ふと視線を入口に向けると椒が立っていた。

(嘘、ずっと立ってたの?)

その立ち位置は間違いなく華苗と言葉を交えた場所だった。つまり彼女は有が朱水の横に座ってからもずっと同じ位置に立ち続けていたのだった。談話室の奥には梓をあやしている櫛、そしてそれを眺め楽しんでいる槐がいるのに、彼女はそちらに足を運ばず立ち尽くしていた。

少し鈍いと自覚している有でもそれが構って欲しいという合図だという事くらいは気付けた。だがその合図の存在自体に気付く事ができずに彼女を放置してしまっていたのだ。当然有は冷や汗をかき、何かしなくてはと必死に頭をこねくり回す。

こねくり回している最中に辿り着いたのは、彼女がそこに立っている理由の一つと思われる事情であった。彼女を連れて来たのは紛うことなく槐であろう。一緒にこの部屋へとやって来たのに入室の時間が彼女とあれ程開いたというのは、その間に彼女が何かをしたからに違いない。そしてその答えが椒であった。

そして今も彼女は何かを待ってあそこに立ち続けている。

(行くしかない。槐さんに報いる為にも、椒ちゃんと仲直りする為にも)

「朱水、私達今日はもう帰るね」

「……………え、どうしたの?」

「私馬鹿だから手段の選択肢があんまり浮かばないんだ。それに今すぐ謝らないともっともっと状況が悪化しちやいそうだもん。だから、ごめんね」

「……………そう」

朱水は納得している様には映らなかったが、それでも有は椒を選んだ。それは朱水への信頼の裏返しであった。信じてるからこそ、今は椒を選んだのだ。

「梧さんと椋さんに謝らなくちゃ。急いで行ってくるね」

有は立ち上がり朱水に頭を下げた。予想だにしていなかった朱水は当然目をパチクリさせる。

「記念日なのにごめん！」

「……記念日？ 今日は何かの記念日なのかしら？」

「え、いやあれだよ……二人のさ……」

有の言わんとしている事が分からないと朱水は小さな仕草で表わす。その姿に有は幾らかの安堵を掴みとった。

（記念日とかそういうのを気にしない人なのかな。なら良いか）

「いや、何でもない。じゃあ、また明日ね」

「そうね。また明日学校で合いましょう」

納得したといった朱水に有は申し訳なさそうに手を振り、もう一度頭を下げると入口へと歩き始めた。

有の前に不安に顔を染めている椒が迫る。

「椒ちゃん……帰ろっか」

「よろしいので？ 夕食の準備はしていませんよ？」

「うん、良いんだ」

動かない椒の手を取り強引に廊下へと進む。一度引かれ動いた小さな体は止まる事無くその力に身を任してくれた。

「今日は私が作るよ。だから由音ちゃん拾って帰ろっよ」

「……御主人様に申し訳ないとは思わないのですか？」

椒の棘の生えた言葉に有は一瞬だけ足を止めるが、振り向きもせず再び足を動かし始める。

「朱水以上に申し訳ないと思っっている相手がいるからさ。その人に全力で謝りたいんだ」

「……………」

返答する意思が無いのを察した有は手を握る力を緩めて椒を解放した。離れた手は一度だけ名残惜しそうに追い触れると、また離れていった。

有が再び前へと歩き出すと椒もとぼとぼとそれを追ってくる。

廊下の先を歩く有は辛うじて聞き取れる椒の靴音に心をなだめながら進む。相手に気付かれぬように少しづつ歩く速度を抑えていくが、椒がそれ見破っているのか一向に距離が縮まる事は無かった。何度か試した揚句諦めて一定の速度で歩く事を決心する。自分の速度に合わせて歩くと云うのなら、速度を一定にしても離れないと考えついたのであった。

「尼土様」

椒の突然の声に有はこけそうになりながら止まる。

「そちらは尼土様の御部屋に向かう経路です」

「……ああそつか。まずは台所行かなきゃ」

慌てて階段にかけて足を下ろし、取り繕う様な笑顔を浮かべて椒の前を通過する。

「尼土様」

椒はまた有を呼び止めた。

「多大な思い上がり、失礼します」

椒は一步前に出、有を見つめる。それはこの屋敷に戻ってきて初めて意思が正面から噛み合った瞬間だった。

「もしかして尼土様は罪滅ぼしの感覚でこれからの行動に移ろうとされていらつしやるのでしょうか？」

「……そうかもしれない」

「ならば私から訂正させて頂けなければなりません。そもそも尼土様は決して気に病む必要は無いのです」

有は椒の強張った相をまじまじと見返す。その鋭い切っ先にも椒は耐えた。

「あの時は感情が高ぶってしまい失礼な事をしてしまいました。私の様な者が何を勘違いしたか一丁前に恋心などを抱いてしまい、ご迷惑をおかけした事を深くお詫びいたします」

「……なにそれ」

「言葉の通りです。私は失念していたんです。自分達が生き物では無い事を」

最近まで椒は自分の事を生物ではないと自覚しているつもりだった。しかし日常を過ごしている間に自分が一般的な生活を実行しているからか、まるで自分が周りの魔や人間と同じなのではないかと錯覚してしまっていた。

「……そんな事言うのよしてよ」

「いいえ、これは事実なのです。尼土様の前にいる存在は鬼神城と言う人形に過ぎないので」

自分が何者なのかを再び思い出せたのは今日の主の御蔭だった。

有から逃げた後、大きな岩陰に隠れていた所を由音に見つかったが、暫らく放っておいて欲しいと懇願した。由音はその切な要求に根負けして椒からは死角となっている場所に移動すると、ここで待っていると言げ腰を下ろした。椒はもつと離れて欲しかったがそれ以上周りに気を向けるのは苦痛だった故、無視をした。

しかし暫らくすると新たな追跡者が現れた。一色朱水、彼女の主である。

朱水は椒を見つけるとその頬に手を添え、ごめんなさいと謝った。

その言葉は椒にとって一つのスイッチとなる。

何故己は主の心を痛めつける真似をしているのか、何故主の愛を裏切ろうとしているのか。怒りが全身を駆け巡る。椒はひざまずいて主の手を取り両手でそれを包んだ。

朱水はその行為が何を示すのかを悟り、彼女がしたいがままにさせた。

椒の中で感情が渦を巻き一つの塊へと凝集した。



「正直に言います。私、尼土様の事好きです」

椒は今までの彼女では考えられない程に素直に自分を伝えた。

「だけど駄目なんです」

「駄目って」

「尼土様もお気づきになられている通りの理由です。敢えて口にはしませんが、この件に関しては私が導いた答えが最善だと理解していただけるはずですよ」

椒の意思の固さを象徴した眼光に有の息が詰まる。

「もちろんこれから尼土様をお守りします。使命と言う意味でも、私自身の望みとしても」

「……………」

「ですから尼土様は御主人様と……………」

「やめて！」

有は堰を切った様に突然大声を出す。反動で息を飲み込んで体が跳ねた。

「もうやめてよ……………その尼土様って言うのやめてよ」

「これは私の覚悟です。それと、はじめなのです」

「嫌だ、そんなの絶対に嫌」

「嫌と申されましても」

「絶対に嫌あ！」

声を荒げ凄む有は、幼子が駄々を捏ねるか如く身を震わせる。

「嫌あ！」

高校生ともなる人物が、廊下の真ん中で誰かに手を差し伸べてもらうのを待つかのように大声を上げる。自分の意思を拾ってもらおうとする為に感情を体で表現する。

癩癩、この単語が完全に当てはまっていた。

その姿に椒は有の根源に眠る幼さを嗅ぐ。

「……分かりました。では尼土様と言うのはやめましょう。今まで通り有様とお呼びします」

椒は自分よりも大分背の高い少女を今一度観察する。涙をいっばいに溜めている少女。

目の前のこの魔は真に幼き心を抱き続けているのかもしれない。だからあのような言葉を自分にかけてたのではないか。

嘘のつけない程に幼い彼女が精いっばい考えた結果の行動だったのではないのか。

その幼さの原因は何なのか？

決まっている。彼女自身の能力に起因している。

他者との摩擦を経験する事が少なかった彼女は、故に幼稚なのだ。

彼女がよく使う一人称である『お姉さん』とは、自身の幼さへの無自覚な対抗心から来る物なのかもしれない。

椒は自分の心が揺れているのを感じ取る。その精神の揺らぎは肉体の同調として表面化する。ふらふらと軽い目眩が椒を襲い、その足が二三歩下がった。

有はそれで凍らされた様に急激に停止した。椒が自分の愚行に萎えたのだと思っただろう。

しかし椒は頭を指で支えたと穏和な声で言った。

「私、絶対に有様を守ります」

気付いてしまった。

新たな感情が芽生える。

椒は己に芽生えた温かさに戸惑いながらも、有に触れる。怯える

有はその指先を自分に触れるまで目で追った。

「椒……ちゃん」

「行きましよう。そして一緒にお料理をしましよようよ」

椒の頬が自然に緩む。それは今まで有へ向けた事の無い笑顔だった。

有達が廊下へと消えていったのを見計らって槐が腰を上げる。

「よろしいので？ 先程まで記念日だと嬉しそうに仰っていたそうじゃありませんか」

「良いのよ……それに本当の記念日がいずれ出来るのだから。今日のあれではちよつと記念というには弱過ぎたのよ」

朱水は悲しそうに呟く。決断にあたる心情を考えると槐はそれ以上続ける気にはなれなかった。

「智爺にあの子達を送るよう伝えておいて。由音ちゃんも多分一緒にしよう」

「承知しました」

「……あの子達上手くやれるのかしら」

独り言のように呟かれた言葉に、槐は応じるべきか迷ったが答えた。

「尼土様はどうやら関係修復に乗り気みたいですし、問題は椒の方ですね。ですので私がちよちよーっとお手伝いなんかを試してみようと思っっているんです」

「いえ……」

朱水は槐の計画を聞くと小さく首を横に振った。

「その必要は無いのよ」

それは椒の変化を知ってしまった朱水のやるせないというため息

だった。

権が楽しそうにクリームを泡立てている所に有が帰宅する旨を告げると、権はクリームの中へ脱力した右手を落としてしまった。飛び散ったクリームが権とその横にいた梧を汚す。その姿を見て有は全力で謝罪し、なんとか権の臍を曲げさせずに帰宅の報告を終える事に成功した。それでも権はせめてケーキを持ち帰ってもらおうと二時間程待つてくれないかと食い下がったが、梧がその口を塞ぎ有達を逃がしてくれた。有が申し訳ないと告げると梧は「私達で消費しますから」とだけ口にし目を閉じた。

次に由音と一緒に帰宅するかどうかを尋ねに彼女の部屋を訪ねた。「へ、もう帰るんっすか？」  
「うん……今日は私が料理したいなって。勿論由音ちゃんの方も作るつもりだよ」

由音は居心地悪そうにしている椒をチラリと盗み見すると親指を立てる。

「了解つす。自分は全然オツケーっすよ」

「そっか良かった。じゃあ私達も荷物まとめたら由音ちゃん拾いにここに来るから、その時までには準備しておいて欲しいな」

「はいはい」

このひたすらに明るい少女と言葉を交わす事で有は傷んだ心を少しだけ癒す。

ふと由音は椒に目を向けた後、思い出したと左手を右手で打つ。

「そうそう有君、面白いネタを手に入れたんっすよ」

椒に聞こえない為にと、有に耳打ちで話しかける。

「ネタ？」

由音は厭らしく笑って口を猫の手で覆う。

「先程四ツ橋華苗って人物を見て不思議に思ったんでアイシスさんに電話で訊いてみたんです」

「不思議にって、何が？」

「いや、だっておかしいじゃないですか。あんなに権さんと似てるんっすよ？ これは何かあるなって思ったんで詳しくそうなのアイシスさんに訊ねてみたら……」

由音は有の食い付きを待つ為にわざとらしく深呼吸をする。勿論有もそんな事をされたら喉の奥から痒みが湧いて出てくる訳で、由音の期待通りの食い付き振りを見せた。

「早く早く、もったいぶらないで〜」

「ふっふっふ、それはですね……なんと彼女自身が権さんのモデルだからだそうですよ」

「モデル？」

「そうっす。彼女達の容姿はその主である朱水さんに影響されるっていうのは御存知でしたか？」

「あー、確かそんな様な話しを聞いた気もする」

「アイシスさん曰く権さんまではモデルがいるんだそうです。つまり四ツ橋さんを権さんに投影したんっす」

「へー」

由音のとびつきりの話には有は関心と驚きを大いに抱く。そしてある一つの点に気付く。

「権さんまでって事は……」

「そうっす。槐さんにもモデルがいるんっすよ。誰だと思っつすか？」

有は槐と容姿が似ている人物を探し出そうと一瞬脳を開こうとしたが、答えなんて考えるまでも無く導きだせた。

「簡単だね。絶対朱水でしょ」

しかし由音は腕でバツ印を作ると楽しそうに跳ねた。

「大間違いつす。正解は……なんと一色景いっしきけいつすよ!」

「一色……景?」

「分からないつすか? 朱水さんの母親つすよ」

「まあこんなもんで良いだろ」

一つの死体を前に二人の人間が佇んでいた。

炎の赤を揺らめかす女性は、虚ろな目を死体に向けている少年に誇らしげに言葉を投げかける。褒める褒める、彼女は猫目で無言の催促をする。

「ありがとうございます……」

少年は嫌悪を滲ませた声で応えた。

別に加々美の事を嫌っているわけでは無かった。単純にこの状況が不愉快なのである。何故なら無残な死を迎えた自分の死体を目の前にしているのだから。

警察がこれを見たらどういう案件として処理するだろうか。安直な発想なら自殺、そうなるはずだ。

「分かり易い死に方だろ? 首吊りなんて自殺以外の可能性の方がかなーり低いつてもんさ」

そして分かりやすく縄購入の際のレシートを財布の中に忍ばせる。

実際に買って来たのは死んでいない方の彼なので、例えば警察が跡を辿ればますます自殺の臭い漂う演出になっている。

ただ動機が無いのが多少不安ではあった。まあそこは突発性の心の病とでも解釈してくれるだろうか。

「こんな顔になるんですね……」

「どうだろ？　ウチ自身は首吊り死体なんて見た事無いからね」

え、と少年は当然眉をゆがめる。自信満々に死体を用意してやると言っておいてその言葉なのか、宇津井一は初めて加々美に失望した。

「まあ安心しな。正解に限りなく近い状態になってるはずだから」

「そうなんですか」

「ああ、実際に首括って死んだ人間の最期をちょっと拝借したからさ。間違いはないはずだ」

またこの人はおかしな事を言う、一は心の中でそうばやいた。

それは加々美からの提案だった。

このまま行方不明の扱いになるのは家族の負担になるだろうかからと、「死んだ方が良い」と言ってきたのだった。当然一は最初何を言っているのか分からず不安げに睨み返すだけであったが、加々美の淡々とした説明を聞くうちに彼女の言わんとしている事が把握できた。

要は偽物の死体を用意して自殺した事にしてしまおうという話だった。

「これならきつと家族も余計な心配をしなくてすむと思います」

「そうだと良いな」

死を受け入れる事自体が大きな衝撃なのだが、永遠に帰らない息子を待つよりは終わりあつて良いだろう、そう思つて一は受け入れた。

「こういうの、慣れてるんですか？」

それは彼が加々美の手伝いとして初めてした彼女の仕事に関わる質問であつた。

「こういうの？」

「死体を用意するとかです」

加々美は「ん」と答えになつてない音で小さく応えた後、暫らく一の顔を凝視する。一は慣れていない他人からの異常な注目に、抵抗する事無く目を背けた。

「ハジ、魔法使いの素質つて分かるか？」

ハジ、それは星井加々美が宇津井一を呼ぶ時に使う名前だつた。

加々美にとってはあだ名と言うほど親密な手段ではなく、単純に三文字より二文字の方が呼びやすいからという怠け者の最たる意思が働いての名付けだつた。

「いえ、分かりません」

そもそも一にとって魔法使いというのは物語の住人であつたので、今まで一度たりとも真面目に考える事が無かつた人物達である。素質と訊かれて直ぐに答えを出せるものでは無かつた。

加々美は宙吊りの死体を前後に押し揺らしながらゆっくりと喋る。

「魔法使いの一番の素質はさ、『嘔吐き』なんだゾ。だからウチがこんな死体を用意する事ができるのは当然のことなんだわ」

「嘔吐き？」

「そうだ。世界を騙せる能力に長けている者だけが魔法使いになれるのさ」

加々美はいつもとは違つた笑い方をした。「悲しいだろ？」そう



語りかけている様だった。

道理で、一は今一度吐き気催す己の死の結果を見直す。

道理で嫌な気分になるわけだ。

なけなしの正義感が騙すという行為に抵抗を示していたのだった。  
嘘は、好きじゃなかった。

今私が好きといたらどう答えますか

そんな悪戯染みた言葉を吐きそうになった

余裕が生まれたのかもしれない

不思議と落ち着いていた

相手の困った顔を見たくなった

私を困らせたのだ

それくらい見せてもらっても罰はあたらないはず

心と言うのはふとしたきっかけでまるで違う物になる

オセロゲームの様に一枚の駒でくると局面が変わっていく

小さな丸い白を置いただけで周りの黒が白へと変わっていく

心はマスが一億も二億もあるオセロゲームなのかもしれない

私の中で何かが変わった

憐れみという白い駒がマスへと落ちて来た所為で

今なら言える

私は尼土有が好きだ

だけど今までの感情とは違う

これはきつと愛だ

間違いなく愛情だった

もう、恋ではなくなった

罪悪感が薄れ

熱も冷め

衝動も消えた

出来るならば己の心を撫で褒めてあげたい

これでいいのだ

もう恋ではないのだから

私はまだあの方の従者でいられる

あいつとは違うのだ

(第六話 完)

お久しぶりです。受験(と言っても国家試験ですが)まったただ中の作者です。大変申し訳ないのですが、なにぶん今後の人生がかかっている試験ですので勉強故に執筆にかかる時間がほとんどありません。

しかし最後まで書くと言う所存は変わっておりません。必ずや続ける所存であります！

温かい目で見守りくださいませ。

第七話 イキトシイケルモノ? / 1

1

ごめんなさい

ごめんなさい

お願いだから今は我慢して

お願いだからそんな目で私を見ないで

必ず助けるから

必ず助けるから

許してください

「ええ、そうです。はい、はい」

ウチは彼女の電話が終わるのを待っている間に、先程からずっと手をつけられていなかったホットサンドを口に放り込んだ。恥ずかしい程に腹が鳴ってしょうがなかった。目の前に餌があればどんな犬だって涎を垂らすつてもんだ。

それにしても何とも長い話だ、先に食事を済ませてから会えば良かった。

「……ふう。これで好し、ですね」

「どうしてそんな話をしてたんです？」

その人は電話を切ると満足げに機体を机に置いた。ウチと接触しているというこの状況で携帯電話の電源を入れたままだった事に呆れはしたが、まあ知ったこっちゃない。

「種を仕込んだんですよ」

「種、ですか」

「ええ、とびつきり危険な奴を」

ふんふん、どうやら電話先は結構重要な相手だったらしい。あまり首を突っ込むものではないとは分かっているが、どうにももう一方の雇い主と比べてしまい、こっちの雇い主の優しさには甘えてしまっただった。

「一体誰だったんです？」

その人は置いた携帯電話を再び持ち上げて指で弾いた。

「凄いですよ。何と件の組織と繋がりができたのです」

「……本当ですか？」

「ええ、たまたま一緒になったのですよ。あそこに所属している割に大変人懐っこい子です。ですので彼女を好意的に捉えていますよ」  
「で、その好意的に捉えているっていう相手に種仕込んだんですか」  
聞いて呆れる。やはりこっちの世界で名を広めている人物にはまともな性格を期待するだけ無駄なんだな。

「……まあそう言わないでください。彼女がアレの密接な関係者でなければこの様な真似はしませんでしたよ」

「失礼、どうにもウチは口がひんまがっている様で」

「いいのです、自覚していますから」

その人は風貌にまったく似合っただけの無いオヤジ臭い食べ物を手に取り。金を持っている癖に何でかファミレスに入りたいと言っていたのはこれが目的だったのかもしれない。おかしな人だ。

「それ、好きなんですか？」

「いえ、好きとは思いませんでした。ですがたまたま昨日食べたの

が口に合わなかったただけかもしれませんが、新しいサンプルを採取したかったのです」

何て言うか……科学者って感じなのな、この人って。

「で、美味しいですか？」

「意外に美味しいです。昨日のがやはり塩っぱかったただけだったんですね」

「あの屋敷で焼き鳥なんて出るんですか？」

その少女はにやりと笑うと串の両端を二つの指で挟み持つ。

「ボクがリクエストしたんです。この国には小さな串に刺したまま出す肉料理があると聞いていたので興味深かったのです」

ウチの前ではアイシス・クラスエンと名乗っているその少女は、もう一本串を持ち上げると鳥肉を一つ一つ箸で外しながら食べる。

何と言うか、ほんとおかしな人だ。

「ではカガミ、報告を聞きましょう」

それは久しぶりの親からの電話だった。私ではなく、『私』の。

「分かった。今度の休暇に取りに戻るね」

両親と話すなんて何日振りだろうか。この魔法院に来てからは片手で数えられるくらいにしか連絡を取った覚えが無かった。彼等の前では私が私でいられないから苦手だった。ロシアの山奥と島国イギリスの距離以上の壁は大変に高く、好都合であった。

「それにしても、実家に手紙ですか」

受話器を下ろしてからため息を吐く。演技を無事に終えた安堵のため息だった。

私に対して手紙が来る事はさして珍しい事ではなかった。全国から

あらゆる言語で手紙は私のポストを埋めにかかる。皆天才と呼ばれる私に対する何らかの感想だった。好い方でも悪い方でも。たまに非公式な仕事の問い合わせと思われる代物も紛れ込んでいたが、私にとってそれは価値の無い物であり、周りの紙束と一緒にゴミ箱へと投げ捨てている。私が読めない言葉で送ってくるのが悪いのだ。解説に付き合う時間はとても勿体なく思えた。それに大事な内容ならば院公式のポストの方に投げ込まれるだろうから今まで不都合は発生しなかった。

だがそれは魔法院にある私のポストの話だ。

連絡を受けた手紙は私の実家をどうにかして調べ上げて届けられたものだという。親が読めない言語ならあの地に住む者ではないだろうし、多国籍であっても魔法院関係者ならば直接この院での共通言語と定められている英語で言ってくるだろう。ならばやはりどうでも良い内容の手紙であると推測できた。

しかし私は実家に顔を出す理由としてそれを摘みあげたのだった。たまには顔を出さないと本来まともな娘を持つはずだった両親に対して申し訳なくなる。私の様な者に娘を支配されて何とも可哀相だ。あんなに過保護に育てていた娘なのだ、さぞ手元に置けないのは苦しかろう。

『私』の顔がステンレスカップに映る。この暗い顔の少女を私は悲しい目で見てしまっていた。

久しぶりの実家は相変わらず草の匂いに満ちていた。私の仕送りで初めて導入された数々の電化製品が音と熱を生みだしている。それを両親が自慢げにポンポンと叩き渡る。余程嬉しいのだろう。

魔法使いである『私』の両親ははつきり言っただけで貧乏だった。まあ魔法使いとしての話ではあるので、その日の食に困るという状況で



はなかつたが。それでもやはり知り合いの魔法使い達からは随分と酷い扱いを受けていた。何かと仲間外れにされ、家で沈んでいたらしい。聞いた話だ。

幼い『私』はそんな両親を見て世を呪った。そしてその怒りを両親のいない合間に周りの家具などに当たり散らして発散していた。血の所為で生まれつき弱い体に鞭打つてまで怒りを表に排出しないと自分が壊れてしまいそうで怖かったのかも知れない。

彼女の手の届く範囲に一番危険な物が転がり落ちていた。

それは自分の体だった。ある日彼女は怒りのままに木に腕を叩き付けた。その時は両親が家にいた為、彼等の心をこれ以上痛めない様にと音が届かない家から離れた所だった。

その様な事は既に何度かしていた。大体は物を投げたりして発散していたのだがたまに殴りつけたりという事も確かになっていた。殴りつけるといふ動作は肉体に衝撃が伝わる行為である。それでも問題は起きなかった。

だがその時は運の悪い事に樹皮に釘が刺さっていた。彼女は出血する事になる。その赤さと鋭い痛みに『私』は酷く興奮した。欲情といっても過言では無かった。流れる血を綺麗に舐め取り、痛む傷口を指で押さえつけたという。

その日から彼女は怒りを発散する方法を変えた。その為に傷を癒す方法を両親の持つ書物から学んだりもした。

これが彼女から聞いた過去である。それよりも前の話はあまり教えてくれなかった。記憶の共有は出来ない為、知る術も無かった。

「これがその手紙なの？」

母親に自分の部屋の机に置かれていた一つの封筒を見せる。どうやらこれが件の目的物らしい。

それは封筒がはち切れそうなばかりに詰まっていた。余程何かを

訴えたいのだろうか。封筒には確かに開けた跡が残っている。まあ私に連絡すべきかの判断を彼らなりにしたのだろう。

私はその手紙を鞆にしまい、壁に飾ってある幼少の『私』の写真をしっかりと焼き付けた後、両親に別れを告げた。もう行ってしまふのか、父はそう言いたげだったが私は気にせず背を向ける。やはり苦痛でしか無かった。『私』と両親の為とはいえ、長時間演じるのは難しかった。

彼等の愛は確かだった。しかし私が宿った後からはその愛は形を変えてしまっていた。急に聴くなつたわが子に距離を感じてしまつたのだろうか、それまでは何かと触れていたらしい母の手が遠くなつた。『私』が言うのだから確かなのだろうか。

私にとってそれは好都合だった。この体に住まう私は人という熱が苦手だった。触れれば吐き気が込み上げ、言葉を交わせば心臓が跳ねる。

最近は何分か後者の症状は慣れという薬で解消されて来たが、未だに握手となると吐き気との勝負だった。

その原因を考える事は無かった。それは分かり切つた答えで、それと同時に考えるだけで嫌になるからだ。

もう考えないと誓つた。誓つた相手は勿論『私』だ。彼女は私がそれを考える事で起きる現象を酷く嫌つた。

タクシーの中で封筒から中身を取り出す。それは中国語であろうか、たまに見る四角い形をした言語だった。

『中国語読めます？』

『読める訳無いでしょ』

『でしようね』

タクシーの運転手は相手が子供だからか、鼻歌を混じらせて運転

していた。勿論彼には私達の会話など聞こえていない。

『で、どうするのよ』

『読んでみようかなと思っていました』

『どうして?』

『わざわざ実家に送って来たくらいですから。念の為ですよ』

『ふーん』

『……いや、ちょっと待ってください』

私は手紙をぱらぱらとめくって最後のページの裏に英文が書かれている事に気付いた。英文ではうまく自分の思いがつかれないので自国の母語で書いてしまったと書かれていた。

『……日本からですね』

『あのタツノオトシゴみたいな国ね』

『タツノオトシゴ……ああ確かに』

手紙を丁寧に折り戻し、封筒の中に戻そうとした時、中々上手く入らないので何かと思い覗きこんでみると一枚の葉が入っていた。

『驚きました』

『何が?』

『これ、日本の魔からの手紙です』

それは魔を表わす二つの点だけで作られたシンボルが描かれていた。恐らくこの手紙の主は自分が魔であるという事をまず先に知らせたかったのだろう。

『面白そうですね』

私はその葉を今呼んでいる小説本に挟み、手紙は鞆の方へと再び仕舞った。これで忘れる事は無いだろう。緑の中を大揺れで進むタクシーの中で私は不思議とこの手紙がもたらす影響に期待を抱いていた。私は初めて魔から手紙を貰った。それは「変化」だった。

と、言っても一から言語を理解するというのは厄介な物である。

私は天才ではないのだからパツと辞書を見て言語を理解できるなんて事は無い。周りの連中は私をそんな怪物の様に捉えているみたいだが。

「試してみる事としましょう」  
それは一つの可能性だった。

書物というのは必ず読んだ人間の思いが溜まる。非常に眠気溜め込んだ人間が始終その眠りかけの状態で読み切ったという滅多に起きないであろう場合を除いて、必ず文に対する何らかの反応が付きまとう。

ならばその影を引き出してしまえば良いのではないか。しかし魔法ではどうにもうまくいかない。先人でも試した人物は幾らかいたようであるが、それらは全て失敗に終わった。

当然だった。引き出す事は魔法で可能であっても、それを受信する事が出来なかったのだ。

しかしある可能性が見出された。ある犯罪者が人の記憶を喰うというのだった。その者は対象の命と同時に記憶を奪い去ると噂されている。

記憶というのは影の分かりやすい例である。学生にも基礎学にて影を教える際に記憶を例にあげる事が多い。

ではなぜその犯罪者は影を吸収できるのか。それはその者が所謂「地球錯誤ほしのあやまり」の一人だからだ。つまり本来許されていない形を持つというのだ。

その話を聞いた途端、私は研究を進める一つの方法を思いついた。簡単だ、肉体そのものを作り変えればいい。そう、これが『レイ』なのだ。

受信できないのなら受信できるよう肉体を変えてしまえばいい。そういう形を作ってしまうればいいのだ。

人間に許されていない形の後天的拡張、それを私は研究している。

私の中に眠る『私』の名前を取ってレイと名付けられたこの術系は意外にも先駆者がいなかった。人の長い歴史に置いてこれほどまで単純な発想を当たり前に出来る者が現れなかったのだと思うと嘆かわしい。いや、便利すぎる魔法を手にするると当たり前の事が当たり前に捉えられないのかもしれない。

当然だ、いつでも自由に魔法で形を作成できる魔法使いが、何故地道に形を拡張していこうだなんて考える。

では『私』の中に生まれた私が、何故レイという物を思いついたかというと、それは『私』の習慣からヒントを得たからであった。私が目覚めた頃、『私』はその体を傷つけて創傷を暫らく放置し、その滲む痛みを楽しんだ後に癒す為の魔法を自身にかけていた。彼女にとってそれはリセットの合図となっていた。治癒が完了すれば、また彼女は快樂に酔う為に再び傷を作る。傷害の快樂と疼痛の快樂を一度に楽しむ方法だった。残虐、ただただ残虐な欲を持った女であった。不愉快極まりない。

その過程をそれこそ本人の目線で見て来た私は、体の自由を奪ってからその略奪の罪の大きさに気付き、体を返す方法を考える過程でこの記憶を利用したのだった。毎度魔法をかける事くらい造作も無い事ではあるが、どうせなら最初から魔法がかかる体にしてしまえばいい。そう言う発想だった。

『本当に大丈夫なのよね』

「どうぞでしょう。正直な所不安の方が勝っています」

『ちよつと、私の体を変な事にしないでよね』

「さあ。形の拡張自体は今まで通り成功するでしょうが、受信した後が不確定ですから」

それは賭けに近い試行だった。形の拡張は以前からも何度も挑戦していた為自信はあった。

そもそもこの研究室を設ける事ができたのもこれがかつて通っていた学園の園長の目に留まったからであつた。元々私はその学園に特例として在籍していたので常に教師達には目を向けられていた。私の入学以前には存在しなかつた「特別成績者」という、学費免除と一定の研究許可を合併させた制度であつた。

ある日図書館で疲れから眠りこけてしまつていた私のノートを、調べ物をしていた園長が盗み見たのだつた。以前から奇行として図書館に住み着いていると噂されていた私の持つノートだ、園長とて気にはなつたのだろう。それから園長とは親しくなり、何かと助けてもらつたものだ。私はその時期の研究で健全と言える肉体を手に入れる事に成功している。もう脆弱な肉体とは離別したのだ。

そして形の拡張が実証できるようになってから私に大きな転機の兆しが舞い降りた。何と園長は魔法院への招待状を用意してくれたのだつた。最高学府である魔法院の一つに私が通うことになる可能性が突然に発生した。しかしやはり問題は経済面であつた。

今でも覚えている。魔法院に行けるかもしれないと告げた夕飯時の両親の顔を。驚愕、歓喜、絶望、目視で確認できるほど鮮やかな変化だつた。鮮やか過ぎて嫌に私は覚えてしまつた。

当然のことながら私にそんな金は無かつた。また、今まで学費を免除してくれていた学園長はあくまでその学園の長であり、魔法院の長ではない。教員でもなく、関係者ですらない。そんな分かり切つた事に私は怨みを抱いた。手に入らない絵画をちらつかせて無駄な期待を抱かせないで欲しかつた。

しかし私は妙な形で入学する事になつた。魔法院の助手としてだ

った。

日の半分を午前講義に費やし、残りを睡眠と助手としての仕事に費やす事になる。私の事情を知らない周りの学生は、ひときわ背が小さく赤目の目立つ私を講義に顔を出さない怠惰な者だと嘲笑っていた。それでも私はその合間合間に魔法院の図書館に通う事を忙しさに忘れてはしなかった。学友など一度も出来なかった。

前例が無いという事は私に知識を授けてくれる教員がいないという事でもあった。故に自分で選んで吸い込むしかなかった。

それは今までと何ら変わらない状況であった。魔法院であっても、私は結局自分で勉強したのだった。

だがそれでもこの院にやって来た価値はあった。確かに自由な時間は極端に減ったが、院が誇る蔵書の重みは私の研究に置いて段違いの糧であった。

目が文字を吸いこんで行く内に私は助手という身分から、どういった訳か、教員としていつの間にか教鞭を執っていた。時がさほど経っていないのはカレンダーの数字を見る限り確かであった。しかしその短い間に私はいくつもの経験を積み、新しい世界で泳いでいたのだった。

「形を拡張した後に本に眠る影を受信したとします」  
問題はその後だった。

「しかし影を私の肉体はしっかりと知識として還元できるでしょうか。そこだけが不確定なのです」

あくまで作れるのは影を受信する形であって、もしかしたらただその時の記憶をそのまま脳内に埋め込まれるだけに過ぎないのかもしれない。つまり「読んだ状況」を記憶の上で一瞬で追跡するだけ

の結果だ。それでは私は日本語を理解する事は出来ない。理解できない記号の列を読んだという事になるだけだからだ。私が欲しいのは辞書の利用者が何かを読んでいる間に、当人が思い浮かべている日本語で構築された内容なのだ。決してその経験が欲しい訳ではない。

「いつまでもこうやって無駄な時間を過ごす訳にはいきませんね」

『待つて、本気なの？』

「本気ですよ。それにここで怯えていては私の最終目標にはたどり着けるとは思えませんもの」

そう、『死から始まる命』、肉体の破損の無い魂の変換、そんな技術が私は死ぬ程に欲しかった。嗚呼、死ぬ程だ。私は『私』にこの体をそっくりそのまま返さなくてはいけないのだ。その為には私は魂として死ななくてはいけない。そしてその魂が消えた後にもしつかりと『私』が入るように仕向けなくてはいけない。私が死んだ時点でその術が止まってしまっってはいけないのだ。それではただの死亡であるから。返すまでが私の目標なのだ。

しかし最近になってとある現象に気付いた私は少しだけ目標にブレを抱いている。どうやら私の精神が弱まった状態では、この肉体を『私』が支配できる様なのであった。ならば魂の交換ではなく私の魂を薄めるという方法でも辛うじて成功に近い形になると思い始めた。無論それは完全な返却ではなく、異分子が混ざったままの返却になる。いずれ『私』、ミレイミルが求めた場合には完全返却を出来るようにしておかなければならない。だから予備目標として同時研究をしているに過ぎない。やはり主題は完全返却、『死から始まる命』であるのだ。

今回の身を挺した実験は主目標に近づく為には避けては通れない技術を使用している。故に試さざるを得ない。

「もし駄目だったら……いえ、よしましよ」



今更謝った所で何も変わらない。彼女からその体を奪い取ってしまった罪人である私が口にする謝罪など無価値であった。

深夜の図書館には誰もいなかった。施錠されていたが司書と関わる内に手に入れた鍵を使って進入した。まあ元から夜に入るという事は伝えておいたのだが。

あまり利用される事の無い区画へ私は進んで行った。辞書が並んでいた。私の浅い蔵書知識を利用して日本語で書かれた物とって思いつくのは辞書くらいだったからだ。

全ての院での共通言語である英語で書かれた辞書及びその逆の辞書は、司書が居座っているカウンターの横にあらゆる言語との組み合わせで別に用意されている。他の言語同士の辞書は利用者の少なさから隅に追いやられていた。これを使う人物は私の様に各国から手紙を貰う、余所から来た教員達だ。母国語が英語以外の者は英語に慣れるまで母国語で書かれた辞書のお世話になるはずだ。まともにそれらの手紙が解読できないのであるから。いや、やけにプライドの高いこの院の教員の事だ、学生の視線に不様な姿は晒せないと、辞書くらい自分の研究室に自費購入しているのかも知れない。学生は共通言語及び母語以外の言語で書かれた何かが手元に届く可能性は低く、そのためカウンターの上に並ぶそれで間に合う。

今回のレイの実験に必要なのはカウンターに置かれた物ではなく、利用者が少ない物である。つまり、学生含めある程度の人数が使うであろう日本語で書かれた英語の辞書でも駄目だった。日本語で書かれた、英語以外の言語について書かれた辞書こそが答えだった。それは純粋な影を抽出する為だ。教員によって作り出せる影、更に利用者の少なさからより混じりの少ない物が期待できるからだ。

私は日本語で書かれたイタリア語の辞書を選んだ。これを手に取ったのはイタリアが園長の生まれ故郷だからだ。度々彼は自分の故郷の話をしてくれ、私はその都度手を止めて聞き入ったものだ。

「これなら平気そうですね」

手垢など無く、日焼けによる変色だけが起きていた。

「……始めますね」

私は階段を一つ上る為に必要な実験を開始した。上手くいく自信はあった。理論が正しければどんな言語を媒体にしても、単語と文法を自然に理解できるはずであった。

「ふふ……ふふふふふふふふ」

『どうしたのよ……』

「何て書いてあったと思います?」

『理解は出来ないわよ、貴方わけのわからない言葉を喋っていたんだから』

「そうですねですか? なら教えてあげましょう。これ、ただのファンレターです」

そう、そこに書かれていたのは私が期待した日本の魔からの特別な招待や今まで触れる事の無かった仕事の依頼では無かった。ただ単に、私の活躍を聞き付けた若い魔の女性を書いて寄越した「お手紙」だったのだ。思い返してみると確かにこの手紙の裏に書かれた英文はその事を表わしていた。

「ふふ……これは早速お返事を書かなければいけないですね」

『貴方が返事を書くだなんて珍しいじゃない』

「だって面白いじゃないですか。こんなに期待したのに中を覗いてみればただのご感想ですよ。天才ミレイミル・クラスエンの表面的な活躍話の、ね」

わざわざ実家を調べ上げて送りつけて来た手紙が一番私の必要としない駄文をつづった物であったのだ。

「これは和紙とかいう種類ですかね？　ならば早速私も和紙を購入しなければなりません」

そう、私も和紙に感想を書かなければいけない。勿論相手の気分を害する様な内容にはしない。私だってそこまで子供ではない。ただこの手紙の内容と同じ、感想の感想を書いて送るだけだ。

「イツシキアケミ、か。ああ日本ではファーストネームはアケミの方でしたっけ」

だが待てよ、何故ただの魔が私の実家に辿り着く。

「まあいい。感想の感想の感想が届いたら訊いてみる事にしましょう。ふふ、何て刺激的な内容だ」

私は手紙を丁寧な封筒へ戻し、いつも持ち歩いている勤務用の鞆の一番奥にそれをしまった。

それは私が今さつき思い知った感情だった。

嬉しいのだ、こんな駄文が。

今まで開いた感想文となっている手紙は例え英語で書かれていても一度も最後まで読み通す気にはならなかった。しかし今回はもしかしたらもしかしたらと最後まで読み進めてしまった。結局そこには何も価値のある文章は書かれていなかった。

毒にも薬にもならない内容、だけれども私が初めて読んだ他人からの思いは私に熱を与えた。

人から受ける熱で不快にならない物はこれが初めてだった。

もしかしたら、もしかするのかも知れない。



第七話 イキトシイケルモノ？ / 1（後書き）

三連休だという点と、何よりご感想を頂いた事の嬉しさから、ついあんな事書いた直後だというのに関わらずの更新となりましたノノノ

この話から大きく物語が動く予定です。本当は何も考えずにただただ続きを書きたいです・・・筆の遅さと人生のタイミングで自分を呪いたくなっちゃいますね

第七話 イキトシイケルモノ？ / 2

2

ウチは座ったまま馬車の中央に立てられた柱に縛りつけられる形で監視されていた。

周りには四人の鎧を纏った男が囲い座り、目の前にはモロウが睨みを利かせて座っている。

彼等は武器を所有していなかった。先に行く馬車に乗る仲間に預けている。それはここに縛り付けて監視している者に自分達の武器を奪われない様にといい意図であろう。おまけにこの狭さで剣何ぞ振り回せる訳がないだろうし。

何故この時代に馬車なのか、男共に前後挟まれたまま学園の外に出たウチは遠目に映るそれを見て疑問を抱いた。しかし目の前で柱の上に大きな刃を装着した事で理解できた。ギロチンなんだろう。

暴ればあれがウチの頭上から落ちてくる。成程、現代車の車高ではこれが十分な威力を持つ為の高さが確保できないのか。

そう言う魔法がかかっているのか、一般人はこの馬車の横を通っても誰一人意識せず素通りしていた。その割に馬車隊の後ろから車が突っ込んでくるなんて事もなかった。

「やけに落ち着いているんだな。腕は平気か？」

知らない景色を目に収めているとモロウが呆れ口調で言う。腕の止血は自分一人で出来たんだが、それだけでは駄目だと言われ応急処置の鎮痛と血脈確保を施してくれた。腕の連結は彼女等でも無理だと言われた……まあ馬鹿なウチが素で鏡の足元に腕一本丸々置い

て来てしまったんだから、どうにかなってもどうにもならなかったけどな。手術を受けられるような大金は用意出来やしない。

「大体の奴は手錠かけられた時点で落ち込むものだ。ましてや君みたいな年齢なんて特に」

「慣れてるから」

「ほう、手癖悪いガキだったのか」

「いや……悪いのはおつむだな。犯罪なんてした事ない」

「……ああ、先程の女とそうやって楽しんでいたのか。やめとけ、女同士だなんて」

うるせえ

「母親だよ。ウチの母親がそう言う趣味なのさ。悪い子は縛って殴って脳味噌開花させる、いい趣味だ」

モロウは一度深く瞼を閉じるが再度開いた時はやはり睨み目に戻っていた。

「同情はしないぞ」

その言葉自体が同情しているって事実の裏返しじゃないか。

「別に」

周りの男達はウチの言葉が聞こえていないみたいになただだそこに座り続けていた。辛うじて揺れに対する反射と瞬きで生存が確認できる。

「先程の話、完全に信じる訳にはいかないが、その男に狙われているとか言うのも加味して特別な牢屋にぶち込んでやる。安心しろ、あそこは安全だ」

「……ありがとうございます」

これから投獄されるっていうのに感謝するのはおかしい気がするが一応言葉にしておく。

「ただ、先客が一人だけいる。忠告だ、あいつとはあまり関わるな。もし君がお天道の下を歩ける真つ当な人物であるとしたら、あいつと関わってはいけない」

「そんな危険なんですか？ 安全って言うていたじゃないですか」

「外からの襲撃には確かに安全だ。だがあの女はあの監獄の癌なんだ。しかしあいつの牢屋を他に移す訳にはいかないからな。それだけは覚悟してくれ」

「別に……どうせ捕まった身ですし」

鏡の話信じるとしたら、ウチはもう真つ当には生きられないんだろ。けどあの鏡と一緒に歩く事だけは勘弁ならなかった。それくらいなら、ウチは今から向かう暗闇にて果てるという未来を選ぶさ。真つ暗なんだ、何も見なくて良い。

最高じゃないか、最悪にな。

そこは思っていた以上に小さな施設だった。こつちが勝手に想像していた建物に対して大分縮小を効かせなければいけない程の小ささだ。それでも高い壁には蔦が這い渡り、鳥達がウチを見降ろしていた。周りには何も無く、植物に囲まれた天然の要塞だった。無論守るのは堀の中の者ではなく堀の外の者だろうがな。

「暫らくここに收容させてもらう。悪く思うな、君が起こしたとされる事件は魔法使いの間でも大きな波を立ててしまっただろう。故に君には誰一人接触が許されない。わかるな？」

「薄らとは」

世の中には変わった奴がいる。例えば殺人狂を集める収集家とか。そりゃそうだ、ウチは自分でやった訳ではないが、あの学園の頂点に勝ってしまった事になっているんだから。そんなウチをどうにかして盗み出した奴がいる事くらい理解できる。魔道を進むな



らより強力な杖が欲しくなるってもんだ。

ウチは再び前後を兵士に挟まれ施設の中へと連れていかれる。幾つか扉を潜り数人とすれ違つ。誰もが鎧を纏つていた。異風景、まさにそれ。

つまりここは一般的な監獄ではなく、魔法使いを収容する所なんだろう。それ専用で作られた施設である事は漂う気配ではつきり理解できる。中に生い茂る植物の隙間から何かがちらを観察している気がした。嫌だね、まったく。

「服を着替え、金属を全て外せ」

小さなロツカールームに通されそこで指示が出される。ウチの横にはモロウしかいないが前後の部屋には屈強な兵士が待ち構えているのだろう。ウチが女だからモロウだけなのかもしれない。

「これはお前の為に言っておく。金属は絶対に外しておけ」

どういう意味だろうか。強く言われる理由が分からないが大人しくその指示に従い服を脱ぎ始める。片手だけでの作業は思っていた以上に難しかった。

「下着も外せ。中のワイヤーも危険だ」

「……本当に女に興味ないんですよね？」

「おふざけはやめろ。命にかかわる事なんだ」

彼女のまじめな顔から察するに何かあるらしい。ここは大人しくしておこう。

「終わった」

「これで全部か？」

彼女はウチが脱いだ服をチエツクする。

「武器は所有してなかった様だな」

元々犯罪者じゃないからな。いや、火事場泥棒はしたのか。

「では次の部屋へ進め」

そう言ってウチの肩を押す。ウチはそれに従い次の部屋へと続くドアを開けた。

それは経験の無い感覚だった。

「どこって？」

その部屋自体は小さな部屋だ。いや長細いから例えドアが二つだけだとしても廊下といって差し支えないかもしれない。ドアの左右の凹んだスペースには二人の兵士が構えていた。

「もう一度だけ言う。あちらの扉を開ける際には金属を持ち込むな随分としつこい。」

「何が起きるんですか？」

ウチが質問するとモロウはウチの心臓辺りを指差す。

「簡単だ。金属検査だ」

簡単と言っているモロウの眉間には、その言葉とは不釣り合いな暗さが塗られている。嫌な予感しかしないなこりゃ。

「もし持ち込むと？」

さし出された指と心臓の間に手で壁を作る。さし続けられているとんだか気持ちの悪い物が腹に生まれてきたのだった。魔法使いに心臓を注視されるといふのは気持ちの良い物じゃない。

「妖精に食われる。その人物がだが」

ああ、やっぱりか。とてもじゃないがあああの扉の向こうに金属を調べるおじさんが構えているとは思えないもんな。禍々しい気配が漏れ出ていた。

（しかし妖精か……なら泣いて詫びなくてすむかな）

実はウチは一つだけ金属を身に隠し持っていた。鏡から貰った指輪だ。これを手放す事は出来なかった。

好きだった、そうウチは告げた。

でもまだあいつの事は気になっていた。

嫌いになった訳ではないのだから。

でも言葉にしないとウチはいつまでもあいつを見てしまいそうだったんだ。

「では、進め」

ウチは鏡の言葉を信じてそのまま足をゆっくりと進める。

妖精なら大丈夫なはずだ。あいつはそういう商品だって自慢げに言っていた。

だがもしこの先に待ち構える妖精がこれを嗅ぎつける様な存在だったら……。

「どうした？」

「いえ」

足が止まった。正直怖かった。

「もしかして持っているのか？ 正直に言え。私は失望するが、だからと言って待遇が悪化する様な事はない」

このモロウという人物は変に誠実な女だな。出される言葉が一つ一つ自分を物語っている。

「……………」

どじする……

「いえ……平気です。あんな事言われちゃったんでちょっと怖気づいただけですよ」

手の肉に爪を押し入れる痛みを契機にウチの答えが出た。能動的に発言した覚えはなかった。

「そうか、ならば行け」

出てしまったのなら仕方ない。

そう観念してウチは無い覚悟を決めて再び足を動かす。

一歩進む度に重い空気を押しつけるのを肌を感じ取る。

指がドアノブに近づくと吸われるという錯覚を覚えた。

いけない、本当に危険な奴だこれは。

しかし触れてしまった手前、その次の手首を捻るという動作をしなければならぬ。

鼻で呼吸を整えると手首に力を込める。

カチャリ、小さな音が立つ。

押したつもりはないがドアは自然に面積を狭めていった。

ドアの先は暗闇だった。何も見えない程の暗黒。

だけどわかる。確かにいる。

恐る恐る天井の方へと目をやると、そこには数え切れないほどの目があった。

可視の状態で無いのに、ウチの脳はそこにあると察する。

その全てがウチを見ていた。その全てがウチを裁判にかけていた。牙を立てて良いのか駄目なのか。そんな原始的な判断。

大丈夫……妖精なら大丈夫……

「どうした？ 魔法学園の生徒が妖精を見た事が無いとは思えんが」  
後ろからのモロウの冷静な言葉が私を抜ける。  
「学園にいる様な可愛い物じゃないですよこれ」  
明らかに発せられている殺気が風となってウチの首元を涼める。

それでも手放す気にはなれなかった。  
これがあいつとの最後の繋がりがなくて、  
これを外したらあいつと二度と会えない気がして、  
そんな事になるくらいなら死んでも良いかなって思えた。

自分から切った繋がりのくせに、最後の一本になると惜しみだす  
……情けない女だな。

「室内で流れる案内に従え」  
ウチはそれを耳に入れると無数の殺人者が待つ暗闇へと進んで行  
った。

まず最初に出されたのは意外にもホットミルクだった。

「これは？」  
「飲め、おかしな物は入っていない」  
モロウは何処となく安心したという顔を見せる。ウチが死んだと  
ころで彼女に何ら損失が無いのにおかしな話だ。

口に温かい優しさが広がる。甘い、二つの意味で。  
「本当ならあの部屋を通らせる前に機械で金属判定をしておくのだ  
が、さっき教えた女に全部壊されたんだ。だからもし隠し持ってい

てそのまま黙っている様だったら、そこでその者の人生は終わりだ。もう何人死んだか分からん。まあ脱獄の為に用意した手段で自分の首を掻つ切るのだから可哀相とも思わんが」

「機械なんて買い直せばいいんじゃないんですか？」

「妖精の認識から外れた金属を使った機械じゃないと駄目なんだ。だからそう易々と入手できない」

なるほど、どうやら鏡がくれたこの指輪は特に貴重な金属で作られているらしい。

でも正直おかしな気もする。そもそもあの部屋を通るまでは金属自体の持ち込みはまだ許されているのだから、なんだったら手で持てるサイズの探知機を作らせればいいだけじゃないのか。小さければそれだけ使う材料も少なく済むだろうから。それに兵士だってしつかり鎧を纏っているんだし。まあいい、そんなこと考えてもウチには何らメリットが無い。

「で、これからウチはどうすれば？」

「簡単だ、君は牢屋の中で生活しているだけで良い。労働等はやる必要は無い」

この狭い施設の中に作業場があるか疑問だったんだが、どうやらそもそもここでは労働は無いらしい。留置所という形なのだろうがだが留置所の割に中々に嚴重さが目立つ。特別施設、そういう単語がやけに似合っていた。

「後は取り調べに応じる事。一応言っておく、ここでは普通の社会での権利等は通用しない。守られていると思っただら大間違いだ」

「へえ……じゃあ鏡が言っていたのは相当に現実濃厚ってことなんですね」

「……………」

モロウはウチの目からあからさまに視線を逸らす。余程鏡の言葉が彼女にとって毒になっているのだろう。信じていた正義が揺らい

でいる苦みがありありと表れていた。

「あまり喋るな。言ったはずだ、ここでは権利等も限られている。場合によっては君の状況が悪化する事も考えられる」

「あーそりゃ怖いですね」

「……まあいい。とにかく今から牢に行こう。お姫様とのご対面だ」  
拳をウチの頬に叩きつけたくなつたのだろう、モロウは辛うじて人ではなく壁を叩く事で怒りを発散した。室内に大きな音が響く。この女は非常に煽りがいがあるな。

手に持っていた兜を再び着けるとついて来いという手振りを見せる。

ウチは少しだけ緊張していた。どんな化け物がこの施設の中で飼われているのか見当もつかないのだから仕方ないだろう。これだけ警戒されている化け物、見てもいないその姿を恐れてしまう。

「武器は持たないんですか？」

「……ふっ、獣が怖いかな？」

彼女はいつの間にか武器を手にしていなかった。

ウチの少ししひよつた言葉に意地悪く笑みを浮かべているのが兜の隙間から容易に把握できる。いや、やり返してきたと言っべきか。さつきまでこつちがいじめていたのだから好い仕返しのお機会だと思つたのだろう。

そう言えば妖精の部屋を越えた後に出会う兵士はもう金属の鎧を着ていなくなった。剣も身に着けていない。持っているのは棍棒と杖、身を守るのは剣道の胸の様なプラスチックの防護着くらいだ。余程徹底されているのか……。

「一体何がいるんです？」

「女だ」

「それは聞いていますって。さつきから異様に金属にこだわるじゃないですか」

このままだともしかしたら牢屋の格子すら木で出来ているんじゃないだろうか。日本のかつての牢屋と同じく、木の棒を組み合わし

た代物だ。

「この牢獄のお姫様は地球錯誤なんだ。金属を操って色々細工をしてしまう、怖い怖いお姫様……危険極まりない猛獣だ」

「へえ……」

「君も知っているだろう、金属は人を表わす。アレは金属と金属を入れ変えたり、人と金属を入れ変えたりしてしまう魔法を得意としている」

得意としている……？ 少し言葉に違和感を覚える。地球錯誤って言うのは元魔師、つまり鏡みたいに魔法その物を埋め込まれて地上に零れ落ちてきた者をさす言葉であって、得意とかそういう言葉を使う相手ではない。ハサミを指差して「これは物を切るのが得意な道具です」と言う説明をする様な物だ。ハサミは物を切る為に生まれてきた道具、それ以外の目的で使用される方が少ない。

「ほう、しっかりと勉強してるんだな」

「まあ」

「でも悪いな。これ以上あの女に関して教える訳にはいかないんだ」  
ここまで話しておいて情報と言うノートを閉じられてしまった。

次のページには一体何が書かれていたのだろうか。ウチが見てしまつたらいけない物のだろうか。

「鎧、平気なんですか？」

そう言えばさっきから気になっていたのだがモロウ自身は絶対に鎧を外したりはしなかった。金属と人を入れ変えるというのだからその鎧も危険の種になるんじゃないのか。

「この鎧は彼女の魔方にも対抗できる。安心しろ」

「へえ」

なるほど、特別な物なのか。道理で他の兵士と違う物を着けているわけだ。配給品とは違う。

そういや鏡と対峙している時にやけに兵士達がモロウの鎧を注視していたな。恐らく宝級の逸品なんだろう。どう見ても若い彼女がそれなりの地位にいるのはこの鎧の御蔭なのかもな。



階段を下りて行くと急に獣の臭いがし始めた。比喻ではなく実際に獣の臭いが満ちている。

「本当に人が入ってるんですよね？」

「ああ、この臭いか。安心しろ、これはお姫様の臭いではないさ」「なら良いんですけど」

先に進むとそこには不思議な光景が待ち構えていた。木で出来ていると想像していた格子は実際には半透明な何かで出来ていた。鍵の部分は流石に内部構造が見えないようにと完全に白くなっているが、それ以外は薄らとした透明を保っている。通過する際にさり気なく触れてみると滑りは悪く、また水晶とは違った質感だった。きつと金属以外で耐久性に優れた物として選ばれた材質なんだろう。樹脂つて奴だろうか。周りの石造りの壁などから大分時代がずれたそれは、きつと後から急に設置された物なのだろう。施工の雑さが滲んでいた。

「そろそろだ」

モロウは足を止め覚悟を決める時間を与えてやろうとこっちを見る。覚悟も何も、ウチはただ従うしか出来ないのだから意味の無い物だった。いや、むしろより近い気配を受け取ってしまう事で恐怖心が増長されてしまっていたのかもしれない。

彼女は楽しそうに鼻を鳴らすと再び歩き始めた。

「やおお姫様、ご機嫌いかがか？」

そこにいたのは大きな獅子と小さな少女だった。

獣の臭いはこの獅子が原因か。佇んでいる様から人の命を聞く人工魔と見受けられる。

「……まあまあ」

寝ているのかと思われた少女は目を閉じたまま声を上げる。

褐色の肌に藍白の髪の少女は透明な檻の中に閉じ込められていた。そしてその檻の前に獅子が行儀よく鎮座している。

「モロウ家に代々仕えている人工魔だ。可哀相な事に今はこんな狭い所に閉じ込めてしまわなくてはならない」

モロウが言うにはこの獅子はこの少女を監視するためにここに連れられてきているらしい。他の人工魔では少女の暗示魔法で再起不能にされてしまうのだとか。

（おいおい、そんな奴の前にウチを置くのかよ）

「その後ろの人間は？」

「彼女は君と同じく暫らくここで過ごしてもらおうお客様だ。変な事をしてくれるなよ」

その言葉を聞くと少女は含み笑みを浮かべた。ゾクリと背筋に冷気が這う。

「初めてね、人間が目の前に置かれるだなんて」

「……聞こえていなかったのか？ 手を出すなど言った。出したら貴様の刑が重くなるどころか、最悪の場合も考えられるぞ。いいな、絶対に彼女におかしな真似はするなよ」

「ふふ……でも話し相手なら良いんでしょ？ 退屈なのよ、その猫ちゃん」

モロウは少女の猫発言にピクリと肩を張る。ほんと徴発され易い単純な人なんだな。

「この子はこれらの人工魔とは違う由緒正しい子だ。絶対に命令に従う優秀な獅子であり、私が貴様の言葉に反応してやるなど命令してある。からかって怒り狂ったり、煽てられて芸などしたりしない」

「へえ、ならお前が命令すれば芸もできるのね。サーカス団にでも貸して出稼ぎさせてやるといいよ。こんな所にも何の役にも立たないだろうから」

「……キュレンカ・ハイセベエル、おふざけが過ぎるぞ。監獄のお

姫様らしく丁寧な口を使っておくれ。でないと私とて間違いを起こしてしまうかもしれない」

「マーレード・モロウ、その手がこの顔に触れた時点でお前の正義は崩れる事になるぞ」

「……いかねこりや、最悪の雰囲気だ。正直ご当人たちに任せてウチはここから一度脱却したいもんだ。まあ捕まっている身なんだから無理なんだろうけど。」

「……まあいい。私には既に刑に服している者を相手にする時間は無いのだ。次の罪人をしょっ引かなくてはならんからな」

モロウはそう言つて力を込めてウチの腕を引く。間違はなく八つ当たりだったが刺激しない様に閉口しておこう。こっちの獅子さんの目が更に覚めてしまうと困るしな。

樹脂の牢屋に乱暴に押し込められたウチにモロウは少しだけ声を和らげて伝える。

「最早こいつと一緒に寝起きを共にする事が刑罰の様な気もするが、先程言った通り君の身の安全の為だ。我慢してくれ」

「了解」

「取り調べの際にはここに兵が来るから大人しく従う事、いいな？」

「了解」

「それから……君は日本人か？」

「ん？ そうですけど」

「ベッドは嫌か？」

驚いた、そんな選択の自由があるのか。

「別に平気ですよ。学園じゃベッドですし」

「そうか。ならいいんだ」

やっぱり、根は優しいんだなこの人は。

そんな優しさを感じている横でまた褐色肌の少女がモロウを挑発する。

「日本ですって？ ねえ知ってるモロウ、日本には猫の皮を剥いで楽器にする風習があるよ。もしかしたらその猫ちゃんの未来は日

本の楽器かもね」

「……そう言う安い挑発には乗らん」

いやいや乗ってる、乗ってるって。格子を握る腕が筋収縮で震えているのが明らかだった。この人の胃は穴だらけなんじゃないだろうか。

「ここには見張りの兵はいないがそこにある紐を引いてくれれば一応武装兵は駆け付ける。こいつのまやかしにかかれては困るのでな、人ではない者が常にこの部屋を監視する」

つまりそれがこの獅子か。

落ち付いた所で獅子を横から観察する。明らかに人工と分かる肉付きをしている。野生の獅子とは違って異様に盛り上がった筋肉は殺傷能が相当高い一撃を繰り出すんだらうな。おお怖い。

それにしても紐か……何て前時代的な呼び出し装置だよ。金属に対する制限がここにも働いているのか。そう言えば監視カメラすらここには存在しない風に見える。はたしてそんなんで監獄として役に立つんかねえ。

いや待てよ、もう一つ監視するのに適任の奴がいたな。格子の間を通り抜けてしまえる奴、妖精だ。さっきから誰かに監視されていると感じるのはきつと視認できない奴がここにいるんだらう。視認できないなら牢屋のお姫様も操る事が出来ないのかもしれない。

もしかしたら金属探知機の理由は妖精かもしれないな。誰にも視認できないなら金属を知らない内に壊してしまうのかもしれない。だから根本対処となる認識されない金属を使った物でしか置いておけないのか。人が出入りできる施設なら透明な妖精なんて易々と入りできるだらうし。例え兵士を襲う程の力がなくても、動かない金属を壊す事くらいなら出来てしまっただらう。ロッカーも随分穴だらけだったし、ありえそっだ。

モロウが敢えて監視者を獅子と直接示さなかったのも、変に誠実な性格の所為か。

「妙な動きをしたらこの子が動く。はっきり言って私以外の者の命

令は聞かない。だから私がいけない間に君がちよつかい出して噛まれても助けられる人間はいないから気をつける。まあ噛みつかれた時点で呼び出しの紐をひけずに命が終わるだろうが」

「だろうねえ。宙を睨んでいる獅子は何一つ動きを見せていなかった。呼吸の動きすらない為生きているのかすらわからない。」

「とにかくこの格子から外に手を出さない事だ」

「了解」

「うむ。それと、用はそこで足せ」

モロウはウチの後ろを指差す。……振り返るのが怖かった。何故かというと、入ってきた時の記憶を頼ると、その方向にある物体と言ったら用途の分からないただ立てられた小さな板だけだったからだ。つまり……その板の向こうに穴があってそこでトイレを済ませと言ふ事なのだろうか。

「恥ずかしいだろうがこれは規則だ。君が犯した罪の重さを考えればこれくらい……っとそうだったな、君は否認している身だったか」  
肝心な事を忘れてもらっては困るんだけどね。

それにしても……こんな板切れ一枚で何が守られるのか。周りに器物が無いって事は水洗ですらないだろうし……って待て……紙は何所だ？

「あの、紙は？」

「ああ、忘れてた」

「おいおい、しっかりしてくれよ。このまま出て行かれたら暫らく地獄を味わっていた所だったゾ。」

「直ぐに持ってくるさ。それと、気になるなら消臭剤くらいはくれてやるが、どうする？」

「頼みます、切に」

「そうだろうな。君くらいの歳では仕方ないだろう」

「うんうんとモロウは頷く。と言つかあんたも然程歳違わないだろうよ。」

「では大人しくして待っている。それと最初だけ水を持ってくる。」

以降は食事時に食事と一緒に支給されるからそれを調節して飲め」  
「了解」

ウチの頷きを確認したモロウは一度ヘイセベエルとか言う少女の方を睨むと、舐められぬようにと堂々と行った姿で行った。

椅子の代わりになりそうな段差に腰を下ろすとチロチロと周りを観察してみる。横は見たくない、そこにあるトイレが本当にただの穴だけなのかを知るのもうちよつと時間を置いてからでも遅くないはずだ。

ここは辛うじて洗面台が在るだけのただの箱部屋だった。いや壁の一部は壁とすら言え無い格子だが。洗面台の下部から生えているパイプも金属では無かった。蛇口が無い……渡されるペットボトルの水でどうにかしろと言う事か。きつとこの少女が入ってくる際に取り除かれたんだろう、蛇口の名残はあった。

いや待て、ベッドが無いぞ？ さっきの言い方からしてベッドが用意されるはずだったがそんな物何処にも無かった。おいおいちゃんと持ってきてくれるんだろうな……。

「ねえ」

ウチが頭を抱えていると『ねえ』と言う音が聞こえた。

ねえ、なんてこつちの国ではあまり聞かない呼びかけ方だったので首が痛い程に前へと勢いよく顔を向ける。

「はい」

「これからよろしくね」

「……日本語、できるんですね」

正直驚いた。褐色肌の少女はその風貌に似合わずはっきりとした発音で日本語を喋っていたのだ。

「ふふ、あたしは特別だからあらゆる言語が使えるよ」

「そうなんですか」

特別、まあそうなんだろうな。こんな施設に詰められるんだ、特別という言葉が付きまとう人物だろうよ。ウチの場合は濡れ衣だけだな。

「これからよろしくね。あたしはキュイ」

キュイ、それがこの少女が呼んで欲しい愛称か。

「ウチは星井加々美。加々美で良い」

相手の幼さに触れると自然とため口に走ってしまう。

「加々美ね、分かった」

キュイという少女はその幼さに似合った笑みを浮かべる。だが気になったのはいつまでも閉じられたままの瞼だった。魔眼なのか、それとも生まれつき開かないのか。前者だった場合は目の前に姿を晒すのは不味い。だがもし魔眼だった場合、そもそもウチは彼女の前に連れて来られないだろうから安心して良いはずだ。

「加々美、あいつが戻ってくるまでにちょっとお話してよ」

「お話？」

「そう、色々知りたい」

ああウチの事を語って事か。そうだな、これから暫らく一緒に空間で過ごすんだ、こっちの情報を伝える代わりにあっちの情報を手に入れて、何が危険かを知っておかなくちゃだな。

まったく、面倒なこった。

投獄から三日たった。その間二度ウチは牢屋から連れ出され尋問室にて事情を説明させられた。尋問する人は随分と年を取った老人だったが、その後ろには何故か常にモロウが仁王立ちしていた。暇じゃないんじゃないのか。

老人は紙に私の発言を一文字たりとも改変せずに紙に映す。その為発言の度に間が生まれ酷く時間がかかった。まあこっちは他にする事が無いのだから別に構わないのだが。それに幸いにも彼の腕の動きは素早かった。

それよりもボールペンを握る老人の手の傷が気になった。昔は色々々と動きまわって来たのだろう、明らかに普通の生活をしていないと語る傷の多さだ。叩き上げて奴か。

尋問の後は常にモロウがウチを牢屋まで連れて来た。ウチの背中を押し、牢屋に投げ込むと、彼女はいつも最後に部屋全体を見渡し、それから出て行く。キュイの方だけは見ていなかった気もするが。

この数日、キュイはウチの事を訊き出そうとしてきた。どういった経緯でここに連れて来られたのか、どういう生まれなのか、学生生活の事、日本の事、何でも訊いてきた。粗方応えるとキュイは満足げに口を曲げる。本当は犯罪者相手にべらべらと個人情報並べ、るだなんて自殺行為だろうから避けるべきなんだろう。だけれど、どうせ今回の事件の所為でウチの名前さえ知っていれば後でちょっと調べれば何でもばれてしまうのだから、今更気にする事ではなかった。狭い狭い世界なんだ。

そんなキュイに対してこつちからも質問をぶつける。ウチが本当に何でも応えたからだろうか、彼女は意外に口を易く動かした。まあ大物らしいから後々足跡を消す手段なんて幾つも知っているのだろう。

そしてキュイはどうやら生まれつき目が見えないと知る。自分では瞼が開いているか閉まっているかもわからない為、目に異物が入らないようにと強制的に閉じる手術を受けたらしい。また、彼女がウチの知る世界からかけ離れた世界を歩いてきたらしいとも知る。まあそれはお互い様か。

「ねえ加々美、あんたってこれからどうなるの？」

「知らない、としか答えられないね」

「ふーん。本当に何も分からないのね」

「残念ながらこうだった状況についての知識は学園じゃ教え込んではくれないのさ」

「へー、一番大事なのにね」



いや、それはおかしい。

「やっぱり牢屋に入れられ慣れているのか？」

「あたし？ …… そうだね、今回が初めてではないかな」

「そうかい。ここはいつから？」

キユイは自分では見られない指を動かして月日を数える。しかし答えは曖昧だった。

「分からない。覚えてない」

「じゃあきつと長いんだな」

ウチが外に出されるのに対して、彼女はこっちの知る限り一度も外へと出される事は無かった。しかも狭い空間である牢屋の中でも更に限定した領域だけで時を過ごしていた。体も一日に一回渡されるお湯を使って自ら清拭<sup>せいしき</sup>し、髪もプラスチックのバケツに頭を突っ込んで洗うしかないという扱いだった。ウチは一応外に出してもらえるのでその際にシャワールームを借りる。監視付きだが。

そんな扱いにも関わらず彼女はお湯を使って体を清める際に随分と楽しそうに歌う。歌詞と言う形ではなく音で歌うと言った歌だったが、やけに楽しくするのでこっちまで綺麗にされている錯覚を覚えた。また当然体を清める為には裸にならざるを得ず、相手がこちらの動作を知る事が出来ないのを良い事に、褐色の綺麗な肌を初めて目の当たりにするウチは好奇心からじつくりと鑑賞させてもらった。少し骨の浮いた水滴伝う褐色肌には、まるでこちらを惹きつける魔法がかかっているようだった。目を離す事が出来なかった。気持ち悪いと言われると思うが、それがここでの唯一の楽しみみたいな物だった。視覚と聴覚を満たす、わずかな時間の娯楽だ。

だが三日目、毎度ウチが彼女のその儀式の間だけ完全に黙るからか、不思議に思ったキユイは一体何をしているのかと言う答え辛い質問をした。「見てる」なんて馬鹿正直に言える訳もなく、何もしてないと答えるしかないが、状況的に本当はとつくにばれているだろう。彼女の質問がおちよくなる様な口調だったのが何よりな証拠だった。ウチはそれで酷く恥ずかしくなり、見えていないと知って

いながらもそつぽへと顔を反らした。

最初はお喋りな印象を受けた彼女だが、一日中喋っている訳ではなかった。むしろ口を閉ざし活動を停止している時間の方が長かった。何を考えているのかと尋ねると、彼女は「夢を見ているの」とふざける。起きていながら夢を見られるなんて魔法ができるならば非ウチにもかけて欲しいものだ。夢に溺れられるなら現実逃避としては最上級じゃないか。だがそれよりも気になったのが、目の見えない彼女が「見る」夢だ。これは不快にさせるだろうから訊く事は出来ないが、世界を見た事の無い人の夢とは一体どんな物なのか非常に気になった。

モロウからは猛獣と聞いていた少女は、実際に前にしてみると綺麗な猫だった。檻の中に既に収まっているからか、同じ肉食でも大分印象が違って映った。

「へえ、じゃあそれで今まで生計立てていたのか」

「生計立てていたというか、そうやって生き延びてきたって感じ。

あたしにはそれしか術が無いから」

彼女は所謂闇社会の住人とのことだ。学園で学んだ「魔」と言う種族を守ることと金を稼いでいる。人間の敵である魔を守るって事は、完全にそれは人類に対する反逆行為だ。

「キユイは凄腕なんだな」

「まあね。こんな体だけどそれなりに役に立つの。多分加々美を相手にしたら三秒で消せると思う」

「おおこわ」

「あたしは一對一なら絶対に負けない自信がある」

そうは言っても現に彼女は負けているからここにいるはずなんだがねえ。

「なら今回はどうして捕まったんだ？」

キユイは揉んでいた足首から手を離すと自分の閉ざされた目へと

指を移す。

「目を失っちゃったの」

「目？ もともと……いや」

あぶね、自分の危うさに呆れるゾ。なに自然に相手の危険領域に爪先突っ込もうとしてるんだか。あいつじゃあるまいし。

「そう、もともと見えないの。だから目が必要なの」

「それって使い魔かい？」

「いや、そんな物では死臭漂う川は泳げないよ。必要なのはもっと確かな物」

「人間か」

「勿論」

つまり彼女は仕事上相手となる人物を失った、恐らく捕まったか殺されてしまった為に動くこと叶わず、彼女も捕まってしまったという事なのだろう。

「肉を肉と判断できる人が必要」

「どういう意味だい？」

「肉を食べ物として判断するんじゃなく、肉をただ肉と判断する人が良いの」

うーん、いまいち分からん。

「冷酷になれる人、冷静な人」

「ああ……」

肉って人間の事かよ。つまり人間を肉として見て、それを死に追いやる事に抵抗を感じない冷酷な奴が欲しいって事か。えらく厳しい世界なんだな。

「当たり前。常に血が流れる世界だよ」

「想像できないね」

想像したくないね。

「でも実際にある世界だから。それにあたしにとっても住みやすい世界」

「修羅の世界だ」

「修羅？」

「潰し合いの世界って事だな」

「それはどんな世界でも同じことですよ」

「まあ、ね」

目の見えない少女、そんな彼女は一体どうやってそんな世界で生き延びてきたのだろうか。

「そうだ、ここから金属が消えたのってキュイが原因なんだろう？」

「まあね。あいつ、あたしが金属魔法得意だからって事でここに閉じ込めたの」

あいつってモロウの事だろうか。

「不覚だった。まさかあたしに懐かない金属があるだなんて思ってもいなかった」

「あの鎧は特別な物らしいな。魔法が通じないとか言ってたぞ」

「うん、身を以て経験した。不思議な感覚だったよ。触る事が出来ない、そんな」

ウチになんとか察してもらおうと身振りまで加えてキュイは語る。だけれど、そもそも他の金属を操るといふ術を持たないウチにそんな事言われても余る話だ。

「ここにはいつまで閉じ込められる予定なんだい？」

「多分一生ここ」

「マジか……」

「マジ？」

「ああ、本当かって事」

勝手に日本語が達者だと思っていたキュイは、こちらの想像と違つてところどころを漏らしていた。「マジ」だなんて、現代の言葉を知っていれば普通耳にしたはずなんだがなあ。言っちゃ悪いがこの少女が教科書から言語を学んだとは考えにくく、誰かから口頭で学んだと推測していた。

「そついや日本語どうやって知ったんだい？」

「……秘密」

おいおい気になるゾ。今まで何でもあつさりと答えてくれた彼女は初めてウチの言葉に手を翳した。どうやら普通の学習方法ではなさそうだ。

彼女は立ち上がると部屋の奥へと移動した。そこは彼女にとって寢床となる区間らしく、そこにいる間はウチのどんな問いかけにも応じてくれない。

今回はこれ以上話したくないというアピールなんだろう。ウチも閉口するしかなかった。

それから数日、もう話す事もなくお互いに静かに過ごす時間が増えた。本なんかは貸出してくれるので多少自分を誤魔化す事は出来たが、元々読書は好きじゃないのでただ文字に逃げているだけといった形だ。それに片手を失った為に、読み辛くてしょうがなかった。

尋問も既に終わつたらしく、ウチは放置され続けていた。日に三度の食事と一度のシャワータイム、これじゃ飼われているって感じだ。

本にすら飽き始めた頃、慣れというのだろうか、いつの間にかウチは大胆になり過ぎていた。平気で鏡から貰った指輪を指で弄る様になっていたのだった。勿論他人から見える様にはしていないが、それでも大変に危険な行為だった。ましてや獣と獣を横にしているこの状況ではそれは愚の骨頂だった。

この隠し場所はモロウ達も気付かないだろう。普通は肉の間に隠

したりなんてしないからな。そう、ウチは千切れ飛んだ腕の断面に指輪を隠していた。そして毎度肉を切って取り出す。そんな行為を何度も繰り返していた。自分でも気が狂ってるんじゃないかと思えん。唱える物も止血の魔法だから獅子もこちらを睨んだり、主を呼び出したりはしなかった。怪我人が唱えるなんて当たり前だからな。

ずっと閉じ込められていた上でそんな狂行をするものだからウチから次第に冷静さが零れ抜けてしまっただけで行くのは仕方ない事だった。

更に大胆になったウチは、とうとう寝ている間、ずっと掌の中で握り続けるという蛮勇さをも手に入れてしまっていた。

ある日、突然大声で起こされたウチは思わず手中のそれを放り出してしまっただけ。

それを目の当たりにしたモロウは兜の中でどんな顔を作ったのだろうか。ウチはそんな事を考える前に転がってゆく指輪を飛び付く様に追いかける。しかしその指輪は私だけではなく一匹の獣と一人の獣を目覚めさせる。

獅子は初めて動きを見せてその前足を格子の隙間に滑り込ませる。しかしそれよりももう一方の獣の動きの方が速かった。

ソレは小さな金属音を聞きつけるや否や、飛び起きて、開かない目をこちらに向けたと思うと、次の瞬間にはウチの目の前に立っていた。

信じられない事だが、

本当に一瞬で目の前に現れたのだ。

多少の自由のある空間の中においてもあんなに行動範囲の狭かった檻の中の獣は、小さな金属を嗅ぎつけると、途端にその行動範囲を広げた。

目の前に立つ少女を見上げる。

ウチは既に彼女に狩られてしまったのか。  
体が動かなかった。

「貴様あああああ！」

少女の向こうではきつとモロウが怒り狂っているのだろう。ただ  
どウチの目は盲目の獣から離れる事は出来なかった。

「良い物、持ってるね」

ソイツは一言だけそう零すとウチの腹を正確に蹴りあげた。  
痛み、それは感じられた。だけど込み上げてくると予想した吐き  
気は起きなかった。その前にウチの意識が殺がれたからだ。

最後にウチの脳味噌が認識したのはキュイの足がウチの顔に向か  
ってくるという光景だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0300c/>

---

神影の彷徨

2011年12月11日16時54分発行